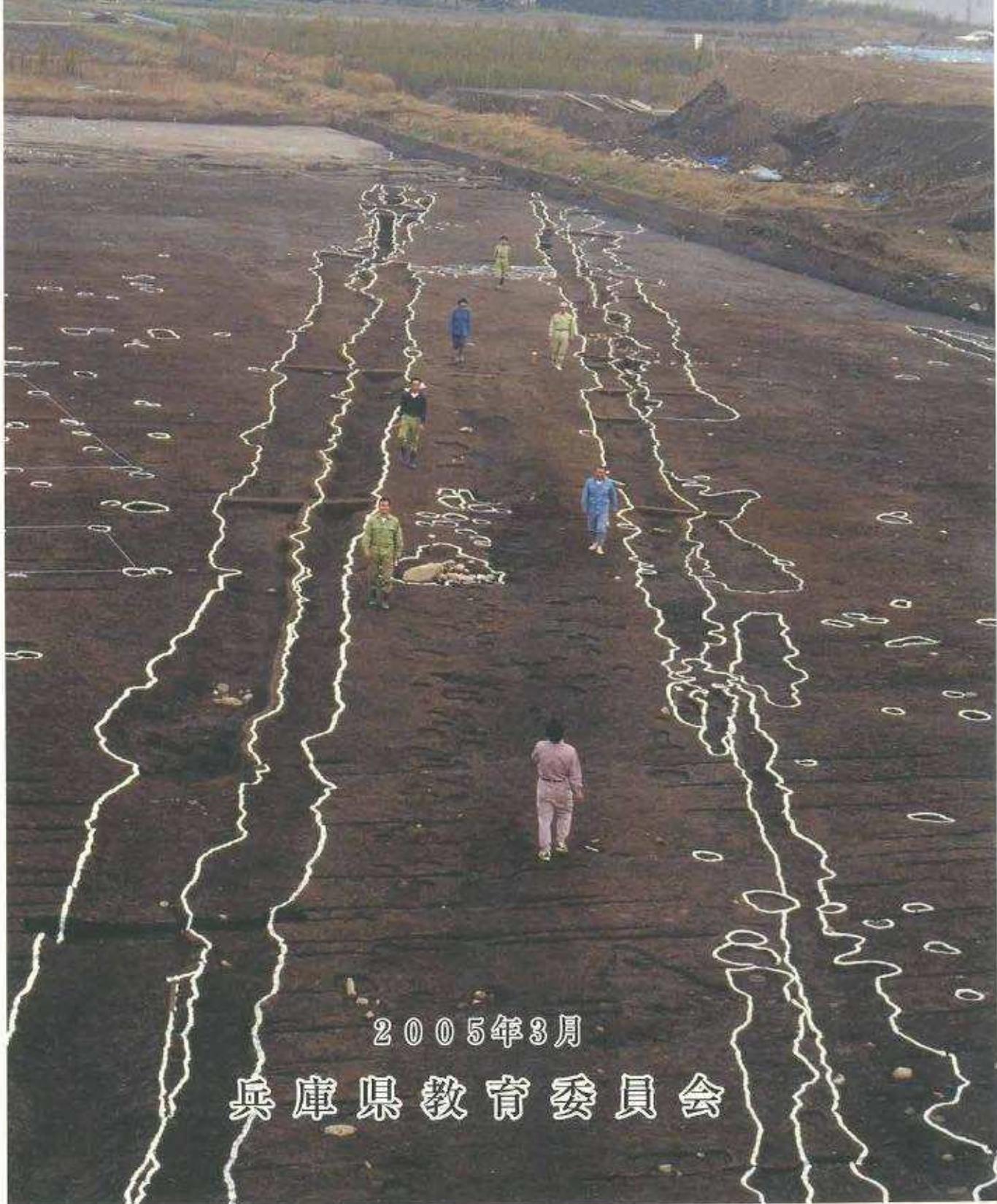


朝来郡和田山町

加都遺跡 I

— 播但連絡有料道路 5期合併施工事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2005年3月

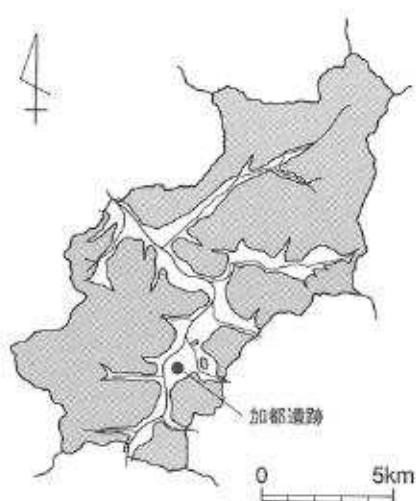
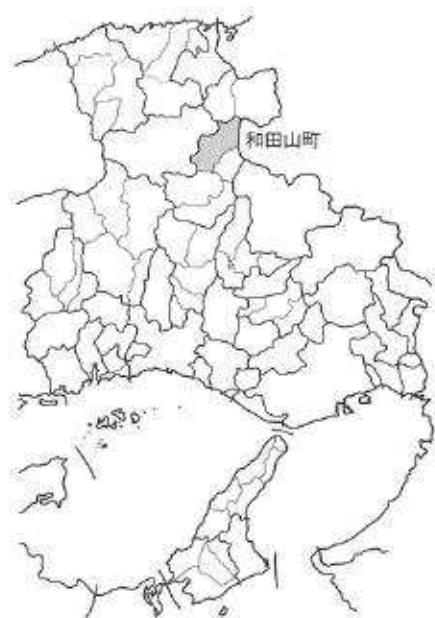
兵庫県教育委員会

朝来郡和田山町

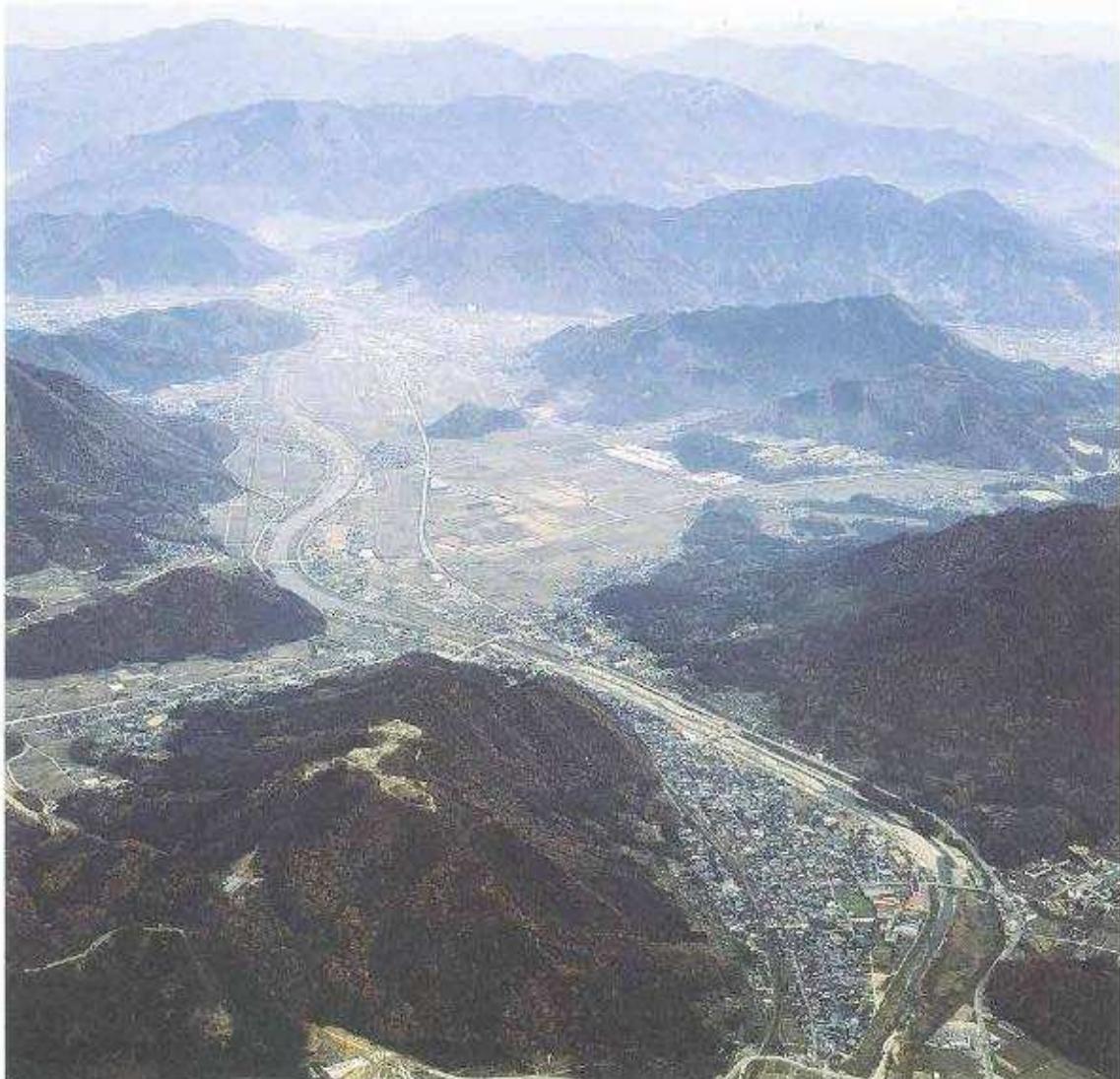
加都遺跡 I

— 播但連絡有料道路 5 期合併施工事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —





遺跡の位置



南西上空からみた加都平野

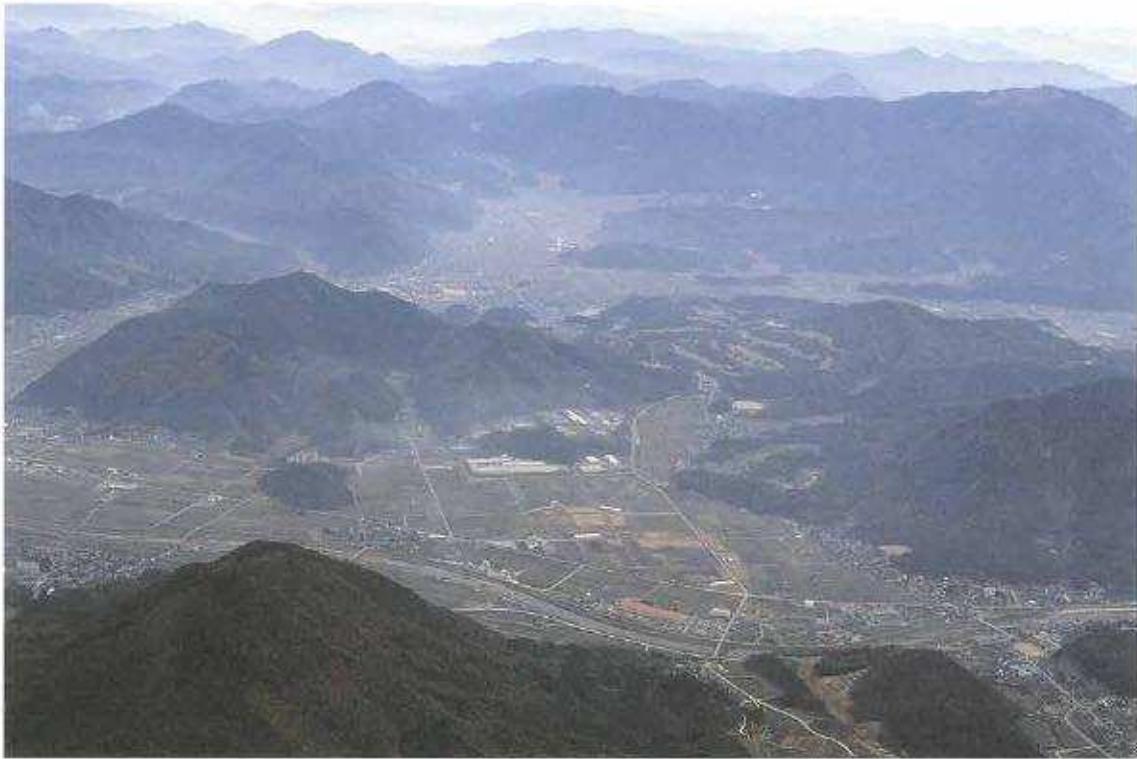


巻頭図版 1

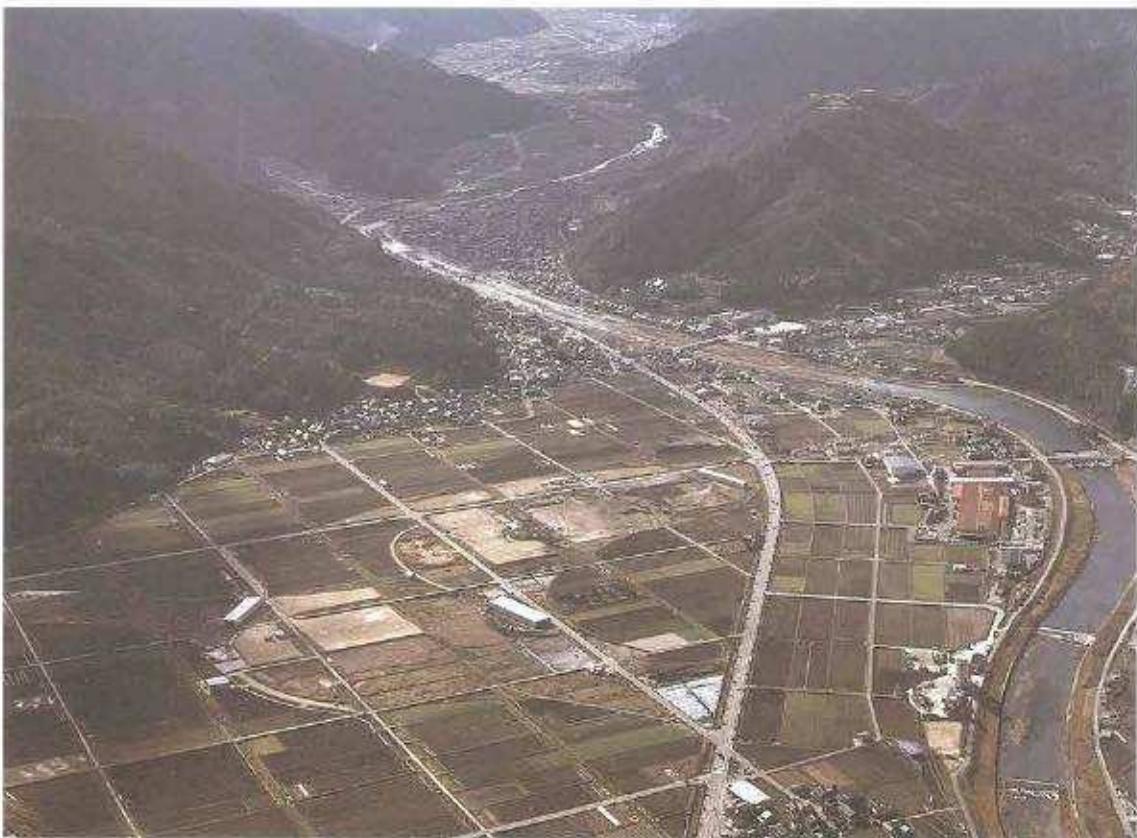


巻頭図版 2 上

巻頭図版 2



西上空からみた加都平野



北上空からみた加都平野



南西上空からみた調査区



南上空からみた桜地区全景

巻頭図版 4



桜地区検出の道路遺構（SFR001）

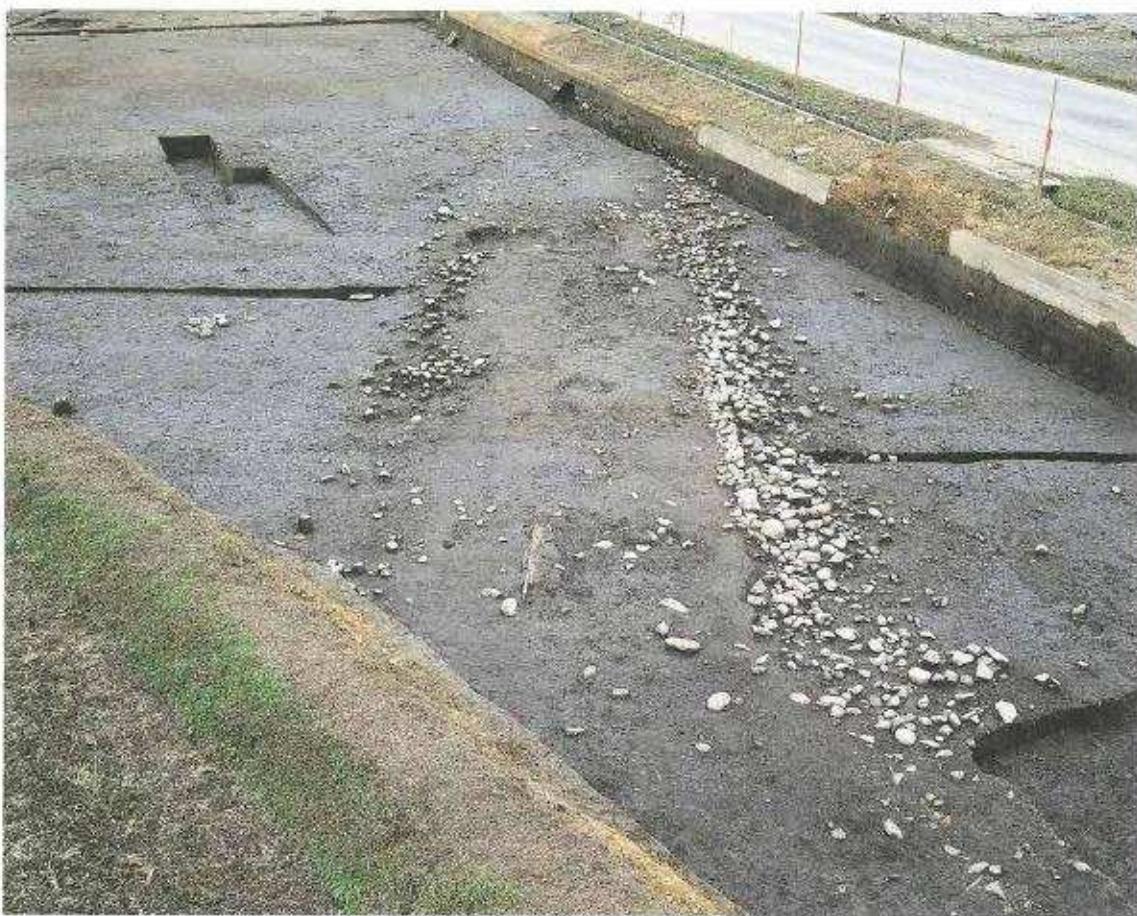


宮ヶ田Ⅰ地区の道路遺構（SFR001）と古墳時代の集落跡



宮ヶ田Ⅰ地区の道路遺構（SFR001）近景

巻頭図版 6



宮ヶ田Ⅰ地区の道路遺構（SFR001）近景 谷部



宮ヶ田Ⅰ地区の道路遺構（SFR001）近景 微高地縁辺部



古墳時代の土器（宮ヶ田 I・II 地区）



中世の漆器（桜地区）

例　　言

- 1 本書は、朝来郡和田山町加都・市御堂に所在する加都遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、播但連絡有料道路5期合併施工事業及び一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業に関連するもので、それぞれ兵庫県道路公社、建設省近畿地方建設局豊岡工事事務所の委託を受けて、平成8～10年度に兵庫県教育委員会が実施したものであり、本書は前者の調査結果を報告するものである。
- 3 出土品整理作業は、平成13～16年度に締結した兵庫県八鹿土木事務所長（平成13年度以降は兵庫県但馬県民局長）との契約に基づき、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
- 4 遺物写真撮影は、外部委託にて実施した。
- 5 本書の執筆は、本文目次に記したとおり分担し、編集は甲斐昭光が行った。
- 6 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
- 7 現地調査および整理作業の際には、関係各機関をはじめ、以下の方々から御協力や御教示をいただいた。御芳名を記して深謝の意を表する。

青木哲哉（立命館大学）・尾野善裕（京都国立博物館）・木下 良（古代交通研究会）・木本雅康（長崎外国語短期大学）・瀬戸谷皓（豊岡市教育委員会）・高橋美久二（滋賀県立大学）・谷本 進（八鹿町教育委員会）・田畠 基（朝来郡広域行政事務組合）・中島雄二（朝来郡広域行政事務組合）・松井敬代（竹野町教育委員会）・八木 剛（人と自然の博物館）・吉本昌弘（龍谷大学）

以上敬称略・五十音順・括弧内は当時の所属

凡　　例

- 1 本書で示す標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を基とし、方位は座標北を指す。なお本地域は、国土地標第V系に属す。経緯度は、世界測地系に基づく表示で、座標値は空中写真測量による測量成果を、国土地理院が公開するプログラム「TKY2JGD」で世界測地系に変換したものである。
- 2 調査区の名称は、第3章以下において、第4図に示すとおり変更する。
- 3 遺物には通し番号を付けている。ただし土製品、木製品、石製品及び玉、金属製品には、その頭にそれぞれC、W、S、Mをつけて、土器と区別している。また、付表として遺物の観察表を掲載するが、本文頁、図版番号、写真図版番号を付したので参照されたい。
- 4 土器の実測図は、種別ごとに以下のように断面の表現を区別している。
土師器・弥生土器：白抜き／須恵器：黒塗り／陶磁器：濃い網掛け／瓦器・黑色土器：薄い網掛け
- 5 本報告にあたり調査時の遺構名称を整理した。ただし、掘立柱建物の柱穴の名称は調査時の呼称である。新旧遺構名の対象は付表1のとおりである。遺構名称はアルファベットによる略号と数字で表記する場合がある。遺構の種類と時期を意味するもので、略号の意味は以下のとおりである。
(種類) SA：櫛 SB：掘立柱建物 SD：溝 SF：道路 SH：竪穴住居 SK：土坑 SX：土壙墓・木棺墓 SP：柱穴 SR：旧河道
(時期) Y：弥生時代 K：古墳時代 R：律令期 C：中世
- 6 土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1992年版を使用した。

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の位置	(甲斐昭光) 1
第2節 遺跡の歴史的環境	(小川弦太・甲斐) 2
第2章 調査の経過	4
第1節 調査に至る経緯	(甲斐) 4
第2節 確認調査	(別府洋二) 5
1. 調査の方法 2. 調査体制 3. 調査の結果	
第3節 本発掘調査の経過と体制	7
1. 概略	(甲斐) 7
2. 伊豫田地区	(山上雅弘) 10
3. 焼御堂地区 4. 岡ノ森地区 5. 桜地区	(甲斐) 10
6. 山内南地区	(山上) 11
7. 新水北A・宮ヶ田B・山内北A地区	(吉識雅仁) 12
8. 宮ヶ田A地区	(山上) 12
9. 桜(2)地区	(甲斐) 13
10. 山内北B地区	(吉識) 13
11. 山内北C地区	(吉識) 13
第4節 整理作業の経過と体制	(甲斐) 14
第3章 調査の結果	15
第1節 調査区の概観	(甲斐) 15
1. 調査区の位置	15
2. 微地形の復元	18
第2節 遺構	20
1. 伊豫田地区	(山上) 20
2. 焼御堂地区	(仁尾一人) 22
3. 岡ノ森地区	(仁尾) 22
4. 桜地区	(甲斐) 26
5. 山内南地区	(山上) 49
6. 宮ヶ田I地区	(吉識) 51
7. 宮ヶ田II地区	(小川) 69
第3節 遺物	75
1. 土器	75
(1) 繩文時代	(池田征弘) 75

(2) 弥生時代	（岸本一宏）	75
(3) 古墳時代	（甲斐）	80
(4) 律令期	（吉謙）	92
(5) 中世	（池田）	93
2. 木製品		106
(1) 中世以前の木製品	（吉謙）	106
(2) 中世の木製品	（西口）	109
3. 土製品	（小川）	111
4. 石製品	（池田）	111
5. 金属製品	（仁尾）	112
 第4章 自然科学的手法による分析		114
第1節 分析の目的	（甲斐）	114
第2節 加都遺跡の放射性炭素年代測定	（パリノ・サーヴェイ株）	115
第3節 律令期の道路遺構側溝における花粉化石	（パリノ・サーヴェイ株）	118
第4節 木製品の樹種		124
1. 加都遺跡（その1）における樹種同定	（株古環境研究所）	124
2. 加都遺跡から出土した木製品の樹種	（パリノ・サーヴェイ株）	129
第5節 漆器の調査	（㈱吉田生物研究所・岡田文男）	133
1. 兵庫県加都遺跡出土漆器の樹種同定調査		133
2. 兵庫県加都遺跡（桜地区）出土漆器の塗膜構造調査		135
 参考文献		138
付表		139
報告書抄録		151
図版		
写真図版		

挿 図 目 次

第1章 遺跡の位置と環境		第4章 自然科学的手法による分析	
第1図 和田山町の主要交通路	1	第2節 加都遺跡の放射性炭素年代測定	
第2図 加都遺跡周辺の遺跡	3	図1 宮ヶ田地区暦年較正値	116
		図2 桜地区暦年較正値	117
第2章 調査の経過		第3章 律令期の道路遺構側溝における花粉化石	
第3図 確認調査位置図	6	図1 東1次側溝・東2次側溝の堆積断面と試料採取層序	118
第4図 本発掘調査位置図	8	図2 東1次・2次側溝における花粉化石群集の層位分布	119
第3章 調査の結果		図3 但馬地域における古植生調査地点および木製品の樹種同定が行われた遺跡の位置	121
第5図 調査区とほ場整備前の土地区画との関係	15	図版1 花粉分析(1)	123
第6図 調査区と周辺の字名	16	図版2 花粉分析(2)	123
第7図 調査区周辺の微地形復元図	18	第4節 加都遺跡(その1)出土木製品の樹種同定	
第8図 全体図(本書所取地区)	19	1. 加都遺跡(その1)における樹種同定	
第9図 伊豫田地区全体図・遺構図	21	図版1 加都遺跡(その1)の木材I	127
第10図 燃御堂地区・岡ノ森地区全体図・土層図	23	図版2 加都遺跡(その1)の木材II	128
第11図 桜地区的地区割り図	26	2. 加都遺跡から出土した木製品の樹種	
第12図 桜地区全体図・土層図(1~8区)	27	図版1 木材	132
第13図 桜地区全体図(9~11区)	29	第5節 漆器の調査	
第14図 桜地区全体図(遺構集中部)	30	1. 兵庫県加都遺跡(桜地区)出土漆器の塗膜構造調査	
第15図 山内南地区全体図	50	図版1 加都遺跡出土漆器の塗膜構造	137
第16図 宮ヶ田I地区全体図	51		
第17図 宮ヶ田II地区全体図	70		
第18図 各地区出土の縄文土器	75		
第19図 壺の型式分類	81		
第20図 鞘の型式分類	81		
第21図 梶の型式分類	82		
第22図 高杯の型式分類	82		
第23図 320内面の昆虫圧痕	90		
第24図 須恵器の型式分類	94		
第25図 土師器の型式分類	95		
第26図 各地区出土の土製品	110		

表 目 次

第1章 遺跡の位置と環境	第3節 律令期の道路遺構側溝における 花粉化石
第1表 播但連絡有料道路5期事業関連 埋蔵文化財発掘調査一覧…………… 4	表1 花粉分析結果…………… 119
第2表 平成9年度調査担当者と 請負・委託契約等…………… 7	第4節 加都遺跡（その1）出土木製品の 樹種同定
第3表 平成10年度調査担当者と 請負・委託契約等…………… 9	1. 加都遺跡（その1）における樹種同定 表1 加都遺跡（その1）樹種同定結果… 126
第4表 調査時期一覧…………… 9	2. 加都遺跡から出土した木製品の樹種 表1 樹種同定結果…………… 130
第5表 調査区の字名…………… 17	第5節 漆器の調査
第4章 自然科学的手法による分析	1. 兵庫県加都遺跡出土漆器の樹種同定調査 表1 兵庫県加都遺跡出土漆器の 樹種同定結果…………… 134
第2節 加都遺跡の放射性炭素年代測定	2. 兵庫県加都遺跡（桜地区）出土漆器の 塗膜構造調査 表1 調査資料一覧表…………… 135
表1 宮ヶ田I地区における 放射性炭素年代測定結果…………… 116	表2 塗膜断面の観察結果…………… 136
表2 宮ヶ田I地区における 暦年較正結果…………… 116	
表3 桜地区における 放射性炭素年代測定結果…………… 117	
表4 桜地区における暦年較正結果…………… 117	

付 表

付表1 遺構名対照表

付表2 出土遺物観察表

図版目次

図版1 岡ノ森地区的遺構 SBC001・SDY003・ SDY004・SDY005・SDK001	図版9 桜地区的遺構(8) SBC010
図版2 桜地区的遺構(1) SFR001	図版10 桜地区的遺構(9) SBC011・SBC012
図版3 桜地区的遺構(2) SFR001	図版11 桜地区的遺構(10) SBC013
図版4 桜地区的遺構(3) SBC002・SBC004	図版12 桜地区的遺構(11) SBC014
図版5 桜地区的遺構(4) SBC003	図版13 桜地区的遺構(12) SBC015・SBC016
図版6 桜地区的遺構(5) SBC005・SBC006	図版14 桜地区的遺構(13) SBC017
図版7 桜地区的遺構(6) SBC007	図版15 桜地区的遺構(14) SBC018
図版8 桜地区的遺構(7) SBC008・SBC009	図版16 桜地区的遺構(15) SBC019
	図版17 桜地区的遺構(16) SBC020・SBC021

図版18	桜地区の遺構(17)	SBC022	図版52	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(14)	SHK014
図版19	桜地区の遺構(18)	SBC023・SBC025	図版53	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(15)	SHK015
図版20	桜地区の遺構(19)	SBC024	図版54	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(16)	SHK016・ SHK017・SHK018
図版21	桜地区の遺構(20)	SBC026	図版55	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(17)	SHK016・ SHK017・SHK018内土坑
図版22	桜地区の遺構(21)	SBC027・SBC029	図版56	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(18)	SHK019・ SHK020
図版23	桜地区の遺構(22)	SBC028	図版57	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(19)	SHK022
図版24	桜地区の遺構(23)	SBC030・SBC034	図版58	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(20)	SHK023
図版25	桜地区の遺構(24)	SBC031	図版59	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(21)	SHK024
図版26	桜地区の遺構(25)	SBC032	図版60	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(22)	SHK025
図版27	桜地区の遺構(26)	SBC033	図版61	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(23)	SBK001・ SPK001・SKK004
図版28	桜地区の遺構(27)	SBC035・SBC036	図版62	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(24)	SKK001・ SKK002・SKK003
図版29	桜地区の遺構(28)	SBC037	図版63	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(25)	SKK005・ SKK006・SKK007・SKK008・SKK009
図版30	桜地区の遺構(29)	SBC038	図版64	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(26)	SXK001
図版31	桜地区の遺構(30)	SBC039	図版65	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(27)	SER001
図版32	桜地区の遺構(31)	SBC040・SBC041	図版66	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(28)	SFR001
図版33	桜地区の遺構(32)	SBC042・SBC043	図版67	宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(29)	SBC045・ SBC046・SBC047
図版34	桜地区の遺構(33)	SBC044・SPC017・ SPC027・SXC001	図版68	宮ヶ田Ⅱ地区の遺構(1)	土層
図版35	桜地区の遺構(34)	SKC002・SKC004・ SKC008	図版69	宮ヶ田Ⅱ地区の遺構(2)	SHK026
図版36	桜地区の遺構(35)	SKC007・SKC010・ SKC012・SKC013・SKC014	図版70	宮ヶ田Ⅱ地区の遺構(3)	SHK027・ SHK028
図版37	桜地区の遺構(36)	SRC001・SRC002	図版71	宮ヶ田Ⅱ地区の遺構(4)	SKK010・ SKK011・SKC015
図版38	山内南地区的遺構	土層図	図版72	宮ヶ田Ⅱ地区の遺構(5)	SFR002
図版39	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(1)	土層図	図版73	宮ヶ田Ⅱ地区的遺構(6)	SBC048・ SBC049・SAC003
図版40	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(2)	SHK001	図版74	宮ヶ田Ⅱ地区的遺構(7)	SBC050・ SBC051
図版41	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(3)	SHK002	図版75	宮ヶ田Ⅱ地区的遺構(8)	SBC052・ SBC053
図版42	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(4)	SHK003	図版76	宮ヶ田Ⅱ地区的遺構(9)	SBC054
図版43	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(5)	SHK004	図版77	弥生時代の土器(1)	伊豫田地区
図版44	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(6)	SHK005			
図版45	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(7)	SHK006・ SHK007			
図版46	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(8)	SHK008			
図版47	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(9)	SHK009			
図版48	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(10)	SHK010			
図版49	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(11)	SHK011			
図版50	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(12)	SHK012			
図版51	宮ヶ田Ⅰ地区的遺構(13)	SHK013			

- 図版78 弥生時代の土器(2) 伊豫田地区
- 図版79 弥生時代の土器(3) 伊豫田地区・焼御堂地区・岡ノ森地区
- 図版80 弥生時代の土器(4) 岡ノ森地区・山内南地区・宮ヶ田I地区
- 図版81 弥生時代の土器(5) 宮ヶ田I地区・確認調査
- 図版82 古墳時代の土器(1) 焼御堂地区・岡ノ森地区・山内南地区
- 図版83 古墳時代の土器(2) 宮ヶ田I地区
- 図版84 古墳時代の土器(3) 宮ヶ田I地区
- 図版85 古墳時代の土器(4) 宮ヶ田I地区
- 図版86 古墳時代の土器(5) 宮ヶ田I地区
- 図版87 古墳時代の土器(6) 宮ヶ田I地区
- 図版88 古墳時代の土器(7) 宮ヶ田I地区
- 図版89 古墳時代の土器(8) 宮ヶ田I地区
- 図版90 古墳時代の土器(9) 宮ヶ田I地区
- 図版91 古墳時代の土器(10) 宮ヶ田I地区
- 図版92 古墳時代の土器(11) 宮ヶ田II地区
- 図版93 古墳時代の土器(12) 宮ヶ田II地区
- 図版94 古墳時代の土器(13) 宮ヶ田II地区
- 図版95 律令期の土器 桜地区・宮ヶ田I地区・山内南地区
- 図版96 中世の土器(1) 伊豫田地区・岡ノ森地区・桜地区
- 図版97 中世の土器(2) 桜地区
- 図版98 中世の土器(3) 桜地区
- 図版99 中世の土器(4) 桜地区
- 図版100 中世の土器(5) 桜地区・山内南地区
- 図版101 中世の土器(6) 宮ヶ田I地区・宮ヶ田II地区
- 図版102 中世以前の木製品(1) 宮ヶ田I地区
- 図版103 中世以前の木製品(2) 宮ヶ田I地区
- 図版104 中世以前の木製品(3) 宮ヶ田I地区
- 図版105 中世以前の木製品(4) 宮ヶ田I地区
- 図版106 中世以前の木製品(5) 宮ヶ田I地区
- 図版107 中世の木製品 岡ノ森地区・桜地区
- 図版108 石製品(1) 確認調査
- 図版109 石製品(2) 伊豫田地区・桜地区
- 図版110 石製品(3) 宮ヶ田I地区
- 図版111 石製品(4) 宮ヶ田I地区
- 図版112 金属製品(1) 桜地区・宮ヶ田I地区・宮ヶ田II地区・確認調査
- 図版113 金属製品(2) 桜地区
- 図版114 金属製品(3) 宮ヶ田I地区・宮ヶ田II地区・山内南地区

写真図版目次

巻頭図版 1

1 南西上空からみた加都平野

巻頭図版 2

1 西上空からみた加都平野

2 北上空からみた加都平野

巻頭図版 3

1 南西上空からみた調査区

2 南上空からみた桜地区全景

巻頭図版 4

1 桜地区検出の道路遺構 (SFR001)

巻頭図版 5

1 宮ヶ田Ⅰ地区の道路遺構（SFR001）と古墳時代の集落跡

2 宮ヶ田Ⅰ地区の道路遺構（SFR001）近景

卷頭図版6

1 宮ヶ田Ⅰ地区の道路遺構（SFR001）近景 谷部

2 宮ヶ田Ⅰ地区の道路遺構（SFR001）近景 微高地縁辺部

卷頭図版7

1 古墳時代の土器（宮ヶ田Ⅰ・Ⅱ地区）

2 中世の漆器（桜地区）

写真図版1 伊豫田地区

1 調査区全景（南から）

2 SDY002（西から）

3 SDY001断面1（南から）

4 SDY001断面2（南から）

写真図版2 焼御堂地区・岡ノ森地区（1）

1 焼御堂・岡ノ森地区全景（西から）

2 焼御堂地区全景（西から）

3 岡ノ森地区全景（東から）

写真図版3 岡ノ森地区（2）

1 SDK001遺物出土状況（南西から）

2 SKC001遺物出土状況（南から）

3 SDY003断面（南西から）

4 SDY004断面（南西から）

5 SBC001 P4断面（南から）

6 SBC001 P7断面（南から）

写真図版4 桜地区（1）

1 桜地区全景

写真図版5 桜地区（2）

1 6～8区SFR001全景（南西から）

2 桜地区SFR001全景（北東から）

写真図版6 桜地区（3）

1 7区SFR001路面の状況（南西から）

2 8区SFR001波板状凹凸面（西から）

3 6区SFR001側溝の切り合い（北東から）

写真図版7 桜地区（4）

1 10・11区SFR001（北から）

2 10・11区SFR001（南から）

3 10区SFR001分岐点（西から）

4 9区SFR001（南から）

写真図版8 桜地区（5）

1 西半部の遺構（南から）

2 北西部の遺構（東から）

3 北端部の遺構（西から）

写真図版9 桜地区（6）

1 SBC002（東から）

2 SBC006・007（東から）

3 SBC010・011（西から）

4 SBC013・014（南から）

写真図版10 桜地区（7）

1 SBC022・023（南から）

2 SBC024（南から）

3 SBC024（西から）

4 SBC025・026・027（南から）

写真図版11 桜地区（8）

1 SBC028・029（南から）

2 SBC031～034・039～044（南から）

3 SBC035（南から）

4 SBC036（南から）

写真図版12 桜地区（9）

1 SBC037・038（南から）

2 SBC026 P1532土器出土状況（南から）

3 SBC026 P1613土器出土状況（南から）

4 SPC006土器出土状況（南から）

5 SPC017土器出土状況（南から）

写真図版13 桜地区（10）

1 SKC002（南から）

2 SKC004（南から）

- 3 SKC012 (西から)
- 写真図版14 桜地区 (11)
- 1 SKC008・010溝検出状況 (北から)
 - 2 SKC008・010完掘状況 (北から)
 - 3 SKC008・010完掘状況 (南から)
- 写真図版15 桜地区 (12)
- 1 SKC014 (西から)
 - 2 SXC001 (北から)
 - 3 SXC001 (東から)
 - 4 SXC001土器出土状況 (東から)
- 写真図版16 桜地区 (13)
- 1 SRC002 (南から)
 - 2 SRC002漆椀出土状況
 - 3 SRC002漆椀出土状況
 - 4 SRC002断面 (南から)
 - 5 SRC001・SRC002断面 (南から)
- 写真図版17 桜地区 (14)
- 1 南壁基本土層 (北から)
 - 2 作業風景
 - 3 学識経験者による指導(1)
 - 4 学識経験者による指導(2)
- 写真図版18 山内南地区
- 1 I区全景 (東から)
 - 2 I区南壁断面 (北から)
 - 3 II区全景 (南から)
- 写真図版19 宮ヶ田I地区 (1)
- 1 宮ヶ田I地区全景 (合成写真)
- 写真図版20 宮ヶ田I地区 (2)
- 1 宮ヶ田B地区全景 (南から)
 - 2 宮ヶ田B地区全景 (北から)
- 写真図版21 宮ヶ田I地区 (3)
- 1 宮ヶ田B地区住居跡群 (西から)
 - 2 山内北C地区全景 (北から)
- 写真図版22 宮ヶ田I地区 (4)
- 1 山内北B地区全景 (南から)
 - 2 山内北B地区全景 (北から)
- 写真図版23 宮ヶ田I地区 (5)
- 1 新水北A地区全景 (南から)
- 2 新水北A地区全景 (西から)
- 写真図版24 宮ヶ田I地区 (6)
- 1 SHK001 (北から)
 - 2 SHK001内SK3 (北から)
 - 3 SHK001内SK1 (北から)
- 写真図版25 宮ヶ田I地区 (7)
- 1 SHK002・003・029 (東から)
 - 2 SHK002 (南から)
- 写真図版26 宮ヶ田I地区 (8)
- 1 SHK003 (東から)
 - 2 SHK003甕 (東から)
 - 3 SHK003内SK2 (東から)
- 写真図版27 宮ヶ田I地区 (9)
- 1 SHK004 (南から)
 - 2 SHK004甕 (南から)
 - 3 SHK004甕内土器出土状況 (南から)
 - 4 SHK005甕内土器出土状況 (北から)
 - 5 SHK006甕内土器出土状況 (西から)
- 写真図版28 宮ヶ田I地区 (10)
- 1 SHK005 (北から)
 - 2 SHK006・007 (西から)
- 写真図版29 宮ヶ田I地区 (11)
- 1 SHK008・012・013 (南から)
 - 2 SHK008 (南から)
- 写真図版30 宮ヶ田I地区 (12)
- 1 SHK012 (東から)
 - 2 SHK012甕 (東から)
 - 3 SHK012甕内縫合状況 (東から)
 - 4 SHK012 SK3 (東から)
 - 5 SHK012 SK1 (南から)
- 写真図版31 宮ヶ田I地区 (13)
- 1 SHK013 (南から)
 - 2 SHK015 (北から)
- 写真図版32 宮ヶ田I地区 (14)
- 1 SHK009 (南から)
 - 2 SHK009 埋土上層縫合状況 (西から)
- 写真図版33 宮ヶ田I地区 (15)
- 1 SHK011 (東から)

- 2 SHK011竈（東から）
 3 SHK011土器出土状況（東から）
 4 SHK011床面上の土器・礫（東から）
 5 SHK011南西隅の土器・礫（東から）
- 写真図版34 宮ヶ田I地区 (16)
- 1 SHK014（東から）
 2 SHK014竈（西から）
 3 SHK014床面上土器出土状況（南から）
- 写真図版35 宮ヶ田I地区 (17)
- 1 SHK015（西から）
 2 SHK019（北から）
- 写真図版36 宮ヶ田I地区 (18)
- 1 SHK015内SK1（西から）
 2 SHK019内SK1（西から）
 3 SHK016内SK1（西から）
- 写真図版37 宮ヶ田I地区 (19)
- 1 SHK016（北から）
 2 SHK016・017・018（北から）
- 写真図版38 宮ヶ田I地区 (20)
- 1 SHK023（東から）
 2 SHK025（南から）
- 写真図版39 宮ヶ田I地区 (21)
- 1 SHK026・027（南から）
 2 SHK027（南から）
 3 SHK026（東から）
- 写真図版40 宮ヶ田I地区 (22)
- 1 SKK001（東から）
 2 SKK001内土器出土状況（東から）
 3 SKK006（南から）
- 写真図版41 宮ヶ田I地区 (23)
- 1 SKK007（西から）
 2 SKK007土層断面（西から）
 3 SKK005（東から）
- 写真図版42 宮ヶ田I地区 (24)
- 1 SKK008内礫（南から）
 2 SKK008（南から）
 3 SKK002（南から）
- 写真図版43 宮ヶ田I地区 (25)
- 1 SKK009（南から）
 2 SKK009土層断面（南から）
 3 SKK004（南から）
- 写真図版44 宮ヶ田I地区 (26)
- 1 SPK001（南から）
 2 SER001（西から）
 3 SER001断ち割り断面（西から）
- 写真図版45 宮ヶ田I地区 (27)
- 1 山内北A地区SFR001全景（南から）
 2 山内北A地区SFR001全景（南から）
- 写真図版46 宮ヶ田I地区 (28)
- 1 山内北A地区SFR001全景（南西から）
 2 山内北A地区SFR001全景（北東から）
- 写真図版47 宮ヶ田I地区 (29)
- 1 山内北A地区SFR001路面の状況（南西から）
 2 山内北A地区SFR001路面の状況（北東から）
- 写真図版48 宮ヶ田I地区 (30)
- 1 山内北A地区SFR001路面の溝状窪み（南西から）
 2 山内北A地区SFR001上面の板材（北東から）
 3 山内北A地区SFR001路面の溝状窪み（東から）
- 写真図版49 宮ヶ田I地区 (31)
- 1 山内北A地区SFR001東法面の石葺き（東から）
 2 山内北A地区SFR001東法面の石葺き（東から）
- 写真図版50 宮ヶ田I地区 (32)
- 1 山内北A地区SFR001東法面の石葺き（南東から）
 2 山内北A地区SFR001東法面の石葺き細部（東から）
- 写真図版51 宮ヶ田I地区 (33)
- 1 山内北A地区SFR001盛土肩部状況細部（南から）

- 2 山内北A地区SFR001西裾部の状況（北東から）
- 写真図版52 宮ヶ田Ⅰ地区（34）
- 1 山内北B地区SFR001全景（南から）
 - 2 山内北B地区SFR001全景（北から）
- 写真図版53 宮ヶ田Ⅰ地区（35）
- 1 山内北B地区SFR001路面の状況（南西から）
 - 2 山内北B地区SFR001路面の礫（北東から）
- 写真図版54 宮ヶ田Ⅰ地区（36）
- 1 山内北B地区SFR001路面の礫（南西から）
 - 2 山内北B地区SFR001東法面の礫（南西から）
- 写真図版55 宮ヶ田Ⅰ地区（37）
- 1 山内北A地区SFR001断面（南西から）
 - 2 山内北A地区SFR001断面（南西から）
 - 3 山内北A地区SFR001断面東法面（南西から）
 - 4 山内北B地区SFR001東法面の断面（南西から）
- 写真図版56 宮ヶ田Ⅰ地区（38）
- 1 SBC045（東から）
 - 2 SBC046（東から）
 - 3 SBC047（南から）
- 写真図版57 宮ヶ田Ⅰ地区（39）
- 1 新水北A地区谷部全景（南西から）
 - 2 新水北A地区谷部全景（東から）
 - 3 谷部SXK001（東から）
- 写真図版58 宮ヶ田Ⅰ地区（40）
- 1 谷部SXK001（北から）
 - 2 谷部SXK001断面（南から）
 - 3 谷部SXK001礫撤去後の杭（北から）
- 写真図版59 宮ヶ田Ⅰ地区（41）
- 1 山内北A地区SXK001（東から）
 - 2 山内北A地区SXK002（南から）
 - 3 山内北A地区SXK002南微高地との関係（東から）
- 写真図版60 宮ヶ田Ⅰ地区（42）
- 1 新水北A地区谷部倒木（南西から）
- 2 新水北A地区谷部舟出出土状況（西から）
- 3 山内北A地区谷部勾玉出土状況（西から）
- 写真図版61 宮ヶ田Ⅱ地区（1）
- 1 宮ヶ田Ⅱ地区全景
- 写真図版62 宮ヶ田Ⅱ地区（2）
- 1 宮ヶ田Ⅱ地区全景（東から）
 - 2 宮ヶ田Ⅱ地区全景（北西から）
- 写真図版63 宮ヶ田Ⅱ地区（3）
- 1 SHK026土層断面（南から）
 - 2 SHK026土器検出状況（南から）
 - 3 SHK026完掘状況（南から）
- 写真図版64 宮ヶ田Ⅱ地区（4）
- 1 SHK027完掘状況（東から）
 - 2 SHK028完掘状況（東から）
 - 3 SHK028土器検出状況（西から）
- 写真図版65 宮ヶ田Ⅱ地区（5）
- 1 調査区南部柱穴群（西から）
 - 2 調査区東部柱穴群（北から）
 - 3 SBC048（北から）
- 写真図版66 宮ヶ田Ⅱ地区（6）
- 1 SBC0499・SAC003（西から）
 - 2 SBC050（東から）
 - 3 SBC051（東から）
- 写真図版67 宮ヶ田Ⅱ地区（7）
- 1 SBC052（西から）
 - 2 SBC053（西から）
 - 3 SBC054（東から）
- 写真図版68 宮ヶ田Ⅱ地区（8）
- 1 SFR002全景（南から）
 - 2 SFR002全景（南西から）
 - 3 SFR002近景（北東から）
- 写真図版69 宮ヶ田Ⅱ地区（9）
- 1 SKK010検出状況（西から）
 - 2 SKK010完掘状況（西から）
 - 3 SKK010完掘状況（南から）
- 写真図版70 宮ヶ田Ⅱ地区810）
- 1 SKC015検出状況（東から）

- 2 SKC015完掘状況（東から）
 3 SKC015土層断面（北から）
 4 SKC015土器出土状況（東から）
- 写真図版71 宮ヶ田Ⅱ地区（11）
- 1 SBC048 P400柱穴断面（南から）
 - 2 SBC048 P402柱穴断面（南から）
 - 3 SBC048 P404柱穴断面（南から）
 - 4 SBC048 P406柱穴断面（南から）
 - 5 SBC050 P175柱穴断面（北から）
 - 6 SBC051 P98柱穴断面（南から）
- 写真図版72 宮ヶ田Ⅱ地区（12）
- 1 SBC052 P8土器出土状況（南から）
 - 2 SBC052 P8柱穴断面（西から）
 - 3 東壁基本土層（西から）
- 写真図版73 縄文時代・弥生時代の土器（1）
 伊豫田・焼御堂・桜・宮ヶ田Ⅰ・宮ヶ田Ⅱ地区
- 写真図版74 弥生時代の土器（2）
 伊豫田地区
- 写真図版75 弥生時代の土器（3）
 伊豫田・岡ノ森・山内南・宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版76 弥生時代の土器（4）
 伊豫田・焼御堂地区
- 写真図版77 弥生時代の土器（5）
 伊豫田・焼御堂・岡ノ森地区
- 写真図版78 弥生時代の土器（6）
 山内南・宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版79 古墳時代の土器（1）
 焼御堂・山内南・宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版80 古墳時代の土器（2）
 宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版81 古墳時代の土器（3）
 宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版82 古墳時代の土器（4）
 宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版83 古墳時代の土器（5）
 宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版84 古墳時代の土器（6）
 宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版85 古墳時代の土器（7）
 宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版86 古墳時代の土器（8）
 宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版87 古墳時代の土器（9）
 宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版88 古墳時代の土器（10）
 宮ヶ田Ⅱ地区
- 写真図版89 古墳時代の土器（11）
 宮ヶ田Ⅱ地区
- 写真図版90 古墳時代の土器（12）
 山内南・宮ヶ田Ⅰ・宮ヶ田Ⅱ地区
- 写真図版91 古墳時代の土器（13）
 宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版92 古墳時代の土器（14）
 宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版93 古墳時代の土器（15）
 宮ヶ田Ⅰ・宮ヶ田Ⅱ地区
- 写真図版94 律令期の土器（1）
 山内南・宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版95 中世の土器（1）
 岡ノ森・桜地区
- 写真図版96 中世の土器（2）
 桜地区
- 写真図版97 中世の土器（3）
 桜地区
- 写真図版98 中世の土器（4）
 桜地区
- 写真図版99 中世の土器（5）
 桜地区
- 写真図版100 中世の土器（6）
 桜地区
- 写真図版101 中世の土器（7）
 桜地区
- 写真図版102 中世の土器（8）
 桜・山内南・宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版103 中世の土器（9）
 宮ヶ田Ⅱ地区

- 写真図版104 中世以前の木製品（1）
宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版105 中世以前の木製品（2）
宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版106 中世以前の木製品（3）
宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版107 中世以前の木製品（4）
宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版108 中世以前の木製品（5）
宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版109 中世以前の木製品（6）
宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版110 中世の木製品（1）
桜地区
- 写真図版111 中世の木製品（2）
桜地区
- 写真図版112 石製品（1）
確認調査・伊豫田・桜・宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版113 石製品（2）
確認調査・宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版114 金属製品（1）
桜地区
- 写真図版115 金属製品（2）
確認調査・伊豫田・山内南・宮ヶ田Ⅰ地区
- 写真図版116 金属製品（3）・土製品
桜・山内南・宮ヶ田Ⅰ地区

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

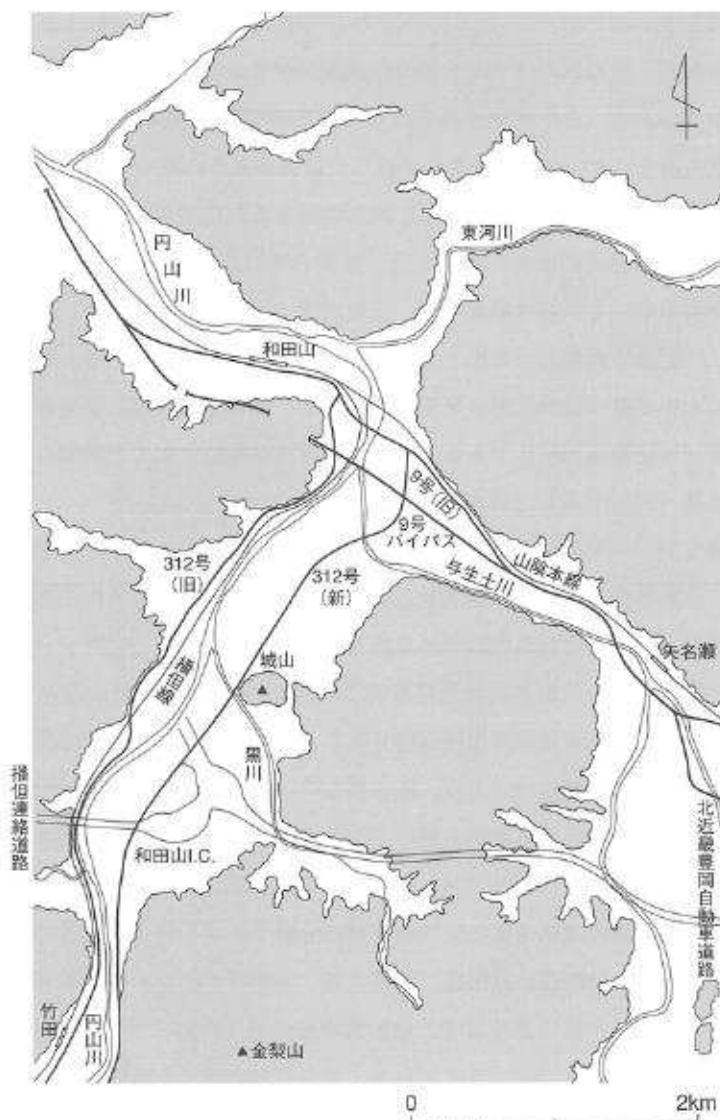
和田山町 加都遺跡の所在する兵庫県北部の朝来郡和田山町は、東を京都府天田町夜久野町、南東を朝来郡山東町、南を朝来郡朝来町、西を養父市、北を出石郡出石町・但東町と各々境を接する。面積は111.7km²を測り、人口は17,066人（平成16年12月1日現在推計）を数える。平成17年4月1日、郡内の3町と合併して朝来市が発足する予定である。

地形 兵庫県北部を占める但馬地方は、中国山地東端の北斜面を占める山がちな地域である。中国山地と、その東部に位置する丹波高原との間には、開析の進んだ低山地帯がある。ここには但馬最大の河川円山川が発達し、和田山町内においては南から北西方向へ逆「く」字形に流れ、いくつかの支流とともに、流域平野に耕地や集落、交通路といった生活の舞台を提供している。

交通路 和田山町内の主要な交通路も、概ねこの円山川の流域に沿ったものである。町を南東から北西に貫く国道9号線・JR山陰本線に、北上する国道372号線、

JR播但線が町の中心部において合流するように、和田山町は近畿と山陰地方を結ぶ物資・情報の流れと、播磨地方との南北のそれが合流するにふさわしい位置と地形をもっている。調査の契機になった和田山インターチェンジにおいて播但連絡道路と北近畿豊岡自動車道が合流するのも、象徴的な姿といえる。

遺跡の位置 加都遺跡は円山川が形成した和田山町内最大の流域平野に位置する。ここはかつて「加都千石」と通称された、整然とした条里地割りが広範囲に遺存する田園地帯であった。遺跡は、完新世段丘上に展開しており、弥生時代前期から鎌倉時代にかけての長期にわたって人々の生活の痕跡をとどめていた。



第1図 和田山町内の主要交通路

第2節 遺跡の歴史的環境

弥生時代以前 現在のところ加都遺跡周辺では、旧石器時代の遺物は発見されておらず、人類がその痕跡を残すのは縄文時代になってからである。

片引遺跡（11）、高瀬遺跡（41）、ムクノ木遺跡（37）などで縄文土器の出土が知られるが、遺構は確認されていない。縄文時代の遺跡は和田山町内で7遺跡が確認されている（田畠 2004）。

弥生時代になると、加都遺跡周辺にも集落や墳墓が築かれる。集落遺跡には、片引遺跡（前期後半）、ムクノ木遺跡（前期～中期前半）、岡田遺跡（中期・40）のほか、当地には珍しい分銅形土製品を出土した仲田遺跡（中期・15）等がある。後期前半の特徴的な集落として、二重環濠を伴う高地性集落である大盛山遺跡（39）、玉作り工房が検出された宮ノ本遺跡（42）がある。墳墓には後期後半の墳丘墓、木棺墓が検出された梅田東古墳群（20）がある。

古墳時代 加都遺跡周辺の尾根上には、梅田古墳群（18）をはじめとする弥生時代以来の小規模墳が継続的に築かれるが、最近の調査により首長墓の動向が鮮明になってきた。前期には、若水A11号墳や筒江中山23号墳（12）、さらに城の山古墳（6）等にみられるように、東西頭位の長大な箱形木棺を持つなど、在地色の強い南但馬の首長墓が営まれるが、中期初頭には但馬全域の霸権を掌握したと思われる池田古墳（5）が築かれる。全長141mの前方後円墳であり、主体部は竜山石製の長持形石棺の可能性もあることから、在地色を払拭した派遺首長との見方もある。次いで営まれるのが茶すり山古墳（30）である。直径約90mの大円墳と箱形木棺をもち前期以来の在地色の強さを示している。鏡や甲冑、盾といった副葬品が豊富に出土した（岸本 2003）。後期には、加都車塚古墳（23）や加都王塚古墳（24）等が築かれるが、これらは船宮古墳、長塚古墳（2）、小丸山古墳（1）と同様、前方後円墳の可能性もある。7世紀には頭椎大刀を出土した筒江の長尾古墳（33）がある。加都遺跡はこれら縦起的に営まれたいくつかの古墳の母体である可能性が高いが、柿坪遺跡（34）に見られるような豪族居館と評価される大型掘立柱建物は未検出である。この他、特殊な遺跡として、前期の粘土採掘坑が多数検出された筒江浦石遺跡（29）がある（荒木 2001）。

律令期 加都遺跡北方には、飛鳥・白鳳時代に営まれた法興寺跡（7）がある（田畠 1998）。

朝来郡衙は位置等が判然としないが、地名や後述する古代山陰道の位置比定とからめて、加都遺跡南東の金梨山北麓台地上に求める説もある（足立・生田 2002）。

加都遺跡で検出された道路遺構は、「延喜式」段階以前に存在した駅家を伴った官道であり、山陽道と山陰道を結ぶ地域間連絡道路であると評価された（高橋 2000）。この道路が接続すると想定される古代山陰道の位置については、概ね現在の国道9号がそれを踏襲しているとされていた（高橋 1993ほか）が、これに対し、やや南方のいくつかの峠越えをする案が提示されているため、それに基づいて第2図に図示を試みた（木下 1989・足立・生田 2002）。

加都遺跡の道路遺構は宝珠峠方向に分岐するが、峠に至る谷の中程に筒江大垣遺跡（38）がある。綠釉陶器、灰釉陶器、転用硯、墨書き土器、木簡等が出土している（兵庫県教委埋文事務所 2000）。

中世 中世の遺跡はその数の大半を山城が占める。加都遺跡周辺では市御堂城跡（9）、加都城跡（26）、筒江城跡（27）などがある。加都遺跡南西にある竹田城跡（36）は全国でも屈指の山城として有名であり、国史跡に指定されている。中世の集落跡の調査例は少なく、広範囲にわたり数多くの掘立柱建物が検出された加都遺跡の事例は、但馬の中世集落の実態を示す貴重な資料といえる。



1. 小丸山古墳	古墳時代	13. 間江梶原古墳群	古墳時代	25. 加都神社裏古墳群	古墳時代	37. ムクノ木道跡	弥生～中世	
2. 長塚古墳	古墳時代	14. 大師山古墳群	古墳時代	26. 加都城跡	中世	38. 間江大垣遺跡	古墳～中世	
3. 青塚古墳	古墳時代	15. 仲田道跡	弥生時代	27. 箕江城跡	中世	39. 大盛山遺跡	弥生	
4. 岡田2号墳	古墳時代	16. 市条寺経塚	中世	28. 城ヤブ古墳群	古墳時代	40. 岡田遺跡	弥生	
5. 池田古墳	古墳時代	17. 向山古墳群	古墳時代	29. 箕江浦石道跡	古墳時代	41. 高瀬遺跡	縄文・弥生	
6. 城の山古墳	古墳時代	18. 梅田古墳群	古墳時代	30. 茶すり山古墳	古墳時代	42. 宮ノ本道跡	弥生	
7. 法興寺跡	奈良時代	19. 安井城跡	中世	31. 大月北山1号墳	古墳時代	A-F: 古代山陰道(高橋案) A-B: 古代山陰道(足立・生田案) C-E: 古代山陰道(足立・生田案)	律令期	
8. 枝田城跡	中世	20. 梅田東古墳群	古墳時代	32. 大月北山2号墳	古墳時代			
9. 市御堂城跡	中世	21. 安井遺跡	弥生時代	33. 長尾古墳・長尾中世墓群	古墳・中世			
10. 加都遺跡	弥生～中世	22. 加都散布塚	弥生時代	34. 植坪遺跡	縄文～古墳	B-C-D: 古代山陰道(木下案)		
11. 片引遺跡	弥生時代	23. 加都車塚	古墳時代	35. 竹田城下町遺跡	中世	律令期		
12. 箕江中山墳墓群	弥生時代	24. 加都王塚	古墳時代	36. 竹田城跡	中世			

*古代山陰道の位置については図示されていないため、
下記各文献の文章をもとに甲斐が記入したものである。
(木下 1989、高橋 1993、足立・生田 2002)

第2図 加都遺跡周辺の遺跡

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

播但連絡有料道路は、兵庫県が推進している高速道6基幹軸の南北軸の中央に位置する。南は国道2号（姫路バイパス）から山陽自動車道や中国自動車道と連結し、日本海側の但馬地域に至る総延長65.1kmの有料道路である。

兵庫県道路公社が事業主体である播但連絡有料道路5期合併施工事業は、すでに供用している姫路JCTと生野北間をさらに朝来郡和田山町まで北伸する事業として17.2kmの整備を行うものである。将来的には、舞鶴自動車道春日ICから分岐する北近畿豊岡自動車道と和田山町で接続し、播磨・阪神地域から但馬地域を結ぶ県内的一大動脈として機能することとなる。

兵庫県教育委員会では、これに伴い路線範囲内の埋蔵文化財の分布調査を平成6・7年度に行い、さらに平成7年度には一部確認調査を実施し、記録保存のための本発掘調査を行ってきた（第1表）。

北側の終点である朝来郡和田山町加都におけるインターチェンジ建設予定地では、分布調査の結果、No20地点で土器が採取されるなど、広範囲にわたる遺跡の存在が想定されたため、兵庫県教育委員会が兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所との間の受委託契約に基づき、遺跡の有無等の詳細を確認するための確認調査を実施することとなった。

第1表 播但連絡有料道路5期事業関連埋蔵文化財発掘調査一覧

年度	遺跡名	調査年月日	所在地	面積	遺跡の時期
H 8	梅田古墳群（1～5号）	H 8.11.29～H 9.3.19	和田山町久留引字梅田他	1,643m ²	古墳
	東梅田古墳群（10～15号）	H 8.11.22～H 9.3.28	和田山町久留引字梅田他	1,855m ²	古墳
H 9	薬師前遺跡	H 9.5.20～H 9.10.17	朝来町岩津字薬師前	5,661m ²	平安～鎌倉
	加都遺跡 宮ヶ田A地区	H 9.9.21～H 10.2.9	和田山町加都	2,828m ²	古墳～平安
	加都遺跡 山内南地区			1,715m ²	古墳～鎌倉
	薬師前遺跡 その2	H 9.12.24～10.3.13	朝来町岩津字井谷他	959m ²	平安～鎌倉
	木之内城	H 10.1.21～10.3.24	朝来町物部字木之内	1,432m ²	中世
	梅田古墳群（6～8号）	H 9.4.30～H 9.5.29	和田山町久留引字向山他	437m ²	古墳
	加都遺跡 伊豫田地区	H 9.5.6～H 9.5.29	和田山町加都字伊豫田	598m ²	弥生
	加都遺跡 焼御堂地区	H 9.5.21～H 9.6.30	和田山町加都字焼御堂	199m ²	弥生～古墳
	梅田古墳群（9～14号）	H 9.5.19～H 9.8.17	和田山町久留引字梅田	437m ²	古墳
	加都遺跡 新水北A地区	H 9.9.17～H 10.2.4	和田山町加都・市御堂	2,795m ²	古墳～鎌倉
H 10	加都遺跡 山内北A地区			1,064m ²	
	加都遺跡 宮ヶ田B地区			1,526m ²	
	加都遺跡 岡ノ森地区	H 9.5.21～H 9.7.3	和田山町加都字岡ノ森	891m ²	弥生～中世
	加都遺跡 桜地区	H 9.6.17～H 9.12.19	和田山町加都字桜	12,962m ²	奈良～鎌倉
	梅田古墳群（15～24号）	H 9.12.17～10.3.25	和田山町久留引字梅田	2,050m ²	古墳
H 11	加都遺跡 桜地区（2）	H 10.4.16～10.4.29	和田山町加都字桜	1,057m ²	奈良～平安
	梅田古墳群（25～32号）	H 10.5.22～H 10.9.6	和田山町久留引字梅田	2,50m ²	古墳
	加都遺跡 山内北B地区	H 10.4.16～10.4.29	和田山町加都字山内	880m ²	古墳～鎌倉
	加都遺跡 山内北C地区	H 11.2.15～11.2.26	和田山町加都字山内	150m ²	古墳

第2節 確認調査

1. 調査の方法

確認調査は、平成8年6月23日から平成9年2月4日にかけて実施した。約20万m²におよぶ調査対象範囲には、昭和40年代のは場整備により、南北200m、東西100m間隔で道路に囲まれた方形の水田が広がっていた。各区画は東西方向の畦畔によって7区に分筆されており、調査は各筆に2ないし3本のトレーニングを設定して実施した。また、付随する町道等の工事に伴う確認調査も並行して実施した。

トレーニングは1m×10mのものを基本的に東西方向に設定し、一部は南北方向に設定した。また、場所によって2m幅で2、10、15、20mの長さのものも設定し、合計で197本、2,649m²の調査を実施した。

同時に、は場整備前の地形図を利用して、旧河道・微高地・段丘など微地形の復元をおこない、確認調査のデータとあわせて、遺跡の範囲・残存状況の判断を下した。地形図によると調査直前の地割は、は場整備前の旧地割をそのまま踏襲していることがわかる。

2. 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 青木正之

副所長 木下 猛（管理事務担当）／ 大村敬通（発掘調査担当）／ 龍見祐輔（土木技術担当）

主任調査専門員 辅老拓治（企画調整班長兼務）

総務課 課長 石井 守

企画調整班 主任 山上雅弘

調査第2班 調査専門員 小川良太

主査 別府洋二／技術職員 仁尾一人（調査担当）

3. 調査の結果

調査対象範囲内の南西部、国道312号より西側（T1～T9）や、東側の1～12までのトレーニング範囲は地形が低く、耕土直下で礫層が検出され、遺構は検出されなかった。円山川の氾濫原と判断される。その東側の一段高い地区（16～19）では、柱穴・溝等が検出され、平安時代から中世にかけての遺物が出土した（桜地区）。さらに東側では一部礫層が検出され、また、遺物を含まない流路状の堆積が検出された。微高地として集落が立地していた可能性が高いが、後世に上面が削平されたものと判断される。但し南端部では流路や土坑の堆積内から古墳時代の遺物が出土している（岡ノ森・焼御堂地区）。

中央部の西側では古墳時代の流路を検出し（山内南地区）、東側には微高地が広がるものと考えていたが、耕土やは場整備時における盛土直下で礫層が広がるなど、微高地の上面が既に削平されていることが判明した。

東端部は弥生前期の土器や木器が出土した片引遺跡に近い地点であるが、復元された微地形から見ても旧河道状の低い地形が南東から北西方向へと続く地点である。黒川などの東から供給された粗砂とシルトが複雑に堆積しており、一部で弥生前期や古墳時代の遺物を含む流路が検出された。また、中世までの遺物が含まれる包含層も存在し、刀形木製品も出土している（伊豫田地区）。

北半部では48の地区で砂利採取のために4～5mの深さまで掘削されていた以外は、広い範囲で遺構・遺物を検出した（宮ヶ田・山内北・新水北地区）。出土した遺物には縄紋時代に属する黒曜石製の石器、古墳時代の田下駄や建築部材、砥石、奈良時代の木簡、人形、ミニチュアの羽子板など中世までの様々なものが含まれている。微高地部分では竪穴住居と考えられる焼土や柱穴、土坑などが検出され、谷地形部では水田に伴うと考えられる杭列や大量の木製品が出土しており、古墳時代以降の集落、水田がまとまって検出されることが推測された。

以上のように、縄紋時代、弥生時代前期～後期、古墳時代、奈良～平安時代、中世に属する遺物が出土しており、当該地やその周辺で古くから人々が生活していたことがわかった。但し、弥生時代以前の古い時期のものは東側や南側の山裾に営まれた集落から流されてきたものと推測された。

県道路公社によるボーリング調査によると、本来の地山となる花崗岩風化層までは3～6mの深度があり、確認調査時の一帯断ち割りによると、旧円山川による礫層が広く東端近くまで広がっている。この礫層の凹部に湿地性の堆積物である黒褐色シルト質極細砂が堆積し、遅くとも古墳時代には水田に利用される。礫層の凸部は南側から陸化するが、既に上面を削平されているためか、南側では遺構は確認できなかった。また、東から流れる黒川の影響が調査区の東端や南半で認められる。



第3図 確認調査位置図

第3節 本発掘調査の経過と体制

1. 概 略

前節のとおり、平成8年度に実施された確認調査の結果、約20万m²に及ぶ調査対象地域のうち、約55,000m²の全面調査が必要と判断された。この確認調査の結果をもとに行われた県教育委員会と県道路公社播但連絡道路建設事務所・建設省豊岡工事事務所との協議結果をふまえて、平成9・10年の2年度に、全面調査を実施した（第4図）。

これらの調査は、県道路公社播但連絡道路建設事務所・建設省豊岡工事事務所からの依頼に基づくものであり、県教育委員会が、両者と受委託契約を締結し、請負工事として発掘調査を発注して実施したもののがほとんどである。ただし、平成9年度の伊豫田地区、平成10年度の桜地区（2）の調査、山内北C地区の調査、2・3号排水路工事等に伴う立会調査については、県道路公社播但連絡道路建設事務所が作業員等を直接提供する形態で実施した。

平成9年度の調査体制 平成9年度の調査体制は以下のとおりである。

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 上田 獣

副所長 木下 猛（管理事務担当）／ 大村敬通（発掘調査担当）／ 龍見祐輔（土木技術担当）

主任調査専門員 輔老拓治（企画調整班長）

総務課 課長 岩澤重則／ 事務職員 服部征太郎

企画調整班 技術職員 柏原正民

調査第2班 調査専門員 吉田 昇

主査 吉識雅仁・甲斐昭光／ 主任 山上雅弘／ 技術職員 仁尾一人／

事務職員 服部 寛／ 臨時職員 石松 崇・小田 賢・小川弦太／ 研修員

松野健児・三枝 修（調査担当）

日々雇用 現場事務員・室内作業員 木村智子・足立智美・山本 薫・岡本厚子

なお、調査第2班は調査専門員の統括のもと、第2表に示すように3つのグループで調査を進めた。

受委託契約はいずれも兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所と取り交わし、各発掘調査工事および空中写真測量は、第2表のように、各落札業者との契約において実施した。

第2表 平成9年度 調査担当者と請負・委託契約等

地 区	調査担当者	発掘調査工事請負業者	空中写真測量委託業者
宮ヶ田B・山内北A・新水北A	吉識・服部・松野	株式会社川井組	アジア航測株式会社
焼御堂・岡ノ森・桜	甲斐・仁尾・小田	株式会社浅沼組神戸支店	日本テクノ株式会社
宮ヶ田A・山内南	山上・三枝・石松・小川	明生建設株式会社	株式会社ジェクト

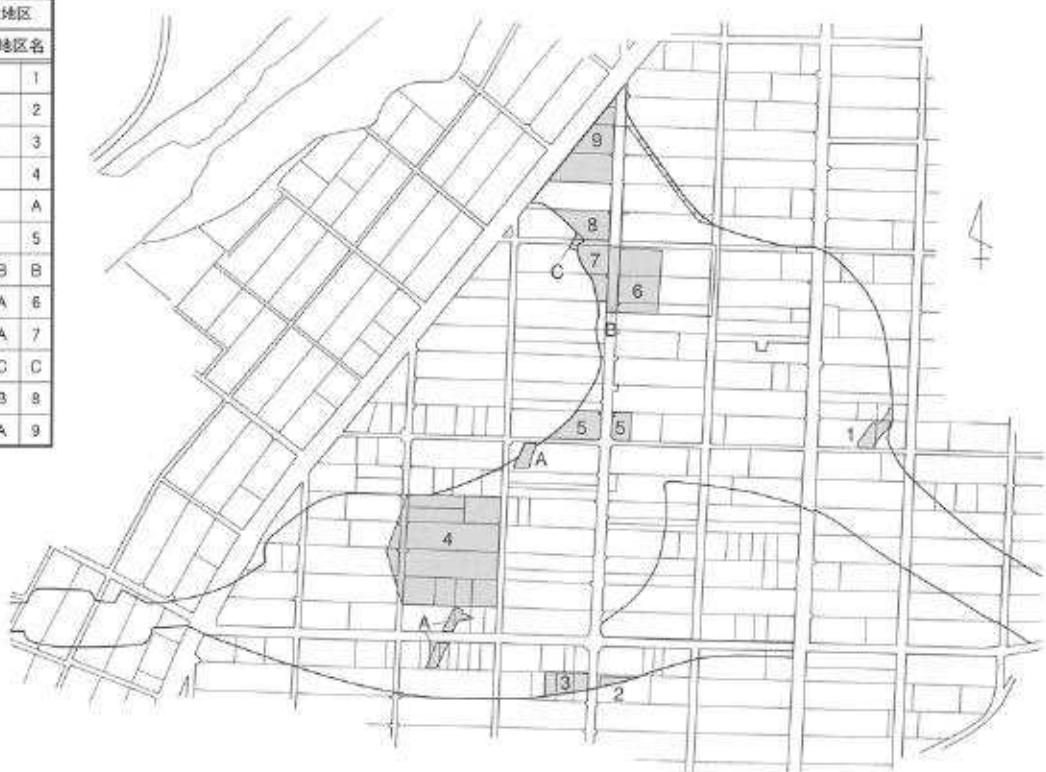
平成10年度の調査体制 平成10年度の調査体制は以下のとおりである。

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 寺内幸治

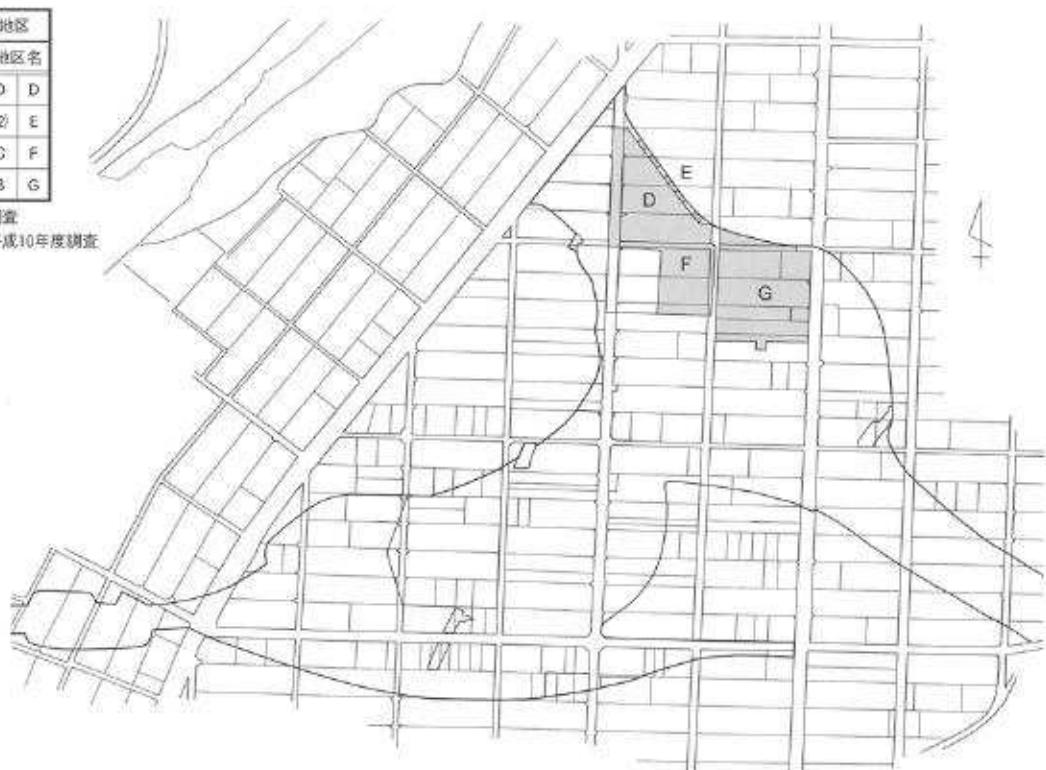
副所長 木下 猛（管理事務担当）／ 大村敬通（発掘調査担当）／ 岩本伸之（土木技術担当）

「加都道路Ⅰ」掲載地区	
報告地区名	調査時地区名
伊豫田	伊豫田 1
焼御堂	焼御堂 2
岡ノ森	岡ノ森 3
桜	桜 4
	桜(2) A
山内南	山内南 5
	山内北B B
	新水北A 6
宮ヶ田Ⅰ	山内北A 7
	山内北C C
	宮ヶ田B 8
宮ヶ田Ⅱ	宮ヶ田A 9



「加都遺跡Ⅱ」掲載地区	
報告地区名	調査時地区名
	宮ヶ田D D
宮ヶ田Ⅲ	宮ヶ田D(2) E
	宮ヶ田C F
新水北	新水北B G

*数字：平成9年度調査
アルファベット：平成10年度調査



0 500m

第4図 本発掘調査位置図

主任調査専門員 輔老拓治・池田正男（調査第2班長兼務）
 総務課 課長 岩澤重則／主査 若林洋子
 企画調整班 調査専門員 山本三郎／主査 高瀬一嘉
 調査第2班 主査 吉識雅仁・岸本一宏・西口圭介・甲斐昭光／技術職員 池田征弘・
 仁尾一人／臨時職員 戸田真美子／研修員 井本有二・松野健児・
 佐々木俊彦（調査担当）
 日々雇用 調査補助員 中村真也／現場事務員・室内作業員 木村智子・加門美智代・
 足立智美・友前里美・山本 薫・岡本厚子・西本真由美・秋森真由美・天野美千代・
 奥 和美・松岡京子

なお、調査第2班は調査専門員の統括のもと、第3表に示すように3つのグループで調査を進めた。受託契約は、山内北B地区の調査は兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所と、他の地区的調査については建設省豊岡工事事務所と取り交わし、各発掘調査工事および空中写真測量は、第3表のように、各落札業者との契約において実施した。

第3表 平成10年度 調査担当者と請負・委託契約等

地 区	調査担当者	発掘調査工事請負業者	空中写真測量委託業者
山内北B	吉識・仁尾・佐々木	株式会社川井組	アジア航測株式会社
新水北B	岸本・西口・松野	株式会社建設工業	アジア航測株式会社
宮ヶ田C・宮ヶ田D・宮ヶ田D (2)	甲斐・池田・戸田・井本	株式会社浅沼組神戸支店	ジェクト株式会社・大阪 航空株式会社

第4図に、各調査区の位置とその調査年度、地区名の変更内容、掲載報告書の別を示した。本書には、兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所が発掘調査の経費負担を行った地区的調査結果を掲載する。

遺跡の名称 今回の調査対象範囲内における埋蔵文化財包蔵地については、確認調査の段階までを「加都散布地」、確認調査の結果、遺跡の存在が明確になってからは、「加都遺跡」と呼び、そのうちの各調査地点にはそれぞれ小字名に基づいた地区名を付している。なお、本書第3章以下においては、第4図に示すとおり地区名を変更し、平成16年3月発行の『兵庫県遺跡地図』には地区名を付した名称が記載されている（兵庫県教委 2004）。

第4表 調査時期一覧

	伊豫田	焼御堂	岡ノ森	桜	新水北 A	山内北 A	宮ヶ田 B	宮ヶ田 A	山内南		桜(2)	宮ヶ田 D	新水北 B	宮ヶ田 C	山内北 B	宮ヶ田 D2	山内北 C
H9.4										H10.4							
5										5	1057m						
6	598m									6							
7		199m	891m							7							
8										8							
9										9							
10										10							
11										11	5831m						
12					2795m					12							
H10.1					12962 m ²					H11.1							
2						1064m ²	1526m ²		715m ²	2		10124 m ²					
3										3		5988m ²	880m ²	295m ²	150m ²		

2. 伊豫田地区の調査（遺跡調査番号970158）

5月6日、調査を開始した。調査範囲は、確認調査の結果をもとに設定したが、遺構が事業地内につづくため範囲を一部拡張して調査を行った。5月28日には調査を終了した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成9年5月6日（火）	現地打ち合わせ。機械掘削開始。
5月8日（木）	機械掘削終了。人力掘削開始。
5月16日（金）	遺構の掘削開始。
5月20日（火）	全景写真撮影。
5月28日（水）	平板実測。土層図実測を行い、調査を終了する。

3. 焼御堂地区の調査（遺跡調査番号970168）

5月27日に調査を開始した。6月26日には実測、写真撮影を含む諸記録の作成を終え、遺構掘削を終了した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成9年5月20日（火）	現況測量開始。
5月27日（火）	機械掘削開始、終了。
5月29日（木）	人力掘削開始。
6月3日（火）	黒色シルト層より漆碗出土。
6月9日（月）	全景写真撮影、写真測量のための基準点測量開始。
6月10日（火）	平板実測。
6月13日（金）	遺構掘削終了。
6月26日（木）	空中写真測量に伴う撮影実施。
7月25日（金）	工事検査受検、道路公社に管理を引き継ぐ。

4. 岡ノ森地区の調査（遺跡調査番号970199）

5月27日、焼御堂地区と平行して調査を開始した。6月24日には遺構の掘削を一応終了したが、これらと広い範囲で切りあう遺構が存在していたため、空中写真測量の写真撮影後、これを掘削した（SDY 005）。7月1日には実測、写真撮影を含む諸記録の作成を終え、遺構掘削を終了した。

この地区は、「清水ヶ尻」という旧字名の示すように、湧水および暗渠排水からの漏水がかなり激しく、良好な調査環境を保つのが非常に困難であった。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成9年5月20日（火）	現況測量開始。
5月27日（火）	機械掘削開始。
5月29日（木）	機械掘削終了。
5月30日（金）	人力掘削開始。
6月9日（月）	空中写真測量のための基準点測量開始。
6月10日（火）	遺構精査開始、遺構掘削開始。
6月19日（木）	遺構掘削ほぼ終了。
6月25日（水）	全景写真撮影。
6月26日（木）	空中写真測量に伴う撮影実施。
6月30日（月）	下層遺構の掘削開始。
7月1日（火）	下層遺構の掘削終了。
7月25日（金）	工事検査受検、道路公社に管理を引き継ぐ。

5. 横地区の調査（遺跡調査番号970200）

調査に際しては、調査区を縦断している町道および4号用水路の撤去を事前に実行する必要があった。こ

のため、県道路公社による両者の撤去および用水路の迂回工事の終了を待って、6月17日、調査を開始した。

調査面積が約13,000m²と広範囲であるため、遺構の保護の観点から、調査区を東西に2分して、それぞれの調査終了時に空中写真測量のための撮影等を行う必要があった。西半部を1～4区、東半部を5～8区と大別し、さらに遺物の取り上げや、細かい位置の限定をする場合には10m四方の地区割りを使用した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成9年6月6日（金） 4号用水路の迂回工事完了。
6月11日（水） 草刈り、現況測量開始。
6月16日（月） 町道アスファルトの撤去工事開始、終了。
6月17日（火） 1～4区 機械掘削開始。
6月20日（金） 台風7号接近中のため風雨激しい。
6月25日（水） 1～4区 人力掘削開始。
6月27日（金） 2～4区 遺構面の精査、遺構の掘削開始。
6月28日（土） 台風8号のための風雨激しい。
7月7日（月）～11日（金） この週、雨のため屋外作業中止。
7月18日（金） 1～4区 機械掘削終了。
8月4日（月） 1区 流路掘削開始。
8月11日（月） 5～8区 機械掘削開始。
8月22日（金） 1区 流路掘削終了。
2～4区 遺構の掘削終了。
8月25日（月） 1～4区 清掃および全景写真撮影開始。
8月29日（金） 1～4区 全景写真撮影終了。
5～8区 人力掘削開始。
8月27日（水）～29日（金） 青木哲哉氏、現地で地形・地質の検討。
9月3日（水） 1～4区 空中写真測量に伴う撮影実施。
5～8区 遺構面の精査、遺構の掘削開始。
21日ぶりの降雨。
9月4日（木） 1～4区 柱穴断割り開始。
9月16日（火） 台風19号接近中のため風雨激しい。
10月2日（木） 5～8区 機械掘削終了。
10月7日（火） 1～4区 柱穴断割り終了。
10月8日（水） 5～8区 柱穴断割り開始。
11月13日（木） 5～8区 遺構の掘削終了。
11月17日（月） 高橋美久二氏、道路遺構についての現地指導。
11月18日（火） 5～8区 清掃開始。
11月20日（金） 全景写真撮影開始。
11月21日（金） 5～8区 空中写真測量に伴う撮影実施。
11月28日（金） 5～8区 全景写真撮影終了。
11月29日（土） 現地説明会開催。
12月2日（火） 初雪。夜から翌夕にかけて積雪。
12月5日（金） 5～8区 柱穴断割り終了。
12月9日（火） 工事検査受検。
12月11・12日（木・金） 青木哲哉氏、現地にて地形・地質の検討。
12月19日（金） 道路公社に管理を引き継ぐ。

6. 山内南地区の調査（遺跡調査番号970316）

10月29日に調査を開始し、翌年1月26日には諸記録の作成を終え、調査を終了した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成9年10月29日（水） 現地にて打ち合わせ
11月17日（月） 現場開始、重機掘削
11月26日（水） 人力掘削開始

平成10年1月23日（金） 空中写真測量・現場終了

7. 新水北A・山内北A・宮ヶ田B地区の調査（遺跡調査番号970198・970197・970198）

3地区は町道でそれぞれに分割された地区であるが、調査の効率化のために並行して進めたり、あるいは多くの遺構が検出され一部町道を撤去して調査を進めため、一括して記述する。

調査は9月1日、新水北A地区の機械掘削から開始し、宮ヶ田B地区・山内北A地区と順次調査を進めた。各地区とも黒色シルト土が遺構面となっており、遺構内の埋土も黒色シルトを中心としたものであるため、遺構の検出に難渋を極めた。また谷部で盛土の法面を石で葺いた道路遺構が検出されるなど、重要な遺構が検出された。

宮ヶ田B地区と山内北A地区をわける町道下についても多数の遺構があることが分かったため、道路公社と協議のうえ、一時的に道路を撤去し、同時に調査を実施した。調査は平成10年2月4日に終了した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成9年9月1日（水）	新水北A地区機械掘削開始。
9月8日（水）	新水北A地区人力掘削開始。
9月9日（木）	新水北A地区黒色シルト上で堅穴住居跡検出。
10月2日（木）	宮ヶ田B地区機械掘削開始。
10月14日（火）	新水北A地区空中写真撮影を実施。
10月15日（水）	宮ヶ田B地区人力掘削開始。
11月1日（土）	山内北A地区機械掘削開始。
11月6日（木）	山内北A地区人力掘削開始。
11月7日（金）	山内北A地区で道路遺構検出。
11月13日（木）	新水北A地区谷部の集石、柱穴断面等終了。
11月29日（日）	桜地区現地説明会にあわせ、山内北A地区道路遺構見学会開催。
12月10日（木）	宮ヶ田B・山内北A地区空中写真撮影。
12月11日（木）	山内北A地区道路遺構平面・立面実測開始。
12月15日（月）	高橋美久二氏に道路遺構についての現地指導を受ける。
12月16日（火）	道路遺構施設について記者発表。
12月22日（月）	山内北A地区道路遺構平面・立面図終了。
12月25日（木）	宮ヶ田B地区堅穴割り等終了。
平成10年1月23日（金）	山内北A地区道路遺構等堅穴割り開始。
1月24日（土）	山内北A地区道路遺構堅穴割り終了。
2月4日（水）	山内北A地区柱穴等堅穴割り終了。

8. 宮ヶ田A地区の調査（遺跡調査番号970315）

9月29日に調査を開始し、翌年1月28日には諸記録の作成を終え、調査を終了した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

平成9年9月17日（金）	現地にて打ち合わせ
9月29日（水）	現場開始、重機掘削
10月1日（金）	人力掘削開始
11月19日（木）	堅穴住居など主要遺構の写真撮影
12月19日（金）	空中写真測量に伴う写真撮影
12月20日（土）	遺構実測・断面割りなど
平成10年1月28日（金）	現場終了

9. 桜地区（2）調査（遺跡調査番号980014）

平成9年度に桜地区で検出された律令期の道路遺構の延長部分のうち、桜地区に隣接した部分の調査

を行った。桜地区の北東部をA区、桜地区と県道浅野山東線に挟まれた地区をB区、県道の南をC区と呼ぶ。

県道路公社が直接作業員等の提供をする形態での調査となった。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

- 平成10年4月16日（木） A区の機械掘削。遺構面の精査を開始。
4月22日（水） A区の発掘。全景写真撮影。B区の機械掘削。
4月23日（木） A区の平板実測。C区の機械掘削。B区で道路遺構の分岐点を検出。
4月28日（火） B・C区の発掘、全景写真撮影。
4月29日（水） 高橋美久二氏来訪、道路遺構について指導。B・C区の平板実測などを行い、調査を終了。

10. 山内北B地区の調査（遺跡調査番号980211）

平成9年度に調査を実施した山内北A地区に隣接し、山内北A地区で検出された道路遺構の延長線上にもあたることから、平成9年度の調査の際にあわせて実施しようとしたが、道路下に水道管等の埋設物があったことから、平成9年度は調査を断念した調査区である。公社による町道市御堂加都線の撤去が終了し、調査が可能になった12月7日、機械掘削から開始した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

- 平成10年12月7日（木） 機械掘削開始。
12月11日（月） 人力掘削開始。
1月13日（水） 第2次道路遺構検出終了。
1月15日（金） 空中写真撮影実施。
1月18日（月） 第2次道路遺構平面・立面実測開始。
1月29日（金） 道路遺構平面・立面実測終了。
2月1日（月） 第1次道路遺構検出開始。
2月3日（水） 第1次道路遺構検出終了。
2月4日（木） 第1次道路遺構平面図作成。
2月5日（金） 第1次道路遺構断ち割り、古墳時代の遺構検出。
2月9日（火） 古墳時代の遺構断ち割り。
2月10日（水） 調査終了。

11. 山内北C地区の調査（遺跡調査番号980235）

平成9年度に実施した宮ヶ田B地区と山内北A地区に隣接する調査区で、播但連絡道建設用地外の地区であるが、播但連絡道路の揚水ポンプ場建設に伴う掘削範囲の中になることから、調査を実施した。調査は、面積が狭小なこともあって、道路公社から作業員や機械類の提供を受けて実施した。

以下に調査日誌の抄録を掲げる。

- 平成11年2月15日（月） 機械掘削開始。
2月16日（火） 人力掘削開始、遺構検出。
2月26日（金） 遺構検出終了。写真撮影実施。
3月1日（月） 平面図等作成。
3月3日（水） 調査終了。

第4節 整理作業の経過と体制

出土品整理は、発掘調査時に監督員詰所において土器（総数141箱）の水洗作業等の実施から開始した。本格的な整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて平成12～16年度に行った。

1. 平成12年度の整理作業

遺物の水洗い、ネーミングおよび接合補強を、以下の体制で実施した。

整理普及班 菱田淳子（工程管理担当）

整理担当職員 甲斐昭光

整理技術嘱託員 西原美智代・光澤鈴子・伊藤ミネ子・川上啓子・衣笠雅美・長谷川洋子・
林 寿珠子・江口初美・家光和子・吉田優子・喜多山好子・石野照代・
早川亜紀子・藏 幾子・島村順子・大仁克子・小寺恵美子・岡井とし子・蓬莱洋子

2. 平成13年度の整理作業

遺物の実測・拓本・復元・写真撮影を以下の体制で実施した。

整理普及班 菱田淳子（工程管理担当）

整理担当職員 吉識雅仁・岸本一宏・西口圭介・甲斐昭光・池田征弘・仁尾一人・小川弦太

整理技術嘱託員 前山三枝子・溝上くみ・桑田寛子

また、木製品の樹種同定・保存処理、放射性炭素年代測定等の分析を外部機関に委託して実施した。

3. 平成14年度の整理作業

遺物の写真撮影、遺構図面補正とトレースを以下の体制で実施した。

整理普及班 菱田淳子（工程管理担当）

整理担当職員 吉識雅仁・岸本一宏・別府洋二・西口圭介・山上雅弘・甲斐昭光・池田征弘・
仁尾一人・小川弦太

整理技術嘱託員 前山三枝子・加藤裕美・又江立子・藤川紀子・吉田優子・眞子ふさ恵・石野照代・
中田明美・西野淳子・藏 幾子・大仁克子

また、木製品の保存処理を外部機関に委託して実施した。

4. 平成15年度の整理作業

金属器の実測・写真撮影・トレース作業と木器・金属器の保存処理を以下の体制で実施した。

整理普及班 菱田淳子（工程管理担当）・岡本一秀（金属器保存処理担当）

整理担当職員 吉識雅仁・岸本一宏・別府洋二・西口圭介・山上雅弘・甲斐昭光・池田征弘・
仁尾一人・小川弦太

整理技術嘱託員 前山三枝子・加藤裕美・又江立子・藤川紀子

また、木製品の樹種同定および保存処理を外部機関に委託して実施した。

5. 平成16年度の整理作業

原稿執筆、レイアウト、編集作業を以下の体制で実施し、刊行に至った。

整理普及班 村上泰樹（工程管理担当）

整理担当職員 吉識雅仁・岸本一宏・別府洋二・西口圭介・山上雅弘・甲斐昭光・池田征弘・
仁尾一人・小川弦太

整理技術嘱託員 前山三枝子

第3章 調査の結果

第1節 調査区の概観

1. 調査区の位置

今回の調査地は、和田山町内最大の平地のなかにあり、「加都千石」と通称される整然とした田畠の広がる地域である。この耕地は、昭和44～46年に実施された圃場整備事業で造成されたものだが、圃場整備以前にも、条里型地割りが広範囲にわたって認められた。

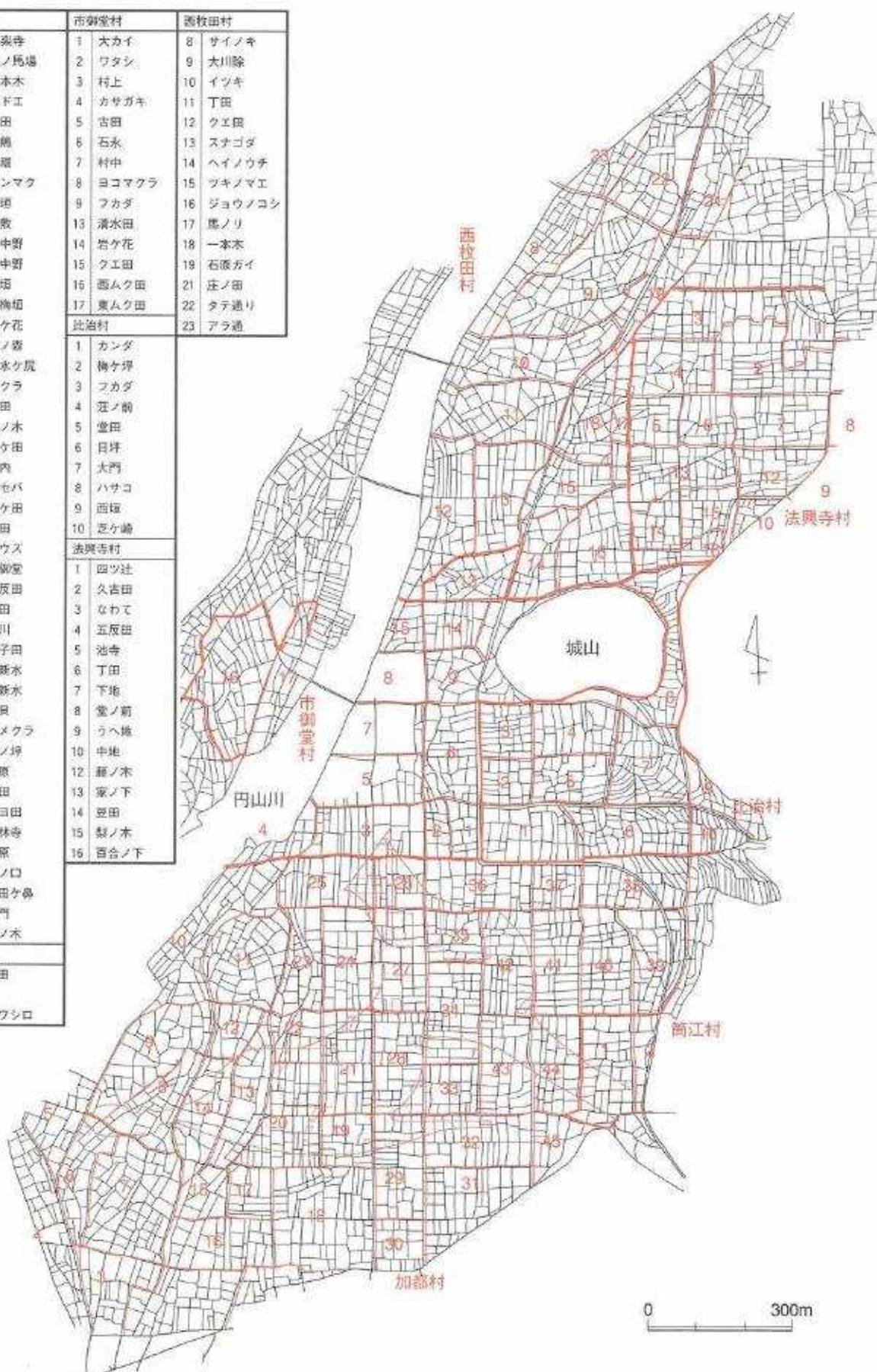
圃場整備前後の2葉の地形図の比較の結果、この圃場整備は、従来の圃場に残っていた条里地割りの方向性を大きく変えることなく実施され、また、垂直方向にも従来の田面の高低差を活かした施工がなされていることが分かる。また、圃場整備前後の圃場上面の標高値を比較すれば、大半が削平することによって新圃場を造成する形をとっていることが分かり、さらにその削平は最大58cmに及ぶため、遺構の残存状況が良くないことが予測できた。ただし、桜地区の北西隅、宮ヶ田Ⅰ・Ⅱ地区の東半、宮ヶ田Ⅲ地区の一部、山内南地区の西半、新水北地区の南西隅については、新圃場上面の標高値の方が高いため、工法上、盛り土を行った可能性が推測できる。

確認調査の結果、記録保存のための本発掘調査が必要と判断された地区は、第5図のとおり16箇所を数え、現地の小字名を用いた地区名で呼称している。



第5図 調査区とほ場整備前の土地区分との関係

加部村	市御堂村	西牧田村
3 植木寺	1 大カイ	8 サイノキ
4 院ノ馬場	2 ワタシ	9 大川除
5 一本木	3 村上	10 イツキ
6 土ド工	4 古サガキ	11 丁田
7 横田	5 古田	12 クエ田
8 中簡	6 石永	13 スナゴダ
9 逆畠	7 村中	14 ヘイノウチ
10 ガンマク	8 ヨコマグラ	15 ツキノマエ
11 大垣	9 フカダ	16 ジョウノコシ
12 重敷	13 清水田	17 鹿ノリ
13 東中野	14 岩ヶ花	18 一本木
14 西中野	15 クエ田	19 石原万イ
15 茶塙	16 西ムク田	21 庄ノ田
16 夏海組	17 東ムク田	22 タテ通り
17 竹ヶ花	比治村	23 アラ通
18 門ノ森	1 カンダ	
19 清水ケ尻	2 梅ヶ坪	
20 サクラ	3 フカダ	
21 大田	4 荘ノ前	
22 杉ノ木	5 堂田	
23 金ヶ田	6 日坪	
24 山内	7 大門	
25 マセバ	8 ハサコ	
26 宮ヶ田	9 西塙	
27 吾田	10 芝ヶ崎	
28 モウス	法興寺村	
29 梅御堂	1 四ツ辻	
30 六反田	2 久吉田	
31 杉田	3 なわて	
32 立川	4 五反辻	
33 砂子田	5 池寺	
34 下新水	6 丁田	
35 上新水	7 下地	
36 大貝	8 堂ノ前	
37 ナメクラ	9 うへ地	
38 楠ノ坪	10 中地	
39 阿原	11 藤ノ木	
40 八田	12 家ノ下	
41 イヨ田	13 豆田	
42 森林寺	14 麦ノ木	
43 柏原	15 百合ノ下	
44 桜ノ口		
45 天田ヶ鼻		
52 大門		
53 オノ木		
筒江村		
1 冲田		
2 峰		
12 ヤワシロ		



第6図 調査区と周辺の字名

第6図は加都平野とその北方にかけての昭和40年の地形図に調査区を重ねたもので、字限図（和田山土地改良区 1974）を基に字名も示した。円山川右岸域を中心とした圃場整備前の土地区画と当時の字名を確認することができる。広範囲にわたり正南北方位（N1°26' E）を指す条里型地割りが確認され、円山川沿いに氾濫源が認められる。

調査区にかかる旧加都村と旧市御堂村の字名について若干触れておく。字名にある「宮ヶ田」は「ミヤケダ」と呼称する。史料には残っていないが、屯倉を想起させる地名として注意しておきたい。さらに、「焼御堂」についても「ヤケ」が屯倉に通じるという指摘もある（足立・生田 2002）。また、市御堂の「ヨコマクラ」という地名は、奈良盆地の古代官道である「中ツ道」の遺存地割にみえる字「ヨコマクラ」（千田 1996）と共通する。足立・生田両氏によって比定された古代山陰道（足立・生田 2002）がここを通ることもあり、駅路関連地名の可能性もある。この他、当地に存在したとされる莊園「池寺莊」の遺称地名と思われる字名「池寺」が、城山より北の法興寺村にみえる。

なお、地区名称とした調査直前の字名と、第6図に示した旧字名とは若干異なるものがあり、注意を要する（第5表）。ちなみに、激しい湧水のために調査の困難であった岡ノ森地区の旧字名は「清水ヶ尻」であった。

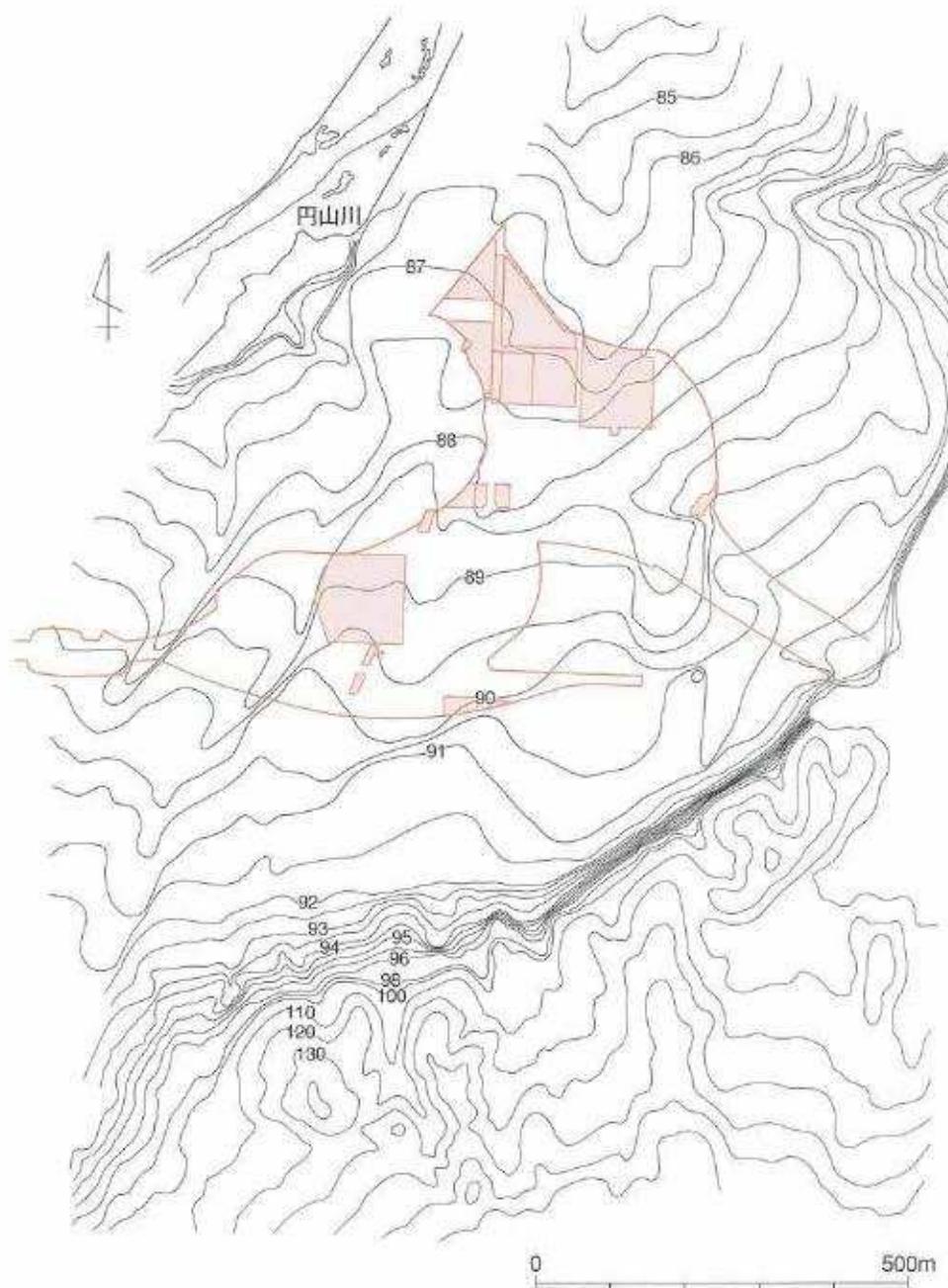
第5表 調査区の字名

地区名	調査時の地区名	調査時の字名	ほ場整備前の旧字名
伊豫田	伊豫田	加都字伊豫田・柏原	加都村字恵林寺
焼御堂	焼御堂	加都字焼御堂	加都村字焼御堂
岡ノ森	岡ノ森	加都字岡ノ森	加都村字焼御堂・清水ヶ尻
桜		加都字桜・中野	加都村字サクラ・大田・杉ノ木
桜（2）		加都字桜	加都村字サクラ・大田
山内南	山内南	加都字山内・新水	加都村字弓田・モウズ・山内・大田
新水北A		加都字新水	加都村字弓田
山内北A		加都字山内	加都村字山内・弓田
宮ヶ田Ⅰ	宮ヶ田B	加都字宮ヶ田	加都村字マセバ・宮ヶ
	山内北B	加都字山内	加都村字弓田
	山内北C	加都字山内	加都村字山内
宮ヶ田Ⅱ	宮ヶ田A	加都字宮ヶ田 市御堂字ワタシ	加都村字マセバ・宮ヶ田、市御堂村字村上
	宮ヶ田D	加都字宮ヶ田	加都村字宮ヶ田・大貝、市御堂村字村上
宮ヶ田Ⅲ	宮ヶ田D 2	加都字宮ヶ田	加都村字宮ヶ田
	宮ヶ田C	加都字宮ヶ田・新水	加都村字宮ヶ田・大貝・弓田・上新水、市御堂村字村上
新水北	新水北B	加都字新水	加都村字大貝・上新水・恵林寺

2. 微地形の復元

圃場整備前の土地区画及び50cm等高線図からの予察として、桜地区に西接する場所に、南西から北東方向にのびる完新世段丘崖を明瞭に指摘することができる。この段丘崖は、桜地区の北約100mで向きを北北西方向に変えている。今回の調査区はすべてこの段丘崖より高い側、すなわち完新世段丘上に位置することが分かる。

しかしながら、この段丘上にはかなりの微起伏が存在するようで、伊豫田、焼御堂、岡ノ森、桜、宮ヶ田Ⅰ・Ⅱの各地区は、微高地に該当するとみられ、宮ヶ田Ⅲ、新水北、山内南の各地区は低地と想定された。なお、確認調査の結果も、概ねこの予察を裏付けるとともに、地形の形成された時期についても資料を提供した。



第7図 調査区周辺の微地形復元図



第8図 全体図（本書所収地区）

第2節 遺構

1. 伊豫田地区

(1) 概要

位置 今回の工事範囲の東端に位置する調査区で、和田山町加都字伊豫田1170, 1180, 1184, 1185にある。東方に位置する片引遺跡からのびる微高地の西側緩斜面にあたる。

基本層序 調査区周辺は微高地緩斜面に立地するが、この微高地を形成した層は砂層である。土層は上から耕作土、床土、黄色の近現代水田層、黒褐色土層、淡黄色砂層（地山）の順で堆積する。このうち、遺構は淡黄色砂層上面から検出されるため、これを遺構面と考えて調査を行った。なお、黒褐色砂層の上層からは中世・古墳時代などの土器が少量検出されている。

遺構の概要 確認調査によって中世包含層（黒褐色砂層）と流路などが発見されたことから調査を行った。流路に沿って調査を行ったため、調査区は不定形な形状となった。調査面積は598m²を測る。

(2) 弥生時代の遺構

SDY001（第9図・写真図版1）

検出状況 微高地西側の緩斜面を巡るかたちで検出された。SDY002を切る。

形状・規模 南側から北東側に流れ、調査区の北側で真北方向区に屈曲し、10mほどで北東に再度屈曲する。幅や深さはほぼ一定であるが、南側の西肩部や北端部などで一部、オーバーハング等による肩部の崩落などによって断面形状が不定形になっている。また、底についてもやや凹凸が認められ水の流下による影響が認められる。

SDY001の規模は幅2.00~3.75m、深さ0.5~0.7mの規模で、北側に向かうほど幅がやや広くなり、検出レベルは南側で標高88.4m、底部が標高87.7m、北側で標高88.3m、底部で標高88.5mと北側でやや低くなるため、地形的に南側から北側に向かって下がり、流路もこの地形に沿って流れ下っていたと考えられる。流路の埋土は黒褐色土である。

流路南端の東肩から比較的多く土器が出土している状況から、東方のさほど遠くない場所に集落跡が存在する可能性がある。SDY001は基本的には自然流路と考えられるが、深さや幅などの規模が比較的整っている印象が強いため、人為的な管理が行われた可能性が高い。流路の末端には耕作地などの存在した可能性も残される。また、調査区北側ではSDY001から分岐して西側に流れる流路の一部も検出した。

出土遺物 埋土の下層を中心に、弥生時代後期末を主体とした土器が出土した。他に弥生前期、中期後半、古墳時代前期の土器、石庖丁等の石器もわずかに含まれる。

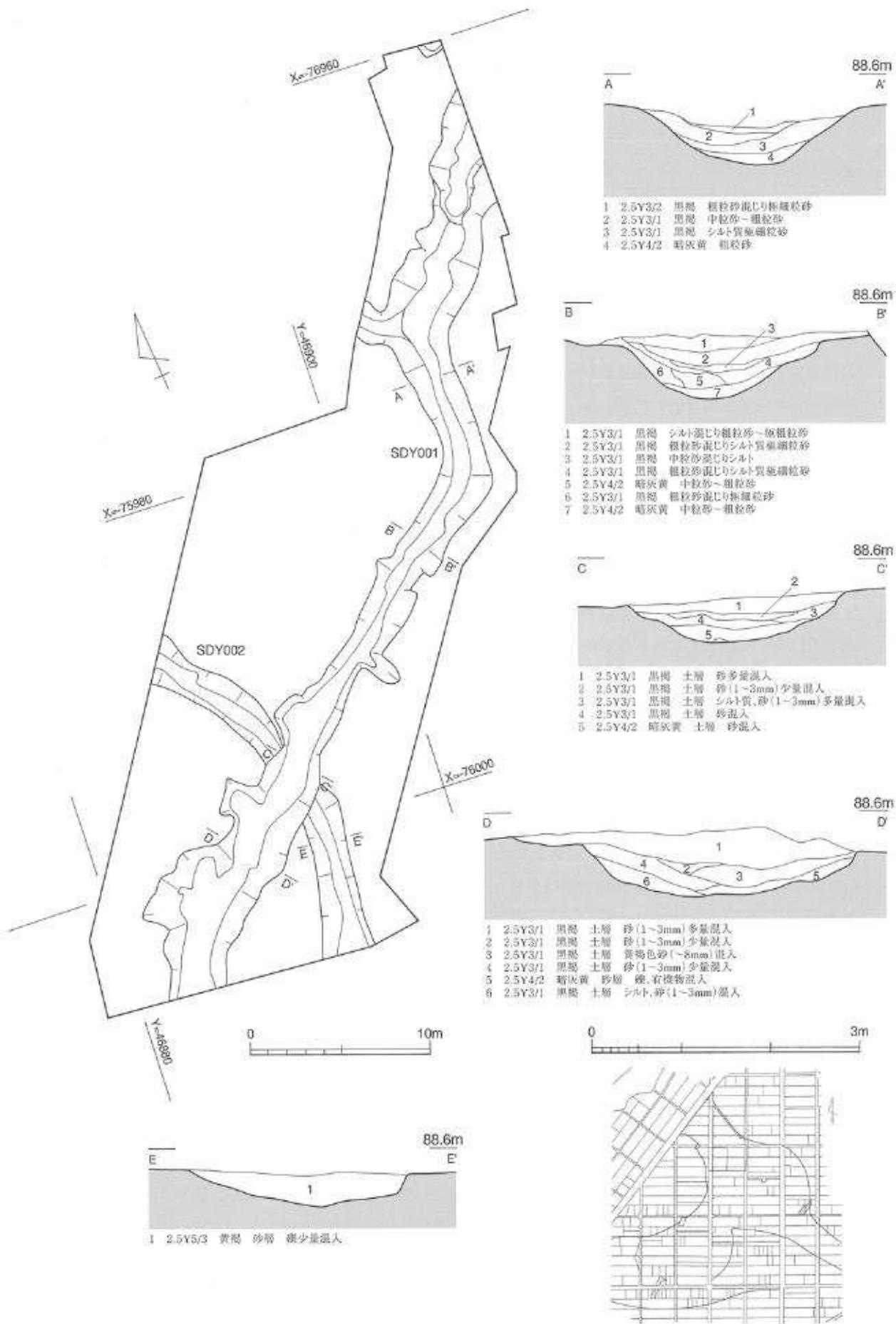
SDY002（第9図・写真図版1）

検出状況 SDY001に切られるかたちで検出された。

形状・規模 幅2.0~2.1m、深さ0.4~0.5mの規模をもち、北側に向かうほど幅がやや広くなり、検出レベルは東側で標高88.5m、底部が標高88.0m、西側で標高88.3m、底部が標高87.9mで西側に向かって流下している。流路の埋土は黒褐色土である。

(3) 小結

微高地の西側緩斜面に形成された流路を検出した。この流路はほぼ一定の規模で流れ、人為的な管理の痕跡が窺えるため、集落跡に近接した弥生時代後期末頃の灌漑施設の可能性がある。



第9図 伊豫田地区全体図・造構図

2. 焼御堂地区

(1) 概要

焼御堂地区は、今回調査を実施した加都遺跡の南端に立地し、後述する岡ノ森地区とは道路を挟んで東接する地点に位置している。現在の地番では加都字焼御堂879-2にあたる。調査区は東西に長い三角形を呈し、調査面積は199m²である。調査地の標高は約89.9mを測る。

調査区の基本層序は、下層から順に、円山川が形成した旧中州を構成する疊層、黒褐色シルト（細粒砂）層、耕土層となっており、遺構は耕土直下より検出された。これは、焼御堂地区周辺も圃場整備が行われた際に、遺構面および遺物包含層の大半が削平されたためと考えられる。なお、調査中、耕土下層および遺構検出面から出土した遺物は、包含層として遺物の取り上げを行った。

遺構は、調査区のはば中央付近から柱穴27個が検出された。柱穴は直径約20cm～25cmを測るものと直径約30～50cmを測るものとに分かれ、いずれも深さ約15～30cmを測る。前者はほぼ東西方向に伸びる柵列と考えられるが、後者の柱穴から建物跡は復元されなかった。

遺物は柱穴からは出土しなかったが、包含層より弥生時代および古墳時代の土器が出土し、縄文土器も1点出土している。

(2) 小結

調査地点は当初、南から続く微高地の縁辺部にあたると考えられていたが、調査の結果、円山川が形成した旧中州の段丘上であることがわかった。検出された遺構は、柱穴のみであり、調査範囲が狭いため建物跡は復元できなかったが、弥生時代後期前半、終末期および古墳時代前・中期の土器が出土しており、当該期の集落跡の一部であったと考えられる。

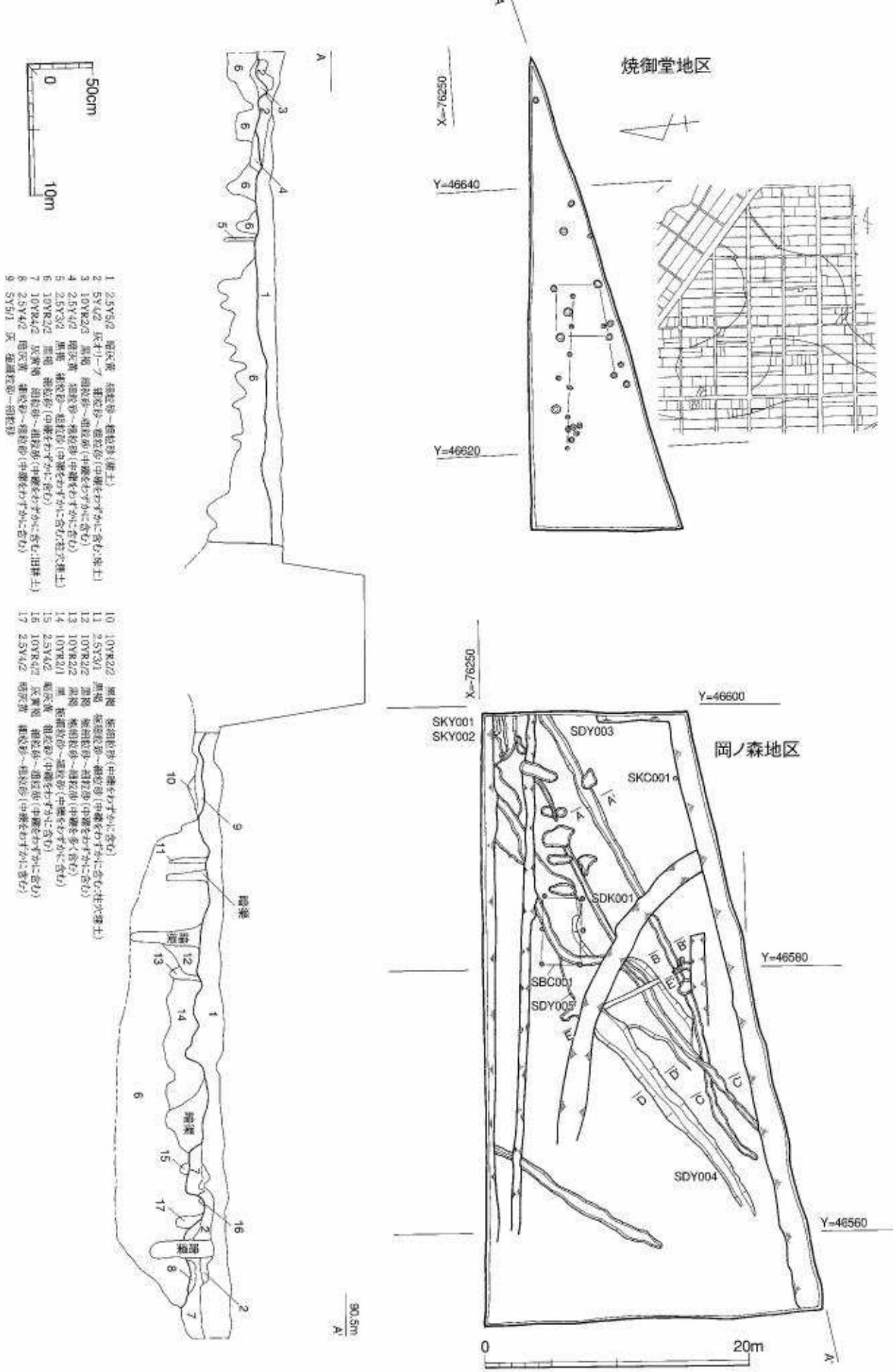
3. 岡ノ森地区

(1) 概要

岡ノ森地区は、焼御堂地区と道路を挟んで西接する地点に位置し、現在の地番では加都字岡ノ森603-3-1にあたる。調査区は東西に長い台形状を呈し、調査面積は891m²である。調査地の標高は約89.5mを測る。

調査区の基本層序は、焼御堂地区と同様、下層から順に、円山川が形成した旧中州を構成する疊層、黒褐色シルト（細粒砂）層、耕土層となっているが、調査区の西側では黒褐色シルト（細粒砂）層の上方に圃場整備前の耕土層が残っていた。遺構は耕土直下より検出されたが、耕土下層および遺構検出面から出土した遺物については、包含層として取り上げを行った。

調査では、弥生時代および古墳時代の遺構が検出された他、中世の遺構も確認された。弥生時代の遺構は土坑2基と溝3条が検出され、古墳時代の遺構は二股に分かれる溝1条が検出された。中世の遺構は、掘立柱建物跡1棟と土坑1基が確認された。岡ノ森地区の遺構検出面は、焼御堂地区とは約40cmの高低差が認められるが、これは、地形的に西側に緩やかに傾斜しているためであり、検出された溝は東から西へと流れていたものと考えられる。また、調査区内には、東西方向あるいは南東から北西方向の暗渠排水が3条確認された。



第10図 焼御堂地区・岡ノ森地区全体図・土層図

(2) 弥生時代の遺構

SKY001（第10図、写真図版2）

調査区の北東隅よりその一部が検出されたが、調査区外の東側および北側に広がっていくため、大きさ等は不明である。

弥生時代後期前半の土器が出土している。

SKY002（第10図、写真図版2）

調査区の北東、SKY001に西接して検出された。東西約20cmを測り、円形を呈するものと考えられるが、SKY001同様、調査区外北側に広がっていくため、詳細は不明である。

弥生時代後期末から古墳時代前期の土器が出土している。

SDY003（図版1・写真図版3）

調査区の東端中央から南西隅に流れる幅約50cm～1mを測る溝である。溝の一部は、古墳時代の溝（SDK001）や後世の土坑あるいは暗渠排水によって切り込まれており、また、西端は周辺の削平によって立ち上がりがなくなっている。このため、確認された溝の長さは約37mを測る。溝は深いところで約26cmを測り、最下層にはオリーブ黒色シルト層の堆積が確認された。

弥生時代中期初頭の土器が出土している。

SDY004（図版1・写真図版3）

調査区のほぼ中央を横切る暗渠排水以南より検出された幅約1.1m～2.3mを測る溝である。溝の南端はSDY003と同様、立ち上がりはなくなっており、確認された溝の長さは約19mを測る。溝は深いところで約23cmを測り、2層に堆積している。

実測できる遺物は出土しなかったが、遺構の切り合い関係から後述するSDY005より新しいものと考えられる。

SDY005（図版1）

調査区の北東から南西方向に流れる溝であるが、先述したSDY004や古墳時代の溝（SDK001）あるいは暗渠排水などによって溝の肩部が広い範囲にわたって削平されている。溝は幅約2m～5mを測り、溝の南端は立ち上がりがなくなっており、確認された長さは約24mである。

弥生時代中期後半の土器が出土している。

(3) 古墳時代の遺構

SDK001（図版1）

調査区の北東から南東方向に流れる2条の溝は、暗渠排水以南では1本に合流し、調査区外へと続いている。合流付近は、暗渠排水によって搅乱されており、詳細は不明である。溝は幅約40cm～80cmを測り、長さ約34mが確認されている。

須恵器の横瓶が出土している。

(4) 中世の遺構

SBC001 (図版1・写真図版3)

調査区中央北側より桁行（東西）2間×梁行（南北）1間の掘立柱建物跡1棟が検出された。桁行方向約5.1m、梁行方向約2.9mを測り、床面積は約14.8m²である。N85°Wに棟軸の方向をとり、桁行の柱穴間の心々距離は約2.6mである。柱穴は直径約30cm～40cmを測り、深さは最も深いもので約40cmを測る。柱の抜き取り痕跡は明確に確認されなかった。

柱穴の掘り方より中世前半に属する土師器が出土しているが、破片のため、実測できなかった。

SKC001 (第10図、写真図版3)

調査区の南東より検出された長径約30cm、短径約20cmを測る橢円形を呈する土坑である。深さ約20cmを測り、上層の暗灰黄色土層からは遺物が出土し、下層には炭化物が堆積していた。

平安時代後期の須恵器が出土している。・

(5) 小結

岡ノ森地区は、東に隣接する焼御堂地区と同様、南から続く微高地の縁辺部にあたると考えられていたが、円山川が形成した旧中州の段丘上であることがわかった。確認された弥生時代の3条の溝については、出土遺物あるいは遺構の切り合い関係などから、SDY003が中期初頭と最も古く、次いで中期後半のSDY005、さらにSDY004と変遷していくものと考えられる。また、岡ノ森地区で検出された遺構は、弥生時代、古墳時代、中世のものであり、焼御堂地区で柱穴しか検出されなかったのに対し、土坑と溝が多く、柱穴は掘立柱建物跡を構成する6個のみであった。これは、焼御堂地区から岡ノ森地区にむけて地形が緩やかに傾斜し、さらに約40cmの高低差があることから、柱穴（建物跡）が広がる焼御堂地区は旧中州の段丘上に立地し、北東から南西方向に複数の溝が検出された岡ノ森地区は、段丘上から低地に下がっていく縁辺部に立地していることによるものと考えられる。

4. 桜地区

(1) 概要

位置 桜地区は、現在の地番にいう加都字桜675~679、字中野481, 482, 484, 485にあたる。

地形的には、円山川が形成した扇状地上に位置しており、これをさらに細かくみれば、約150cmの比高差をもつ段丘崖をはさんで、調査区の大半を占める東側の完新世段丘上と、西側の段丘下の低地とに分かれる。段丘上は南東隅が最も高く、南西から北東に流れる円山川に向かって低くなる傾斜をもつ。

基本層序 旧中州にあたる段丘上の基本層序は、下から順に、中州を構成する礫、黄褐色砂質シルト、黒褐色砂質シルト、圃場整備前の床土、圃場整備前の耕土、盛り土、圃場整備後の床土、圃場整備後の耕土となっている。なお、黒褐色砂質シルトは、その下層の黄褐色砂質シルトの土壤化層（主に草本類の腐植によると思われる）である。

第1節で述べたように、桜地区は、昭和43年の圃場整備の際に、広い範囲にわたって大きく削平されていた。このため、当地区では黒褐色砂質シルト上面でほとんどの遺構が検出されたが、遺構の本来の切り込み面は残存していなかった。遺構面を覆う土壤層（いわゆる遺物包含層）もほとんどなかった。

段丘下の低地には、ある程度段丘崖が埋没した段階で、新旧2本の流路が流れている。両者とも細粒の堆積物が認められる。

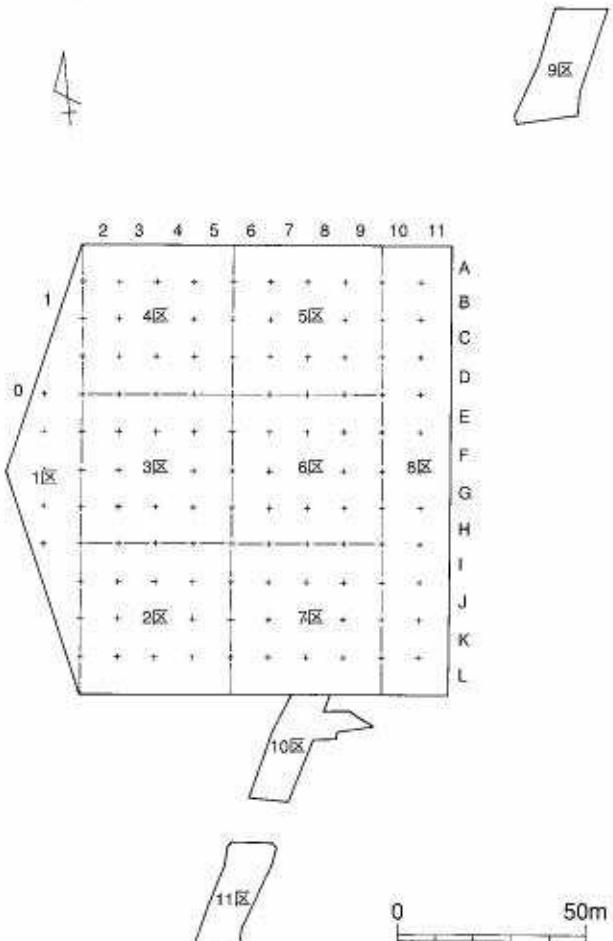
遺構の概要 段丘上では、律令期の道路遺構と平安～鎌倉時代の居住域が、段丘下では、居住域と同時期の流路が検出された。

律令期の道路遺構は、側溝を両側にもち、条里地割りとは斜交する。調査区が断続的なため約57mの空白があるが、桜地区内の252mにわたって直線的に確認することができた。また東方へ道路が分岐することも確認された。

平安～鎌倉時代の遺構は、柱穴約2,000個、土坑、土壙墓、溝等である。柱穴からは、条里地割りに沿った43棟の掘立柱建物が復元された。

段丘崖がある程度埋没した段階で、崖際を新旧2時期にわたる流路が流れている。埋土からは、漆椀などの木器を含む平安～鎌倉時代の遺物が出土した。

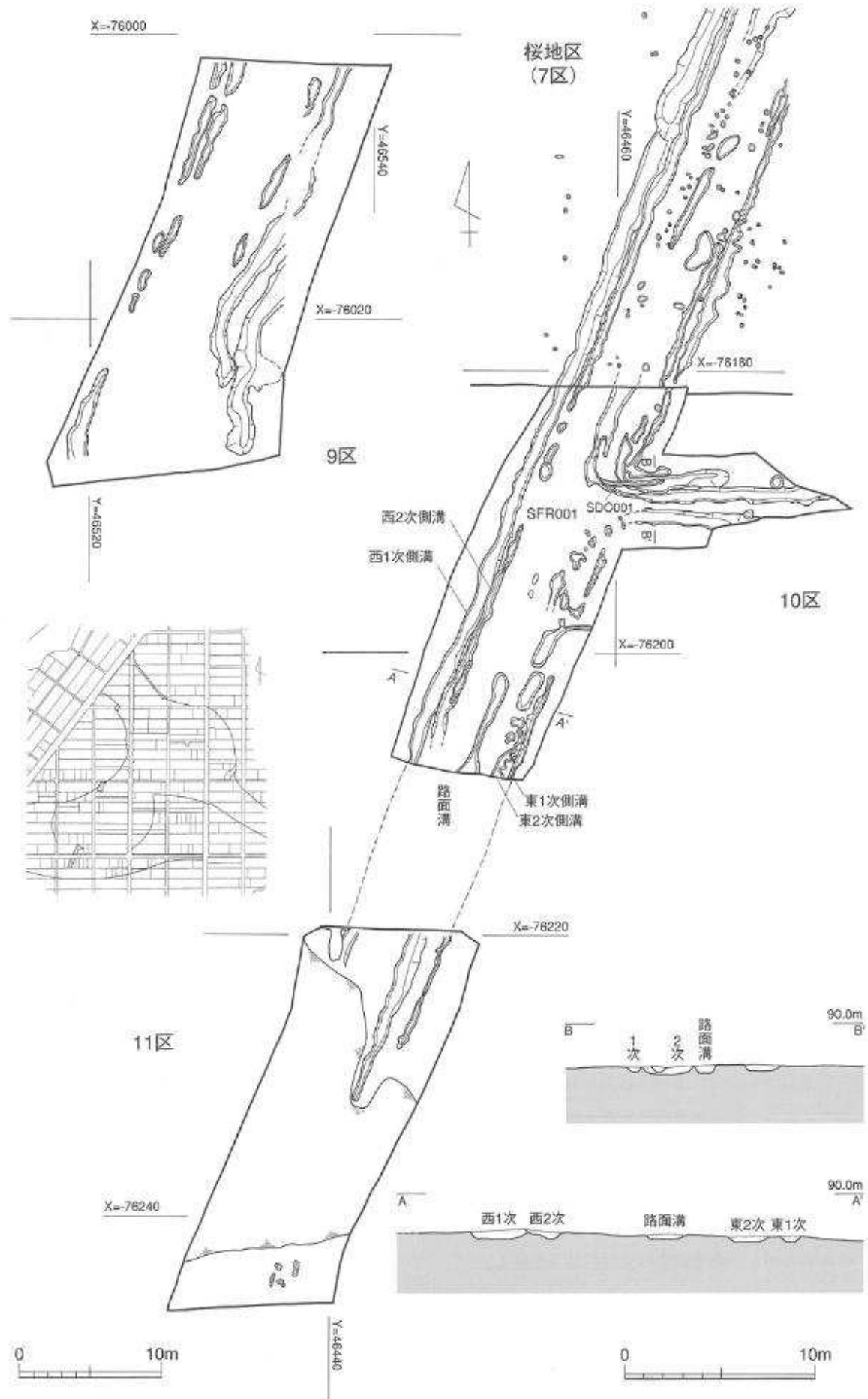
地区割り 調査の工程管理のために、調査区を第11図のように1～8区に分割した。さらに遺物の取り上げや、細かい位置の限定を行うために、10m四方の地区割りを使用した。東西線にアルファベットを、南北線に数字を用い、その交点を杭の名称とする。また、その杭を北西の隅とする10m四方の区画を杭と同一の名称で呼ぶこととした。



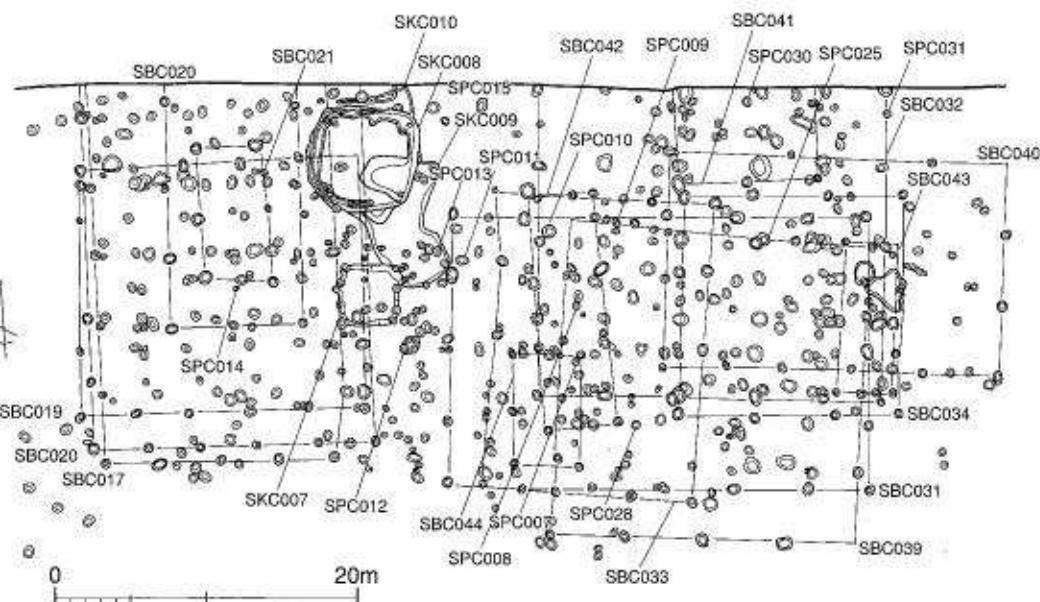
第11図 桜地区の地区割り図



第12図 桜地区全体図・土層図（1～8区）



第13図 桜地区全体図（9~11区）



第14図 桜地区全体図（遺構集中部）

(2) 律令期の遺構

SFR001（第13図、図版2・3、巻頭写真4、写真図版5・6・7）

検出状況 桜地区南東隅（6～8区）で検出され、この延長部分の状況を確認するために、9・10・11区を追加調査した。

桜地区的多くの遺構は、耕土層直下の、削平を受けた黒褐色砂質シルト上面で検出されたもので、遺構埋土から遺物の出土がない場合は、時期を限定することができない。SFR001の大半は、他の遺構と同様、耕土層直下で検出されたが、8区における西側溝については、SBC036・SBC037・SBC038の切り込み面である灰色シルト層の下面である黒褐色砂質シルト上面で検出された。直接の遺構の切り合い関係はないものの、SFR001が11世紀頃に営まれたこれらの掘立柱建物よりも層位的に古いことが確かめられた。

道路の規模 路面の東西両側には切り合い関係にある各2本の側溝が掘削されているが、それぞれ内側に位置する側溝の方がより新しいため、路面幅の縮小が認められることになる。

溝の内側肩部間の距離で路面幅を示せば、古い段階（以下第1次道路と呼ぶ）で、6.0～6.9m、新しい段階（以下第2次道路と呼ぶ）では4.2～5.4mを測る。これを側溝の心々距離で表示すれば、第1次道路は7.5～8.4m、第2次道路は5.2～5.8mの道路幅となる。

長さについては、6～8区及び10区の連続した調査区で153mを測る。この南方の11区で調査をしており、北方では9区及び宮ヶ田I地区、宮ヶ田III地区でその延長を確認している。調査範囲外である空白地帯（10・11区間、8・9区間、9区と宮ヶ田I地区間）249mがあるが、調査で検出した南北両端間の距離は594mを測る。

路面の標高は南端（7区）で89.25m、北端（8区）で88.50mであり、比高差は75cm、約0.5°の傾斜をもちながら、南北両側の調査区外へと続く。

道路の方向 側溝は、桜地区内では新旧両段階とも直線的に伸び、その方向は当地に残る条里地割りのそれ（N-1°26' E）に斜交しており、N-23°33' Eを示す。調査区外でも同様に直線的な状況であると仮定してこれを延長すれば、南方は加都集落の南に位置する金梨山の西裾を、北方は平野の北側を塞ぐように位置する市御堂の城山の西裾にあたるため、約2kmの距離をもつこの2つの地形の突出点が、

道路の設置に際しての位置の基準になっていることが推測できる。なお、南方については、現在の加都集落の中を通る道路と重なる（巻頭図版2下・第5図）ことから、位置を変えずに現在の道路に踏襲されている部分があることが確かめられた。

枝道の存在 道路の方向に関連して特筆すべきことがある。10区北端から約6m南方付近でSFR001が東方に屈曲することが確かめられた。東1次側溝、東2次側溝、路面中央の各溝が鋭角に屈曲し、最も残りのよい路面溝を参考にすれば15m程度東方にのびている。これより東方については3号排水路があるため、確かめることができず、その後に行われた東方での確認調査においても、この延長部分を検出することはできなかった。

この屈曲した東西方向の道路については、南側の残存状況が悪いために、幅等の詳細は不明と言わざるをえないが、SFR001と一部で同一側溝を共有するため、SFR001築造後に付加されたものではなく、道路を宝珠崎方面に分岐させることができ、築造当初からの計画として施工されたことを示している。

また、屈曲部分における路面溝の上層には、広範囲に硬く締まった状態で小礫が広がっており、その一部が東西道路の2次側溝を覆う形で広がっていた。このことから、第2次道路の側溝の埋没後、側溝を伴わないものの、路面に小礫を敷いた程度の第3次道路というべき東西道路が機能していた可能性も考えられる。

側溝の状況 この道路遺構は、他の遺構と同様、ほとんどの場所において削平を受けており、東方がより低く削られている。このため、路面自体も東に低くなる傾斜をもつ。東側溝が細く断続的な形状を示すのも、この削平の影響によるものである。また側溝の底面は凹凸がみられるため、よどみなく水を流す機能は持っていないかったようである。

側溝の残存規模を示せば以下のようになる。西第1次側溝は、幅40~200cm、深さ9~30cmであり、東第1次側溝は、幅30~230cm、深さ4~22cmを測る。西第2次側溝は、幅70~160cm、深さ19~27cmであり、東第2次側溝は、幅80~140cm、深さ10~14cmを測る。断面形態はいずれも皿状を呈するが、第1次道路の北半については、路面に近い側がより低くなる部分もある。

また側溝埋土には、人為的な埋積状況を示すブロック等は肉眼では観察できなかった。ただし、第2次側溝に比べ、第1次側溝からの花粉抽出量が際だって少なかったため、花粉抽出量が溝の機能していた時間の長さに比例するものと捉えれば、第1次側溝の掘削後、ほどなく埋められ2次側溝が掘削された可能性も考えられる（第4章第3節）。

路面の状況 路面には、盛土の痕跡は認められなかったが、P10区において路面に直交する浅い溝状の落ちの連続する部分が認められた。東第2次側溝に切られるため、道路に付属する施設であれば、第1次道路に伴うものと判断できる。この遺構はいわゆる「波板状凹凸面」（早川 1991）に形態的に類似している。この凹凸面については、物資運搬のコロに伴う枕木の圧痕と捉える説（早川 1991）や、雨水対策のために施された路床であるという説（飯田 1992）等がある。当遺構の埋土は、周囲にみられない細粒砂～粗粒砂であり、比較的低湿な場所に位置することを考えれば、排水を目的とした整地の可能性がある。

また、路面中央には南半部約50mにわたって、幅140~200cm、深さ10cm程度のいびつな形状の溝が、側溝と平行する形で検出された。側溝と切り合うことなく路面のほぼ中央に位置する点、底面に凹凸が顕著な点、埋土の下層に極細砂、上層には周辺にみられない細砂混じりの大～小礫が堆積している状況から判断して、この溝は、道路の使用に伴って生じた溜まりであり、砂礫はこれを埋めるために用いられ

たものと考えたい。

出土遺物 道路という遺構の性格を反映して、また周囲に同時期の遺構がないために、出土遺物は極めて少ないが、律令期の遺物として、西1次側溝から400が、西2次側溝から401・402が、東2次側溝から399が出土している。このほか、西1次側溝（562）、東1次側溝（565）、東2次側溝（563）、路面溝（564・566）から中世の遺物が出土している。

(3) 中世の遺構

SAC001

検出状況 K10・L10区で検出された。他の遺構との切り合いはない。SBC022の東側で検出された。

形状・規模 5個の柱穴で構成され、南北方向に延長10.0mにわたり直線を呈する。近接するSBC022とは約2.5~3.0mの間隔があり、これと平行しない。柱間はほぼ等間隔であり、2.3~2.7mを測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は18~30cmであり、柱痕は認められなかった。深さは6~18cmを測る。

SAC002

検出状況 B7・B8・B9・B10区にわたり検出された。他の遺構との切り合いはない。SBC035・SBC037の南側で検出された。

形状・規模 32個の柱穴で構成され、東西方向に延長23.5mにわたり直線を呈する。SBC035・SBC037とは約5.0~6.0mの間隔があり、これと平行しない。数箇所で幅広くなっているが、その他の柱間はほぼ等間隔であり、0.6mと狭い。

柱穴 柱穴の掘り方は梢円形であり、その長軸の長さは50~100cmであり、柱痕は認められなかった。深さは12~30cmを測る。

SBC002（図版4、写真図版9）

検出状況 L2・L3区で検出された。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 N3°42' Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が5.50m（約18尺）、梁行方向が4.50~4.80m（約15尺）を測る。面積は26.40m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.30m（約7.6尺）、桁行方向は不均等で、北側で平均3.40m（約11.2尺）、南側で平均2.30m（約7.6尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は26~32cmであり、柱痕は認められなかった。深さは11~32cmを測る。P137には根石があり、その上面の標高は89.037mである。

SBC003（図版5）

検出状況 K3・K4区で検出された。他の遺構との切り合いはないが、北側の梁行柱筋は、SBC005の南側桁行柱筋の延長線上にあるため、これと同一時期の可能性が高い。

形状・規模 N2°23' Wに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が7.50~8.00m（約26尺）、梁行方向が4.70~4.75m（約15.5尺）を測る。面積は38.00m²である。

梁行方向の柱間は平均2.35m（約7.8尺）、桁行方向は平均2.60m（約8.5尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は24~33cmであり、柱痕は認められなかった。深さは11~50cmを測る。P32・P15・P924には根石があり、その上面の標高は88.911~88.989mである。

出土遺物　　P414からは423が、P928からは424が出土した。

SBC004（図版4）

検出状況　　K2・K3・J2・J3区で検出された。SBC005に重複する。

形状・規模　　N4°43'Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が7.35m（約24尺）、梁行方向が5.55~5.75m（約19尺）を測る。面積は42.26m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.86m（約9.4尺）、桁行方向は平均2.46m（約8.1尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は24~35cmである。P156で直径15cmの柱痕が認められた。深さは24~50cmを測る。P85の柱抜き取り跡からは長さ32cmの立石が検出された。

出土遺物　　P95からは鉄滓が出土した。

SBC005（図版6）

検出状況　　K2・K3・J2・J3区で検出された。SBC004と重複する。南側の桁行柱筋は、SBC003の北側梁行柱筋の延長線上にあるため、これと同一時期の可能性が高い。

形状・規模　　N4°58'Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行方向が5.10~5.15m（約17尺）、梁行方向が2.35m（約7.8尺）を測る。面積は12.10m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.31m（約7.6尺）、桁行方向は平均2.56m（約8.4尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~35cmである。P91で直径13cmの柱痕が認められた。深さは21~70cmを測る。

SBC006（図版6、写真図版9）

検出状況　　I3・I4区で検出された。他の遺構との切り合いはないが、梁行きの柱筋がSBC007の梁行柱筋の延長線上にあるため、これと同一時期の可能性が高い。

形状・規模　　N2°42'Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が7.25~7.50m（約24尺）、梁行方向が4.85~5.20m（約16尺）を測る。面積は39.00m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.54m（約8.4尺）、桁行方向は平均2.44m（約8.1尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は21~30cmである。柱痕は認められなかった。深さは12~34cmを測る。P43には根石があり、その上面の標高は88.789mである。

出土遺物　　P129から426が出土した。

SBC007（図版7、写真図版9）

検出状況　　H2・H3・I2・I3・J2・J3区で検出された。他の遺構との切り合いはないが、梁行きの柱筋がSBC005の梁行柱筋の延長線上にあるため、これと同一時期の可能性が高い。

形状・規模　　N0°59'Eに棟軸の方向をとる桁行5間、梁行4間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が13.90~14.13m（約46尺）、梁行方向が9.27~9.38m（約31尺）を測る。面積は132.54m²であ

る。

梁行方向の柱間は最も南の柱間が3.40mと他より広いが、それ以外はほぼ均等で平均2.68m（約8.9尺）、桁行方向はほぼ均等で平均2.36m（約7.8尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は26~52cmである。深さは14~49cmを測る。P174から直径14cmの柱痕が確認できた。P133・P310・P315・P1691には根石があり、その上面の標高は88.659~88.854mである。P164の埋土から拳大の円礫が4個、P173からは8個出土した。

出土遺物　　P134から170が、P174から168・169が出土した。

SBC008（図版8）

検出状況　　H4・H5区で検出された。他の遺構との切り合いはないが、梁行きの柱筋がSBC009の梁行き柱筋の延長線上にあるため、これと同一時期の可能性が高い。桁行きの長さが異なり、SBC009とは3m以上離れているため、これらを別の建物と捉えた。

形状・規模　　N3°56' Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行方向が4.70~4.95m（約16尺）、梁行方向が2.75~2.80m（約9尺）を測る。面積は13.86m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.83m（約9.4尺）、桁行方向は平均2.42m（約8.0尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は30~35cmである。柱痕は認められなかった。深さは28~42cmを測る。P228には根石があり、その上面の標高は88.915mである。

SBC009（図版8）

検出状況　　H4・H5区で検出された。他の遺構との切り合いはないが、梁行きの柱筋がSBC008の梁行き柱筋の延長線上にあるため、これと同一時期の可能性が高い。桁行きの長さが異なり、SBC008とは3m以上離れているため、これらを別の建物と捉えた。

形状・規模　　N0°53' Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行方向が4.05~4.15m（約13.5尺）、梁行方向が2.25~2.35m（約7.5尺）を測る。面積は9.75m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.30m（約7.6尺）、桁行方向は平均2.31m（約7.6尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は25~45cmである。柱痕は認められなかった。深さは27~45cmを測る。P234には根石があり、その上面の標高は88.603mである。

出土遺物　　P231から431が出土した。

SBC010（図版9、写真図版9）

検出状況　　F3・F4・G3・G4区で検出された。他の遺構との切り合いはないが、梁行きの柱筋が西接するSBC011のそれの延長線上にあるため、これと同一時期の可能性が高い。

形状・規模　　N2°52' Eに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行4間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が10.15m（約33.5尺）、梁行方向が9.60~9.85m（約32尺）を測る。面積は99.98m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で平均2.44m（約8.05尺）、桁行方向はほぼ均等で平均2.57m（約8.5尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は24~48cmである。深さは16~62cmを測る。P289には根石があり、その上面の標高は88.903mである。

出土遺物 P246から432が、P306から433が出土した。

SBC011（図版10、写真図版9）

検出状況 G2・G3・H2・H3区で検出された。他の遺構との切り合いはないが、梁行きの柱筋がSBC010のそれの延長線上にあるため、これと同一時期の可能性が高い。

形状・規模 N4°22'Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行3間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が7.35~7.65m（約25尺）、梁行方向が6.50~6.75m（約22尺）を測る。面積は51.64m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で平均2.24m（約7.4尺）、桁行方向はほぼ均等で平均2.52m（約8.3尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は16~34cmである。深さは9~36cmを測る。P328では直径15cmの柱痕が検出された。また、P332には根石があり、その上面の標高は88.811mである。

出土遺物 P397から434が出土した。

SBC012（図版10）

検出状況 F3・G3区で検出された。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 N4°27'Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行方向が5.45~5.62m（約18尺）、梁行方向が2.15~2.18m（約7.0尺）を測る。面積は12.25m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.19m（約7.2尺）、桁行方向は平均2.76m（約9.1尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は23~30cmである。柱痕は認められなかった。深さは20~28cmを測る。

SBC013（図版11、写真図版9）

検出状況 D4・D5・E4・E5区で検出された。他の遺構との切り合いはないが、近接するSBC014とは同時併存とは考えがたい。

形状・規模 N6°58'Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行3間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が8.90~8.94m（約29.5尺）、梁行方向が6.45~6.70m（約22尺）を測る。面積は59.90m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で平均2.20m（約7.3尺）、桁行方向は最も南の柱間が約2.55m（約8.4尺）と狭く、それ以外は平均3.22m（約10.6尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~30cmである。深さは18~42cmを測る。P402・403・408では直径10cm程度の柱痕が検出された。また、P224には根石があり、その上面の標高は88.542mを測る。

SBC014（図版12、写真図版9）

検出状況 C4・C5・D4・D5区で検出された。他の遺構との切り合いはないが、近接するSBC013とは同時併存とは考えがたい。

形状・規模 N2°33'Eに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行3間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が9.15~9.34m（約30.5尺）、梁行方向が7.96~8.02m（約26.5尺）を測る。面積は74.91m²である。

梁行方向の柱間のうち中央が幅広く、平均2.92m（約9.6尺）、桁行方向はやや不均等な箇所もあるが平均値は約2.41m（約8.0尺）である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は22~40cmである。深さは6~48cmを測る。P412・413・423ではそれぞれ直径14cm、13cm、10cmの柱痕が検出された。また、P413には根石があり、その上面の標高は88.536mを測る。

出土遺物 P412から435が出土した。

SBC015（図版13）

検出状況 B3区で検出された。SBC016と重複する。

形状・規模 N1°18' Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行方向が5.58m（約18.5尺）、梁行方向が2.60~2.62m（約8.6尺）を測る。面積は14.62m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.59m（約8.5尺）、桁行方向は平均1.89m（約6.2尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は26~40cmである。柱痕は認められなかった。深さは22~40cmを測る。

SBC016（図版13）

検出状況 B3区で検出された。SBC015と重複する。

形状・規模 N0°18' Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の総柱建物である。西側柱列の中央の柱穴は検出されなかった。建物の規模は、桁行方向が4.60~4.64m（約15.2尺）、梁行方向が3.60~3.67m（約12尺）を測る。面積は17.03m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均1.88m（約6.2尺）、桁行方向は平均2.34m（約7.7尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は23~30cmである。柱痕は認められなかった。深さは10~25cmを測る。

SBC017（図版14）

検出状況 A4・B4区で検出された。SBC018~021と重複する。北端は調査区外に延びる可能性がある。また、SKC008に切られて東側柱筋の2本の柱穴を欠く。

形状・規模 N1°35' Wに棟軸の方向をとる桁行5間以上、梁行4間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が11.40~11.55m（約38尺）以上、梁行方向が7.52~7.95m（約26尺）を測る。面積は91.82m²である。

梁行方向の柱間は最も西の柱間が1.83mと他より狭いが、それ以外はほぼ均等で平均2.03m（約6.7尺）、桁行方向はほぼ均等で平均2.30m（約7.6尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~40cmである。深さは10~40cmを測る。柱痕が確認できた柱穴はない。P629・P852には根石があり、その上面の標高は88.578~88.544mである。P429・P657・P728・P740・P754・P775・P823・P839の埋土には炭片が多く含まれていた。

出土遺物 P823から437が、P763から438、P429から439が、P783から440が出土した。

SBC018 (図版15)

検出状況 A4・A5・B4・B5区で検出された。SBC017・SBC019～021と重複する。北端は調査区外に延びる可能性がある。また、SKC008に切られて東側柱筋の2本の柱穴を欠く。

形状・規模 N0°15'Eに棟軸の方向をとる桁行5間以上、梁行5間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が10.90m(約36尺)以上、梁行方向が9.20～9.31m(約30.5尺)を測る。面積は101.48m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で平均1.87m(約6.2尺)、桁行方向はほぼ均等で平均2.16m(約7.1尺)を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は22～40cmである。深さは6～42cmを測る。柱痕が確認できた柱穴はない。P623・P626・P843には根石があり、その上面の標高は88.349～88.579mである。P646・P714・P720・P723・P727・P741・P765・P825の埋土には炭片が多く含まれていた。

出土遺物 P720から441が^g、P702から442が出土した。

SBC019 (図版16)

検出状況 A4・A5・B4・B5区で検出された。SBC017・SBC018・SBC020・SBC021と重複する。北端は調査区外に延びる可能性がある。また、SKC008に切られて東側柱筋の2本の柱穴を欠く。南側の桁行柱筋は、SBC032の南側梁行柱筋の延長線上にあるため、これと同一時期の可能性が高い。

形状・規模 N0°08'Eに棟軸の方向をとる桁行4間以上、梁行5間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が9.30～9.35m(約31尺)以上、梁行方向が8.05～8.20m(約27尺)を測る。面積は76.67m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で平均2.02m(約6.7尺)、桁行方向はほぼ均等で平均2.13m(約7.0尺)を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は18～34cmである。深さは6～40cmを測る。柱痕が確認できた柱穴はないが、P521・P645・P650・P660・P713・P730・P737・P745・P749・P751・P832等多くの柱穴で根石が確認された。根石上面の標高は88.394～88.557mである。P645の埋土には炭片が多く含まれていた。

出土遺物 P771から443が^g、P766から444、P777から445が^g、P760から446・447が出土した。

SBC020 (図版17)

検出状況 A4・B4区で検出された。SBC017～019・SBC021と重複する。北端は調査区外に延びる可能性がある。

形状・規模 N1°48'Wに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が7.20～7.50m(約24尺)、梁行方向が4.35m(約14.4尺)を測る。面積は32.63m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で平均2.18m(約7.2尺)、桁行方向はほぼ均等で平均2.44m(約8.1尺)を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は18～37cmである。深さは7～28cmを測る。柱痕が確認できた柱穴はない。P743には根石があり、その上面の標高は88.590mである。P747の埋土には炭片が多く含まれていた。

出土遺物 P769から448が出土した。

SBC021 (図版17)

検出状況 A4・B4区で検出された。SBC017～SBC020と重複する。

形状・規模 N3°03'Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行方向が4.30～4.55m（約15尺）、梁行方向が1.95～2.18m（約7尺）を測る。面積は9.92m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で平均2.14m（約7.1尺）、桁行方向はほぼ均等で平均2.24m（約7.4尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20～43cmである。深さは14～22cmを測る。柱痕が確認できた柱穴はない。根石も確認されなかった。P778の埋土には炭片が多く含まれていた。

出土遺物 P767から449が出土した。

SBC022 (図版18、写真図版10)

検出状況 K9・K10・L9・L10区で検出された。SBC023と重複する。東方に平行してSAC001があるが、わずかに斜行すること、距離が遠いことから別造構と捉えた。

形状・規模 N5°31'Eに棟軸の方向をとる桁行5間、梁行4間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が11.90～12.15m（約40尺）、梁行方向が9.10～9.45m（約31尺）を測る。面積は114.82m²である。

梁行方向の柱間は、南北の各1間分がやや狭く、平均2.16m（約7.1尺）中央の2間の平均は2.47m（約8.2尺）を測る。桁行方向はほぼ均等で平均2.40m（約7.9尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は28～51cmである。深さは16～47cmを測る。柱痕、根石が確認できた柱穴はない。

出土遺物 P1318から450・451が、P1406から452、P1135から453が出土した。

SBC023 (図版19、写真図版10)

検出状況 L9・L10区で検出された。SBC022と重複する。

形状・規模 N5°28'Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が6.70～6.80m（約22尺）、梁行方向が5.80m（約19尺）を測る。面積は39.44m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で平均2.90m（約9.6尺）、桁行方向はほぼ均等で平均2.26m（約7.5尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は26～47cmである。深さは17～42cmを測る。柱痕、根石が確認できた柱穴はない。

出土遺物 P1044から454が、P1055から455、P1320から456が出土した。

SBC024 (図版20、写真図版10)

検出状況 I5・I6・J5・J6・K6区で検出された。いくつかの柱穴、土坑と重複するが、建物の南東隅に位置するSKC013については、SBC024の屋内土坑であると考えられる。

形状・規模 N0°15'Wに棟軸の方向をとる桁行6間、梁行4間の総柱建物である。建物の規模は、

桁行方向が15.70~16.10m（約53尺）、梁行方向が9.80~10.10m（約33尺）を測る。面積は162.61m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で平均2.48m（約8.2尺）、桁行方向はほぼ均等で平均2.66m（約8.8尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は17~55cmである。深さは7~53cmを測る。P8で直径16cmの柱痕が確認された。P20・P23で根石が確認できた柱穴はない。根石上面の標高は88.752~88.974mである。また、P23・P33・P1306・P1314・P1325・P1351等埋土に円礫を含むものがあった。P1355の埋土最下層には炭片が多く含まれていた。

出土遺物 P1325から457・459・460が、P1503から458が出土した。

SBC025（図版19、写真図版10）

検出状況 I8・J8区で検出された。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 N1°26'Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行方向が4.65~4.95m（約16尺）、梁行方向が3.05~3.30m（約11尺）を測る。面積は16.34m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均3.18m（約10.5尺）、桁行方向はほぼ均等で平均2.40m（約7.9尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は25~31cmであり、柱痕は認められなかった。深さは14~30cmを測る。

SBC026（図版21、写真図版10・12）

検出状況 H7・H8・I7・I8区で検出された。SBC027と重複する。建物に平行する形で、SXC001が北方に位置している。

形状・規模 N2°57'Eに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行4間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が11.00~11.20m（約37尺）、梁行方向が9.05~9.55m（約32尺）を測る。面積は106.96m²である。

梁行方向の柱間の平均は2.31m（約7.6尺）、桁行方向はやや不均等な箇所もあるが平均値は約2.78m（約9.2尺）である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は23~43cmである。深さは3~55cmを測る。柱痕が検出された柱穴はない。P1380には根石があり、その上面の標高は89.051mを測る。なお、P1381・1418・1546・1626の掘形内から礫が出土した。また、P1549の底から直径1cm程度の焼土塊が数個出土した。

出土遺物 P1532から461が、P1613から462が、P1636から463が出土した。

SBC027（図版22、写真図版10）

検出状況 H7・H8・I8区で検出された。SBC026と重複する。

形状・規模 N2°50'Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が6.25~6.35m（約21尺）、梁行方向が5.10~5.45m（約18尺）を測る。面積は34.61m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.64m（約8.7尺）、桁行方向は平均3.15m（約10.4尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は18~30cmである。深さは10~25cmを測る。柱痕は認め

られなかった。なお、P1622の掘形内から直径10cm程度の円碟が出土した。

出土遺物 P1547から464が出土した。

SBC028（図版23、写真図版11）

検出状況 D8・D9・E8・E9区で検出された。SBC029と重複する。

形状・規模 N^o 26' Eに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行4間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が10.85～11.05m（約36尺）、梁行方向が9.55～9.85m（約33尺）を測る。面積は108.84m²である。

梁行方向の柱間の平均は2.43m（約8.0尺）、桁行方向はやや不均等な箇所もあるが平均値は約2.74m（約9.0尺）である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は26～40cmである。深さは16～44cmを測る。P2232で直径12cmの柱痕が確認された。P1807・1838・2228には根石があり、その上面の標高はそれぞれ88.412m、88.601m、88.415mを測る。なお、P1792・1797・1813・1817・1821・1832・1834・1835の掘形内から碟が出土した。

出土遺物 P1834から465が、P1832から466が出土した。

SBC029（図版22、写真図版11）

検出状況 D7・D8・E7・E8区で検出された。SBC028と重複する。

形状・規模 N^o 25' Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が6.00～6.15m（約20尺）、梁行方向が4.20～4.50m（約15尺）を測る。面積は27.68m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.18m（約7.2尺）、桁行方向は平均3.03m（約10尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は29～38cmである。深さは19～47cmを測る。P2227で直径約9cmの柱痕が認められた。なお、P2182は根石をもち、その上面の標高は88.200mである。

SBC030（図版24）

検出状況 C8・D8区で検出された。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 N^o 41' Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が4.85～5.15m（約17尺）、梁行方向が4.80～4.95m（約16尺）を測る。面積は25.49m²である。

梁行方向の柱間はほぼ均等で、平均2.43m（約8.0尺）、桁行方向は平均2.52m（約8.3尺）を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は18～32cmである。深さは7～27cmを測る。柱痕・根石をもつものは認められなかった。

出土遺物 P2218から467が出土した。

SBC031（図版25、写真図版11）

検出状況 A5・A6・B5・B6区で検出された。SBC032・33・34・39・40・42・43・44と重複する。

南から2筋目の柱列がSBC035の南端柱列の延長線上にある。

形状・規模 N^o 32' Eに棟軸の方向をとる桁行6間、梁行4間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が13.60～13.95m（約46尺）、梁行方向が8.70～8.95m（約30尺）を測る。面積は125.12m²である。

る。

梁行方向の柱間の平均は南北両側が狭く2.10m（約6.9尺）、中央の2間の平均は2.32m（約7.7尺）を測る。桁行方向は最も東の柱間が狭く2.01m（約6.6尺）、その他の平均値は2.35m（約7.8尺）である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は27~38cmである。深さは17~43cmを測る。P1938で直径13cmの柱痕が確認された。根石をもつ柱が多く、P525・528・531・547・583・588・621・1910・1986・2194・2202で確認された。根石上面の標高は88.343m~88.563mと約20cmの差をもつ。なお、P583・891・1986・1997の掘形内から礫が出土した。

出土遺物 P588から468が^g、P531から469が^g、P668から470が^g、P2203から471が^g、P606から472・473が出土した。

SBC032（図版26、写真図版11）

検出状況 A5・A6・B5・B6区で検出された。SBC031・33・39・40・41・43と重複する。SBC019の南側の柱列が同一線上にある。

形状・規模 N1°8' Eに棟軸の方向をとる桁行4間以上、梁行5間の総柱建物である。北端は北側調査区外に伸びている。建物の規模は、桁行方向が11.20~11.50m（約38尺）、梁行方向が10.00~10.25m（約34尺）を測る。面積は117.88m²である。

梁行方向の柱間はやや不揃いだが、平均値は2.28m（約7.5尺）、桁行方向の平均値は2.53m（約8.3尺）である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~46cmである。深さは16~43cmを測る。柱痕が確認された柱穴はない。P1915で根石が確認された。根石上面の標高は88.599mである。なお、P1878・1898の掘形内から礫が出土した。

出土遺物 P1898から474が^g、P2014から475が^g、P613から476が^g、P1892から477が^g、P2199から479が^g、P599から480が出土した。

SBC033（図版27、写真図版11）

検出状況 A5・B5区で検出された。SBC031・32・33・34・39・40・42・44と重複する。

形状・規模 N4°56' Eに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行3間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が9.65~9.90m（約33尺）、梁行方向が6.70~7.30m（約24尺）を測る。面積は72.27m²である。

梁行方向の柱間はやや不揃いだが、平均値は2.33m（約7.7尺）、桁行方向の平均値は2.44m（約8.1尺）である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は21~44cmである。深さは18~36cmを測る。柱痕が確認された柱穴はない。P862・1908の掘形内から礫が出土した。

出土遺物 P574から481と土鍾C2が^g、P509から482が出土した。

SBC034（図版24、写真図版11）

検出状況 A6・B6区で検出された。SBC031・32・33・39・40と重複する。

形状・規模 N1°47' Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行3間の総柱建物である。建物の規模は、桁

行方向が7.20~7.40m（約24尺）、梁行方向が7.05~7.35m（約24尺）を測る。面積は54.39m²である。

梁行方向の柱間はやや不揃いだが、平均値は2.43m（約8.0尺）、桁行方向の平均値は2.39m（約7.9尺）である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は22~47cmである。深さは8~42cmを測る。柱痕が確認された柱穴はない。P1882・2188の掘形内から礫が出土した。

出土遺物　P1882から483が、P1912から土錐C1が出土した。

SBC035（図版28、写真図版11）

検出状況　A7・B7区で検出された。他の遺構との切り合いはないが、南端柱列が、SBC035の南から2筋目の柱列の延長線上にある。

形状・規模　N0°14'Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行3間の縦柱建物である。建物の規模は、桁行方向が7.70~7.80m（約26尺）、梁行方向が6.95~7.20m（約24尺）を測る。面積は56.16m²である。

梁行方向の柱間平均値は2.38m（約7.9尺）、桁行方向の平均値は2.65m（約8.7尺）である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~33cmである。深さは17~52cmを測る。P2089で直径15cmの柱痕が確認された。

出土遺物　P2096から484が、P2092から485が出土した。

SBC036（図版28、写真図版11）

検出状況　A7・A8区で検出された。他の遺構との切り合いはない。北端は調査区外にのびる可能性がある。他の多くの遺構と違い、黒褐色砂質シルト層の上に堆積する灰色シルト上面で検出された。

形状・規模　N3°49'Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間以上の建物である。建物の規模は、桁行方向が4.50m（約15尺）、梁行方向が2.35~2.50m（約8尺）以上を測る。面積は11.25m²以上である。

梁行方向の柱間平均値は2.42m（約8.0尺）、桁行方向の平均値は2.25m（約7.4尺）である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は31~35cmである。深さは27~44cmを測る。柱痕が確認された柱穴はない。P2278・2279・2283の掘形内から礫が出土した。

出土遺物　P2080から486・487が出土した。

SBC037（図版29、写真図版12）

検出状況　A9・B9・A10・B10区で検出された。SBC038と重複する。他の多くの遺構と違い、黒褐色砂質シルト層の上に堆積する灰色シルト上面で検出された。

形状・規模　N3°4'Eに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行3間の縦柱建物である。建物の規模は、桁行方向が9.05~9.15m（約30尺）、梁行方向が7.90~8.00m（約26尺）を測る。面積は73.20m²である。

梁行方向の柱間平均値は2.28m（約7.5尺）、桁行方向の平均値は2.67m（約8.8尺）である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は13~38cmである。深さは11~45cmを測る。P2286・2287・2288・2291・2297・2316で柱痕が確認された。それぞれの直径は8・10・10・14・11・20cmである。P2285では直径7cmの柱根が遺存していた。P2290・2291・2293・2296・2315の掘形内から礫が出土した。

出土遺物　P2296から488が出土した。

SBC038 (図版30、写真図版12)

検出状況 A9・B9・A10区で検出された。SBC037と重複する。北側調査区外につづく可能性がある。他の多くの遺構と違い、黒褐色砂質シルト層の上に堆積する灰色シルト上面で検出された。

形状・規模 N0°42'Eに棟軸の方向をとる桁行3間以上、梁行3間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が5.85~5.95m(約20尺)以上、梁行方向が7.90~8.00m(約26尺)を測る。面積は47.60m²以上である。

梁行方向の柱間平均値は2.49m(約8.2尺)、桁行方向の平均値は2.95m(約9.7尺)である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は25~40cmである。深さは24~41cmを測る。P2309で直径14cmの柱痕が確認された。

SBC039 (図版31、写真図版11)

検出状況 A5・B5・A6・B6区で検出された。SBC031~034・043と重複する。

形状・規模 N2°52'Eに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行4間の総柱建物である。柱筋の交点で柱穴が検出されなかった箇所がある。建物の規模は、桁行方向が9.85~10.25m(約34尺)、梁行方向が9.85~10.05m(約33尺)を測る。面積は103.01m²である。

梁行方向の柱間平均値は2.54m(約8.4尺)、桁行方向の平均値は2.59m(約8.5尺)である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は21~44cmである。深さは8~46cmを測る。P1985の掘形内から礫が出土した。

出土遺物 P1913から489が出土した。

SBC040 (図版32、写真図版11)

検出状況 A5・A6・A7区で検出された。SBC032~034・039・041・043と重複する。

形状・規模 N2°22'Eに棟軸の方向をとる桁行5間、梁行3間の総柱建物である。柱筋の交点で柱穴が検出されなかった箇所がある。建物の規模は、桁行方向が10.95~11.10m(約37尺)、梁行方向が6.95~7.10m(約23尺)を測る。面積は78.81m²である。

梁行方向の柱間平均値は2.32m(約7.7尺)、桁行方向の平均値は2.21m(約7.3尺)である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は15~30cmである。深さは2~35cmを測る。P1975で直径7cmの柱痕が確認された。また、P2054の掘形内から20cm角の礫が出土した。

出土遺物 P2043から490が、P1902から491が出土した。

SBC041 (図版32、写真図版11)

検出状況 A6区で検出された。SBC032・040と重複する。北端は調査区外にのびる可能性がある。

形状・規模 N2°17'Wに棟軸の方向をとる桁行1間以上、梁行2間の建物である。建物の規模は、桁行方向が2.60m(約9尺)以上、梁行方向が4.60~4.65m(約15尺)を測る。面積は12.09m²以上である。

梁行方向の柱間平均値は2.31m(約7.6尺)、桁行方向の平均値は2.55m(約8.4尺)である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は18~38cmである。深さは6~39cmを測る。柱痕が確認された柱穴はない。

SBC042 (図版33、写真図版11)

検出状況 A5・B5区で検出された。SBC032・033・044と重複する。

形状・規模 N4°14'Wに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行方向が7.55~7.85m (約26尺)、梁行方向が2.15~2.35m (約8尺) を測る。面積は18.45m²以上である。

梁行方向の柱間平均値は2.21m (約7.3尺)、桁行方向の平均値は2.65m (約8.7尺) である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は24~55cmである。深さは16~31cmを測る。柱痕が確認された柱穴はない。P563・589の掘形内から礫が出土した。

出土遺物 P859から492が、P589から493が出土した。

SBC043 (図版33、写真図版11)

検出状況 A6・B6区で検出された。SBC031・032・034・039・040と重複する。

形状・規模 N3°34'Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行方向が4.95m (約16尺)、梁行方向が1.80~1.90m (約6尺) を測る。面積は9.41m²である。

梁行方向の柱間平均値は1.85m (約6.1尺)、桁行方向の平均値は2.41m (約8.0尺) である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~38cmである。深さは9~43cmを測る。柱痕が確認された柱穴はない。P1977の掘形内から礫が出土した。

SBC044 (図版34、写真図版11)

検出状況 A5・B5区で検出された。SBC032・033・042と重複する。

形状・規模 N0°43'Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行方向が3.55~3.60m (約12尺)、梁行方向が2.15~2.25m (約7尺) を測る。面積は8.10m²である。

梁行方向の柱間平均値は2.18m (約7.2尺)、桁行方向の平均値は1.79m (約5.9尺) である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は22~25cmである。深さは15~33cmを測る。柱痕が確認された柱穴はない。

SPC006 (写真図版12)

検出状況 G3区で検出された。

形状・規模 掘り方は円形であり、その直径は20cmである。深さは15cmを測る。

出土遺物 墓土より500が出土した。

SPC017 (図版34、写真図版12)

検出状況 K6区で検出された。

形状・規模 掘り方は梢円形であり、その直径は33~38cmである。深さは26cmを測る。

出土遺物 墓土より507・508が出土した。508は底近くから逆位で出土した。

SPC027 (図版34)

検出状況 A7区で検出された。

形状・規模 平面形は長梢円形であり、長さ108cm、幅55cmである。深さは4~6cmを測る。

SKC002 (図版35、写真図版13)

検出状況 L4区で検出された。

形状・規模 平面形は長楕円形であり、長さ130cm、幅44cmである。深さは3cm程度である。

出土遺物 519が出土した。

SKC003

検出状況 K3区で検出された。SBC003の南に位置する。

形状・規模 掘り方は円形であり、その直径は20cmである。深さは25cmを測る。

出土遺物 520・521が出土した。

SKC004 (図版35、写真図版13)

検出状況 K3区で検出された。SBC003の西、SBC004の南に位置する。

形状・規模 平面形は長楕円形であり、長さ85cm、幅65cmである。深さは5cm程度である。

出土遺物 522が底近くから逆位で出土した。

SKC005

検出状況 H2区で検出された。SBC007と重複する。

形状・規模 平面形は円形であり、その直径は18cmである。深さは18cmを測る。

出土遺物 523が出土した。

SKC006

検出状況 F2区で検出された。SBC012の北側に位置する。

形状・規模 平面形は円形であり、その直径は23~28cmである。深さは20cmを測る。

出土遺物 524が出土した。

SKC007 (図版36)

検出状況 A4・A5区で検出された。SBC019・SBC020に重複し、西辺はSBC017の東辺とほぼ一致する。SKC009を切る。

形状・規模 平面形は隅丸方形であり、一辺1.9~2.1mである。底はほぼ平坦であり、深さは17cmを測る。

出土遺物 525、土錘C5、金属器M26・31・32が出土した。

SKC008 (図版35、写真図版14)

検出状況 A4・A5区で検出された。SKC009・SKC010を切り、SBC017・SBC019・SBC020と重複する。

形状・規模 平面形は隅丸方形であるが、南辺及び西辺はやや外側に弧を描く。一辺約2.7~2.9mである。壁は約70~75度の角度をもって掘り込まれ、約7.2m²を測る平坦な底面にいたる。検出面から底面までの深さは約50~55cmである。底面の南東隅は約40cm低くなっている。底の周囲には幅約15~20cm、

深さ約10cmの溝が全周する。各隅には柱穴が設けられ、南東を除く各隅には建て替えに伴うであろう柱穴がさらに各1個ずつ検出された。柱穴の規模は直径15~25cm、深さ12~20cmを測る。

埋土 すべて細粒の自然堆積層であり、人為的に埋められた痕跡は見いだされなかった。

出土遺物 526~539、石製品S7、金属器M13・30が出土した。

SKC009

検出状況 A5区で検出された。SKC007・SKC008に切られている。

形状・規模 平面形は不整形であり、深さは5cm程度と浅い。

出土遺物 540・541が出土した。

SKC010 (図版36、写真図版14)

検出状況 A4・A5区で検出された。南半はSKC008に切られ、調査区外北方につづく。

形状・規模 調査範囲が狭いため、平面形は不明である。壁は約80度の角度をもって掘り込まれ、平坦な底面にいたる。検出面から底面までの深さは約34cmである。底面で幅約15~30cmの溝、直径約35cmの柱穴が検出された。

埋土 細粒の自然堆積層1層のみであり、人為的に埋められた痕跡は見いだされなかった。

出土遺物 543・544が出土した。

SKC012 (図版36、写真図版13)

検出状況 K6区で検出された。SBC024の南東に位置する。

形状・規模 平面形は長楕円形であり、長さ170cm、幅120cmである。横断面の形状は逆台形であり、深さは25cm程度である。

埋土 炭化物を含む細粒の自然堆積層3層からなる。

出土遺物 埋土中層から土器が出土し、545を図化した。

SKC013

検出状況 K6区で検出された。SBC024内の南東隅に位置することから、いわゆる廐の可能性がある。

形状・規模 平面形は隅丸方形であり、一辺約2.3mを測る。横断面の形状は逆台形であり、深さは20cm程度である。

埋土 炭化物を含む細粒の自然堆積層1層からなる。

出土遺物 546が出土した。

SKC014 (図版36、写真図版15)

検出状況 J6区で検出された。SBC024と重複する。

形状・規模 平面形は不整形である。横断面の形状は逆台形であり、深さは15cm程度である。

埋土 炭化物を含む細粒の自然堆積層2層からなる。

出土遺物 547・548、金属器M14・15・33が出土した。

SXC001（図版34、写真図版15）

検出状況 H8区で検出された。SBC026棟軸の北側延長線上約2.0mに位置し、長軸方向はSBC026の梁行方向と平行する。

形状・規模 平面形は長さ1.72m、幅0.6mの長方形である。横断面の形状は、各長辺の中央付近において二段掘り状を呈している。縦断面の形状は逆台形であり、底面にはやや凹凸がみられる。検出面から底までの深さは23cm程度、途中の平坦面までは約10cmを測る。

埋土 細粒の堆積物であり、木棺の痕跡は認められなかった。

副葬品 南側長辺の中央やや東寄りの平坦面付近から、副葬品と考えられる須恵器楕2個体が重なった状況で逆位で出土した。また、副葬品ではないが、西端部付近の検出面において平石が1個検出された。25×30cm程度であり、厚さは約5cmを測る。

出土遺物 他に土器の小片が出土しているが、副葬品である517・518を図化した。

SDC001（第13図、写真図版7）

検出状況 桜地区（2）B区で検出された東西方向の溝である。SFR001の東側溝と路面溝が東方に屈曲する場所において、その上層の小碟の堆積を切るかたちで検出された。

形状・規模 長さ4.50m、幅0.3m、深さ5～6cmを測る。横断面の形状は、皿状を呈する。

埋土 灰白色の細粒の堆積物が認められた。

出土遺物 中世の須恵器、土師器の細片が出土したが、図化できたものは549のみである。

SRC001（図版37、写真図版16）

検出状況 A1・A2・B1・B2・C1・C2区にかけて検出された自然流路である。規模等から、微高地の縁を南流する河道と推測される。SRC002に切られる。東肩の一部が検出されたのみで、南北及び西方の調査区外にのびる。

形状・規模 大部分が調査区外に位置するため、流路規模のうち幅、長さについては明らかにしえないが、幅は5.5m以上を測る。検出面から底までの深さは1.0～1.2mを測る。

埋土 細粒の堆積物だけでなく、比較的強い水流を思わせる巨礫等もみられる。なお、いくつかの堆積の単位が確認できる。微高地に最も近い28層から比較的まとまって土器等の遺物が出土した。

出土遺物 550～561、金属器M19を図化した。

SRC002（図版37、写真図版16）

検出状況 南北方向のC～G区、東西方向の1・2区にかけて検出された自然流路である。規模等から、微高地の縁を南流する河道と推測される。SRC002を切る。東肩の一部が検出されたのみで、南北及び西方の調査区外にのびる。

形状・規模 大部分が調査区外に位置するため、流路規模のうち幅、長さについては明らかにしえないが、幅は6.8m以上を測る。検出面から底までの深さは1.4mを測る。

埋土 SRC001と異なり、礫等はみられず細粒の堆積物が主体を占める。最下層18層から比較的まとまって木製品等の遺物が出土した。

出土遺物 図化できる土器は出土しなかった。埋土最下層から出土した木製品のうち17点を図化した。

(W37~41・W43~54)。

(4) 小 結

律令期と中世の遺構が検出された。

律令期 道路遺構SFR001が検出された以外には遺構はみられない。

SFR001は地形の突出点を結ぶかたちで築かれた直線道路であり、幅員の範囲が明示されており、その幅も広い。また、路面幅の縮小をともなう改修がなされている。時期的にも、奈良時代後半から平安時代前半にかけて機能していた。全国各地における多くの検出例から判断すれば、この道路遺構は自然発生的な道路ではなく、築造・管理にあたって公権力の関与が考えられる官道と捉えるのが妥当である。『延喜式』に記載がないことから、それ以前に機能した駅家を伴った官道であり、山陽道と山陰道を結ぶ地域間連絡道路であるとされ、古代の律令国家がめざした官道体系を復元するうえで貴重な資料といえる（高橋 2000）。

中世 段丘上から柱穴2,008個、土坑13基、土壙墓1基、溝1条が検出された。柱穴からは、条里地割りに沿った43棟の掘立柱建物が復元された。建物の規模は、最小が1×2間（9.3m²）、最大が4×6間（160m²）である。面積別に内訳をみれば、30m²未満の倉庫と考えられる小規模建物が13棟、30以上80m²未満の中規模建物が14棟、90m²以上の大規模建物が10棟である。

建物の分布には時期による疎密の差がみられる。概ね11～12世紀にかけての建物は調査区全域にみられ、単独あるいは2棟の重複がみられる程度に散在している。これに対し、13世紀の建物は4区に限定されて検出された。しかも4区の北端で9棟が重複してみられることがから、この時期に建物がこの場所に占地しなければならない何らかの事情があったことが分かる。

また、他にはみられない遺構が、この重複する建物群に付随するかたちで設けられていることも注意しておきたい。床面の四隅に掘立柱を建てる方形竪穴遺構（SKC008）であり、小屋、物置などと考えられている（大庭 1997）。

この桜地区4区のあり方は、加都遺跡全体に視野を広げても他ではみられない特異な状況といえる。

また、屋敷墓と考えられる土壙墓（SXC001）が1基確認されている。

段丘下からは旧河道が検出され、段丘上の遺構とほぼ同時期の木製品等の遺物が出土した。

5. 山内南地区

(1) 概要

位置 宮ヶ田Ⅰ地区の南側、桜地区の北東側に位置する調査区で、面積は1,715m²である。山内南地区は南北方向の道路をはさみ、西のⅠ区、東のⅡ区に分けて調査を行った。Ⅰ区は和田山町加都字山内779-1、Ⅱ区は字新水988-2にあたる。調査地点周囲は南北に位置する微高地間に挟まれた谷地形である。

基本層序 Ⅰ区では耕作土、褐灰色礫混り細砂シルト、灰色砂混りシルトの順に堆積する。Ⅱ区では耕作土、床土、灰黄褐色細砂の順に堆積し、谷地形の堆積層に至る。

遺構の概要 調査の結果、宮ヶ田Ⅰ地区と桜地区には微高地が存在するが、当調査区からはこの間に挟まれた谷地形が検出された。微地形観察から東から西（Ⅱ区側からⅠ区側）に向かって低くなると推定される。

(2) 遺構

谷部の幅はⅠ区で22~23m前後、Ⅱ区で23m前後を測る。また、Ⅰ区では南北側にわずかに微高地の肩部が検出されたが、この検出面の高さは南東隅で標高87.9m、北側でも標高87.9mを測る。谷の内部は標高86.6m前後の5Y6/1灰色シルト、2.5GY3/1暗オリーブ灰シルト質砂礫まで掘削した。

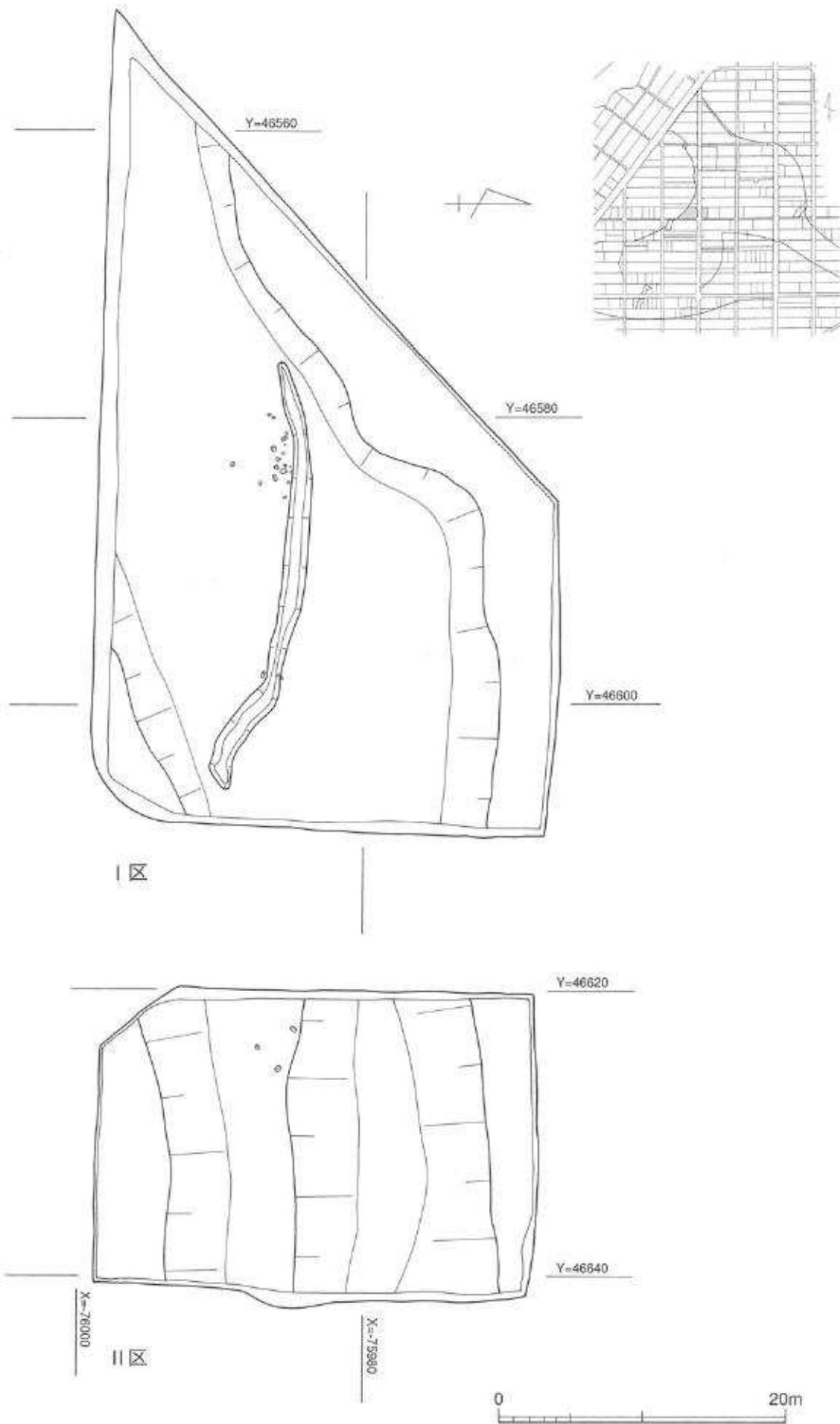
Ⅱ区でも南北に微高地の肩部が検出されている。これらの肩部の高さは南側で標高87.7m、北側で標高86.9m前後を測る。さらに谷の内部は10YR3/1黒褐色混礫細砂層の中間（標高86.6m前後）まで掘削した。谷地形の底を検出することはできなかったが、Ⅰ区の2.5GY3/1暗オリーブ灰シルト質砂礫やⅡ区の10YR3/1黒褐色細砂などの層はさらに下層に厚く堆積すると推測された。Ⅰ・Ⅱ区ともほぼ同じ深さまで掘削したが、流れは微地形観察のとおりⅡ区からⅠ区方向に存在したと考えられる。

谷は、徐々に埋積土砂によって埋没するが、埋没時期については遺物の出土量が少ないため詳細を明らかにすることはできない。ただし、3層である暗灰色砂質シルト層からは弥生時代後期から中世までの遺物がわずかながら出土しているため、少なくとも中世以前には河道が埋没したことは確実である。

Ⅰ区には谷地形の埋没した後に形成された面（4層灰色砂混りシルト）において、溝状の堆積が確認できた。東西方向に長さ約30mに渡って検出でき、幅1.5m、深さ0.3mの規模である。遺物は出土していない。

(3) 小結

宮ヶ田Ⅰ地区と桜地区に挟まれた谷地形がひろく検出されたものの、水田等として利用された痕跡はみられなかった。この谷は弥生時代後期頃には埋没しつつあり、少なくとも中世には周囲は平地化したと考えられ、谷の痕跡は認められなくなる。



第15図 山内南地区全体図



第16図 宮ヶ田Ⅰ地区全体図

6. 宮ヶ田Ⅰ地区

(1) 概 要

位置 現在の行政区画では加都字山内771-1, 2、加都字宮ヶ田834-1、加都字新水982-1、字新水983-1、字新水984-1にあたる。地形的には完新世段丘上と、そこに東西に入り込んだ谷部の低地にあたる。谷部から北側の段丘面は宮ヶ田Ⅱ地区に連続し、そのまま国道312号線を越えて、現在の市御堂集落まで続く。調査区内では谷部に向かって南東方向に緩く下がる傾斜を示し、そのまま谷部に移行して、谷部との境には段丘崖は形成されておらず、両地形の境は明瞭ではない。谷部南側の段丘面は谷部との間に高さ約50cmの崖が形成されていた。段丘面は南に広がり、山内南地区がこの段丘面の南端にあたる。桜地区との間には谷部が入り込み、連続しない。

基本層序 段丘上に当たる地区での基本的な土層は上から、圃場整備後の盛土、耕土、圃場整備時の盛土、圃場整備前の床土、遺構面を構成する黒褐色シルト層、段丘を構成する黄褐色シルト・黄褐色砂礫であった。宮ヶ田B地区の南東隅では圃場整備前の床土と黒褐色シルト層の間に土器を包含する薄い礫層の堆積が認められた。この礫層は洪水によるものではなく、黒褐色シルト層に含まれていたものが雨水等で洗われたり、移動したりしたことによって形成されたものであろう。黒褐色シルト層上からは古墳時代、律令期、中世の遺構が検出されている。段丘面を構成する基盤層と遺構面を構成する黒褐色シルト層は谷部から離れて行くに従い砂礫が多く含まれるようになり、谷部に近くなるほどシルト味が強くなっている。

遺構面を形成する黒褐色シルトのまま谷部内にも連続して堆積している。谷内部において、この土壤からサンプリングし、パリノ・サーヴェイ（株）にC14分析を実施した結果、2590年±50年という結果を得ている。谷内部ではこの黒褐色シルト上に灰褐色極細砂をブロック状に含んだ黒褐色シルト、腐植物を含んだ青灰色シルトが堆積し、これらの層上が古墳時代から律令期の遺構面となっていた。道路遺構もこの面から構築されている。遺構面から上には黒褐色シルト・粗砂を含む黒褐色シルトが堆積し、これら2層が古墳時代から律令期の遺物を含む包含層である。両層の間には粗い砂が溝状に堆積する部分もあったが、溝あるいは畦畔として捉えることはできなかった。古墳時代の包含層上には中世の土器を包含する褐灰色シルトが堆積しており、この層は道路上を覆って堆積していた。褐灰色シルトより上は圃場整備時の盛土、耕土、圃場整備後の盛土であった。

遺跡の概要 段丘上からは古墳時代と平安時代末～鎌倉時代の居住域が検出され、段丘上から谷部にかけて律令期の道路遺構と井戸が検出された。

古墳時代の遺構には竪穴住居25棟、土坑12基、溝2条、掘立柱建物1棟、柱穴938個である。これらの遺構は谷部北側の段丘上から大部分が検出され、谷部南側の段丘上からは竪穴住居1棟だけで僅かであった。全ての竪穴住居は方形で、床面中央に炉跡が設けられ、炉跡を中心に床面が硬化した住居も認められた。竈は付くものと付かないものがあり、竈が付く位置も一定していない。また竪穴住居には土層の状況から、埋め戻しが行われたものも認められた。

これら竪穴住居として提えられた以外にも遺構検出面上に竪穴住居の炉跡とみられる焼土が5カ所で確認されている。また竈の煙道と思われる壁の焼けた細長い焼土坑が4カ所で検出された。これらを含めると今回報告する範囲には34棟の竪穴住居が存在したことになる。

柱穴は938個と多数が検出され、1棟の掘立柱建物が復元できた。この他、SHK016・SHK019の周囲には柱穴が特に集中しており、その中にはSHK016の北側やSHK019の東側には列として捉えられそうな

柱穴群も認められた。また柱穴は埋土が遺構面あるいは他の遺構の埋土と極似して区別が困難であり、検出できた以外にも存在していた可能性は高い。ただ、竪穴住居の上面から検出されるもの、竪穴住居の床面から検出されるものの両方があり、竪穴住居と併行して常に存在していたものと思われる。

律令期の道路遺構は段丘から谷部を渡る直線道路であり、桜地区の道路遺構と連続するものである。段丘上では両側に側溝を設け、谷部は盛土で肩部から法面を礫で葺く構造であった。井戸は小形のもので、道路の脇から検出された。確認調査で出土した木簡（W1）は井戸が検出されたトレンチから出土したものである。

平安～鎌倉時代の遺構は掘立柱建物3棟であり、北側段丘面で調査区の北端から検出された。建物はほぼ同一の方位であり、現在の地割りと同方位を探っている。

谷部では性格不明のSXK001とした杭列と集石を伴う遺構と律令期の道路、井戸の遺構が検出された以外、多くの遺物が出土した。遺物は大半が古墳時代の遺物であり、土器類がほとんどであるが、滑石製の模造品も少量出土している。遺物の多くは谷部の南縁から出土している。古墳時代の遺物以外には弥生時代、律令期、中世に属するものが出土している。

(2) 古墳時代の遺構

SHK001（図版40、写真図版24）

検出状況 谷南側の段丘上で検出されたもので、北壁はほとんど消失していた。主柱穴に重なり合いがあり、同位置での建て替えが行われている。埋土は黒褐色シルトで、床面には炭化物が認められた。

形状・規模 北壁中央に竈が設けられた、一辺5.4mの方形住居で、平面形は南東隅が外に張りだしてやや不整形な方形となっている。壁は最高約15cm遺存していたが、北壁は痕跡がみられる程度であった。

主柱穴は4本で、検出状況から建て替えが認められる。ただ第2次住居の柱穴3本は第1次住居の柱部分からずらすだけの移動であることから、同規模のまでの建て替えであったと思われる。柱穴は径25～40cm、深さ25～40cmで、15～20cmの柱痕跡が認められている。

南壁中央の壁際と東壁中央の壁際および北壁の竈東側には径50～60cm、深さ12～24cmの土坑が設けられていた。土坑は青黒色シルトを基本とした埋土で、炭化物や焼土が含まれていた。高壙等が出土している。

床面の中央には壁が焼土化した径20cm程度の小穴が設けられ、周囲の床面にも焼土が認められた。

北壁中央付近の壁際には竈が設けられていた。竈は極めて遺存状況が悪く、痕跡を残す程度にすぎないが、焚き口は幅45cm、奥行き60cmで、焚き口の手前が土坑状に窪む。煙道は壁より外側にのびる。

出土遺物 屋内の土坑であるSK01から127が、SK03から124が出土した。

SHK002（図版41、写真図版25）

検出状況 谷北側の段丘上で検出されたもので、SHK029に切られて検出された。埋土は黒褐色シルトで、床面には炭化物が認められた。

形状・規模 一辺4.8mの方形住居で、北東隅が外に張りだしてやや不整形な方形となっている。壁は最高約17cm遺存していた。南壁下から南西隅部にかけて幅約10cm程度の壁溝が設けられていた。

主柱穴は4本で、柱穴は径22～30cm、深さ32～37cmで、径15cm程度の柱痕跡が認められている。

東壁中央の壁際には長径54cm、短径44cm、深さ7cmの土坑が壁にそって設けられていた。土坑は青黒色シルトを基本とした埋土で、炭化物や焼土が含まれていた。

床面の中央には壁が焼土化した径20cm程度の小穴が設けられていた。

出土遺物 埋土から128が出土した。

SHK003-1 (図版42、写真図版26)

検出状況 2棟が切り合っており、SHK003-1はSHK003-2に切られて検出された。埋土は黒褐色や黒色の砂質シルトであった。

形状・規模 南北約3.05m、東西約3.30mの小規模な方形住居である。壁は最高約20cm遺存していた。西壁を除く三方の壁下には幅約12cm、深さ約3cmの壁溝が設けられていた。

床面はSHK-003-2より約1cm低く、床面中央には径約18cm、深さ約4cmの炉跡が設けられていた。

SHK003-2 (図版40、写真図版24)

形状・規模 SHK003-1に切られて検出された竪穴住居である。西壁側に竈が造りつけられた東西約4.0m、南北2.9m以上の方形住居である。竈を西壁の中央とすると南北は3.5m程度となり、やや東西に長い長方形の住居となる。壁は最高約18cm遺存していた。

床面上から主柱穴は検出されず、東壁側の壁際で径43cm、深さ26cmの土坑SK01が検出された。土坑内の埋土は褐灰色シルトと黒色シルトが堆積し、底には焼土が認められた。

床面の中央には壁が焼土化した径20cm程度の小穴2個が認められた。

竈は西壁中央に造りつけられ、幅約30cm、奥行き約100cmを測る。中央には川原石を使用した支脚が検出された。支脚は小穴を穿って立てられていた。支脚から焚口側は約6cm程度窪み、支脚から奥側は煙道部に向かって傾斜していた。焚口内や竈周辺には川原石が廃棄されており、他の住居の例からみれば、竈の焚口の袖等に使用されていたと思われる。

出土遺物 竈横の土坑SK02から131・133が出土した。

SHK004 (図版43、写真図版27)

検出状況 律令期の道路側溝によって、北西隅部と竈付近から南西隅部を切られた状態で検出された。内部には暗灰色から黒色のシルト層が堆積していた。

形状・規模 北壁中央から東よりに竈が設けられた一辺約5.2mの方形住居で、壁は最高約25cm遺存していた。

主柱穴は4本で、柱穴は径35~50cm、深さ25cmで、径15cm程度の柱痕跡が認められた。

南壁中央の壁際には径約50cm、深さ32cmの土坑が設けられていた。土坑は暗灰青色シルトを基本とした埋土で、炭化物が含まれていた。

床面の中央には壁が焼土化した径20cm程度の小穴が2個検出され、2個の切り合い関係から、南から北に移動させたものと判断される。

竈は北壁中央から東よりに造りつけられていた。竈は緑黒色シルトを積み上げており、袖部は高さ約20cm遺存していた。袖口の正面には川原石が立てられ、その頂部の標高は西側の立石で86.59m、東側の立石で86.57mとなってほぼ水平となっていた。立石の焚口からの高さは西側の立石が約20cm、東側

の立石が約17cmとなっている。焚口は幅約35cm、奥行き約75cmで、焚口から30cm入った位置に、高さ約10cmの川原石を使用した支脚が立てられていた。支脚石上とその周囲には甕の土師器甕が遺存していた。

出土遺物 埋土から135・136が、竈内の支脚石上やその周囲からは137の土師器甕が出土した。

SHK005（図版44、写真図版27・28）

検出状況 北側段丘上ではもっとも谷部に近い位置で検出され、南壁際に竈が造りつけられた住居である。他の住居等との切り合い関係はない。内部には暗灰色から黒色のシルト層が堆積していた。

形状・規模 南北3.85m、東西3.55mと、やや南北に長い方形の住居である。北西隅に幅1.15mで、約30cm張り出しが設けられている。壁は最高22cmまで遺存していた。

床面からは7個の柱穴が検出されたが、主柱穴は4本で、柱穴は径22~27cm、深さ22~25cmで、柱痕跡は確認できなかった。

床面の中央やや南よりには壁が焼土化した径20cm、深さ6cm程度の小穴が検出された。

竈は南壁中央に黒褐色シルトを積み上げて造りつけられ、西側の袖は最高9cm遺存していた。焚口には径約26cmの範囲に焼土が認められ、焼土の奥側には土師器高杯（141）の杯部を逆転させた支脚が検出された。煙道は住居から外側に約88cm伸びていた。

出土遺物 138から142の土器が出土しており、その内141は竈の支脚として使用されていたものである。

SHK006（図版45、写真図版27・28）

検出状況 SHK007を切って検出され、東壁際に竈が造りつけられた住居である。内部には上層から黒褐色・暗褐色・黒褐色を呈するシルト層が堆積していた。

形状・規模 一辺約4.4mの方形の住居である。壁は最高20cmまで遺存していた。

主柱穴は4本で、柱穴は径25~35cm、深さ15~22cmであった。各柱穴内からは径10~15cmの柱痕跡が確認された。

北西隅と西壁際、南壁際の3カ所に土坑が設けられ、北西隅のSK-03は径70cm、深さ11cm、西壁中央付近のSK-02は長径70cm、短径40cm、深さ13cmで、床面中央の焼土穴を挟んで竈とは正反対の位置に、壁に並行して設けられている。南壁中央のSK-01は径約50cmで、壁から約25cm離れて設けられていた。

床面の中央やや南よりには壁が焼土化した径20cm、深さ5cm程度の小穴が検出された。

竈は東壁中央に造りつけられ、壁から50cmの位置に川原石が立った状態で検出された。この立石の前には約30cmの範囲に焼土が認められ、立石は竈の支脚に、焼土は焚口の焼土にあたる判断された。煙道は竈から一段高くなった位置から外側に伸び、約45cmまで検出できた。

出土遺物 埋土から143~146の土器が出土している。

SHK007（図版45、写真図版28）

検出状況 SHK006に切られて検出された住居である。埋土は粗砂が混じる黒褐色シルト層であった。

形状・規模 SHK006に切られて全容は把握できなかったが、東西辺は4.4mで、ほぼSHK006と同規模となっている。床面はSHK006より8cm高くなっている。

SHK006の床面の下層から柱穴が検出されているが、この住居に伴う主柱穴としては捉えられていない

い。また、遺存状況のよい住居には必ずみられる床面の中央の焼土も検出されなかった。

SHK008（図版46、写真図版29）

検出状況 SHK013・SKK002に切られて検出され、竈は検出できなかったが、北壁中央付近で焼土が確認されており、それが竈であった可能性がある。埋土は黒褐色を呈するシルト層であったが、礫が多量に含まれており、埋め戻しされた可能性がある。

形状・規模 一辺約5.0mの方形の住居であるが、南壁が約4.5mと短くなっている。平面形は台形状を呈する。壁は最高23cmまで遺存していた。

床面は礫が多く含まれた黒色砂質シルト層であり、主柱穴は4本とみられるが、南2本は壁に寄って配置されている。柱穴は径30~40cm、深さ15cmであった。北西隅を除く3本の柱穴内から径15cmの柱痕跡が確認された。

床面の中央やや南よりには壁が焼土化した径22cm、深さ5cm程度の小穴が設けられていた。

出土遺物 埋土から須恵器杯147・高杯148、土師器甕149・高杯150・151が出土している。150は北壁中央付近から出土しており、竈の支脚であった可能性が高い。

SHK009（図版47、写真図版32）

検出状況 SD01に切られて検出され、埋土上層には土器とともに多量の礫が投棄されていた。埋土下層は極細砂を含み黒褐色を呈するシルト層であった。

形状・規模 東西約5.8m、南北5.7mの方形の住居である。壁は最高30cmまで遺存していた。北壁下と南東隅で壁溝が検出され、北壁下の壁溝は2重になっている。住居は一度拡張された可能性がある。

主柱穴は4本であったと思われるが、南東隅の柱穴は検出できなかった。柱穴は径20~25cm、深さ20cmであった。2本の柱穴内からは径15cmの柱痕跡が確認された。

南東隅と東壁際の2カ所に土坑が設けられ、南東隅の土坑は径80cm、深さ20cm、東壁中央付近の土坑は長径82cm、短径65cm、深さ10cmで、壁に沿って設けられていた。

床面の中央には壁や底面が焼土化した径23cm、深さ10cmの小穴が検出された。

床面には中央の焼土を伴う小穴の西側と北側で硬化した面が認められた。西側の硬化面は南西隅の柱穴の周囲にも及んでいた。

出土遺物 155~159・162・164・165は住居を埋めた上層の礫群に含まれていた土器であり、163の土師器高杯が床面から、150・151はSK-01から、それ以外は埋土から出土したものである。

SHK010（図版48）

検出状況 調査区の西壁にかかる全容を検出できなかった。他の遺構とは切り合い関係はないものの、軟弱な地盤の上に建てられた関係から、圃場整備時や盛土時の重機の圧力で変形を受け、歪な形状となっていた。埋土は上層から黒褐色・暗褐色・黒褐色を呈するシルト層が堆積していた。

形状・規模 南北約5.0mの方形の住居である。壁は最高28cmまで遺存していた。

検出できた主柱穴は2本で、本来4本柱構造を持つものであろう。柱穴は径20cmと30cmで、深さ15cmであった。各柱穴内からは径15cmの柱痕跡が確認された。

北壁際に径60cm、深さ30cmの土坑が設けられていた。

床面からは壁が焼土化した径30cm、深さ5cm程度の小穴が検出された。また北東隅付近には川原石が認められた。

出土遺物 須恵器高杯脚部166と土師器高杯脚部167が出土している。

SHK011（図版49、写真図版33）

検出状況 SD01に切られて検出され、他の住居との直接的な切り合いはないものの、SHK014の南東隅とは間隔約1mと近接している。西壁際に竈が造りつけられ、内部には上層から暗褐色・黒褐色を呈し粗砂を含むシルト層が堆積していた。

形状・規模 東西約5.0m、南北約4.73mの方形の住居で、壁は最高15cmまで遺存していた。

主柱穴は4本で、柱穴は径25~33cm、深さ15~20cmであった。南東隅の柱穴内からは径15cmの柱痕跡が確認された。

東壁際と西壁際の竈北側の2カ所に土坑が設けられ、東壁際の土坑は径55cm、深さ20cm、褐灰色シルト・黒褐色シルトが堆積していた。竈北側の土坑は長径98cm、短径55cm、深さ18cmで、黒褐色シルト・黒色シルトが堆積していた。

床面のほぼ中央には壁が焼土化した径30cm、深さ5cm程度の小穴が検出された。

竈は西壁中央に造りつけられ、袖は積み上げられた土が住居の埋土と変化が少なかったため検出できなかつたが、支脚は川原石を使用し、西壁から約40cm離れた位置に立てられていた。支脚前面には30cm四方の範囲に焼土が広がっていた。煙道は焚口から一段高く作られ、外方に約61cmまで検出できた。

床面上には川原石が認められ、特に南西隅では比較的大きな川原石と土器が捨て込まれていた。

出土遺物 土師器壺168・椀169・壺170が出土している。170はほぼ床面上、168・169は埋土から出土した。

SHK012（図版50、写真図版29・30）

検出状況 SHK013に切って検出され、西壁際に竈が造りつけられ竪穴住居である。黒褐色・暗褐色シルト層が堆積していた。

形状・規模 東西約4.7m、南北約4.52mの方形の住居で、壁は最高17cmまで遺存していた。

主柱穴は4本で、柱穴は径30~35cm、深さ15~22cmであった。南西隅の柱穴を除いて、3本の柱穴内からは径13~16cmの柱痕跡が確認された。

東壁中央、北西隅、西壁際の竈北側の3カ所に土坑が設けられ、東壁際の土坑は長径80cm、短径50cm、深さ22cmで、壁に接し、内側が半円形を呈するよう掘られていた。埋土は黒褐色シルト・褐灰色シルトであった。北西隅の土坑は径約63cm、深さ約26cmで、埋土は上から黒褐色シルト・褐灰色シルト・黒褐色シルトであった。竈北側の土坑は径60cm、深さ26cmで、埋土は上から黒褐色シルト・褐灰色シルト・黒褐色シルトであった。

床面のほぼ中央には壁や底面が焼土化した深さ3cm程度の小穴が3カ所で検出された。

竈は西壁中央に造りつけられ、焚口と煙道の境界付近は柱穴に切られて判然としないが、煙道は最長で90cmほど屋外に伸ばされていた可能性がある。袖は黒褐色砂質シルトを積み上げており、最高約16cm遺存していた。袖口には石が立てられていた。焚口幅約40cm、奥行きは92cmまで確認できた。焚口には二つに割れていたが接合すると長さ45cmとなる横長の川原石が落ち込んでおり、焚口の袖石の上に渡さ

れていたものと思われる。焚口の中央やや奥よりに川原石を立てた支脚が検出された。焼土は焚口全体に認められ、支脚の手前側は僅かに窪んでいた。

床面上には多くの川原石が認められた。

出土遺物 東壁際のSK-01から須恵器杯172、土師器甕173・174・176・177、土師器高杯179が出土し、北西隅のSK-03からは土師器高杯180が出土した。須恵器杯171と土師器高杯181・182、碗178は埋土からの出土である。

SHK013（図版51、写真図版31）

検出状況 SHK008を切り、SHK012・SD01に切られて検出された大型の竪穴住居である。埋土は黒褐色・暗褐色シルト層が堆積していた。

形状・規模 東西約5.15m、南北約5.70mの長方形の住居で、壁は最高30cmまで遺存していた。北西隅と南壁下には壁溝が設けられていた。

南西の柱穴が検出できなかったものの、主柱穴は4本と考えられる。南西隅の柱穴は後世の土坑によって失われた可能性が高い。検出できた3本の柱穴は径31~45cm、深さ15~20cmであった。3本の柱穴内からは径15~20cmの柱痕跡が確認された。

床面上には多くの川原石が認められた。

出土遺物 土師器碗183・甕184が埋土から出土している。

SHK014（図版52、写真図版34）

検出状況 調査区の西壁にかかる全容を検出できなかった。圃場整備時や盛土時の重機の圧力で壁や床面まで変形を受けていた。埋土は上層から黒褐色・暗褐色・黒褐色を呈するシルト層が堆積していた。床面上には炭化物が比較的多く認められた。

形状・規模 南北約5.12m、東西3.85m以上の方形の住居で、壁は最高12cmまで検出できた。床面には重機の轍とみられる溝状の窪みが認められた。

主柱穴としては2本が検出されたが、配置からみて4本柱構造である。検出された柱穴は径約30cm、深さ約15cmであった。

調査区西壁沿いのトレーナー掘削時に焼土が確認されており、この住居も床面のほぼ中央に焼土化した小穴が設けられていたものと思われる。

竪は東壁中央に造りつけられ、袖は埋土と極似した黒褐色砂質シルトを積み上げられていたようで、埋土と区別が困難であり、検出できなかった。壁から約35cmの位置に高杯（187）を逆転させた支脚が設けられ、その前面から南側の東西約50cm、南北約30cmの範囲が焼土化されていた。煙道は焚口底より一段高い位置から設けられ、約26cmの長さまで確認できた。

床面上には多くの川原石とともに竪形土器と炭化物が認められた。

出土遺物 須恵器杯蓋2点、土師器高杯、土師器甕2点、移動式竪が出土した。土師器高杯187は竪の支脚として出土し、土師器甕189と移動式竪190は床面から出土した。その他は埋土からの出土である。

SHK015（図版53、写真図版31・35・36）

検出状況 直接切り合う竪穴住居はないが、SHK12・SHK013とは最も狭い部分で約50cmの間隔であ

る。埋土は黒褐色シルト層が4層堆積していた。

形状・規模 東西約3.65m、南北約4.15mの長方形の住居で、壁は最高11cmまで遺存していた。

明瞭な形では主柱穴は検出されなかった。ただ中央の焼土を挟んで、北東と南西の対角になる位置に柱穴がみられ、主柱穴になる可能性がある。

床面中央は東西約82cm、南北約55cmの範囲が焼土化していた。ただし掘り込みは伴わない。

床面の南東隅には径約55cm、深さ約15cmの土坑が設けられていた。

出土遺物 191～193の須恵器杯3点が出土し、その内192はSK-01に落ち込んだ状態で出土した。残りの2点は埋土からの出土である。

SHK016（図版54・55、写真図版36・37）

検出状況 調査区の壁にかかって全容を検出できなかつたが、SHK016が拡張されてSHK017・SHK018となつたものと思われる。埋土の上層から柱穴等の遺構が掘り込まれ、SKK005を切つて検出された。

形状・規模 東西約4.0m、南北約3.7m以上の方形の住居で、遺存していた壁は最高15cmであったが、SHK018の検出面からは約35cmの深さで検出され、本来壁はこの高さまではあったと判断される。西壁下には幅約15cm、深さ約5cmの壁溝が設けられていた。

主柱穴としては4本が検出され、柱穴は径約20～50cm、深さ約18～30cmであった。北西隅以外の3本の柱穴は抜き取りの痕跡が認められた。

床面中央には壁や床面が焼土化した径約10cm、深さ約3cm、径約25cm、深さ5cmの小穴が認められた。

また、北東隅の床面が方形状に約7cm下がっていた。

出土遺物 須恵器杯蓋194・195、須恵器無蓋高杯196・197、土師器甕198、土師器高杯199が出土した。197は床面から、その他は埋土からの出土である。

SHK017（図版54・55、写真図版37）

検出状況 SHK016を約70cm拡張した住居である。埋土の上層から柱穴等の遺構が掘り込まれ、SKK005を切つて検出された。

形状・規模 東西約5.35m以上、南北約4.5m以上の方形の住居で、遺存していた壁は最高約10cmであったが、SHK018の検出面からは約20cmの深さがあり、本来壁はこの高さまではあったと判断される。

主柱穴としては2本が検出されたが、本来は4本の主柱穴を持つ構造である。検出された柱穴は径約22～25cm、深さ約25～30cmであった。

北壁中央の西寄りの位置からと北東隅の2カ所に土坑が設けられ、北壁側の土坑は径80cm、深さ20cmで、壁に接した側は直線的となっている。内部には川原石が内蔵されていた。北東隅の土坑は径約55cm、深さ約9cmで、楕円形を呈する土坑であるが、SHK018に伴う土坑に切られている。床面直上に炭化物層が認められ、高杯脚部（203）が出土した。

北壁から約120cm離れた床面上で焼土が確認されたが、その性格については不明である。

出土遺物 須恵器杯200・201、土師器甕202、土師器高杯203、楕円形のミチュア土器204、製塩土器205が出土している。土師器高杯203はSK-06から出土、その他は埋土からの出土である。

SHK018 (図版54・55、写真図版37)

検出状況 SHK017を北に約65cm、東に約35cm拡張した住居で、約70cm拡張した住居である。埋土の上層から柱穴等の遺構が掘り込まれていた。

形状・規模 東西約5.7m以上、南北約5.15m以上の方形の住居で、遺存していた壁は最高約20cmであった。北壁から東壁の北半にかけて幅約17cm、深さ約3~6cmの壁溝が設けられていた。

主柱穴は4本で、柱穴は径約33~42cm、深さ約15cmであった。

東壁側の2カ所に土坑が設けられ、北側の土坑は径約78cm、深さ約18cmで、埋土には小礫が含まれ、最下層には黒色シルトが堆積していた。南側の土坑は東壁から約25cm離れている。長径90cm、短径約53cm、深さ約14cmである。埋土は暗青灰シルト等であった。

出土遺物 土師器高杯206、製塩土器207・208が出土した。いずれも埋土からの出土である。

SHK019 (図版56、写真図版35・36)

検出状況 SKK007を切って検出された。それ以外にも上面から多数の柱穴が掘り込まれ、床面からも多数の柱穴が検出された。ただ柱穴との切り合い関係は埋土が似通っていることから、正確に把握することは困難であった。

形状・規模 南北約5.57m、東西4.55m以上の方形の住居で、東壁が南北壁と直交していないため、やや歪な形状となっている。壁は最高20cmまで遺存していた。

主柱穴は4本で、柱穴は径約30~35cm、深さ約15~39cmであった。南側2本の柱穴内からは径15~16cmの柱痕跡が確認された。

東壁中央、壁から約15cm離れた位置に、長径約80cm、短径約70cm、深さ約23cmの土坑が設けられていた。埋土は上層が褐灰色シルトであり、最下層に黒色シルトが堆積していた。土坑上面から土師器甕(211)等が出土している。

床面のほぼ中央の東西約55cm、南北35cmの範囲には焼土が広がり、焼土の中央は約3cm窪んでいた。

出土遺物 須恵器杯蓋209・210、土師器壺211、土師器甕212・213、土師器高杯脚部214が出土した。土師器壺211と甕212・213の3点は東壁際の土坑上部から、須恵器杯蓋209は床面上からの出土である。

SHK020 (図版56)

検出状況 SHK019に切られた状態で、北東隅が検出された方形の住居である。

形状・規模 規模ははっきりせず、主柱穴は4本と考えられるが、南東の1本はSKK007と切り合っていたのか検出できなかった。柱穴は径南径25~30cm、深さ20~30cmであった。

SHK021

検出状況 調査区の隅で、竪穴住居の南東隅から東壁が検出された。全容は不明である。

形状・規模 南北2.7m以上、東西0.7m以上の方形の住居である。壁は最高21cmまで遺存していた。

出土遺物 須恵器杯蓋215が埋土から出土した。

SHK022 (図版57)

検出状況 北半は平成9年度に宮ヶ田B地区の調査で、南半は平成10年度に山内北C地区として調査

したことから、住居を調査区端のトレンチで壊してしまった。埋土は数層の黒褐色砂質シルトである。

形状・規模 南北約4.40m、東西4.50mの方形住居で、壁は最高25cmまで遺存していた。壁下には幅約12cm、深さ3~6cmの壁溝が設けられていた。壁溝はほぼ全周する。

主柱穴は検出されなかった。

床面のはば中央の径20cm範囲には焼土が認められた。

この焼土の西側から北側には硬化面が認められた。

出土遺物 須恵器杯216と土師器甕217が出土した。土師器甕217は床面に貼りついた状態で出土した。

SHK023（図版58、写真図版38）

検出状況 SBK004を切り、SKK008に切られた状態で検出された。埋土は褐灰色シルト・黒褐色シルトで、埋土の上層からSKK008が掘り込まれていた。埋土中には部分的に川原石の集中が認められた。

形状・規模 一辺約6.0mの方形の住居で、北壁が膨れてやや歪な形状となっている。壁は最高約28cmまで遺存していた。

配置からみて4本柱と思われるが、検出できた柱穴は2本で、西側2本は検出できなかった。検出できた柱穴は径約35~55cm、深さ約15cmと浅いものであった。南側の柱穴内からは径約20cmの柱痕跡が確認された。

東壁中央に長径約70cm、短径約58cm、深さ約15cmの土坑が設けられていた。埋土は黒褐色砂質シルトであり、上面や周囲の床面には35cm大の川原石が認められた。

床面のはば中央の東西約55cm、南北65cmの範囲には焼土が広がり、焼土の南側から東側、北側は床面が硬化していた。

出土遺物 須恵器甕218、須恵器杯蓋219、須恵器杯220、土師器甕221、土師器椀222、土師器高杯223が出土した。土師器甕221は東壁際の土坑から出土している。

SHK024（図版59）

検出状況 SHK025に切られ、SD02を切って検出された。埋土は褐灰色シルト・黒褐色シルトで、最下層に薄い黒褐色砂質シルト層が認められた。

形状・規模 中央から北東隅側にかけてSHK025によって壊されているが、南北約5.4m、東西5.15mの方形の住居である。壁は最高約20cmまで遺存していた。壁下には途切れた部分もあるが、幅約12cm、深さ5cm前後の壁溝が設けられていた。

主柱穴は4本であるが、壁に近い配置となっている。柱穴は径約25~40cm、深さ約10~20cmと浅いものであった。北東隅と南西隅の柱穴内からは径約17cmの柱痕跡が確認された。

SHK025（図版60、写真図版38）

検出状況 SHK024を切って検出され、SD01・SBC047に切られた状態で検出された。埋土は褐灰色シルト・黒褐色シルトであった。

形状・規模 南北約4.55m、東西4.35mの方形住居であるが、やや歪な形状となっている。壁は最高35cmまで遺存していた。壁下には幅約7~13cm、深さ約6cmの壁溝が検出された。壁溝は壁下を全周せず、西壁中央や北東隅付近では途切れていた。

主柱穴は4本と思われるが、南東隅の柱穴は検出できなかった。検出できた柱穴は径約25~35cm、深さ約10~20cmであった。西側2本の柱穴内からは径15cmの柱痕跡が確認された。

東壁中央から径約57cmの土坑状の落ちが確認されたが、深さが約8cmと浅い。

床面のほぼ中央には径約35cm、深さ約7cmの炉跡が設けられていた。炉跡の周囲の床面は硬化が認められた。また炉跡周囲の床面を中心に川原石が多く検出されている。

出土遺物 須恵器杯蓋225、土師器壺226、土師器224が出土した。224は床面からの出土である。

SBK001 (図版61)

検出状況 SHK023・SKK008に切られて検出された。柱穴の埋土は黒褐色シルトであった。

形状・規模 N17°Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は桁行方向が約3.93m、梁行方向が約3.80mを測る。面積は約14.3m²である。

柱間は桁行がほぼ均等で約1.31m、梁行が1.9mを測る。

柱穴 柱穴の径はSHK023に切られていることによってバラツキが大きく、径30~70cmである。四隅の柱穴の掘り方が大きくなっている。南西隅柱穴からは柱痕跡は確認できなかったが、他の柱穴内からは15~25cmの柱痕跡が確認された。南西隅・北東隅の柱穴内からは22cmと比較的大い柱痕跡が確認されている。柱穴の深さはSHK023・SKK008に切られている部分は浅く、切り合っていない南西隅の柱穴は深くなっているが、底の高さは86.4~86.5mの高さとなっている。

SKK001 (図版62、写真図版40)

検出状況 SHK010・SHK011に切られて検出された。埋土は暗青灰色シルトで部分的であったが最下層に炭化物層が認められた。

形状・規模 長さ約3.3m、幅約1.9m、深さ約14cmの不正形な皿状の土坑で、中央北壁より床面には川原石と土器(233・234)が集中していた。その付近で炭化物の層が認められている。

出土遺物 土師器小形丸底壺(233・234)が出土している。

SKK002 (図版62、写真図版40)

検出状況 SHK023の南側で検出された土坑で、柱穴に切られて検出された。埋土は黒褐色シルト・褐灰色シルト・黄灰色シルト層で、礫が多く含まれていた。

形状・規模 長さ約215cm、幅約155cm、深さ約34cmの方形の土坑である。

出土遺物 土師器壺(235)が出土している。

SKK003 (図版62)

検出状況 SHK008に切られて検出された。埋土は黒褐色シルト層を中心としたものであった。

形状・規模 長さ約172cm、幅約106cm、深さ約22cmの方形の土坑である。

出土遺物 須恵器縦体部236と土師器甕(237)が出土している。

SKK004 (図版61、写真図版43)

検出状況 切り合う遺構はない。埋土は褐灰色シルトであった。

形状・規模 径約72cmの円形を呈する。深さは約18cmで、内部に238が据えられ、上部には川原石がのっていた。

出土遺物 238の大形の壺が出土している。

SKK005（図版63、写真図版41）

検出状況 SHK016・SHK017に切られて検出された土坑で、埋土は暗青灰色シルト・暗灰色シルト・暗緑灰色シルト層であった。

形状・規模 調査区西壁にかかっており全容は把握できなかったが、長さ約155cm以上、幅約68cm、深さ約20cmの方形の土坑である。

SKK006（図版63、写真図版40）

検出状況 SHK019に切られて検出された土坑で、埋土は3層の黒褐色シルトであった。1層は土坑上部から掘り込まれたものであり、柱穴等の別の遺構のものである可能性が高い。

形状・規模 長径95cm、短径85cmで、南北にやや長い楕円形を呈する。深さは約68cmであった。

SKK007（図版63、写真図版41）

検出状況 他の遺構と切り合いはない。埋土は黒褐色シルトが6層堆積していた。

形状・規模 長軸150cm、短軸92cmで、隅丸長方形を呈する。深さは約57cmで、断面は箱形を呈する。

SKK008（図版63、写真図版42）

検出状況 SHK023を切り、SBK001に切られて検出された。埋土は黒褐色シルト・褐灰色シルトが3層堆積していた。

形状・規模 長軸320cm、短軸152cmで、長方形を呈する。深さは約40cmで、底には川原石が集石されていた。集石に規則性が認められず石組みとしての意図はないものと判断される。

SKK009（図版63、写真図版43）

検出状況 他の遺構と切り合いはない。埋土は黒褐色シルト・褐灰色シルトが6層堆積し、埋土中に川原石が含まれていた。

形状・規模 長軸120cm、短軸88cmで、長方形を呈する。深さは約38cmで、断面は箱形を呈する。

SPK001（図版61、写真図版44）

検出状況 他の遺構と切り合いはない。埋土は褐灰色シルトで、柱抜き取り跡が確認され、抜き取り跡には土器、川原石が捨て込まれていた。

形状・規模 径58cm、深さ48.5cmで、上部から大きく抜き取り跡が確認された。

出土遺物 土師器碗227、土師器甕228・229が出土している。

SPK006

検出状況 調査区北西隅の比較的遺構の希薄な場所で検出された遺構で、他の遺構と切り合いはない。

埋土は黒褐色砂質シルトであった。

形状・規模 径15cm、深さ10cmの小形のピットである。

出土遺物 石製模造品（S28）が出土している。

SXK001（図版64、写真図版58・59）

検出状況 南側段丘縁から谷中央部にかけて「く」の字状に検出された遺構で、川原石や木材を乱雜に積み上げ、ミカン割りした杭や矢板が打ち込まれていた。杭や矢板に目立った規則性は認められなかつた。川原石の下層に褐灰色粗砂の堆積が認められ、他地区で検出されて畦畔とされている遺構に様相は似るが、高さが後述するように高いこと、頂部のレベル差が大きいことから、畦畔とは考えにくい。

形状・規模 最大幅約3mで、段丘縁に沿って北東方向に約15m伸び、そこではほぼ90°に曲がって谷中央部まで約12m連続して途切れていった。段丘縁にかかる部分では灰色砂の上に比較的小形の礫を積み上げており、杭等は打ち込まれていなかった。頂部の高さは標高約86.35～86.9mとなっていた。「く」の字状に折れた部分から谷底部にかかる部分では40～50cm大の礫も多く使用され、積み上げられた高さは最高約40cm、最も低い部分では約6cm、頂部の標高は約86.23～86.53mであった。礫の下部や上部から杭や矢板が打ち込まれており、一部で矢板列が認められたが連続せず、全体としては規則性は認められなかつた。

出土遺物 古墳時代の遺物のみが出土した。

(3) 律令期の遺構

SFR001（図版66、写真図版45～55）

検出状況 谷部を横断して、約52mに渡って検出された直線道路遺構である。桜地区で検出された道路遺構の延長線上にあたり、北側段丘上の宮ヶ田Ⅲ地区で検出された道路遺構に連続する。谷部を横断する当地区では道路は盛土工法で築造されており、盛土の東肩部や法面は全体に石が葺かれ、北端付近は道路上も礫敷きが施されていた。

道路遺構は古墳時代の堅穴住居SHK004・SHK030上に構築され、道路上には中世の土器を包含する褐灰色シルトが堆積していた。道路遺構の東約3mには後述する井戸SER001が存在し、井戸周辺では確認調査時に木簡（W1）が出土している。

形状・規模 主軸方位をN22°E方向とし、検出された長さは約52mの内、北側1/3付近までは西側に1条、東側に2条の側溝が設けられ、それ以南の部分では西側で一部側溝らしい落ち込みも検出されているが、基本的には側溝は検出されなかつた。東側2条の側溝に切り合いはないが、他地区的例からみて幅員の縮小を伴う改修があつたものと考えられる。西側の側溝が1条であることから、改修は道路の東側のみであったようである（東外側の側溝の段階を第1次道路、東内側の側溝の段階を第2次道路とする）。

第1次道路 側溝の心々間距離で約7.2m、路面幅約6.3～6.9mを測り、側溝は西側で約17m、東側で約22.5m検出された。西側の側溝は幅約0.65～2.0m、深さ約15cmを測る。東の側溝外側の側溝は幅0.5～2.0m、深さ約30cmを測る。北端から約5mの間は道路内側にあたる溝の西半に多数の小礫が落ち込んだ状態で認められており、これらの小礫が道路に葺かれていた可能性が考えられる。

第2次道路 盛土工法により構築された道路で、東法面を川原石で葺き、遺存状況の良い部分では道路

肩部に列石が認められた。第2次道路は第1次道路を東側から縮小して構築されたもので、縮小幅は側溝の心々で約1.2mを測る。この第2次道路が盛土工法によって構築されたもので、北側の微高地へ連続する部分では側溝を伴い、谷部にあたる部分では盛土のみで、側溝等は設けられていない。側溝を伴う部分では側溝心々間は約6m、路面幅4.5~5.7mであり、微高地に連続する部分の路面幅が広くなっている。盛土部分では盛土の基底部で幅約5.5~6.5m、路面幅3.7~4.6mとなっている。東側溝の側溝は幅0.5~0.8m、深さ約20cmを測る。盛土の裾に当たる位置に設けられており、溝内には川原石の小礫が多数落ち込んでいた。西側の側溝に改修の痕跡はみえず、第1次道路の側溝がそのまま利用されたようである。

道路の盛土は断面が台形に積まれており、南側の微高地に取り付く付近が最も高く約50cmの高さに積まれていた。盛土には周辺の土が使用されており、西半を最初に積み、東半を後に積み上げている。盛土内には板材や棒材が含まれていた。

道路の東法面は石で葺かれており、最大約40cmまでの川原石を使用されていた。葺き方は乱雜で、規則性が認められなかった。ただ道路東肩部の南端から約4.5mの位置から北側に約5m連続して列石が認められた。本来、肩部はこうした列石状に葺かれた可能性が高い。

道路上東半の北端から約8mの範囲には道路上に小礫が敷かれていたが、路面に敷かれたものという確証は得られなかった。盛土部分での道路上には、道路と並行する方向に長さ約1.5m、幅約0.3m深さ約7cmの溝状の落ち込みや、ほぼ道路と並行あるいは直交する板材が認められた。溝状の落ち込み内には板材の他、肩部から連続して落ち込む小礫が認められ、この溝状の落ち込みは轍の可能性もある。また肩部列石の内側に小礫や硬くなった部分が認められた。この付近は路面であった可能性も考えられる。

出土遺物 道路西側溝からは須恵器杯B蓋（406）が出土し、第2次道路の東側溝からは須恵器杯B（407）と須恵器杯A（408）が出土した。今回図示した以外に、東側溝上から円面鏡が出土しているが、宮ヶ田Ⅲ地区から出土したものと接合でき、『加都遺跡Ⅱ』で報告する。

SER001（図版65、写真図版44）

検出状況 道路遺構か東の段丘が谷低地に変わる付近で検出された。検出面は古墳時代の土器を含む黒褐色腐植質シルトである。周辺から律令期の土器の出土はなかったが、確認調査時の井戸を半分検出したトレーンチ内からは木簡（W1）が出土している。

形状・規模 長径約100cm、短径約85cm、深さ約45cmの小規模な井戸である。内部に径約45cmの井戸枠の痕跡が確認され、井戸枠上半の裏込めや井戸枠上端には川原石が置かれていた。

（4）中世の遺構

SBC045（図版67、写真図版56）

検出状況 調査区北西隅で検出され、梁行は調査区外に伸びる。切り合う遺構はないが、南側桁行筋はSBC002の北側桁行筋のほぼ延長線上にあり、有機的な関連が考えられる。検出された柱穴は浅く、大きく削平を受けているものとみられる。

形状・規模 N90°Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行1間以上の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が6.80m、梁行方向が2.60m以上を測る。面積は17.68m²以上である。

梁行方向の柱間は中央が広く約2.40m、両側が約2.20m、梁行方向の柱間は約2.40~2.60mを測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形で、径16~28cm、深さ約10cmであった。柱痕跡は検出されず、P807には根石状の礫が認められた。

SBC046（図版67、写真図版56）

検出状況 SBC001の東側で検出され、切り合う遺構はないが、北側桁行がSBC001の南側桁行の延長上にあり、同一時期の可能性が高い。各柱穴は浅く、SBC001同様大きく削平を受けているものと思われる。

形状・規模 N90°Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が6.90~7.10m、梁行方向が5.30~5.40mを測る。面積は48.15m²である。桁行の規模からみて、ほぼSBC001と同規模の建物であろう。

梁行方向の柱間 北側が広く2.70~3.00m、南側が2.40~2.50m、桁行方向は平均2.30mとする部分が大半であるが、南側桁行の中央間と西1間は2.40mとなっていた。

柱穴 柱穴の掘り方は円形で、径は20~32cmであり、柱痕跡は認められなかった。深さは10cmを測る。P833・P835には根石状の礫が認められた。

SBC047（図版67、写真図版56）

検出状況 調査区の北東隅、SHK025の上面で検出された。梁行、桁行とも調査区外に伸びる可能性が高い建物跡である。

形状・規模 検出されたのは南北2間、東西1間であるが、柱間間隔からみて、N90°Eに棟軸の方向をとる桁行1間以上、梁行2間以上の総柱建物と判断される。建物の規模は、桁行方向が2.00m以上、梁行方向が4.90m以上を測る。梁行方向の柱間は2.20~2.50mを測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形で、径は20~30cmであり、東側の梁行の柱穴には径13~19cmの柱痕跡が認められた。深さは9~25cmを測る。

(5) 小 結

古墳時代、律令期、中世の遺構が検出された。

古墳時代 調査区から北方にのびると想定される微高地の南西縁辺部から、堅穴住居25棟（推定を含めれば34棟）、土坑12基、溝2条、掘立柱建物1棟、柱穴938個が検出された。墓等は検出されておらず、微高地南側に広がる谷部についても、水田としての土地利用を積極的に示す根拠は得られなかった。堅穴住居は方形であり、竈をもつものも多い。量が少ないものの、特筆すべき遺物として、滑石製の勾玉・臼玉・劍形石製品が挙げられる。

律令期 微高地南縁から谷部にかけて、道路遺構SFR001と井戸SER001が検出された。これ以外には遺構はみられない。

道路遺構SFR001は桜地区で検出されたものの延長部分であるが、谷部に盛土を行って築造していることが分かり、類例の少ない盛土工法による道路遺構の細部を観察することができた。微地形の復元図（第7図）を参考に、桜地区9区の北側に、山内南地区から宮ヶ田I地区にかけてひろがる谷地形の存在を想定すれば、延長約200mにわたり谷地形に盛土を行って築造したことになる。

井戸SER001は、道路遺構に近接する谷地形の中に設けられている。遺構に伴う明確な出土遺物はな

いが、近接して律令期の木簡が出土したこと、井戸の形態から中世以降のものとは考えにくいこと等から律令期のものと判断した。井戸の掘削意図を考えるには材料が少ないものの、律令期の他の遺構が認められないことから、通常の集落跡に伴う井戸とは考えがたい。その位置からみても、「凡諸国駅路邊植菜樹。令往還人得休息。若無水処。量便掘井」（『延喜式』卷五十 雜式（黒板 1985））とあるように、道路遺構に密接に関係すると捉えるのが自然であろう。

道路遺構および包含層から出土した土器は少ないが、「部」の墨書き土器や郡内の里地名を記す木簡等も出土しており、遺物の出土量の割には特筆すべきものが多い特徴がある。

中世 微高地上で掘立柱建物 3 棟が検出された。桜地区 4 区以外の各地区と同様、建物が散在する状況が確認された。掘立柱建物以外に中世の遺構は確認されなかった。

7. 宮ヶ田II地区

(1) 概要

位置 宮ヶ田II地区は、現在の地番にいう宇宮ヶ田831-1、832-1、字ワタシ20-1にあたる。

地形的には、他地区と同じように円山川が形成した扇状地に位置している。調査区北部から南西部に向かって、徐々に高まりを増す微高地であり、調査区の中央部分から西側には円山川の堆積作用によって堆積した疊層が隆起している。

基本層序 基本層序は、中洲を構成する礫、黒褐色極細砂、黒褐色細砂、盛土となっている。先にも述べたが調査区西側では黒褐色細砂の堆積がなく、中洲を構成する礫が盛土直下に堆積している。盛土には耕作土や床土も含まれる。

遺構の概要 古墳時代および平安～鎌倉時代の居住域と、律令期の道路状遺構が検出された。

古墳時代の遺構は竪穴住居跡3棟、土坑2基である。竪穴住居跡は、調査区北部で2棟、南部で1棟検出した。土坑2基と北部で検出した竪穴住居跡2棟はいずれも深さが10cmほどしかなく、大きな削平を受けていることが分かる。そのため、これら以外にも遺構が存在した可能性がある。

律令期の遺構は道路状遺構だけである。遺構からは時期を特定できる遺物が出土していないが、12世紀後半の建物が遺構上に建てられるため、その時期には廃絶していたと考えられる。また、桜地区、宮ヶ田I・III地区で検出した道路遺構との関連を考え、この遺構を律令期の所産とした。

平安～鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物10棟、柱穴約300個、土坑1基である。建物は全て条里地割りに沿った建物であった。土坑からは完形の土器がまとまって出土し、良好な一括資料を得た。

(2) 古墳時代の遺構

SHK026 (図版69・写真図版63)

検出状況 調査区南東部で検出された。埋土から多数の土器が出土した。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 東西辺の長さ約4.4m、南北辺の長さ約5.1m、検出面からの深さ60cmの隅丸方形の竪穴住居跡である。

柱穴 床面から大小あわせて22個の柱穴を検出した。掘り方は円形であり、その直径は40cm～50cmを測る。柱痕の残っている柱穴もあり、その直径は約20cmである。

周壁溝 住居跡の北東部分から南西部分にかけて周壁溝が半周する。幅20cm前後、深さ5cm前後である。周壁溝は2基ある土坑の部分では途切れている。

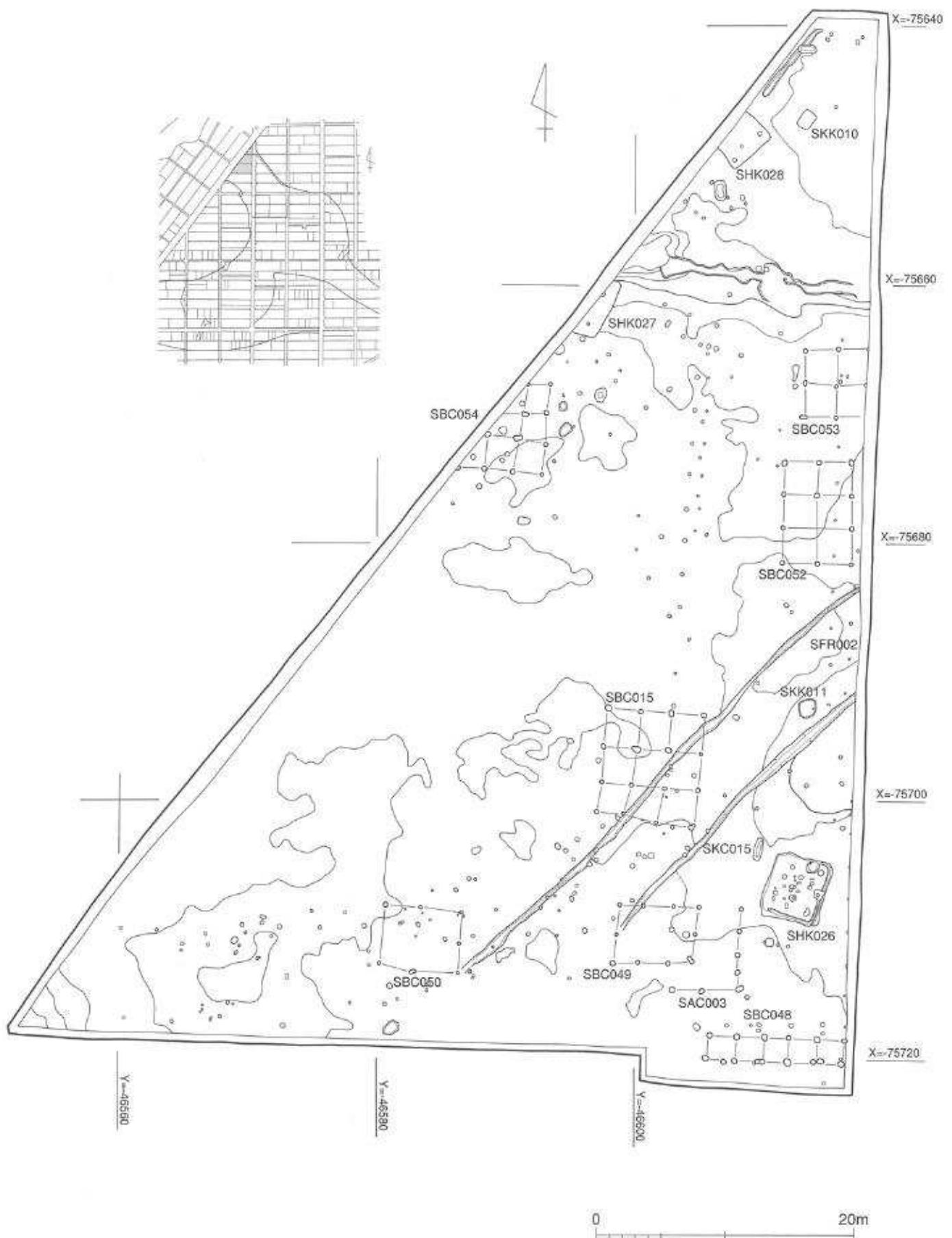
土坑 土坑は2基検出した。北辺に接している土坑は長径1m、短径90cm、深さ13cmを測る橢円形を呈している。東辺に接している土坑は1辺30cm～40cm、深さ14cmを測るいびつな方形を呈している。

焼土 住居跡中央部分に、南北2.4m、東西1.5mの範囲で焼土を検出した。

出土遺物 竪穴住居廃絶後、土器捨て場となっており、埋土から多数の土器が出土した。そのほとんどが破片であったが、接合する土器が多く出土した。須恵器は出土していない。

SHK027 (図版70・写真図版64)

検出状況 調査区北西部で検出された。床面を削られるほど削平を受けており、検出できたのは柱穴と周壁溝の一部のみである。他の遺構との切り合いはない。



第17図 宮ヶ田II地区全体図

形状・規模 検出した南北辺の長さ約4.7mを測る隅丸方形と考えられる竪穴住居跡である。

柱穴 主柱穴を2本検出した。それぞれの直径は25cm前後、深さはいずれも16cm、柱間長は2.6mを測る。残っている柱痕の直径はそれぞれ20cmと24cmである。

周壁溝 検出した部分では全周している。幅20cm前後、深さ5cmを測る。

出土遺物 1点を図化した。

SHK028（図版70・写真図版64）

検出状況 調査区北西部で検出された。住居跡床面と柱穴を検出した。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 南北辺の長さ約3.7m、検出した東西辺の長さ約2.8m、検出面からの深さ12cmの隅丸方形と考えられる周壁溝の無い竪穴住居跡である。

柱穴 主柱穴を2本検出した。それぞれの直径が32cmと40cm、深さはいずれも35cm前後、柱間長は2.8mを測る。残っている柱痕の直径はそれぞれ20cmと32cmである。

出土遺物 大きく削平されているため遺物の出土は少なかったが、4点を図化した。

SKK010（図版71・写真図版69）

検出状況 調査区北部で検出された。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 平面形は長方形であり、長辺1.4m、短辺1m、深さ10cmを測る。

埋土 細粒の自然堆積層が4層あり、人為的に埋められた痕跡は見いだされなかった。

出土遺物 埋土上層からまとまって土器が出土し、4点を図化した。

SKK011（図版71）

検出状況 調査区東部で検出された。大きく削平を受けている。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 平面形はいびつな方形であり、長辺1.5m、短辺1.4m、深さ8cmを測る。

埋土 細粒の堆積層が1層あり、断面観察から人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物 埋土上層からまとまって土器が出土し、1点を図化した。

(3) 律令期の遺構

SFR002（図版72・写真図版68）

検出状況 調査区東部から南西部にわたり検出された。SBC049とSBC051に切られる。

形状・規模 側溝中心間の距離が最も大きいところで5.7m、狭いところで5.2mの、平行して延びる溝2本を42.5mにわたり検出した。南部にいくに従って削平が進んでおり溝は消滅している。方位はN46°Eである。

埋土 細粒の自然堆積層が1層あり、人為的に埋められた痕跡は見いだされなかった。

路面の状況 削平を大きく受けているため、路面に盛土の痕跡は認められなかった。

出土遺物 遺構の性格を反映して出土遺物が極めて少なく、時期を決定できる遺物の出土はない。他の遺構との切り合い関係や桜地区、宮ヶ田I地区で律令期の道路遺構が検出されているため同時期の遺構とした。

(4) 中世の遺構

SAC003 (図版73・写真図版66)

検出状況 SBC049の東から南側で検出された。

形状・規模 逆L字形に7個の柱穴で構成され、南北方向に4間(6.2m)、東西方向に2間(5.2m)を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は橢円形であり、直径は32cm~40cm、深さ平均20cmを測る。

SBC048 (図版73・写真図版65)

検出状況 調査区南東部で建物の一部を検出した。

形状・規模 N90°Eに棟軸の方向をとる桁行5間以上、梁行1間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が10.4m(約34.6尺)、梁行方向が1.8m(約6尺)以上を測る。面積は18.7m²以上である。

桁行方向の柱間は均等で2.2m(約7.3尺)、梁行方向は1.8m(約6尺)を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20cm~40cm、深さ平均20cmを測る。柱痕が認められる柱穴もある。その直径は20cm前後である。P400、P404には根石がある。

出土遺物 須恵器碗・鉢、土師器碗・杯が出土しており、5点を図化した。

SBC049 (図版73・写真図版66)

検出状況 調査区南東部で建物全体を検出した。SFR002を切る。

形状・規模 N90°Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の側柱建物である。建物の規模は、桁行方向が6.2m(約20.6尺)、梁行方向が4.4(約14.6尺)を測る。面積は27.3m²である。桁行方向の柱間は不均等で平均2m(約6.6尺)、梁行方向は均等で2.2m(約7.3尺)を測る。

柱穴 建物の柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20cm~40cm、深さ平均24cmを測る。P128、P131、P133、P145、P146、P149には根石がある。

出土遺物 図化できる遺物は出土しなかった。

SBC050 (図版74・写真図版66)

検出状況 調査区南部で建物全体を検出した。

形状・規模 N90°Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の側柱建物である。建物の規模は、桁行方向が6m(約20尺)、梁行方向が4.6m(約15.3尺)を測る。面積は25.2m²である。

桁行方向の柱間は不均等で2.8m(約9.3尺)と3.2m(約10.6尺)、梁行方向は均等で2.3m(約7.6尺)を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~28cm、深さ平均22cmを測る。

出土遺物 図化できる遺物は出土しなかった。

SBC051 (図版74・写真図版66)

検出状況 調査区南東部で建物全体を検出した。SFR002を切る。

形状・規模 N1°Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行方向が8.4m(約28尺)、梁行方向が7.4(約24尺)を測る。面積は62m²である。

桁行方向の柱間は不均等で東側で平均2.8m（約9.3尺）、西側で平均2.6m（約8.6尺）、梁行方向は均等で平均2.4m（約8尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~52cm、深さ平均25cmを測る。P76、P78、P79、P80、P81、P86~89、P98には根石がある。

出土遺物　　土師器小碗・杯が出土しており、2点を図化した。

SBC052（図版75・写真図版67）

検出状況　　調査区東部で建物全体を検出した。

形状・規模　　N2°Wに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の側柱建物である。建物の規模は、桁行方向が8m（約26.6尺）、梁行方向が5.2m（約17.3尺）を測る。面積は41.6m²である。

桁行方向の柱間は均等で平均2.6m（約8尺）、梁行方向は均等で平均2.6m（8.6尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は32~52cm、深さ平均22cmを測る。P4、P11には根石がある。

出土遺物　　土師器碗・小碗・鍋が出土しており、3点を図化した。

SBC053（図版75・写真図版67）

検出状況　　調査区東部で建物の一部を検出した。

形状・規模　　N1°Wに棟軸の方向をとる桁行2間以上、梁行2間の縦柱建物である。建物の規模は、桁行方向が4.8m以上（約16尺）、梁行方向が5.2m（約17.3尺）を測る。面積は24.9m²である。

桁行方向の柱間は均等で平均2.4m（約8尺）、梁行方向は均等で平均2.6m（約8.6尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は26~36cm、深さ平均16cmを測る。

出土遺物　　図化できる遺物は出土しなかった。

SBC054（図版76・写真図版67）

検出状況　　調査区北西部で建物の一部を検出した。

形状・規模　　N3°Eに棟軸の方向をとる桁行3間以上、梁行3間以上の縦柱建物である。建物の規模は、桁行方向が7m以上（約23尺）、梁行方向が6.5m（約21.6尺）を測る。面積は45.5m²である。

桁行方向の柱間は均等で平均2.3m（約8.6尺）、梁行方向は均等で平均2.1m（7尺）を測る。

柱穴　　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は22~44cm、深さ平均20cmを測る。P40、P41、P65には根石がある。

出土遺物　　図化できる遺物は出土しなかった。

SKC015（図版71・写真図版70）

検出状況　　調査区南東部、SHK026の北西で検出した。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模　　N5.5°Eに長軸方向をとる長さ1.75m、最大幅60cm、深さ20cmの土坑である。

埋土　　細粒の堆積層が5層あり、断面観察から人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物　　土坑南側からまとめて須恵器、土師器が出土した。6点を図化した。

(5) 小 結

古墳時代、律令期、中世の遺構が検出された。

古墳時代　　竪穴住居跡と土坑が検出された。いずれも宮ヶ田Ⅰ・Ⅲ地区で見つかっている遺構と同時期である。分布密度が薄いものの、宮ヶ田Ⅰ・Ⅲ地区で検出された集落跡の広がりが確認され、集落範囲はさらに事業地北および西方に伸びている可能性が高い。

律令期　　道路状遺構以外の遺構は検出されなかった。SFR002は、二本の平行する溝から道路遺構と考えたが、路面幅や側溝の規模等からみるとSFR001のような官道とは考えがたい。SFR002を北東方向へ延長し、宮ヶ田Ⅲ地区においてSFR001との接続状況あるいは切り合い関係を検討すれば、さらに遺構の性格を考えることができたが、後世に削平されていたため確認できなかった。

平安～鎌倉時代　　平安～鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物10棟、柱穴約300個、土坑1基を検出した。掘立柱建物はいずれも南北か東西に桁方向をとっており、条里地割りに沿って建物が散在する状況が確認できる。

第3節 遺物

1. 土器

(1) 繩文時代

SPK007 (第18図、写真図版73)

1は縄文土器深鉢である。口縁部は幅2.5cm、深さ4mmの切れ込みが入れられている。内面にはナデが、外面には爪形文が千鳥状に施される。前期の北白川下層1式と考えられる。

桜地区包含層 (第18図、写真図版73)

2は縄文土器深鉢である。波状口縁の先端に突起をもっている。突起の先端には刺突が施されている。突起先端より下2.4cmには穿孔がなされ、外面には沈線により文様が施されている。後期の中津式と考えられる。

焼御堂確認調査 (第18図、写真図版73)

3は縄文土器深鉢である。外面には磨り消し縄文が、内面にはナデが施されている。文様は磨り消し部分の「U」字形が横に並ぶように施され、縄文の原体はRLである。後期の中津式と考えられる。

宮ヶ田II地区包含層 (第18図、写真図版73)

4は縄文土器の体部破片である。外面には磨り消し縄文が、内面には条痕が施されている。文様は縄文が横方向に消し残され、縄文の原体はRLである。後期の中津式と考えられる。

5は縄文土器の体部破片である。外面には条痕が、内面にはナデが施されている。4と同様に中津式と考えられる。



第18図 各地区出土の縄文土器

(2) 弥生時代

SDY001

弥生時代～中期 (図版77・79、写真図版76・77)

6は確認調査出土の甕である。No64トレンチ内の流路から出土しており、位置的にSDY001に相当する。口縁部は外反し、端部には刻目を施し、体部には3条単位で3帯の櫛描直線文とその下部に波状文を描く。口径19.8cm、体部内面は刷毛後ナデ上げ調整である。この甕は第II様式のものである。

7は壺頸部の破片と思われる。SDY001上層出土である。上部に4条の櫛描沈線文が看取される。

8も壺頸～肩部の破片と思われ、黒褐色シルト層出土である。下部に2条の櫛描沈線文が残存する。

9は壺肩部の破片で、砂層・黒褐色シルト層出土である。肩上部には5条の沈線を施し、下部には2

条の沈線が残存している。

10も壺肩部の破片で、上部に3条、下部に1～2条の範描沈線が残存している。内面には指押さえの痕跡が残る。砂層出土である。

11も壺肩部破片で、上部に2条の範描沈線文が残っている。黒褐色シルトおよび砂層出土である。

12も壺肩部と思われ、下端に1条の沈線が残存している。出土層位は不明である。

13は壺体上部の破片で、上部に明瞭な2条の沈線が残存している。黒褐色シルト層から出土している。

14も壺体部上半の破片で、砂層出土である。中央部に3条の貼付突帯が認められる。

15も壺体部破片で、出土層位は不明である。上端に2条の範描沈線が残存し、下端には1条の貼付突帯が残存し、突帯に圧痕文状の刻みを加えている。

16も壺体部片で、黒褐色シルトおよび砂層出土である。2条の貼付突帯が残存し、圧痕文状の刻目を加えている。

以上の土器は、いずれも全容を窺うことができないが、6を除き、前期後半に属するものと考えておきたい。

中期後半の土器には下記の17・18・50～53がある。

17は壺体部の破片で、SDY001出土である。器表の摩滅が著しいが、外面には上部から、櫛描きによる直線文・波状文が各2帯かろうじて残存している。

18も壺体部片で、黒褐色シルト層出土である。17と同じように、外面には櫛描直線文と波状文が描かれており、各1帯残存している。

高杯では50～53がある。いずれもSDY001出土であるが、50を除き、溝下層の砂層から出土している。

50は直径6cmの中空の脚柱部に杯部および裾部を接合しており、杯底部中央は円板充填であろう。外面はいずれも縦方向の細かい範磨きで、脚柱部中央は摩滅している。脚柱部の高さは13cmである。

51の口縁部は鉢状を呈し、端部にはほぼ水平な面をもつ。外面口縁下に2条の凹線文を施す以外の装飾は認められない。口径29.6cmを測る。

52は口縁部が屈曲するもので、端部は外に引き出したような形状で、上部に平坦面をもつことから、中期最終末から後期初頭に編年されるものである。内外面に範磨きを施しているようであるが、不明瞭となっている。口径は28.6cmである。

53の脚端部は直径12.6cmで、主として上部に拡張している。内面は左方向の範削りである。

弥生時代後期（図版77・78、写真図版73～77）

SDY001出土土器のうち、弥生時代後期に属するものを抽出しているが、一部古墳時代初頭～前期のものも含んでいる。

19は鉢等の脚台部で、SDY001の砂層から出土している。底内面には指頭圧痕とともに布状織物の圧痕が残存している。詳細な時期は不明であるが、古墳時代に降る可能性がある。

20はほぼ完形に復元できた壺である。口縁部は体部から外反し、そのまま外上方に短くのびて終わる。口縁端部は外傾する面をもち、内端を若干つまみ上げたようになっている。体部は倒卵形を呈し、底部は尖底ぎみの丸底である。体部外面は右上がりのタタキ後下半部に縦刷毛を加え、さらに範磨きを施しているが、下半部は特に密に施している。範磨きが認められることと煤が確認できなかったことから、壺と判断したが、形態的には甕の可能性を残す。体部内面は左方向への範削りを密に施している。体部

最大径は22.4cmを測る。形態および調整技法の特徴から、弥生時代末～古墳時代初頭の時期が与えられる。なお、口縁端部のみ、他の部分と違って赤褐色の胎土を使用している。また、体部下半に黒斑が認められる。SDY001の黒褐色シルト層より出土している。

21も黒褐色シルト層出土である。小さな平底を有する長頸壺で、半分以上が残存している。体部最大径は16.7cmを測る。体部は大きく、口縁部はやや短い形態で、口縁端部付近の外面に3条の擬凹線状の文様を施している。体部は倒卵形を呈し、継刷毛後継範磨きを施すが、肩～頸部には横方向に施している。内面は刷毛後肩部のみ横方向の範削りとなっている。体部外面に黒斑が認められ、煤も付着している。なお、器表が剥がれている部分にも煤が付着している。後期後半以降の所産と思われるが、類例を待って検討すべきであろう。

22も長頸壺で、口縁部の破片であるが、21と較べて口縁部が長く大型である。端部は外反した後屈曲して外上方に短かくのび、外面に2条の細い凹線を施している。内外面とも範磨き調整である。

23は短頸の壺口縁部片で、端部を上下に少し拡張し、2条の擬凹線を施すが、凹凸はあまり。口縁部は横ナデ後外面に範磨きを施し、体部内面は範削り調整。黒褐色シルト層出土である。

24は壺口縁部と考えられる破片で、外上方にのびた口縁端部を下方に少し拡張し、櫛描波状文を描いている。内外面とも範磨きで仕上げている。

25は丸底の体部をもち、壺と思われる。体部最大径は18.0cmである。外面は刷毛後範磨き、内面は幅の狭い範削り調整で、底部外面には範で幾何学文様を描く。黒褐色シルト層から出土している。

以上の19～24の土器は弥生後期後半から古墳時代初頭の所産と思われるが、丸い体部の25は時期が降る。ただし、底部が若干尖底ぎみであることから、古墳時代前期の範疇でとらえられるかもしれない。

26～37は甕、38～41は甕と思われる底部である。

26～29は体部から屈曲して外上方に開く、「く」字状の形態を呈するもので、端部を少し拡張する26・27とほとんど拡張しない28・29があるが、いずれも口縁端部に面をもつ。26は口縁端部を下方に拡張し、擬凹線を加える。27の口縁端部拡張は僅かであるが、端面に3条の擬凹線を施している。口径は20.2cmと大型である。28は上下、29は上方に口縁端部を僅かに拡張している。26～28は体部外面刷毛、内面は範削り調整であるが、29は外面タタキ後下部に刷毛を加え、内面はナデで下部に刷毛を加えている。

26は形態から後期前半でも古い方、27・28も前半におさまると思われるが、29は後期後半以降の所産と推定される。26はSDY001の砂礫層最下層、27は砂層、28は黒褐色シルトおよび砂層、29は黒褐色シルト出土で、時期が降るにつれて上層から出土している状況が窺える。

30～36はいわゆる「ナデ甕」、37は擬凹線を施す複合口縁の甕である。ただし、36は口縁部に擬凹線状のナデを施している。外面調整はいずれも刷毛調整であるが、34のみタタキ後に施している。内面調整ではすべて範削りで、33・35では刷毛後に施していることが看取できる。

30・31は平底を有する甕で、完形に復原できた。体部最大径は30が15.9cm、31は15.1cmである。30・31・36は口縁部形態が類似しており、後期末から古墳時代初頭と推定される。30は砂層、31は砂層および黒褐色シルトより出土している。32・34は口縁部がほぼ直立し、体部も直立する点で類似しており、34にタタキを有する点から、後期末から古墳時代初頭に位置付けられるであろう。34は砂層および黒褐色シルト出土。33は体部が丸く、古墳時代前期に降ると思われる。35は壺の可能性を残すが、煤が付着している。口縁端部が長くのび、体部が丸いことから、33と同時期と思われる。33は砂層、35は砂層および黒褐色シルト出土である。37は灰褐色砂層出土で、形態的には後期末～古墳時代初頭に編年される

ものであろう。

38~41の壺底部も壺体部と調整法は同じである。形態的には平底の38が最も古く位置付けられ、40、39、41の順に新しくなり、41は後期末~古墳時代初頭に位置付けられるであろう。38は砂層および黒褐色シルト、40は砂層、39は黒褐色シルト、41は黒褐色シルト上層からそれぞれ出土している。

42~48は鉢で、42・43ともに口縁部の発達が少なく、42は平底であることから後期末頃に比定できるであろう。42は砂層、43は砂層および黒褐色シルト出土である。44・45は突出した平底を有する小型鉢で、口径は9~10cmを測る。内面は刷毛調整で、口縁端部には丁寧なナデは施していない。ともに砂層出土である。46~48は脚台付の鉢であるが、46・47の器高が高いものと48の低いものがある。46は内外面とも板ナデ調整で、砂層からの出土し。47・48は黒褐色シルト出土で、48は上層から出土している。

49は体部最大径9.5cmを測る小型の壺で、口縁部を欠損する。尖底気味の平底で、砂層出土である。

焼御堂地区包含層（図版79、写真図版76・77）

すべて包含層（黒褐色土）出土土器で、高杯・壺などがある。54の高杯は中空の脚柱部で、杯部との接合は円板充填法による。55の脚部がつく可能性があり、脚端部は上下に拡張している。56の壺口縁端部は主として下方に肥厚する。硬質で白色を呈する。60・61は壺底部であり、内外面の調整法は同じであるが、61はタタキ成形である。57は小型壺または壺で、体部内面は箇削り調整。58は椀形杯部の高杯もしくは台付鉢の口縁部で、白色硬質の土器である。59は蓋と思われる破片で、外面は板ナデ後一部に範磨きが認められる。

焼御堂地区の包含層出土土器は54~56・60のように後期でも前半までにおさまると推定されるもの、61のように後半~末と思われるものがあり、57・59もそれらの範疇におさまるようである。ただし、58については、古墳時代前期あるいは中期に降る可能性を残すものである。

SKY001（図版79、写真図版77）

62は後期前半におさまる壺口縁部で、端部を上下に拡張するが、端面に擬凹線は施さない。

SKY002（図版79、写真図版77）

63は台付鉢と思われる下半部の破片で、体部内面は範磨き調整のようであるが、単位は不明である。後期末~古墳時代前期の範疇でとらえるべきと思われる。

64は古墳時代前期と思われる壺の口縁部破片である。口縁部は外反してそのまま丸くおさめる。体部外面は刷毛、内面は箇削り調整である。

SDY003（図版79、写真図版77）

65は前期の逆L字形口縁壺で、内外面とも刷毛調整である。残存部分には文様は認められない。

66は如意形口縁の壺口縁部で、外面口縁下に12条の籠描沈線文を施し、本破片部分が下半部の開始・終息箇所となっている。中期初頭と考えられる。

67・68はともに外面刷毛調整の底部であることと形態から、前期末~中期初頭の壺底部である可能性が高い。なお、68の外底面には紗圧痕が付着している。

SDY005 (図版79、写真図版75・77)

69は前期に縦年される壺口縁部で、口縁端面には刻み目、外面口縁下には範描沈線を疎らに描いており、2条残存している。

70・71は、上下に拡張した口縁端面に凹線を描く壺口縁部で、中期後半～後期初頭の範疇におさまるものである。70は直線的に開いた口縁部で、端面の3条の凹線文上に2個一対の小さな円形浮文を貼り付けている。71は内傾した頸部から短く外反する口縁部をもち、端部に4条の凹線文を描く。

72・73は甕口縁部で、口縁端部を肥厚・拡張して、端面に凹線文を描く。いずれも後期初頭である。

74は複合口縁の壺口縁部片で、古墳時代前期に属するものであろう。頸部内面下端は範削りである。

75は鉢あるいは台付鉢の口縁部で、外反ぎみの口縁端部外面に5条の細い凹線文を描く。内面は範削りで、丁寧なつくりとなっている。後期中頃あたりの時期と考えられる。

76の小型甕は底部が大きいが、口縁部が長く外反し、端部は丸くおさめることから、後期中頃～後業と思われる。内外面は刷毛調整で、器高10.6cm、体部最大径は8.2cmを測り、ほぼ完形品である。

77は台付鉢と思われる脚部で、内外面は範削り、体部内面は調整不明である。

78の脚部は鉢の可能性がある。高さ1.5cmの短い脚部で、鉢部内面は範削りのようである。

岡ノ森地区包含層 (図版80、写真図版75・77)

79の壺は、直線的にのびる口縁部で、外面に6条の細い沈線状の凹線を施す。後期のいずれにあたるか判断できない。

80は頸部が直立した後短く外反する口縁部をもち、端部は若干肥厚する。体部内面は範磨き、外面には部分的に範磨きを施している。後期末～古墳時代初頭と想定しているが、類例がなく不明確である。

81・82は口縁端部を拡張する甕で、81の口縁端面には微かに凹線が認められる。どちらも外面刷毛、内面範削り調整で、肩部に丸みをもつ形態であることから、後期前半と考える方がよさそうである。

83は複合口縁甕の口縁部片で、端部外面に4条の擬凹線を施している。後期末～古墳時代初頭の時期が与えられよう。

84は外面にタタキをもつ平底の甕底部で、内面にはクモの巣状に刷毛を施している。

85は「ハ」字形に開く脚部で、高杯と思われる。脚端部に面をもち、後期前半の可能性がある。

86は機械掘削中出土の脚部で、鉢の可能性が高い。

87・88は確認調査の溝出土土器で、87の壺口縁部は端部を上下に拡張し、3条の凹線を描く。88は図上完形の平底甕で、体部最大径は上位にあり、17.7cmを測る。口縁端部は上下に少し拡張している。体部外面は刷毛、内面は範削り調整である。後期中頃の所産と思われる。

89は確認調査の包含層出土底部で、平底であるが底面は小さい。外面刷毛、内面範削りで、底部外面に「キ」字状の範描線が認められる。後期後半～末と思われる。

山内南地区包含層 (図版80、写真図版75・78)

90～96は山内南地区の包含層出土土器である。

90の壺は古墳時代前期～中期初頭のものと思われ、礫層南端から出土している。口縁部はやや長く「ハ」字形に開き、端部は若干外反する。外面は刷毛、体部内面は範削り調整である。

91は短く外反する口縁部をもつ甕で、端部は面をもつ。内外面とも刷毛調整で、体部の丸みは少ない。

中期初頭もしくは後期前半～中頃と思われる。礫層南端から出土している。

92はいわゆる「タタキ甕」で、口縁部はゆるやかに外反する。後期後半の範疇であろう。

93は高杯・器台の脚部で、礫層北端出土。外面範磨き、内面は刷毛と範削りで、端部に面をもつ。後期中頃であろうか。

94は複合口縁器台上部の破片で、口縁部外面にコンバスを反転させたような櫛描波状文を施す。

95・96は確認調査出土土器で、95は鉢と考えている。内外面とも範磨きで、口縁部は強くナデている。

96の底部底面には「十」字形を範で引いている。

宮ヶ田Ⅰ地区包含層（図版80・81、写真図版75・78）

97は「讃岐系」と呼ばれる複合口縁の大型壺口縁部である。色調はチョコレート色に近いが、讃岐系胎土の特徴である金雲母・角閃石は含んでいない。内外面とも範磨きで仕上げているが、頸部は刷毛後に施している。古墳時代初頭～前期の時期が与えられている。

98は複合口縁の壺で、口縁部は大きく外傾し、端部には水平面をもつ。古墳時代初頭～中期初頭までの幅広い時期が考えられる。

99も複合口縁の壺であるが、口縁部を欠損する。体部は丸く、最大径は21.7cmである。体部外面は刷毛、内面は横方向の範削りである。古墳時代前期と思われる。

100は短い壺口縁部で、外面に範描沈線を4条施す。黒灰色シルト層出土で、後期後半であろう。

101は壺と思われるが、特異な形態を示す。

102は蓋で、砂礫層出土である。

103の器台はほぼ完形品で、口縁端部を上下に拡張し、凹線文を施している。下部には上下2孔一対の円形透かし孔を3方向に穿つ。脚端部上側には、2条の擬凹線を施したような凹みが認められる。後期～中頃の可能性が高い。内面の大半が範削り、外面は刷毛後範磨きである。褐色砂礫層出土。

104は丹波・丹後地域に多く見られる複合口縁の高杯で、屈曲部外面の稜が鋭く外面に突出する。脚部には円形透かしを3方向に穿つ。褐色砂礫層出土で、後期後半の可能性が考えられる。

105は有段高杯である。

106は台付鉢で、ほぼ完形。

107は器台口縁部片で端面に櫛描波状文を施し、擬凹線も微かに看取できる。

確認調査包含層（図版81、写真図版78）

108は長頸壺口縁部で、出土位置は不明である。内面の指押さえが著しい。後期中頃であろう。

(3) 古墳時代

古墳時代の土器は、出土量の大半を占める。図化にあたっては、宮ヶ田Ⅰ・Ⅱ地区の微高地で検出された遺構の埋土から出土した一括遺物の比率を多くし、微高地南側の谷地形からの出土遺物は全形の分かることを中心に選別した。

以下に土師器の型式分類を行ったのち、出土遺物の説明を行う。

土師器の型式分類

本報告及び「加都遺跡Ⅱ」に掲載する古墳時代の土師器について、壺形土器、甕形土器、椀形土器、高杯形土器（以下、「形土器」は省略）等に形式分類し、おのおのについて以下のとおり型式を設定し、それに基づいて記述をすすめる。このほか、器台、竈、甕、製塩土器が出土している。このうち製塩土器は、薄手で小形丸底のものに限られる。これは紀淡海峡周辺部における丸底1式（広瀬 1988）に相当する。

壺

壺A 外反あるいは直立する口縁部をもつ壺。以下のように細分する。

壺Aa 口縁部の長さが器高の1/4程度と短いもの。

壺Ab 口縁部の長さが器高の1/3以上の比較的長いもの。

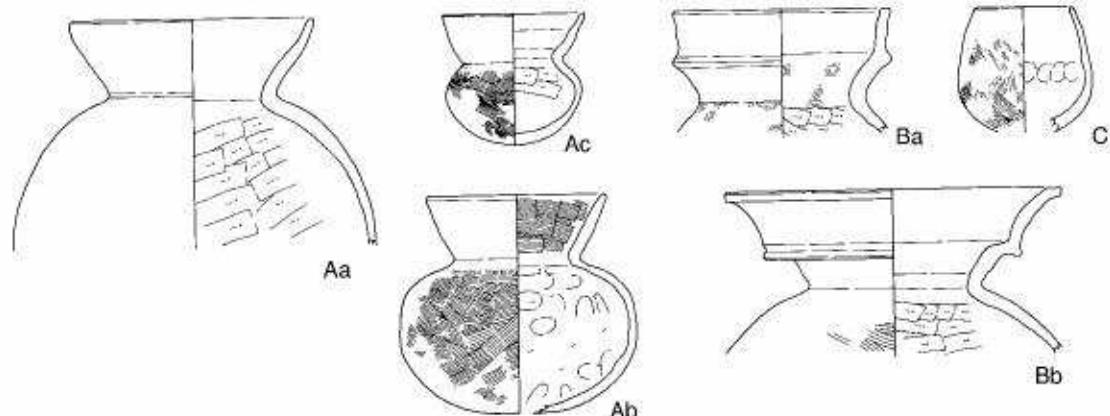
壺Ac 壺Abのうち小型のもの。いわゆる小型丸底壺。

壺B 二重口縁をもつ甕。以下のように細分する。

壺Ba 二次口縁が直立するもの。

壺Bb 二次口縁が外反あるいは外傾するもの。

壺C 頸部をもたない甕。



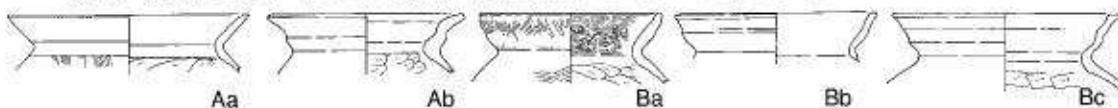
第19図 壺の型式分類

甕

甕A 直線的あるいは外反する口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめる甕。以下のように細分する。

甕Aa 体部から口縁部にかけてなだらかに連続する。

甕Ab 頸部が大きくなびれ、口縁部下端が突出するあるいは棱をもつ。



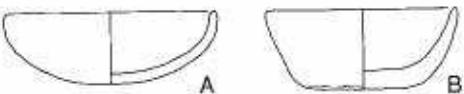
第20図 甕の型式分類

甕B 内湾する口縁部をもち、口縁端部に内傾あるいは水平な面をもつ甕。以下のように細分する。

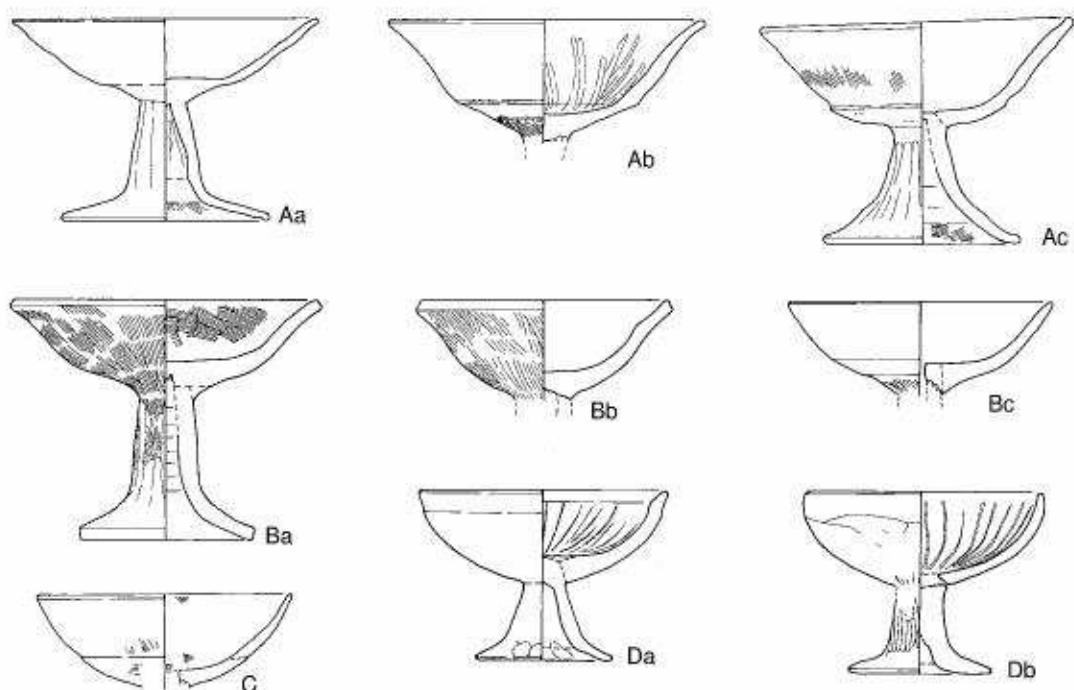
甕Ba なだらかに内湾する口縁部をもつ。

甕Bb 内湾する口縁部が端部近くで外反する。

甕Bc 内湾する口縁部が半ば及び端部近くで外反する。



第21図 梗の型式分類



第22図 高杯の型式分類

椀

椀A 丸底の椀。

椀B 平底の椀。

高杯

高杯A 体部と口縁部の境に明瞭な段をもつ高杯。体部と口縁部の形状により以下のように細分する。

高杯Aa 外反する体部と外反する口縁部をもつ。

高杯Ab 直線的な体部と外反する口縁部をもつ。

高杯Ac 内湾する体部と直線的な口縁部をもつ。

高杯B 体部から口縁部へなだらかに連続する高杯。以下のように細分する。

高杯Ba 内湾する体部と外反する口縁部をもつ。外面の調整にハケを多用する。

高杯Bb 外反する体部と直線的な口縁部をもつ。

高杯Bc 外反する体部と内湾する口縁部をもつ。

高杯C 体部と口縁部の境がやや窪む高杯。体部と口縁部はともに内湾する。

高杯D 半球形の体部をもつ高杯。口縁部の形状により以下のように細分する。

高杯Da 短く外反する口縁部をもつ。

高杯Db 直立する口縁部をもつ。体部外面の調整にヘラケズリを多用し、口縁部にヨコナデを行う。直立する脚柱部と、短く水平にのびる裾部からなる脚部をもつ。

焼御堂地区包含層（図版82、写真図版79）

109は須恵器の杯蓋である。天井部は丸く、体部との境はあまく稜が突出する。口縁部には内傾する端面をもつ。

110は土師器の椀Aである。他の個体に比して器高が高く、体部が球形に近い。内面には暗紋状のへ

ラミガキが施される。外面は板ナデ仕上げである。口縁部はヨコナデによって薄く仕上げられている。

SDK001 (図版82)

111は須恵器の横瓶である。口縁部は外反し、端部は斜め上方につまみあげられる。体部外面には格子目あう叩き目をもつ。

山内南地区包含層 (図版82、写真図版79・90)

112は須恵器の杯蓋である。天井部と体部との境は連続的で稜をもたない。口縁部は丸くおさめる。

113・114は土師器の壺Acである。ともに体部外面はハケ仕上げ、内面にはユビナデの痕跡が残る。口縁部の長さは体部の半分程度である。

115・116は土師器の壺Baである。体部外面はハケ仕上げで、内面にはヘラケズリを施す。口縁端部は、115は内側に肥厚させ、116は直立させながら丸くおさめている。117は土師器の壺Aaである。体部の調整は外面がハケ、内面がヘラケズリである。118は土師器の壺Aaである。体部の調整は外面がハケ、内面がヘラケズリである。119は土師器の壺Bbである。体部の調整は外面がハケ、内面がヘラケズリであり、底部内面にはユビオサエの痕跡が残る。

120は土師器の高杯Acである。口縁部には端面をもつ。脚部は、脚柱部と裾部の境が明瞭で、脚柱部外面はヘラミガキ、裾部内面はハケ仕上げである。121は土師器の高杯の脚部である。脚柱部には横向のヘラケズリを施す。

122は土師質の円筒埴輪片である。残存状況の悪い小片である。内面は縦方向のハケ仕上げ、外面は摩滅しているが、突帯の貼り付けの際のナデが確認できる。SHK014出土の190のような突帯を巡らせる壺の可能性もある。

SHK001 (図版83、写真図版79)

123は須恵器の杯蓋である。天井部は比較的平坦で、体部との境はあまく稜が突出する。口縁部には内傾する端面をもつ。

124は須恵器の杯身である。たちあがりの端部には内傾する端面をもつ。

125は土師器の高杯Dbである。脚部は、直立する脚柱部と短く水平にのびる裾部からなる。裾部内面はハケ仕上げである。全形の分かる高杯Dbはすべてこの種の脚部をもち、それ以外の型式にはみられないようである。127は土師器の高杯の脚部である。脚柱部外面にはヘラミガキを施す。他の例からみて高杯Dbの脚部である蓋然性が高い。

126は土師器の椀Aである。外面の器壁は摩滅しており調整の確認はできない。内面にはユビオサエの痕跡をとどめる。

SHK002 (図版83)

128は土師器の椀Aとしたが、高杯Dbの可能性もある。体部内外面にナデ、口縁部にヨコナデを施す。

SHK003 (図版83、写真図版79・90)

129は須恵器の杯身である。底部およびたちあがりを欠失する。

130は土師器の椀Aである。摩滅のため器壁の調整の観察は困難である。口縁部は丸くおさめる。

131は土師器の甕Bcである。体部内面のヘラケズリは頸部の屈曲点より下方までである。132・133は土師器の甕Bbである。132の体部内面のヘラケズリは頸部の屈曲点より下方までであり、それ以上は縦方向のハケ仕上げである。

134は土師器の甕である。底部を欠失する。牛角状の中実の把手が2方向にみられ、口縁部にはほぼ水平な面をもつ。体部外面は縦方向のハケ仕上げ、内面には横方向のハケのあと縦方向のヘラケズリを施す。

SHK004 (図版83、写真図版80)

135は須恵器の杯身である。たちあがりの割には体部が浅い。たちあがりの端部にはほぼ水平な端面をもつ。

136は土師器の高杯Dbである。杯部の下半はヘラケズリのちナデ仕上げである。

137は土師器の壺Aaである。口縁部は短く外傾する。体部内面下半にはユビオサエが残る。

SHK005 (図版83、写真図版80・90)

138は須恵器の無蓋高杯である。杯部と口縁部の境に1条の突帯があり、その直下に櫛描波状紋が巡る。長方形透かしを3方にもつ。

139は須恵器の広口壺である。頸部外面は沈線で区切られ、上段に櫛描波状紋が巡る。

140は土師器壺の体部である。体部内面の上半には粘土接合痕が残り、ユビオサエが顕著である。

141は土師器の高杯Cである。脚部を欠失する。

142は土師器の甕Bbである。体部内面のヘラケズリは頸部の屈曲点より下方までである。

SHK006 (図版83、写真図版80・91)

143は須恵器の高杯の脚部である。長方形透かしを3方にもつ。

144は須恵器の杯蓋である。天井部と体部の境には凹線が巡り、口縁部には稜のあまい内傾する端面をもつ。

145は須恵器の有蓋高杯である。杯部外面にはカキ目調整がみられる。

146は土師器の甕Bbである。体部内面のヘラケズリは頸部の屈曲点より下方までである。体部外面はハケ仕上げである。

SHK008 (図版84、写真図版80)

147は須恵器の杯身である。たちあがりが高く、口縁部端面を丸くおさめる。底部外面のヘラケズリの範囲は比較的広い。

148は須恵器の無蓋高杯である。杯部には上下を明瞭な段で区分した紋様帯があり、櫛描波状紋が巡る。口縁の残存率は約1/5であり、紋様帶上のつまみの有無は不明である。幅広の長方形透かしを3方にもつ。

149は土師器の甕Bcである。体部内面のヘラケズリは頸部の屈曲点より下方までである。体部外面はハケ仕上げである。

150は土師器の高杯Dbである。口縁部は縦方向のハケのちナデで仕上げる。体部にはユビオサエが

残る。

151は土師器の椀である。底部は小さく突出する。

SHK009 (図版84、写真図版80・81・91)

152・153は須恵器の杯蓋である。ともに天井部と体部の境には稜をもち、152の口縁端部には水平な面を、153には内傾する端面をもつ。

154は須恵器の有蓋高杯の蓋である。天井部と体部の境にはあまり稜をもち、天井部の中心には中くぼみのつまみをもつ。

155は須恵器の杯身である。口縁端部は丸くおさめている。

156・157は土師器の壺Abである。体部内面の上半には粘土紐の接合痕が残る。体部外面の調整は156はナデ仕上げであり、157はハケ仕上げである。

158は土師器の甕Baである。体部の調整は、外面がハケ仕上げ、内面がハケのちヘラケズリである。

159は土師器の甕Bbである。体部の調整は、外面がハケ仕上げ、内面がハケのちヘラケズリである。

160は土師器の高杯Cである。杯部外面にはハケが残る。161～163は土師器の高杯Dbである。161・163は器壁の摩滅により体部外面の調整は観察不可能だが、162は横方向のヘラケズリを施す。口縁部はヨコナデ仕上げ、杯部内面には暗文風の放射状ヘラミガキを施す。脚部は、直立する脚柱部と短く水平にのびる裾部からなる。164・165は土師器の高杯の脚部である。外傾する脚柱部とさらにひろがる裾部がなり、脚柱部内面にはヘラケズリが施される。

SHK010 (図版84、写真図版81)

166は須恵器の高杯の脚部である。長方形透かしを3方にもつ。

167は土師器の脚部である。直立する脚柱部と短く水平にのびる裾部からなる特徴から、おそらく高杯Dbの脚部と思われる。

168は土師器の壺Abである。体部内面の下半にはヘラケズリが、上半には粘土紐の接合痕が残る。

169は土師器の椀Bである。体部外面はユビナデ、内面はハケのちナデ仕上げである。

170は土師器の甕Aaである。体部外面はハケ仕上げ、内面にはヘラケズリを施す。

SHK012 (図版85、写真図版81・82)

171は須恵器の杯蓋である。天井部は丸く、体部との境はあまり稜が突出する。口縁部には内傾する端面をもつ。172は須恵器の杯身である。たちあがりの端部には内傾する端面をもつ。

173は土師器の甕Bbである。体部を欠失する。174・176・177は土師器の甕Aaである。体部内面のヘラケズリは頸部の屈曲点より下方までである。体部外面はハケ仕上げである。175は土師器の甕Abである。体部内面のヘラケズリは頸部の屈曲点より下方までである。

178は土師器の椀である。ナデ仕上げであるが、体部外面に粘土紐の接合痕が残る。

179・180・181は土師器の高杯Dbである。179は脚部を欠失する。180は完形である。杯部外面には横方向のヘラケズリを施す。口縁部はヨコナデ仕上げ、杯部内面には暗文風の放射状ヘラミガキを施す。脚部は、直立する脚柱部と短く水平にのびる裾部からなる。脚柱部外面には縦方向のヘラミガキを施す。181は器壁の摩滅が激しいが、杯部内面の暗文風の放射状ヘラミガキ、脚柱部外面の縦方向のヘラミガ

キを観察することができる。182は土師器の高杯脚部であるが、Dbの可能性が高い。脚柱部外面には縦方向のヘラミガキを施す。

SHK013（図版85、写真図版82）

183は土師器の椀Bである。底部は平底である。内外面ともナデ仕上げである。

184は土師器の甕Aaである。体部内面のヘラケズリは頸部の屈曲点まで及ぶ。

SHK014（図版85、写真図版82・91）

185は須恵器の杯蓋である。天井部の丸みは強く、体部との境はあまく稜が突出する。口縁部には内傾する端面をもつ。186は須恵器の杯蓋である。天井部は低平であり、体部との境には凹線が巡る。口縁部には内傾する端面をもつ。

187は土師器の高杯Daである。器壁は比較的厚い。杯部内面には暗文風の放射状ヘラミガキが施され、裾部内面にはエビオサエが顕著に残るのが特徴的である。

188は土師器の甕Aaである。体部内面のヘラケズリは頸部の屈曲点には及ばない。外面はハケ仕上げである。189は土師器の甕Bbである。調整は188と同様である。

190は土師器の甕である。肩部から炊き口、底部の2箇所の破片から、平面形を正円とみなして復元図化した。破片が小さいこと、椭円形を呈する可能性もあることから、水平方向の復元については類例の出土等をもって再検討すべきと考える。炊き口の横および上方には、高さ約1cmのタガ状の粘土帯を巡らせる。この粘土帯は底部接地面の粘土帯に連続していると思われる。また、炊き口上方の粘土帯は縁から3cmほどの間隔をもって貼り付けられ、肩部を囲繞する粘土帯に接続している。器壁の調整については、外面がハケのちナデ仕上げ、内面がナデ仕上げで、粘土紐の接合痕が残る。内外面とも煤の付着は認められず、甕として使用しなかった可能性もある。

SHK015（図版85、写真図版82）

191・192・193は須恵器の杯身である。191はたちあがりが高く、口縁部端面はわずかに内傾する。192・193はともに口縁部に内傾する端面をもつ。

SHK016（図版86、写真図版82・83・91）

194・195は須恵器の杯蓋である。194は天井部は低平であり、体部との境はあまく稜が突出する。口縁部には内傾する端面をもつ。195は天井部は丸く、体部との境はあまく稜が突出する。口縁部にはわずかに内傾する端面をもつ。ヘラ削りの範囲は比較的広い。196・197は無蓋高杯である。196は杯部に突帯をもち、その直下に櫛描波状紋が巡る。口縁の残存率は約1/8であり、紋様帶上のつまみの有無は不明である。197は杯部に2つの段と沈線で区分した紋様帶があり、そこに櫛描波状紋が巡っている。口縁の残存率は約1/6であり、紋様帶上のつまみの有無は不明である。

198は土師器の甕Bbである。

199は土師器の高杯Baである。杯部内面の調整はハケ仕上げである。脚部外面にはヘラミガキ、内面にはヘラケズリが施される。

SHK017 (図版86、写真図版83・91)

200・201は須恵器の杯身である。200は体部がやや低平であり、口縁部に内傾する端面をもつ。201は体部は丸く、口縁部端面もほぼ水平である。

202は土師器の壺Abである。体部外面はハケ仕上げ、内面はヘラケズリが施される。

203は土師器の高杯である。直立する脚柱部、水平にのびる裾部という特徴的な形状は、高杯Dbのものである蓋然性が最も高い。

204は土師器の手づくね土器である。内面にはユビオサエの痕跡が残る。

205は製塙土器である。硬質で、器壁が2mm程度の薄手小形の土器である。ナデ仕上げである。

SHK018 (図版86)

206は土師器の高杯Dbである。脚部を欠失する。杯部外面は横方向のヘラケズリ、内面は縦方向のハケ仕上げである。口縁部にはナデが施される。

207・208は製塙土器である。ともに硬質で、器壁が2mm程度の薄手小形の土器である。内外面はナデ仕上げである。208については、体部より口縁部がやや狭まっている。

SHK019 (図版86、写真図版83)

209・210は須恵器の杯蓋である。209は天井部は低平であり、体部との境はあまく稜が突出する。口縁部にはほぼ水平な端面をもつ。210も天井部は低平であり、体部との境には凹線が巡る。口縁部には内傾する端面をもつ。

211は土師器の壺Aaである。体部外面はハケ仕上げ、内面はヘラケズリであり、口縁部内外面はハケ仕上げである。

212・213は土師器の壺Aaである。

214は土師器の高杯脚部である。Dbの脚部である蓋然性が高い。

SHK021 (図版86)

215は須恵器の杯蓋である。天井部と体部との境はあまい。口縁部に内傾する端面をもつ。

SHK022 (図版86)

216は須恵器の杯蓋である。天井部と体部との境はあまく稜が突出する。口縁部にはほぼ水平な端面をもつ。

217は土師器の壺Aaである。体部外面はハケ仕上げ、内面はヘラケズリである。

SHK023 (図版86、写真図版83・91)

218は須恵器の壺である。低い稜をもって区画された口縁部と頸部の両方に櫛描波状紋が巡る。219は須恵器の杯蓋である。天井部と体部との境に突出した稜があり、天井部は丸く高い。口縁部には内傾する端面をもつ。220は須恵器の杯身である。器高の割にたちあがりが高い。底部の回転ヘラ削りの範囲は比較的広い。口縁端部は丸く仕上げている。

221は土師器の壺Bbである。体部外面はハケ仕上げ、内面はヘラケズリである。

222は土師器の椀Aである。内面には暗紋状のヘラミガキを施し、外面はユビオサエで仕上げる。口縁部はヨコナデをし、内傾する端面をつくることにより薄く仕上げている。

223は土師器の高杯脚部である。Dbの脚部である蓋然性が高い。

SHK025 (図版86、写真図版83・91)

224は土師質の円筒埴輪片である。残存状況の悪い小片である。内面は縦方向のハケ仕上げ、外面は摩滅しているが、突帯の貼り付けの際のナデが確認できる。SHK014出土の190のような突帯を巡らせる竈の可能性もある。

225は須恵器の杯蓋である。天井部と体部との境にあまく突出した稜があり、天井部は丸い。口縁部には内傾する端面をもつ。

226は土師器の甕Abである。口縁部の器壁は比較的厚い。

SBK001 (写真図版92)

605は須恵器の甕である。体部下半の破片であり、最大径付近に円孔の一部を認める。

SPK001 (図版87、写真図版91)

227は土師器の椀Aである。体部外面はヘラケズリののちナデ仕上げである。

228は土師器の甕Baである。体部外面はハケ仕上げ、内面にはヘラケズリを施す。

229は土師器の壺Aaである。頸部はわずかに外反しながら直立する。頸部内面はハケ仕上げである。

SPK004 (図版87)

230は須恵器の杯身である。底部の回転ヘラ削りの範囲は比較的広い。口縁端部は丸く仕上げている。

SPK005 (図版87、写真図版83)

231は土師器の高杯の脚部である。裾部内面はハケ仕上げである。脚柱部から裾部にかけての外面にはユビオサエの痕跡が顕著にみられる。

SPK006 (図版87)

232は土師器の甕Bcである。器壁の摩滅により調整方法は観察不可能である。

SKK001 (図版87、写真図版83・84)

233・234は土師器の壺Acである。体部と頸部の境にナデを加えるため、口縁部外面には稜を有する。体部内面にはヘラケズリがみられる。

SKK002 (図版87)

235は土師器の甕Aaである。

SKK003 (図版87)

236は須恵器の小型罐である。頸部以上を欠失する。体部の最も張り出したところに、上下を浅い沈線で区切られた紋様帶があり、刺突紋が密に巡っている。紋様を切る形で円孔が穿たれる。肩部は「く」字形に張る。

237は土師器の甕Bbである。ナデ仕上げである。

SKK004 (図版87、写真図版84)

238は須恵器の大型罐である。口縁部を欠失する。頸部外面には櫛描波状紋が巡る。頸部と口縁部の境には突出した突帯が認められる。体部の最も張り出したところに、上下をそれぞれ浅い2条の沈線で区切られた紋様帶があり、櫛描波状紋が巡っている。紋様を切る形で円孔が穿たれる。肩部は強く張らず、なだらかに移行する。底部内面には刺突による凹凸が目立つ。

宮ヶ田I地区包含層 (図版87~91、写真図版84~87・92・93)

239~245は須恵器の蓋である。高杯の蓋である242以外は杯蓋である。239~241は天井部と体部との境にあまく突出した稜があり、天井部は丸い。口縁部には内傾する端面をもつ。242のつまみは当該時期のそれに通有な中くぼみではなく、大きさも比較的小さいものである。243は天井部は低平であり、体部との境には凹線が巡る。口縁部には内傾する端面をもつ。244の天井部と体部との境は連続的で稜をもたない。口縁部は丸くおさめている。245は蓋Bであり、つまみを欠失する。口縁部より下方に大きく突出するかえりをもつ。

246~258は須恵器の杯身である。246~252は口縁部に内傾する端面をもち、253~258の口縁部は丸くおさめる。254は内面に漆膜が付着している。

259は須恵器の無蓋高杯である。脚部を欠失する。杯部に上部に2条、下部に1条の突帯で区分した紋様帶があり、そこに櫛描波状紋が巡っている。口縁の残存率は約1/6であり、紋様帶上のつまみの有無は不明である。

260は須恵器の有蓋高杯である。脚部の裾があまりひろがらない。脚部の透かしの幅については不明であるが、長方形の3方透かしであることは分かる。

261~266は須恵器高杯の脚部の破片である。261は長方形透かしを3方にもち、外面には縦方向に平行する3本のヘラ描きがみられる。262は長方形透かしを3方に、263は4方にもつ。264はやや長脚であり、小片であるものの長方形透かしを4方にもつことが分かる。265は長方形透かしを3方にもつ。266は裾が大きくひろがるもので、円孔が3方に穿たれ、その直下に突帯が1条巡っている。

267~270・276~278は須恵器の甕である。267~270のいずれの口縁部にもほぼ直立する端面を形成するが、2条の凹線をもつもの(267)、稜をもつもの(268・269)、平坦なもの(270)がある。268の頸部にはヘラ描きの刻線が、269にはカキメがみられる。276~278はやや古式の甕であり、朝顔形に外反する口縁部をもち、端部近くに断面三角形の突帯を形成する。突帯の下方に櫛描波状紋をもつもの(276・278)と無紋のもの(277)がある。278は口径41.6cmの大型の甕である。

271は須恵器の小型罐である。口縁部を欠失する。体部の最も張り出したところに円孔が穿たれる。上下を浅い沈線で区切られた紋様帶があり、刺突紋が巡るが、通有のものより位置が高く肩部に施される。頸部上端付近にも刺突紋がみられる。

272は須恵器の短頸壺である。平底を呈しており、底部内面には刺突による凹凸がみられる。肩部はカキメ仕上げである。

273・274は須恵器の器台である。273は杯部から脚部にかけての破片である。杯部の底部外面には平行タタキが施される。脚部は低い段で区切られた最上段のみが残存している。櫛描波状紋の施文後、三角形の透かし孔を穿っている。274は脚部下半の破片である。低くつまみ出した突帯によって紋様帯が区切られており、櫛描波状紋の施文後、三角形の透かし孔が穿たれている。最下段は無紋で、端部は内湾する端面を形成する。

275は須恵器の提瓶である。体部上半から頸部にかけての小片である。肩部に環状の耳が残存している。体部外面は平行タタキ、内面は同心円の当て具の痕跡をとどめる。

279・280は土師器の壺Aaである。280は口縁端部が内側に肥厚している。281～283は土師器の壺Abである。281は器高に対する口縁部の長さの比率が比較的高く、体部上半内面の粘土組接合痕もとどめないほど、丁寧なナデ仕上げである。284～286は土師器の壺Baである。284・285の1次口縁は直立する頸部から大きく外側に屈曲する形態であるが、286のそれはなだらかに外反するものである。287～290は土師器の壺Bbである。1次口縁の形態により細分される可能性がある。287・288はゆるやかに外反し、289は内傾気味に直立する。290・291は外傾する。291については2次口縁を欠失するため、壺Baの可能性もある。291は1次口縁と2次口縁の接地面積を増やす工夫か、1次口縁の端部上面にはヘラ状工具による刻みが密に施されている。体部上半内面の調整はハケ仕上げであるのが特異である。

292・293・295～298は土師器の壺Bbである。調整の判明するもの多くは、体部外面に縱方向のハケ仕上げを施し、体部内面には横方向のヘラケズリが用いられる。294・299は土師器の壺Bcである。300は壺Abである。301～309は土師器の壺Aaである。法量からは数種類に分けられるが、調整は共通しており、体部外面をハケ、同内面をヘラケズリ、口縁部をヨコナデ仕上げするものが多く、口縁部内面にはハケが残るものも多い。中型の308・309は口縁上端をナデすることにより、薄く仕上げている。310～316は土師器の壺Baである。法量の差は壺Aaほど顕著ではない。調整は共通しており、体部外面をハケ、同内面をヘラケズリ、口縁部をヨコナデ仕上げするものが多く、口縁部内外面にハケが残るものも多い。317・318は土師器の壺Abである。317は小形である。

319～323は器種不明の土師器である。319は水平にのびる把手がみられる。

320は須恵器壺の体部の破片である。外面は平行タタキ、内面がナデ仕上げである。内面に生物遺体の痕跡がみられる。何らかの原因で器体に混入したまま乾燥、焼成されたものと思われる。生物遺体は、土器の胎土に含まれており、腹部を土器の内側に向かって形で器表面に圧痕として観察できる。この虫は、頭部・胸部・腹部・尾部からなり、頭部には2本の触角がみられる。脚は、8節からなる各胸節に

1対ずつある。全長は約9mm、幅は約3mmを測る。甲殻類の等脚目（ワラジムシ目）であるが、細分種については不明である。明治時代に入ってきた外来種であるワラジムシやオカダンゴムシ（いわゆるマルムシ）、海岸に生息するフナムシ等とは考えがたいため、内陸の林床や湿地にみられるヒメフナムシ等とするのが妥当であろう。

321～323は土師器の壺あるいは壺である。いずれもヘラ描き沈線がみられる。



第23図 320内面の昆虫圧痕

324は土師器の高杯Acである。杯部内面には細かなヘラミガキが密に施されている。

325は土師器の椀Aである。器壁の摩滅が激しいが、ナデ仕上げのようである。

326・327・330は土師器の高杯Dbである。326は杯部外面をヘラケズリし、口縁部をヨコナデ仕上げする。内面には暗文風のヘラミガキが施される。330は杯部下半にユビオサエがみられる。328・329は土師器の高杯Daである。ともに杯部内面には暗文風のヘラミガキが施される。体部の深さに若干の差異がみられる。331・332は土師器の高杯Baである。ともに体部の内面はハケ仕上げであるが、外面は331がハケ、332がヘラケズリである。333～348は土師器の高杯脚部である。333・335は円形の透かし穴をもち、334は脚柱部と裾部の境が不明瞭な個体であり、これらは弥生土器の可能性もある。346～348は高杯Dbの脚部である。

SHK026 (図版92、写真図版87～89・93)

須恵器は出土していない。

349～354は土師器の壺Acである。口径は体部最大径とほぼ等しいかやや小さく、口縁部の長さは器高の1/3程度である。体部内面はユビナデあるいはヘラケズリで仕上げ、外面はハケ仕上げである。口縁部は内外面ともハケ仕上げのものとナデ仕上げの両者がある。355～359は土師器の壺Abである。調整は壺Acと同様である。

360は椀形の手づくね土器である。

361は土師器の壺Baである。器壁の摩滅のため調整は観察不可能である。362・363は土師器の壺Bbである。外面は体部から1次口縁にかけてハケ仕上げを行う。体部内面はヘラケズリで、口縁部にはヨコナデを施す。363は肩部にヨコナデを加え、そこにヘラ描きの刻線を巡らせている。

364・365・367・370は土師器の甕Aaである。366・371は土師器の甕Baである。366は体部以下を欠失する。371は全形をうかがうことができる。体部の形状はやや縦長の球形を呈する。底部内面にはユビオサエの痕跡が顕著に残存している。体部内面はヘラケズリ、体部外面はハケ仕上げである。368は土師器の甕Bcである。369は甕あるいは壺の底部の破片である。

372・373は土師器の高杯Baである。器壁の調整はハケを基本とし、口縁部、裾部をナデ仕上げする。脚柱部は中空であり、ヘラケズリが施される。374は土師器の高杯Acである。器壁の調整の大半はナデ仕上げであるが、体部外面にはヘラケズリを施している。375・376は土師器の高杯Aaである。調整はハケ仕上げである。体部外面中央、すなわち円筒形の脚部との接合部には、上方からの押さえ込みによる粘土塊のはみ出しがみられ、これは当遺構出土高杯の多くに顕著な特徴である。377は土師器の高杯Abである。口縁部内面には暗紋状のヘラミガキが施される。378～383は土師器の高杯脚部である。380～383は脚柱部内面上端付近に絞り目が残っている。

SHK027 (図版93)

須恵器は出土していない。

384は脚部を欠失する土師器の高杯Bbである。外面はハケ仕上げであり、内面はナデ仕上げである。

SHK028 (図版93、写真図版90)

須恵器は出土していない。

385・386は土師器の壺Acである。この器種については、体部外面にはハケが施されることが多いが、385はヘラケズリがみられる。

387は土師器の高杯脚部である。脚柱部外面の上端付近には1条の沈線が巡る。

388は土師器の甕Baである。口縁部には水平な端面を形成する。

SKK010 (図版94、写真図版90)

須恵器は出土していない。

389は土師器の甕Bbである。小型である。口縁部外面には直立する端面をもつ。

390～393は土師器の高杯Baである。体部に比して口縁部の長さが際だっている。

SKK011 (図版94)

394は土師器の高杯Aaである。器壁の摩滅のため調整の観察は不可能である。

宮ヶ田II地区包含層 (図版94、写真図版90・93)

395は須恵器の杯蓋である。天井部と体部との境はあまい稜で区別される。口縁端部には内傾する端面をもつ。396は須恵器の杯身である。口縁端部は一見したところ丸くおさめているように見えるが、端面を形成するためのナデの痕跡が残っている。

397・398は土師器の甕Aaである。397の体部は若干縱長の球形である。底部内面にユビオサエを残す。

(4) 律令期

量的に少なく、図示し得た21点はすべて須恵器である。遺構内より出土したのは道路遺構の側溝からの土器だけであり、その他は包含層からの出土である。

SFR001 (桜地区) 東2次側溝 (図版95)

399は扁平なつまみの破片であり、杯B蓋か。

SFR001 (桜地区) 西1次側溝 (図版95)

400は杯Aの底部から口縁部下端にかけての破片で、口縁部は底部から斜め上方に開く。

SFR001 (桜地区) 西2次側溝 (図版95)

401は杯Aの口縁部で、内湾した形状となっている。402は頂部に扁平なツマミがつく杯B蓋で、天井部外面はヘラ削り、内面に仕上げナデを施す。

桜地区包含層 (図版95)

403は杯Aの底部片で、底部と口縁部の境は湾曲する。404は扁平な杯B蓋で、口縁端部の屈曲は比較的明瞭である。405は小形で扁平な蓋で外面ヘラ削り、内面に仕上げナデを施す。

SFR001 (宮ヶ田I地区) 西側溝 (図版95、写真図版94)

406は天井部の高い杯B蓋で、頂部のツマミは扁平になっているが縁は比較敵銳い。口縁端部の屈曲は比較的明瞭である。

SFR001 (宮ヶ田I地区) 東2次側溝 (図版95)

407は小形の杯B底部で、口縁部と底部の境は屈曲する。高台は低い。408は杯Aで、底部は丸みを持ち、口縁部は斜め上方に大きく開く。口縁端部は下方が強くなられ、外反気味となる。

宮ヶ田I地区包含層 (図版95、写真図版94)

409~412は杯Bで、409・412は口径12.3~12.6cm、器高3.9cmの小形の杯Bである。ともに口縁部が底部から屈曲して立ち上がる形状であり、高台は底部と口縁部の境に沿うように貼り付けられている。

412の高台は断面が三角形状を呈する。口縁部内面には中央よりやや上位に強いナデが施されている。

409の底部外面には爪圧痕が円形に施されている。412には底部の内外面に墨書があるが判読できない。

410・411は深い器形の杯Bで、口径14.7~15.8cm、器高5.3~6.0cmを測る。410は底径が縮少し、口縁部が中ほどから大きく開いて椀形の器形になっている。411は所謂杯Bの器形を留めているが、底部と口縁部の境に高台が貼り付けられている。

413・414は皿Aで、口径14.3~14.8cm、器高1.9~2.0cm。414は口縁部が中程から外反する。415は底部外面に墨書があり、「部」と判読できる。

415は甕で、口径22.1cm。口縁端部は下側に折り返して拡張された面をもつ。体部内面に叩き当て具の痕跡が僅かに残る。

山内南地区包含層 (図版95、写真図版94)

416は底部と口縁部の境から内側に寄った位置に、比較的しっかりした高台が貼り付けられている。

底部外面に墨書が認められるが、判読はできなかった。

(5) 中世

中世の土器には須恵器、土師器、瓦質土器、国産陶器、輸入陶磁などがある。このうち須恵器、土師器のうちの一部はあらためて分類をおこない、国産陶器、輸入陶磁については巻末に記した文献を参考に記述を行った(尾野 1995、赤羽・中野 1995、森田・横田 1978)。なお、灰釉陶器については尾野善裕氏(京都国立博物館)のご教示を得た。

須恵器の型式分類

須恵器は碗・小皿・鉢・壺・甕などが出土しているが、比較的出土量の多い碗、鉢のみ細分を行う。

碗 体部に丸みをもつもの。底部は糸切りである。

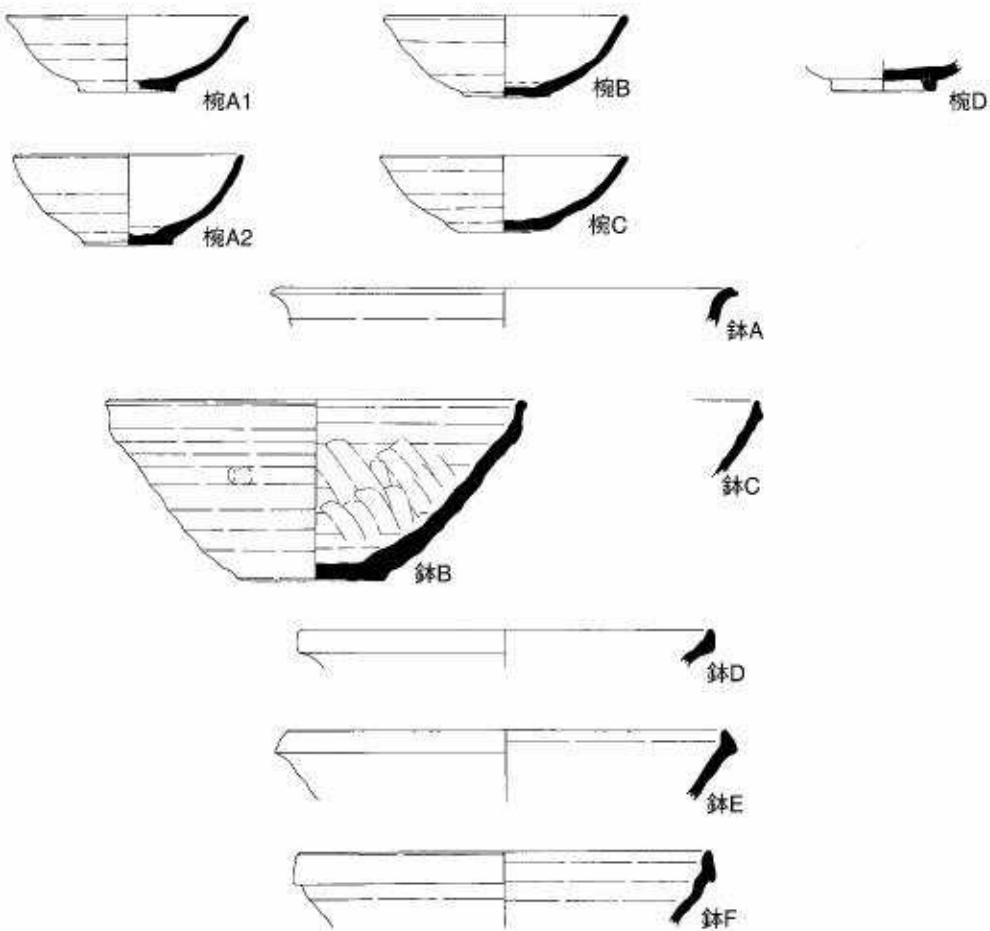
碗A 高台が明瞭に突出するもの。

碗A1 底部内面が平坦なもの。

碗A2 底部内面に凹みをもつもの。

碗B 高台がわずかに突出するもの。底部内面に凹みをもつ。

碗C 高台が突出しないもの。底部内面は平坦である。



第24図 須恵器の型式分類

碗D 輪高台をもつもの。

小皿 口径11cm未満の小形の皿である。

鉢 片口をもつ捏鉢と考えられるものである。

鉢A 口縁部が外反するもの。

鉢B 口縁部の断面が方形になるもの。

鉢C 口縁部の端面が外傾し、断面が三角形になるもの。

鉢D 口縁部が丸みをもつもの。

鉢E 口縁部が丸みをもち、端面の外縁が拡張するもの。

鉢F 端面の外縁が垂下するもの。

土師器の型式分類

土師器は碗・小碗・杯・皿・小皿・鍋・羽釜・壺などが出土している。

碗 平高台が突出するもの。底部は糸切りである。

小碗 口径11cm未満の小形の碗である。

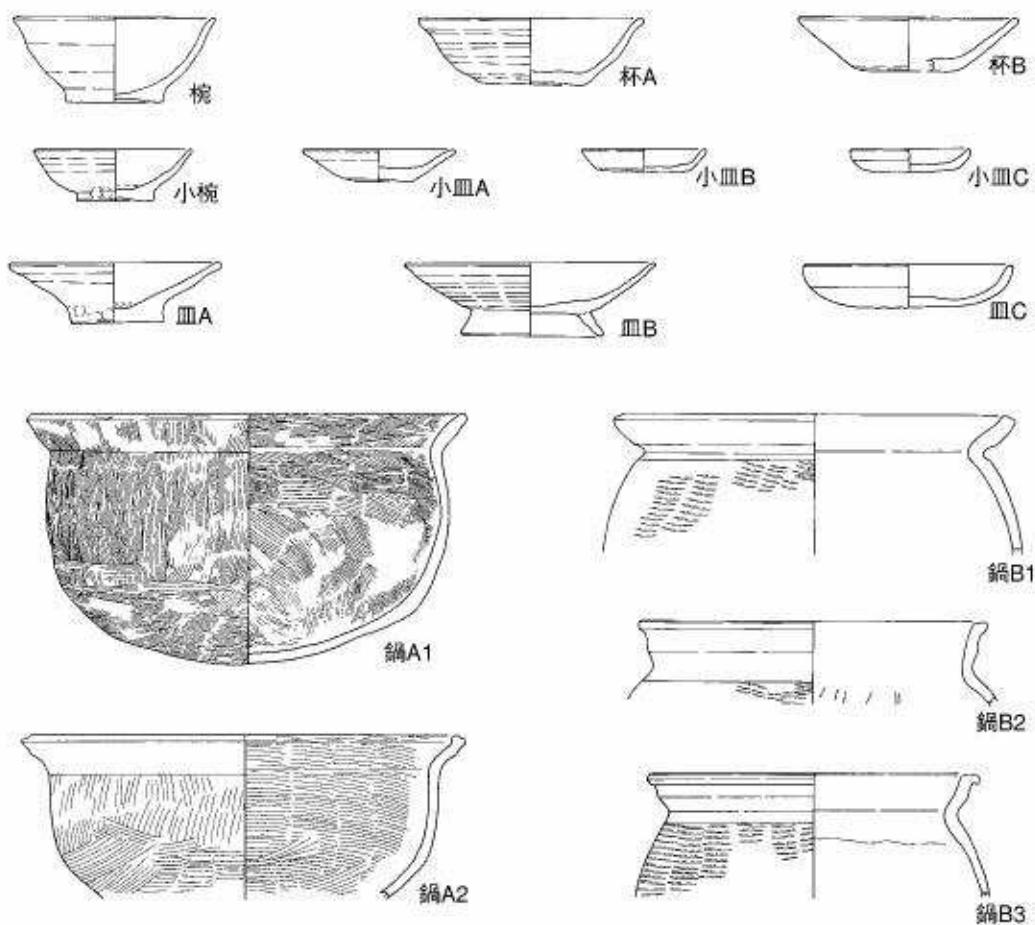
杯 底部は突出せず、底部内面も平坦である。

杯A 底部は糸切りである。

杯B 底部はヘラ切りである。

皿 口径11cm以上の皿である。

皿A 突出した平高台をもつもの。底部は糸切りである。



第25図 土師器の型式分

皿B 高い輪高台をもつもの。托底部は糸切りである。

皿C 手づくね成形のもの。

小皿 口径11cm未満の皿である。

小皿A 底部が糸切りのもの。

小皿B 底部がヘラ切りのもの

小皿C 手づくね成形のもの。

鍋

鍋A ハケ目調整を行うもの。

鍋A1 口縁部が外反するもの。

鍋A2 口縁部が内湾するもの。

鍋B 体部外面に平行タタキ痕を残すもの。

鍋B1 口縁端部を拡張しないもの。

鍋B2 口縁端部を外側につまみ出すもの。

鍋B3 口縁端部を外側に折り曲げるもの。

SDY001 (図版96)

須恵器碗が出土している。

417は須恵器碗A1である。高台はやや突出し、高台脇は丸みをもっている。底部は糸切りである。

SKC001 (図版96、写真図版95)

須恵器碗、土師器鍋が出土している。

418は須恵器碗Cである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。419は土師器鍋A1である。口縁部は短く外反し、体部は膨らまない。内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、口縁部外面はヨコナデが施されている。

岡ノ森地区包含層 (図版96、写真図版95)

須恵器碗、灰釉陶器皿、白磁碗が出土している。

420は須恵器碗A2である。底部は糸切りである。421は灰釉陶器皿である。低い輪高台をもち、底部は糸切りである。残存部分には施釉は認められない。東濃産の丸石2号窯式のものと考えられる。422は白磁碗IV類の底部である。

SBC003 (図版96、写真図版95)

須恵器碗、土師器碗が出土している。

423は須恵器碗である。内外面とも回転ナデが施されている。424は土師器碗である。径の大きい底部をもち、口縁部が外反する。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC004 (図版96、写真図版95)

須恵器碗が出土している。

425は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC006 (図版96、写真図版95)

土師器杯が出土している。

426は土師器杯Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC007 (図版96、写真図版95)

土師器杯・碗・皿・小皿が出土している。

427は土師器杯Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。428は土師器碗である。径の大きい底部をもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。429は土師器皿Bである。高い輪高台をもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。430は土師器小皿Aである。口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC009 (図版96、写真図版95)

須恵器碗が出土している。

431は須恵器碗である。口縁端部がやや肥厚する。内外面とも回転ナデが施されている。

SBC010 (図版96、写真図版95)

須恵器碗、灰釉陶器碗が出土している。

432は須恵器碗である。口縁部が外反している。内外面とも回転ナデが施されている。外面のナデは強く施され凹凸が明瞭である。433は灰釉陶器碗である。口縁部は外反し、体部上半以上に施釉がなされている。

SBC011 (図版96、写真図版95)

須恵器小皿が出土している。

434は須恵器小皿である。内外面とも回転ナデで、底部はヘラ切り後ナデが施されている。

SBC014 (図版96、写真図版95)

須恵器碗が出土している。

435は須恵器碗Cである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC016 (図版96、写真図版95)

須恵器碗が出土している。

436は須恵器碗A1である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC017 (図版96、写真図版95)

須恵器鉢、土師器皿・小皿が出土している。

437・438は須恵器鉢Dである。438は口縁部端面の外縁がやや拡張気味である。内外面とも回転ナデが施されている。439は土師器皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。440は土師器小皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。

SBC018 (図版96、写真図版96)

須恵器鉢、土師器小皿が出土している。

441は須恵器鉢Dである。やや丸みが少ない。内外面とも回転ナデが施されている。442は土師器小皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。

SBC019 (図版96、写真図版96)

土師器小皿・鍋が出土している。

443～445は土師器小皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。446は土師器鍋A2である。口縁部内面はタテハケ、口縁部外面はヨコハケが施されている。447は土師器鍋B2である。口縁部はヨコナデが施されている。

SBC020 (図版96、写真図版96)

土師器小皿が出土している。

448は土師器小皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。

SBC021 (図版96、写真図版96)

須恵器鉢が出土している。

449は須恵器鉢Aである。内外面とも回転ナデが施されている。

SBC022 (図版96、写真図版96)

須恵器碗、土師器小皿・鍋が出土している。

450は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。451は須恵器碗A1である。高台脇は丸みをもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。452は土師器小皿Aである。底部は糸切りである。453は土師器鍋A1である。体部はやや膨らみをもっている。口縁部外面は斜め方向のハケ、体部外面はタテハケ、内面はヨコハケが施されている。

SBC023 (図版96、写真図版96)

須恵器碗、土師器小皿が出土している。

454は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。455・456は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。455は底部は径が小さく、やや突出している。

SBC024 (図版97、写真図版96)

土師器小皿・鍋、灰釉陶器碗が出土している。

457・458は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。460は土師器鍋B1である。体部はほとんど膨らまず、口縁部はやや上方気味に開いている。体部内面はナデ、体部外面上半はナデ、体部外面下半は平行タタキ、口縁部はヨコナデが施されている。459は灰釉陶器碗である。施釉は見込み部分にまでは及んでいない。東濃産と考えられる。

SBC026 (図版97、写真図版96)

須恵器碗・鉢が出土している。

461は須恵器碗Cである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。462・463は須恵器鉢Bである。463の口縁部はやや外反気味である。内外面は回転ナデが、内面にはさらに斜め方向のナデが施されている。底部は糸切りである。

SBC027 (図版97、写真図版97)

土師器小皿が出土している。

464は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC028 (図版97、写真図版97)

須恵器碗、土師器鍋が出土している。

465は須恵器碗A2である。高台脇に丸みをもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。466は土師器鍋A1である。口縁部は内外面ともヨコナデである。

SBC030 (図版97、写真図版97)

土師器碗が出土している。

467は土師器碗である。高台と体部の境は鋭角的である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC031 (図版97、写真図版97)

須恵器碗、土師器皿・小皿・鍋・瓦質土器羽釜が出土している。

468は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。469は土師器皿Cである。底部内面はナデ、口縁部は2段にヨコナデが施されている。470・471は土師器小皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。472は土師器鍋A2である。体部はほとんど膨らまず、口縁部はわずかに内湾しながら開いている。体部はナデ、口縁部外面はヨコナデ、口縁部外面はヨコハケが施されている。473は瓦質土器羽釜である。ほぼ直立する口縁の直下に鍔をめぐらせている。内外面とも回転ナデが施されている。

SBC032 (図版97、写真図版97)

須恵器碗・小皿・土師器杯・小皿が出土している。

474～476は須恵器碗Cである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。477は須恵器小皿である。体部のナデが強く、口縁端部がやや肥厚する。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。478は土師器杯Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部はヘラ切りである。479は土師器小皿Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部はヘラ切りである。480は土師器小皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。

SBC033 (図版97、写真図版97)

土師器鍋が出土している。

481は土師器鍋B1である。口縁端面外縁をややつまみ出し気味である。内外面ともヨコナデが施されている。482は土師器鍋B2である。内外面ともヨコナデが施されている。

SBC034 (図版97、写真図版97)

土師器小皿が出土している。

483は土師器小皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。

SBC035 (図版97、写真図版97)

須恵器碗、土師器鍋が出土している。

484は須恵器碗である。内外面とも回転ナデが施されている。485は土師器鍋である。体部は膨らまず、口縁部は直線的に外方に開く。体部外面はタテハケ、口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケが施されている。

SBC036 (図版97、写真図版98)

須恵器碗が出土している。

486は須恵器碗A1である。高台脇は丸みをもち、口縁部は外反している。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。487は須恵器碗Dである。断面方形の輪高台をもち、底部は糸切りである。

SBC037 (図版97、写真図版98)

須恵器鉢が出土している。

488は須恵器鉢Aである。内外面とも回転ナデが施されている。

SBC039 (図版97、写真図版98)

須恵器碗が出土している。

489は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC040 (図版98、写真図版98)

土師器小皿・鍋が出土している。

490は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。491は土師器鍋B2である。内外面ともヨコナデが施されている。

SBC042 (図版98、写真図版98)

土師器皿・小皿が出土している。

492は土師器皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。493は土師器小皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。

SPC003 (図版98、写真図版98)

須恵器碗、土師器小皿が出土している。

494は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。495は土師器小皿Aである。高台が高く突出している。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SPC004 (図版98、写真図版98)

須恵器碗、土師器小碗・鍋が出土している。

496は須恵器碗Bである。器高が高く、体部の丸みも強い。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。497は土師器小碗である。高台が高く突出し、高台と体部の境が鋭角的である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。498は土師器鍋A1である。体部の膨らみが大きい。体部外面はタテハケ、体部内面下半はタテハケ、体部内面上半～口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面はヨコナデが施されている。

SPC005 (図版98、写真図版98)

土師器杯が出土している。

499は土師器杯Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SPC006 (図版98、写真図版98)

土師器鍋が出土している。

500は土師器鍋A2である。体部外面はタテハケ後ナデ、口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、体部内面はヨコハケ、口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデが施されている。

SPC007 (図版98、写真図版98)

白磁碗が出土している。

501は白磁碗Ⅸ類である。口縁端部内面は露胎である。

SPC009 (図版98、写真図版98)

須恵器碗が出土している。

502は須恵器碗Cである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SPC010 (図版98、写真図版98)

土師器杯が出土している。

503は土師器杯である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SPC011 (図版98、写真図版98)

灰釉陶器碗が出土している。

504は灰釉陶器碗である。口縁部は外反し、内外面とも施釉がなされている。

SPC015 (図版98、写真図版99)

灰釉陶器皿が出土している。

505は灰釉陶器皿である。低い輪高台をもち、口縁部は外反する。底部は糸切りである。体部外面から体部内面にかけて施釉がなされている。東濃産の丸石2号窯式のものと考えられる。

SPC016 (図版98、写真図版99)

土師器鍋が出土している。

506は土師器鍋A1である。体部はあまり膨らまず、口縁部は短く外側に開く。口縁部外面～体部外面上半はタテハケ、体部外面下半は平行タタキ、内面はヨコハケが施されている。

SPC017 (図版98、写真図版99)

須恵器碗、土師器壺が出土している。

507は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。508は土師器壺である。丸みのある体部に、短く外側に開く口縁部をもつ小型の壺である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SPC018 (図版98、写真図版99)

須恵器碗・土師器杯・小皿・小皿が出土している。

509・510は須恵器碗A2である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。511～513は土師器杯Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。514は土師器小碗である。高く突出した高台をもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。515は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SPC019 (図版98、写真図版99)

白磁皿が出土している。

516は白磁皿である。器壁はやや薄く、体部はわずかに内湾しながら開いている。体部外面下端から高台は露胎である。

SXC001 (図版98、写真図版99)

須恵器碗が出土している。

517・518は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC002 (図版99、写真図版100)

須恵器碗が出土している。

519は須恵器碗Cである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC003 (図版99、写真図版100)

須恵器碗・小皿が出土している。

520は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。521は須恵器小皿である。やや器高が高い。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC004 (図版99、写真図版100)

須恵器壺が出土している。

522は須恵器壺である。球形の体部に強く外反する口縁部をもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC005 (図版99、写真図版100)

土師器小皿が出土している。

523は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC006 (図版99、写真図版100)

土師器小皿が出土している。

524は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC007 (図版99、写真図版100)

須恵器碗が出土している。

525は須恵器碗である。内外面とも回転ナデが施されている。

SKC008 (図版99、写真図版100)

須恵器鉢・甕、土師器皿・小皿・鍋、瓦質土器羽釜が出土している。

526・527は須恵器鉢Eである。内外面とも回転ナデが施されている。528・529は須恵器鉢Fである。

内外面とも回転ナデが施されている。530は須恵器甕である。口縁部は回転ナデが施されている。531～533は土師器鍋B3である。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。534は瓦質土器羽釜である。体部から口縁部にかけて内湾する。内面～口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデが施されている。535～537は土師器小皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。538は土師器皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。539は土師器皿Aである。見込みは大きく凹み、体部も直線的に大きく開いている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC009 (図版99、写真図版100)

土師器皿・小皿が出土している。

540は土師器皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。541は土師器小皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。

SKC010 (図版99、写真図版100)

須恵器碗が出土している。

542は須恵器碗A2である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC011 (図版99、写真図版101)

土師器皿、須恵器鉢が出土している。

543は土師器皿Cである。底部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。544は須恵器鉢Fである。内外面とも回転ナデが施されている。

SKC012 (図版99、写真図版101)

土師器小皿が出土している。

545は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SKC013 (図版99、写真図版101)

灰釉陶器碗が出土している。

546は灰釉陶器碗である。口縁部は外反し、高い輪高台をもっている。底部は糸切りである。口縁部～体部上半にかけて施釉がなされている。東濃産の丸石2号窯式のものと考えられる。

SKC014 (図版99、写真図版101)

土師器皿・小皿が出土している。

547は土師器皿Bである。高い輪高台をもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。548は土師器小皿Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SDC001 (図版99、写真図版101)

須恵器碗が出土している。

549は須恵器碗A2である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SRC001 (図版100、写真図版101)

須恵器碗・鉢、土師器小皿・鍋・羽釜、灰釉陶器碗・皿、白磁碗、青磁碗などが出土している。

550は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。551は須恵器鉢Cである。内外面とも回転ナデが施されている。552は須恵器鉢Dである。内外面とも回転ナデが施されている。553は土師器小皿Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部はヘラ切りである。554は土師器羽釜である。口縁部はやや内湾するが、端面は上方を向いている。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケが施されている。555は土師器鍋B1である。口縁部はやや内湾気味に開いている。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。556は土師器鍋B2である。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデ、口縁部はヨコナデが施されている。557は灰釉陶器碗である。口縁部は外反している。体部下端は露胎である。東濃産と考えられる。558は灰釉陶器皿である。低い輪高台をもち、底部は糸切りである。外面と見込みは露胎である。559は白磁碗である。口縁部内面に面をもっている。560は白磁碗IV類である。561は龍泉窯系青磁碗I-2類である。

SFR001 (図版100、写真図版102)

須恵器碗、土師器鍋が出土している。

562は土師器鍋A2である。体部は膨らまず、口縁端部を折り曲げるようにして上方に向いている。口縁部外面はヨコナデ、体部外面上半はタテハケ、体部外面下半はヨコハケ、内面はヨコハケが施されている。563は須恵器碗である。内外面とも回転ナデが施されている。564~566は碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

桜地区包含層 (図版100、写真図版102)

灰釉陶器碗、白磁碗・皿が出土している。

567・568は灰釉陶器碗である。高い高台をもち、見込みは露胎である。東濃産の丸石2号窯式のものと考えられる。569は白磁皿である。570は白磁碗である。571~575は白磁碗IV類である。

山内南地区包含層 (図版100、写真図版102)

須恵器碗が出土している。

576は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

宮ヶ田I地区包含層（図版101、写真図版102）

須恵器碗・鉢、常滑焼甕、青磁碗・皿、青白磁梅瓶などが出土している。

577は須恵器碗Bである。底部外面に墨書で「桂下」と書かれている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。578は須恵器碗A2である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。579は須恵器鉢Dである。内外面とも回転ナデが施されている。580は常滑焼甕である。口縁端面下端がわずかに垂下している。内外面とも回転ナデである。赤羽・中野編年6a型式のものと考えられる。581は青磁細連弁文碗である。連弁の先端は剣頭状に表現されている。582は青磁雷文帶碗である。583は青磁皿である。見込みは蛇の目釉剥ぎで、高台も露胎である。584は青白磁梅瓶である。内面は露胎である。

SBC048（図版101、写真図版103）

須恵器碗、土師器碗・杯が出土地で出土している。

585は須恵器碗Bである。体部の丸みが強く、深い器形である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。586は須恵器碗A2である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。587・588は土師器碗である。高く突出した平高台をもっている。体部はあまり丸みをもたずにつまっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。589は土師器杯である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC051（図版101、写真図版103）

土師器小碗・杯が出土地で出土している。

590は土師器小碗である。高く突出した平高台をもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。591は土師器杯Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。

SBC052（図版101、写真図版103）

土師器碗・小碗・鍋が出土地で出土している。

592は土師器小碗である。高く突出した平高台をもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。593は土師器碗である。須恵器碗Bの深いタイプのものとほぼ同じ形を呈している。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。594は土師器鍋A1である。体部は球形に膨らみ、口縁部はやや外反しながら開いている。口縁部外面～口縁端部内面はヨコナデ、体部外面上半はタテハケ、体部外面下半はヨコハケ、内面はヨコハケが施されている。

SKC015（図版101、写真図版103）

須恵器碗・小碗、土師器小碗・杯・皿・鍋が出土地で出土している。

595は須恵器碗Bである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。599は須恵器小碗である。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。596は土師器杯Aである。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。597は土師器皿Aである。高く突出した平高台をもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。598は土師器小碗である。高く突出した平高台をもっている。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。600は土師器鍋A1である。体部はわずか

に膨らむ程度で、口縁部は短く外に開く。口縁部外面～体部外面上半はタテハケ、体部外面下半はヨコハケ、口縁部内面～体部内面上半はヨコハケ、体部内面下半はタテハケが施されている。

宮ヶ田II地区包含層（図版101、写真図版103）

須恵器鉢、土師器小皿、灰釉陶器碗が出土している。

601は須恵器鉢Bである。内外面とも回転ナデが施されている。602は土師器小皿Aである。高台がやや突出している。内外面とも回転ナデが施され、底部は糸切りである。603は灰釉陶器碗である。高い輪高台をもっている。底部は回転糸切りで、外面と見込み部分は露胎である。東濃産の丸石2号窯式のものと考えられる。

2. 木製品

(1) 中世以前の木製品

木簡・祭祀具・容器・服飾具・農工具・日常雑具・部材が出土している。製品は量的には少なかったが、掲示した以外に杭・板材等が相当数出土している。木製品の大部分は宮ヶ田I区の谷部から出土したものである。

木簡（図版102、写真図版104）

「山口里倭參上數十一石今 (205) ×35×5 019

W1は板目取りの板材に文字が書かれており、頭部と側面は遺存しているが、下端は欠損する。下端の欠損部と文字の間にスペースが空いているが、文字はみられない。文字の記載されている面は丁寧に調整しているが、裏面の調整は粗い。スギ材である。

山口里は、『和名類聚抄』に朝来郡内の郷として記載がある。遺跡の南方約11kmの朝来町山口が遺称地とされ、山口を中心とした朝来町南半部から生野町にかけての但馬最南端の地域が比定されている。遺跡からは南進して円山川を遡れば辿り着ける地域であり、比定地からそのまま南進して低い生野峠を越えての播磨への往来は容易である。現在でも播磨と但馬を繋ぐ主要幹線である国道312号が通過する地域である。今回検出された古代の道路遺構（但馬道）も通過が想定される地域であり、この木簡は道路遺構の側から出土しており、但馬道を利用して人と物品の往来があったことを物語る資料である。

祭祀具（図版102、写真図版104）

人形 W2は小形の人形で、脚部を欠くが、現存長約11.5cm、幅約1.8cm、厚さ約0.4cm。肩はなで肩に表現され、股の切り込みは水平である。手は表現されていない。ヒノキ材である。

斎串 W3～W6は斎串の頭部と下端の破片で、W3・W4の頭部は圭頭に、W5の頭部は丸頭をしている。W3～5はスギ材、W6はヒノキ材である。

容器（図版102・103、写真図版104～106）

曲物 W7～W11は檍皮結合の曲物の蓋板である。W7が復元径約18.8cm、厚さ約0.8cm、W8が径約18.8cm、厚さ約0.6cm、W9が径約20.0cm、厚さ約0.8cm、W10が径約18.8cm、厚さ約0.6cm、W11が径約19.2cm、厚さ約0.8cmであり、径は比較的揃っている。厚さはW7・10・11が中央から縁まで均一な厚さであり、W8・W9は刻線から外縁に向けて薄くしている。W11のみが中央に孔が穿たれている。W7～W11のいずれも周囲に針書きの刻線を入れ、外側の結合孔を刻線の外に沿うように入れている。結合孔は2個一対で、W7～W9・W11は破片のため結合孔の箇所数は不明だが、W10ではほぼ対角に

なるよう4カ所で結合している。W7～W9の結合孔には櫛皮が遺存し、W9には2本の櫛皮が遺存している。W7・W11は板目材を、W8～W10は柾目材を使用している。W7・8・11はスギ材、W9・10はヒノキ材である。W13は板目材の一端に結合孔状の孔を2個穿ったもので、下端は不整形な曲線に、上端は直線的となっている。曲物の蓋を上端で切り取ったものか。スギ材である。

挽物 W12は挽物盤の底部中央に孔を穿った蓋である。推定復元径約26.5cm、器高約2.0cm、高台の高さ約0.7cmで、内面の輻轆挽きは浅く、ほとんど深さのない器形となっている。底部外面の輻轆挽きも周囲約3.8cmの範囲に止まり、中央は鑿削りである。ヒノキ材で、横木取りしている。中央孔の縁や外面に焼け焦げがみられ、内面はほぼ全面に多方向の刃物傷が認められる。

剝物 W14・W15は剝物の槽で、現存長43.8cm、最大幅16.1cm、高さ8.7cm。横木取りで、スギ材である。W15は長方形の槽で、長さ40.0cm・器高7.6cm、最大幅8.1cmを測る。底部は平らで、口縁部が斜め上方に直線的に開く。縦木取りで、スギ材である。

服飾具・雑具（図版103、写真図版106）

下駄 W16は連歯下駄で、長さ19.9cm、高さ3.9cm。外縁を欠いているが、最大幅5.9cmまで遺存している。台は前後の端を弧形にしているが、前端を広くし、後端を後歯の後ろから削って狭くしている。また、歯の内側にあたる部分は厚さ約1.7cm、歯の外側にあたる部分は1.3cmであり、歯の内側にあたる部分が厚くなっている。歯は後歯を欠いているが、前歯は台の少し内寄りからつくり、前面が垂直に、後面が前に向かって斜めに開いて作り出されている。底面は摩耗している。鼻緒孔は方形で、鑿等の刃物により穿たれている。前壺は前歯の外側に、後壺は後歯の内側に穿たれている。前壺は極端に右に寄った位置に穿たれており、側縁との間は約1.0cmしかない。後壺の内側の壺と結んだ線は台の内縁とほぼ平行するような位置となっている。スギ材である。

火鑽板 W17は長さ15.7cm、幅2.0cmである。厚さ約1.2cmのスギの板目材で、2カ所に火鑽臼が認められる。スギ材である。

農具（図版104・105、写真図版107・108）

田下駄 W18～W20は田下駄の足板で、板材の側面から抉り込みを入れて足板としたものである。W19は現存長37.8cm、幅11.5cm、厚さ2.5cmであり、左側面から2カ所、右側面から1カ所の抉りが入れられている。抉り込み間は約19cmとなっている。スギ材である。W18は長さ45.8cm、幅15.6cm、厚さ2.2cmであり、抉り込みは右側面に1カ所、左側面に1カ所遺存しているが、側面の下半にも入れられていたものと思われる。スギ材である。W20は右側辺側を隅取りしたもので、長さ現存長34.2cm、幅13.7cm、厚さ2.4cmであり、左側面から2カ所の抉り込みを入れている。抉り込み間は約11cmとなっている。右側面には抉り込みはみられない。スギ材である。これら3点の抉り込み方は2カ所側では中央側の抉り角度がきつく、外側の角度が緩く入れられている。特にW20の抉り込みは内側を板材に対して直角に近い角度で入れ、外側を開いた角度で入れている。1カ所側でもW18では上方から抉りがきつく、W19では下方側からの抉りがきつく入れられている。W21は半円形を呈するスギの板材で、表面に調整痕跡が認められる。長さ29.3cm、幅17.9cm、厚さ2.8cm。田下駄の立板になる可能性がある。W22・W23は両端を柄状に細くしたもので、田下駄枠の軸材か。W22は長さ39.2cm・幅5.0cm・厚さ1.1cm。W23は長さ62.8cm・幅10.1cm・厚さ1.3cm。2点ともスギ材である。

田舟 W24～W26は3点とも剝り抜き式の田舟である。W24は底部から側辺部の破片である。底部は平らで、側辺部は底部から角をなして直線的に立ち上がっており、全体は箱形になるものと思われる。現

存長約70.5cm、高さ8.6cmで、深さは約6cmを測る。スギ材。

W25・26は木口側に突起を設けた型式の田舟で、芯を外したスギ材を削り抜いて製作されている。W25は現存長約117.2cm、現存幅約33.3cm、高さ約17.6cmであり、槽部は現存長さ約111.4cm・深さ約16.0cmである。槽部の断面形状から復元した場合、長さ約120cm、幅約43.5cmに復元される。底部は突起側が厚さ約3.1cmで、そこから反対の木口に向けて薄く作られており、最も薄い部分で約1.1cmとなっている。底部から木口への移行は突起側が比較的緩やかで外面は直線的であり、反対の木口側は角度が急でカーブを描いている。左側辺下半は縁部まで遺存しており、縁は丸く仕上げられている。木口部は底部から徐々に厚さを増しており、突起部分で最も厚く約6.6cmとなっている。木口の突起は縁から約4.4cm下がった位置に、削り出して設けられている。一本が確認できるだけであるが、取り付け位置からみて本来は2本であったものとみられる。長さは上面で約5.8cm、下面で約7cmを測る。基部が太く先端がやや細くなっている、基部での径は3.7×4.0cmで、断面形状は縦長の楕円形を呈する。底部から側辺の外面には摩耗が認められる。

W26は縁をすべて欠いており、全容を知り得ないが、現存するのは長さ約117.9cm、幅約28.5cm、高さ約13.8cmで、底部・木口部・側辺部にかけてである。厚さは底部が約1.5cm、側辺部が約2.8cm、木口部が7.5cmとなっている。内面は底部と側辺部の境は屈曲しており比較的明瞭であるが、底部と木口部の境は湾曲しておりそれほど明瞭ではない。外面の底部から木口部にかけては突起側が湾曲し、反対側は直線的となっている。突起は基部のみが遺存し、幅約3cm、厚さ約1.7cmの方形に削り出されている。底部外面と木口部・側辺部の下半に摩耗が認められる。

部材（図版106、写真図版109）

栓・把手 W27～W29は栓あるいは把手と思われる製品である。W27は棒材の一端を柄状に作り、その先端付近に長さ約3.5cm、幅約2.0cmの孔を穿っている。棒状部は断面が不整形な楕円形を呈し、先端部を細くしている。長さ30.4cm、スギ材である。W28は板材の一端を方形の頭状にし、それ以外の部位を削って角棒状とし、先端から約9.5cmの中央から把手側に寄った位置に、長さ約1.9cm、幅約1.3cmの孔を穿ったものである。長さ19.2cm、スギ材である。W29はスギ板材の一端を方形に作り、その中央に半円形の窓を開けて把手状とし、それ以外の部位を把手状の部分より細く薄くして、先端から約8.0cmの中央よりやや把手側の位置に、長さ約2.2cm、幅約1.2cmの孔を穿ったもので、長さ約21.4cmを測る。W28・W29とも何かの部材に差し込み、孔に栓等を通して固定したものと思われる。W30はスギ板材の一端を隅取りした方形状に作り、それ以外の部位を両側から削り込んで棒状にしたもので、棒状の部分は先端側を欠いている。現存長約10.2cm。

部材 W31は太さ5cmの棒材の一端を尖らし、反対側の端を細くして柄状の突起を作り出したものであるが、細くなった部位で欠損しているため、全容は不明である。尖った側の端近くに長さ約1.4cm・幅約0.7cmの柄孔が穿たれている。長さ29.7cmであり、何らかに差し込んで使用した部材と思われる。スギ材である。W32は径約7.2cmのスギ材の棒に両端から抉りを入れたもので、先端から約ゆcmの位置を、中側からは緩く、先端側からは急角度で抉っている。下半を欠損するが、現存長約41.1cmを測る。W33は長さ71.1cm、幅5.3cm、厚さ2.9cmの細長いスギの板材の両端近くに長さ約3.5cm、幅約3.1cmの孔が穿たれたものである。何らかに差し込み、この孔で固定したものであろう。W34は太さ4.7cmの扁平な棒材の中ほどから一端を削って板状とし、そこに長さ約2.8cm、幅約1.5cmの楕円形の孔を穿ったもので、板状部を差し込み、小孔で固定したものか。長さ36.2cm、スギ材である。W35・W36は建築部材と思わ

れるもので、W35は厚さ約5.3cmのスギ板材の下端から約35cmの位置に長さ約17.0cm、幅約7.8cmの柄孔を穿っている。現存長約99.0cm・幅約17.4cm、表面の加工は粗い。W36は厚さ約2.1cmのスギ板材にあたる所の柄孔を穿ったもので、柄孔は板材の下端から約18cm、柄孔の間隔も約18cmとなっている。柄孔の形状は不整形であり、板材表面の加工も粗い。

(2) 中世の木製品（図版107、写真図版110・111）

中世の木製品は18点が図示できた。W42は焼御堂地区の黒褐色シルト、それ以外は桜地区の調査で出土している。また、桜地区出土の木製品の内、W44・W45以外はすべて流路内の黒褐色シルトより出土している。

W37からW44は漆製品（椀・皿類）をあげた。

W37は小皿である。断面三角形の輪高台の底部から、内湾し短く立ち上がる杯部をもつ。外面は黒漆、内面は朱漆を施す。模様はない。

W38は小皿である。W37に比して杯部が深く杯としてもよい。

内外面ともに黒漆を施す。残存部分に模様はない。

W39は底部と杯部の一部が残り全体の形状は明確でない。底部の内面は中央部付近まで緩やかに内湾をみせる。杯部は緩やかに外方へ立ち上がりをみせている。底部外面に高台がつくが、欠損し形状は詳らかではない。椀もしくは皿と考えられる。

内外面ともに黒漆を施す。内面底部中央には朱漆にて花文を描く。

W40は椀である。ごく低い高台がつく平板な底部から、杯部下半は大きく内湾して立ち上がる。口縁部は直口する。

内外面ともに全面に黒漆を施す。杯部外面の漆は剥落が激しく静止削りの加工痕が観察できる。底部径の口径に対する割合は大きくほぼ3分の2である。

W41は椀である。底部と杯部の一部が残り、全体の形状は明確ではない。底部外面には断面三角形の輪高台がつく。

内面は赤漆を施す。外面は黒漆の後、赤漆にて模様を描く。また高台裏には、『×』の刻書がある。底部径の口径に対する割合は小さい（ほぼ2分の1と推測される）。

W42は椀である。焼御堂地区的黒褐色シルトより出土した。

底部と杯部の下半が残る。全体に器壁の厚い作りである。底部外面の高台もまた四角く他の製品に比べ厚い作りである。

外面は黒漆、内面は朱漆を施す。模様はない。底部径の口径に対する割合は大きくほぼ3分の2である。

W43は椀である。底部と杯部の大半が残る。底部外面の高台は小さく逆台形を呈する。また高台裏には加工痕が残る。底部・杯部共に全体に器壁の薄い作りである。

内外面は黒漆を施し、赤漆にて模様を描く。また高台裏には加工痕が残る。底部径の口径に対する割合は2分の1強である。

W44は椀である。黒褐色シルトより出土した。

ごく低い高台がつく底部から、杯部下半は大きく内湾して立ち上がる。口縁部は直口し、端部は内湾気味に收める。底部内面は中央部付近まで緩やかに内湾する。

内外面ともに全面に黒漆を施し、外側面および底部内面には朱漆にて模様を描く。底部径の口径に対

する割合は大きくほぼ3分の2である。

W45・W46は容器（曲物）をあげた。

W45は曲物の蓋と考えられる。遺物包含層の人力掘削中に出土した。

外縁に沿って小さな段を削り出した製品である。約2分の1残存するが、釘孔や縫じ孔などは見受けられない。

W46は曲物の蓋もしくは底板と考えられる。約2分の1残存するが、釘孔や縫じ孔などは見受けられない。

W47は箱物の部材（底板）の一部と考えられる。内外面に刃痕が多数残っており、まな板として再利用されたと考えられる。また、焼け焦げが数箇所見受けられる。最終的には焚き付けなどに使用されて廃棄されたのであろう。

W48からW51は服飾具（下駄）をあげた。

W48は一本で台と歯を作り出した連歯下駄である。小判形の台部のうち前鼻緒の孔周辺は欠損している。歯は直方体に削りだされており、台部幅中におさまる。全体によく使い込まれた後に廃棄されており、特に後ろの歯の摩滅が著しい。

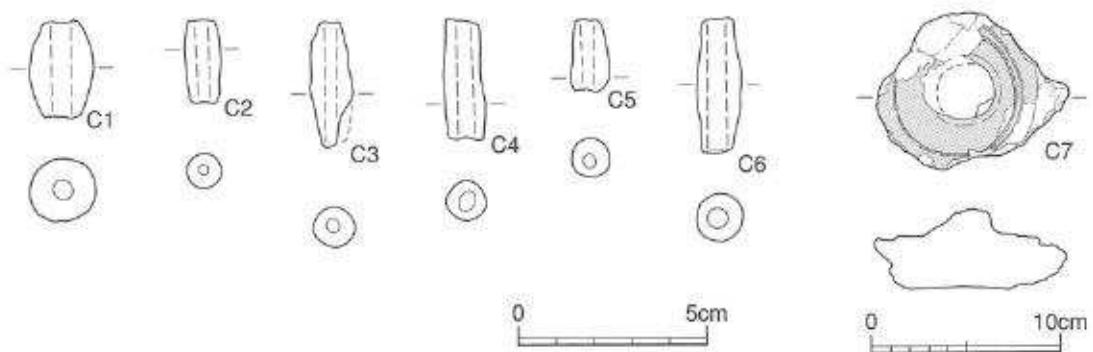
W49は一本で台と歯を作り出した連歯下駄である。一部分が残存している。残存部は、左の鼻緒孔周辺もしくは中央の鼻緒孔より右側から右の鼻緒孔周辺と考えられるが、どちらの部分かは不明である。残存部から推定される台部の形状は小判形、歯は台形に削りだされており、台部幅よりも歯は外側に踏ん張る形状である。また、歯は上部よりも底面のほうが厚みをもつ。

W50は下駄の歯である。台部がなく、明らかに上部が折損しているため、一本・差し歯どちらであるかは不明である。歯は台形を呈し、高さをもち外側に踏ん張る形状である。厚みは、底面より上部のほうが厚く縦断面は逆台形を呈する。

W51は下駄の歯である。台部がなく、明らかに上部が折損しているため、一本・差し歯どちらであるかは不明である。歯は台形よりも撥形に近く、高さをもち、外側に踏ん張る形状である。また、側面には面取りを施し、横断面は扁平六角形の形状である。厚みは底面より上部のほうが厚い。

W52は食事具（箸）もしくは祭祀具（齋串）と考えられる。一端を尖らせており、断面形状が扁平であることから、齋串である可能性が高い。

W53は用途不明の製品である。工具などの柄や祭祀具の可能性が考えられる。長方形の板材の両端の側面に削り込みを施し、端部は更に面取りを行っている。図上、右側面の下半部についても若干削り込みが見受けられ、右側面中央部を中心突出させるよう意識した可能性があるが、詳らかではない。右側



第26図 各地区出土の土製品

面中央部の突出を積極的に評価するならば、祭祀具一馬形の可能も残る。

W54は部材片である。残存片の形状は扁平な台形を呈しており長辺部分が欠失面である。短辺部分には方形の孔をあけ、片面にも仕口のみぞを彫っている。

3. 土製品（第26図・写真図版116）

C1・C2・C3・C4・C5・C6は全て土師質の管状土錘である。いずれも手すくね成形後、ナデ調整を施す。法量は、C1が長さ2.6cm、外径1.7cm、内径5mm、重さ5.8g、C2が長さ2.2cm、外径9mm、内径3mm、重さ1.6g、C3が長さ3.35cm、外径1.1cm、内径3mm、重さ2.7g、C4が長さ3.2cm、外径1cm、内径4mm、重さ2.6g、C5が長さ1.9cm、外径1cm、内径3mm、重さ1.9g、C6が長さ3.5cm、外径1.2cm、内径6mm、重さ4gを測る。C7は用途不明の土製品である。表面に灰白色の付着物（網掛け部分）があり、全体的に被熱している。

4. 石製品

確認調査（図版108、写真図版112）

S1は砂岩製の砥石である。3面が使用されている。S2は安山岩製の打製石斧である。S3は凹基式の石鎌である。石材は黒曜石である。

SDY001（図版109、写真図版112）

S4は粘板岩製磨製石包丁である。平面は杏仁形で、刃部は片刃である。紐孔は両面からの回転穿孔で空けられている。表面は剥離によりほとんど残っていない。S5は砂岩製砥石である。4面が使用されている。

SBC014（図版109、写真図版112）

S6は砂岩製砥石である。使用部が2面残存しているのみである。

SKC008（図版109、写真図版112）

S7は砂岩製砥石である。形は方形に整えられている。使用部が3面残存している。1面には表面に擦痕が明瞭に残っている。

SBC033（図版109、写真図版112）

S8は砂岩製砥石である。形は方形に整えられている。4面が使用されている。

宮ヶ田I地区包含層（図版110、写真図版113）

S9は安山岩製楔形石器である。

SHK004（図版110、写真図版113）

S10は砂岩製砥石である。4面が使用され、片側が拳骨状に膨らんでいる。

宮ヶ田Ⅰ地区谷部包含層（図版110・111、写真図版113）

S11は砂岩製砥石である。片側が撥形に拡張し、側面の3面と小口面が使用されている。S12は凝灰岩製砥石である。4面が使用され、片側が拳骨状に膨らんでいる。S13は滑石製勾玉である。穿孔のある面は平坦で、側面は稜をもっている。穿孔は片側穿孔である。S14・15は滑石製白玉である。S14は側面が丸みをもたず、S15は算盤玉状である。S16・17は滑石製剣形石製品である。S16は片面に稜をもっている。茎部に穿孔をもち、穿孔部の周囲は面が作られている。S17は周囲に剥離が多いためはっきりしないが、平面が水滴形を呈するものと思われる。稜をもたず扁平で、円頭部側に穿孔をもっている。

SPK006（図版111、写真図版113）

S18は滑石製剣形石製品である。表裏両面に稜をもっている。

5. 金属製品

本書所収地区から出土した金属製品は、68点を数える。そのうち、鉄製品は工具・武器・農具など42点を図化し、6点を写真のみ掲載している。また、銅製品は煙管および古銭2点を掲載している。鉄製品および銅製品はいずれも錫に覆われた状態で出土したため、錫取り作業を実施し、その後に実測を行った。

鉄製品

M1～M33・M46～M51は桜地区、M34～M37・M43は宮ヶ田Ⅱ地区、M38～M40・M44は宮ヶ田Ⅰ地区、M45は山内南地区、M41は伊豫田地区、M42は確認調査（トラン40-B）でそれぞれ出土したものであり、出土遺構名は巻末の遺物観察表に記載している。

M1～M24・M38・M39は、建築に使用された和釘で、断面が方形の角釘である。M3はわずかに先端が曲がるもの全長7cmを測る。M4・M5・M13・M18・M20は先端部が欠損しており、全長は不明であるが復元長7cm前後のもの（M4・M5・M18）と5cm前後のもの（M13・M20）に分かれる。その他のものについては、頭部あるいは先端部など一部が残存するのみであり、長さ等は不明である。そのうち、M6は頭部が欠損しているが、全体が木質に覆われている。また、M1は7本、M2は6本の釘が付着した状態で出土している。

加都遺跡出土の釘については、頭部が残存しているものは9点（M3・M4・M5・M10・M13・M18・M19・M20・M23）を数え、その形状は角釘の頭を平らにし、巻きつけた「頭巻釘」と、頭部が扁平で直角に折り曲げた「折釘（平折釘）」が存在する。前者はM13・M18・M23であり、後者はM3・M4・M5・M10・M19・M20である。なお、付表2の釘の長さについては、欠損しているものについては遺存する現存長を（ ）書きで、復元できるものについては〔 〕書きで記している。以下、付表2の法量（長さ・幅・厚さ）の寸法についても同様に記している。

M25およびM37は鐵鎌である。M25は鉄片が三重に重なった状態の鉄塊であるが、展開すると先端部が欠損した平根系の鐵鎌となる。鎌身部先端および茎部が内側に折れ曲がった状態であるが、復元長約11cmを測り、関部はほぼ直角に入る形態である。M37も茎部先端がわずかに欠損しているが長さ約11cmを測る平根系の鐵鎌である。鎌身長4.3cm、幅3.4cm、茎部長7.2cm、幅0.4～0.8cmを測り、関部は鋭角に入る形態である。

M26・M27およびM34・M36は刀子である。M26は残存する部分は少ないが、断面の形状から刀子と

考えられる。M34・M36はともに完存するもので、M34は長さ16.7cmを測る大型の刀子である。片闇で柄には木質が一部残存する。M36は長さ9.3cm、幅1.5cm、柄部は約2.5cmを測る。

M28～M30は火打金である。M28・M29は平面形がやや長方形を呈するもので、M29には釘と思われる鉄片が付着しているが、火打ち金と考えられる。M30は完存する山形を呈する火打ち金である。長さ8.2cm、幅2.6cmを測り、紐通し孔を有している。

M31～M33およびM35は不明鉄製品である。M32は一部に木質が付着しており、鉄片が三重に重なった状態の鉄塊である。M35は長さ4.8cm、幅1.1cm、厚さ0.5cmを測る細長い鉄片である。

M40は厚さ0.5cm、重量170gを測る三角形状を呈する鉄製品で唐鋤と考えられる。但し、残存する部分が少なく、平面の形状が不明なため、鉄鍋の可能性も考えられる。

M41・M42は楔である。M41は長さ19.2cm、幅0.7～1.2cmを測るが、表面は剥離し、損傷は激しい。M42は長さ26.9cm、幅2.3～3.1cmを測り、M41同様、剥離あるいは欠損が多くみられるが、一部に木質が残存している。

M46～M51は鉄滓である。このうち、M47～M49はSPC029より一括して出土しており、近傍に小鍛冶を行う施設があった可能性がある。

銅製品

M43は煙管である。煙管は雁首・羅字・吸い口から構成されるが、出土した煙管は長さ12.8cmを測る雁首のみである。雁首には、ねじったような装飾が施されているが、末端部は下方に折れ曲がり、一部に裂け目がみられる。

M44・45は古銭である。M44は北宋錢の祥符通寶で初鑄年代は1009年である。M45は初鑄1636年の寛永通寶である。

第4章 自然科学的手法による分析

第1節 分析の目的

1. 放射性炭素による年代測定

桜地区、宮ヶ田Ⅰ地区の各1箇所で測定を行った。地形形成過程の復元は、平成18年度刊行予定の『加都遺跡Ⅱ』で予定しているが、その基礎資料を得るための分析である。

桜地区については、段丘面にて律令期の道路遺構と平安時代以降の集落跡が検出された。これらの遺構は、削平を受けた黒褐色砂質シルト層上面で検出されたが、この黒褐色砂質シルト層形成の時期を知るために年代測定を依頼した。

宮ヶ田Ⅰ地区については、古墳時代の集落の立地する微高地の南縁の谷地形において、同時期およびそれ以降に営まれた水田跡が検出されたが、この谷地形の形成時期および堆積が安定化する時期の把握を意図して年代測定を依頼した。

2. 花粉分析

桜地区・宮ヶ田Ⅰ地区・宮ヶ田Ⅲ地区にわたり、律令期の直線的な道路遺構（SFR001）が検出された。山陰道と山陽道を結ぶ連絡道路であり、「延喜式」以前に機能していた官道と評価される（高橋2000）。側溝心々距離は約8.4mであるが、幅員18mの道代を復元する案も提示されており（吉本2000）、さらに路傍に果樹を植えて往還する人々の休息に供する、という記録も残っている（「凡諸国駅路辺植菓樹。令往還人得休息。若無水処。量便掘井。」『延喜式』卷五十 雜式）。

桜地区的道路遺構の側溝埋土から採取した土壤を試料とし、花粉化石の抽出と同定を依頼した。この道路遺構周辺における当時の植生、特に街路樹の有無や種類を検討するために実施したものである。

3. 木製品の樹種同定

加都遺跡では、桜地区および宮ヶ田Ⅰ地区・宮ヶ田Ⅲ地区・新水地区の2箇所の微高地縁辺部において木製品が出土した。本報告書所収の桜地区、宮ヶ田Ⅰ地区の木製品について、複数の外部機関に委託して樹種同定を行い、植生ならびに製品の製作と流通のあり方を検討するうえで必要な、基本的な資料を得ることを意図したものである。

第4節1で、古墳時代後期から中世までの建築部材や農具を中心とする木製品が出土した宮ヶ田Ⅰ地区の、第4節2で、中世前期の食事具を主体とする木製品が出土した桜地区的同定結果をそれぞれ掲載した。なお、宮ヶ田Ⅰ地区的木製品は、平成18年度刊行予定の『加都遺跡Ⅱ』における宮ヶ田Ⅲ地区・新水北地区と同一の谷地形から出土したものであり、あわせて参照されたい。

4. 漆器の塗膜構造と樹種同定

焼御堂地区、桜地区から中世の漆器が出土した。このうち桜地区では、中世集落に近接する流路（SRC002）から、食事具を主体とする木製品とともに8点の漆器が出土した。

桜地区出土漆器について、考古学的な器形や紋様の観察等に加えて、塗膜断面および木胎の顕微鏡観察を依頼することとした。製作集団や使用者の階層推定にも有益な、下地技法を中心とした製作手法の検討、樹種選択の実態把握を意図したものである。

第2節 加都遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、加都遺跡の宮ヶ田I区で確認された谷を充填する堆積物の堆積年代と、桜地区における但馬道が構築されている完新世段丘の形成時期に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。

1. 調査地点・試料

(1) 宮ヶ田 I 地区

本地区にみられる谷を埋積する堆積物の堆積状況は、発掘調査時の所見に基づくと、1) 最下部に礫が堆積、2) 流路部分を埋めるようにシルトが堆積、3) 流路部分と砂礫層を覆ってシルトが堆積、4) 土壌化した土層が堆積、の4段階に区分されている。このうち1)・2) 段階までは谷内に流路が存在する段階での堆積であり、3) 段階は洪水などの影響で堆積、4) 段階は比較的安定した環境の中で緩やかに堆積したものと考えられている。1)～3) 段階は無遺物であるが、4) 段階の堆積層からは弥生時代後期・古墳時代・中世などの遺物が出土している。

放射性炭素年代測定は、2) 段階に形成された8層および3) 段階に形成された2層より採取した腐植質堆積物2点について実施する。

(2) 桜地区

本地区は円山川が形成した扇状地上に位置する。現地調査時の所見によると、調査区内の地形は、完新世段丘と旧河道である段丘下の低地に区分されている。段丘上では旧中州上に存在した凹地にシルトが堆積し、平坦な地形を形成している。このシルト層は円山川の数回の洪水に起因するものと考えられている。段丘上には平安時代につくられた直線道路（「但馬道」と呼称）が存在する。この道路遺構は桜地区内で約252mにわたり断続的に続いており、両側に2本ずつの側溝を備えている。また、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物跡なども発見されており、建物跡から出土した遺物と旧河道より出土した遺物との間で時期的に大きな隔たりが認められないため、段丘崖が形成された後に遺構が構築されたと考えられている。今回は、遺構の切り込まれた堆積物の形成年代を推定するために放射性炭素年代測定を実施する。

放射性炭素年代測定試料は、旧中州上の凹地を埋めるシルト層の上・中・下部より採取した、試料番号1～3の計3点である。

2. 分析方法

年代測定は学習院大学放射性炭素値代測定室の協力を得て、 β 線計数法により測定した。なお、放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5570年を使用している。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADI OCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を用いた。

3. 結果・考察

(1) 宮ヶ田 I 地区

結果を表1、暦年較正結果を表2・図1に示す。谷内堆積物の放射性炭素年代値は、8層が 5300 ± 50 BP、2層が 2590 ± 60 BPを示した。較正暦年代では8層が $5990-6115$ calBP(相対比75.6%)、2層が $2775-2709$ calBP(相対比76.5%)を示した。

表1 宮ヶ田I地区における放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	同位体補正年代	$\delta^{14}\text{C}$ (%)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	$\Delta^{14}\text{C}$ (%)	測定番号
2層	腐植質堆積物	2590±50	-264.1±4.9	-16.8	-276.2±4.9	GaK-20644
8層	腐植質堆積物	5300±60	-479.3±3.9	-21.5	-483.0±3.9	GaK-20645

注 (1) 年代値：1950年を基点とした値。

(2) 誤差：標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代

(3) $\delta^{14}\text{C}$ ：放射線の測定で求めた試料炭素中の ^{14}C 濃度Aと現在の炭素の標準濃度A(std)を用いて

$$\delta^{14}\text{C} = [(A - A(\text{std})) / A(\text{std})] \times 1000$$

$\delta^{13}\text{C}$ ：試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値

$\Delta^{14}\text{C}$ ：試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0\%$ であったときの ^{14}C 濃度を計算した値

表2 宮ヶ田I地区における曆年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	曆年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
2層	2590±50	cal BC 826	—	cal BC 760	cal BP 2,775 — 2,709	0.765	
		cal BC 681	—	cal BC 667	cal BP 2,630 — 2,616	0.085	
		cal BC 612	—	cal BC 593	cal BP 2,561 — 2,542	0.103	GaK-20644
		cal BC 575	—	cal BC 564	cal BP 2,524 — 2,513	0.048	
8層	5300±60	cal BC 4,008	—	cal BC 4,005	cal BP 5,954 — 5,957	0.020	
		cal BC 4,166	—	cal BC 4,041	cal BP 5,990 — 6,115	0.756	
		cal BC 4,223	—	cal BC 4,185	cal BP 6,134 — 6,172	0.224	GaK-20645

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。計算には表に示した丸める前の値を使用している。付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

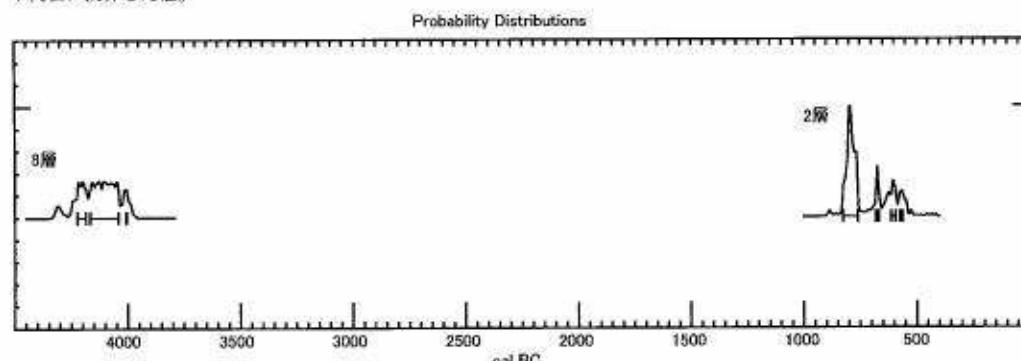


図1 宮ヶ田地区 曆年較正値一覧

谷内堆積物の8層と2層の年代値は、対象とした2つの層の層位的上下関係と矛盾せず、この上位にある遺物包含層から出土する遺物の年代観との関係とも肯定的である。8層は流路を充填する堆積物であることから、堆積物が示す年代が堆積年代を示しているとは限らず、約5300年前以降に堆積したと考えるのが妥当であろう。また、2層についても氾濫堆積物であることから、約2590年前以降に形成されたと考える必要がある。

縄文時代の ^{14}C 年代値を整理した谷口(2002)によると、暫定的な目安として、縄文時代中期が4800~4050 y BP (較正曆年代: 3630/3550~2580/2510 calBC)、縄文時代後期が4050~3000 y BP (較正曆年代: 2580/2510~1260/1230/1220 calBC)、縄文時代晩期が3000~(2400) y BP (較正曆年代: 1260/1230/1220~(410) calBC)となることが指摘されている。この暫定的な目安に基づくと、調査区で確認された流路が埋没し、離水して土壤発達が行われるようになるのは縄文時代晩期以降と推定される。

(2) 桜地区

結果を表3、曆年較正結果を表4・図2に示す。完新世段丘上で確認された旧中州上に認められる凹地を埋積するシルト層の同位体補正年代値は、上位より試料1が3080±50BP、試料2が4850±60BP、試料3が5940±100BPを示した。較正曆年代では試料1が3244-3357calBP（相対比94.5%）、試料2が5579-5513calBP（相対比70.5%）、試料3が6656-6812calBP（相対比68.9%）を示した。

測定を行った凹地地形を埋積するシルト層の年代値は、それぞれの層位的上下関係と矛盾しない結果となっている。現在の段丘面上に存在した凹地を埋積する最上層の土壌の年代値が縄文時代晚期頃の年代を示すことから、段丘化する旧中洲上の凹地が縄文時代晚期頃にほぼ平坦化したことが判明した。

＜引用文献＞ 谷口康浩、2002、縄文時代遺跡の年代、「季刊考古学第77号」、17-21。

表3 桜地区における放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	同位体補正年代	$\delta^{14}\text{C}$ (%)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	$\Delta^{14}\text{C}$ (%)	測定番号
No.1	腐植質堆積物	3080±50	-316.5±4.2	-23.4	-318.7±4.2	GaK-20646
No.2	腐植質堆積物	4850±60	-452.6±3.8	-24.0	-453.7±3.8	GaK-20647
No.3	腐植質堆積物	5940±100	-522.2±6.0	-24.4	-522.7±6.0	GaK-20648

注 (1) 年代値：1950年を基点とした値。

(2) 誤差：標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代

(3) $\delta^{14}\text{C}$ ：放射線の測定で求めた試料炭素中の ^{14}C 濃度Aと現在の炭素の標準濃度A(std)を用いて $\delta^{14}\text{C} = [(A - A(\text{std})) / A(\text{std})] \times 1000$ により算出された値

$\delta^{13}\text{C}$ ：試料炭素の $^{13}\text{C}/^{14}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値

$\Delta^{14}\text{C}$ ：試料炭素が $\delta^{13}\text{C}=25.0\%$ であったときの ^{14}C 濃度を計算した値

表4 桜地区における曆年較正結果

試料名	補正年代(BP)	曆年較正年代(cal)		相対比	Code No.
No.1 3080±50	cal BC 1,408 - cal BC 1,295	cal BP 3,244 - 3,357	0.945	GaK-20646	
	cal BC 1,272 - cal BC 1,265	cal BP 3,214 - 3,221	0.055		
No.2 4850±60	cal BC 3,704 - cal BC 3,630	cal BP 5,579 - 5,513	0.705	GaK-20647	
	cal BC 3,579 - cal BC 3,567	cal BP 5,516 - 5,528	0.076		
No.3 5940±100	cal BC 3,564 - cal BC 3,537	cal BP 5,486 - 6,172	0.219	GaK-20648	
	cal BC 4,942 - cal BC 4,866	cal BP 6,815 - 6,650	0.025		
	cal BC 4,863 - cal BC 4,707	cal BP 6,656 - 6,812	0.689	GaK-20648	
	cal BC 4,701 - cal BC 4,692	cal BP 6,641 - 6,650	0.286		

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M. Stuiver and PJ Reimer) を使用。計算には表に示した丸める前の値を使用している。付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

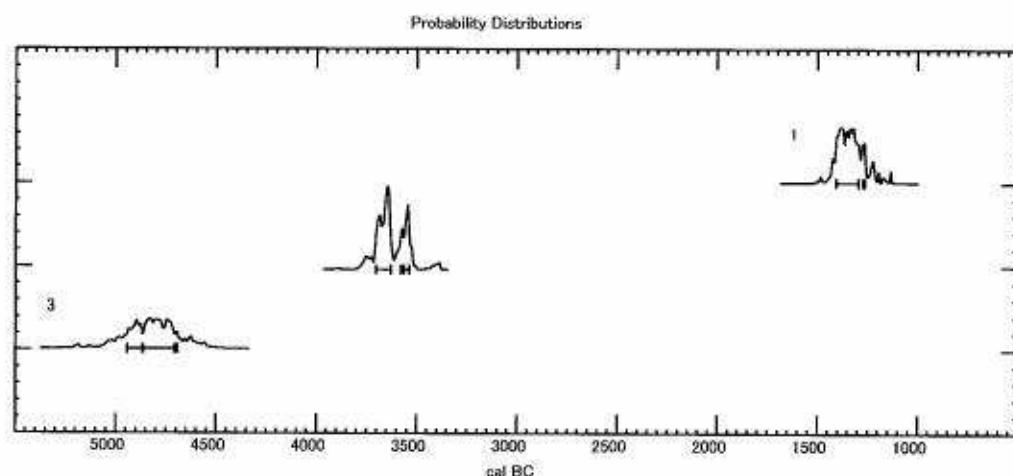


図2 桜地区 曆年較正値

第3節 律令期の道路遺構側溝における花粉化石

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、律令期の道路遺構に伴う2時期の側溝堆積物について花粉分析を実施し、当時の道路遺構周辺の古植生に関する情報を得る。道路遺構は桜地区内で約252mにわたり断続的に続いている。路面の両側には2本の側溝が確認されている。2本の側溝は、層位的な切り合い関係から、2時期の道路の溝であることが確認されている。古い段階の道路が第1次道路、その後の改築段階の道路が第2次道路と呼ばれている。

1. 試料

分析調査は、第1次道路に伴う東1次側溝とおよび第2次道路に伴う東2次側溝内の堆積物について実施する。各側溝内堆積物の堆積状況を図1に示す。堆積物の層相は、上位より、東2次側溝の1層が2.5Y4/2暗灰黄色中疊が僅かに混じる粗粒砂混極細粒砂、2層が2.5Y4/2暗灰黄色中疊が僅かに混じる粗粒砂混極細粒砂、東1次側溝の3層が2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂混じり極細粒砂、4層が2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂混じり極細粒砂からなる。

分析試料は、各側溝内堆積物下部である東1次側溝4層と東2次側溝2層から採取された2点である。



図1 東1次側溝・東2次側溝の堆積断面と試料採取層準

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、鈍別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。なお、総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

3. 結果

結果を表3・図2に示す。東1次側溝からは花粉化石はほとんど産出せず、わずかにマツ属、ヨモギ属、キク亜科が認められた。東2次側溝からは花粉化石が豊富に産出したが、保存状態についてはあまり良くない。木本花粉についてみるとマツ属とスギ属が高い割合で産出し、ついでモミ属、ツガ属、クマシデ属ーアサダ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属などが産出する。草本花粉についてはイネ科の占める割合が高く、ついでカヤツリグサ科が多く産出し、セリ科なども認められた。

表1 花粉分析結果

分類群 (Taxon)	学名	地点・層名		
		東2次側溝 2層	東1次側溝 4層	
木本花粉	Arboreal Pollen			
マキ属	<i>Podocarpus</i>	1	—	
モミ属	<i>Abies</i>	29	—	
ツガ属	<i>Tsuga</i>	22	—	
トウヒ属	<i>Picea</i>	2	—	
マツ属複数管束亞属	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	18	—	
マツ属(不明)	<i>Pinus (Unknown)</i>	49	1	
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	75	—	
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1	—	
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	1	—	
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	15	—	
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	1	—	
カバノキ属	<i>Betula</i>	6	—	
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	—	
ブナ属	<i>Fagus</i>	15	—	
コナラ属コナラ亞属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	5	—	
コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	25	—	
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	3	—	
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	11	—	
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis - Aphananthe</i>	1	—	
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	1	—	
モチノキ属	<i>Ilex</i>	1	—	
草本花粉	Nonarboreal Pollen			
スブタ属	<i>Blyxa</i>	1	—	
イネ科	<i>Gramineae</i>	361	—	
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	90	—	
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	2	—	
サナエタデ第一ナギクカミ節	<i>Persicaria - Echinocaulon</i>	3	—	
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	4	—	
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	11	—	
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	1	—	
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	6	1	
キク亞科	<i>Carduoideae</i>	7	1	
タンポポ属科	<i>Cichorioideae</i>	4	—	
不明花粉	Unknown pollen	13	1	
シダ類胞子	Pteridophyta Spores			
イノモトソウ属	<i>Pteris</i>	1	—	
他のシダ類胞子	other Pteridophyta spores	88	6	
合計	TOTAL			
木本花粉	Arboreal Pollen	283	1	
草本花粉	Nonarboreal Pollen	490	2	
不明花粉	Unknown Pollen	13	1	
シダ類胞子	Pteridophyta Spores	89	6	
総計(不明を除く)	Total Number of Pollen & Spores	862	9	

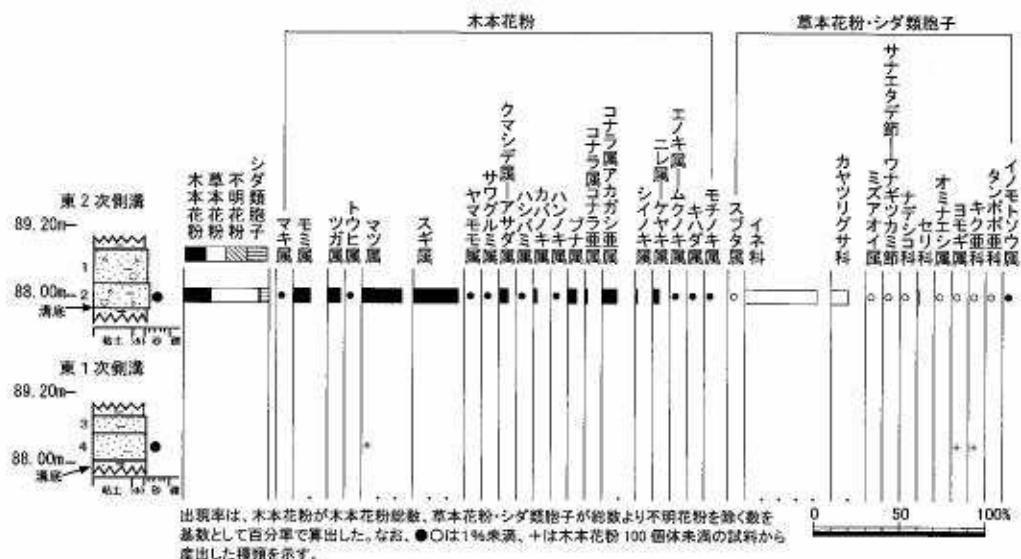


図2 東1次・2次側溝における花粉化石群集の層位分布

4. 考察

(1) 溝周辺の古植生

東1次側溝と東2次側溝では、溝内堆積物における花粉化石の産状が異なっていた。東1次側溝内堆積物の4層からは花粉化石がほとんど検出されず、僅かに検出された花粉化石の保存状態は著しく悪く、花粉膜が破損あるいは溶解していた。一般に花粉化石は好気的状態では風化しやすいことが指摘されている（中村、1967）。溝内堆積物4層が機能期、放置期、埋戻し期、のどの段階の堆積物に相当するかは特定できないが、放置期・溝機能期の堆積物だとすれば、各時期の溝内は好気的状況になっていたことになり、埋め戻しの堆積物だとすれば埋め戻しに利用された堆積物が好気的な環境下の堆積物が利用されていることが想定される。この点については、考古学的調査成果と合わせた評価が必要である。

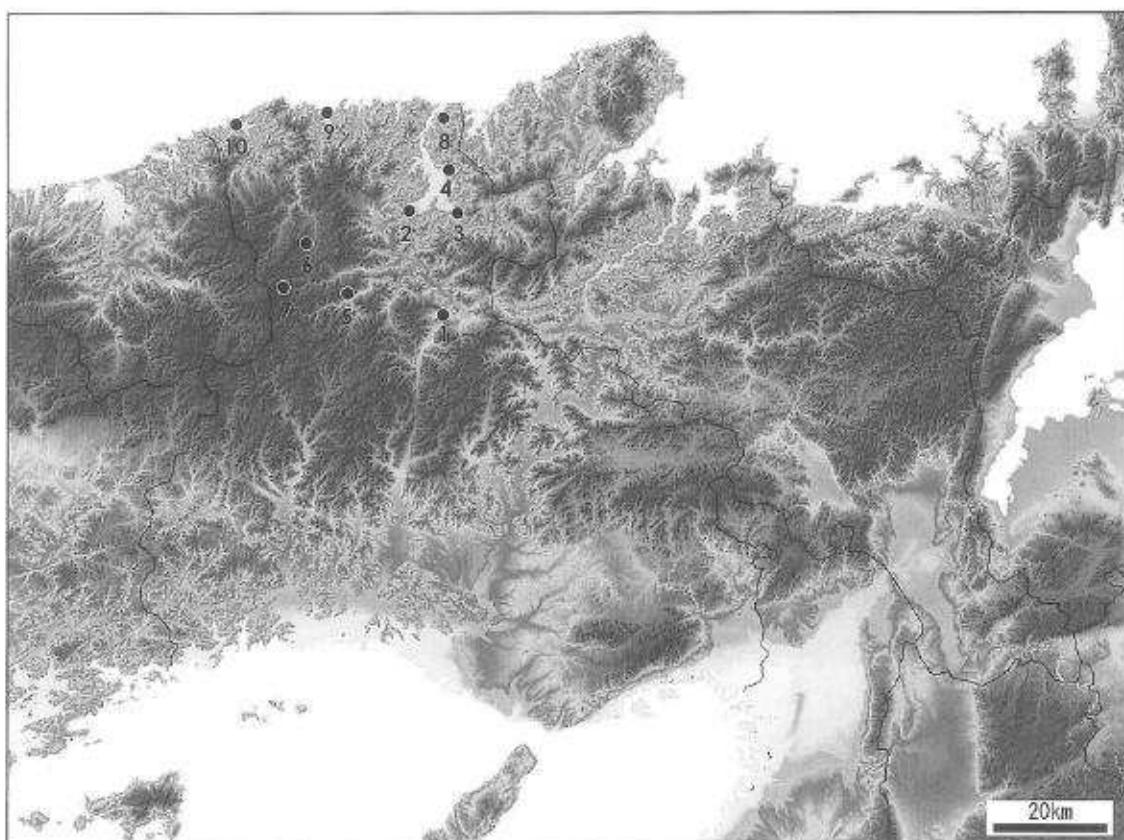
東2次側溝からは比較的多くの花粉化石が確認された。ただし、化石の保存状態が悪く、上記したような風化作用の影響を受けている可能性がある。花粉化石群集の特徴は、総花粉・胞子の中で草本花粉の占める割合が高いこと、草本花粉の中ではイネ科が優占すること、木本花粉ではマツ属（ニヨウマツ類）とスギ属の割合が高いことが特徴である。これらの特徴から、当時の溝周辺はイネ科をはじめとした草本類が生育するような開けた環境にあり、周辺山地にはマツ属やスギ属などの木本植物が分布していたものと考えられる。本遺構が但馬道に関連する道路遺構であることと矛盾しない結果といえる。また、水生植物のスプタ属やミズアオイ属などの花粉化石が、わずかではあるものの検出されている。したがって当時の側溝周辺には、これらの水生植物が存在し、その水生植物に由来する花粉が側溝内に運搬され、堆積したものと考えられる。このことは側溝内が水の影響を受ける状態であったこと、その影響で埋積物が堆積していくような環境であったことを示唆している。

(2) 但馬地域の古植生との比較

今回確認された律令期の花粉化石群集および推定される古植生について、本遺跡が位置する但馬地域の既往の分析結果を概観し、地史的植生変遷の観点から検討してみる。

現在の但馬地域の気候は、北但地域が日本海岸気候区にあたり、年降水量が2000mm以上と多く、特に冬期の積雪量が多いのが特徴である。但馬南部から中央は、気温は四季を通じて冷涼で較差が大きく、年降水量は1800mmで、冬期降水量は日本海岸気候に比べると少ないが、瀬戸内海気候より相当多いという特徴を示す（中西、1984）。

但馬地域の古植生に関する研究は、中・南部では、古生沼湿原（三好・波田、1975）、加保坂湿原（三好ほか、1976）、大沼湿原（MIYOSHI and YANO、1986）など標高300～800mの山間部に位置する湿原の調査成果があり、北部地域の沿岸部では東部氣比低地（前田ほか、1989）や香住・浜坂低地（木村・三浦、2001）の調査成果がある（図3）。これらの成果によると、山間部では、最終氷期の寒冷期にはトウヒ属・モミ属・マツ属単維管束亜属など亜寒帯性針葉樹や落葉広葉樹のカバノキ属などからなる植生が成立していた。完新世に入り、気候の温暖・湿润化に伴い、ブナ属やコナラ亜属などの落葉広葉樹が増加し冷温帶性の針・広混交林を形成する。さらに9000～9500年前頃から約4000～4500年前にかけて気候が温暖化し、暖温帯要素である常緑広葉樹のアカガシ亜属が増加する。この時期には温帶性針葉樹のスギも森林植生を構成する要素として普通に認められるようになる。約4000～4500年前以降になると気候が冷涼化し、スギ属が増加し優占するようになり、ブナ属も再び増加し、約1500年前頃を境として人間活動などの影響によりマツ属が増加開始することが確認されている。一方、沿岸部では、約8000～6000年前頃にはスギとコナラ亜属からなる針広混交林からなる植生が存在した。気比低地ではこ



1. 加都遺跡 2. 深田遺跡 3. 入佐川遺跡 4. 五反田遺跡 5. 加保坂湿原 6. 大沼湿原 7. 古生沼 8. 気比低地
9. 香住低地 10. 浜坂低地

図3 但馬地域における古植生調査地点および木製品の樹種同定が行われた遺跡の位置

の時期にすでにスギ属が森林の主要構成要素となっていた。その後、約6000~3000年前には照葉樹林が優占し、約3000年前以降になり、マツ属が増加するようになる。

以上の山間部と低地部の地史的植生変遷を比較すると、スギ属が優占するようになる時期が山間部では4000~4500年前頃であるが、低地部では8000年前頃に既に優占している。これは但馬地域におけるスギ属の分布拡大が沿岸部から山間部にかけて時間漸移的に起こっていることを示しており、縄文時代よりスギが植生を特徴づける要素として広く分布していたことが窺える。スギの分布拡大の背景には上記した但馬地域の気候要因、とりわけ降水量が瀬戸内地域に比較して多いことに起因するものと推定される。但馬地域に位置する本遺跡を初めとする入佐川遺跡（伊東、2002）、深田遺跡（島地・林、1991）、五反田遺跡（パリノ・サーヴェ、2002c）における弥生時代以降の木製品の用材がスギを中心とする針葉樹材からなることは、古植生と同調する結果であり、スギ材が入手しやすい植生環境にあったことを示唆する。

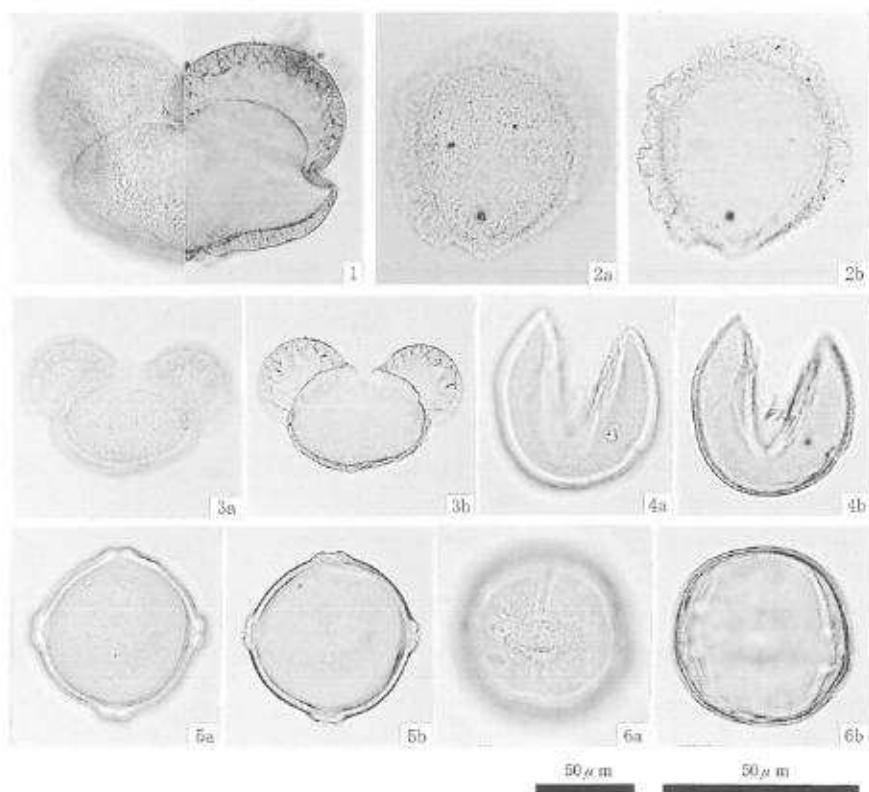
以上のように本遺跡が位置する但馬地域中・北部では、約4000~4500年前以降にスギが森林植生の主要な構成要素となっていたと考えられる。今回の律令期の花粉群集でもスギ属が多産していたが、これは但馬地域の特徴を示している結果であり調和的な結果といえる。また、律令期の花粉群集では二次林の代表的な樹種であるマツ属がスギ属と同等の産状を示していることから、律令期には周辺植生は既に人間の干渉を受けていたことが推定される。上記の地史的植生変遷では、マツ属の増加が約1500年前以

降と推定されており、時期的に矛盾するものではない。ただし、地史的植生変遷における年代観については湿原堆積物の堆積速度などから推測したものであるため、考古遺跡の時間・空間スケールでの適用には問題が残る。また、本地域におけるマツ属の分布拡大様式については古植物・生態学的調査成果が少なく、不明な点が多い。マツ属は人間活動と関連性が強い植物であり、今後、考古遺跡における時間・空間スケールに対応する調査成果の蓄積を行い、森林史や林業史などの観点を含め、自然・社会複合の動態（松田、2000）として検討していくことが大切と考える。

引用文献

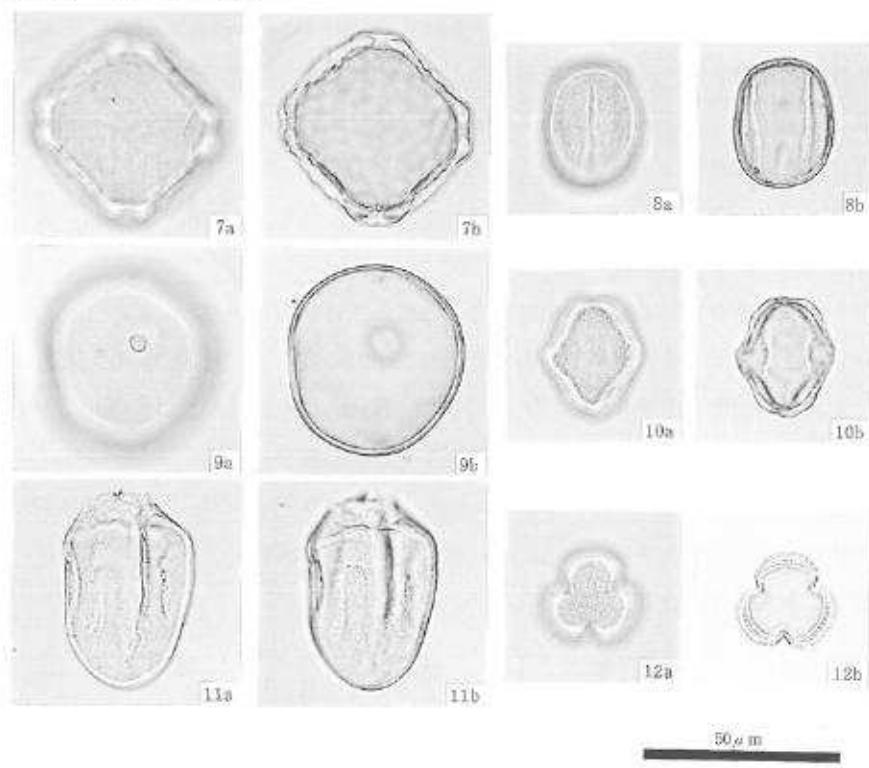
- 伊東隆夫, 2002, 第2節入佐川遺跡出土木製品の樹種, 「兵庫県文化財調査報告第229冊 出石郡出石町
入佐川遺跡 小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(III)」兵庫県教育委員会, p.109-121.
- 木谷幹一・三浦洋一, 2001, 兵庫県北部、香住・浜坂低地における完新世の植生変遷,立命館大学, 13,
p.31-41.
- 前田保夫・中井信之・松本英二・中村俊夫・楠聰・松島義章・佐藤祐司・松原彰子・熊野茂・黒見充宏・
額田雅裕・青木哲哉・古田昇・小橋拓司・松井順太郎・河原典史・山下博樹, 1989, 完新世における
山陰海岸東部気比低地(兵庫県豊岡市)の古環境,立命館地理学, 1, p.1-20.
- 松田順一郎, 2000, 鬼虎川遺跡北部の中・近世耕作地跡－浄化槽埋設に伴う鬼虎川遺跡第43次発掘調査
報告書－, 財団法人東大阪市文化財協会, 13p.
- 三好教夫・波田善夫, 1975, 中国地方の湿原堆積物の花粉分析学的研究2.古生沼(兵庫県), 日本花粉
学会誌 第16号, 37-42.
- 三好教夫・矢野悟道・波田善夫, 1976, 中国地方の湿原堆積物の花粉分析学的研究 3. 加保坂湿原
(兵庫県), 岡山理科大学蒜山研究所研究報告, 2, p.1-10.
- NORIO MIYOSHI and NORIMICHI YANO, 1986, LATE PLEISTOCENE AND HOLOCENE VEGETATIO
NAL HISTORY OF THE OHNUMA MOOR IN THE CHUGOKU MOUNTAINS, WESTERN JAPAN, R
eview of Paleobotany and Palynology, 46, p.355-376.
- 中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.
- 中西 哲, 1984, 5. 兵庫県の植生, 「日本植生誌 近畿」, 宮脇 昭編, 至文堂, p.471-479.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2002, 第3節 五反田遺跡出土木材の樹種, 「兵庫県文化財調査報告書
第227冊 豊岡市五反田遺跡 県立コウノトリの郷公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,
兵庫県教育委員会, p.36-43.
- 島地 謙・林 昭三, 1991, 深田遺跡出土木製品の樹種, 「但馬国府推定地内 深田遺跡・カナゲ田遺
跡 一日高バイパス建設工事に伴う但馬国府推定地内発掘調査報告書－」, 兵庫県教育委員会, p.85-
90.

図版1 花粉化石(1)



1. モミ属 (桜庭区D-11; SD05)
 2. フガ属 (桜庭区D-11; SD05)
 3. マツ属 (桜庭区D-11; SD05)
 4. スギ属 (桜庭区D-11; SD05)
 5. クマシゲ属-アサガ属 (桜庭区D-11; SD05)
 6. ブナ属 (桜庭区D-11; SD05)

図版2 花粉化石(2)



7. ニレ属-ケヤキ属 (桜庭区D-11; SD05)
 8. コテラ属アカガシ重属 (桜庭区D-11; SD05)
 9. イネ科 (桜庭区D-11; SD05)
 10. セリ科 (桜庭区D-11; SD05)
 11. カヤツシダサ科 (桜庭区D-11; SD05)
 12. ブナ属 (桜庭区D-11; SD05)

第4節 木製品の樹種

1. 加都遺跡（その1）出土木製品の樹種同定

株式会社古環境研究所

（1）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

（2）試料

試料は、加都遺跡より出土した木簡、斎串、漆椀、田下駄および田下駄？、蓋などの木製品の合計20点の木材である。

（3）方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（4）結果

結果は表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 図版1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。尚、スギの特徴を示す試料の内、放射断面において、早材部の年輪界付近が存在しない試料はスギ？とした。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図版2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型からややスギ型の傾向を示し、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりサワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直、肌目緻密であるが、ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版4

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 図版5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靭で従属性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図版6

横断面：小型の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して多数散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、導管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。纖維状仮道管がしばしば薄い横隔壁で仕切られている。放射組織は上下端のみときに直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅であるが2細胞幅のものが多い。

以上の形質よりモクレン属に同定される。モクレン属にはホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する、常緑または落葉の高木ないし低木である。

(5) 所見

同定の結果、加都遺跡の木材はスギ8点、スギ?1点、ヒノキ5点、サワラ1点、クリ1点、コナラ属アカガシ亜属1点、ケヤキ2点、モクレン属1点であった。スギが最も多く、木簡、斎串、田下駄?、矢板などに使用されている。つづいて多いヒノキは、蓋、曲物底板などに使用されている。クリは漆椀、コナラ属アカガシ亜属は田下駄?、ケヤキは下駄と不明材、モクレン属は不明材に使用される。

スギ、ヒノキ、サワラは温帯に広く分布するが、特に温帯中下部で森林を形成する。特にスギは湿润を好み積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する。コナラ属アカガシ亜属は温帯下部の暖温帯の照葉樹林を構成する主要高木である。他も温帯を中心に分布する樹木ばかりである。本遺跡出土の木材が遺跡の近隣から採取されたとすれば、周辺にはスギ林を主にヒノキ林が分布し、温帯中下部の積雪や多雨な気候が示唆される。

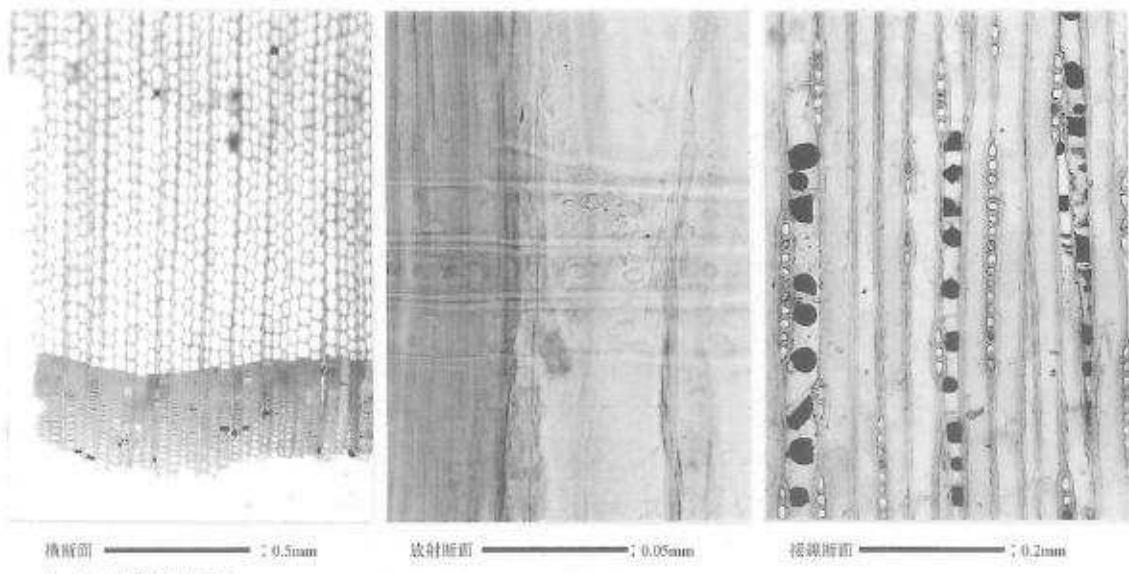
表1 加都遺跡(その1)樹種同定結果

サンプル番号	遺物番号	地区	種別	器種	結果(学名/和名)
1	W1	宮ヶ田I	木簡	木簡	Cryptomeria japonica D.Don スギ
2	W49	櫻	服飾具	下駄	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
3	W51	櫻	服飾具	下駄	Zelkova serrata Makino ケヤキ
4	W48	櫻	服飾具	下駄	Zelkova serrata Makino ケヤキ
5	W50	櫻	服飾具	下駄	Magnolia モクレン属
6	W47	櫻	部材	不明	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
7	W45	櫻	容器	蓋	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
8	W46	櫻	容器	蓋	Chamaecyparis pisifera Endl. サワラ
9	W52	櫻	祭祀具	斎串	Cryptomeria japonica D.Don スギ
10	W54	櫻	部材	不明	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
11	W53	櫻	不明	不明	Cryptomeria japonica D.Don スギ
12	W42	焼御堂	容器	漆椀	Castanea crenata Sieb. et Zucc. クリ
13	—	宮ヶ田I	農具	田下駄	Cryptomeria japonica D.Don? スギ?
14	—	宮ヶ田I	農具?	田下駄?	Cryptomeria japonica D.Don スギ
15	—	宮ヶ田I	農具?	田下駄?	Cryptomeria japonica D.Don スギ
16	—	宮ヶ田I	農具?	田下駄?	Quercus subgen. Cyclobalanopsis コナラ属アカガシ亜属
17	—	宮ヶ田I	不明	矢板	Cryptomeria japonica D.Don スギ
18	—	宮ヶ田I	不明	矢板	Cryptomeria japonica D.Don スギ
19	—	宮ヶ田I	不明	木簡状板材	Cryptomeria japonica D.Don スギ
20	—	宮ヶ田I	容器	曲物底板	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ

参考文献

- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
 佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
 島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296
 山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242
 中川重年(1994)検索入門 針葉樹、保育社

加都遺跡（その1）の木材 I

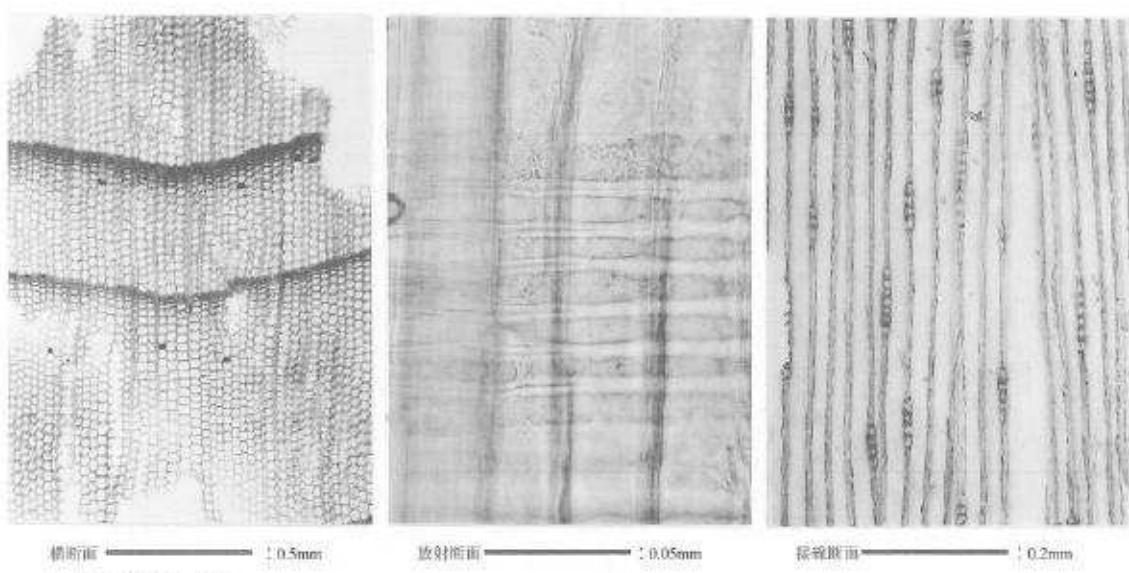


横断面 0.5mm

放射断面 0.05mm

接縫断面 0.2mm

1. サンプル番号14 ズゲ

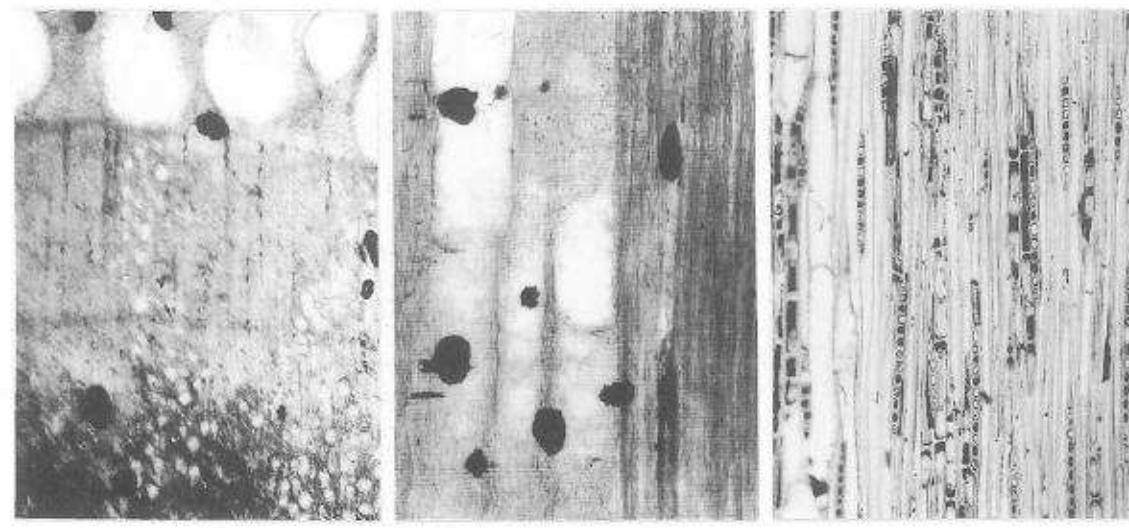


横断面 0.5mm

放射断面 0.05mm

接縫断面 0.2mm

2. サンプル番号6 ヒノキ



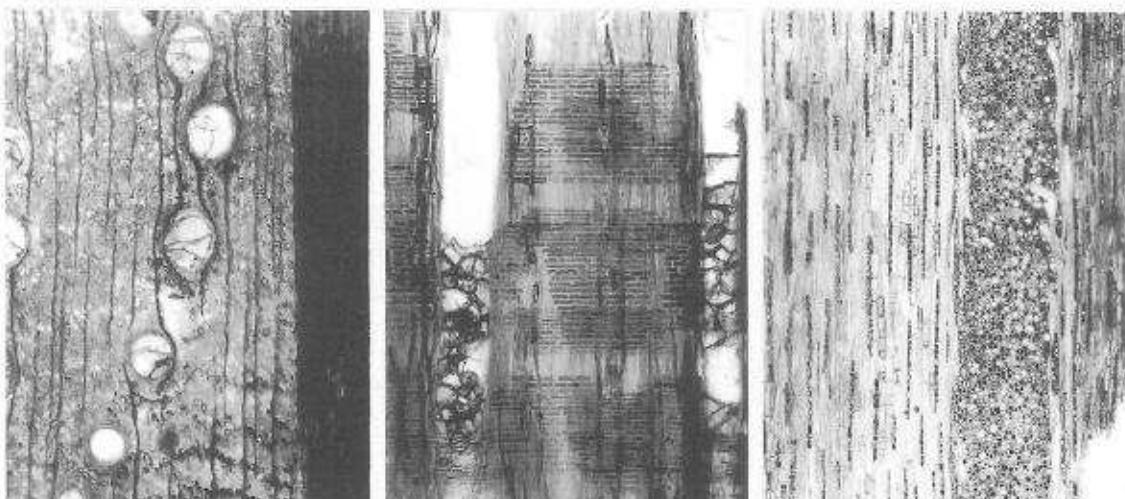
横断面 0.5mm

放射断面 0.05mm

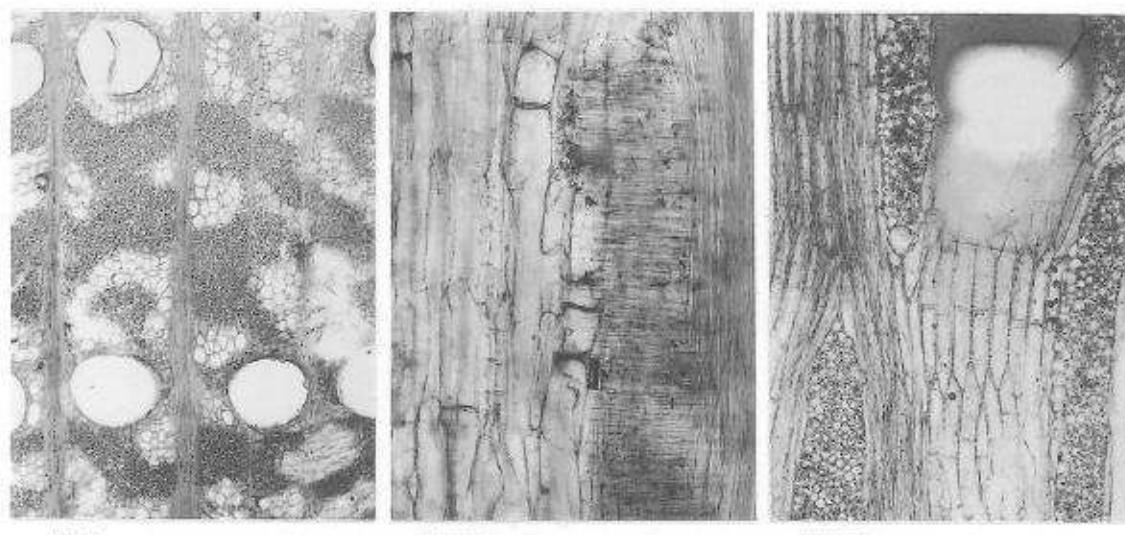
接縫断面 0.2mm

3. サンプル番号12 タガ

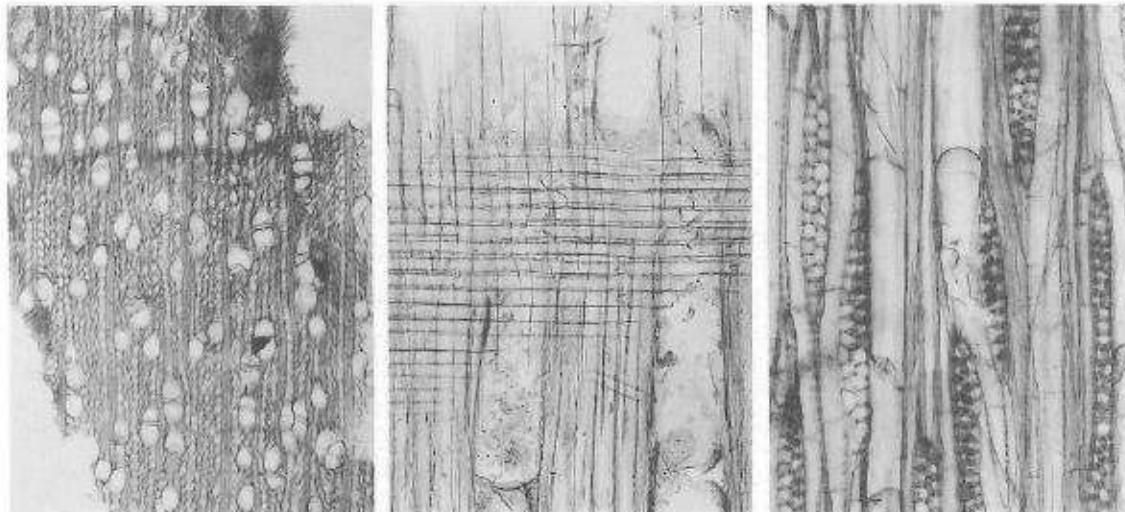
加都遺跡（その1）の木材II



4. サンプル番号16 コナラ属アカガシ亞属



5. サンプル番号4 ケヤキ



6. サンプル番号5 モクレン属

2. 加都遺跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、加都遺跡から出土した古墳時代、古墳時代～中世、律令期、中世の木製品について樹種同定を実施し、各時期の木材の利用状況に関する情報を得ることが目的である。

(1) 試料

樹種同定は、確認調査および新水北A地区・山内北A地区・B地区の発掘調査時に出土した木製品36点（試料番号1～36）について実施する。各木製品からは、調査担当者により、樹種同定用の木口・柱目・板目の3断面からなる切片プレパラートが作製されており、同定に供した。各木製品の時代や器種などの詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

(2) 分析方法

各木製品の切片プレパラートについて生物顕微鏡下で観察を行い、木材組織の特徴を把握し、現生標本プレパラートおよび木材組織カタログ（島地・伊東、1982；林、1991）と比較して、種類（Taxon）を同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。木材は、針葉樹2種類（スギ・ヒノキ）と広葉樹1種類（コナラ属アカガシ亜属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は早材部の終わりから晩材部にかけて認められ、接線方向に配列する傾向がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個。分野壁孔の孔口の長軸方向は水平方向に近い。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ (*Chamaccyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は早材部の終わりから晩材部にかけて認められるが、あまり顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

(4) 考察

樹種同定を行った木製品は、古墳時代後期、古墳時代後期～中世、律令期、中世に帰属する木製品と、時期不明の木質遺物からなる。木製品の樹種は、古墳時代後期、古墳時代後期～中世、中世の木製品が全てスギ、律令期の木製品12点がスギ7点とヒノキ5点、新水北Aの時期・用途不明の木材がアカガシ亜属に同定された。新水北Aの時期・用途不明の木質遺物を除くと、各時代の木製品は全て針葉樹材が利用されており、中でもスギが多く利用されている傾向が窺える。

表1 樹種同定結果

番号	地区	調査番号	報告番号	ネーミング番号	出土層準など	時期	種別	樹種
1	確認調査	960318	W2	1		律令期	人形	ヒノキ
2	新水北A	970196	W34	2-1	西半谷部南半青灰色シルト上	古墳時代後期～中世	部材	スギ
3	新水北A	970196	W32	10-1	東半谷部南半青灰色シルト上	古墳時代後期～中世	部材	スギ
4	新水北A	970196	W8	11	東半谷部南半黒灰色シルト	律令期	曲物蓋板	スギ
5	新水北A	970196	W27	12	西半谷部南半青灰色シルト上	古墳時代後期～中世	栓・把手	スギ
6	新水北A	970196	W13	13-1	東半谷部北半青灰色シルト上	律令期	曲物蓋板？	スギ
7	新水北A	970196	W15	14-1	西半谷部南半黒灰色シルト	古墳時代後期	方形容器(槽)	スギ
8	新水北A	970196	W9	14-4	西半谷部南半黒灰色シルト	律令期	曲物蓋板	ヒノキ
9	新水北A	970196	W18	15-2	西半谷部北半黒灰色シルト～青灰色シルト	中世	田下駄	スギ
10	新水北A	970196	W3	15-3	西半谷部北半黒灰色シルト～青灰色シルト	律令期	斎串	スギ
11	新水北A	970196	W30	20-2	西半谷部南半黒灰色シルト	古墳時代後期～中世	栓・把手	スギ
12	新水北A	970196	W29	24	谷部集石断面E	古墳時代後期～中世	栓・把手	スギ
13	新水北A	970196	W31	26-1	谷部集石断面B	古墳時代後期～中世	部材	スギ
14	新水北A	970196	W22	27	谷部集石残り	古墳時代後期	田下駄棒輪？	スギ
15	新水北A	970196	-	28	谷部集石		コナラ属アカガシ直傷	
16	新水北A	970196	W7	32-2	西半谷部南半暗灰色疊層はじり層	律令期	曲物蓋板	スギ
17	新水北A	970196	W17	33	西半谷部北半黒灰色シルト	古墳時代後期～中世	火鑓板	スギ
18	新水北A	970196	W11	35-1	西半谷部南半暗灰色疊層	律令期	曲物蓋板	スギ
19	新水北A	970196	W18	37	西半谷部北半黒灰色シルト	古墳時代後期	田下駄足板	スギ
20	新水北A	970196	W5	38-3	西半谷部北半青灰色シルト上層	律令期	斎串	スギ
21	新水北A	970196	W33	45-5		古墳時代後期～中世	部材	スギ
22	新水北A	970196	W36	45-6		古墳時代後期～中世	部材	スギ
23	新水北A	970196	W25	69	東半谷部南半黒灰色シルト	古墳時代後期	田舟	スギ
24	新水北A	970196	W26	71	西半谷部南半黒灰色シルト	古墳時代後期	田舟	スギ
25	新水北A	970196	W24	101	谷部集石191	古墳時代後期	田舟	スギ
26	新水北A	970196	W23	123-1	東半谷部南半黒灰色シルト	古墳時代後期	田下駄棒輪？	スギ
27	新水北A	970196	W35	129-1	東半谷部南半褐色砂礫層	古墳時代後期～中世	部材	スギ
28	新水北A	970196	W21	129-2	東半谷部南半褐色砂礫層	古墳時代後期	田下駄立板？	スギ
29	新水北A	970196	W28	129-3	東半谷部南半褐色砂礫層	古墳時代後期～中世	栓・把手	スギ
30	新水北A	970196	W10	130-1	西半谷部南半黒灰色シルト	律令期	曲物蓋板	ヒノキ
31	山内北A	970197	W19	9	道路状造構3区盛土	古墳時代後期	田下駄足板	スギ
32	山内北A	970197	W4	11	谷部中央包含層	律令期	斎串	スギ
33	山内北A	970197	W20	13-2	道路造構底の中盛土	古墳時代後期	田下駄足板	スギ
34	山内北B	980211	W14	1	9区包含層2	古墳時代後期	方形容器(槽)	スギ
35	山内北B	980211	W12	3	5区木器No.2	律令期	挽物	ヒノキ
36	山内北B	980211	W6	11	6区包含層3道路造構付近東面付近	律令期	斎串	ヒノキ

このように古墳時代後期から中世の木製品において針葉樹材が多用される傾向は、後述する但馬地域に位置する複数の遺跡でも確認されている（中村, 2001, 伊東, 2002, パリノ・サーヴェイ, 2002aなど）。特にスギの利用例が多く、古植生との関連性が指摘されている（中村, 2001）。但馬地域南部・中部の古植生は、本報告の花粉分析の項で述べたように、約4500～4000年前以降に針葉樹のスギが優占するようになることが地域的特徴であり、本遺跡周辺でも少なくとも律令期にはスギが周辺山地を中心に分布していたことが推定される。これらのことから、本遺跡周辺でもスギ材が入手しやすい状況にあったことが示唆される。なお、本地域におけるスギの分布拡大は、但馬地域の気候特性が関係しており、瀬戸内地域に比較して年間降水量が圧倒的に多いことが主因と思われる。

各時代を通じて、樹種別に木製品の用途をみると、スギは建築部材、田下駄、田舟、火鑓板、栓・把手、下駄、方形容器（槽）、曲物蓋板、斎串と多岐にわたって利用されている。スギ材の多用の背景には上述のように植生との関係だけでなく、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易であるという材質も関連している可能性がある。一方、ヒノキは律令期の人形、曲物蓋板、挽物、斎串で確認されている。ヒノキの材質は、スギと同様に木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である材質を有するが、耐水性はヒノキの方が高い。今回の律令期の木製品では、曲物蓋板や斎串にヒノキとスギの両方の木材が利用されており、木材の材質も似ていることから、これら木製品については木材選択のあり方に有意な違い

がなかった可能性がある。

但馬地域の木製品の樹種構成については、中村(2001)の報告がある。それによれば、但馬地域に位置する筒江片引遺跡、長谷貝塚、砂入遺跡、外野櫛遺跡の木製品252点の樹種傾向は、スギが圧倒的に多く、祭祀具や田下駄・木簡にも利用されていることが確認されている。また、播磨など他地域ではヒノキが多く利用されている祭祀具や木簡でもスギが多く利用されており、スギ材の使用頻度が地域的特徴として指摘している。

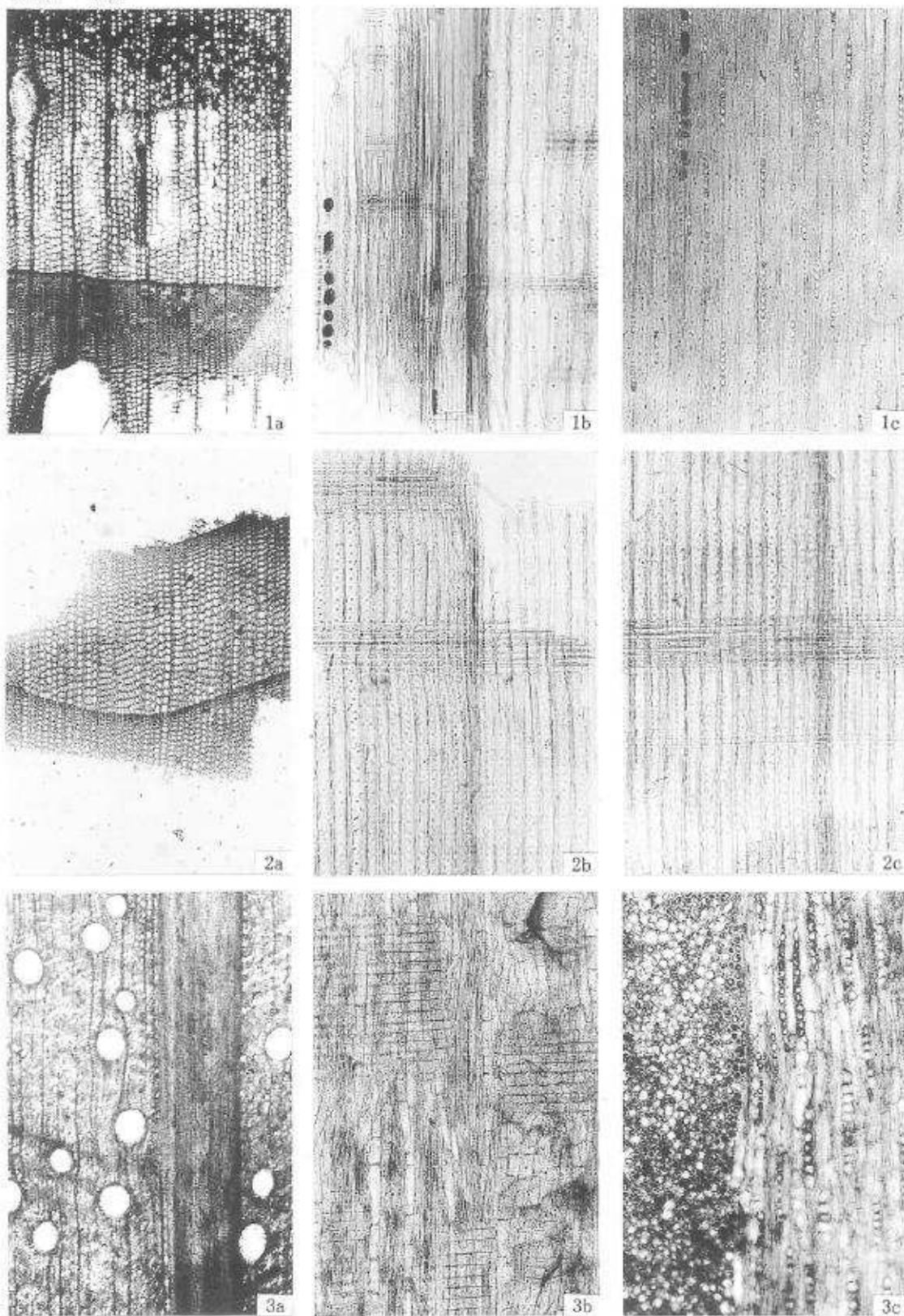
また、中村(2001)以降に報告された但馬地域の遺跡の調査成果として、兵庫県出石郡出石町に所在する入佐川遺跡(伊東, 2002)、兵庫県城崎郡日高町に所在する深田遺跡(島地・林, 1991)、兵庫県豊岡市に所在する五反田遺跡(パリノ・サーヴェイ, 2002)がある。入佐川遺跡では、弥生時代～古墳時代から中世までの出土木製品の樹種同定が行われており、各時代を通じてスギが多く多くの種類の木製品において多数利用されている傾向が特徴として捉えられている(伊東, 2002)。深田遺跡では、平安時代の木製品272点について樹種が明らかにされており、272点の木製品中ヒノキが178点と圧倒的に多く、次いでスギが72点を占め、このほか、広葉樹のアカガシ類、ケヤキ、クリ、コナラ類などが数点利用されていることが確認されている(島地・林, 1991)。五反田遺跡では、古墳時代および古代の出土木製品の樹種同定が行われており、252点の木製品中スギが206点と圧倒的に多く、スギ以外ではヒノキが多く、クリやアカガシ亜属などの落葉広葉樹の利用も確認されている(パリノ・サーヴェイ, 2002)。

以上、但馬地域に位置する各遺跡の木製品の樹種構成をみると、中村(2001)で指摘されているようにスギ材の使用頻度が高く、かつ他地域では別の樹種が利用されている木製品においてもスギが目立つという特徴が窺える。但馬地域の木製品の利用状況を考える上で一つの特徴といえるが、深田遺跡における平安時代の木製品のように、スギを上回るヒノキの利用例もある。今後、但馬地域における木製品の木材利用については、樹種同定資料の蓄積と考古遺跡の時間空間スケールでの植生史研究、さらに各遺跡の性格を踏まえた地域的検討が必要と考える。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 跡微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 中村 弘, 2001, 兵庫県における樹種同定資料について, 兵庫県埋蔵文化財研究紀要, 創刊号, 兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所, 103-121.
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説 木材組織, 地球社, 176p.
- 島地 謙・林 昭三, 1991, 深田遺跡出土木製品の樹種, 「但馬国府推定地内 深田遺跡・カナゲ田遺跡 一日高バ
イバス建設工事に伴う但馬国府推定地内発掘調査報告書一」, 兵庫県教育委員会, p.85-90.
- 伊東隆夫, 2002, 第2節入佐川遺跡出土木製品の樹種, 「兵庫県文化財調査報告第229冊 出石郡出石町 入佐川遺
跡 小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(III)」兵庫県教育委員会, p.109-121.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2002c, 第3節 五反田遺跡出土木材の樹種, 「兵庫県文化財調査報告書, 第227冊
豊岡市五反田遺跡 県立コウノトリの郷公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, 兵庫県教育委員会, p.
36-43.

図版1 木材



1. スギ (試料番号5)
2. ヒノキ (試料番号35)
3. コナラ属アカガシ属 (試料番号15)
a: 木口, b: 横断, c: 径向

第5節 漆器の調査

1. 兵庫県加都遺跡出土漆器の樹種同定調査

株吉田生物研究所 本吉恵理子

京都造形芸術大学 岡田 文男

(1) はじめに

兵庫県加都遺跡から出土した中世の漆器8点について、用材を明らかにする目的で樹種同定調査を行なった結果を以下に報告する。

(2) 調査方法

資料本体から、木胎の木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の3方向について剃刀を用いてそれぞれ数mm四方の切片を採取し、検鏡観察して同定した。

(3) 結果

4種類の広葉樹が確認された。各種のおもな解剖学的特徴を記し、結果を表1に示す。

1) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (No.8)

環孔材である。木口では円形ないし梢円形で大体単独の大道管（ $\sim 500 \mu\text{m}$ ）が年輪にそって幅のかなり広い孔圈部を形成している。孔圈外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2~3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は單穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

2) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino) (No.3,4,7)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（ $\sim 270 \mu\text{m}$ ）が1列で孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集團管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圈部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1~数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は單穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1~3列のものと大部分を占める6~7細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下の端に見られる細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

3) カツラ科カツラ属カツラ (*Cercidiphyllum japonica* Sieb. et Zucc.) (No.2)

散孔材である。木口ではやや小さい薄壁で角張っている道管（ $\sim 100 \mu\text{m}$ ）がおおむね単独または2~3個不規則に接合して平等に分布する。道管の占有面積は大きい。放射柔組織は不顕著。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。道管内腔には充填物（チロース）がある。板目では放射組織は方形ないし直立細胞からなる単列のものと、方形ないし直立細胞の單列部と平伏細胞の2列部からなるものがある。高さ $\sim 900 \mu\text{m}$ からなる。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。

4) トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) (No.1,5,6)
 散孔材である。木口ではやや小さい道管 ($\sim 80 \mu\text{m}$) が単独あるいは2~4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。輪方向柔細胞は1~3細胞の幅で年輪の一番外側(ターミナル状)に配列する。柾目では道管は单穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって輪状になっている(上下縁辺の1~2列の柔細胞に限られる)。板目では放射組織は單列で大半が高さ $\sim 300 \mu\text{m}$ となっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な模様(リップルマーク)として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

表1 兵庫県加都遺跡出土漆器の樹種同定結果

No.	資料No.	遺物番号	遺物名	樹種
1	970200-1	W41	漆椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ
2	970200-2	W44	漆椀	カツラ科カツラ属カツラ
3	970200-3	W43	漆椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
4	970200-6	W39	漆椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
5	970200-9	W40	漆椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ
6	970200-12A**	W38	漆椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
7	970200-12B**	—	漆椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ
8	970200-15	W37	漆皿	ブナ科クリ属クリ

**: 資料No.12には、2個体の漆器が混じっていた。そこで便宜的に破片数の多い方を12A、少ない方を12Bとした。

(4) まとめ

中世漆器8点にケヤキとトチノキが3点ずつ、クリとカツラ1点ずつが確認できた。これら4種の樹種の中で前二者は、中世漆器の用材としてよく見られる樹種である。後二者も珍しくはない。

【参考文献】

- 伊東 隆夫 (1999)『日本産広葉樹材の解剖学的記載』I~V 京都大学木質科学研究所
- 北村 四郎・村田 源 (1979)『原色日本植物図鑑木本編』I、II 保育社
- 島地 謙・伊東 隆夫 (1988)『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣出版
- 島地 謙・伊東 隆夫 (1982)『図説木材組織』 地球社
- 林 昭三 (1991)『日本産木材顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
- 深澤 和三 (1997)『樹体の解剖』 海青社

2. 兵庫県加都遺跡（桜地区）出土漆器の塗膜構造調査

株吉田生物研究所 本吉恵理子
京都造形芸術大学 岡田 文男

（1）はじめに

兵庫県加都遺跡（桜地区）から出土した中世の漆器について、その製作工程を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

（2）調査した資料

調査した資料は表1に示す中世（13世紀）の漆器8点である。

表1 調査資料一覧表

No	資料No	遺物番号	器種	樹種*	内面		外面	
					塗り	加飾	塗り	加飾
1	970200-1	W41	椀	トチノキ	赤色	—	黒色	赤で文様
2	970200-2	W44	椀	カツラ	黒色	赤で文様	黒色	赤で文様
3	970200-3	W43	椀	ケヤキ	黒色	赤で文様	黒色	赤で文様
4	970200-6	W39	椀	ケヤキ	黒色	赤で文様	黒色	—
5	970200-9	W40	椀	トチノキ	黒色	—	黒色	—
6	970200-12A**	W38	椀	ケヤキ	黒色	—	黒色	—
7	970200-12B**	—	椀	トチノキ	黒色	—	黒色	—
8	970200-15	W37	皿	クリ	暗赤色	—	黒色	—

*：樹種については別稿の報告を参照。

**：資料No.12には2個体が混ざっていた。そこで便宜的に破片数が多い方をA、少ない方をBとした。

（3）調査方法

表1の資料本体の内外両面から数mm四方の破片を採取してエボキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを透過光ならびに落射光の下で検鏡した。

（4）観察結果

塗膜断面の具体的な観察結果を表2に示す。

- ①下地：8点とも全て柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地であった。下地層の上部に、層厚の均一な褐色の柿渋のみの部分が存在する。この部分には、層向と垂直方向に大きな裂け目が多数みられる。また下地下部の木炭粉密集部分には、柿渋があまり残存していない。下地の層厚が厚いことと相俟って、この部分で剥離してしまう原因となっている。
- ②漆層：8点とも下地の直上には、顔料を混和しない透明漆が1層みられる。No.1、15の内面は全面が赤色であるが、下地の直上に透明漆層が1層確認された。またこの2点の中でNo.1の内面は明瞭な赤色であるが、15の内面は暗赤色である。この色調の違いは、朱の混和量の多少に拠ることが判明した。
- ③加飾：No.2、3の内外両面、1の外面、4の内面に加飾が見られる。すべて朱を混和した漆で文様を描く漆絵技法である。顔料については、検鏡観察で（文様部を調査できなかったNo.2の内面以外）すべて朱粒子が確認されたため、朱と判断した。

表2 塗膜断面の観察結果

No	器種	部位	図No	塗膜構造(下層から)				
				下地構成	塗り		加飾	
					構造	顔料	構造	顔料
1	椀	内面	1	柿渋+木炭粉	透明漆／赤色漆	朱	—	—
		外面	2	柿渋+木炭粉	透明漆	—	赤色漆	朱
2	椀	内面*	—	柿渋+木炭粉	透明漆	—	—	—
		外面	3	柿渋+木炭粉	透明漆	—	赤色漆	朱
3	椀	内面	—	柿渋+木炭粉	透明漆	—	赤色漆	朱
		外面	4	柿渋+木炭粉	透明漆	—	赤色漆	朱
4	椀	内面	—	柿渋+木炭粉	透明漆	—	赤色漆	朱
		外面	—	柿渋+木炭粉	透明漆	—	—	—
5	椀	内面	—	柿渋+木炭粉	透明漆	—	—	—
		外面	—	柿渋+木炭粉	透明漆	—	—	—
6	椀	内面	5	柿渋+木炭粉	透明漆	—	—	—
		外面	—	柿渋+木炭粉	透明漆	—	—	—
7	椀	内面	—	柿渋+木炭粉	透明漆	—	—	—
		外面	6	柿渋+木炭粉	透明漆	—	—	—
8	皿	内面	7	柿渋+木炭粉	透明漆／赤色漆	朱	—	—
		外面	8	柿渋+木炭粉	透明漆	—	—	—

* : 実際に赤色で文様が施されているが、文様部で試料を採取できなかったので、黒色部分を調査した。

(5)まとめ

塗膜断面の観察結果に、樹種同定の結果を合わせて若干考察する。

今回調査した8点の漆器は、渋下地の上に1層の透明漆、その上に加飾があるものには漆絵の朱漆が1層みられる、という典型的な中世漆器の塗膜構造をとっている。透明漆層の塗り重ねや、黒色顔料の混和、といった個体差は認められなかった。内面全面を赤色で表現する場合も、下層には薄くとも透明漆1層が施されている。赤色顔料は文様部も面的な塗りの場合も、朱であった。ベンガラを使用する場合もある近世漆器と異なる点である。一方樹種同定の結果によると、ケヤキとトチノキが3点、カツラとクリが1点検出された。これらの樹種は中世漆器の用材の傾向と合致する。近世漆器になると塗膜構造にバリエーションが出て、用材と相關する傾向がある。この点は中世漆器と近世漆器の異なる点で、今回調査した8点は総合的に見ても典型的な中世漆器といえる。

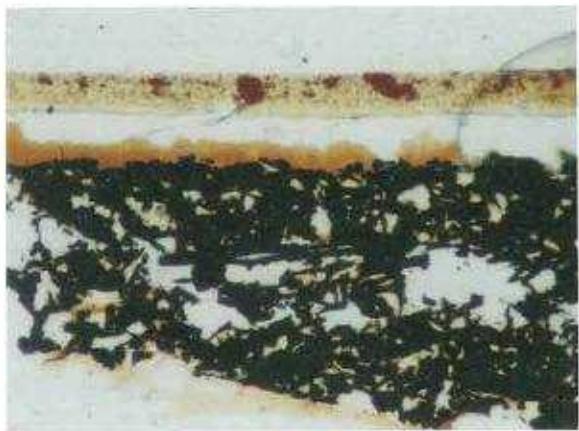


図1 No.1 内面 ($\times 400$)



図2 No.1 外面 ($\times 400$)

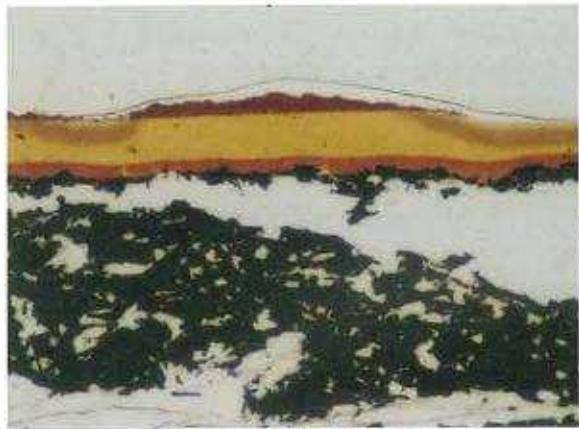


図3 No.3 外面 ($\times 400$)

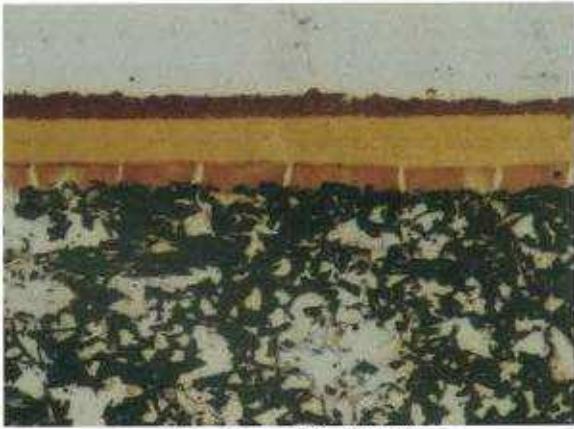


図4 No.3 外面 ($\times 400$)

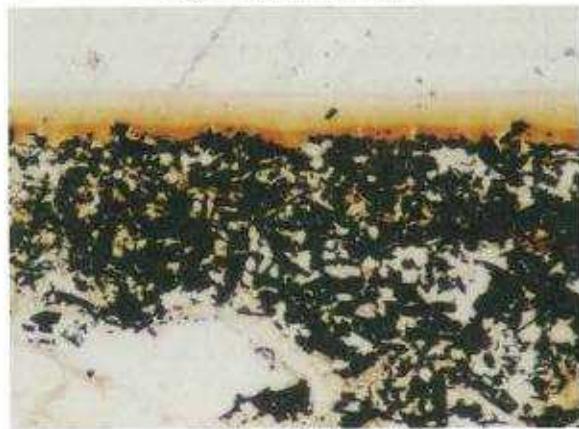


図5 No.6 内面 ($\times 400$)



図6 No.7 外面 ($\times 400$)

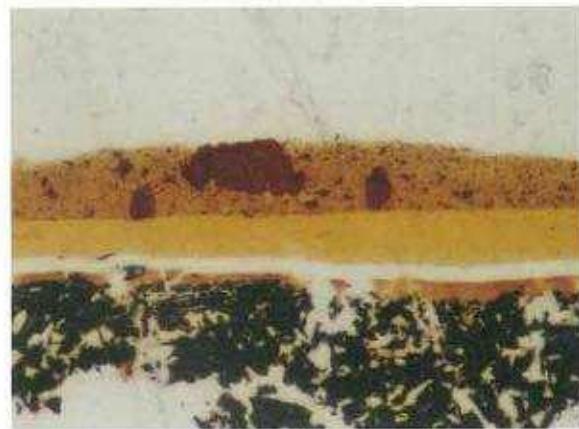


図7 No.8 内面 ($\times 400$)

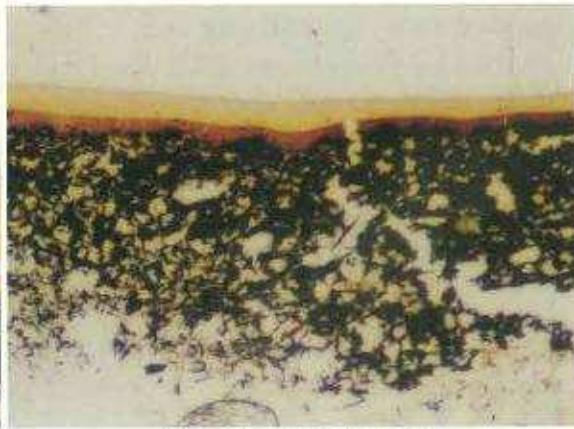


図8 No.8 外面 ($\times 400$)

参考文献（各章共通）

- 赤羽一郎・中野晴久 1995 「中世常滑焼の生産地編年」「常滑焼と中世社会」
- 足立 裕・生田 隆 2002 「古代但馬国朝来郡衙跡と古代山陰道一通過地の地名についての歴史地理的考察（下）一」
『歴史と神戸』第41巻第4号 神戸史学会
- 荒木幸治 2001 「古墳時代初頭における粘土探掘坑とそれに伴う具体的活動—兵庫県朝来郡和田山町筒江浦石遺跡の調査—」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 飯田充晴 1992 「道路築造方法について」『古代交通研究』第2号 古代交通研究会
- 池邊 彌 1981 『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館
- 大庭康時 1997 「博多遺跡群における中世考古資料の分布論的検討メモ—将来の「場」の研究に向けて」『博多研究会誌』第5号 博多研究会
- 尾野善裕 1995 「東濃黒灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』96号
- 岸本一宏 2003 「茶すり山古墳とその周辺」「但馬の王墓 茶すり山古墳 調査概報」兵庫県教育委員会
- 木下 良 1989 「山陰道旧駅路について—但馬国を中心にして」『但馬史研究』第12号 但馬史研究会
- 黒板勝美編 1985 「改訂増補国史大系 延喜式 後篇」吉川弘文館
- 高橋美久二 1993 「古代の山陰道」「歴史の道調査報告第3集 山陰道」兵庫県教育委員会
- 高橋美久二 2000 「古代道路研究の現状と課題」「歴史地理学』第42巻第3号
- 高野陽子 1998 「近畿北部地域における墳墓供献土器について」『庄内式土器研究』15—庄内式併行期の土器生産とその動き— 庄内式土器研究会
- 高野陽子 2003 「北近畿における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相」「古墳出現期の土師器と実年代」シンポジウム資料集（財）大阪府文化財センター
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』平凡社
- 谷本 進 1992 「但馬地域」正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年—山陰・山陽編—』木耳社
- 谷本 進 2000 「但馬における庄内式併行期の土器様相」「庄内式土器研究』22—庄内式併行期の土器生産とその動き—「丹波・丹後・但馬を中心とした庄内式併行期の土器の移動」 庄内式土器研究会
- 谷本 進 2001 「但馬における庄内式併行期の土器の様相」「北近畿の考古学」両丹考古学研究会・但馬考古学研究会
- 田畠 基 1998 『法興寺跡』和田山町教育委員会
- 田畠 基 2004 『考古学から見た和田山』『和田山町史』上巻
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』
- 早川 泉 1991 「古代道路遺構に残された圧痕」「東京考古』第9号 東京考古談話会
- 榎本誠一・瀬戸谷晴 1982 『日本の古代遺跡2 兵庫北部』
- 広瀬和雄 1988 「近畿地方における土器製塩—大阪湾周辺を中心として—」『考古学ジャーナル』No298 ニュー・サイエンス社
- 兵庫県教育委員会 1982 『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』
- 兵庫県教育委員会 2002 『シンポジウム古代但馬の王墓をめぐって 発表要旨』
- 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県遺跡地図』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000 『平成11年度 年報』
- 森田勉・横田賛二郎 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁について」「九州歴史資料館研究論集』第4集 九州歴史資料館
- 吉本昌弘 2000 「古代駅伝路における道の幅員について」『古代交通研究』第9号 古代交通研究会
- 和田山土地改良区 1974 『土にいどむ』

付表1 遺構名対照表

地 区 名		遺 構 名	
報告書	調査時	報告書	調査時
伊豫田	伊豫田	SDY001	SD01
	伊豫田	SDY002	SD02

地 区 名		遺 構 名	
報告書	調査時	報告書	調査時
岡ノ森	岡ノ森	SDY003	SD01
	岡ノ森	SDY004	SD05
	岡ノ森	SDY005	SD06
	岡ノ森	SKY001	SK06
	岡ノ森	SKY002	SK16
	岡ノ森	SDK001	SD02
	岡ノ森	SDK001	SD03
	岡ノ森	SDK001	SD04
	岡ノ森	SBC001	SB01
	岡ノ森	SKC001	SK01

地 区 名		遺 構 名	
報告書	調査時	報告書	調査時
桜	桜	SFR001	SF01
	桜 2 C	SFR001	SF01
	桜 2 B	SFR001	SF01
	桜 2 A	SFR001	SF01
	桜	SFR001	SD26
	桜	SFR001	SD10
	桜	SFR001	SD11
	桜	SFR001	SD16
	桜	SFR001	SD09
	桜	SFR001	SD05
	桜	SFR001	SD27
	桜	SFR001	SD08
	桜	SFR001	SD12
	桜	SFR001	SD13
	桜	SFR001	SD14
	桜	SFR001	SD15
	桜 2 A	SFR001	SD1
	桜 2 A	SFR001	SD3
	桜 2 A	SFR001	SD2
	桜 2 A	SFR001	SD4
	桜 2 B	SFR001	SD1
	桜 2 B	SFR001	SD4
	桜 2 B	SFR001	SD2

桜 2 B	SFR001 東 2 次側溝	SD3
桜 2 B	SFR001 東 2 次側溝	SD3
桜 2 B	SFR001 路面溝	SD7
桜 2 C	SFR001 西 1 次側溝	SD1
桜 2 C	SFR001 東 1 次側溝	SD2
桜 2 C	SFR001 路面溝	SD3
桜	SAC001	SA02
桜	SAC002	SA01
桜	SBC002	SB01
桜	SBC003	SB02
桜	SBC004	SB03
桜	SBC005	SB04
桜	SBC006	SB05
桜	SBC007	SB06
桜	SBC008	SB07
桜	SBC009	SB08
桜	SBC010	SB09
桜	SBC011	SB10
桜	SBC012	SB11
桜	SBC013	SB12
桜	SBC014	SB13
桜	SBC015	SB14
桜	SBC016	SB15
桜	SBC017	SB16
桜	SBC018	SB17
桜	SBC019	SB18
桜	SBC020	SB19
桜	SBC021	SB20
桜	SBC022	SB21
桜	SBC023	SB22
桜	SBC024	SB23
桜	SBC025	SB24
桜	SBC026	SB25
桜	SBC027	SB26
桜	SBC028	SB27
桜	SBC029	SB28
桜	SBC030	SB29
桜	SBC031	SB30
桜	SBC032	SB31
桜	SBC033	SB32
桜	SBC034	SB33
桜	SBC035	SB34
桜	SBC036	SB35
桜	SBC037	SB36
桜	SBC038	SB37
桜	SBC039	SB38
桜	SBC040	SB39
桜	SBC041	SB40
桜	SBC042	SB41
桜	SBC043	SB42
桜	SPC001	P48
桜	SPC002	P82
桜	SPC003	P105
桜	SPC004	P126
桜	SPC005	P174

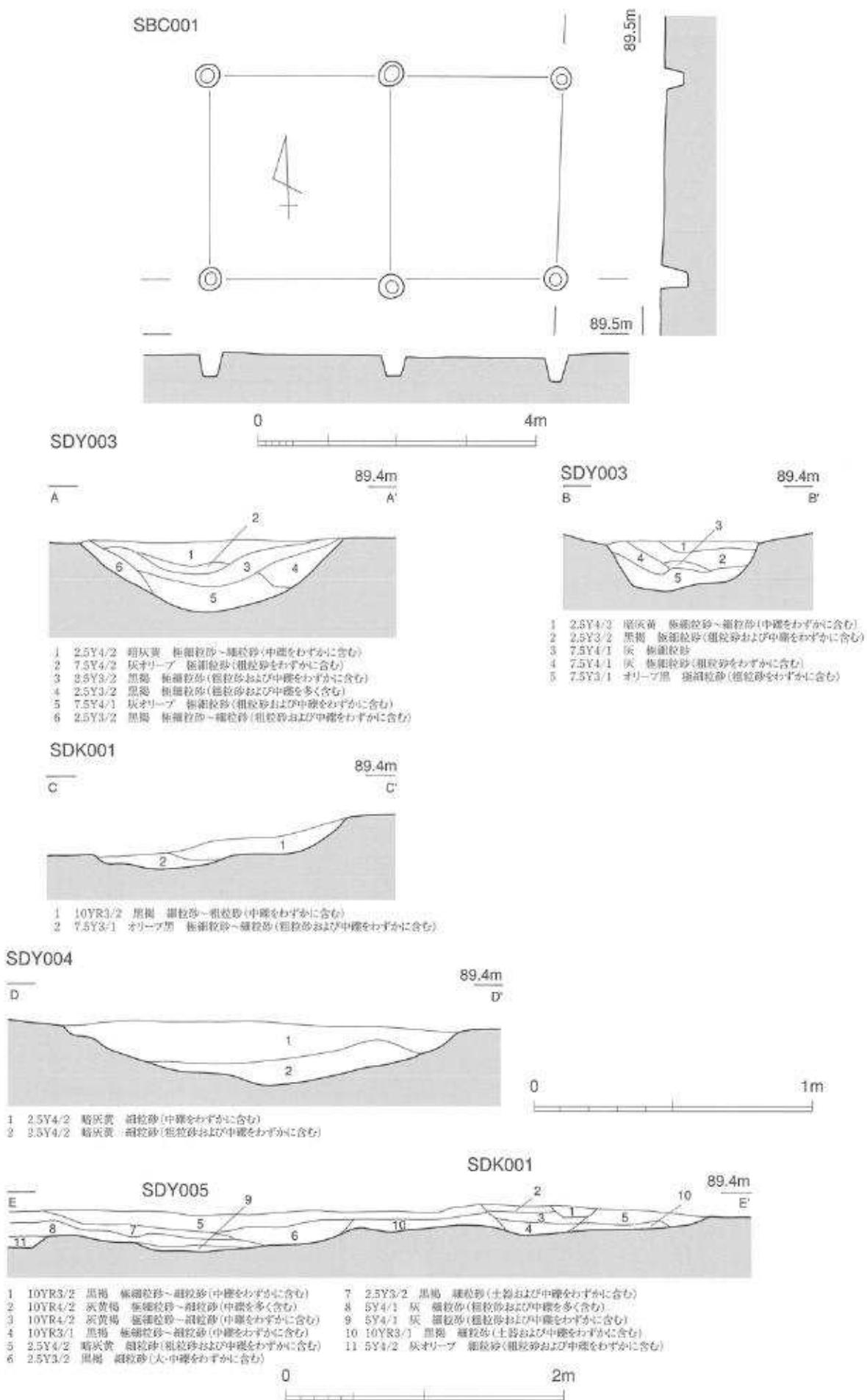
桜	SPC006	P337	山内北C	(SHK019)	SK03
桜	SPC007	P564	山内北C	SHK020	SH04
桜	SPC008	P585	山内北C	SHK021	SH02
桜	SPC009	P598	宮ヶ田B	SHK022	SH01
桜	SPC010	P602	宮ヶ田B	SHK023	SH02
桜	SPC011	P604	宮ヶ田B	SHK024	SH08
桜	SPC012	P672	宮ヶ田B	SHK025	SH04
桜	SPC013	P701	宮ヶ田B	SBK001	SB4
桜	SPC014	P733	宮ヶ田B	(SBK001)	pit413
桜	SPC015	P894	宮ヶ田B	SPK001	Pit329
桜	SPC016	P928	山内北A	SPK004	P645
桜	SPC017	P1312	山内北A	SPK005	pit722
桜	SPC018	P1317	宮ヶ田B	SPK006	Pit812
桜	SPC019	P1329	宮ヶ田B	SPK007	P110
桜	SPC020	P1330	山内北C	SPK008	P99
桜	SPC021	P1546	山内北C	SPK009	P86
桜	SPC022	P421	山内北C	SPK010	P48
桜	SPC023	P1612	山内北A	SKK001	SK11
桜	SPC024	P1623	宮ヶ田B	SKK002	SK07
桜	SPC025	P1899	宮ヶ田B	SKK003	SK05
桜	SPC026	P2070	宮ヶ田B	SKK004	P389
桜	SPC027	P2093	山内北C	SKK005	SK09
桜	SPC028	P526	山内北C	SKK006	SK02
桜	SKC002	SK01	山内北C	SKK007	SK01
桜	SKC003	SK03	宮ヶ田B	SKK008	SK04
桜	SKC004	SK06	宮ヶ田B	SKK009	SK08
桜	SKC005	SK09	山内北A, B, 新水北A	SXK001	集石造構
桜	SKC006	SK10	山内北C	SXK002	中央鍾群
桜	SKC007	SK13	山内北B	SER001	SE01
桜	SKC008	SK14	山内北B	SFR001	道路造構
桜	SKC009	SK15	山内北A	SFR001	道路造構
桜	SKC010	SK16	山内北B	SFR001	SD03
桜	SKC011	SK18	山内北B	SFR001	東1次倒溝
桜	SKC012	SK29	山内北B	SFR001	SD01
桜	SKC013	SK30	山内北B	SFR001	SD02
桜	SKC014	SK32	宮ヶ田B	SBC045	SB1
桜 2 B	SDC001	SD6	宮ヶ田B	SBC046	SB2
桜	SRC001	SD02	宮ヶ田B	SBC047	SB3
桜	SRC002	流路			
桜	SXC001	P1599			

地 区 名		遺 構 名		地 区 名		遺 構 名	
報 告 書	調 査 時	報 告 書	調 査 時	報 告 書	調 査 時	報 告 書	調 査 時
宮ヶ田 I	山内北B	SHK001	SH1	宮ヶ田 II	宮ヶ田A	SHK026	SH03
	新水北A	SHK002	SH3		宮ヶ田A	SHK027	SH02
	新水北A	SHK003	SH2		宮ヶ田A	SHK028	SH01
	山内北B	SHK004	SH2		宮ヶ田A	SKK010	SK225
	山内北A	SHK005	SH20		宮ヶ田A	SKK011	SK244
	山内北A	SHK006	SH17		宮ヶ田A	SFR002	道路造構 (SD82-112)
	山内北A	SHK007	SH22		宮ヶ田A	SAC003	
	山内北A	SHK008	SH16		宮ヶ田A	SBC048	SB06
	宮ヶ田B	SHK009	SH07		宮ヶ田A	SBC049	SB05
	山内北A	SHK010	SH11		宮ヶ田A	SBC050	SB07
	山内北A	SHK011	SH12		宮ヶ田A	SBC051	SB04
	山内北A	SHK012	SH14		宮ヶ田A	SBC052	SB01
	山内北A	SHK013	SH15		宮ヶ田A	SBC053	SB02
	山内北A	SHK014	SH10		宮ヶ田A	SBC054	SB03
	山内北A	SHK015	SH13		宮ヶ田A	SKC015	SK85
	山内北C	SHK016	SH05				
	山内北C	SHK017	SH06				
	山内北C	(SHK017)	SK08				
	山内北C	SHK018	SH07				
	山内北C	SHK019	SH03				

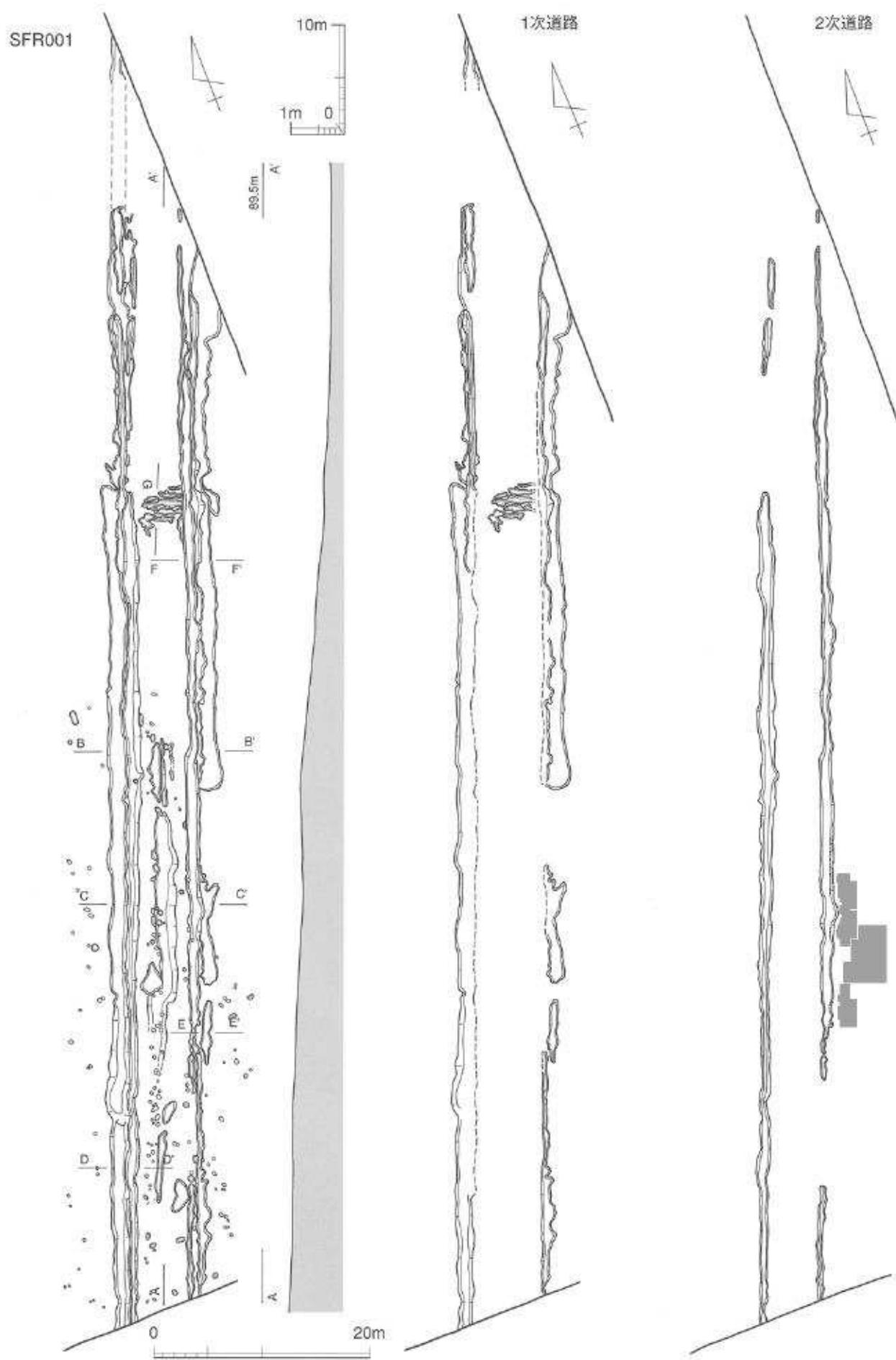
遺物 番号	地 区	出 土 槽 構	種 類	器 横	法 様			備 考	參 照 先		
					長さ	幅	底径		本文頁	図版	写真
M11	桜	SPCC42	釘	鉄	(2.9)	0.7	0.7		112	112	114
M12	桜	SPC025	釘	鉄	(2.2)	0.5	0.5		112	112	114
M13	桜	SKC008	釘	鉄	(4.8)	0.5	0.5		112	112	114
M14	桜	SKC014	釘	鉄	(4.2)	1.5	0.6		112	112	114
M15	桜	SKC014	釘	鉄	(3.2)	0.7	0.5		112	112	114
M16	桜	SRC001	釘	鉄	(5.7)	0.8	0.5		112	112	114
M17	桜	包含層	釘	鉄	(3.2)	0.6	0.7		112	112	114
M18	桜	SRC001	釘	鉄	(7.2)	0.7	0.8		112	112	114
M19	桜	SRC002	釘	鉄	(3.4)	0.4	0.5		112	112	114
M20	桜	包含層	釘	鉄	(5.1)	0.5	0.6		112	112	114
M21	桜	包含層	釘	鉄	(2.5)	0.4	0.4		112	112	114
M22	桜	包含層	釘	鉄	(2.8)	0.3	0.4		112	112	114
M23	桜	包含層	釘	鉄	(2.8)	0.4	0.3		112	112	114
M24	桜	包含層	釘	鉄	(3.3)	0.4	0.4		112	112	114
M25	桜	SPC001	鍔頭	鉄	(11.2)	2.2	0.8		112	112	114
M26	桜	SKC007	刀子	鉄	(4.3)	1.6	0.6		113	112	114
M27	桜	SFR001西1次側溝	刀子	鍔	(8.0)	1.5	0.6		113	112	114
M28	桜	SPC002	火打金	鉄	(5.5)	2.3	0.6		113	112	114
M29	桜	包含層	火打金	鉄	(5.5)	2.2	0.8		113	112	114
M30	桜	SKC008	火打金	鉄	8.2	2.6	0.5		113	112	114
M31	桜	SKC007	不明	鉄	(3.9)	2.7	0.7		113	113	114
M32	桜	SKC007	不明	鉄	(4.7)	3.1	1.2	一部に木質残存	113	113	114
M33	桜	SKC014	不明	鉄	1.6	1.5	0.6		113	113	114
M34	宮ヶ田II	SKC015	刀子	鉄	16.7	1.8	0.8	柄部に木質残存	113	113	115
M35	宮ヶ田II	SHK024		鍔	4.8	1.1	0.5		113	113	115
M36	宮ヶ田II	包含層	刀子	鉄	9.3	1.5	0.5		113	113	115
M37	宮ヶ田II	包含層	鍔頭	鉄	(11.2)	3.4	0.4		113	113	115
M38	宮ヶ田I	SPK007	釘	鉄	(3.4)	0.4	0.4		113	113	115
M39	宮ヶ田I	包含層	釘	鉄	(6.8)	0.7	0.6		113	113	115
M40	宮ヶ田I	包含層	遺物か	鉄	(14.4)	7.5	0.5		113	113	115
M41	伊豫田	確認調査	楔	鉄	19.2	1.7	1.2		113	113	115
M42	トレンチ40-B	確認調査	楔	鉄	26.9	3.1	1.0	一部に木質残存	113	113	115
M43	宮ヶ田II	包含層	愛管	銅	(12.8)	0.9	0.9		113	114	115
M44	宮ヶ田I	包含層	鍔	銅	2.5	2.5	0.1		113	114	115
M45	山内南	包含層	鍔	銅	2.4	2.4	0.1		113	114	115
M46	桜	SPC007	鍔澤	鉄					113	なし	116
M47	桜	SPC029	鍔澤	鉄					113	なし	116
M48	桜	SPC029	鍔澤	鉄					113	なし	116
M49	桜	SPC029	鍔澤	鉄					113	なし	116
M50	桜	SPC030	鍔澤	鉄					113	なし	116
M51	桜	SPC031	鍔澤	鉄					113	なし	116

図 版

図版1 岡ノ森地区の遺構 SBC001・SDY003・SDY004・SDY005・SDK001

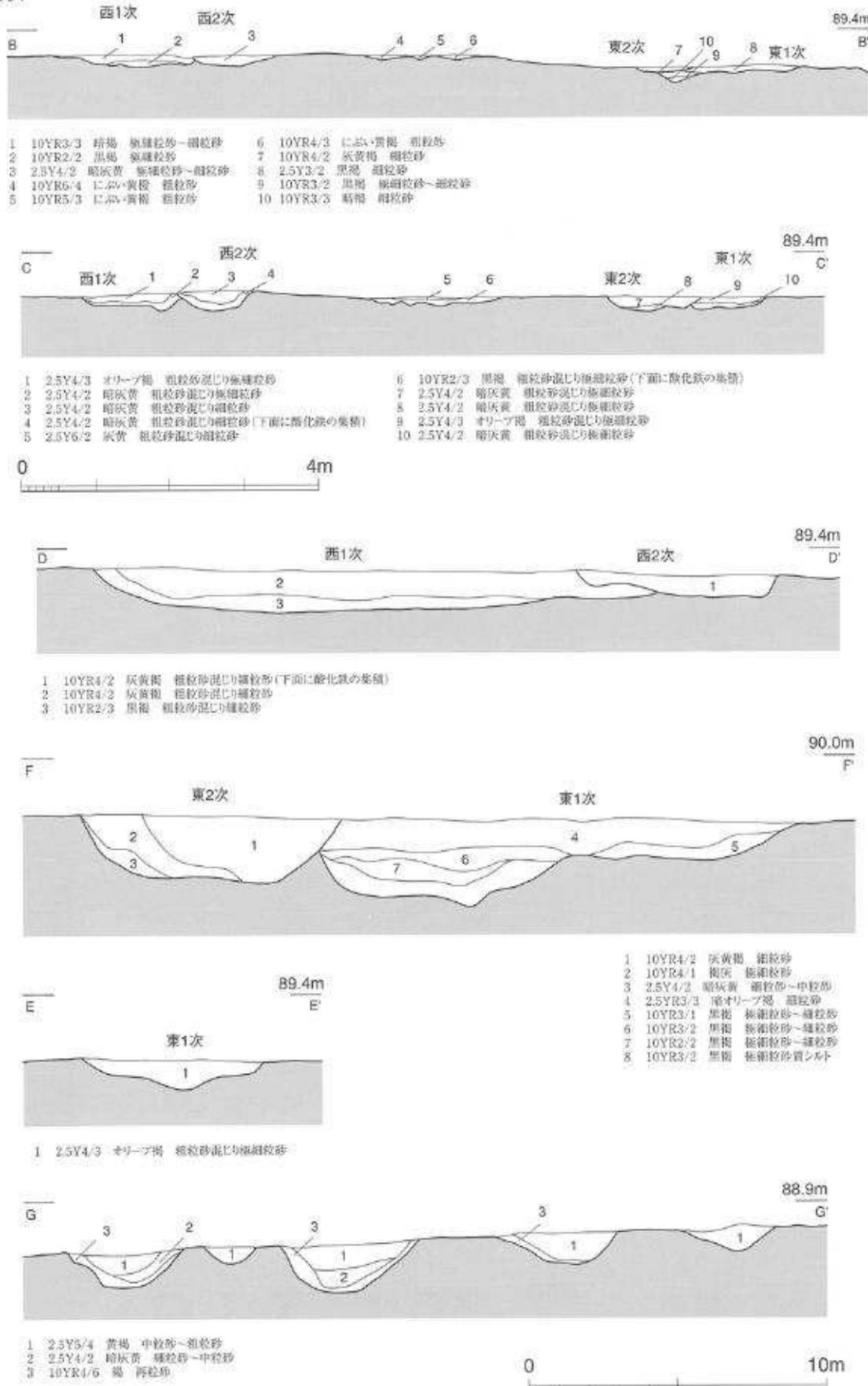


図版2 桜地区の遺構(1) SFR001

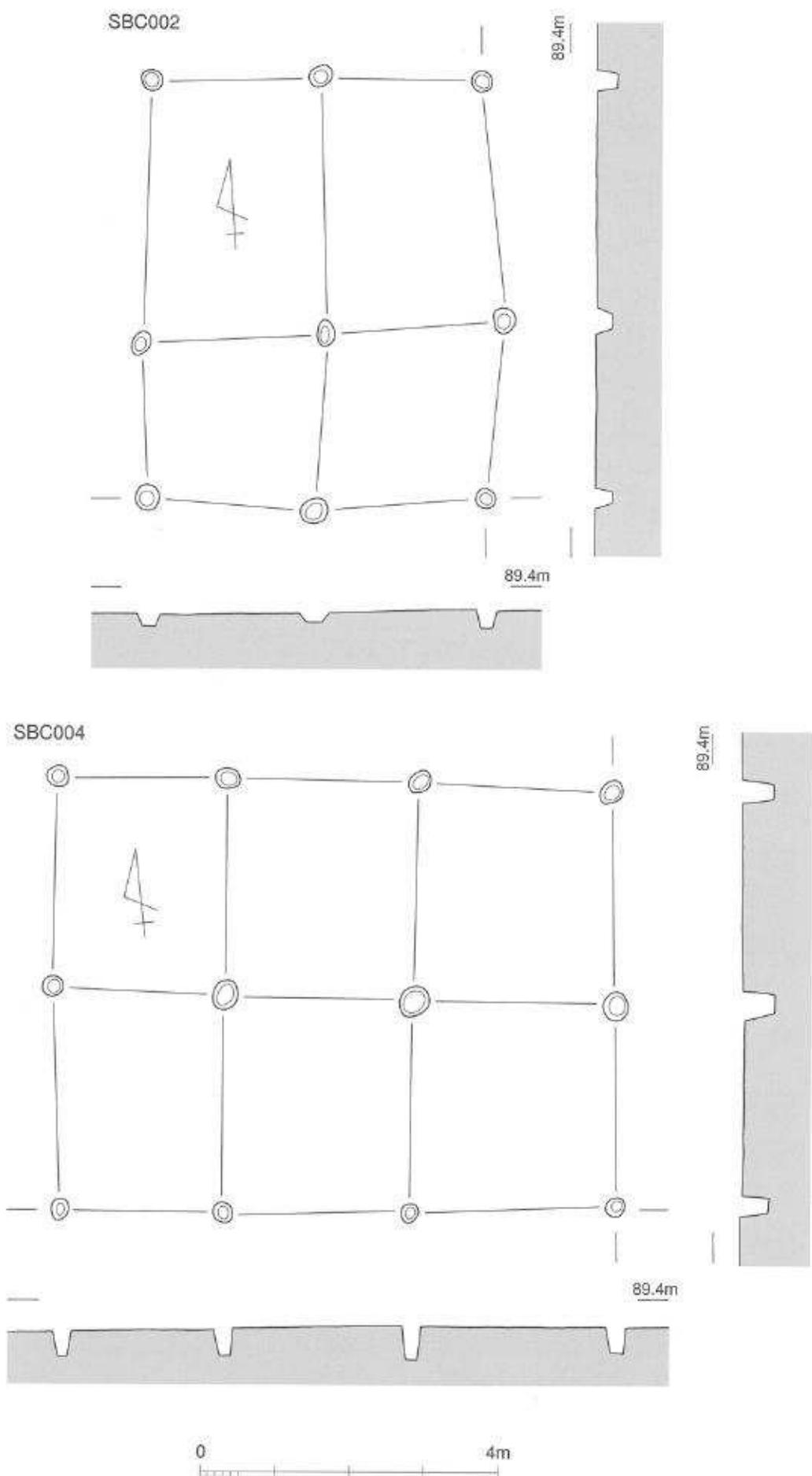


図版3 桜地区の遺構(2) SFR001

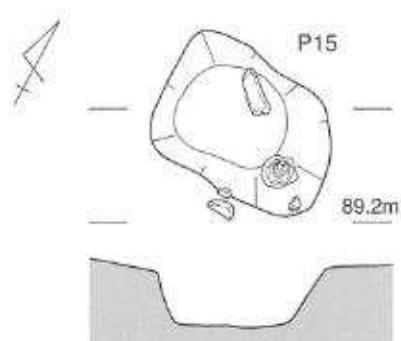
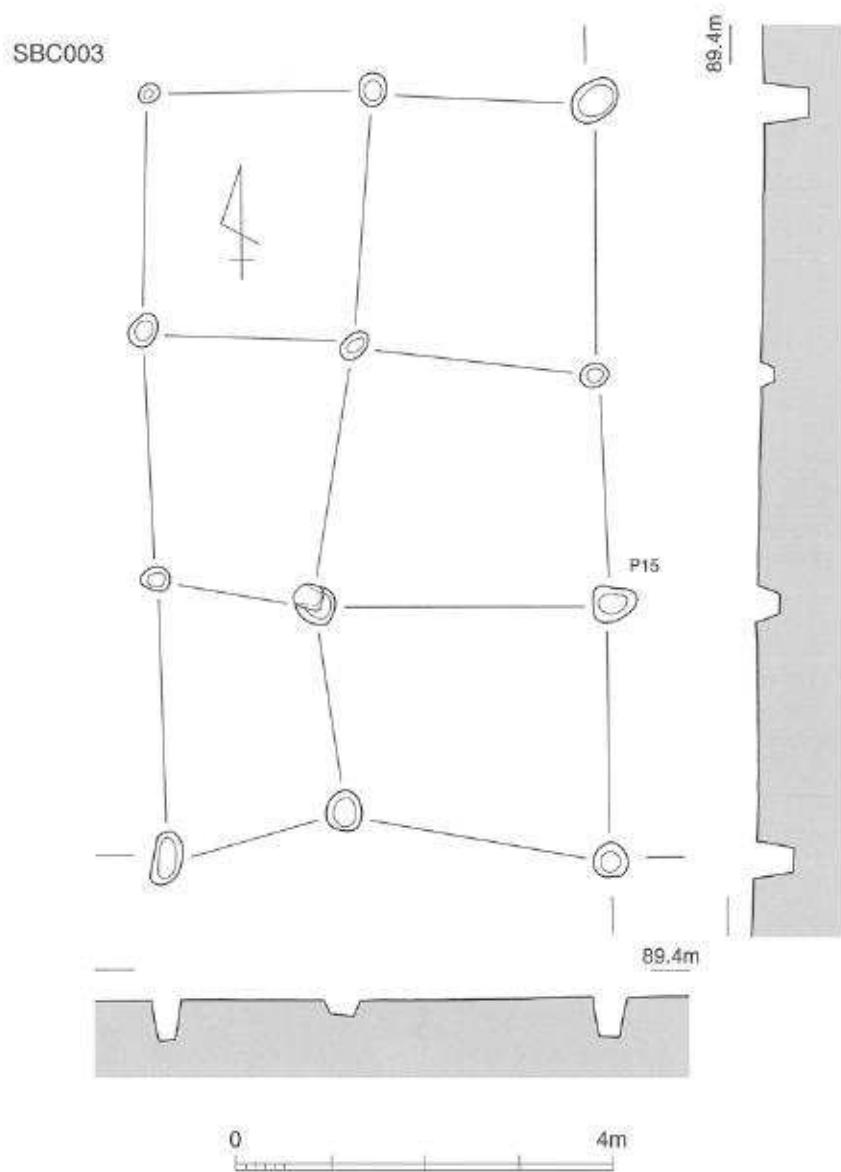
SFR001



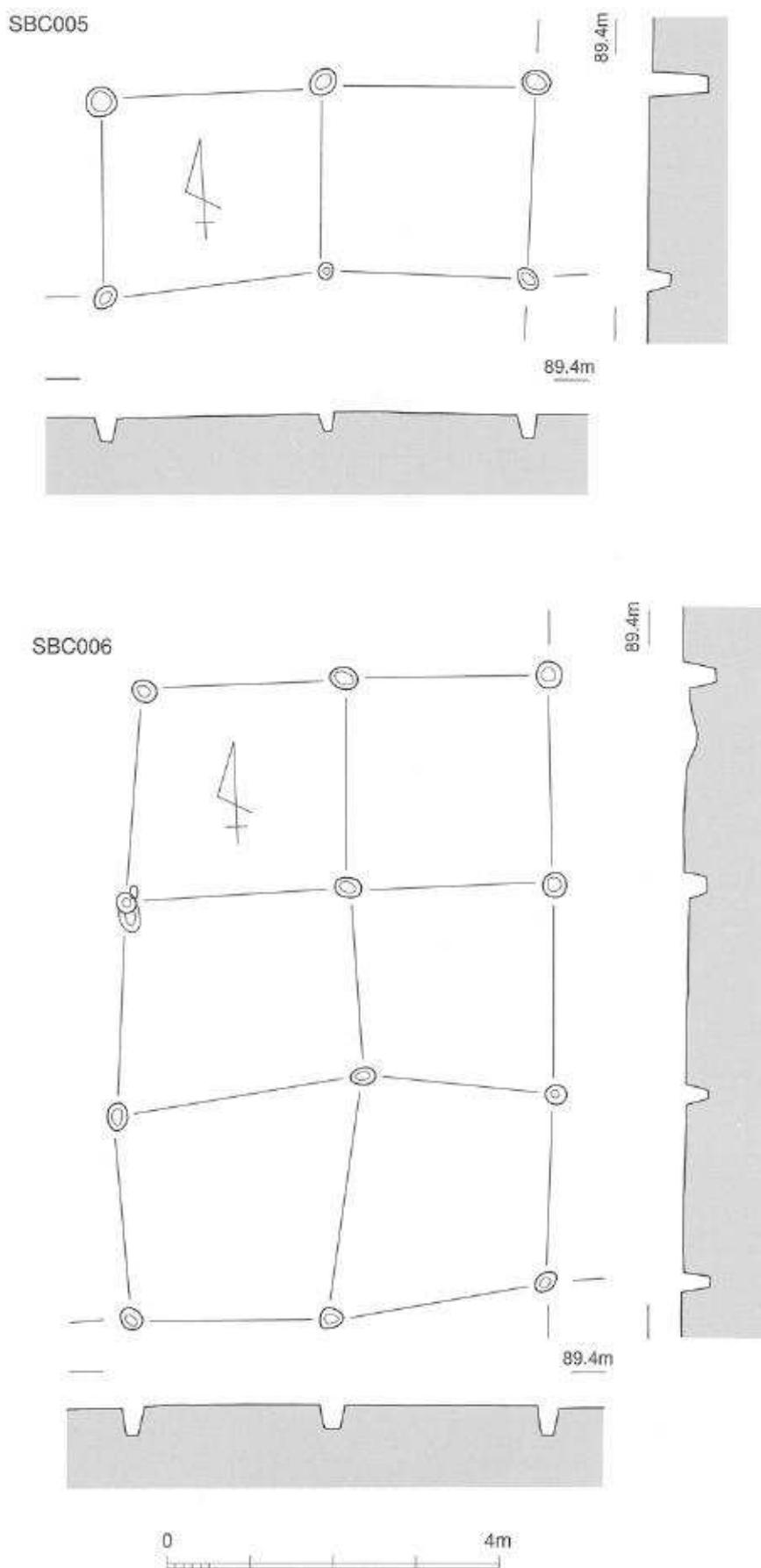
図版4 桜地区の遺構(3) SBC002・SBC004



図版5 桜地区の遺構(4) SBC003

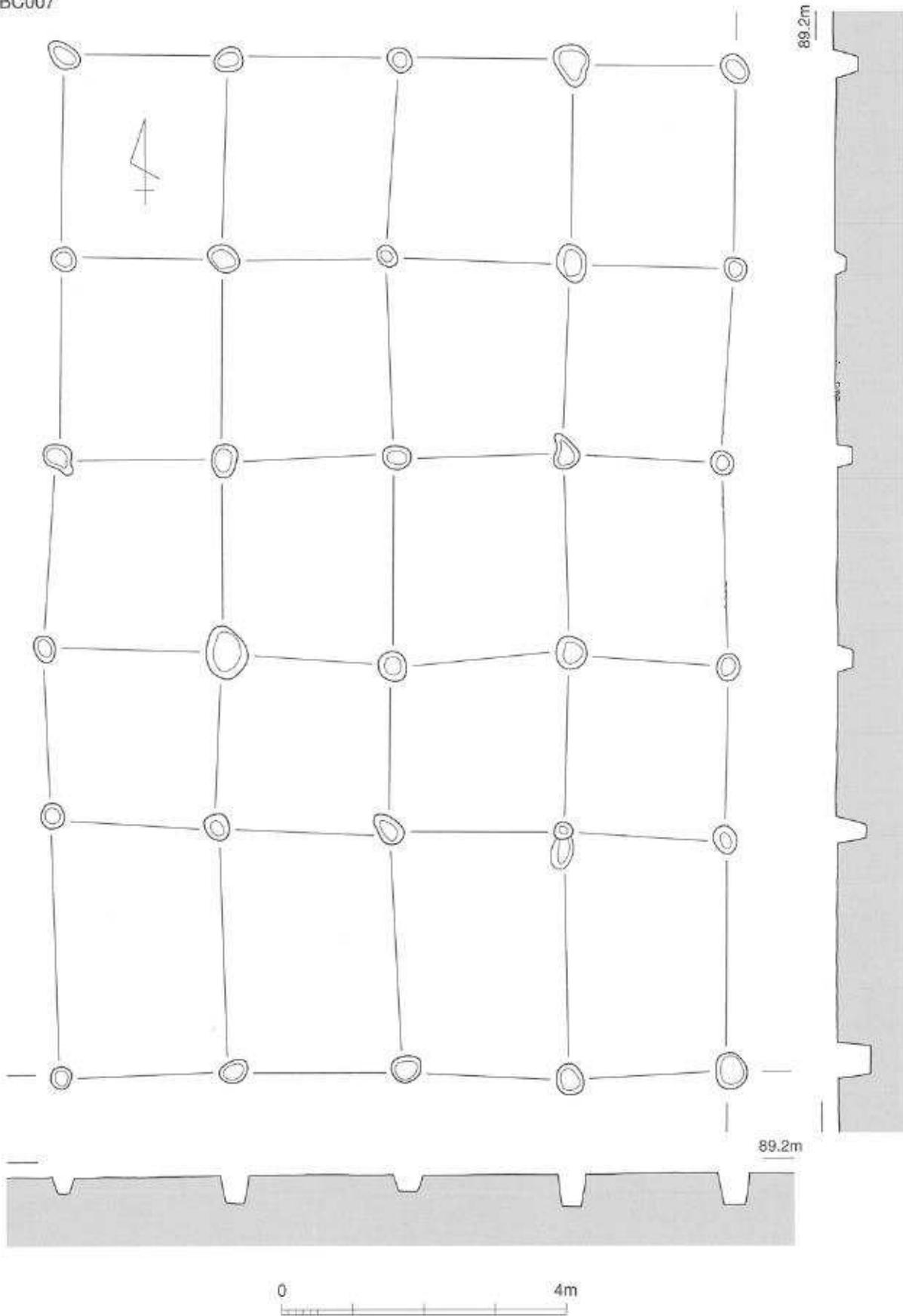


図版6 桜地区の遺構(5) SBC005・SBC006

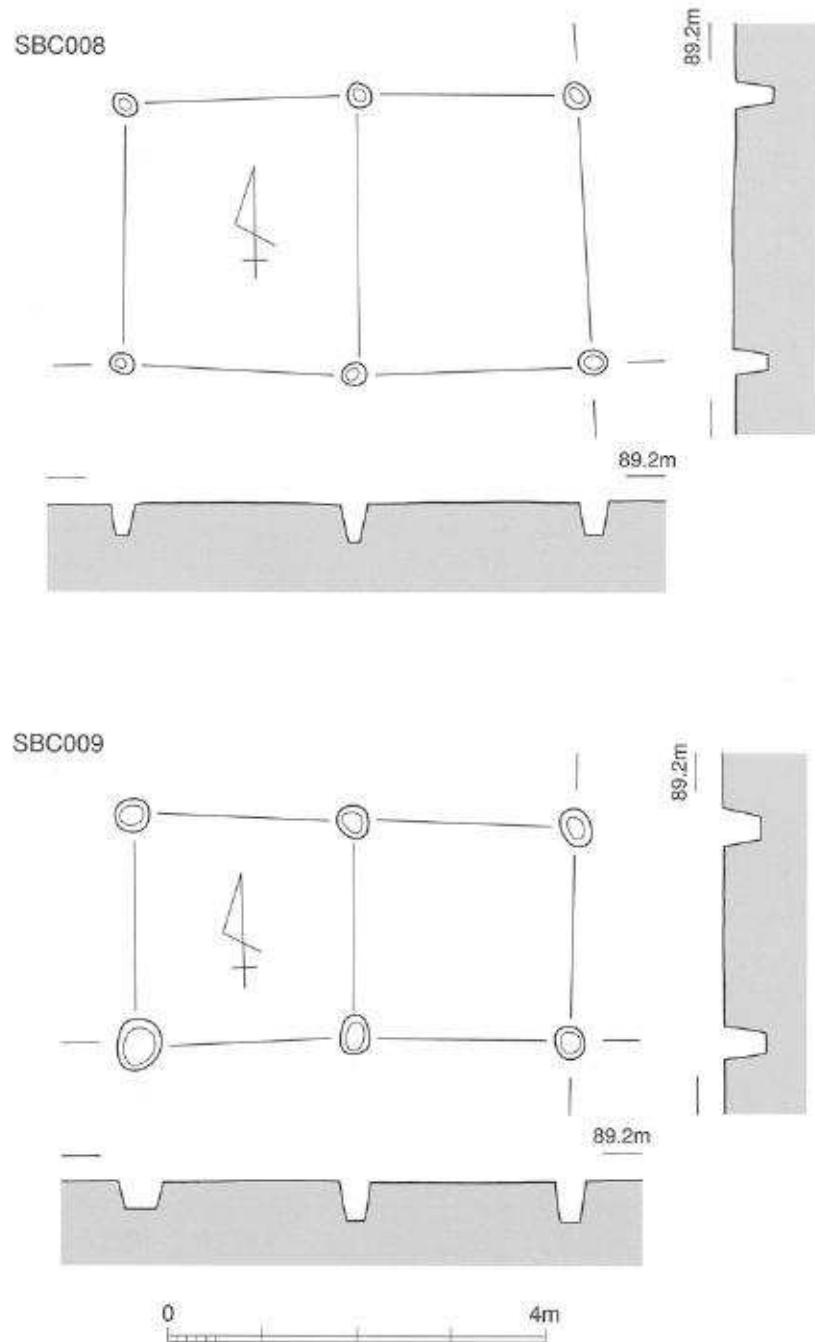


図版7 桜地区の遺構(6) SBC007

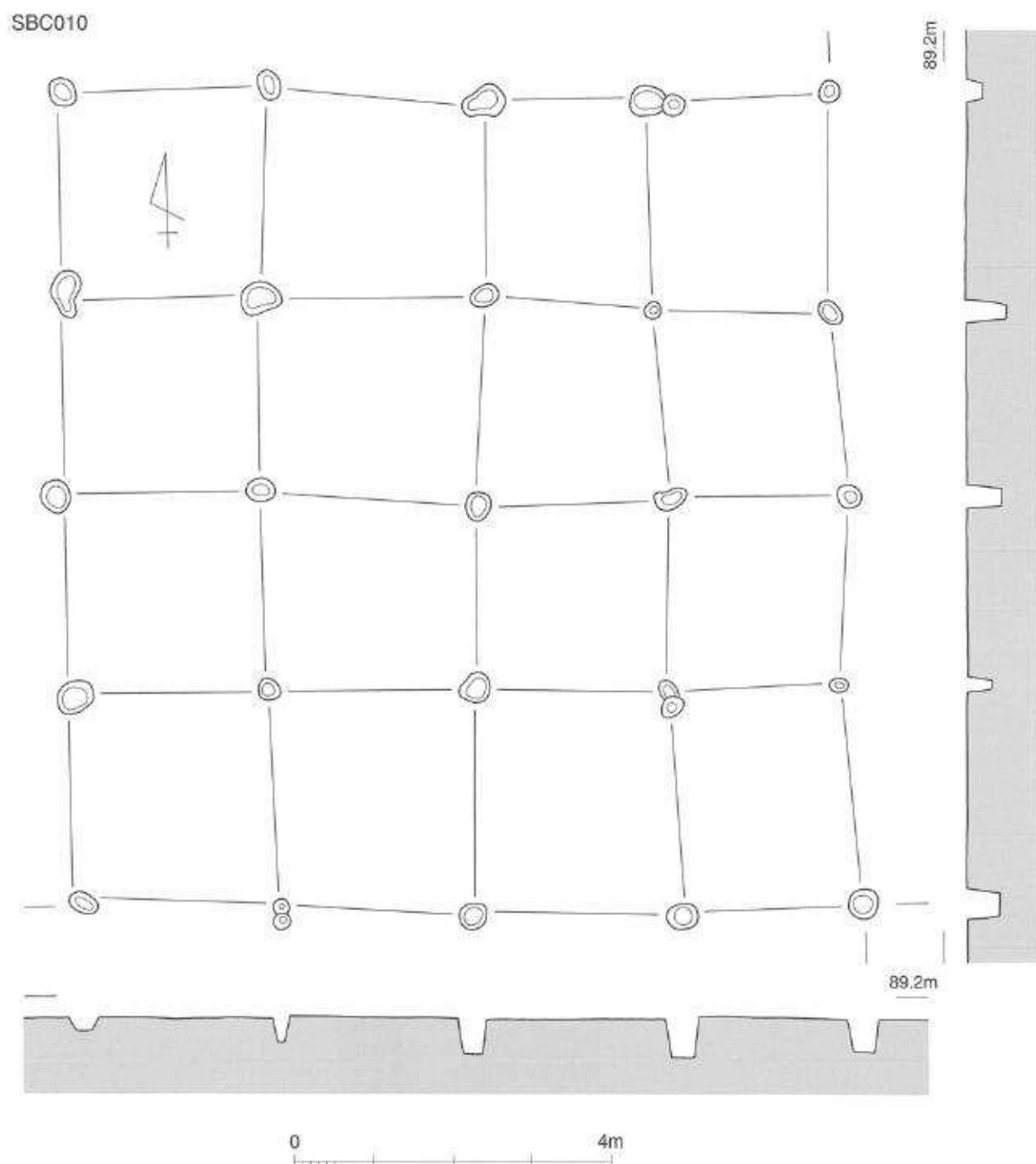
SBC007



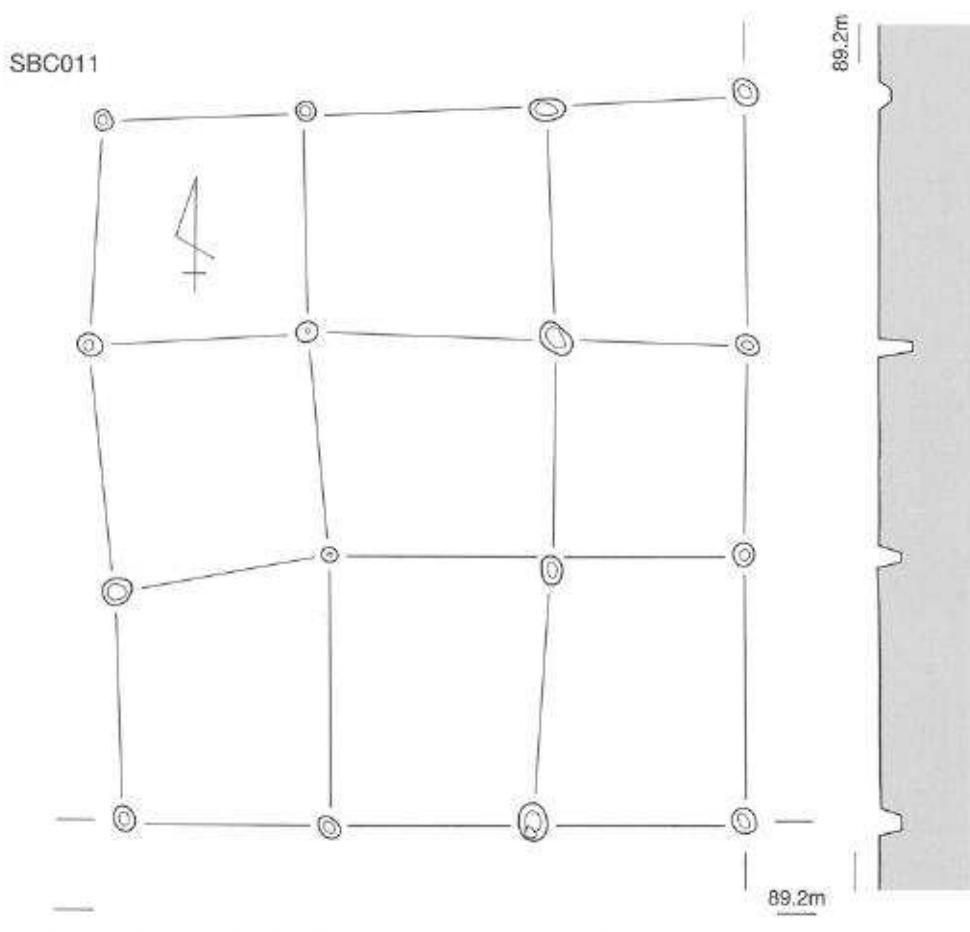
図版8 桜地区の遺構(7) SBC008・SBC009



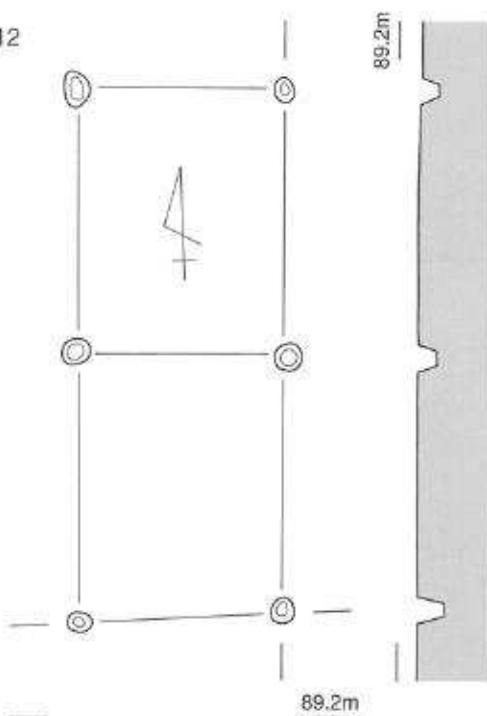
図版9 桜地区の遺構(8) SBC010



図版10 桜地区の遺構(9) SBC011・SBC012

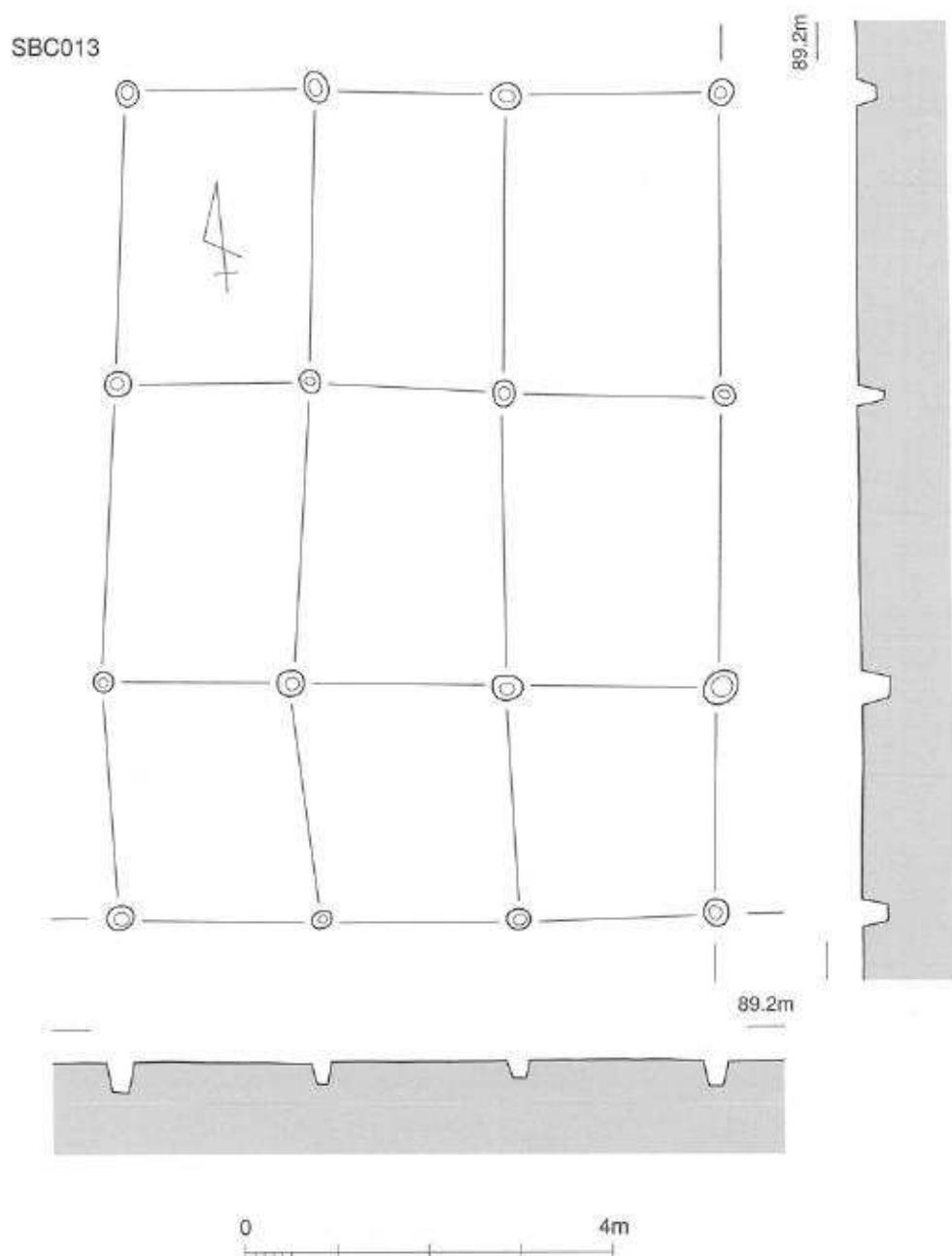


SBC012

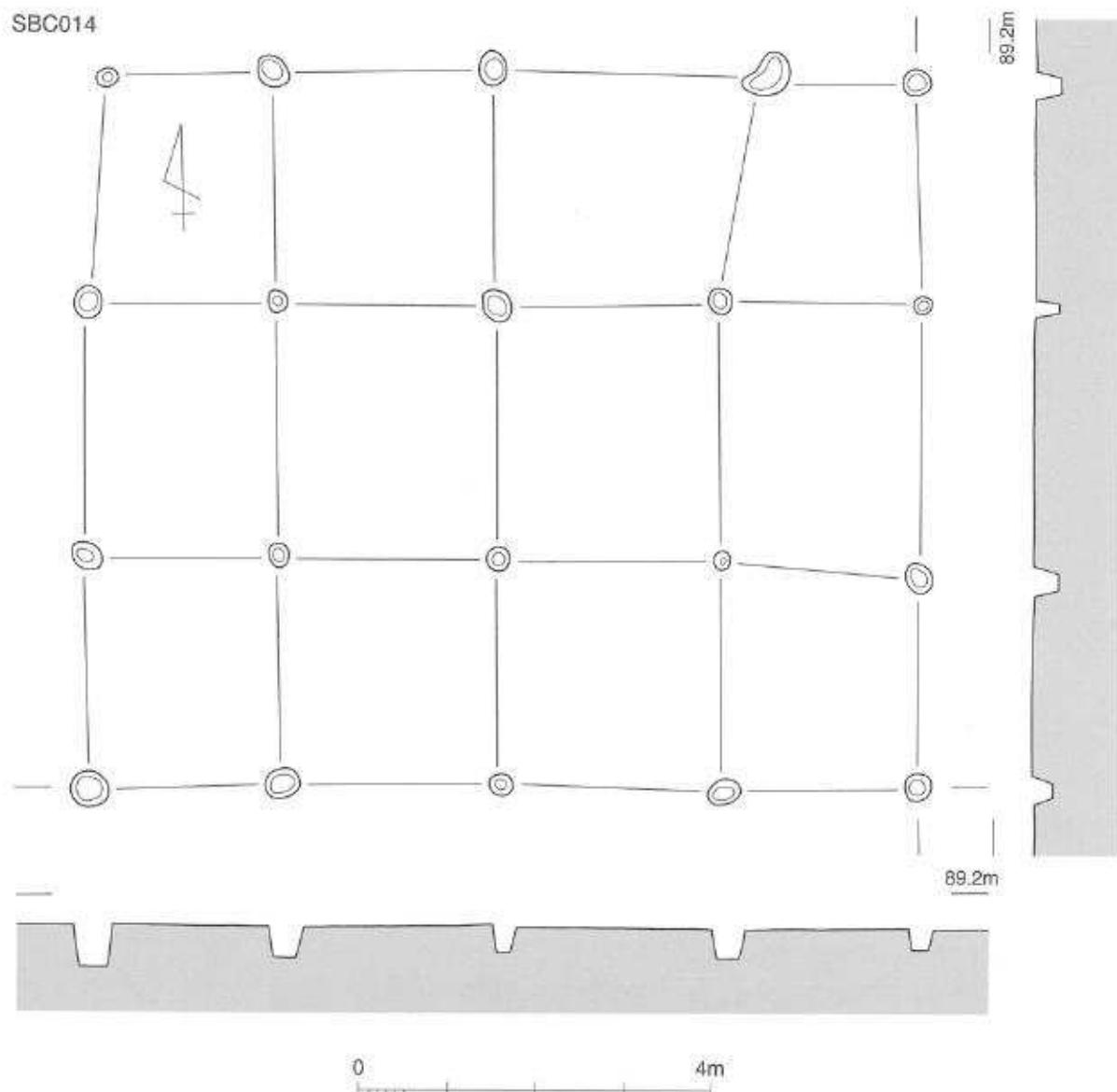


0 4m

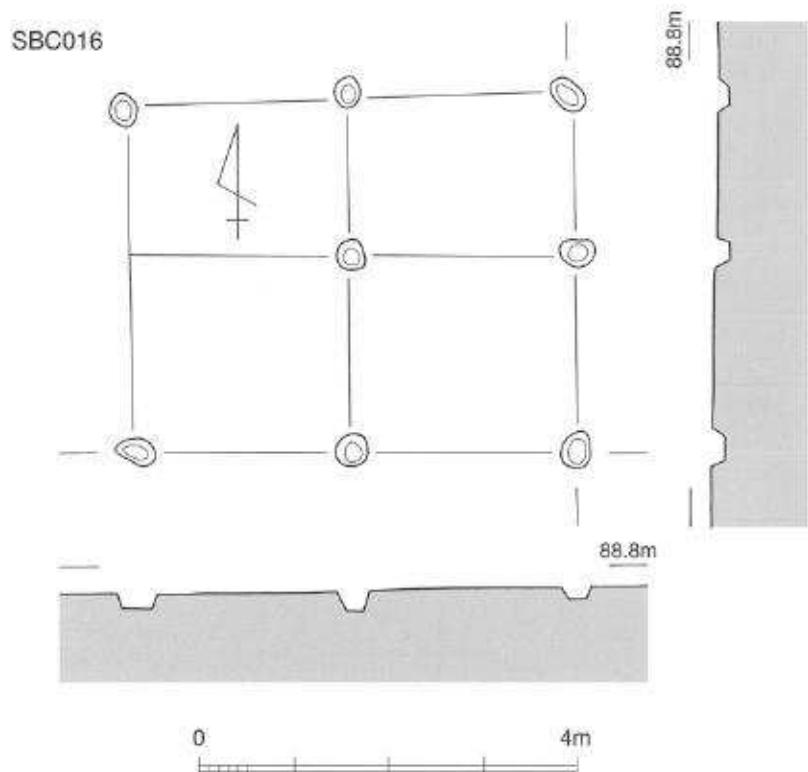
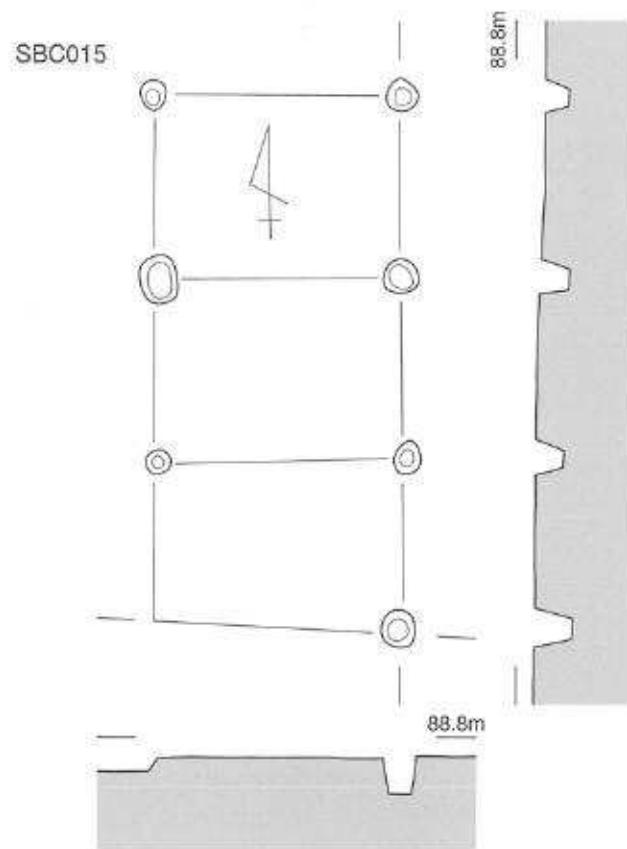
図版11 桜地区の遺構(10) SBC013



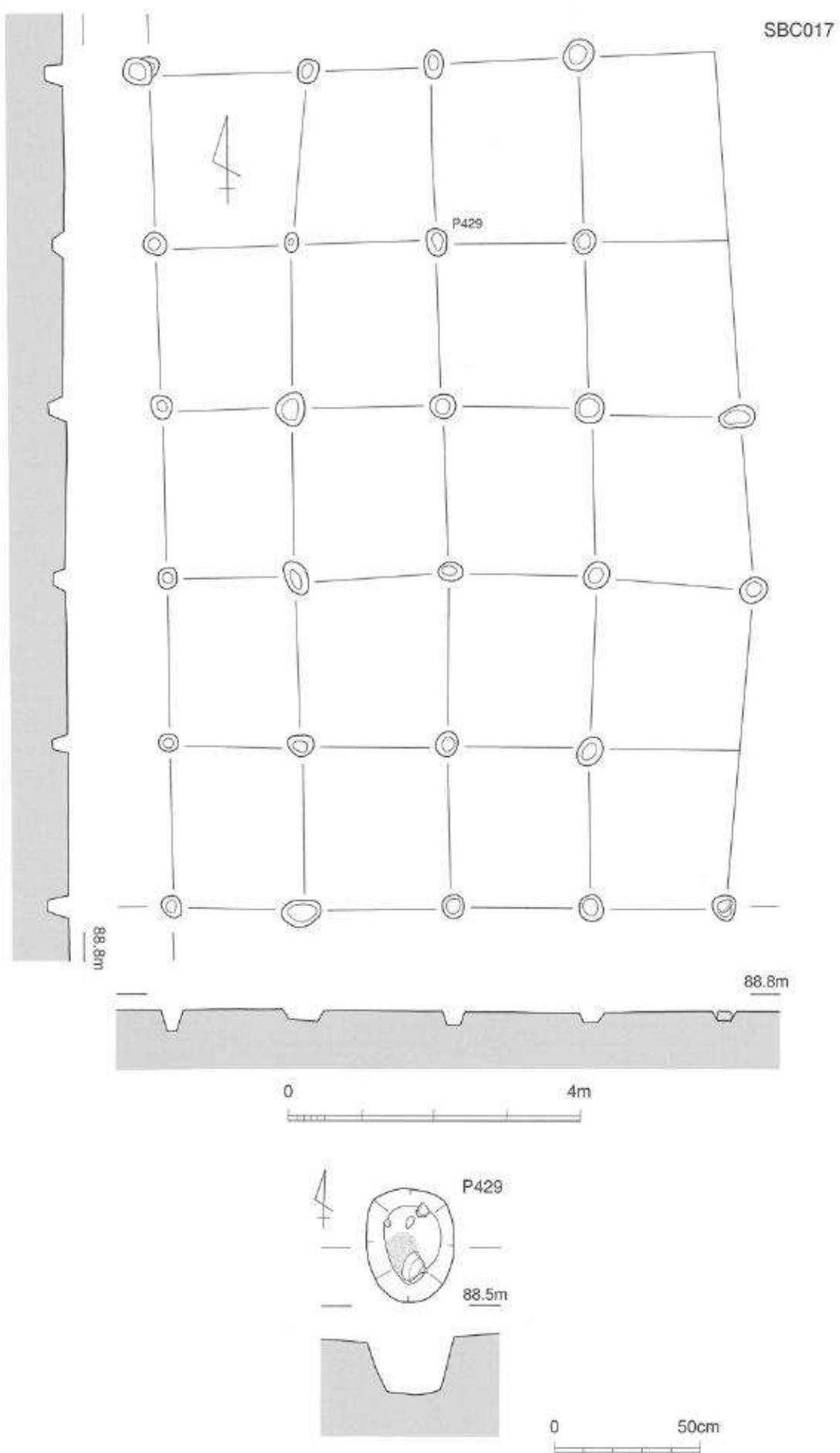
図版12 桜地区の遺構(11) SBC014



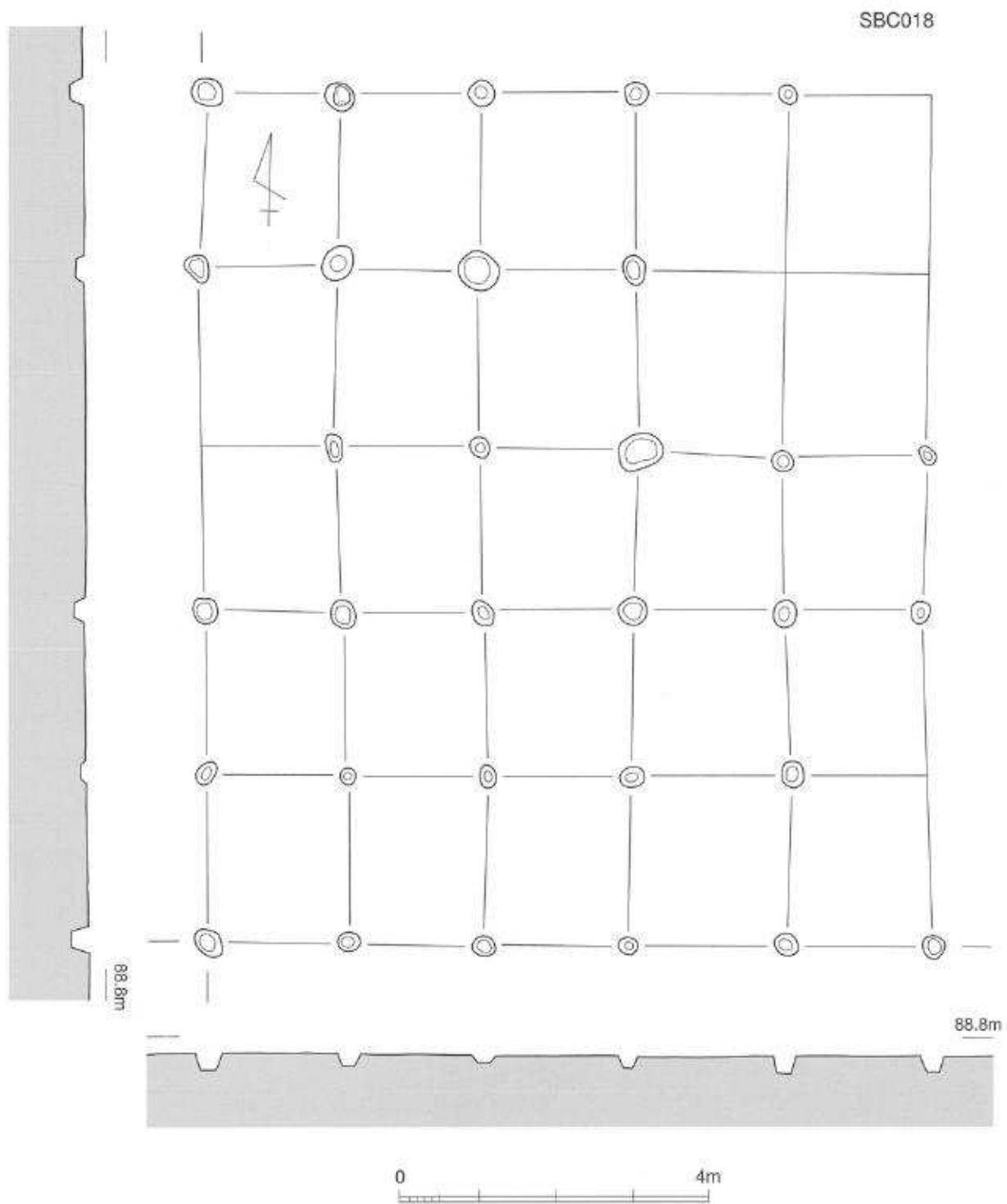
図版13 桜地区の遺構(12) SBC015・SBC016



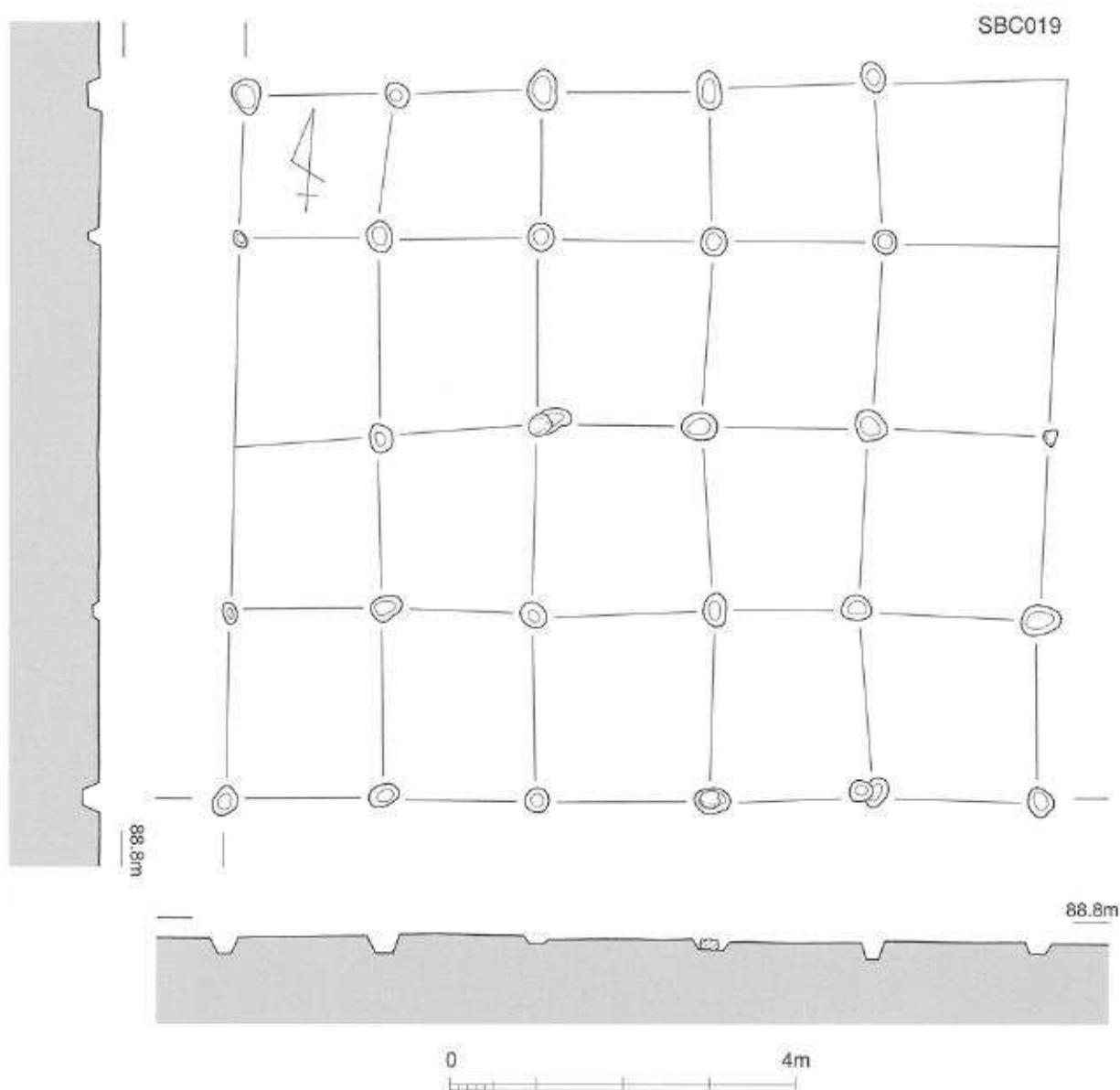
図版14 桜地区の遺構(13) SBC017



図版15 桜地区の遺構(14) SBC018

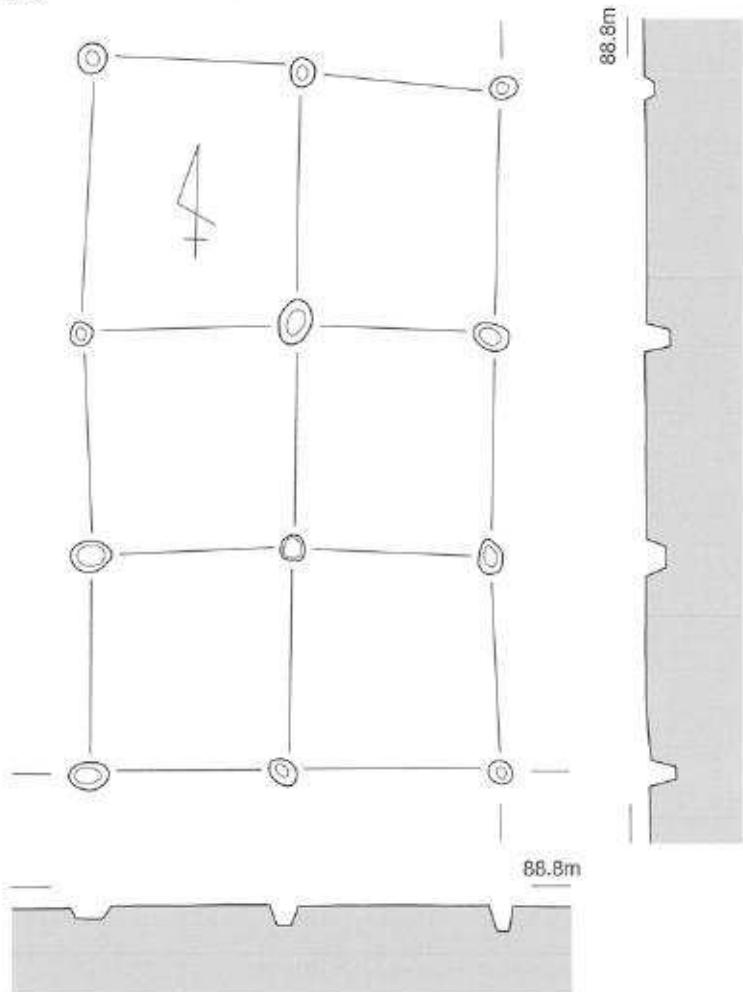


図版16 桜地区の遺構(15) SBC019

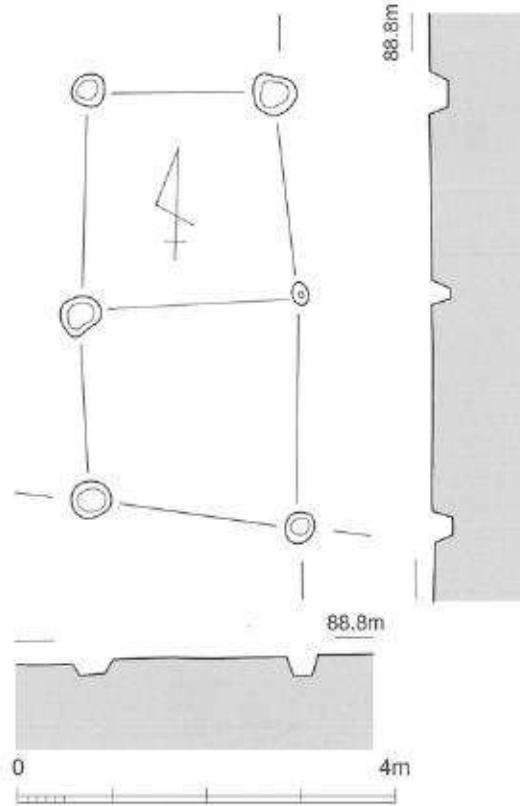


図版17 桜地区の遺構(16) SBC020・SBC021

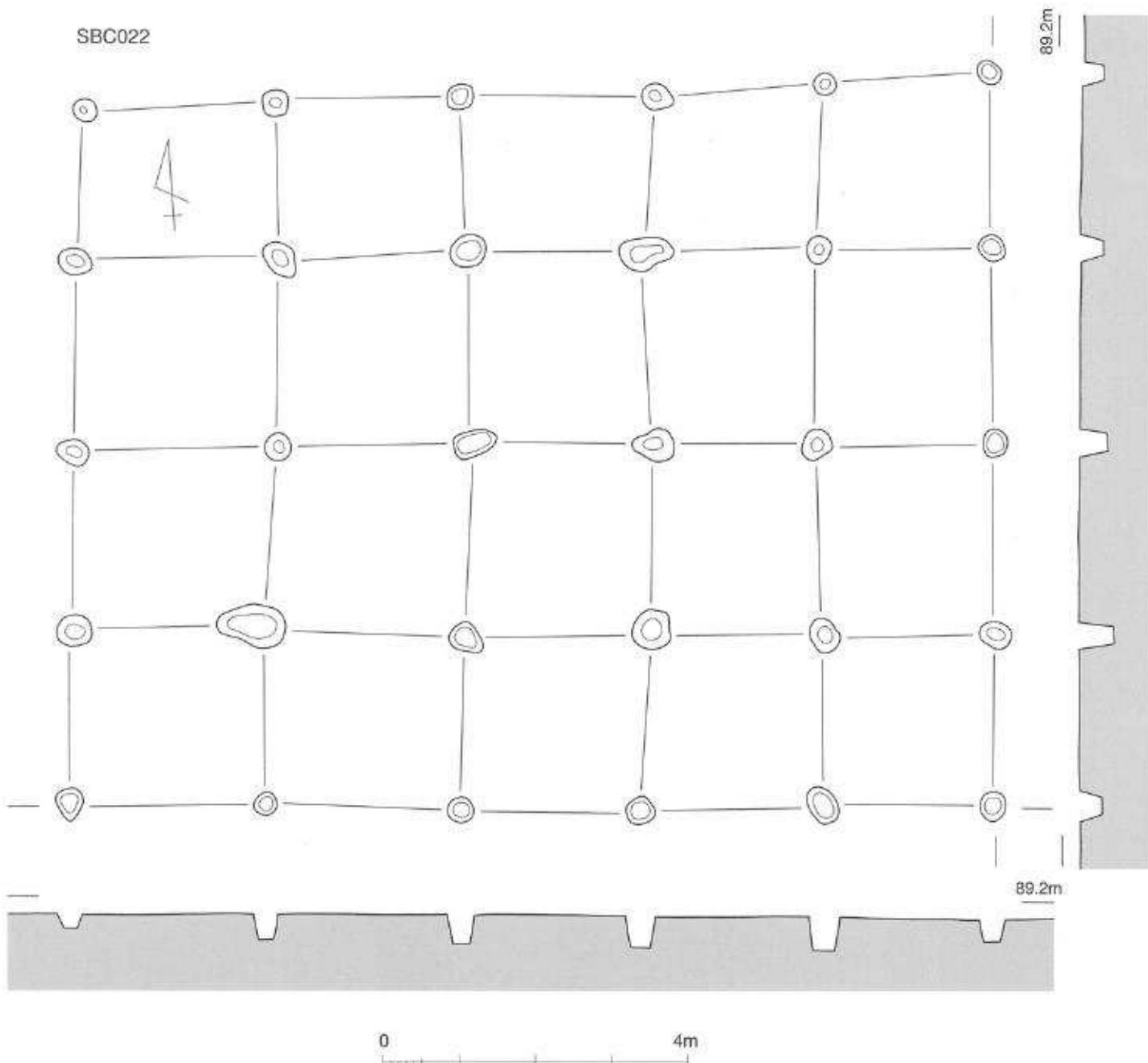
SBC020



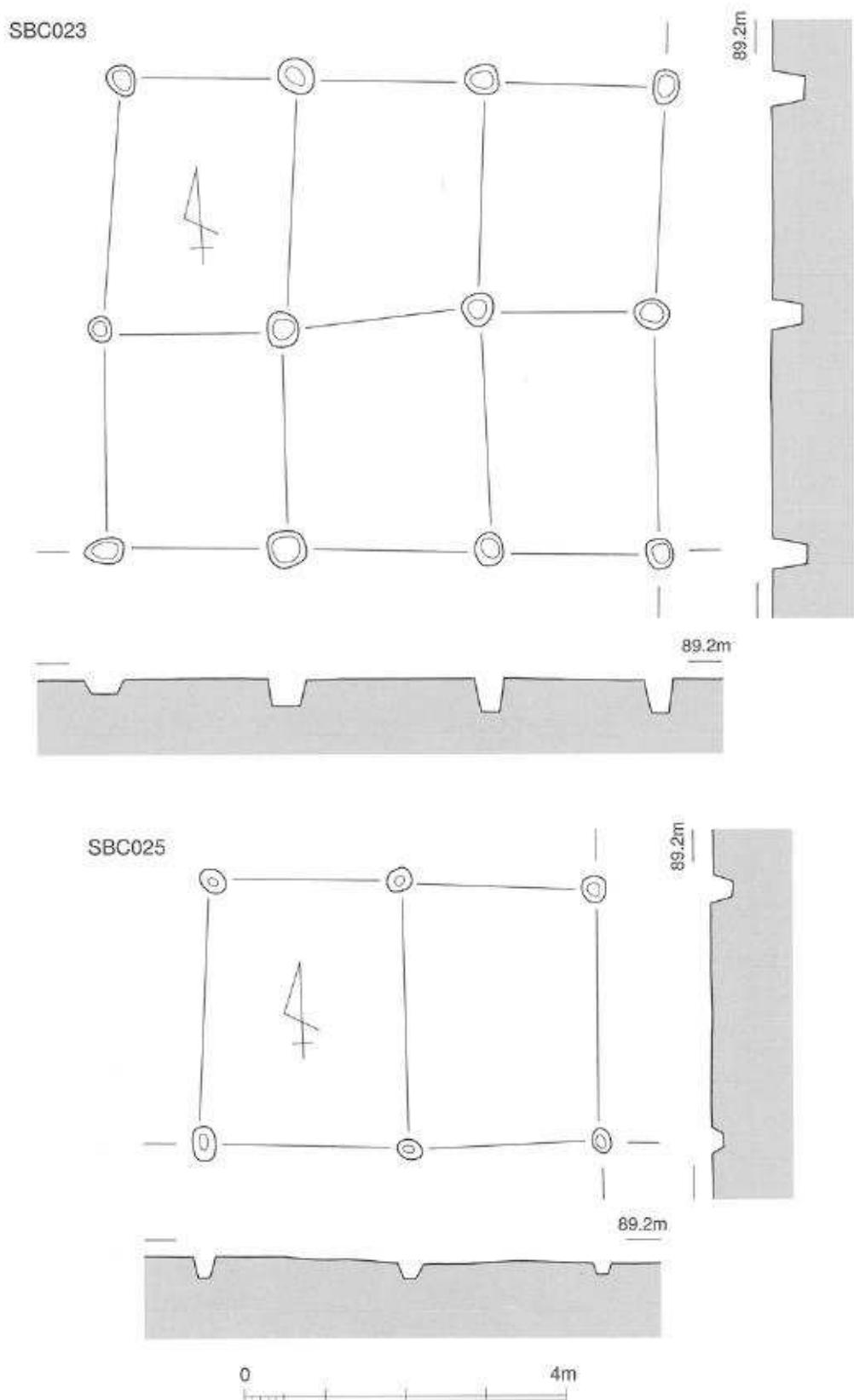
SBC021



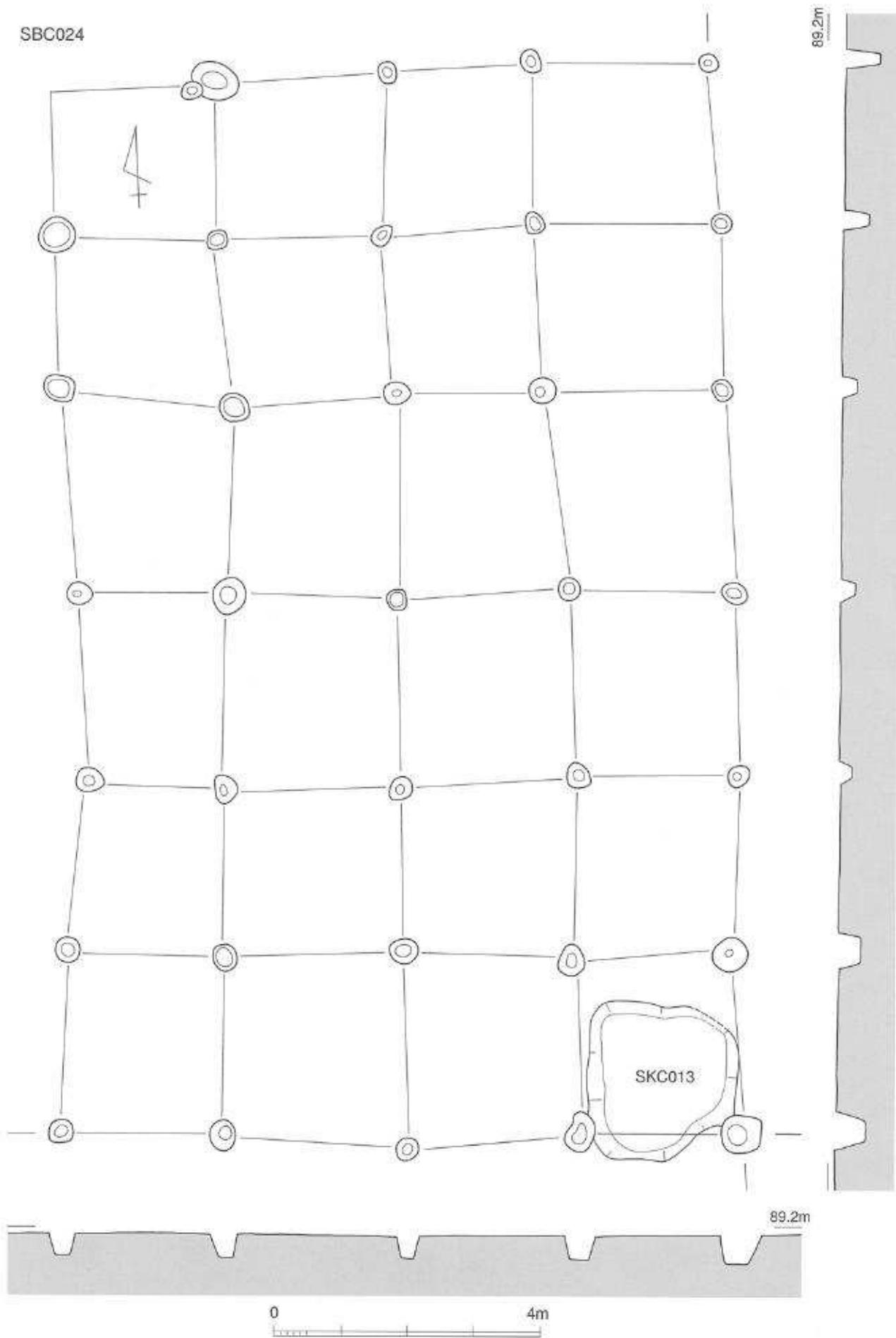
図版18 桜地区の遺構(17) SBC022



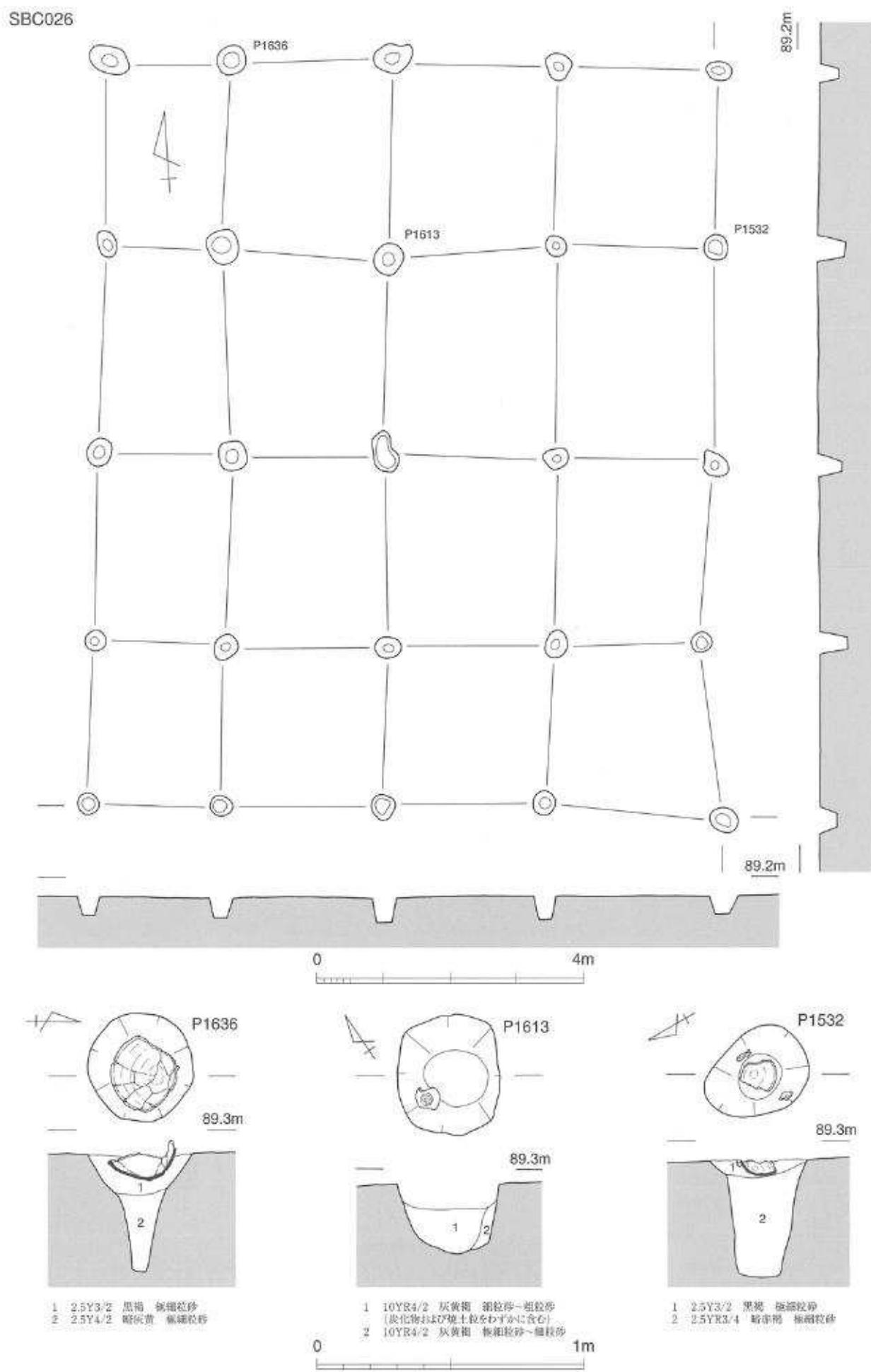
図版19 桜地区の遺構(18) SBC023・SBC025



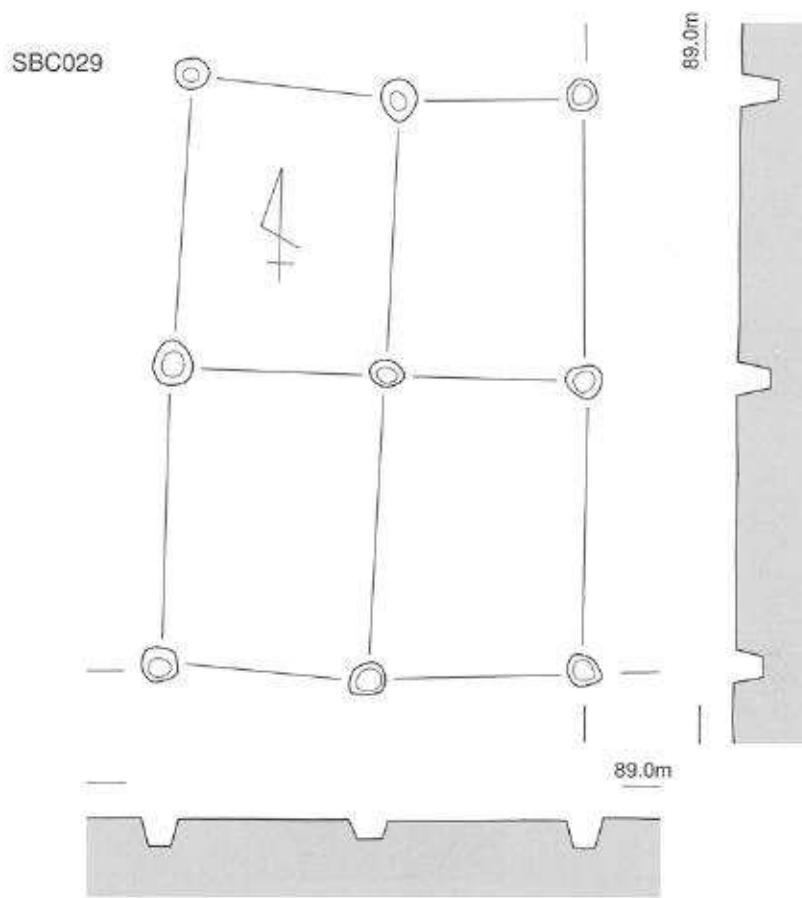
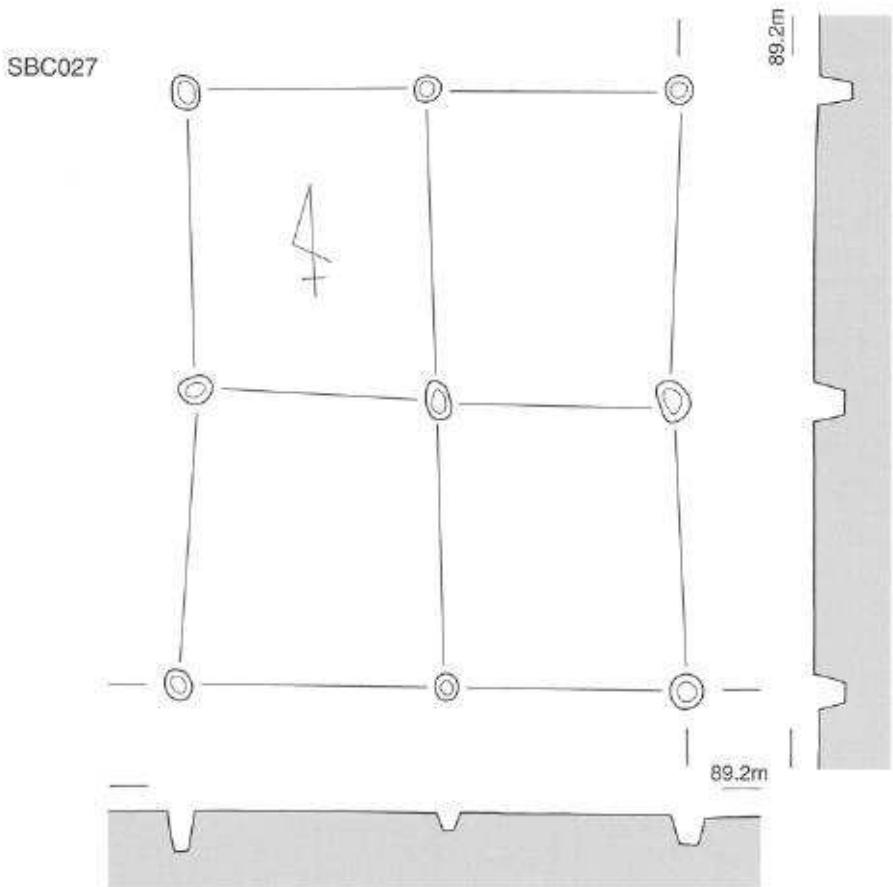
図版20 桜地区の遺構(19) SBC024



図版21 桜地区の遺構(20) SBC026

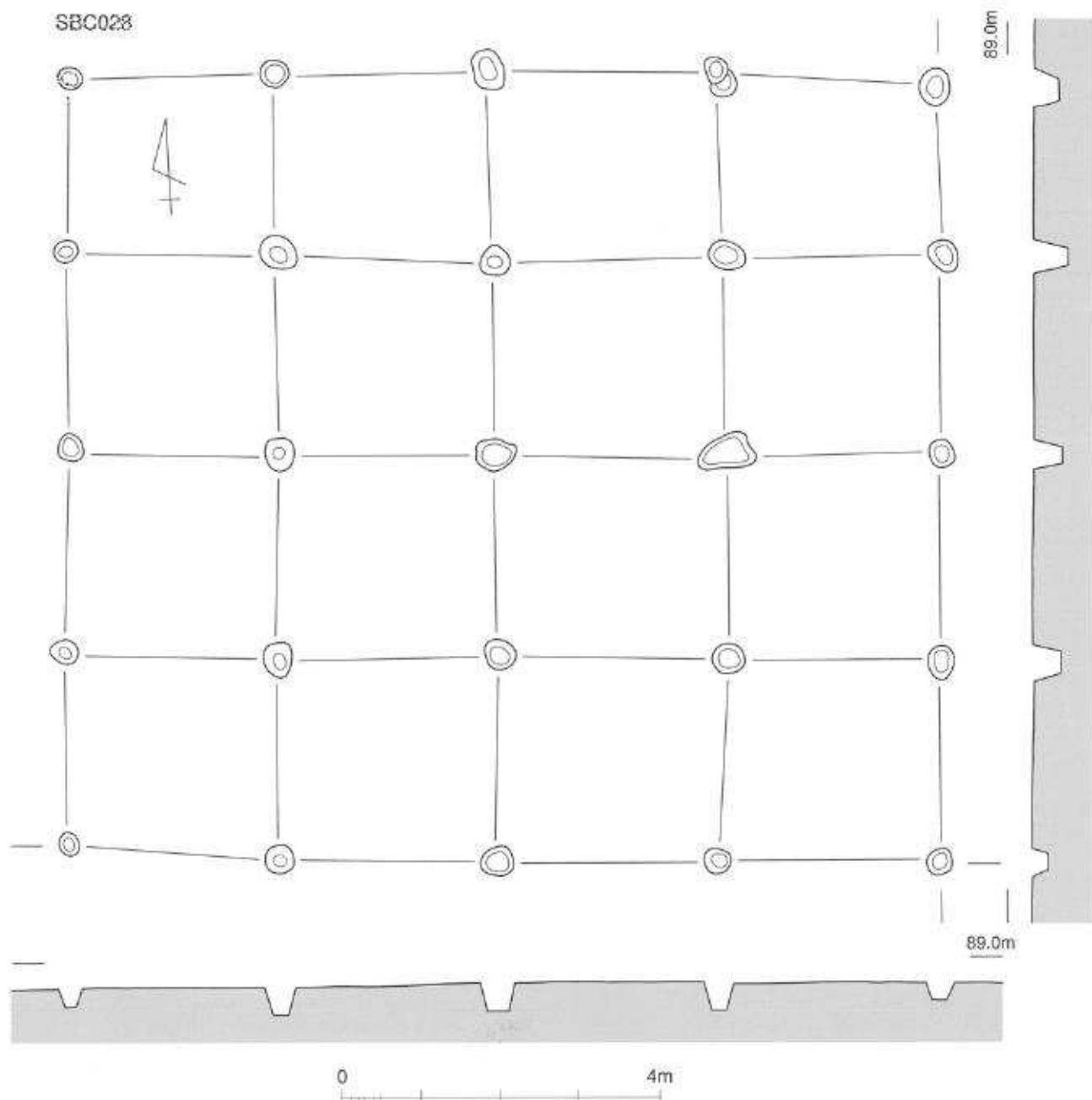


図版22 桜地区の遺構(21) SBC027・SBC029

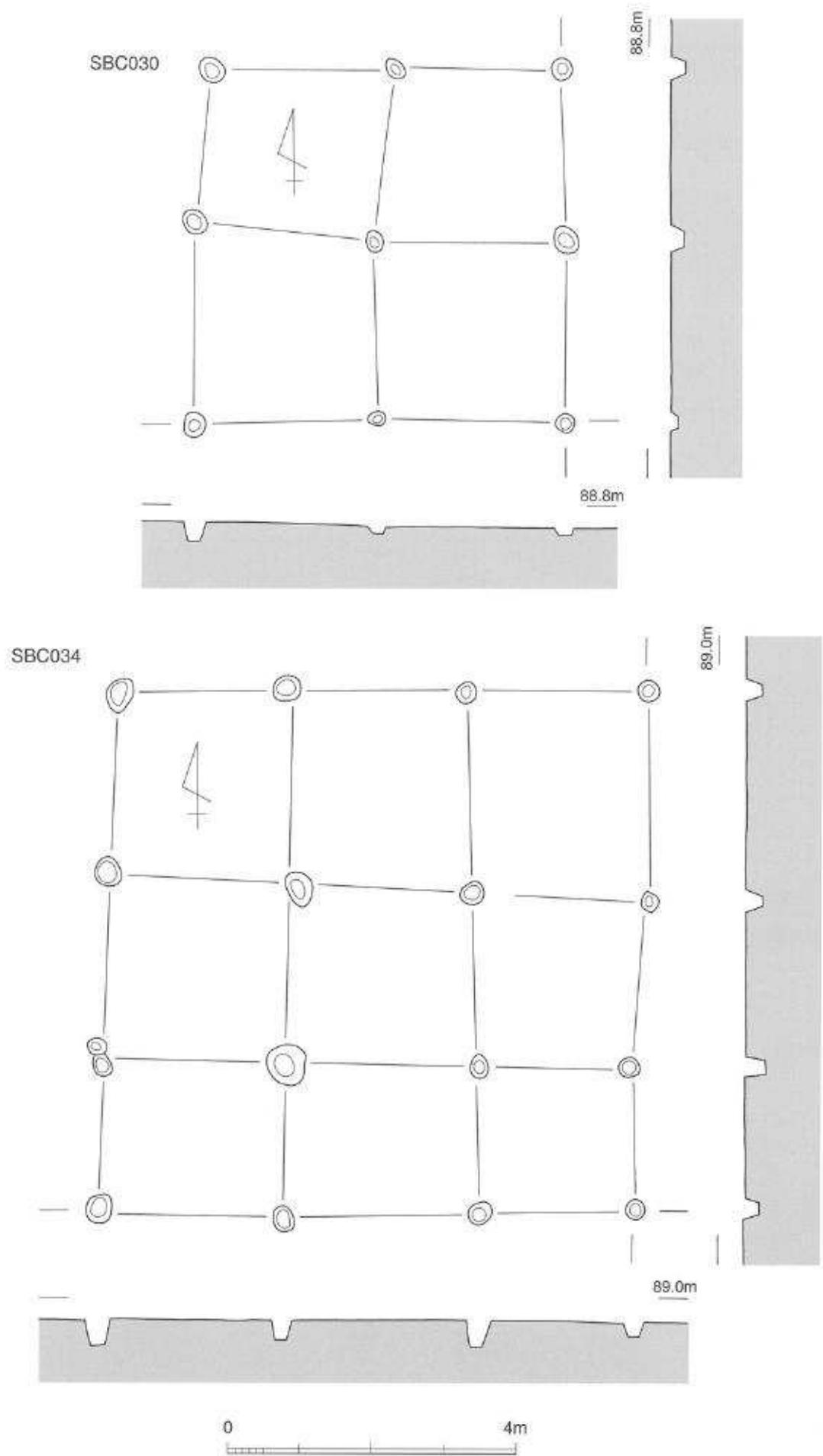


0 4m

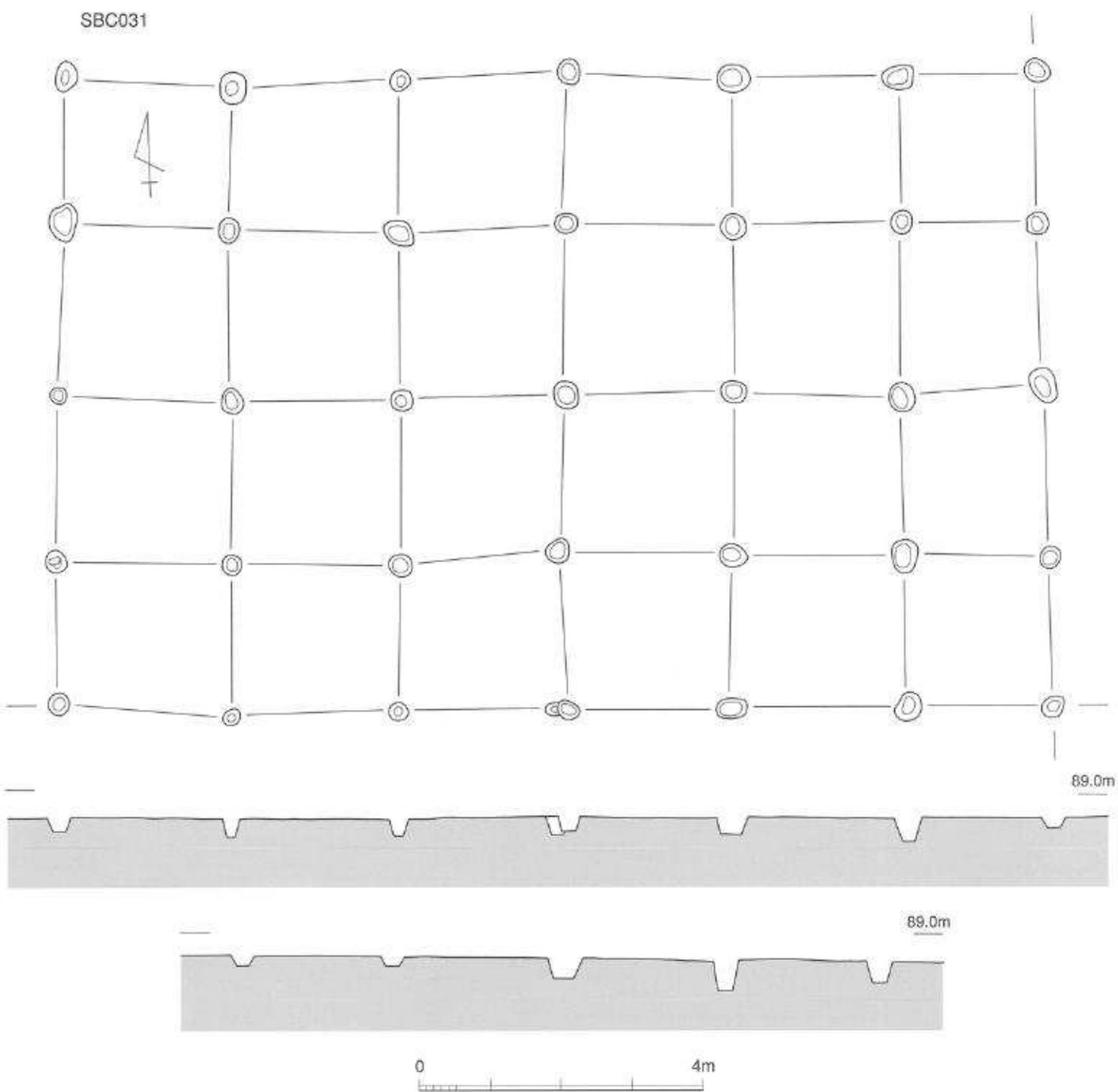
図版23 桜地区の遺構(22) SBC028



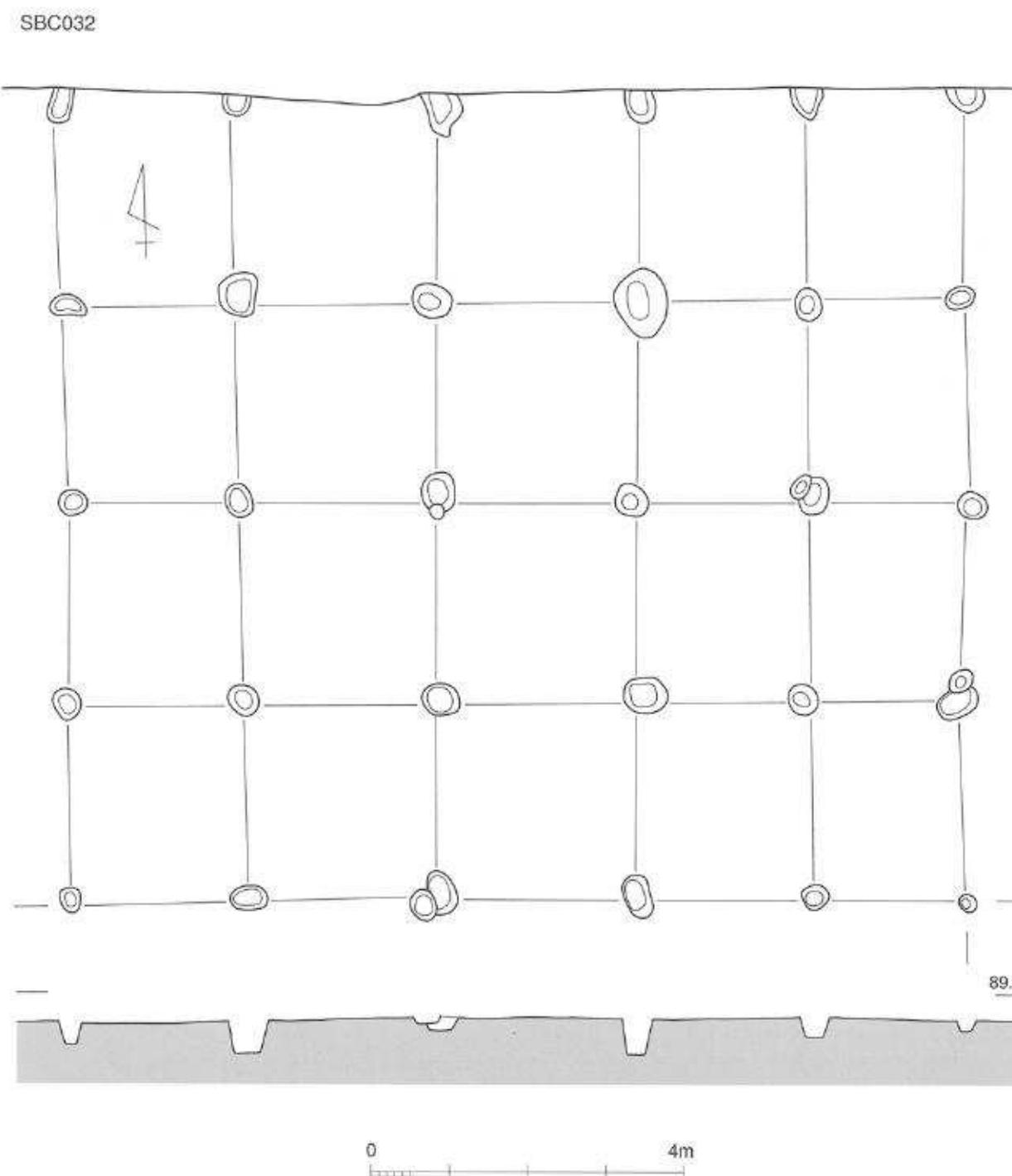
図版24 桜地区の遺構(23) SBC030・SBC034



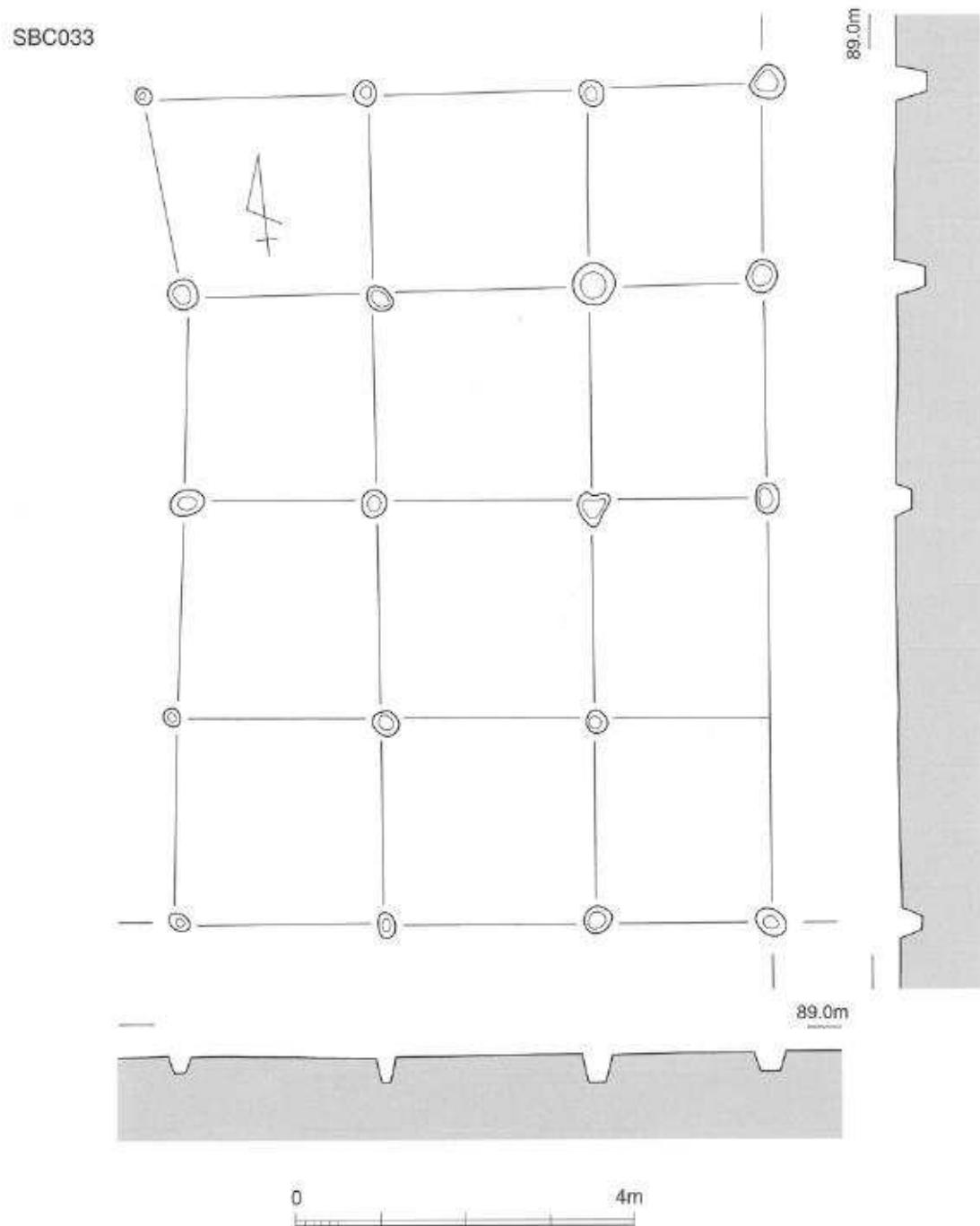
図版25 桜地区の遺構(24) SBC031



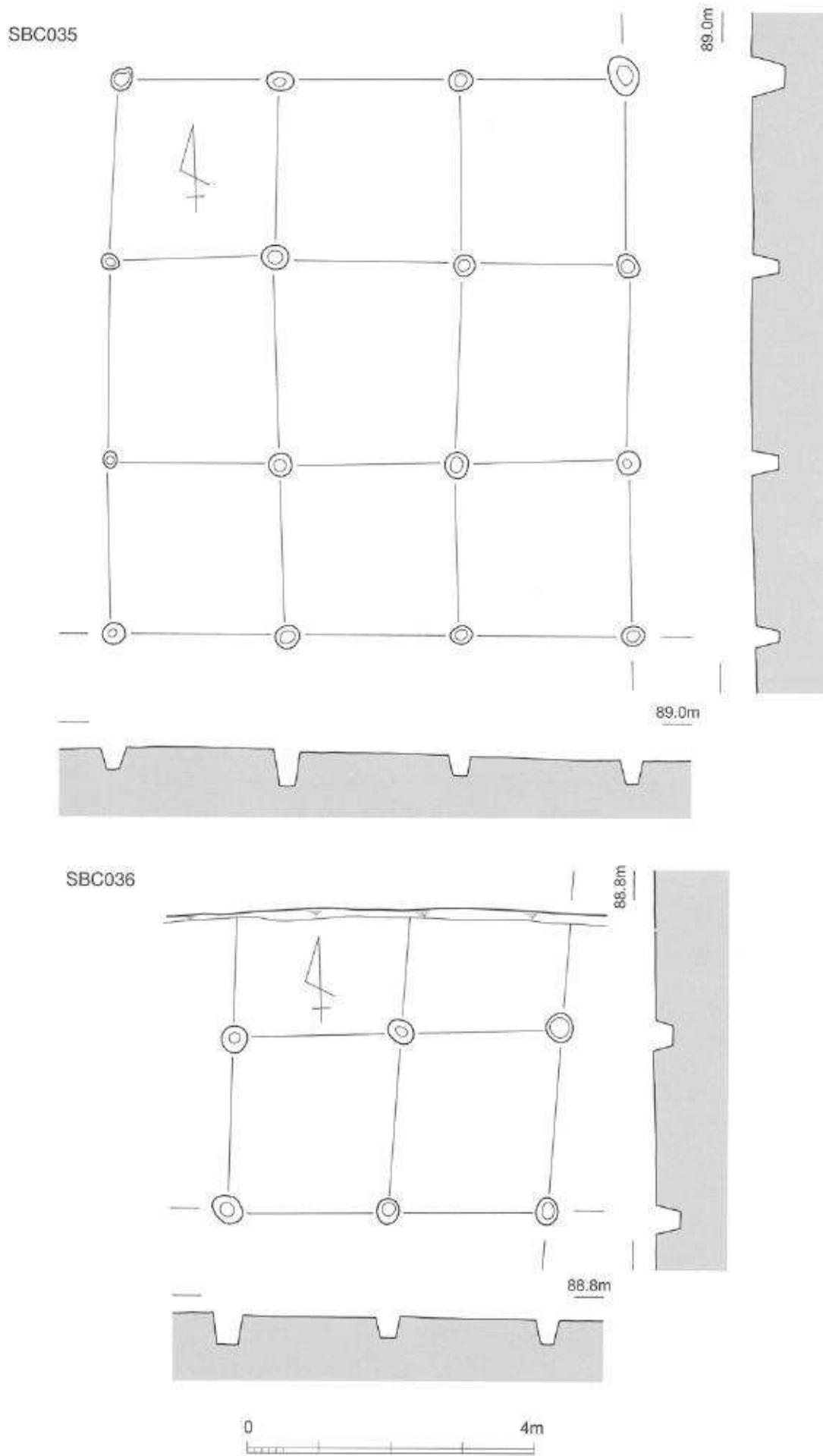
図版26 桜地区の遺構(25) SBC032



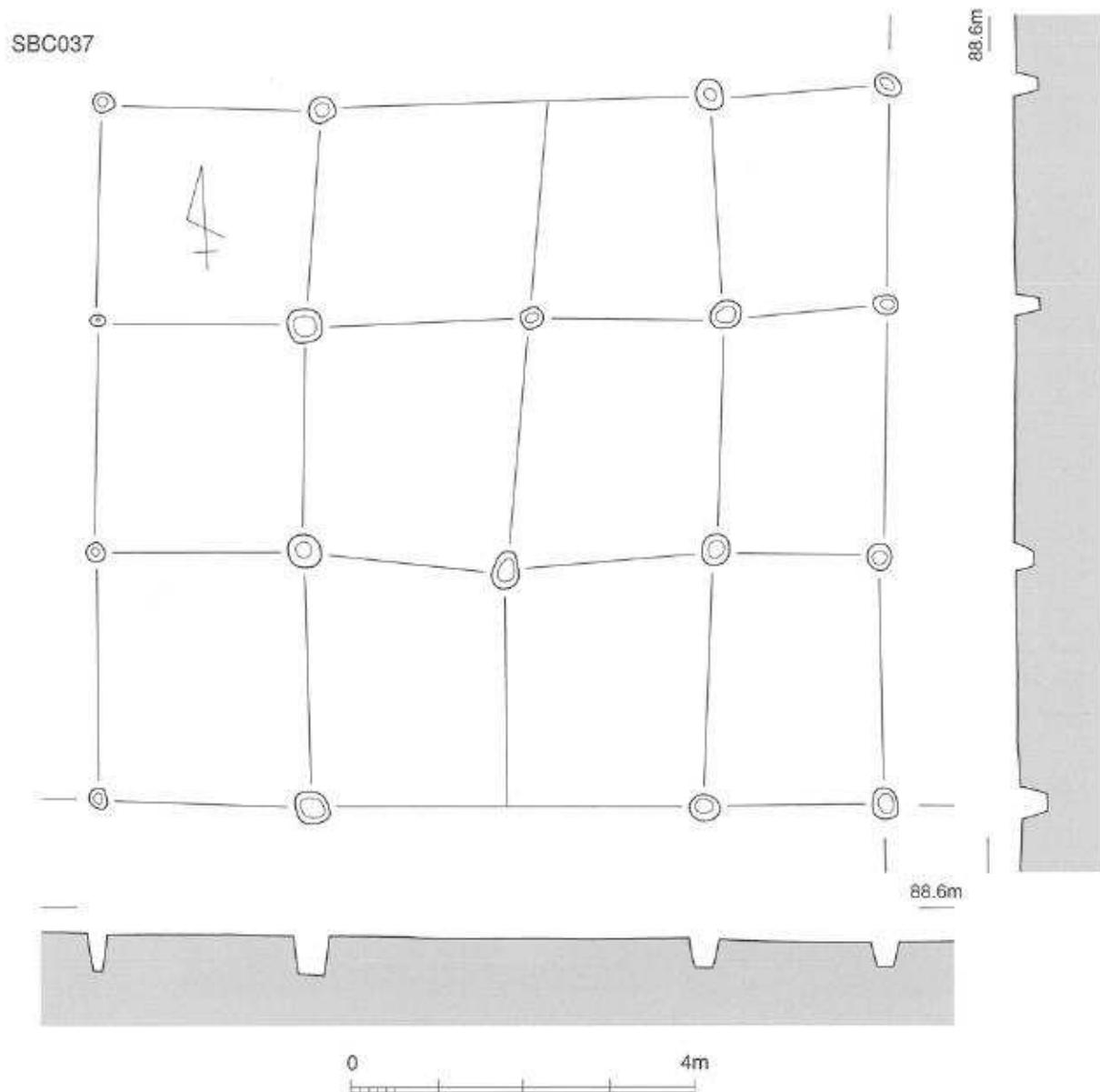
図版27 桜地区の遺構(26) SBC033



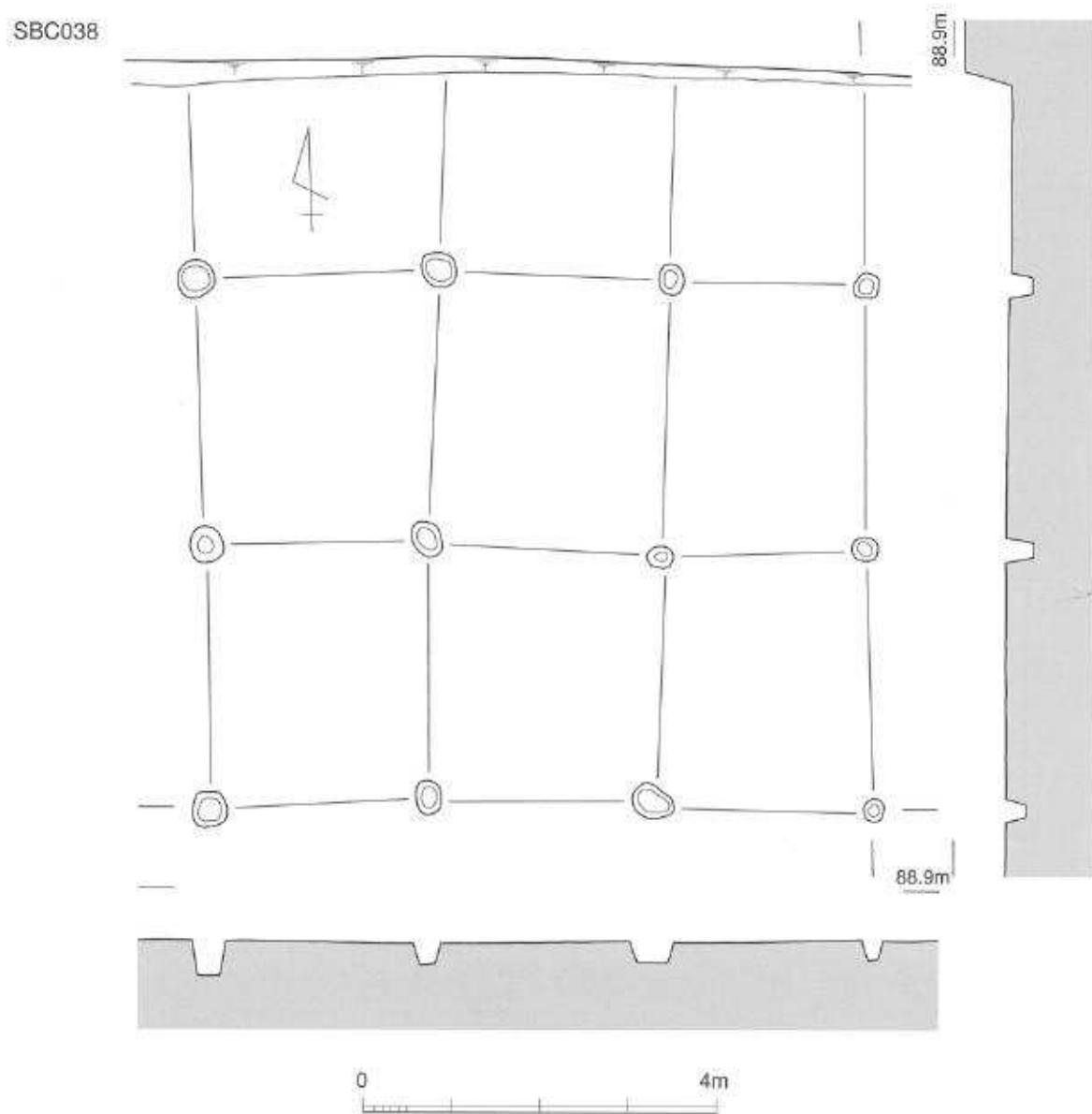
図版28 桜地区の遺構(27) SBC035・SBC036



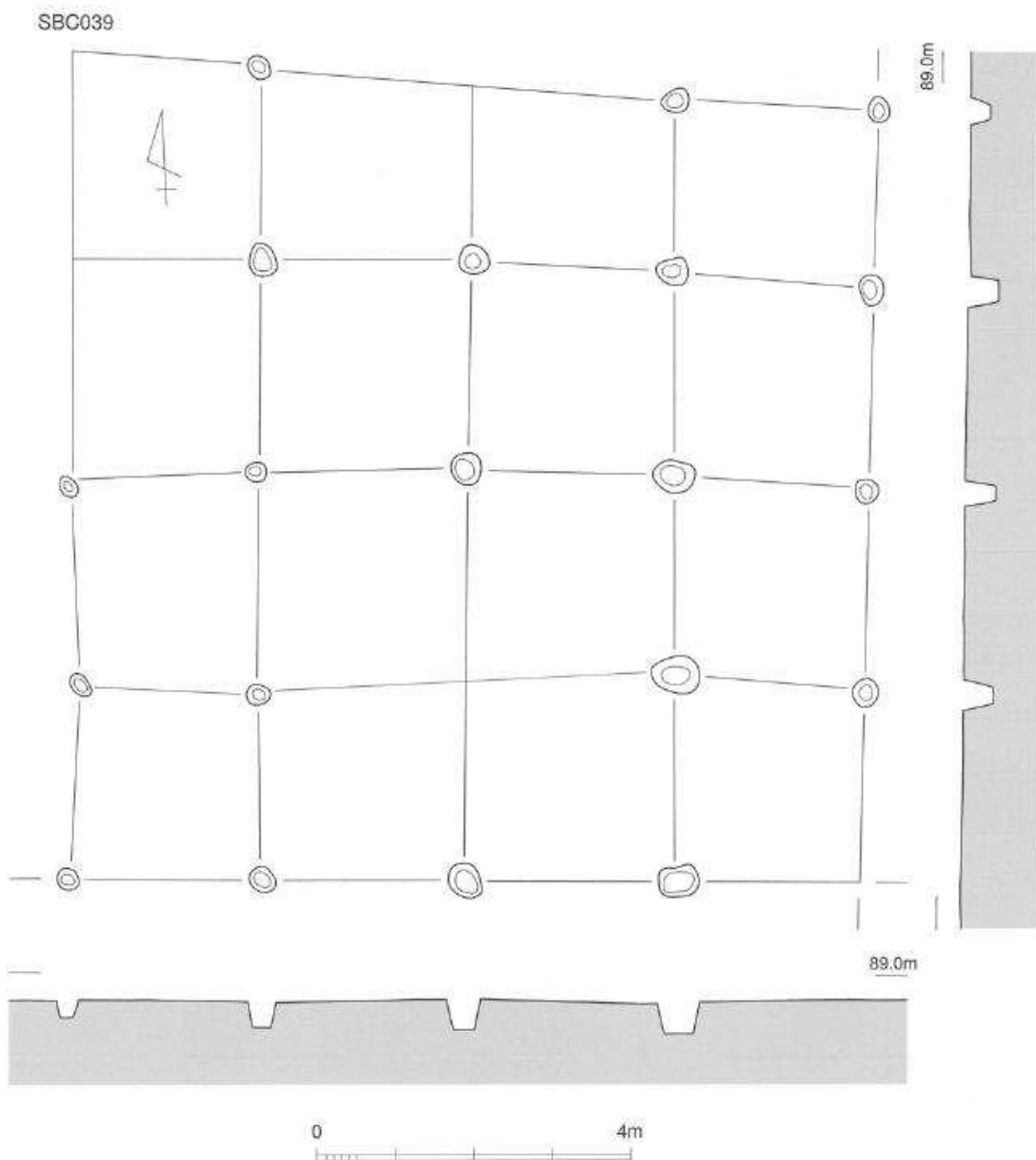
図版29 桜地区の遺構(28) SBC037



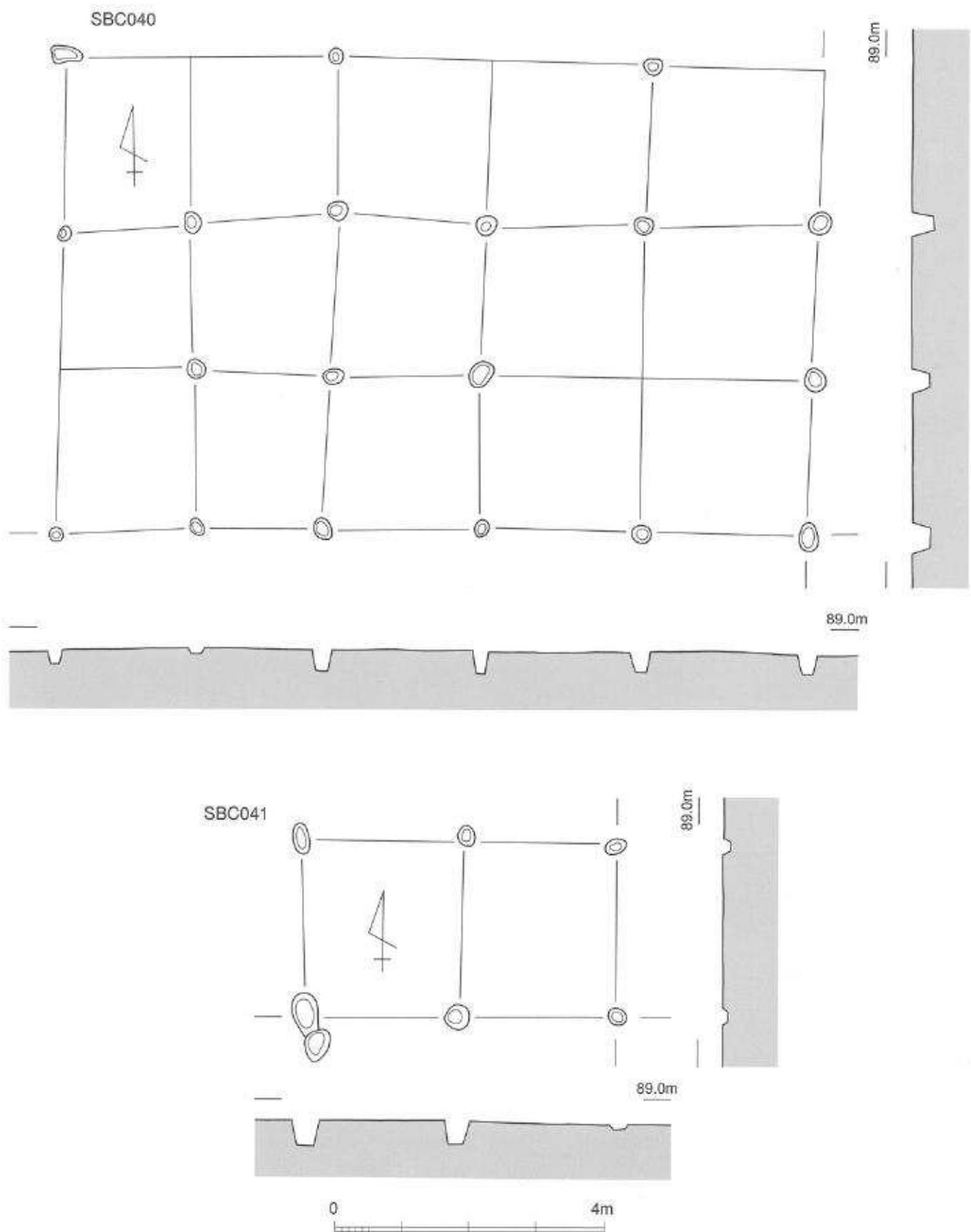
図版30 桜地区の遺構(29) SBC038



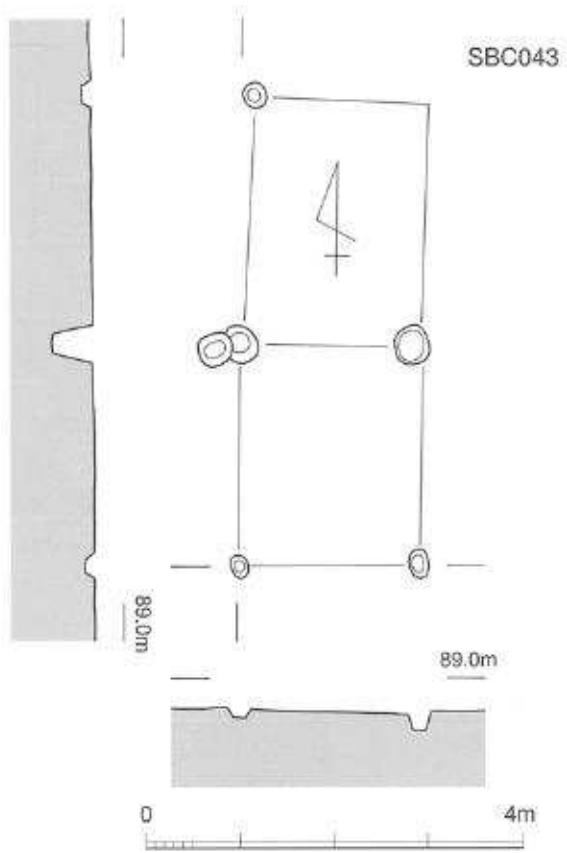
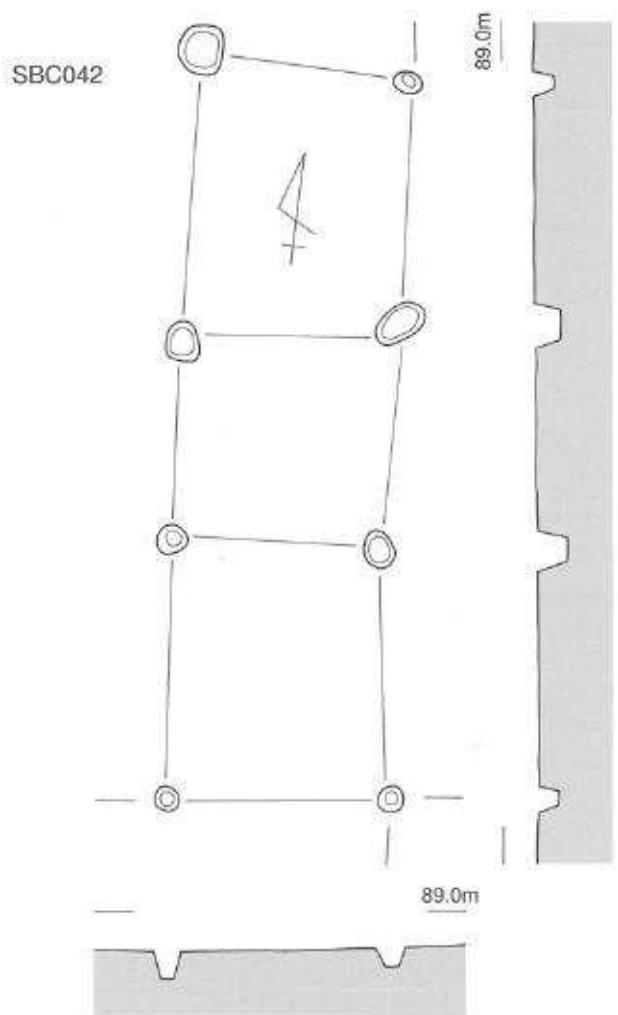
図版31 桜地区の遺構(30) SBC039



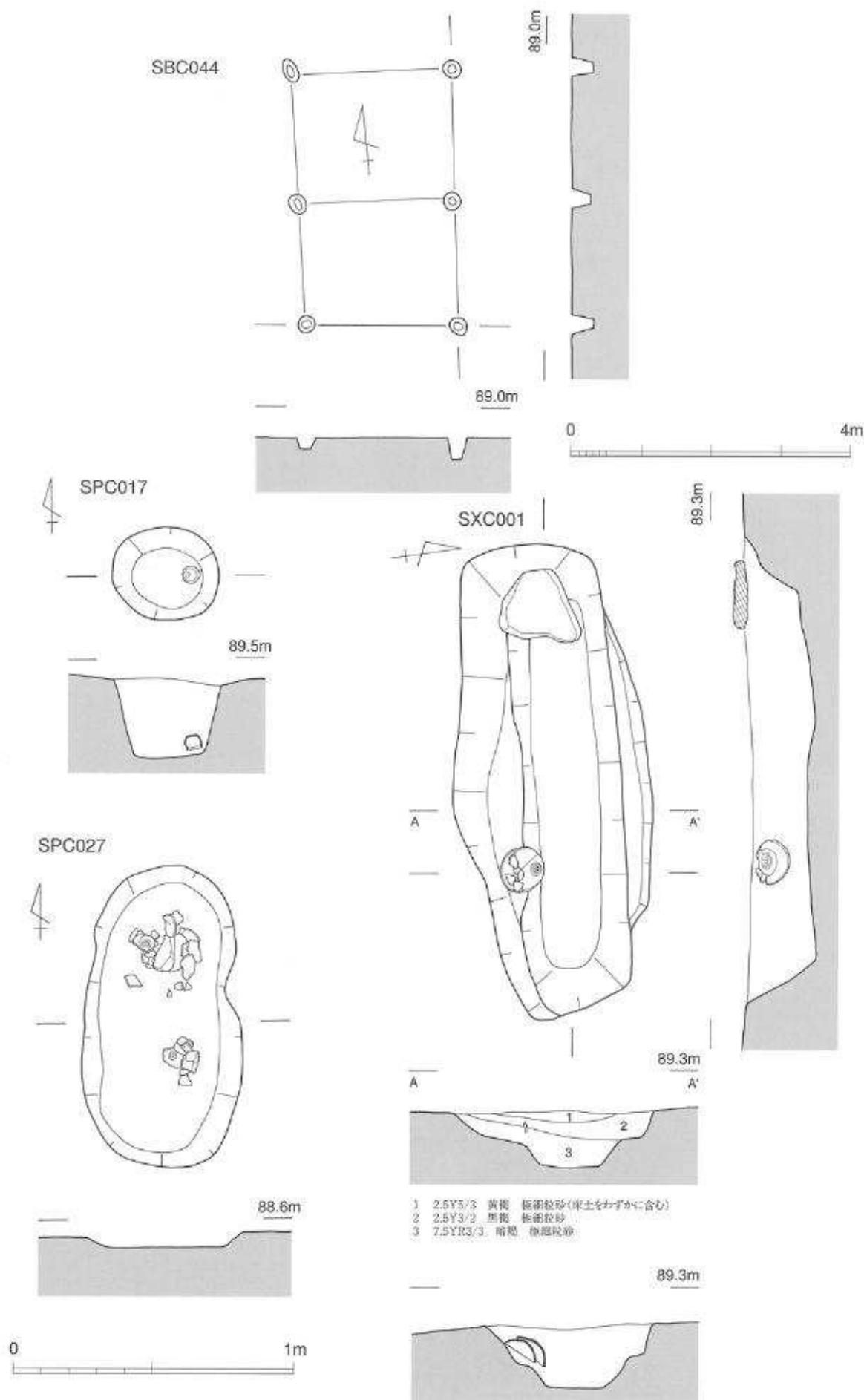
図版32 桜地区の遺構(31) SBC040・SBC041



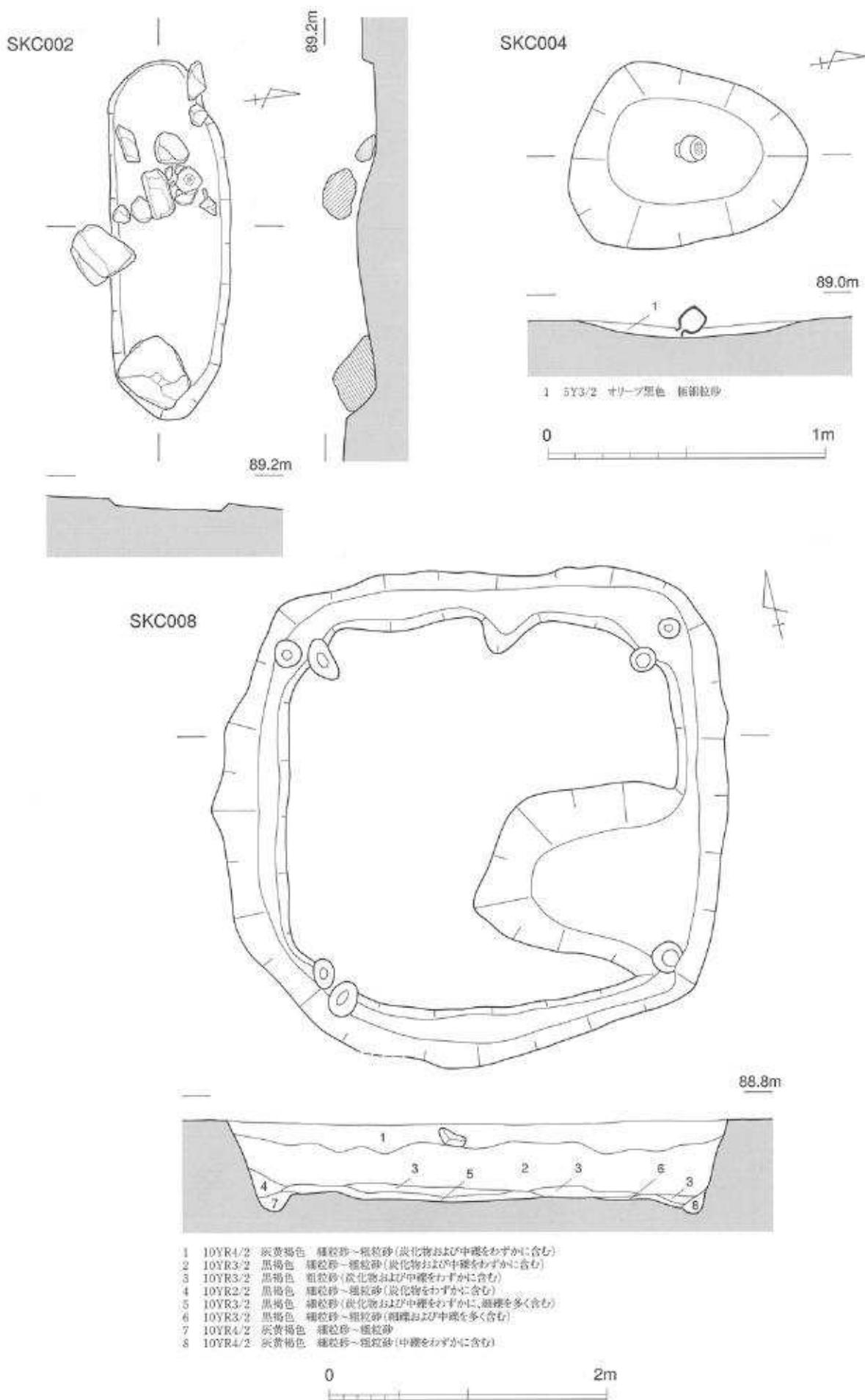
図版33 桜地区の遺構(32) SBC042・SBC043



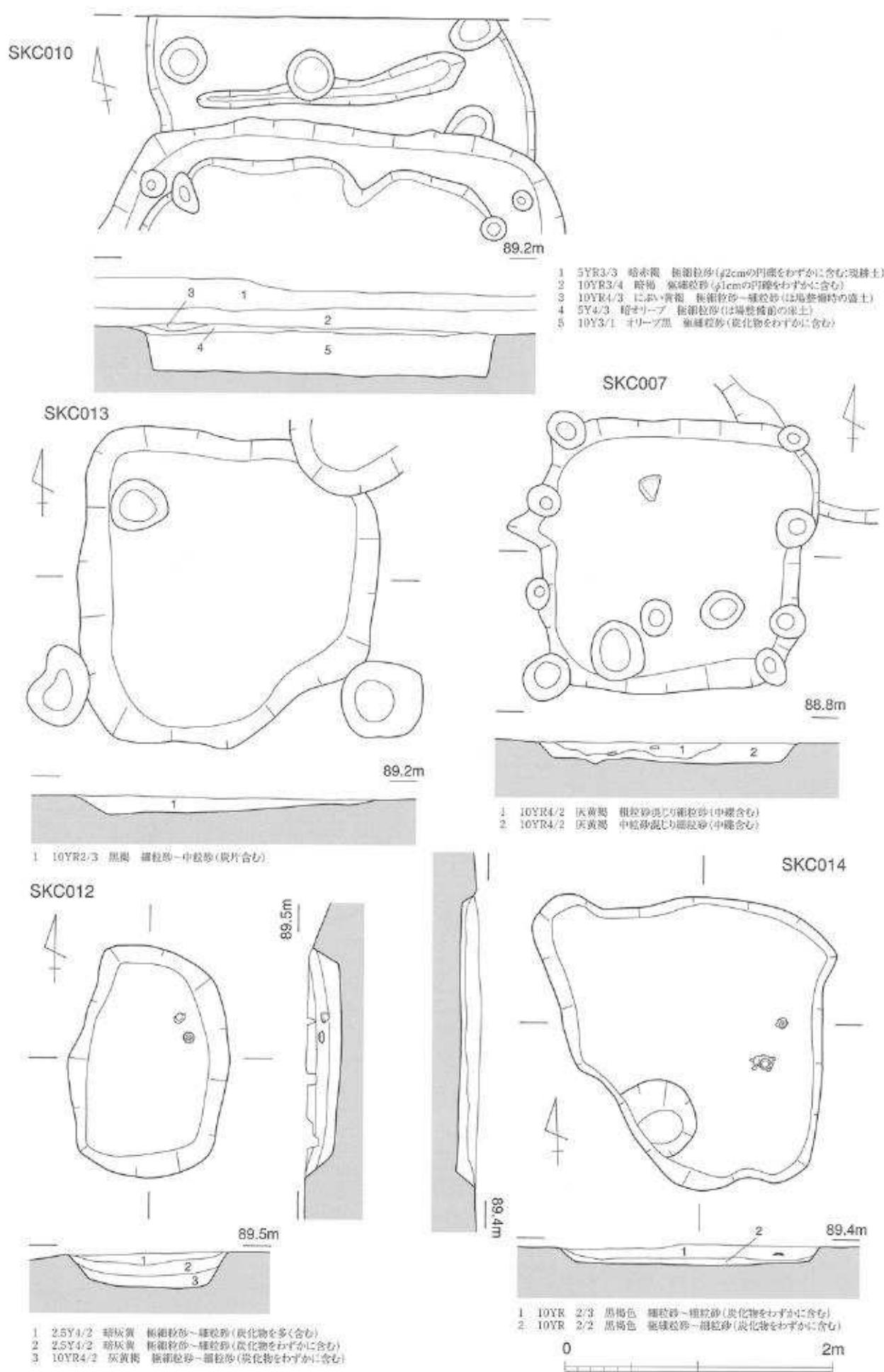
図版34 桜地区の遺構(33) SBC044・SPC017・SPC027・SXC001



図版35 桜地区の遺構(34) SKC002・SKC004・SKC008

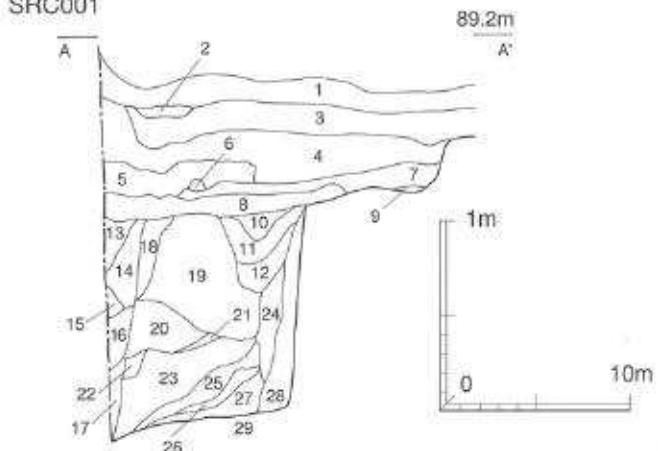


図版36 桜地区の遺構(35) SKC007・SKC010・SKC012・SKC013・SKC014



図版37 桜地区の遺構(36) SRC001・SRC002

SRC001



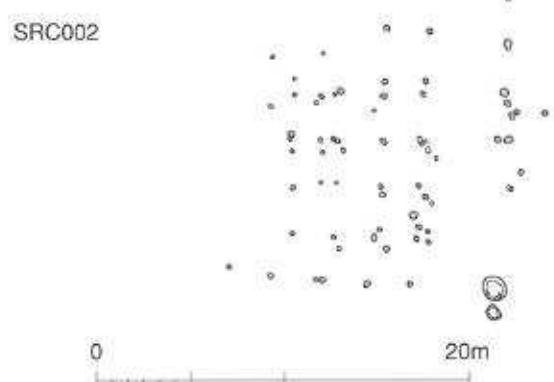
- 1 5YE3/3 黒赤褐 シルト質粘土鉱砂(現耕土・盛土)
- 2 2.5Y5/6 黄褐色 粘性砂一極細粒砂(保土)
- 3 10YR5/6 暗褐色 シルト質粘土鉱砂(直径1cm円礫少量含む)
- 4 10YR4/6 に赤・黄褐色 粘性砂混じり極細粒砂(は場整備時の盛土)
- 5 5Y4/2 黒オリーブ シルト混じり細粒砂(は場整備前の保土)
- 6 7.5Y4/6 黒オリーブ シルト混じり細粒砂一極細粒砂(は場整備前の保土)
- 7 5Y3/2 黒オリーブ シルト混じり細粒砂一極細粒砂(は場整備前の保土)
- 8 5Y4/3 黒オリーブ シルト質粘土鉱砂
- 9 5Y4/3 黒オリーブ シルト混じり細粒砂
- 10 2.5Y3/2 黑褐色 シルト混じり細粒砂一極細粒砂(保土)
- 11 5Y3/2 オリーブ褐 粘性砂一極細粒砂
- 12 2.5Y3/3 黒オリーブ 褐色砂混じり細粒砂
- 13 5Y3/2 オリーブ褐 シルト質粘土鉱砂(直径2.0cm以下の円礫を少量含む)
- 14 7.5Y3/4 オリーブ褐 シルト混じり細粒砂一極細粒砂
- 15 10YR4/6 灰青褐色 中緑・粗粒砂混じり細粒砂
- 16 2.5Y4/2 黑灰褐色 粘性砂混じり細粒砂(人・中緑含む)
- 17 5Y4/2 黒オリーブ 粗粒砂一極細粒砂混じり小礫
- 18 10YR4/6 灰青褐色 以緑～中緑混じり細粒砂
- 19 2.5Y4/3 オリーブ褐 中緑混じり細粒砂
- 20 2.5Y4/2 黑灰褐色 粗粒砂混じり中緑
- 21 2.5Y4/3 オリーブ褐 中緑～粗粒砂混じり極細粒砂
- 22 2.5Y4/3 オリーブ褐 中緑～粗粒砂混じり極細粒砂
- 23 2.5Y4/2 黑灰褐色 粗粒砂混じり中緑
- 24 2.5Y4/3 オリーブ褐 巨礫混じり極細粒砂
- 25 2.5Y4/3 オリーブ褐 中緑混じり極細粒砂
- 26 2.5Y4/2 黑灰褐色 粗粒砂混じり中緑
- 27 2.5Y4/3 オリーブ褐 中緑混じり極細粒砂
- 28 10YR3/2 黑褐色 粗粒砂混じり細粒砂(土器含む)
- 29 10YR4/6 黑褐色 粗粒砂混じり中緑

A-A'



SRC001

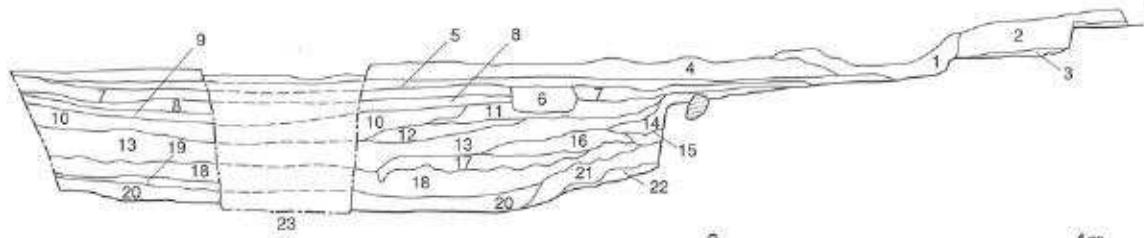
B-B'



89.2m

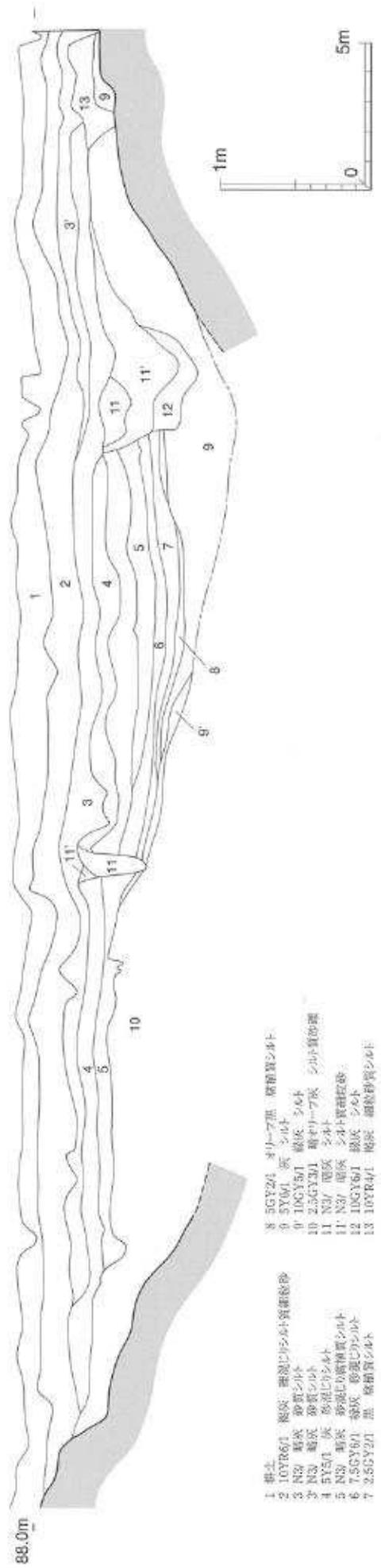
SRC002

B

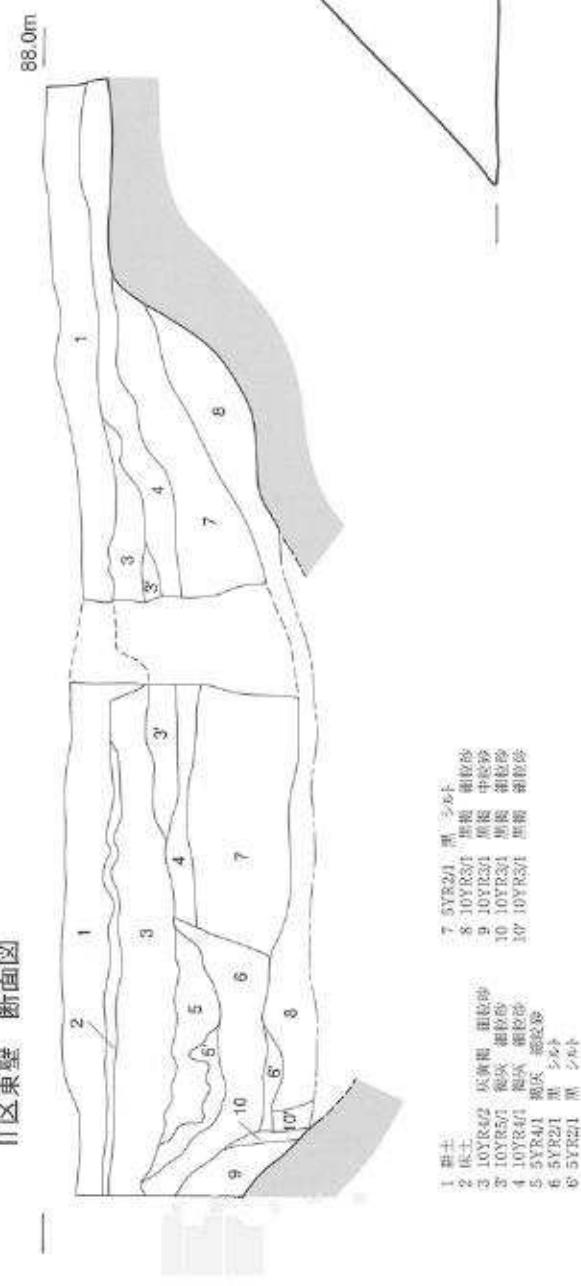


図版38 山内南地区の遺構 土層図

I区南壁 断面図



II区東壁 断面図

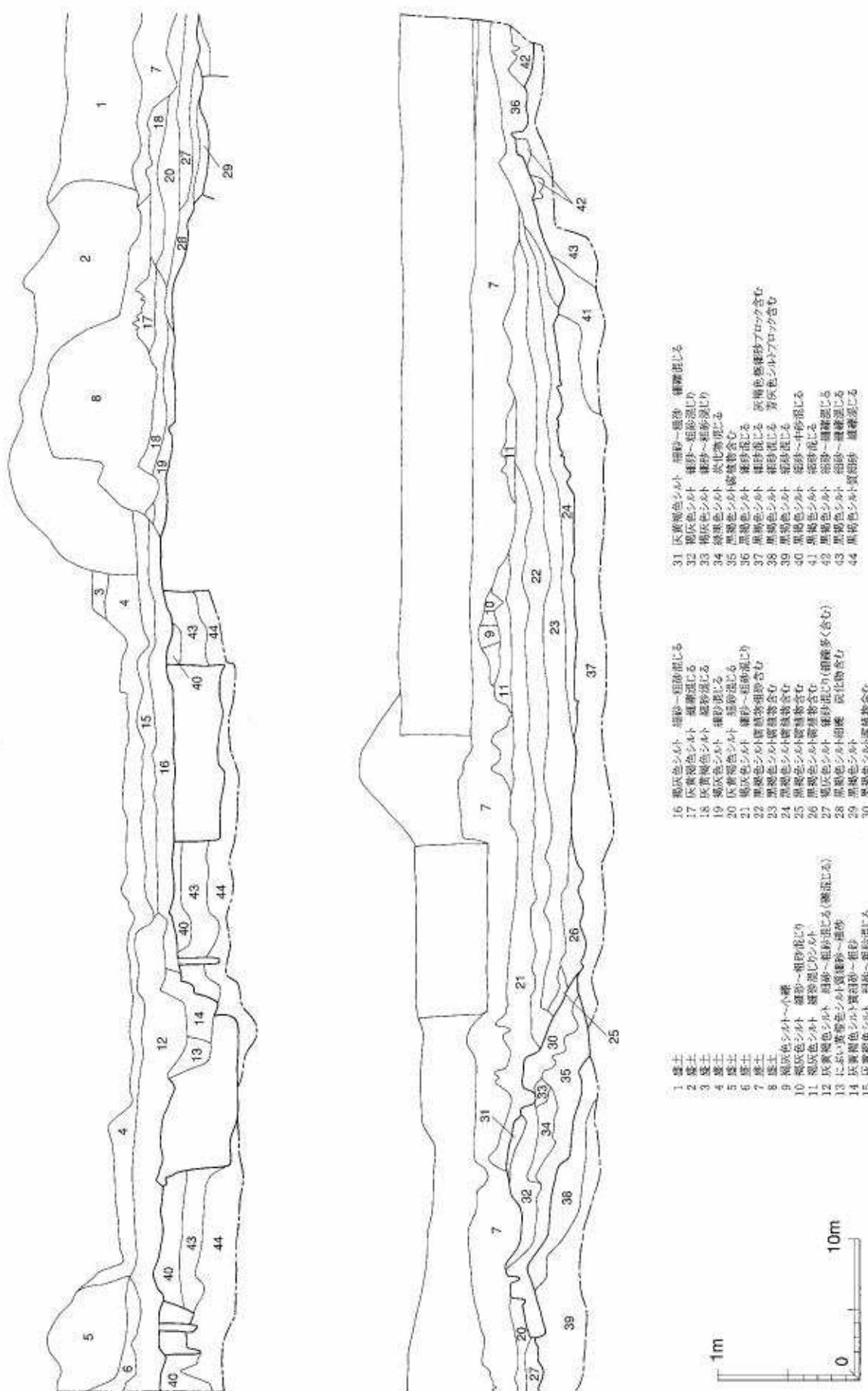


1. 塚土
2. 10YR6/1 黄灰、細粒じゅうぶん質砂質粘土
3. 10Y5/1 黄灰 砂質シルト
4. 10Y4/1 黄灰 砂質シルト
5. 5YR4/1 黄灰 砂質シルト
6. 5YR2/1 黑、シルト
7. 5YR2/1 黑、シルト
8. 10YR3/1 黑灰 砂質シルト
9. 10YR3/1 黑灰 砂質シルト
10. 10YR3/1 黑灰 砂質シルト
11. 10YR3/1 黑灰 砂質シルト

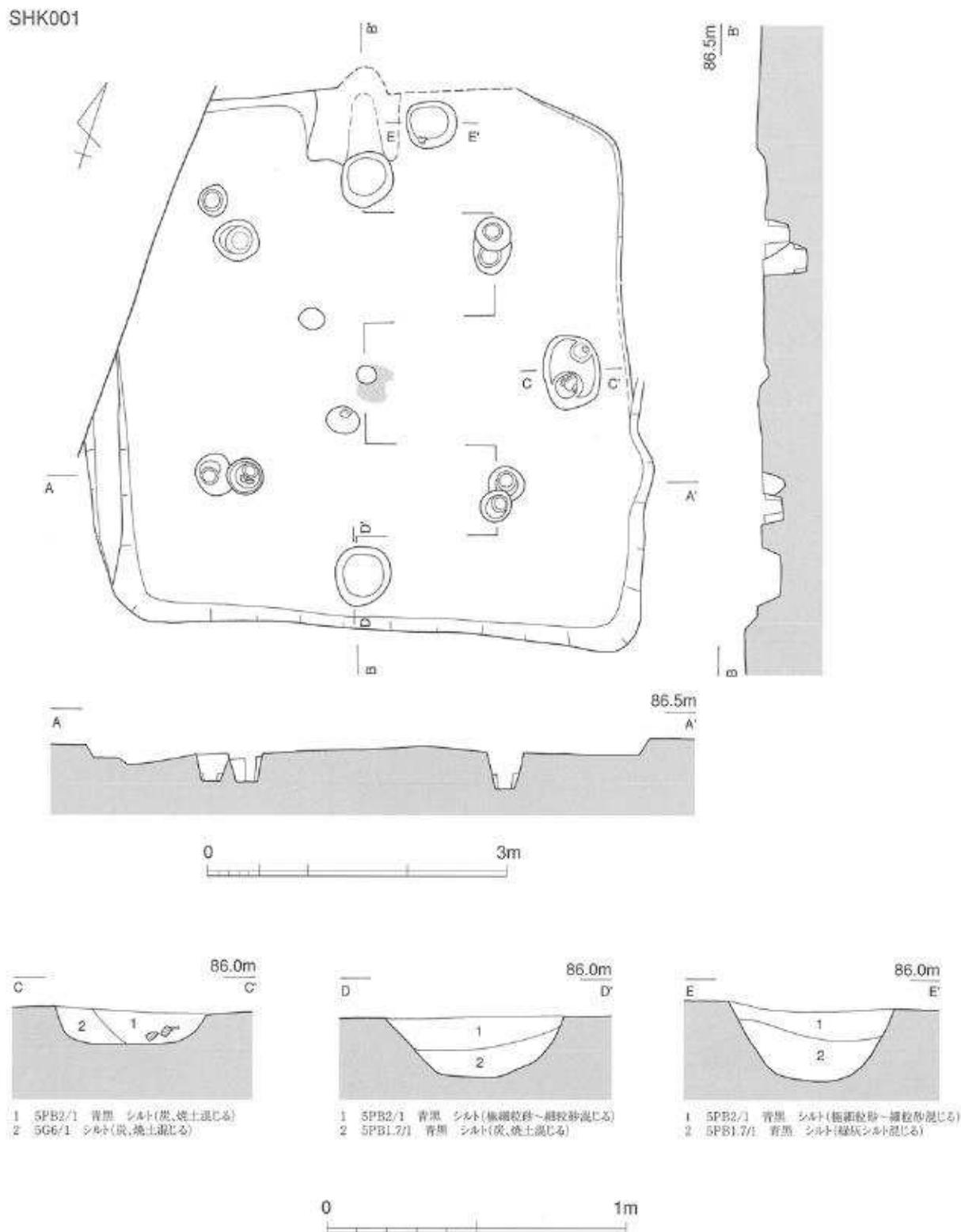
I区

II区

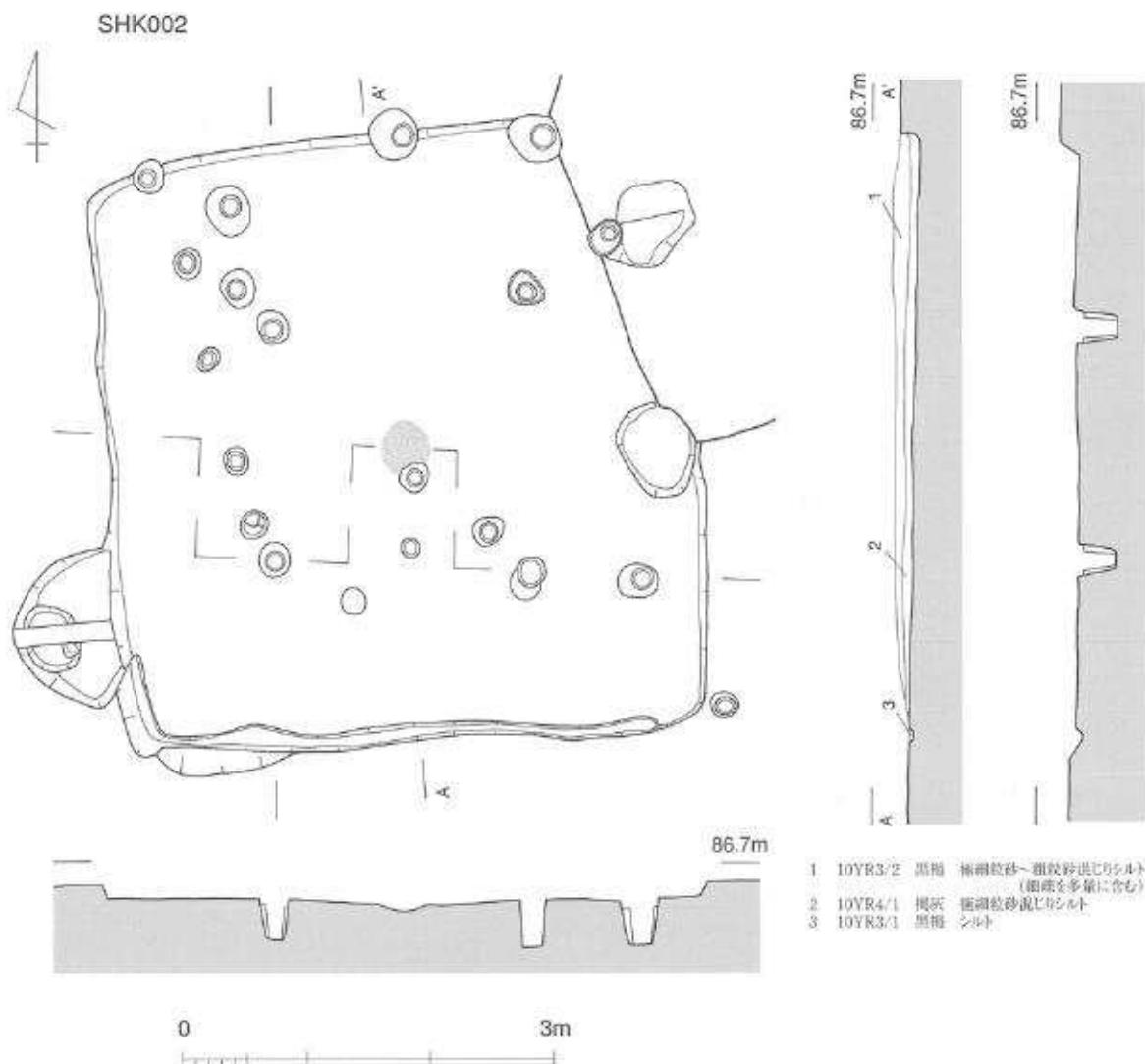
図版39 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(1) 土層図



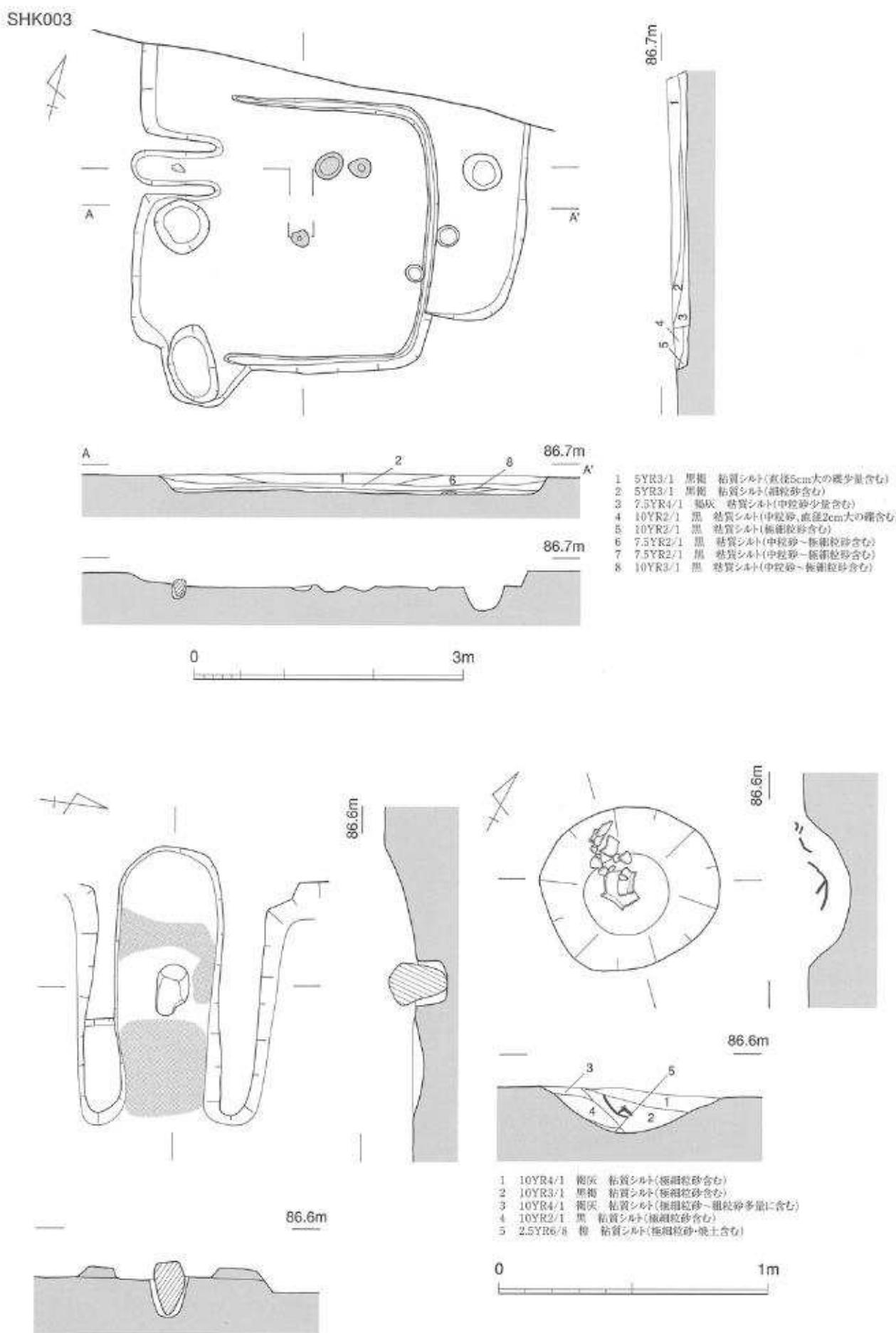
図版40 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(2) SHK001



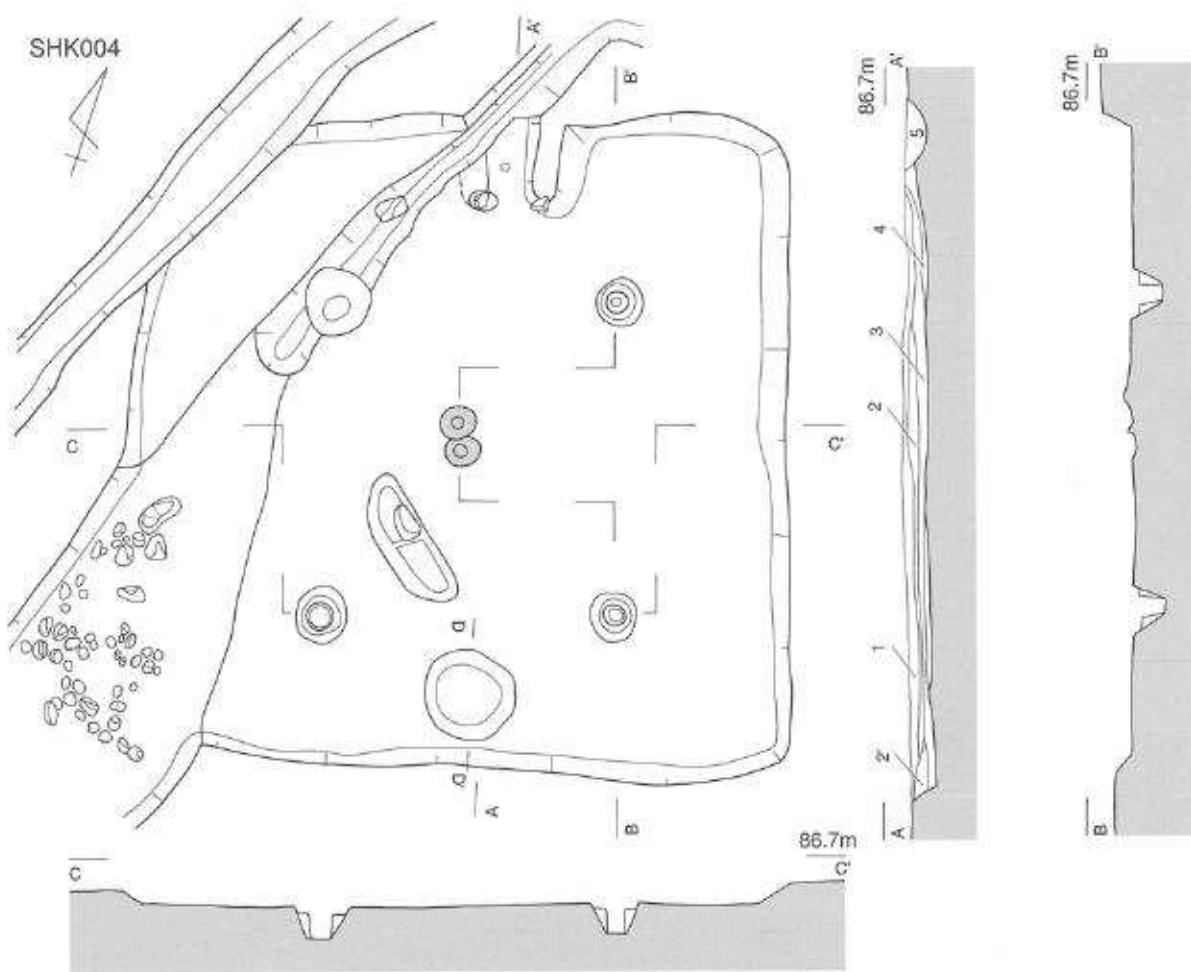
図版41 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(3) SHK002



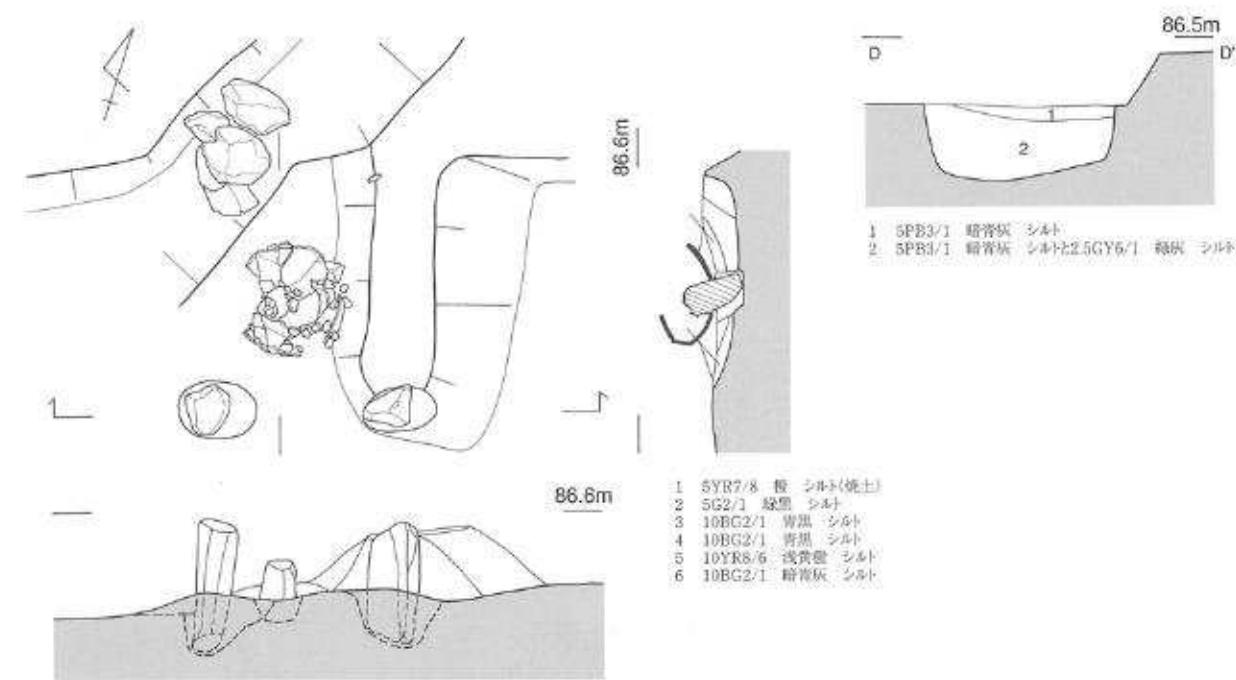
図版42 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(4) SHK003



図版43 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(5) SHK004



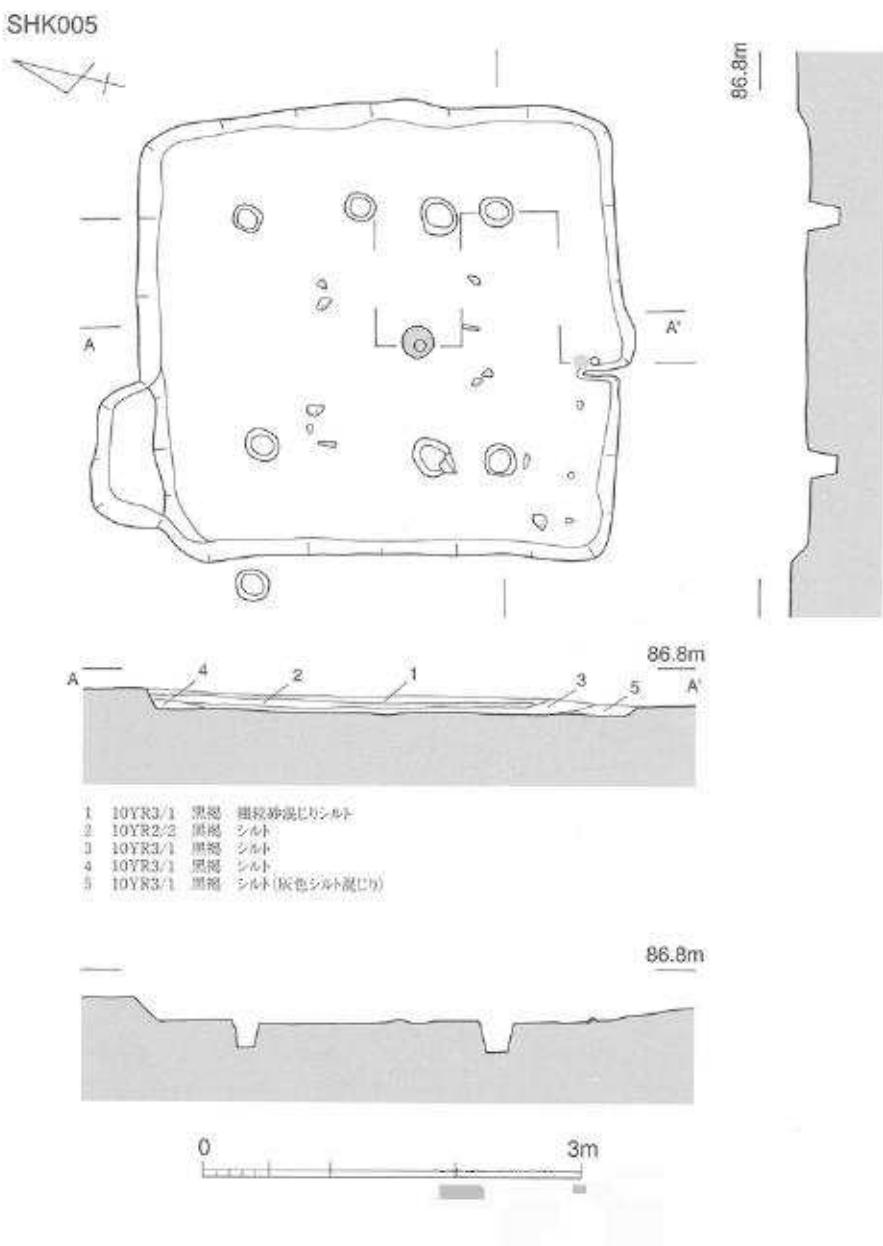
- 1 N3/ 塵灰 楊織紋跡～織紋的混じりシルト
- 2 N3/ 塘灰 透徹紋跡～織紋的混じりシルトと2.5GY6/1 オリーブ灰 シルト混じり
- 2 2.5GY6/1 オリーブ灰 シルト
- 3 N3/ 塘灰 楊織紋跡混じりシルト
- 4 5PB2/1 青黒 シルト
- 5 5PR001第2次調査



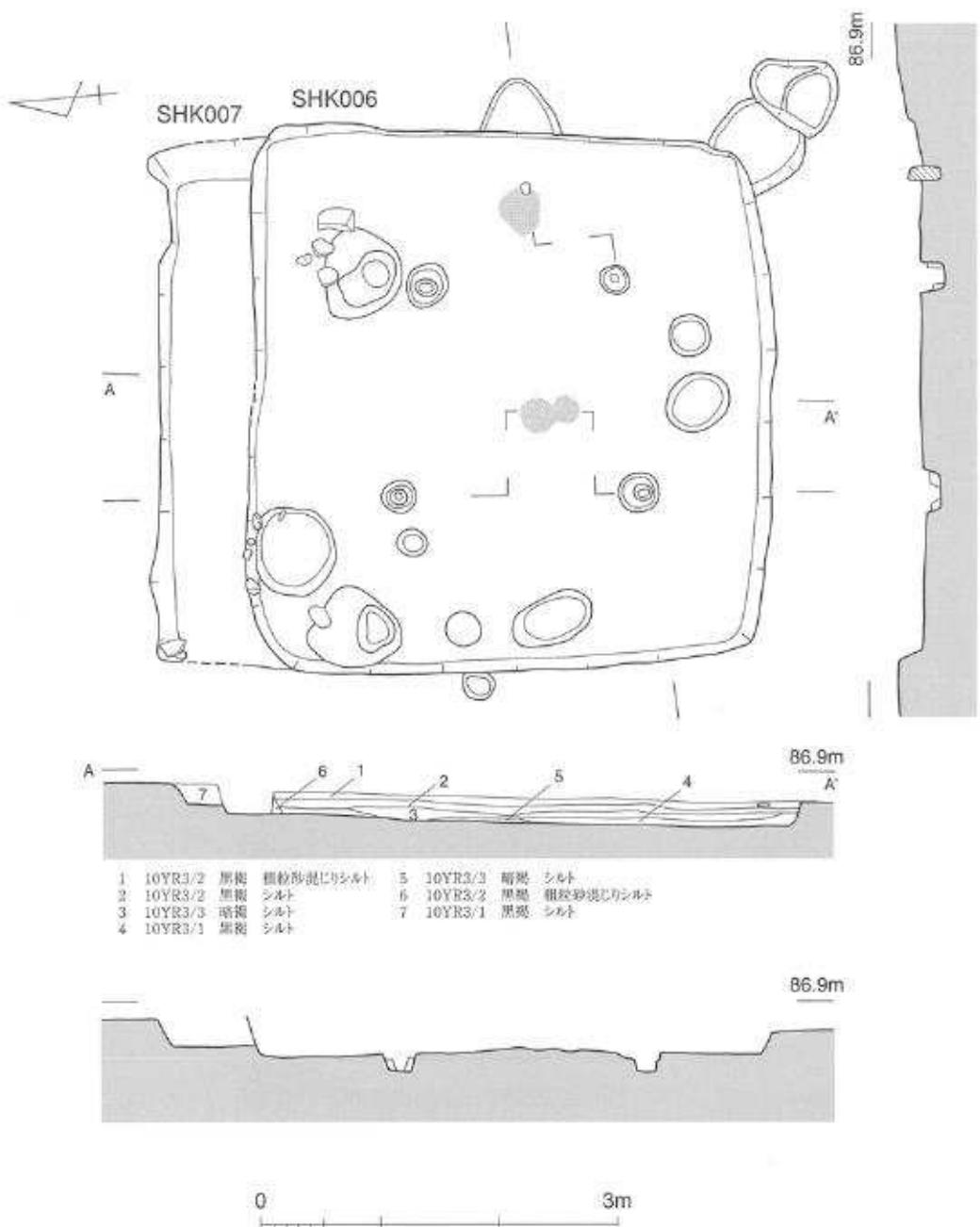
- 1 SYR7/8 棕 シルト(焼土)
- 2 SG2/1 錫黑 シルト
- 3 10BG2/1 青黒 シルト
- 4 10BG2/1 青黒 シルト
- 5 10YR8/6 浅黄褐色 シルト
- 6 10BG2/1 錫青灰 シルト

0 1m

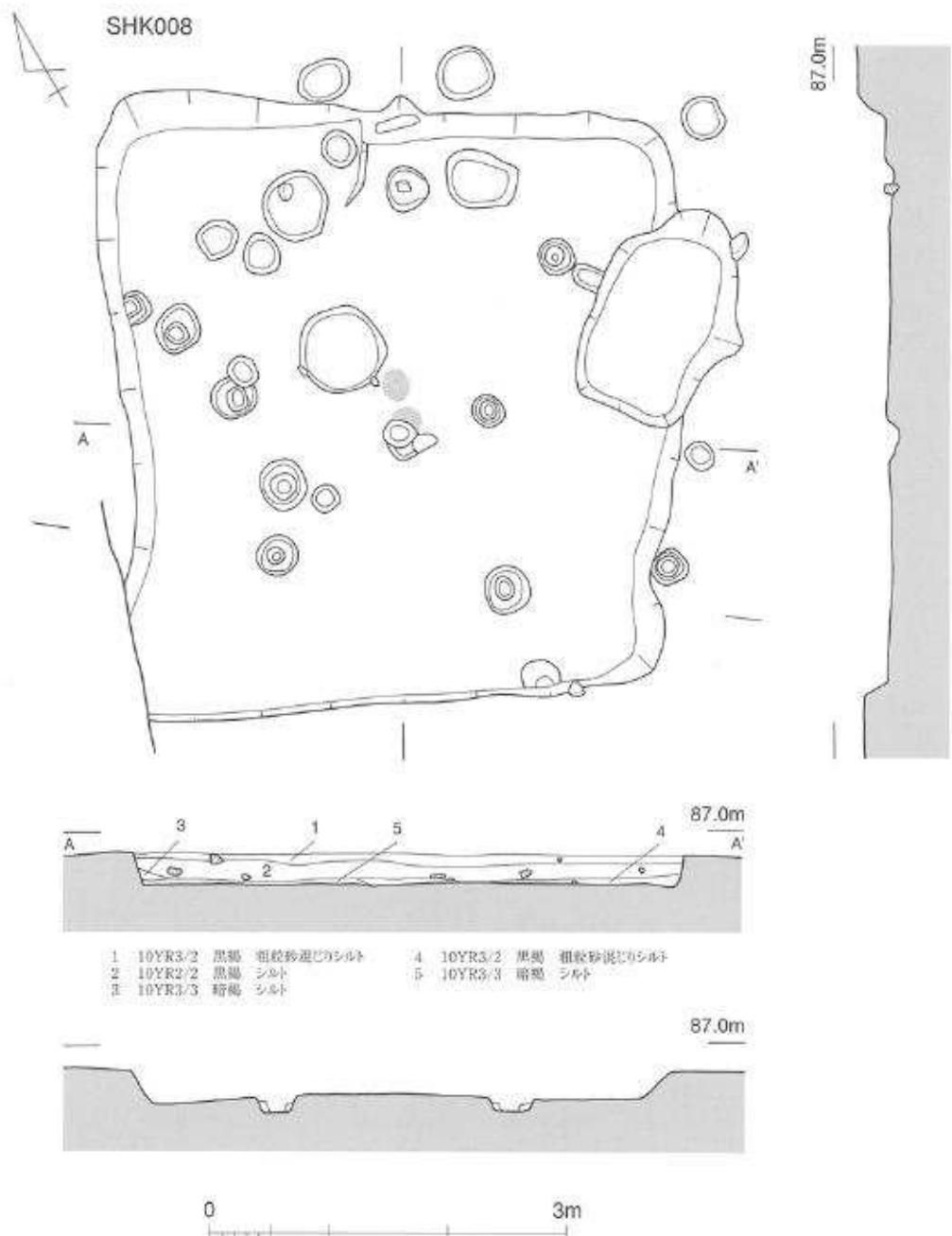
図版44 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(6) SHK005



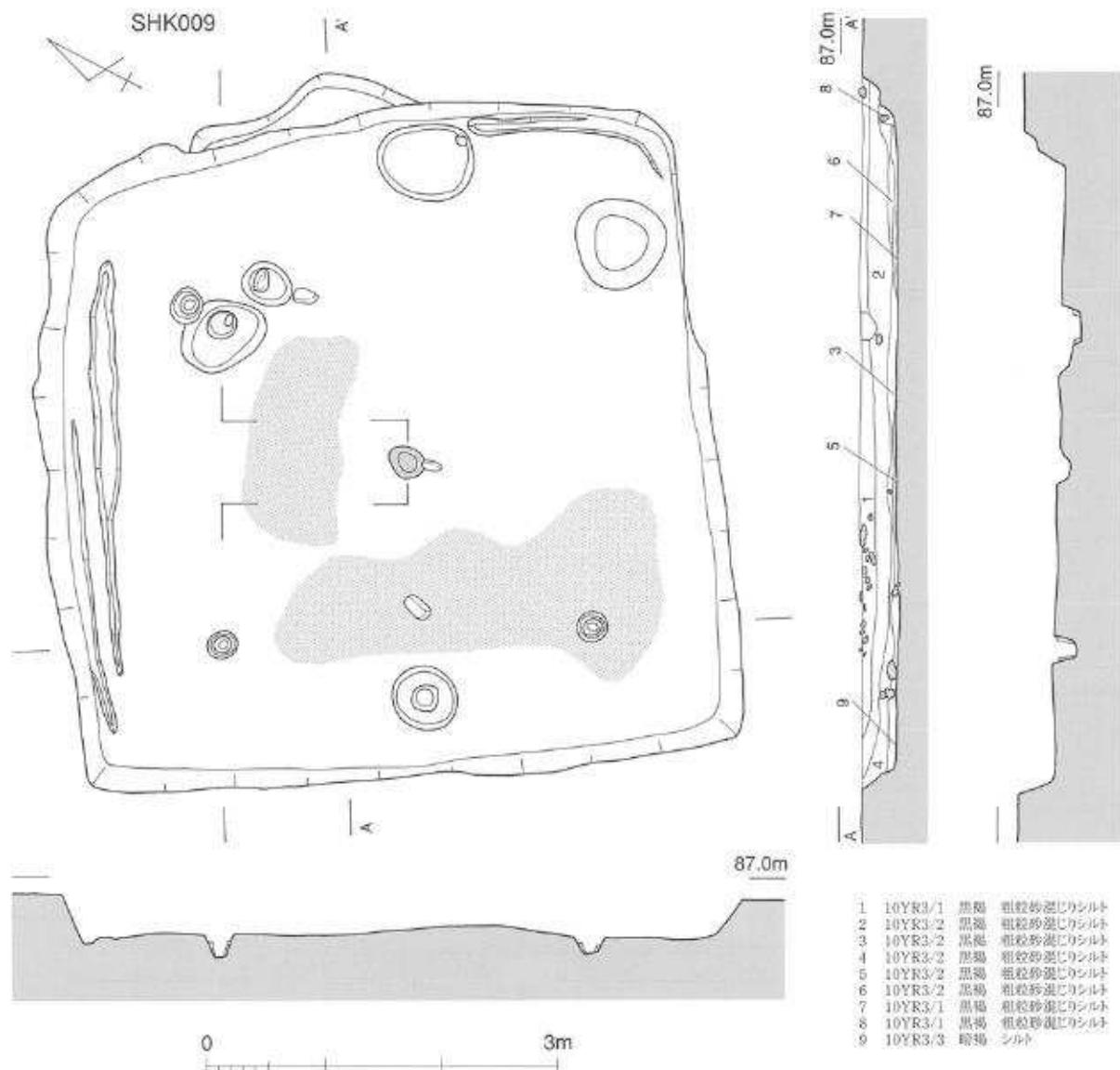
図版45 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(7) SHK006・SHK007



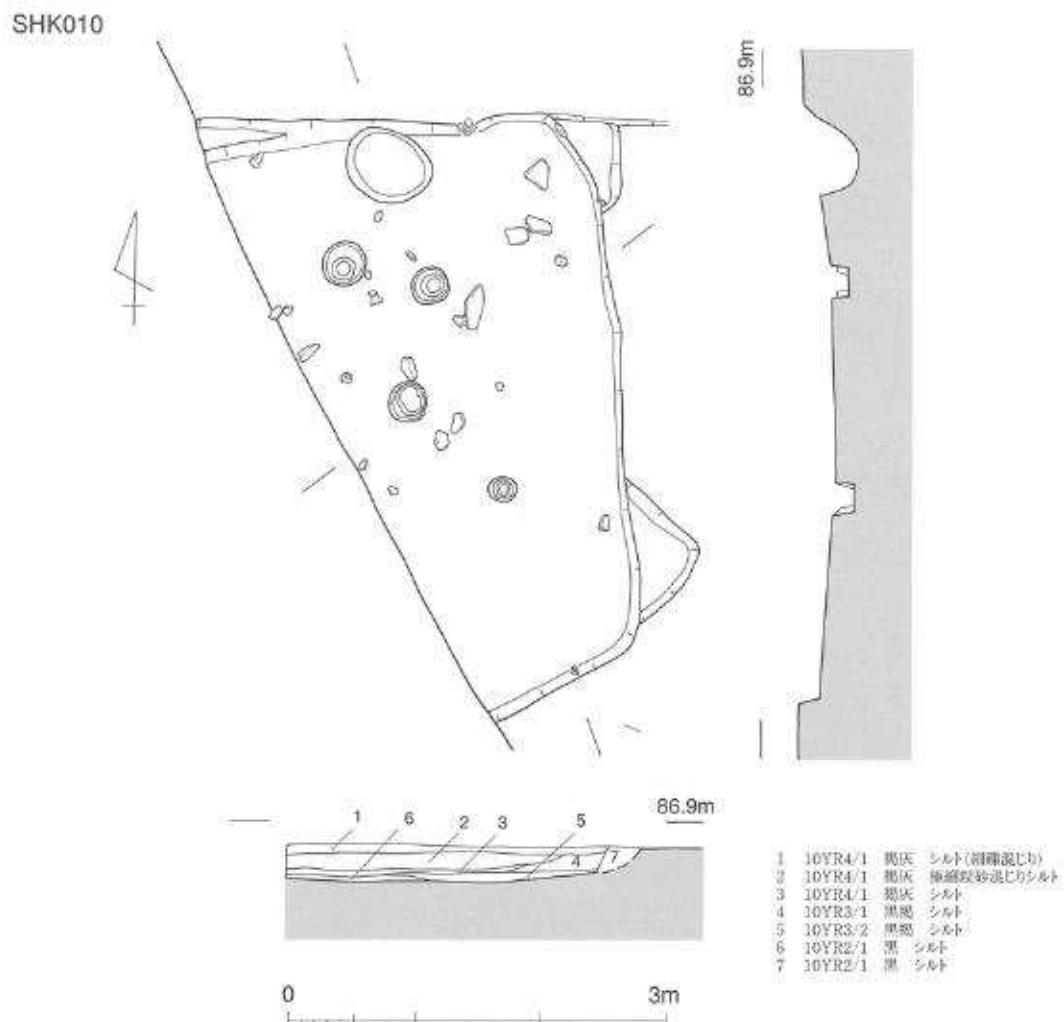
図版46 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(8) SHK008



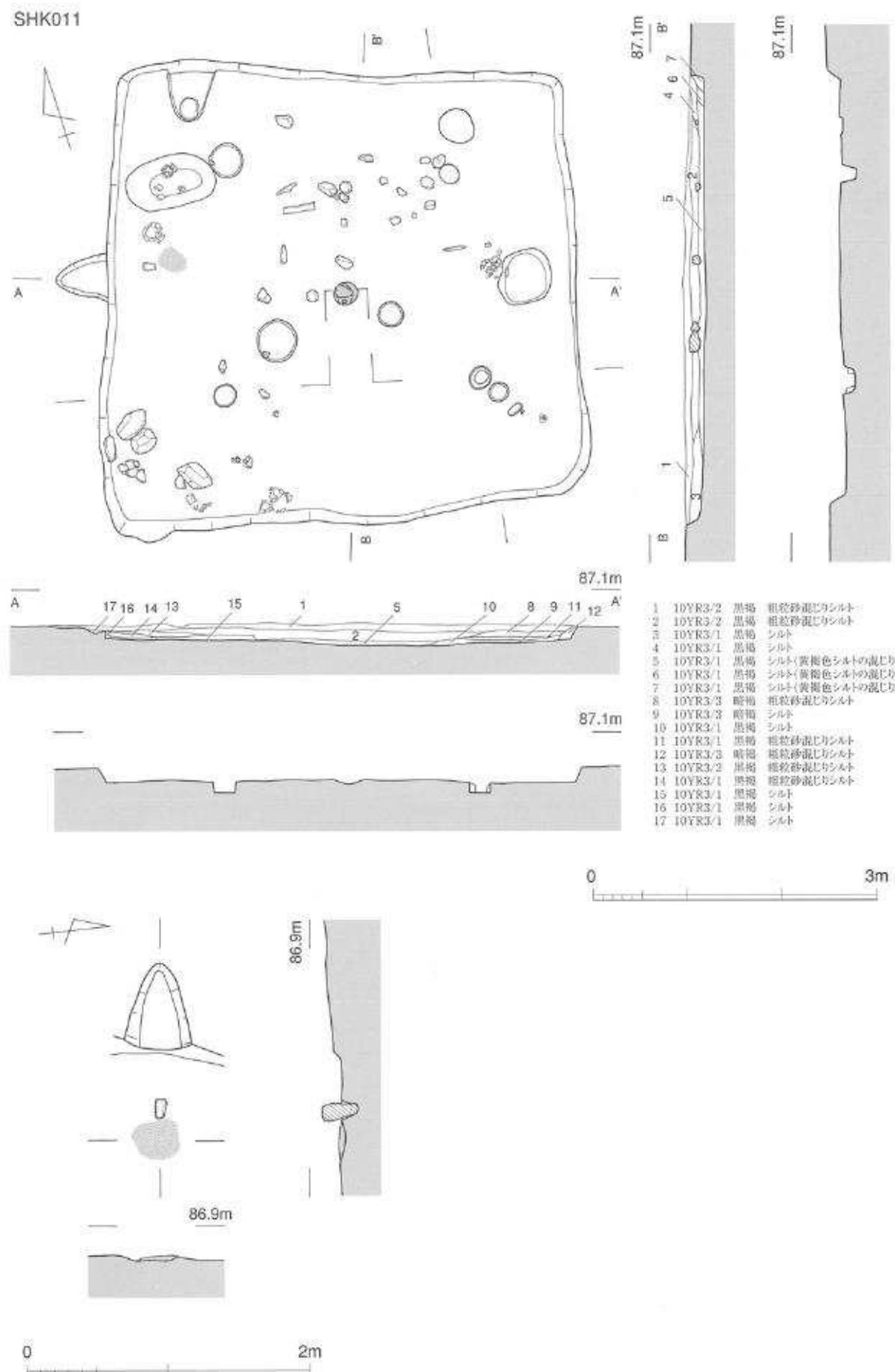
図版47 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(9) SHK009



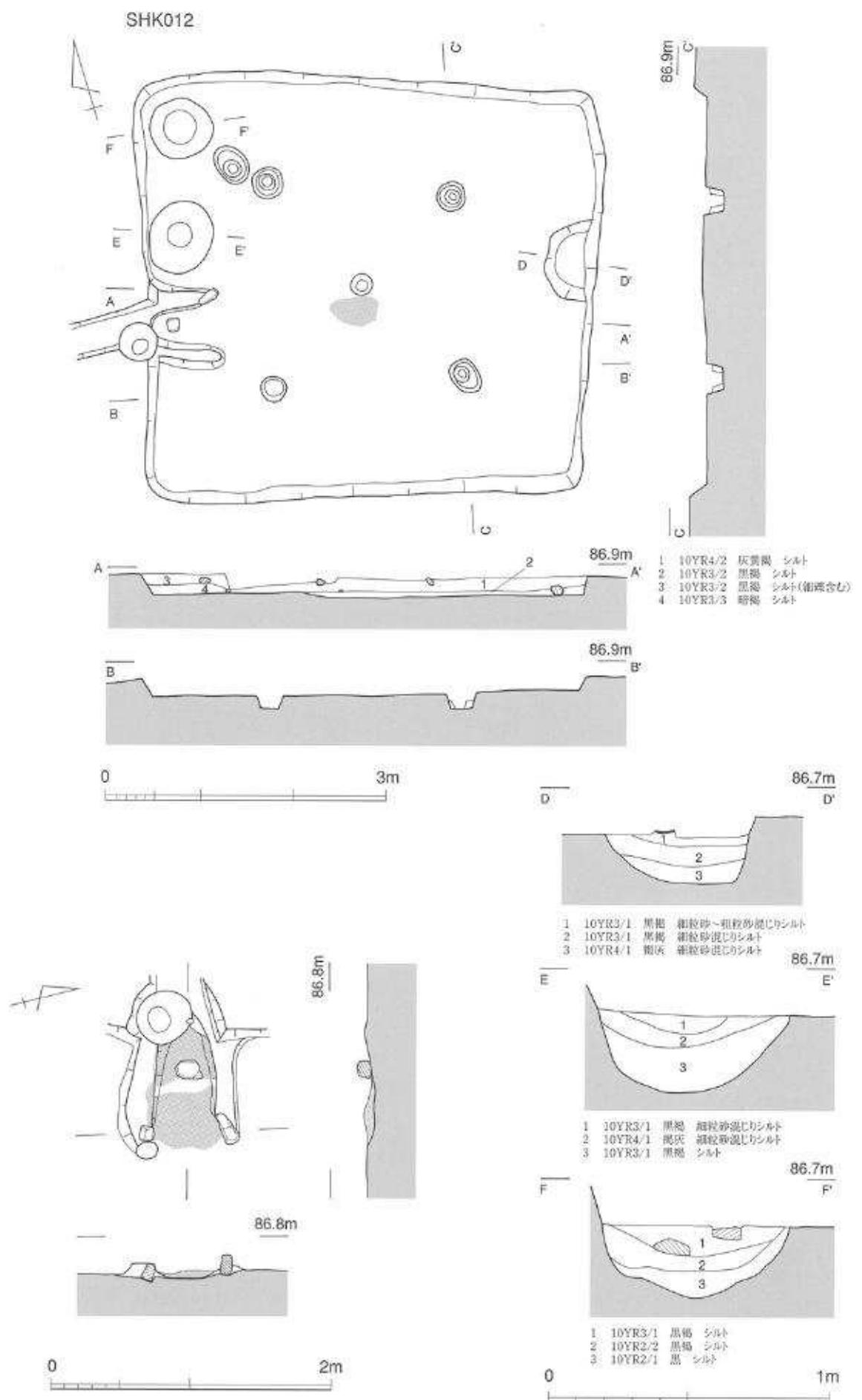
図版48 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(10) SHK010



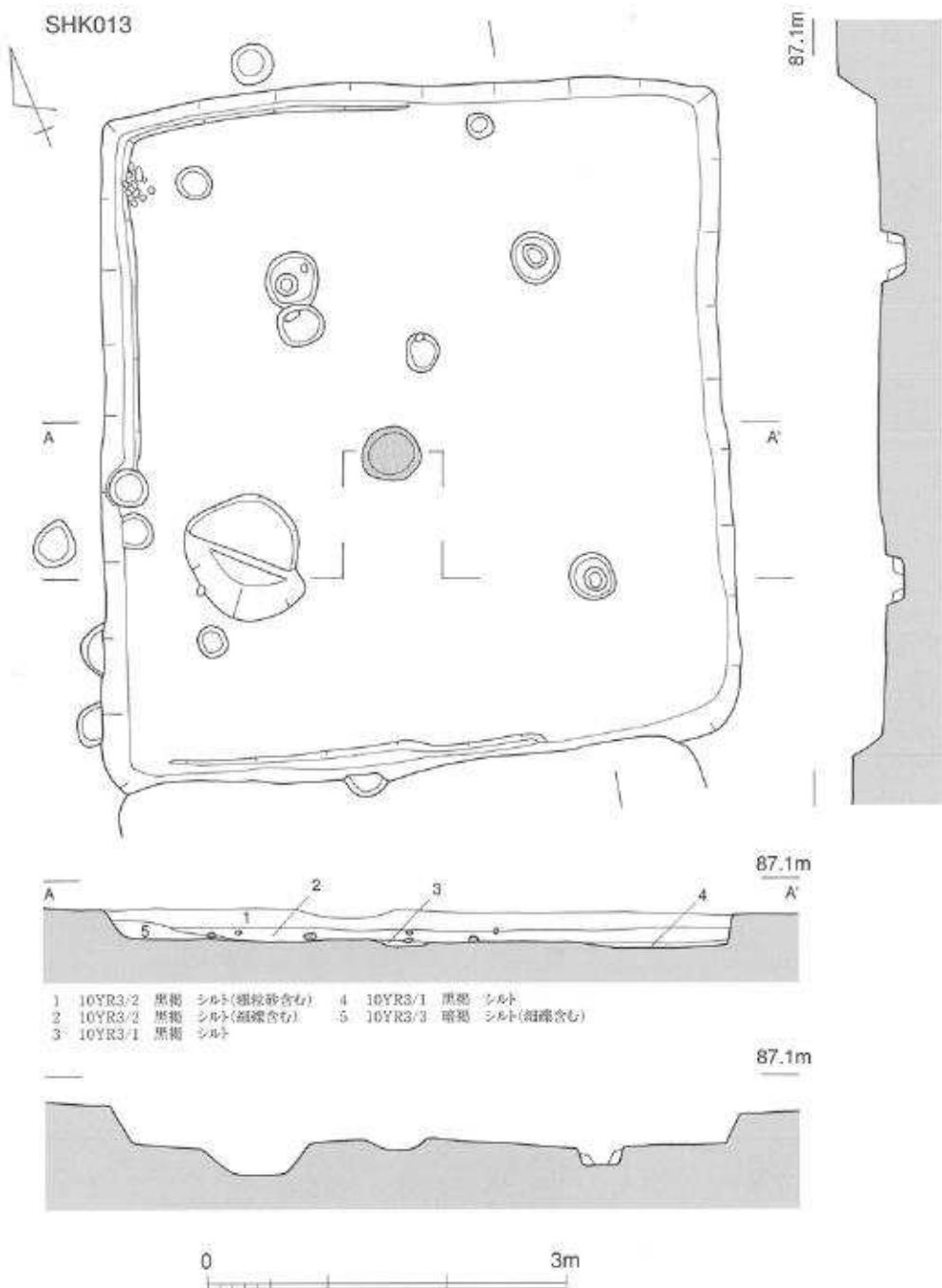
図版49 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(11) SHK011



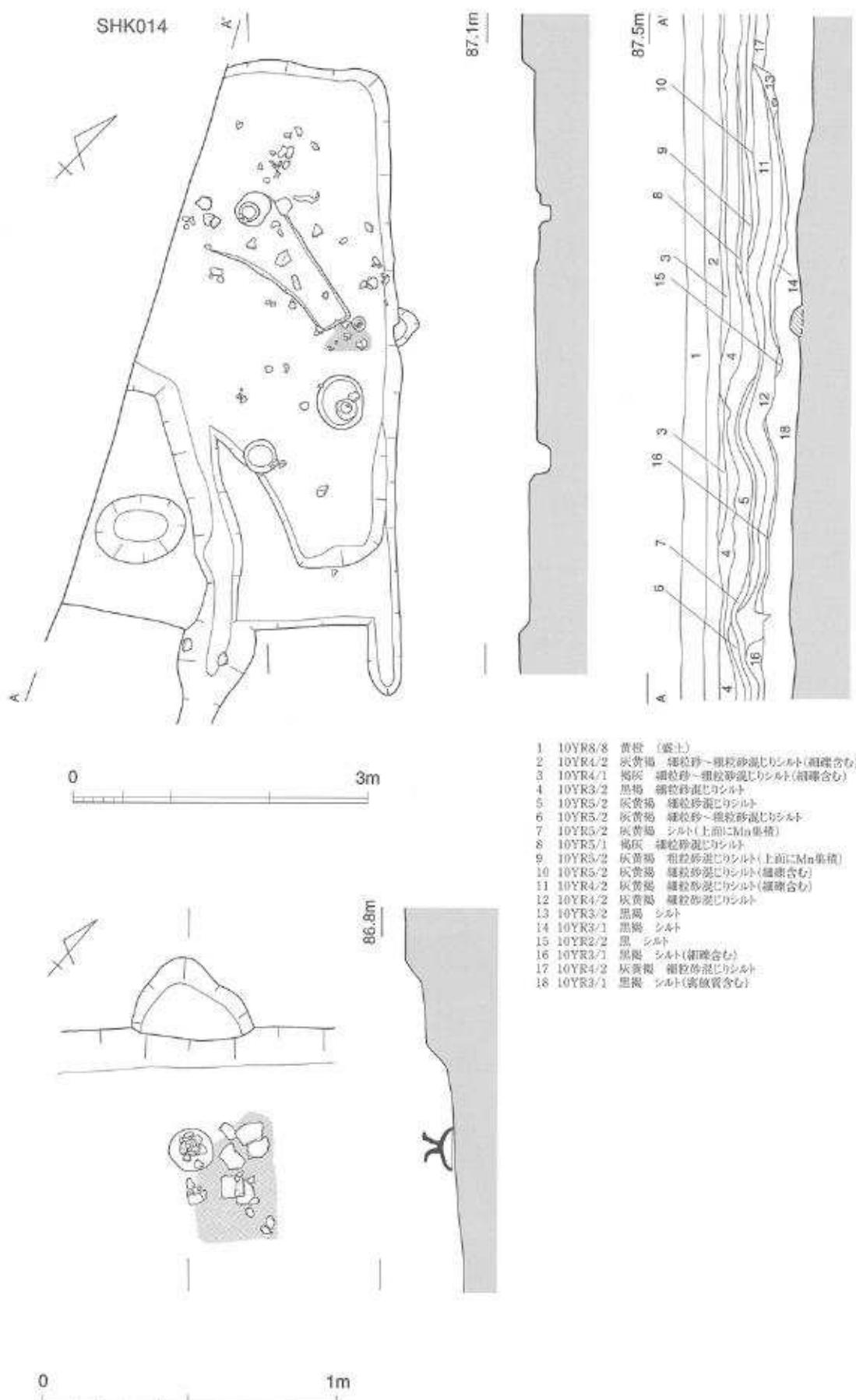
図版50 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(12) SHK012



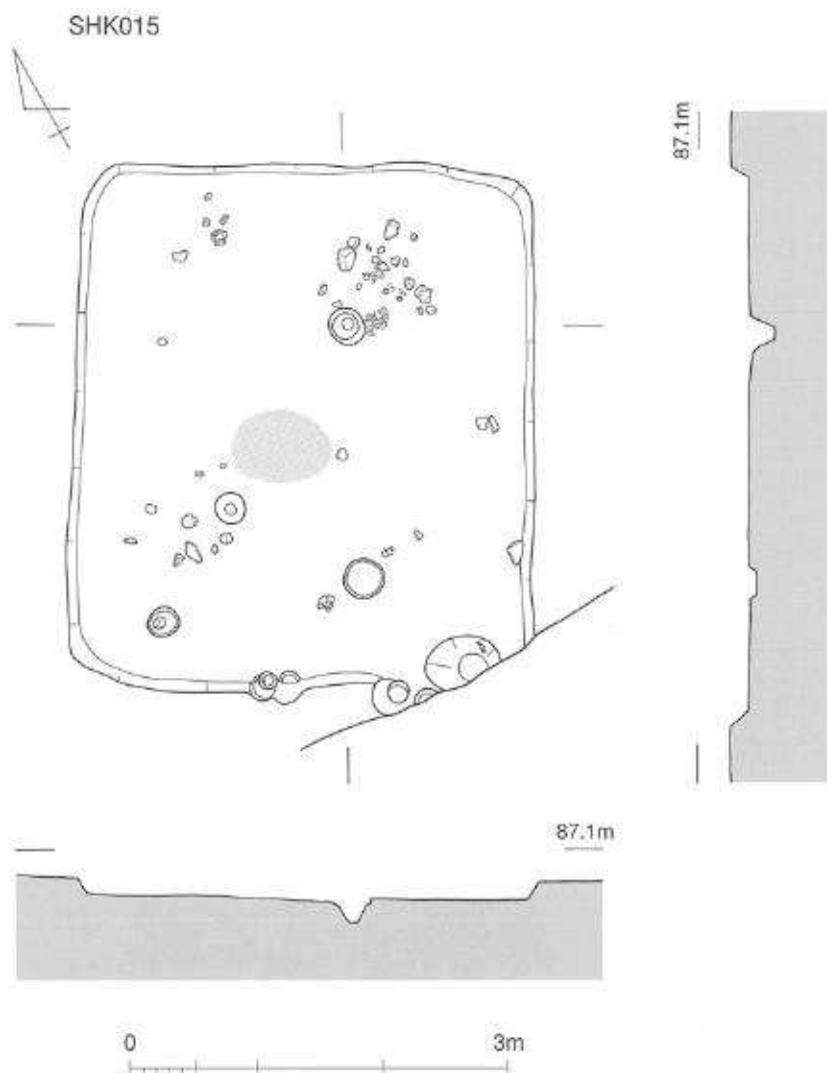
図版51 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(13) SHK013



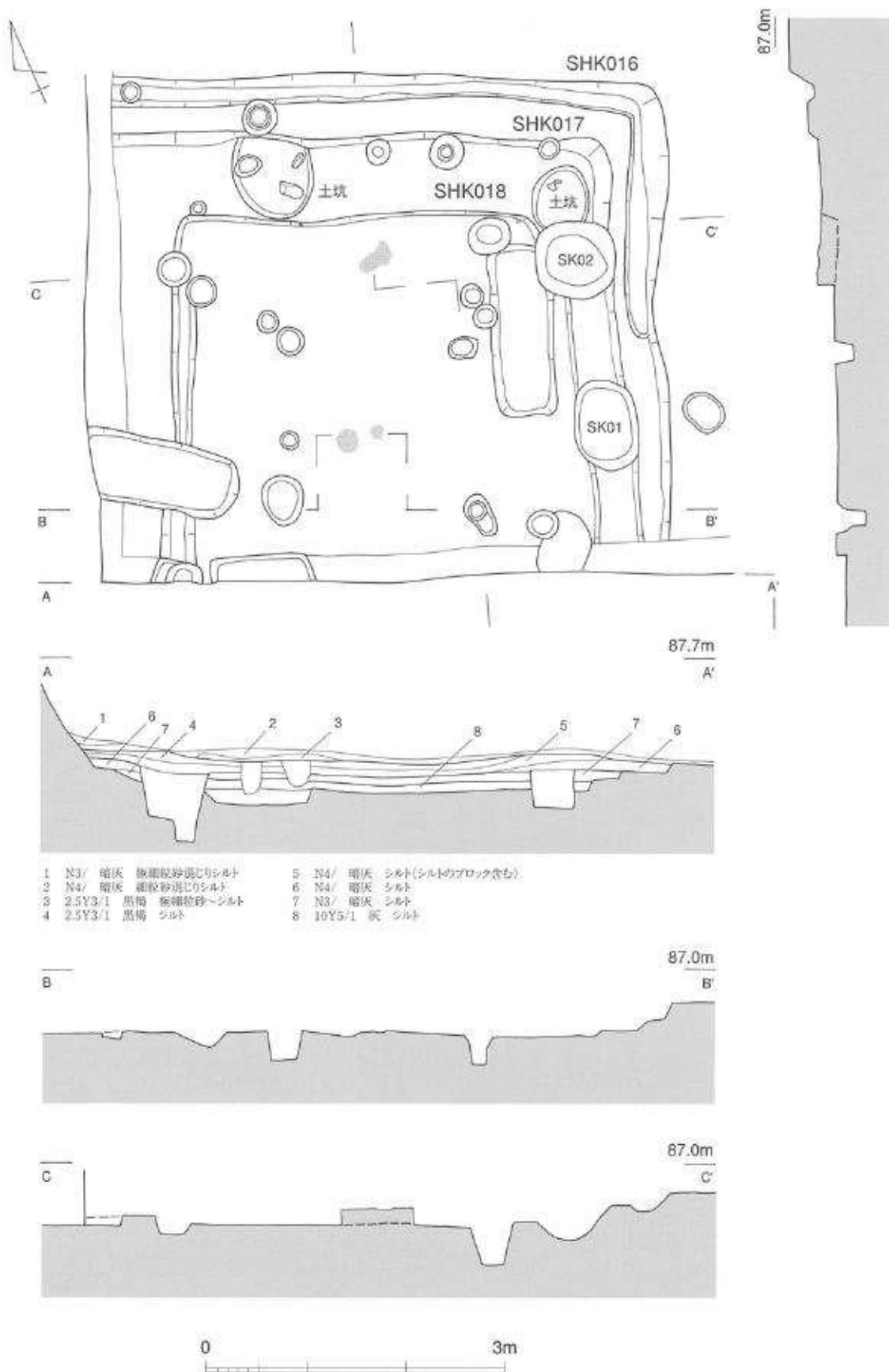
図版52 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(14) SHK014



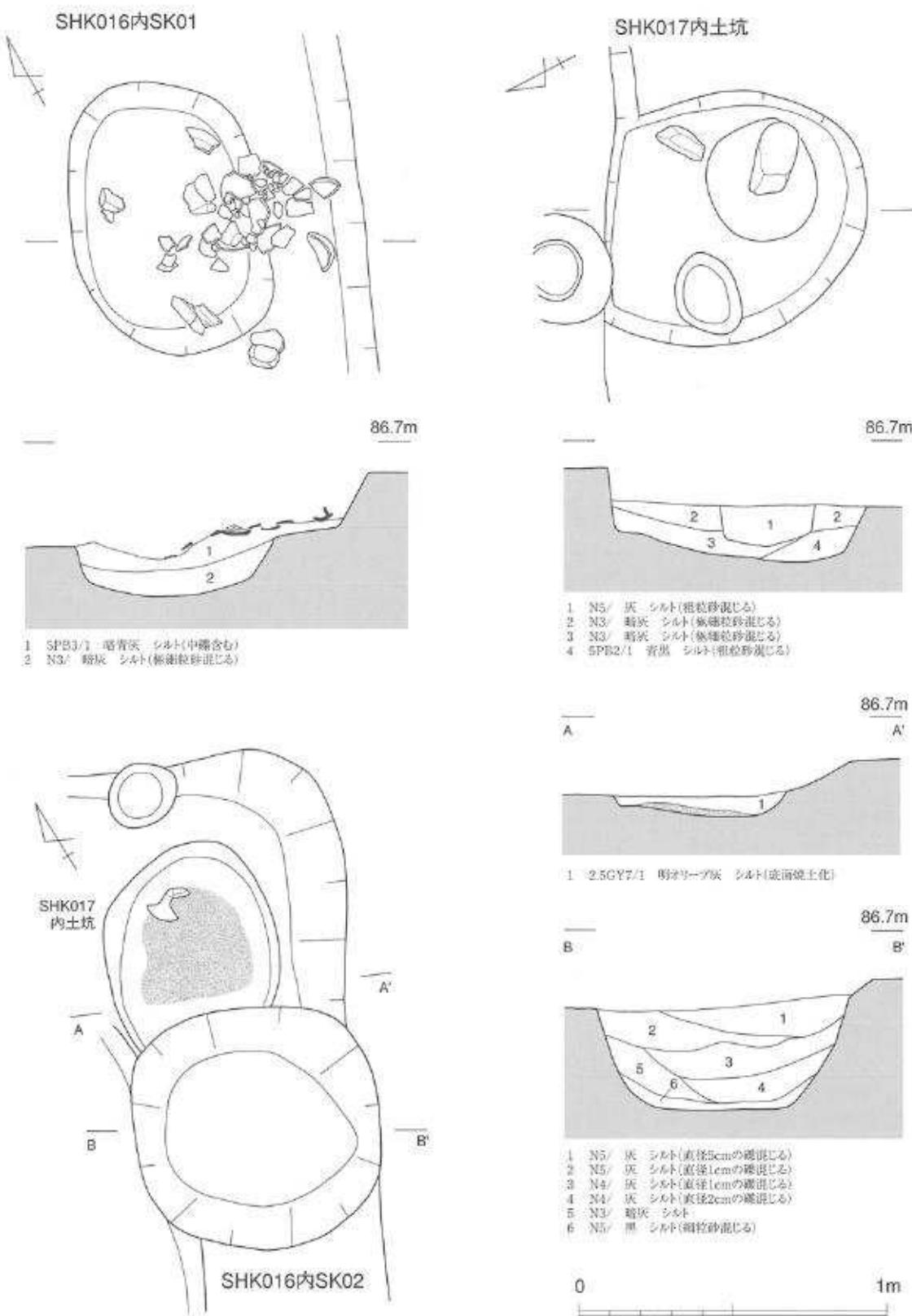
図版53 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(15) SHK015



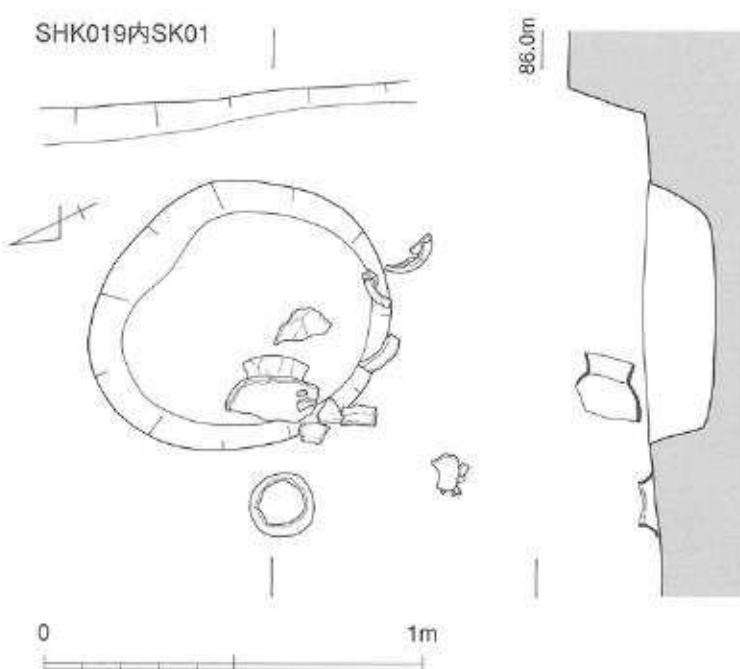
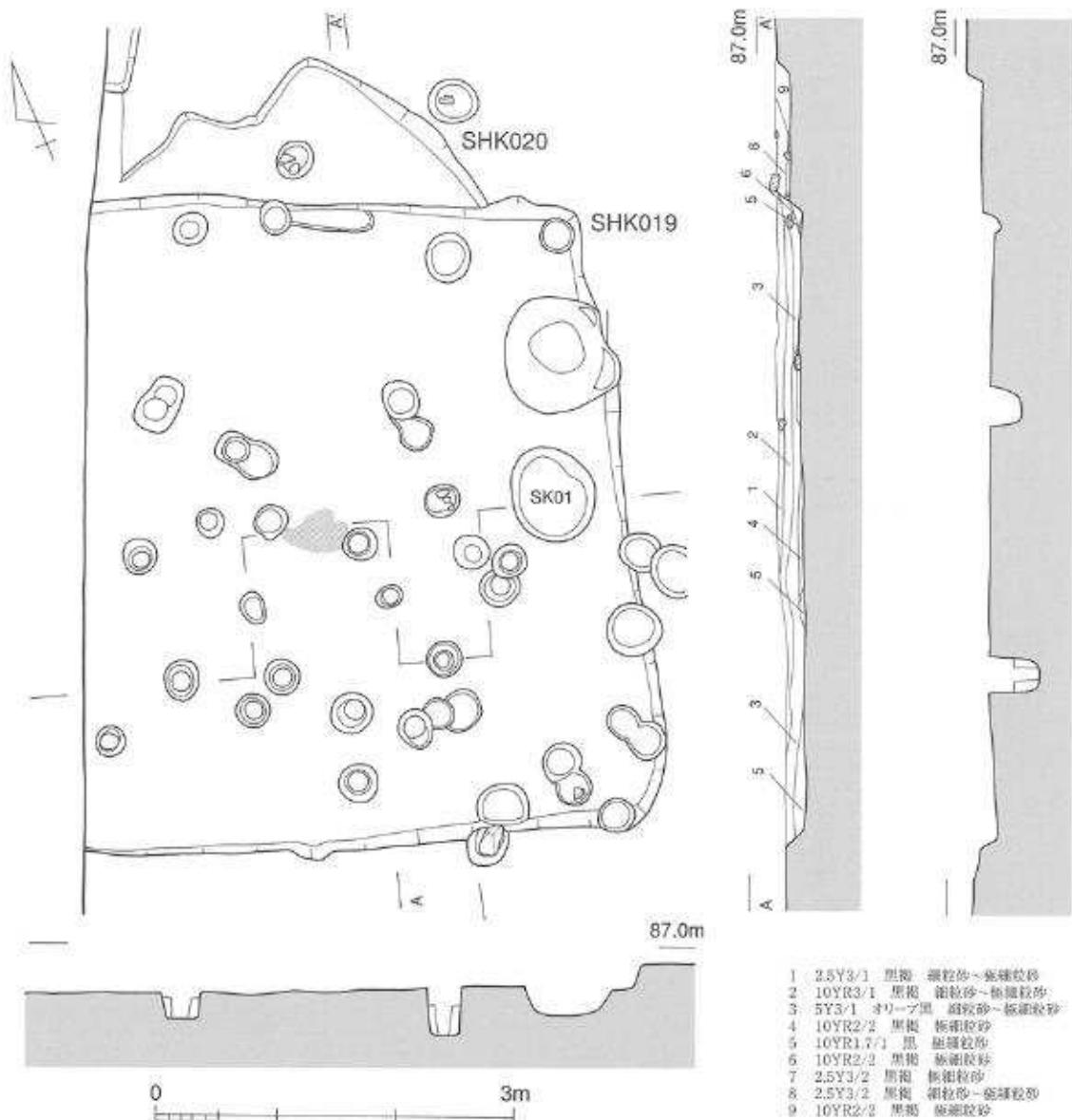
図版54 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(16) SHK016・SHK017・SHK018



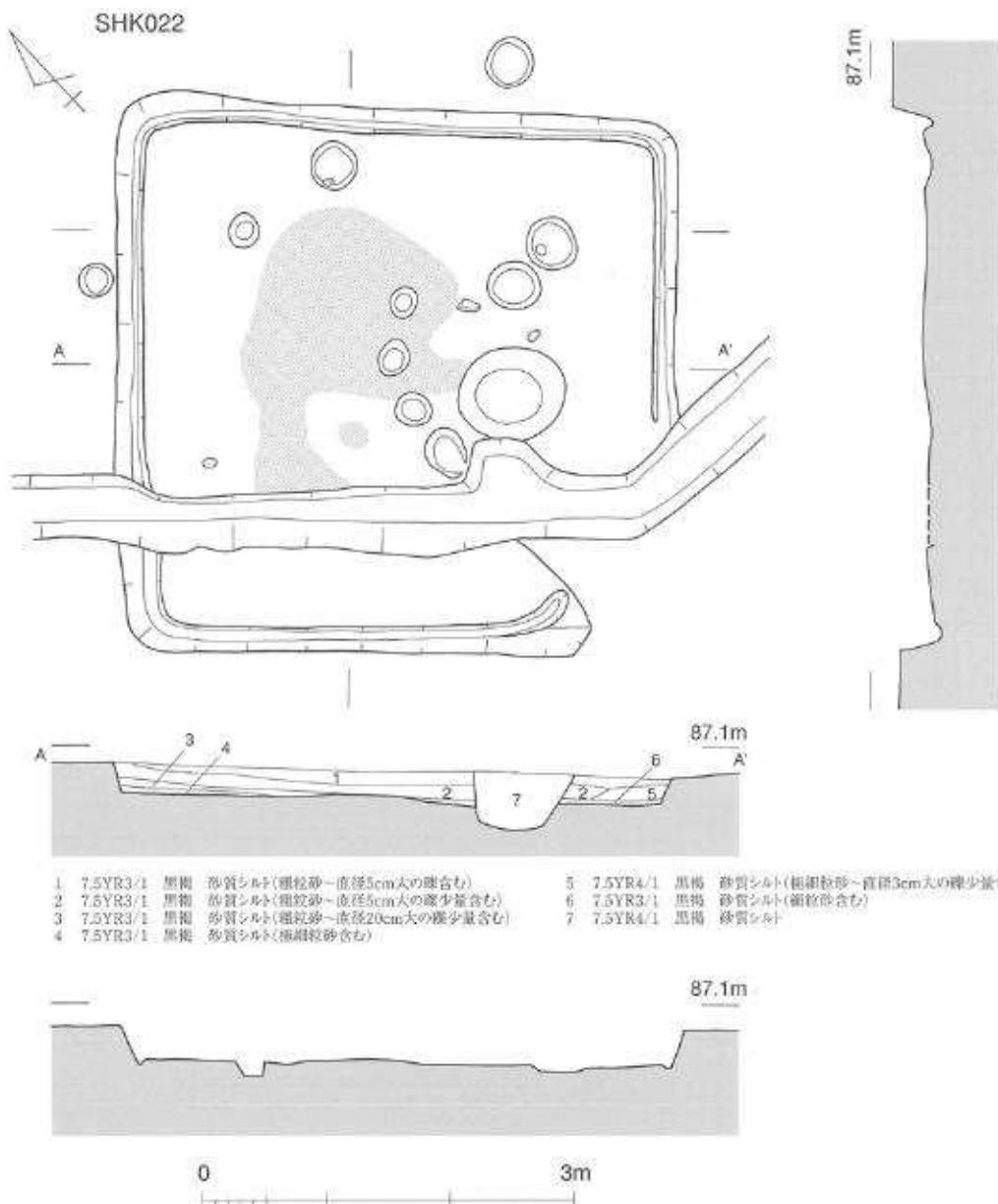
図版55 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(17) SHK016・SHK017・SHK018内土坑



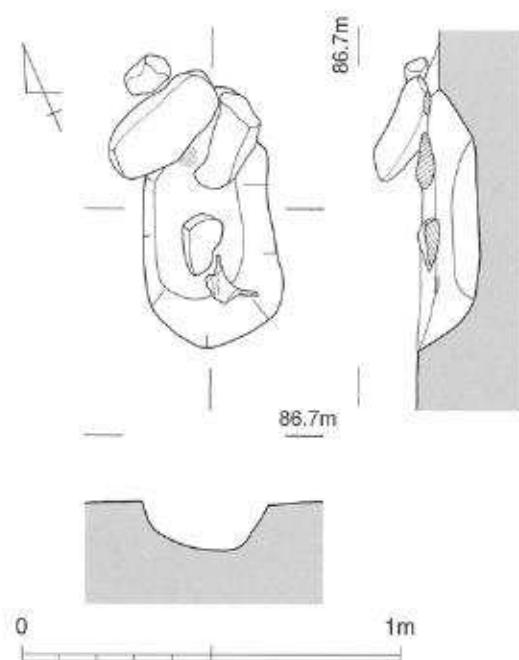
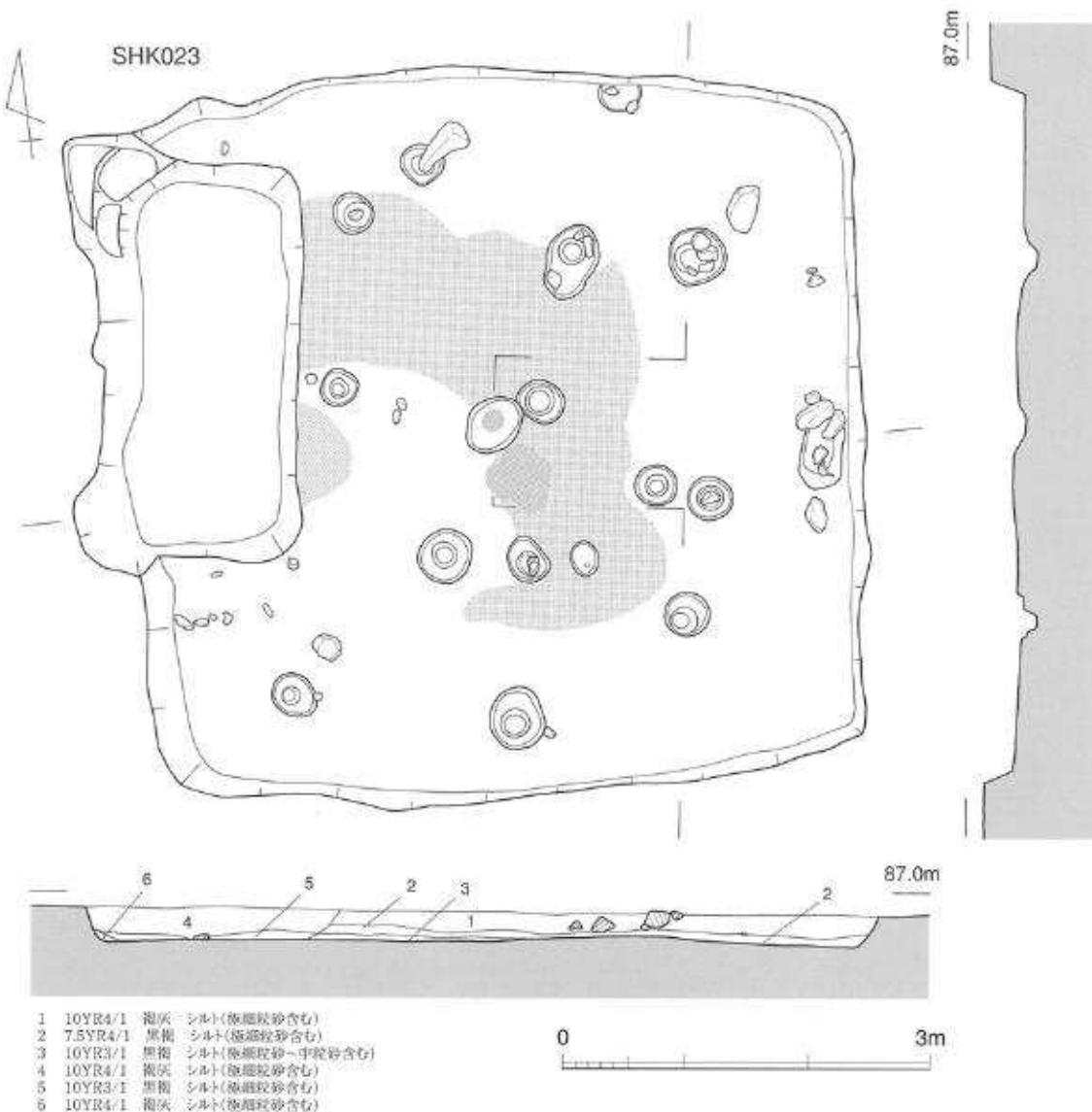
図版56 宮ヶ田I地区の遺構(18) SHK019・SHK020



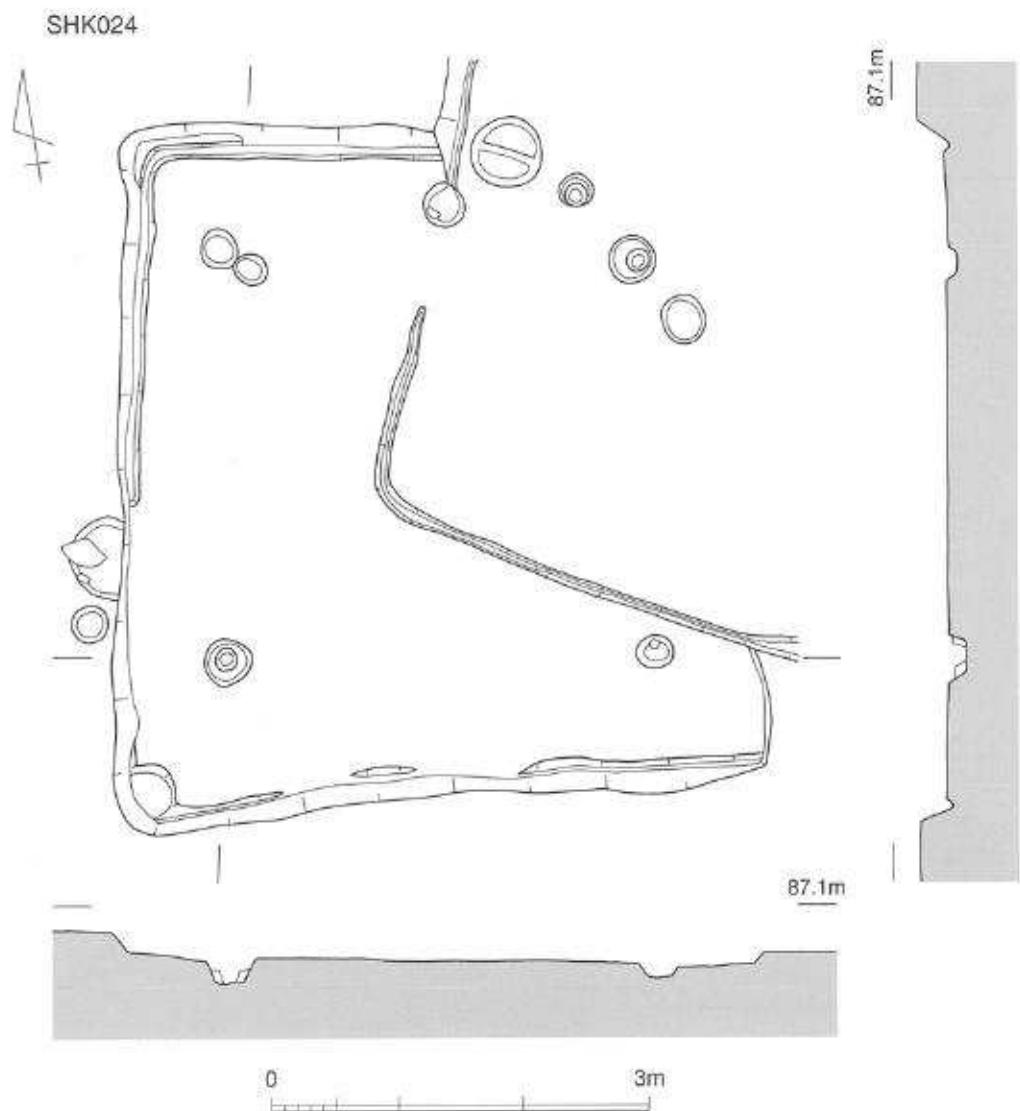
図版57 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(19) SHK022



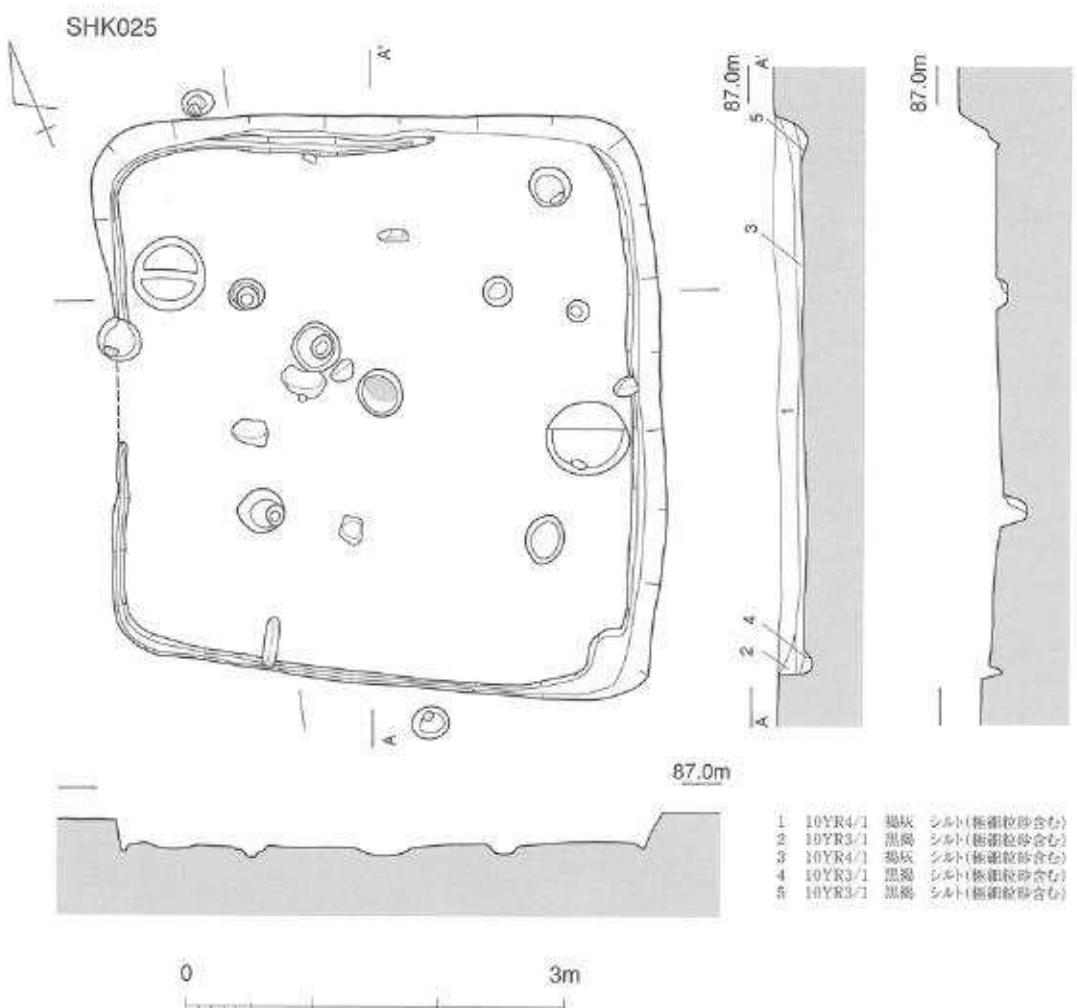
図版58 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(20) SHK023



図版59 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(21) SHK024

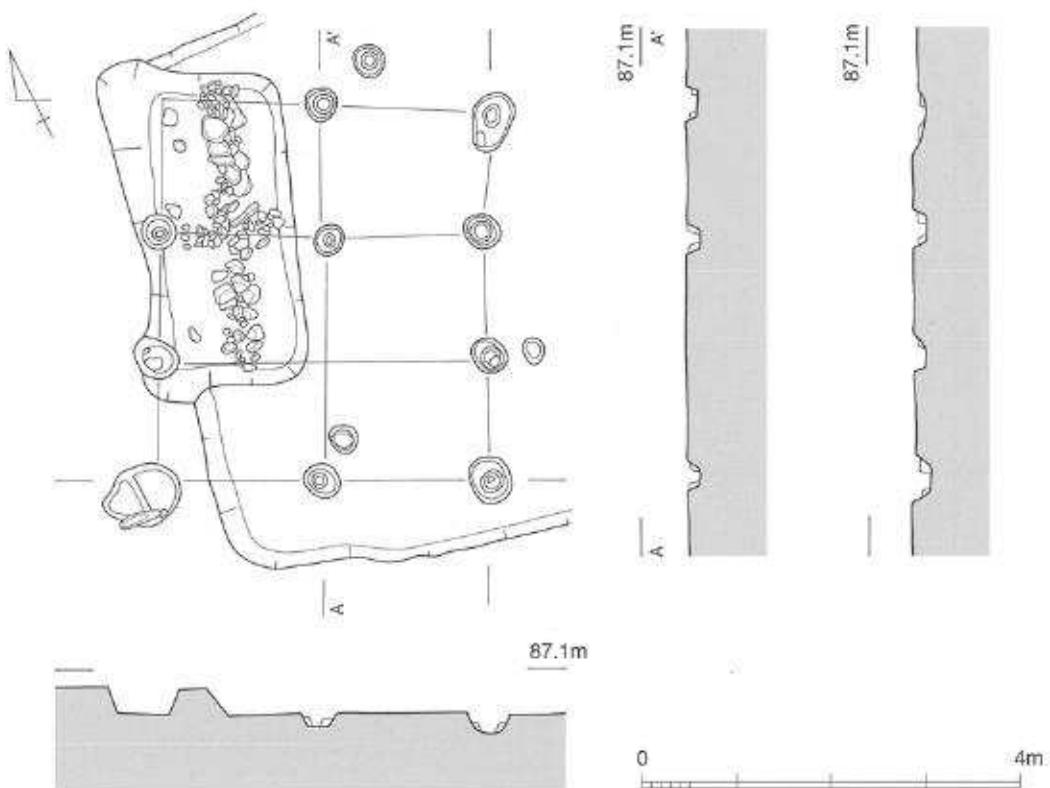


図版60 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(22) SHK025

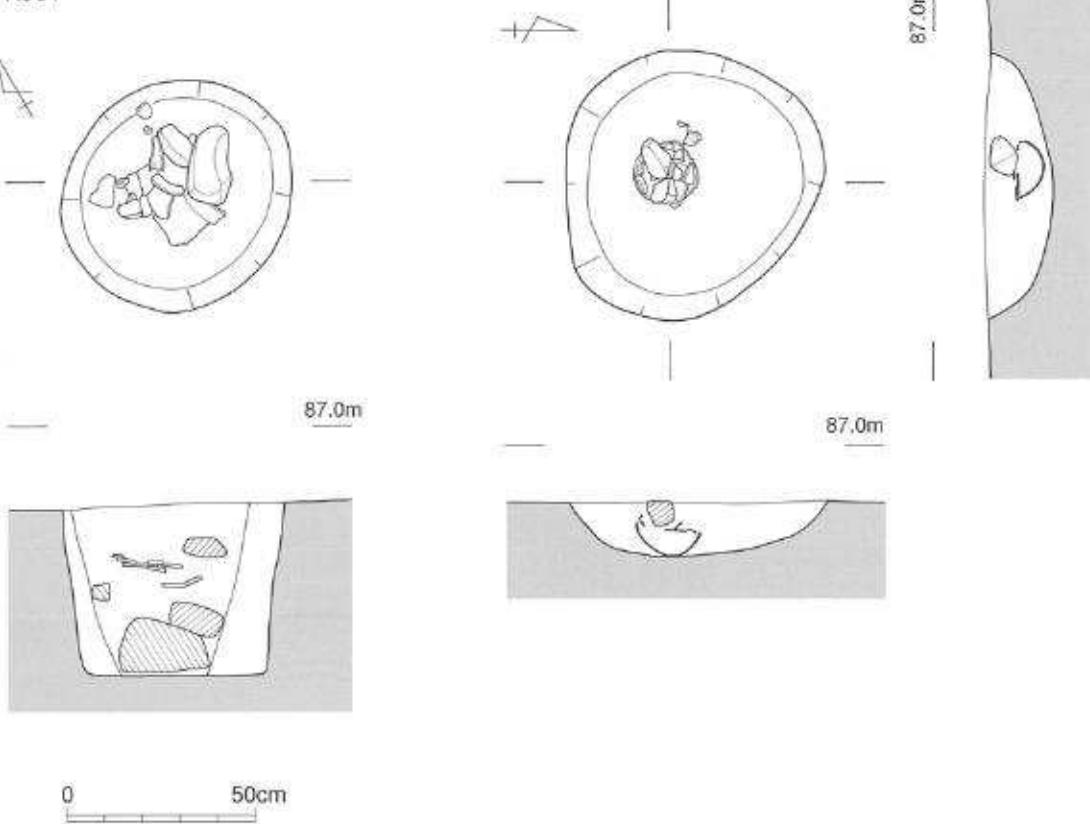


図版61 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(23) SBK001・SPK001・SKK004

SBK001

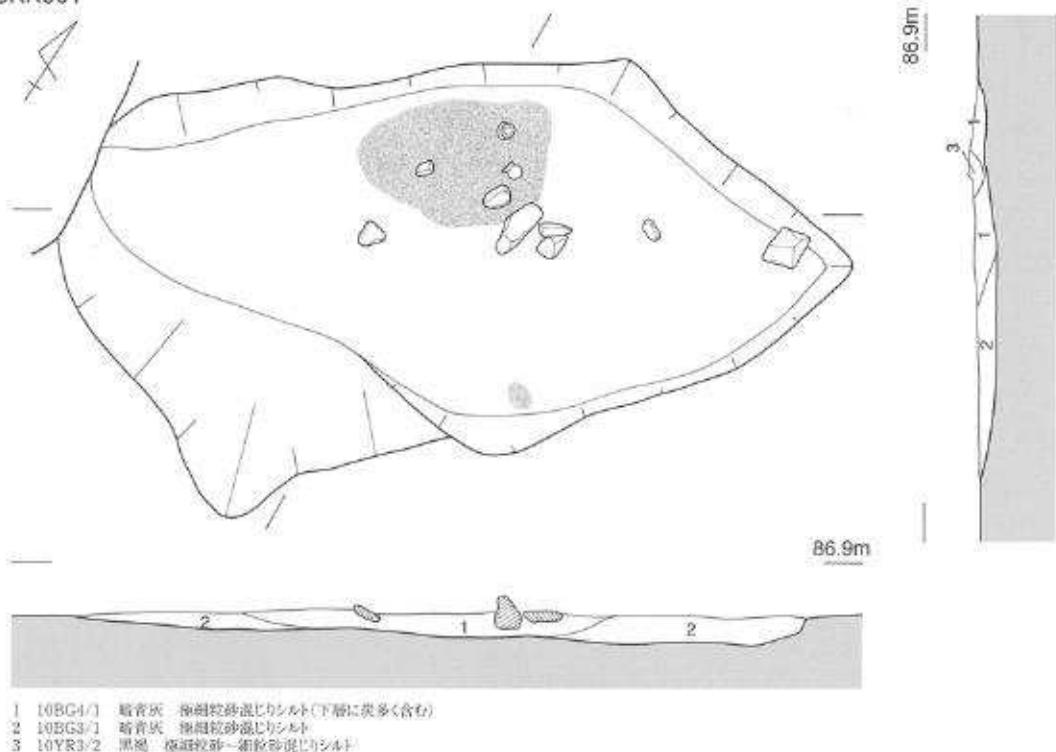


SPK001

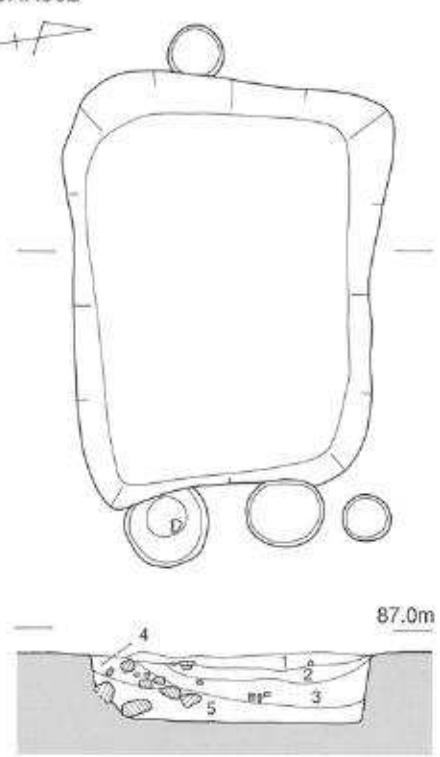


図版62 宮ヶ田I地区の遺構(24) SKK001・SKK002・SKK003

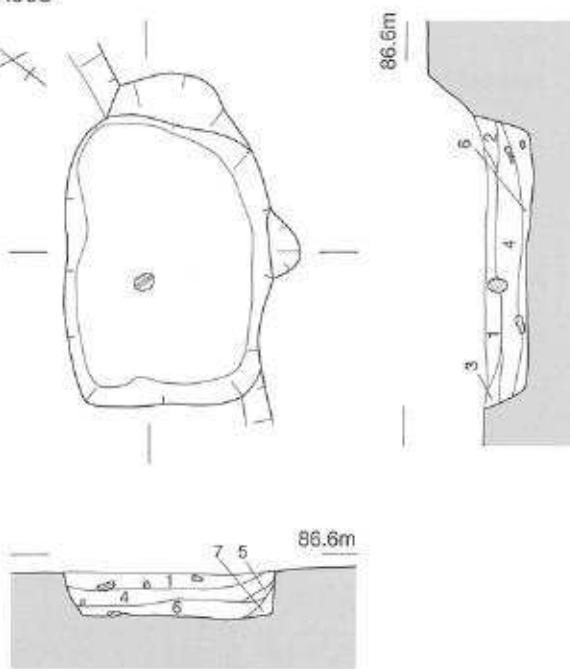
SKK001



SKK002

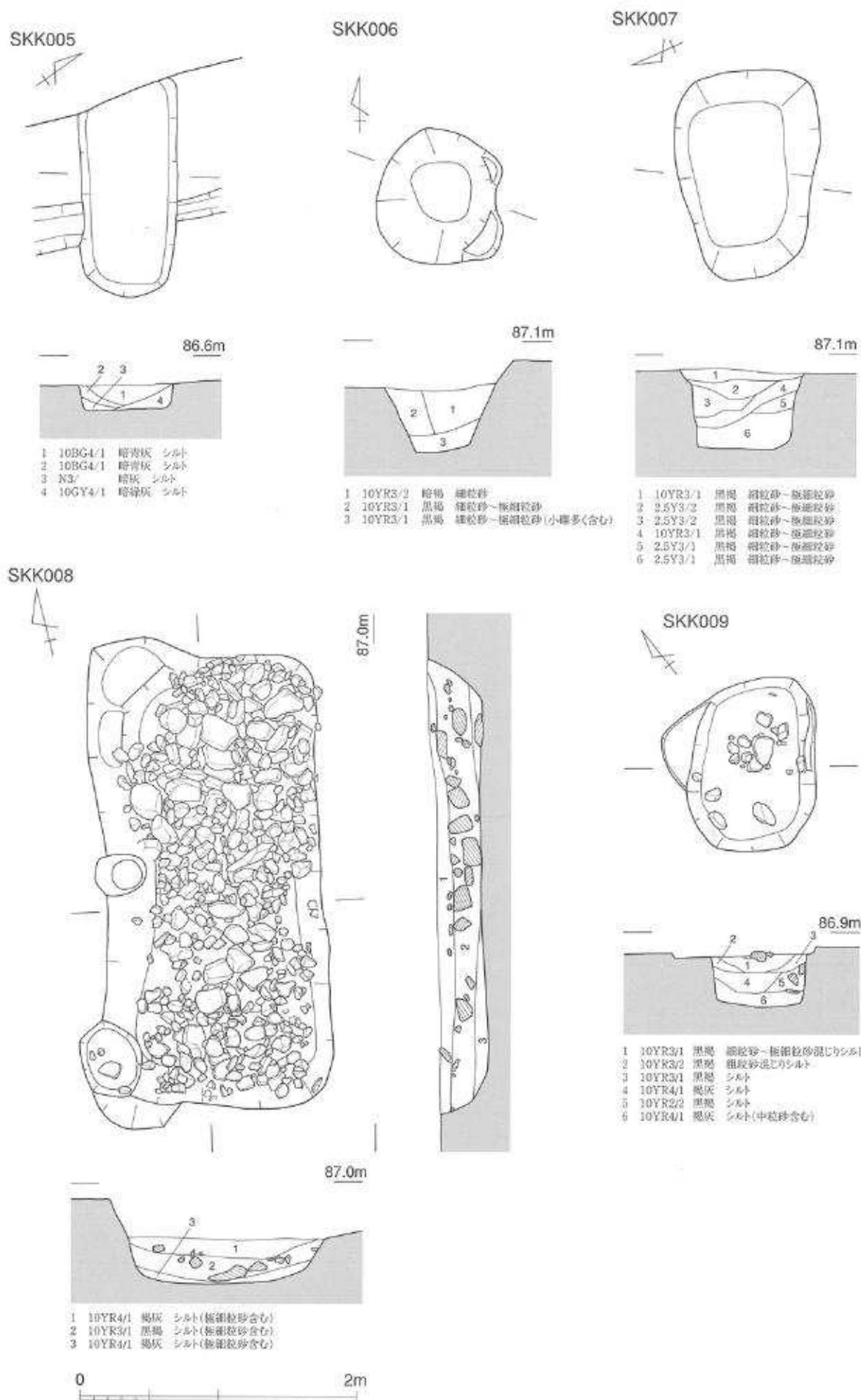


SKK003



0 2m

図版63 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(25) SKK005・SKK006・SKK007・SKK008・SKK009

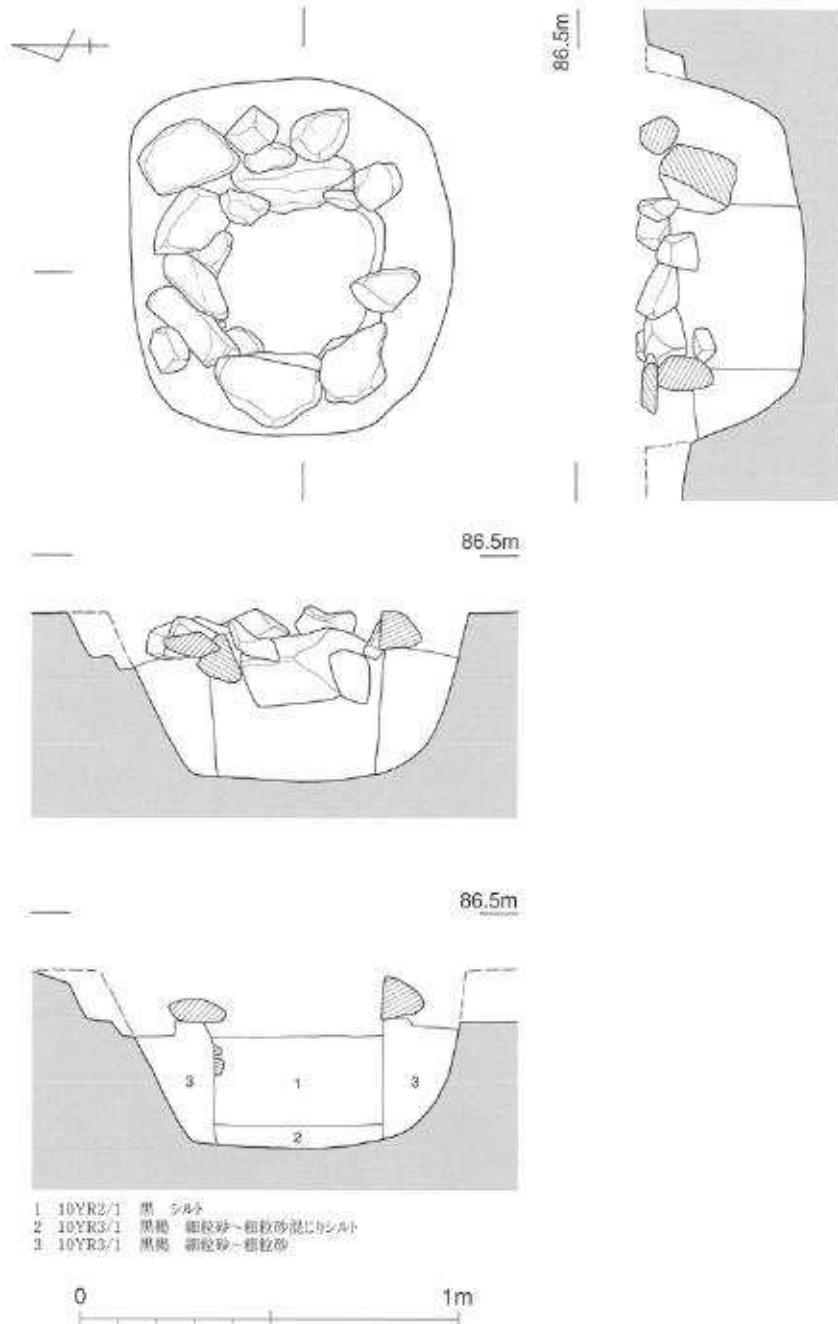


図版64 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(26) SXK001

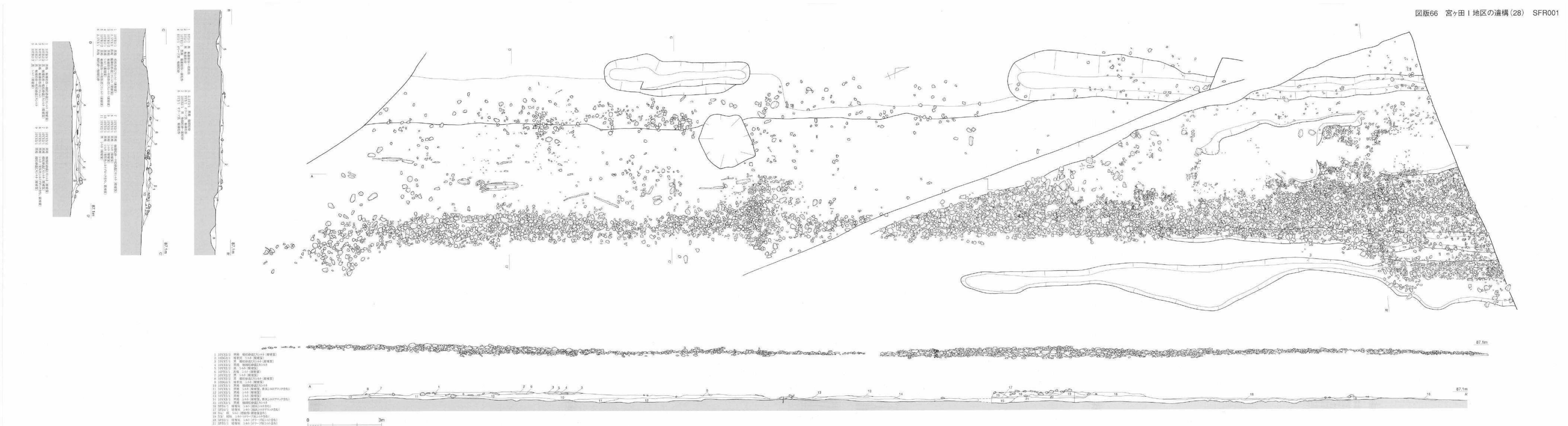


図版65 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(27) SER001

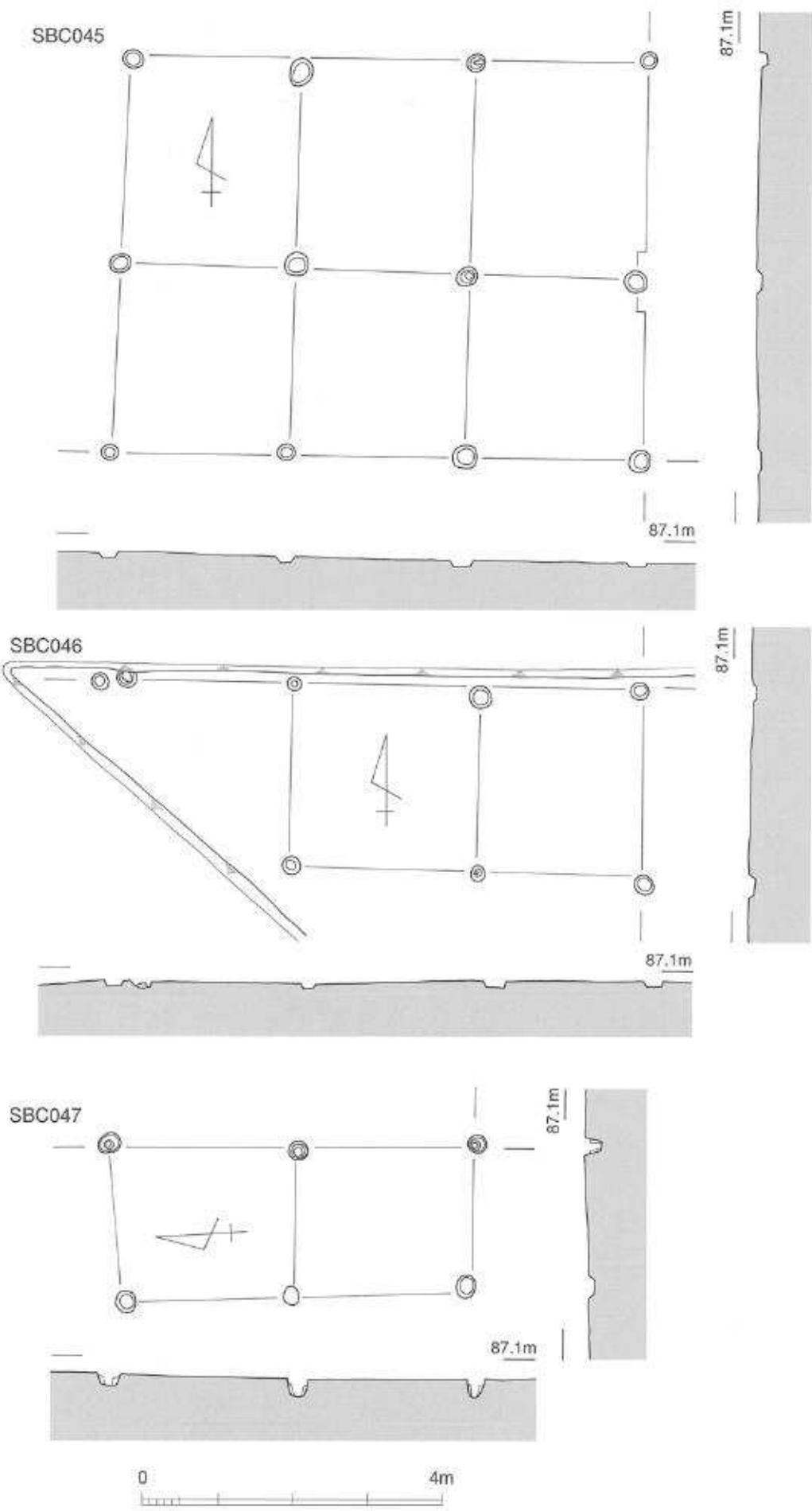
SER001



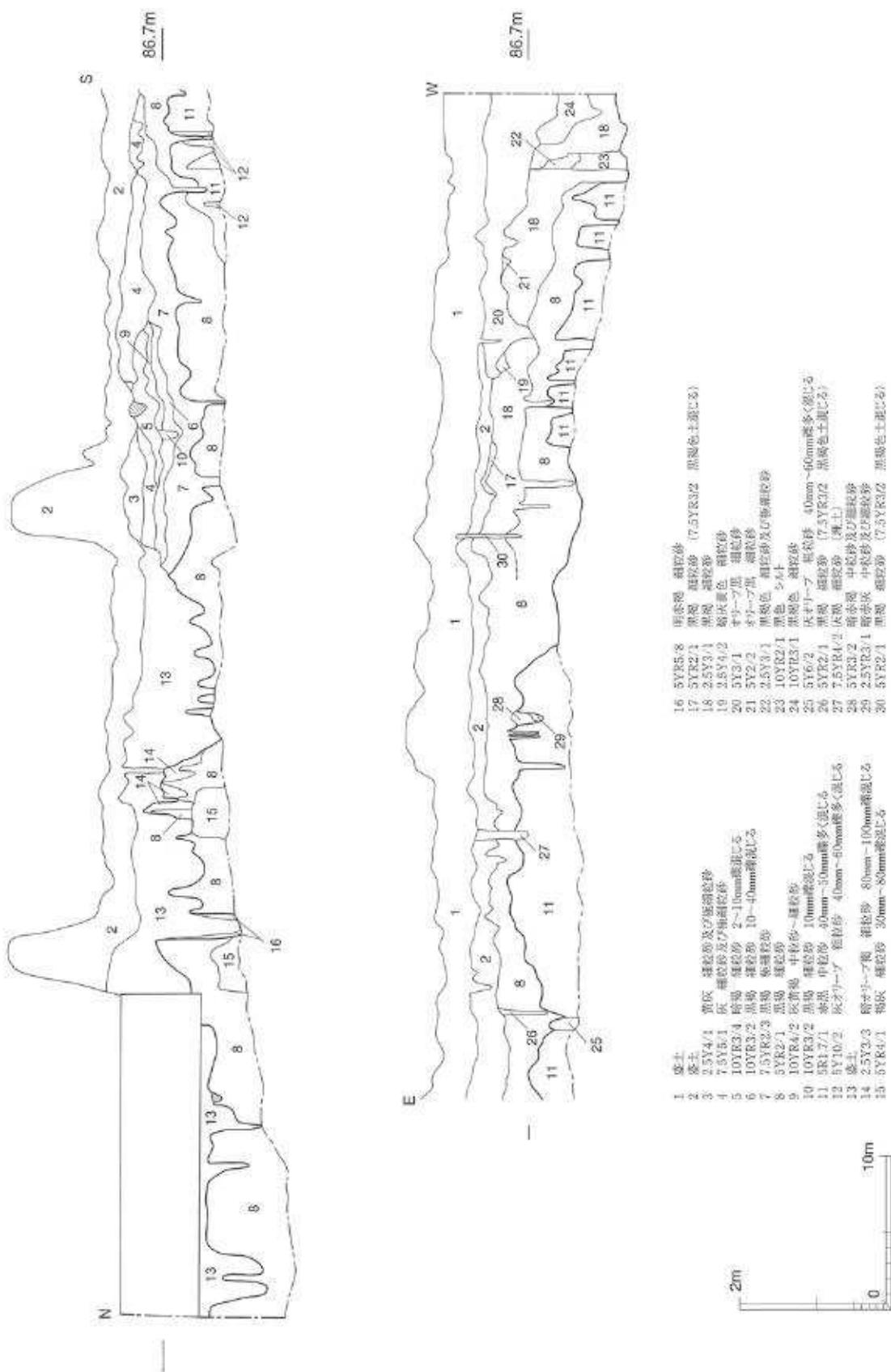
図版66 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(28) SFR001



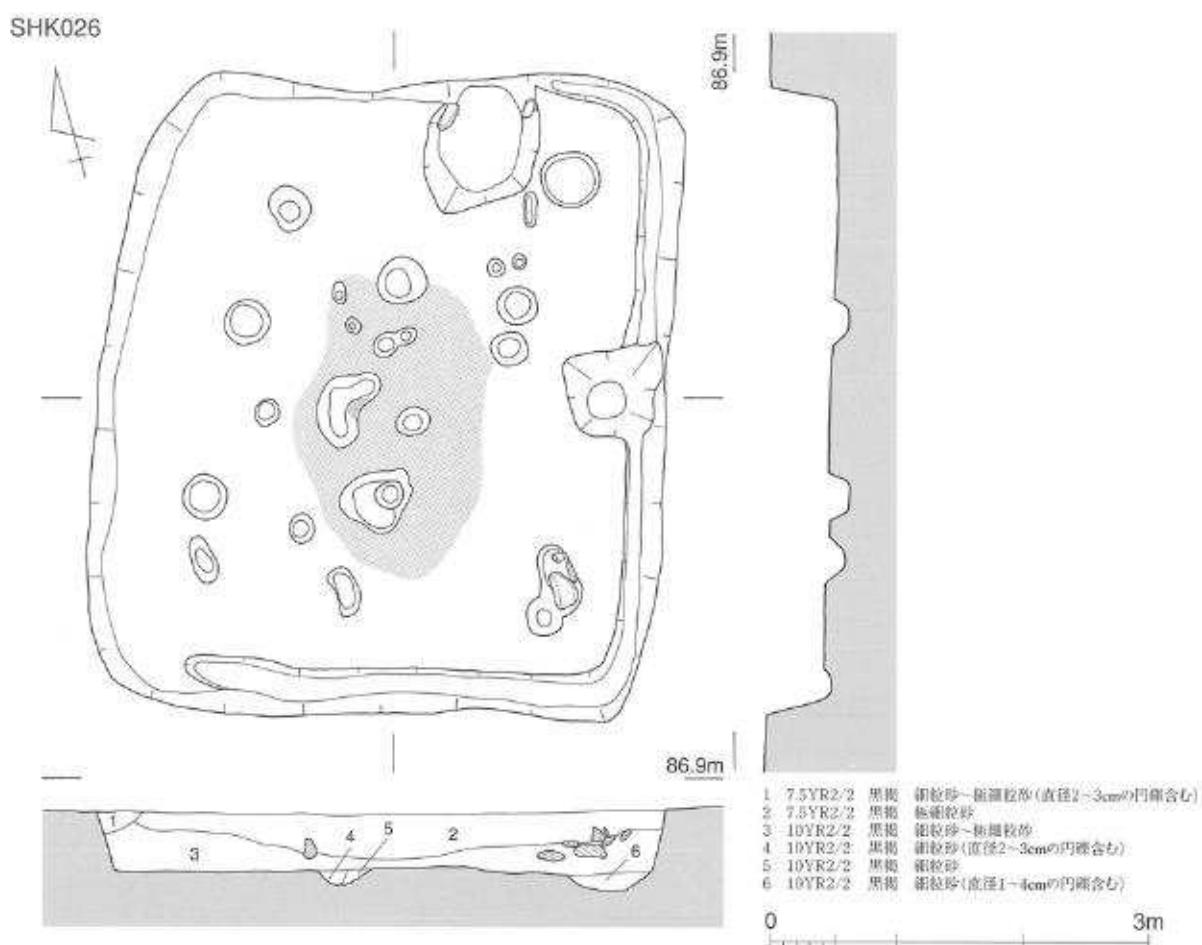
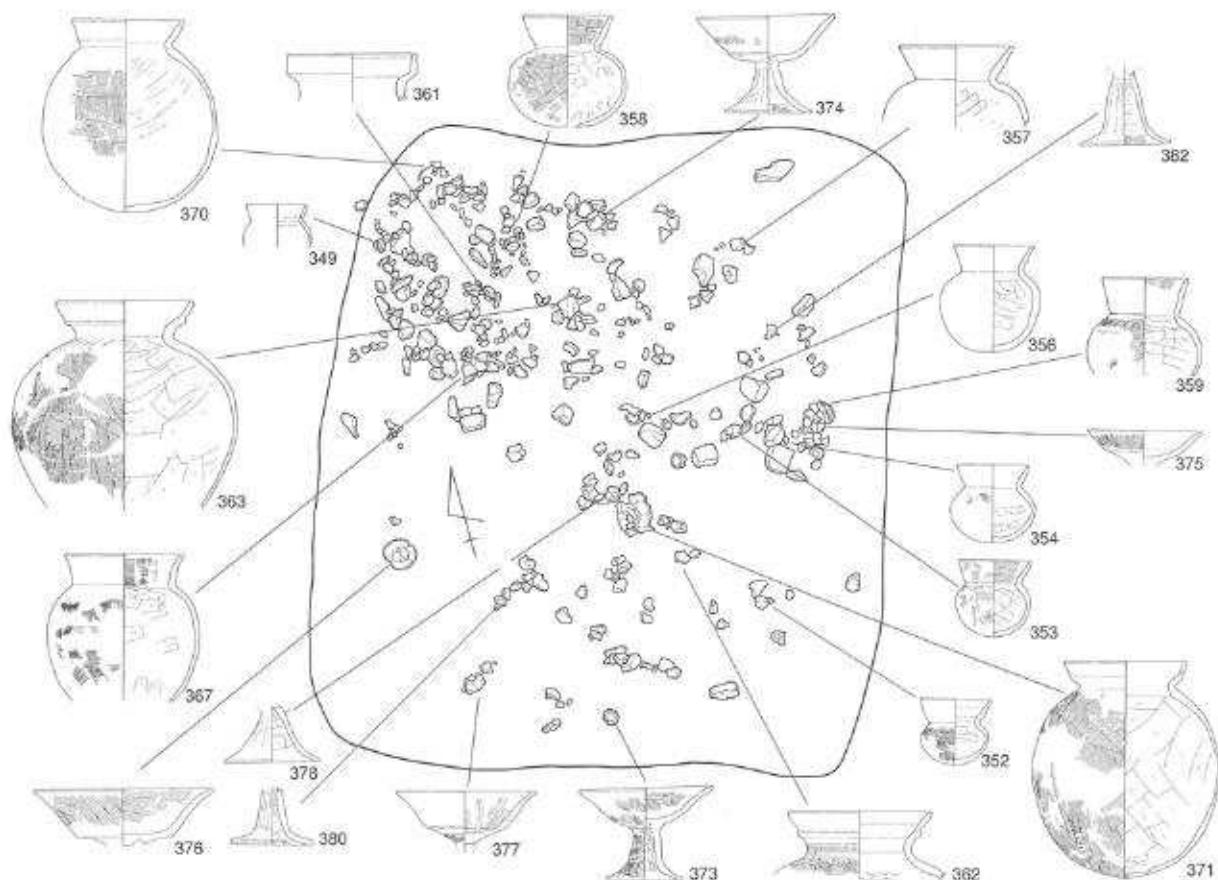
図版67 宮ヶ田Ⅰ地区の遺構(29) SBC045・SBC046・SBC047



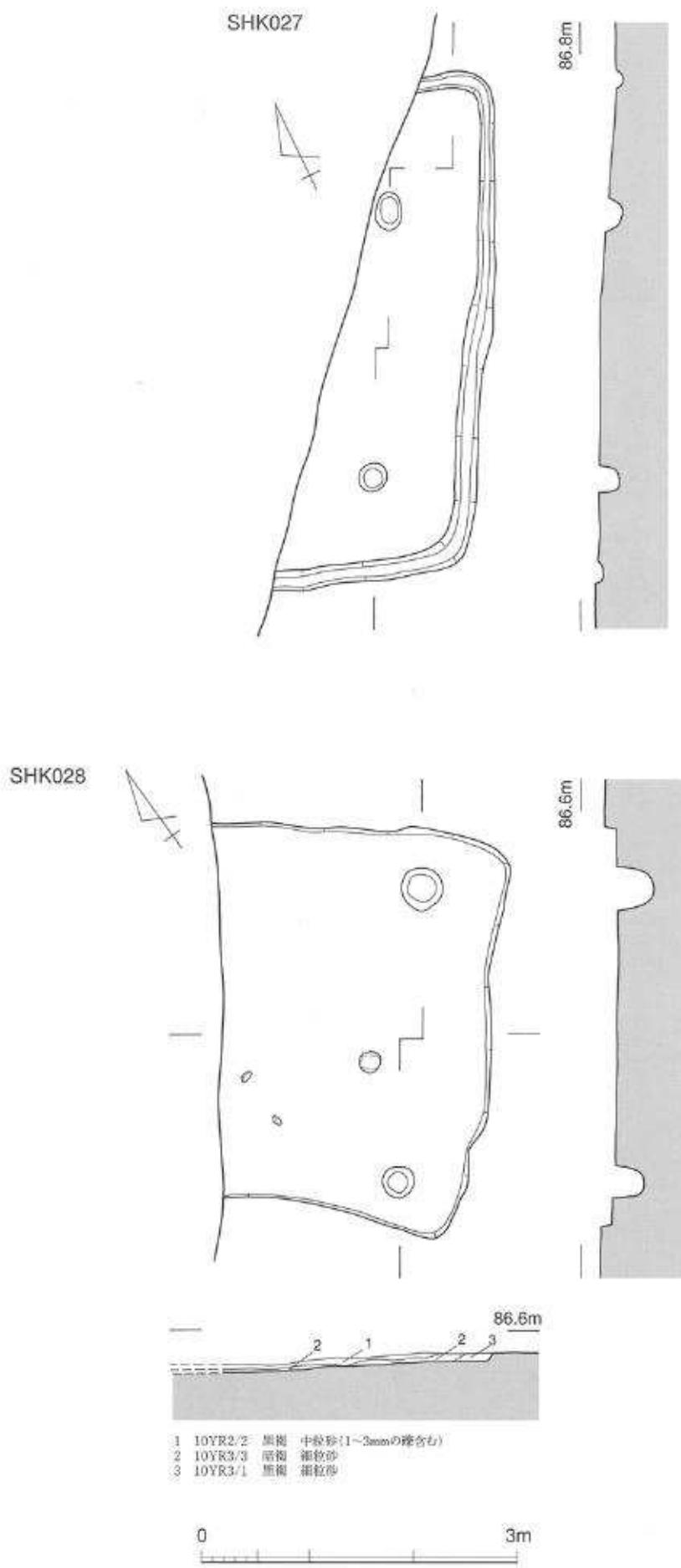
図版68 宮ヶ田Ⅱ地区の遺構(1) 土層



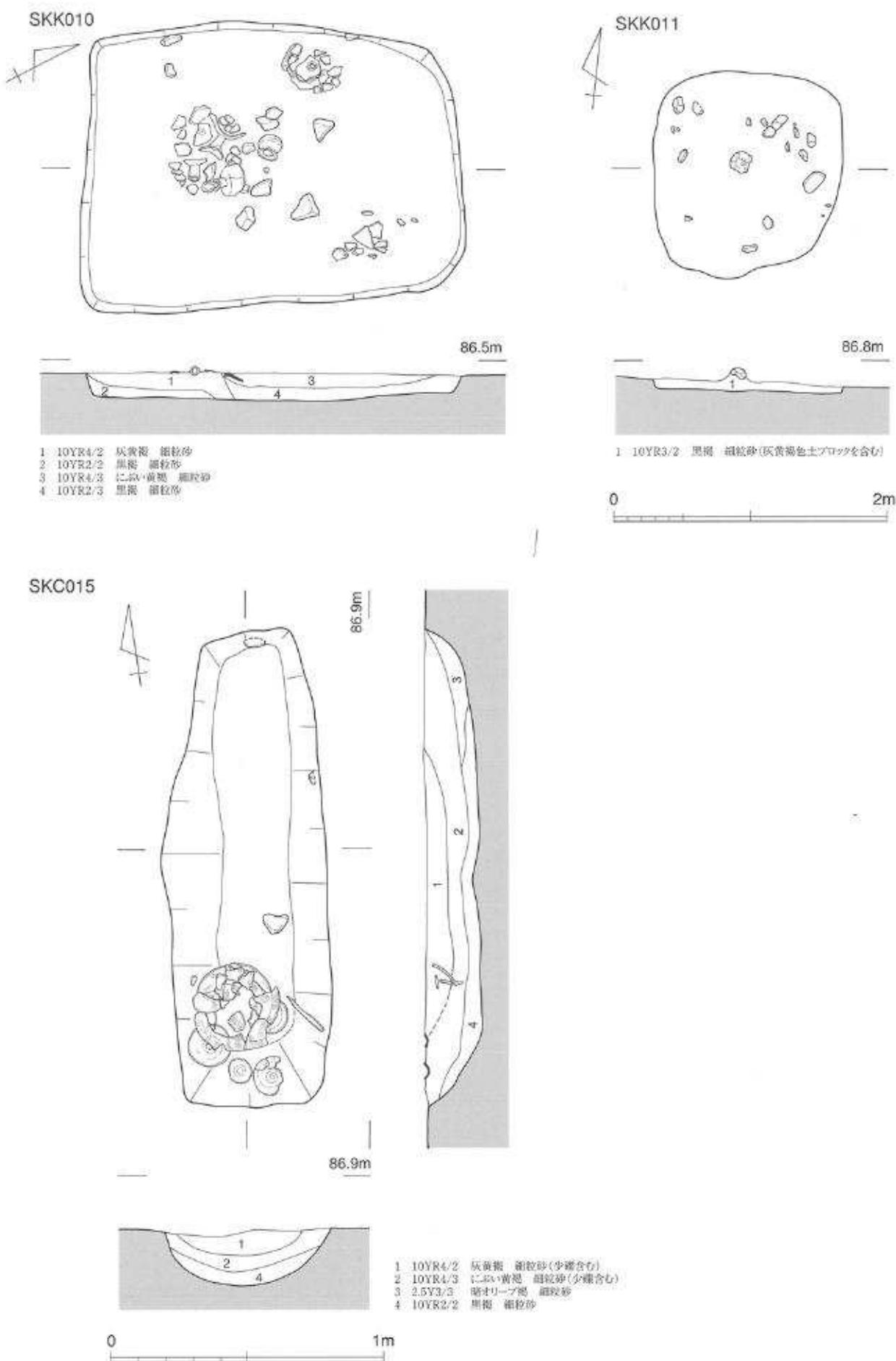
図版69 宮ヶ田II地区の遺構(2) SHK026



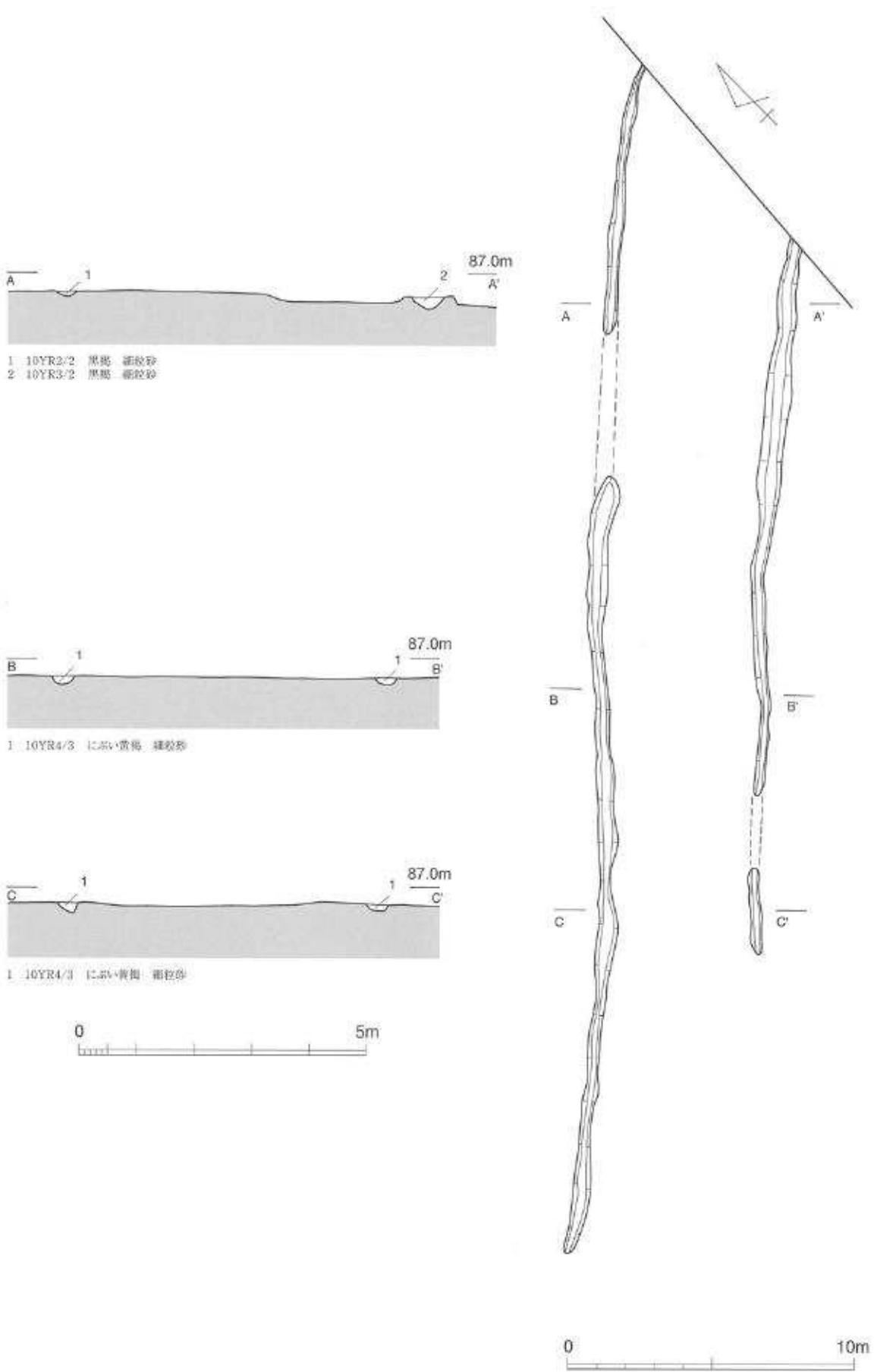
図版70 宮ヶ田II地区の遺構(3) SHK027・SHK028



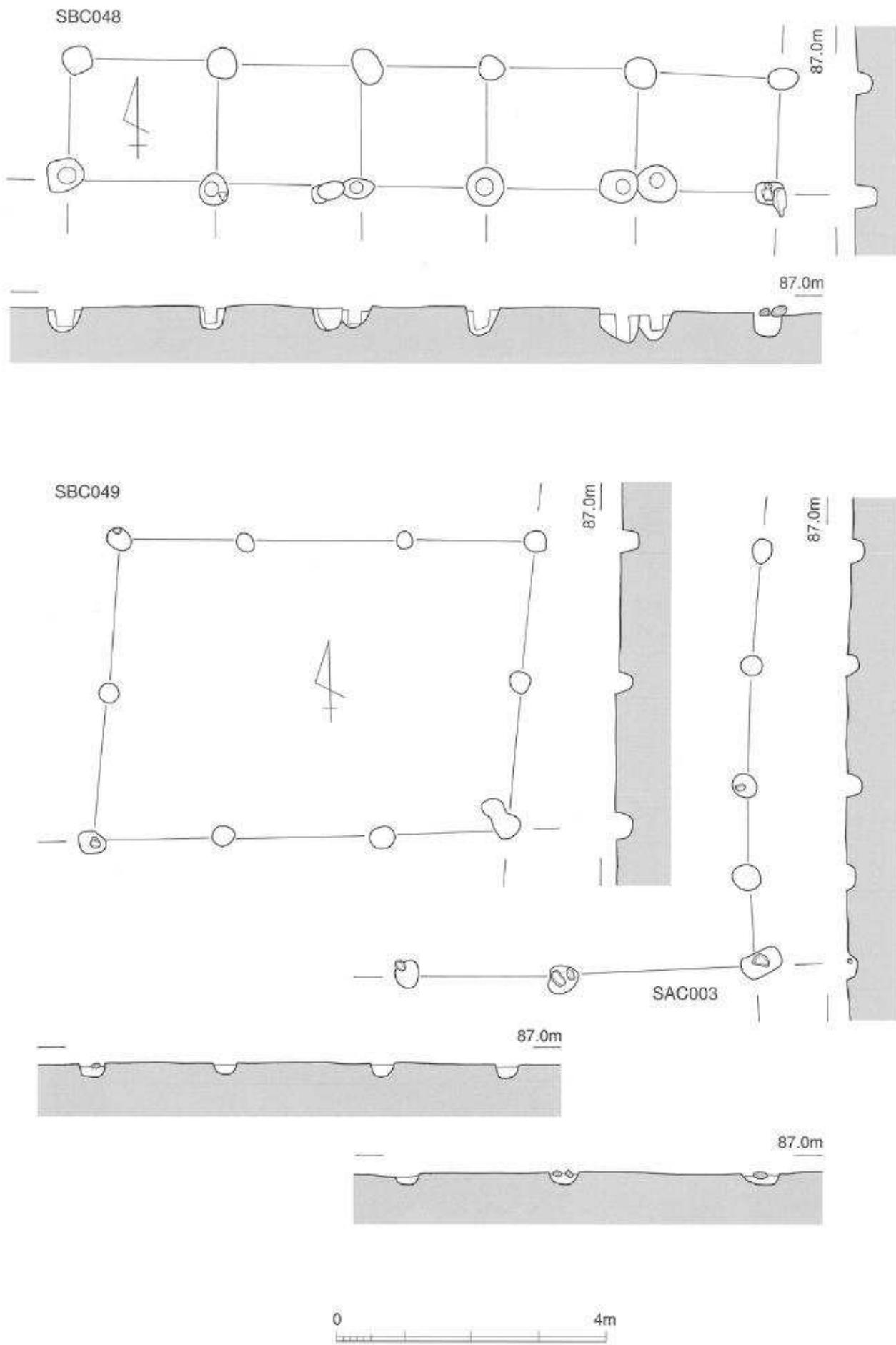
図版71 宮ヶ田II地区の遺構(4) SKK010・SKK011・SKC015



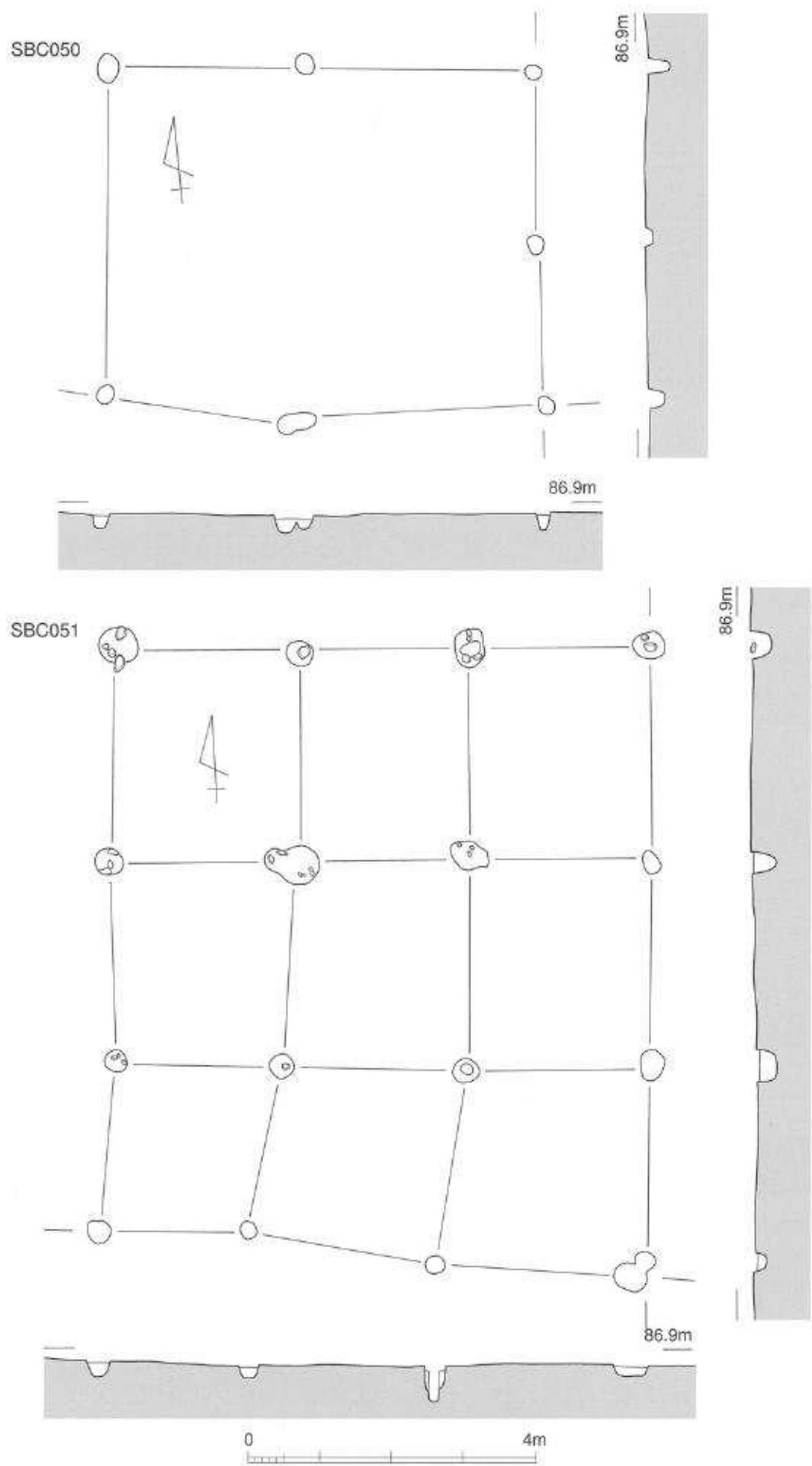
図版72 宮ヶ田II地区の遺構(5) SFR002



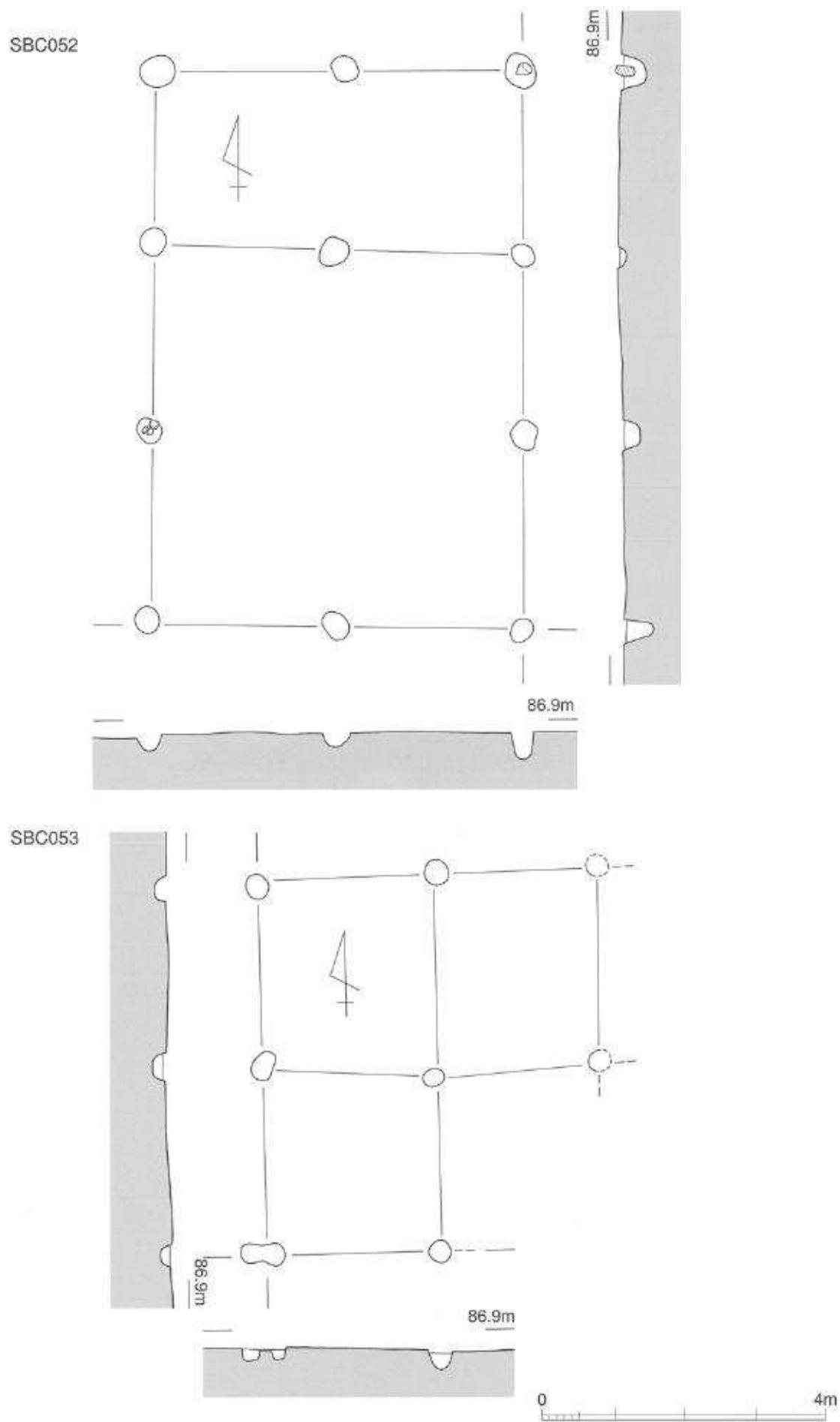
図版73 宮ヶ田II地区の遺構(6) SBC048・SBC049・SAC003



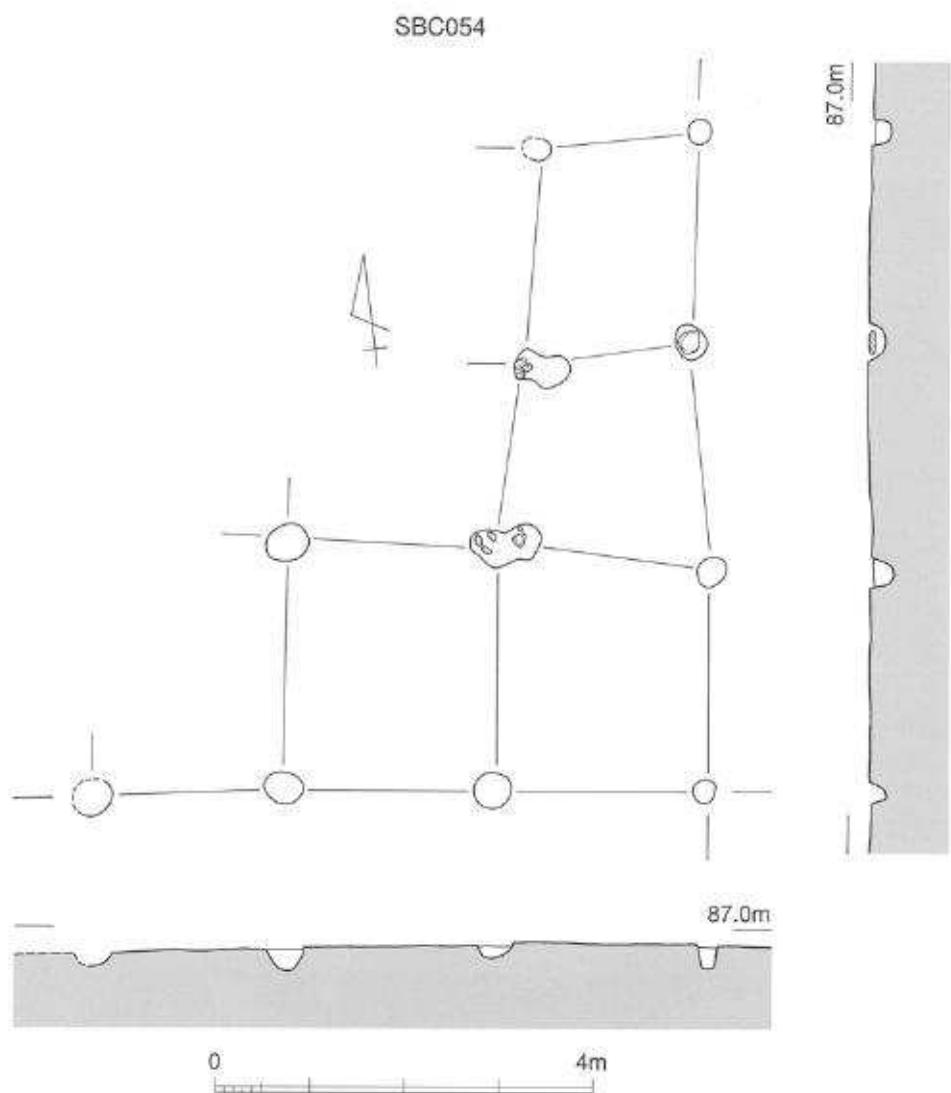
図版74 宮ヶ田II地区の遺構(7) SBC050・SBC051



図版75 宮ヶ田II地区の遺構(8) SBC052・SBC053

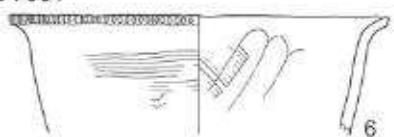


図版76 宮ヶ田II地区の遺構(9) SBC054

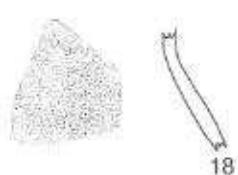
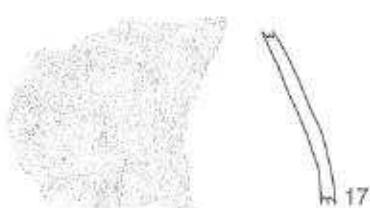
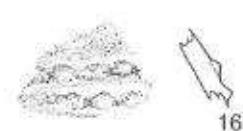
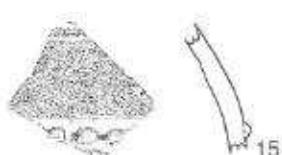
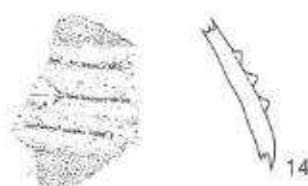
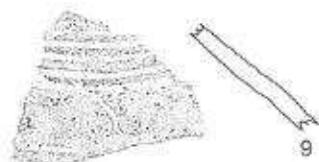
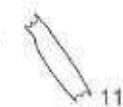
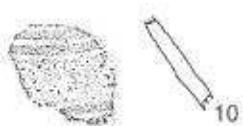


図版77 弥生時代の土器(1) 伊豫田地区

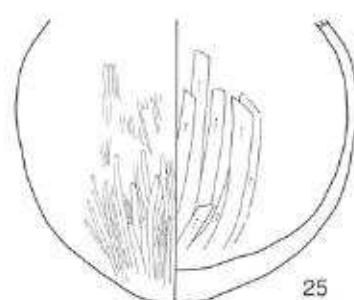
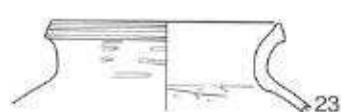
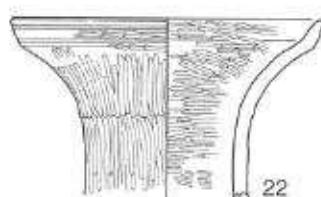
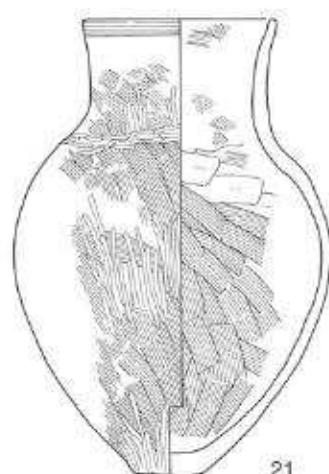
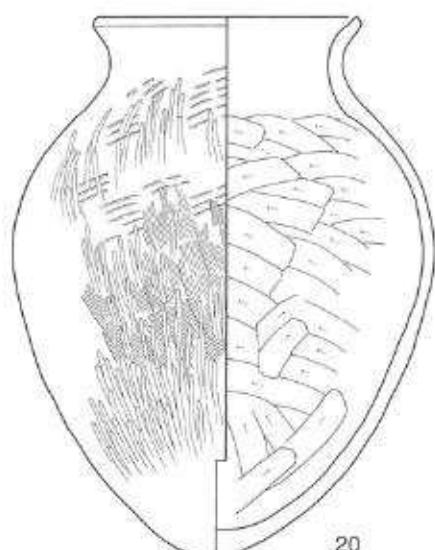
SDY001



0 20cm

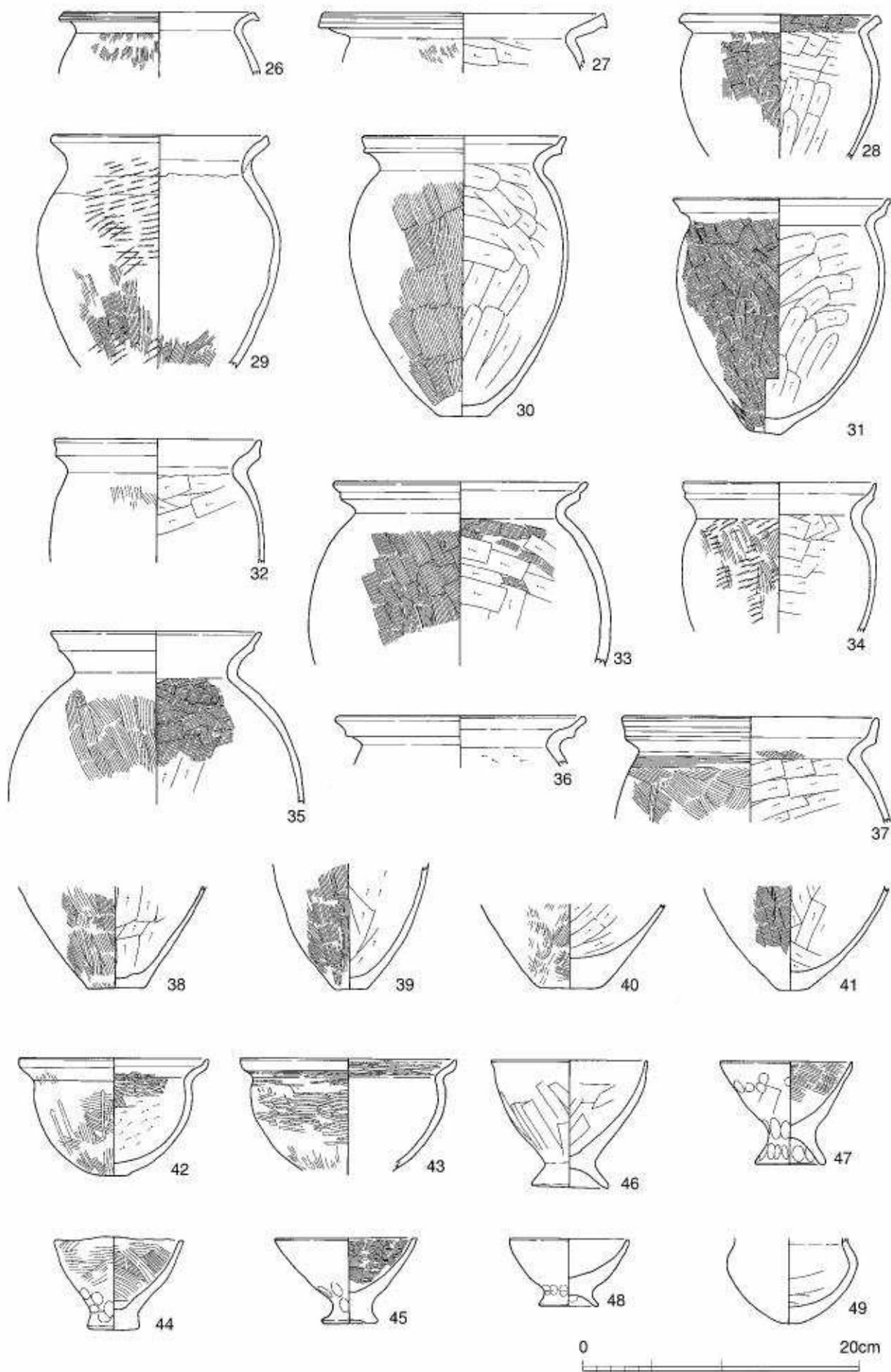


0 10cm

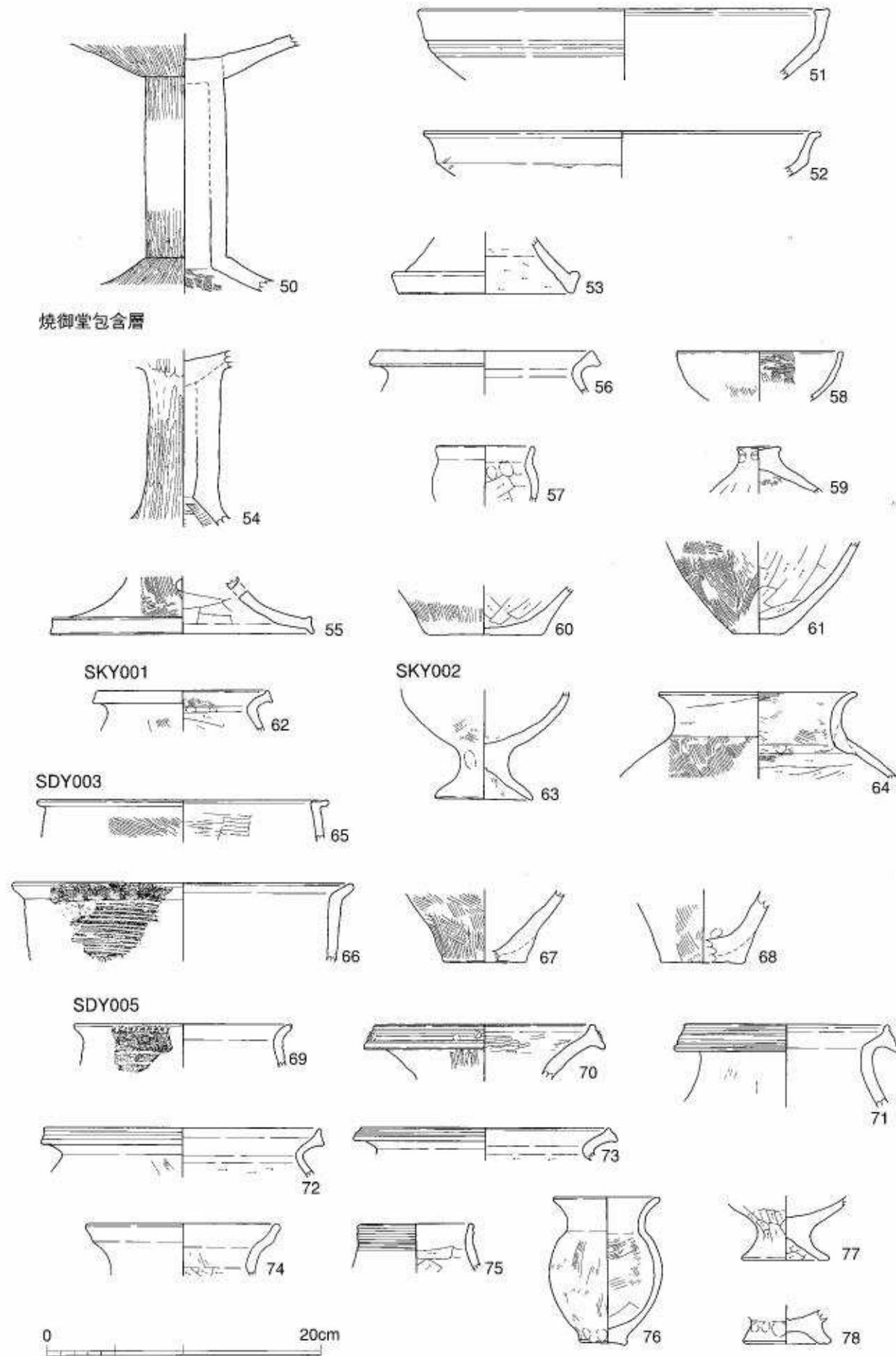


0 20cm

図版78 弥生時代の土器(2) 伊豫田地区

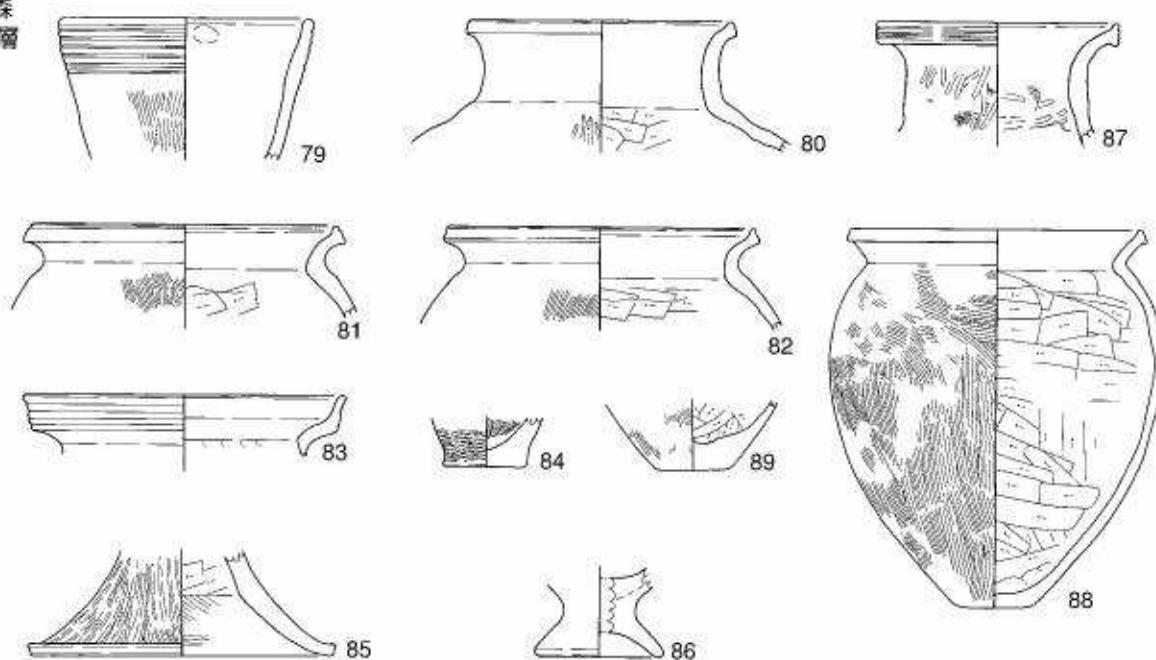


図版79 弥生時代の土器(3) 伊豫田地区・焼御堂地区・岡ノ森地区

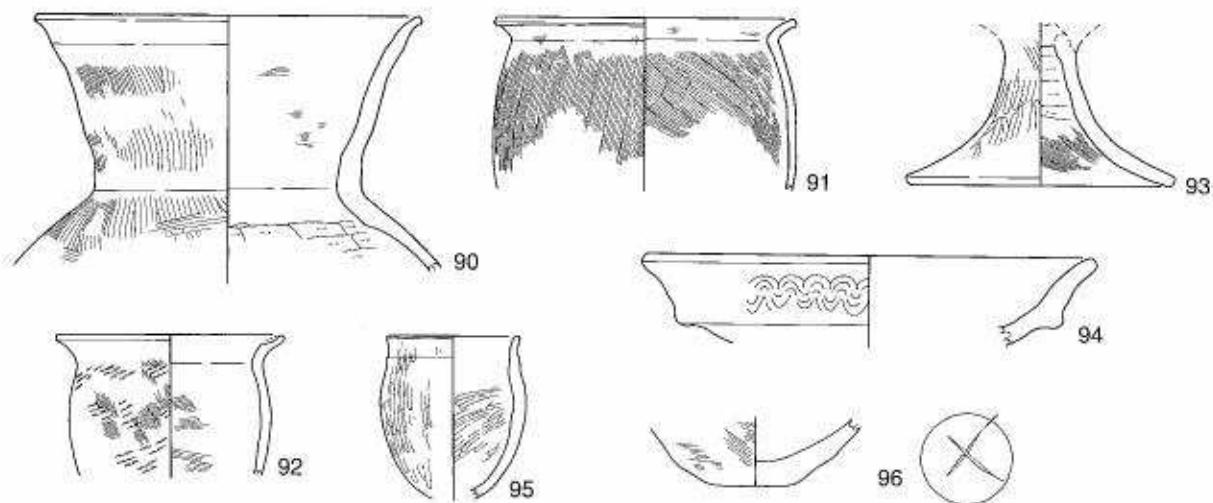


図版80 弥生時代の土器(4) 岡ノ森地区・山内南地区・宮ヶ田Ⅰ地区

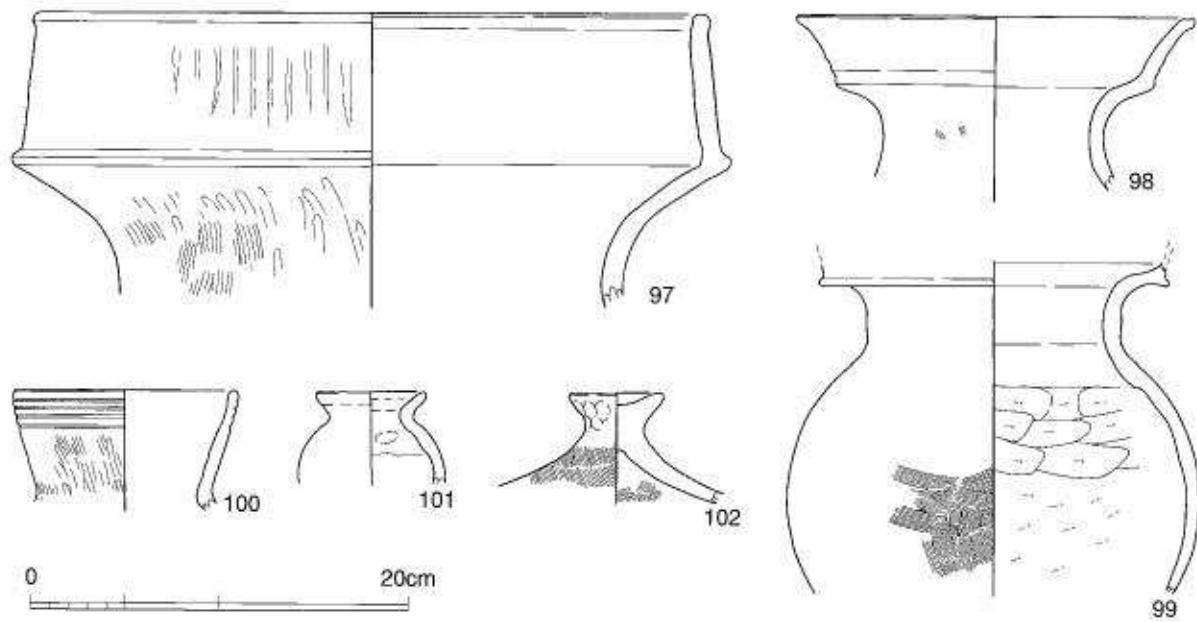
岡ノ森
包含層



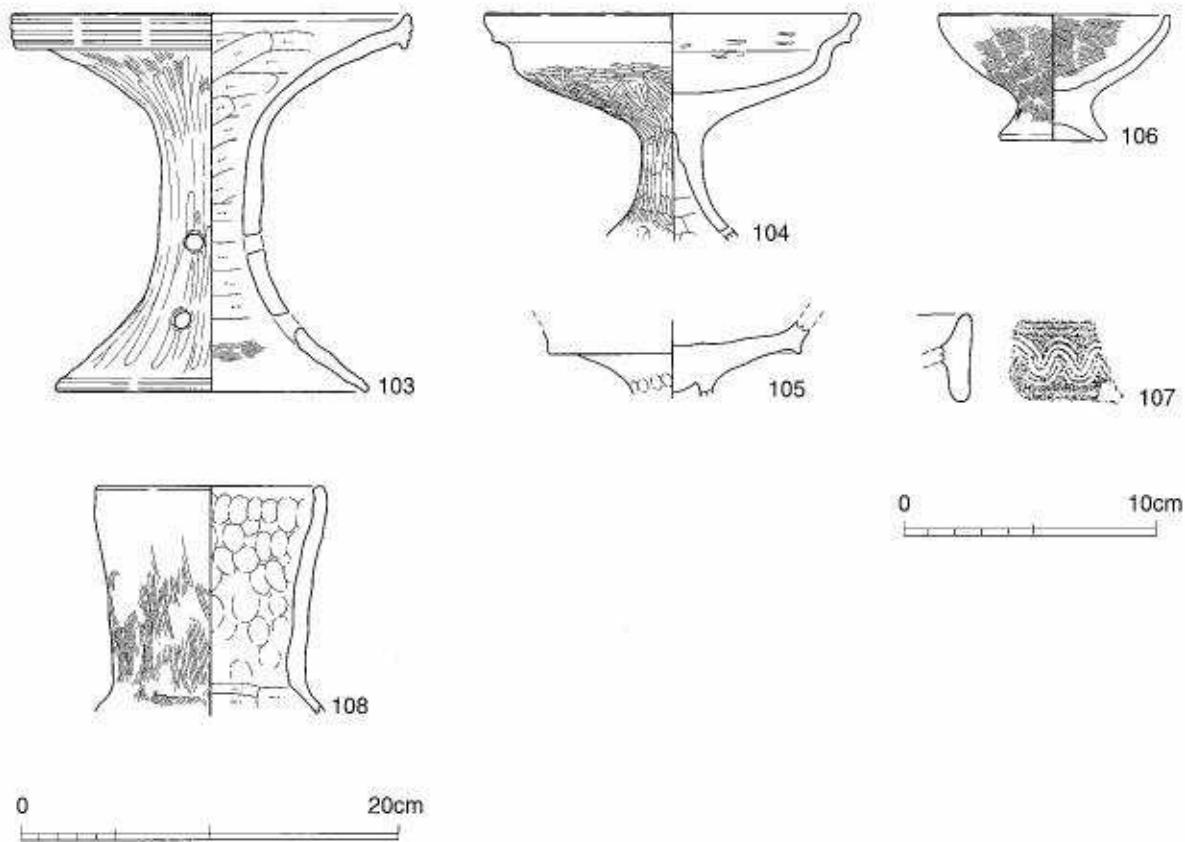
山内南 包含層



宮ヶ田Ⅰ 包含層

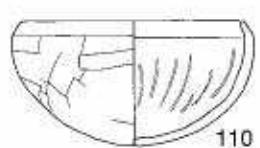


図版81 弥生時代の土器(5) 宮ヶ田Ⅰ地区・確認調査

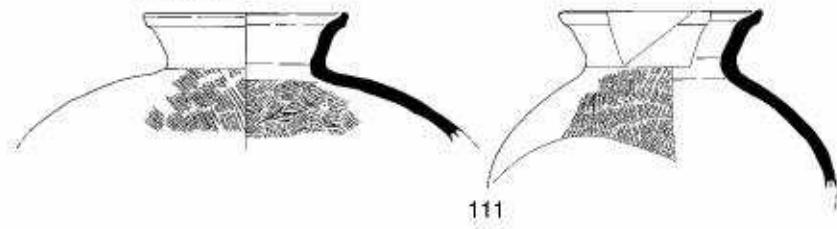


図版82 古墳時代の土器(1) 焼御堂地区・岡ノ森地区・山内南地区

焼御堂 包含層

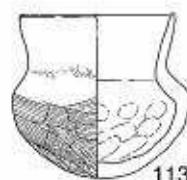


SDK001

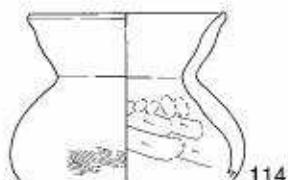


111

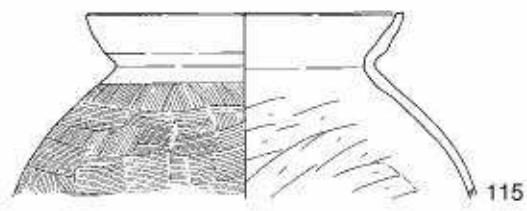
山内南 包含層



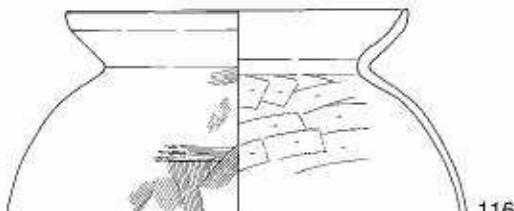
113



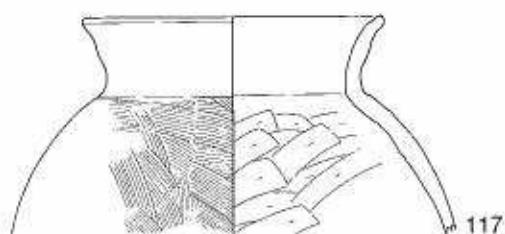
114



115



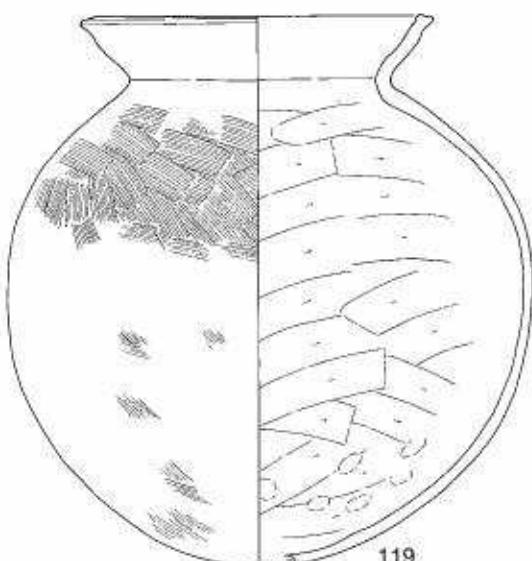
116



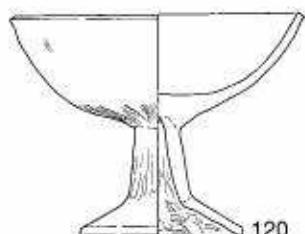
117



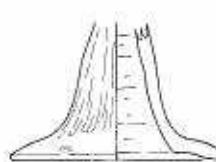
118



119



120



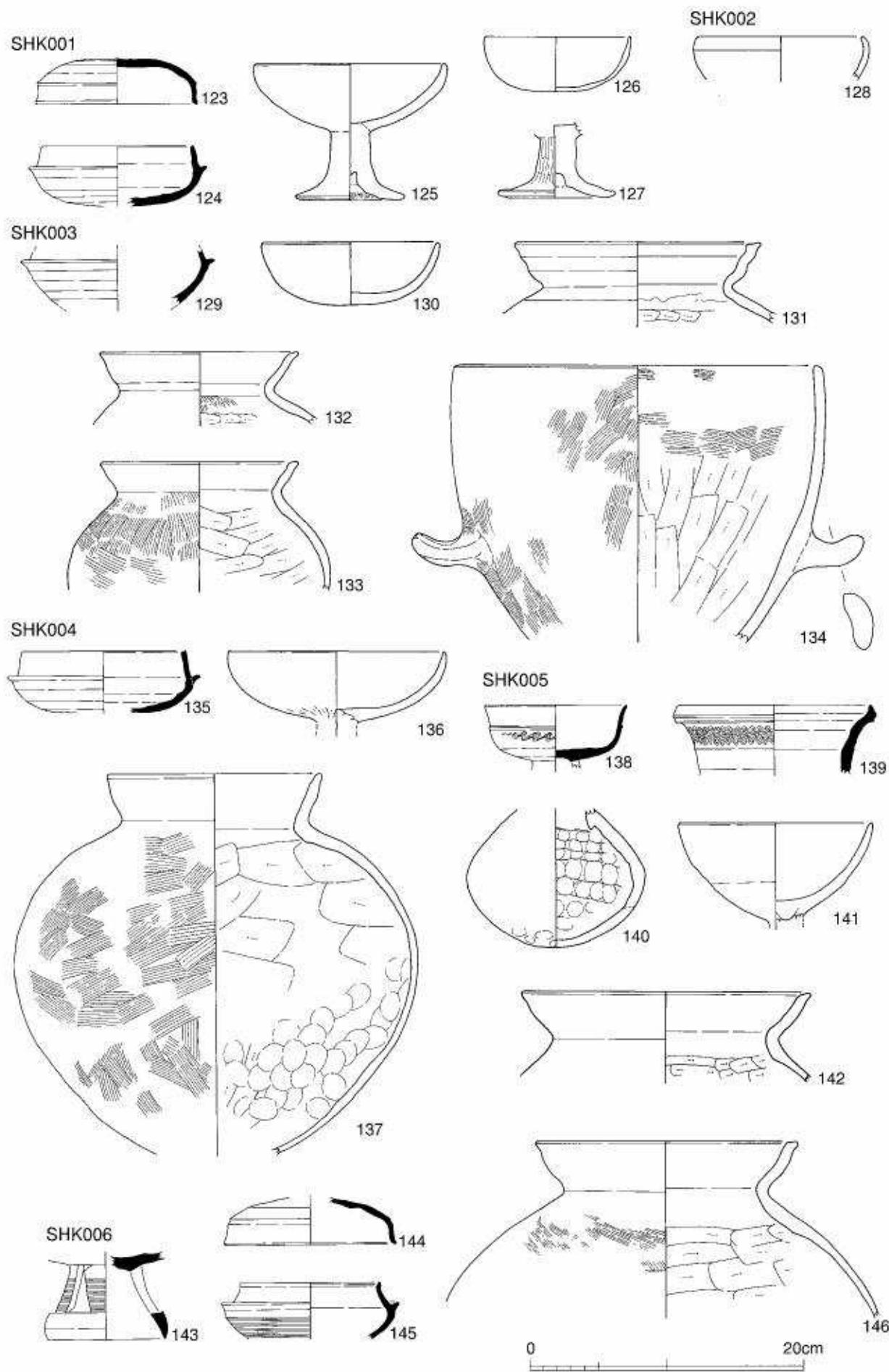
121



122

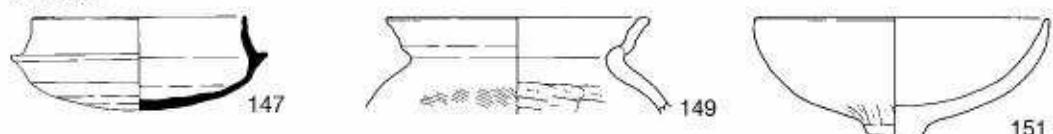
0 20cm

図版83 古墳時代の土器(2) 宮ヶ田I地区



図版84 古墳時代の土器(3) 宮ヶ田I地区

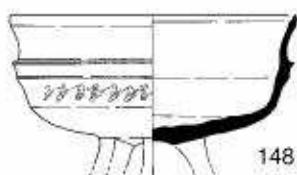
SHK008



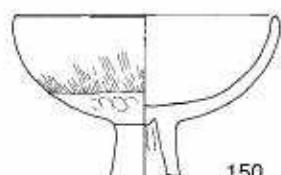
147

149

151



148



150

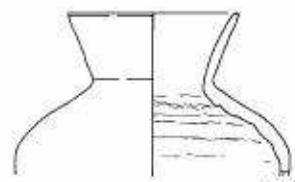
SHK009



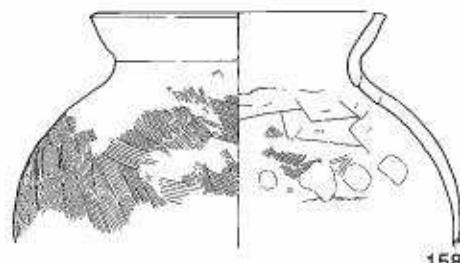
152



153



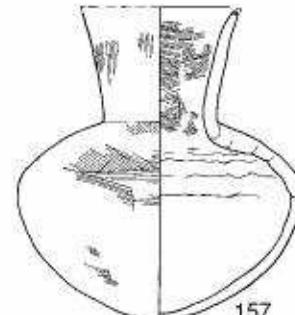
156



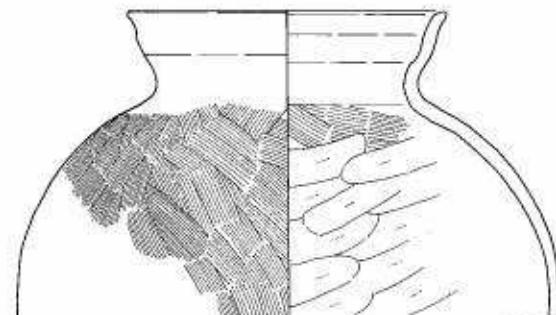
158



154



157



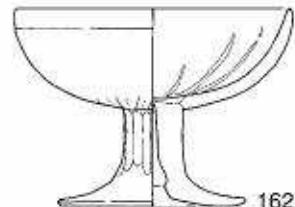
159



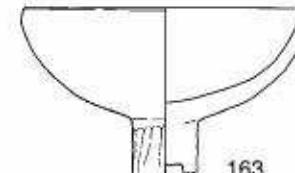
160



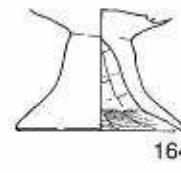
161



162

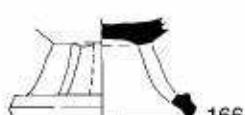


163



164

SHK010



166

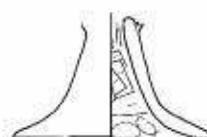
SHK011



168



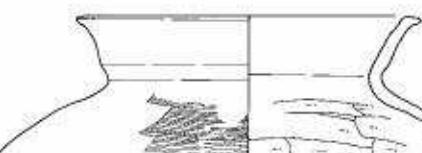
169



165



167



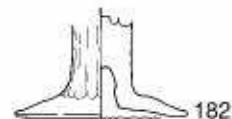
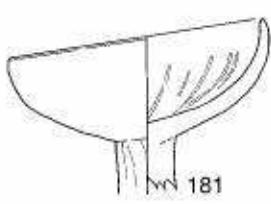
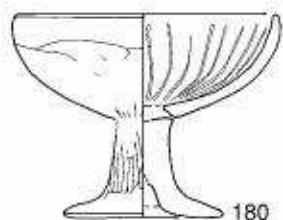
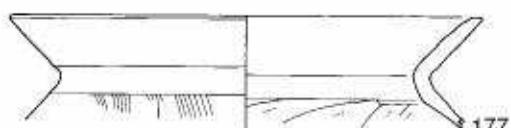
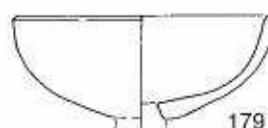
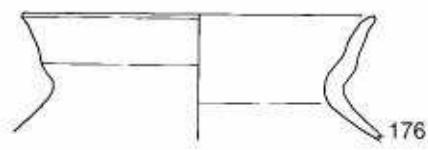
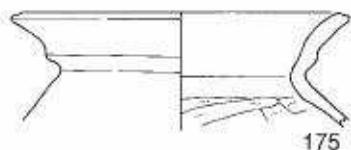
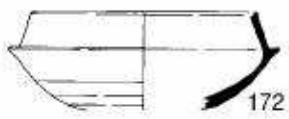
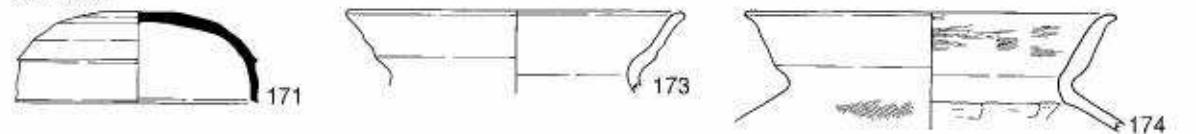
170

0

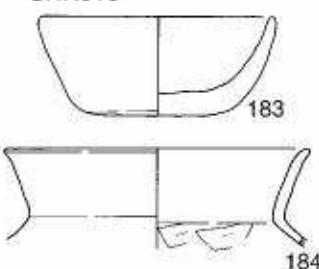
20cm

図版85 古墳時代の土器(4) 宮ヶ田I地区

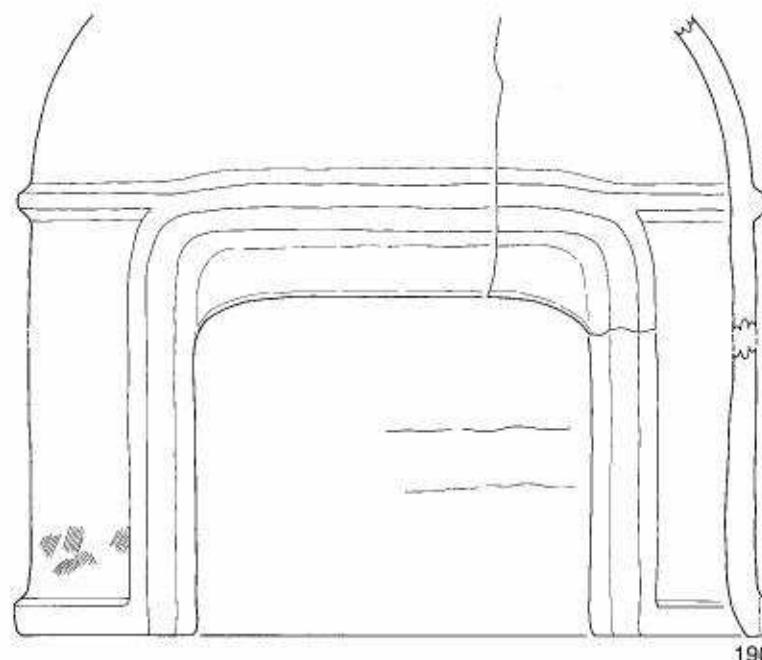
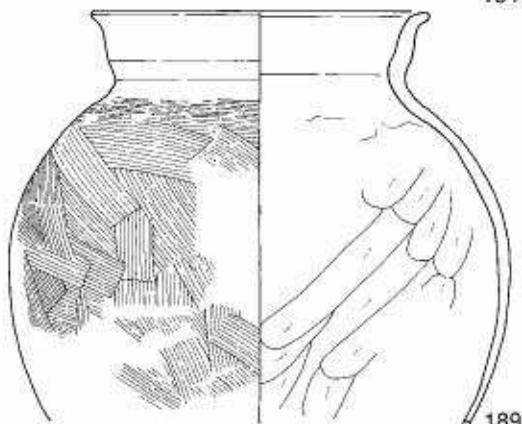
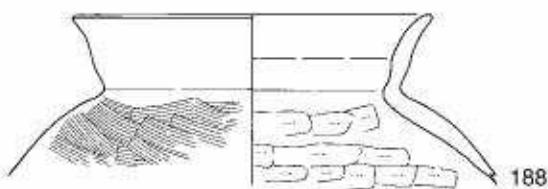
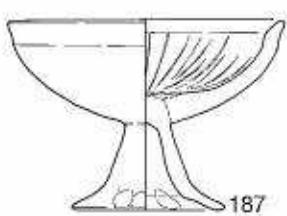
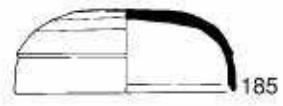
SHK012



SHK013



SHK014



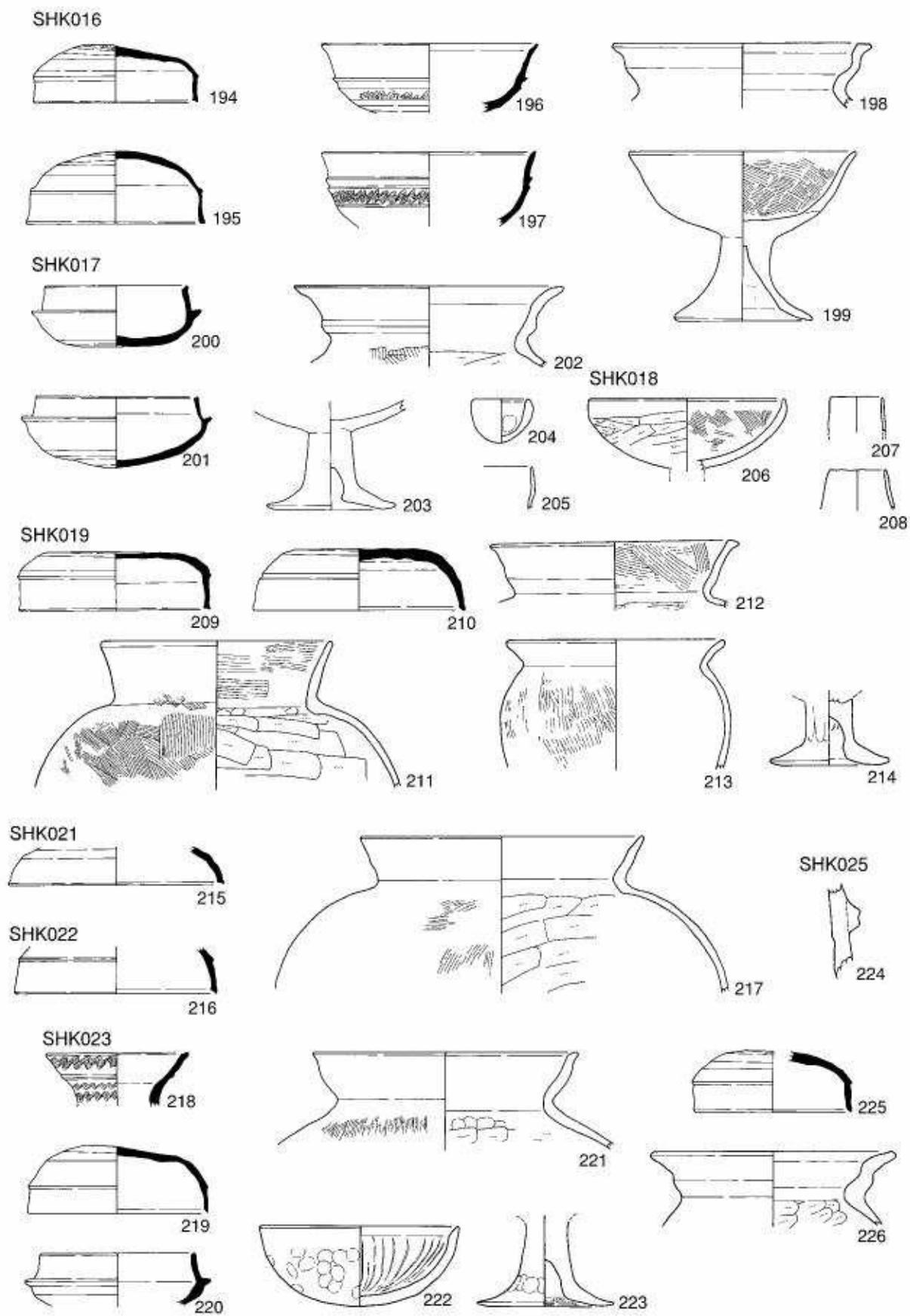
SHK015



0

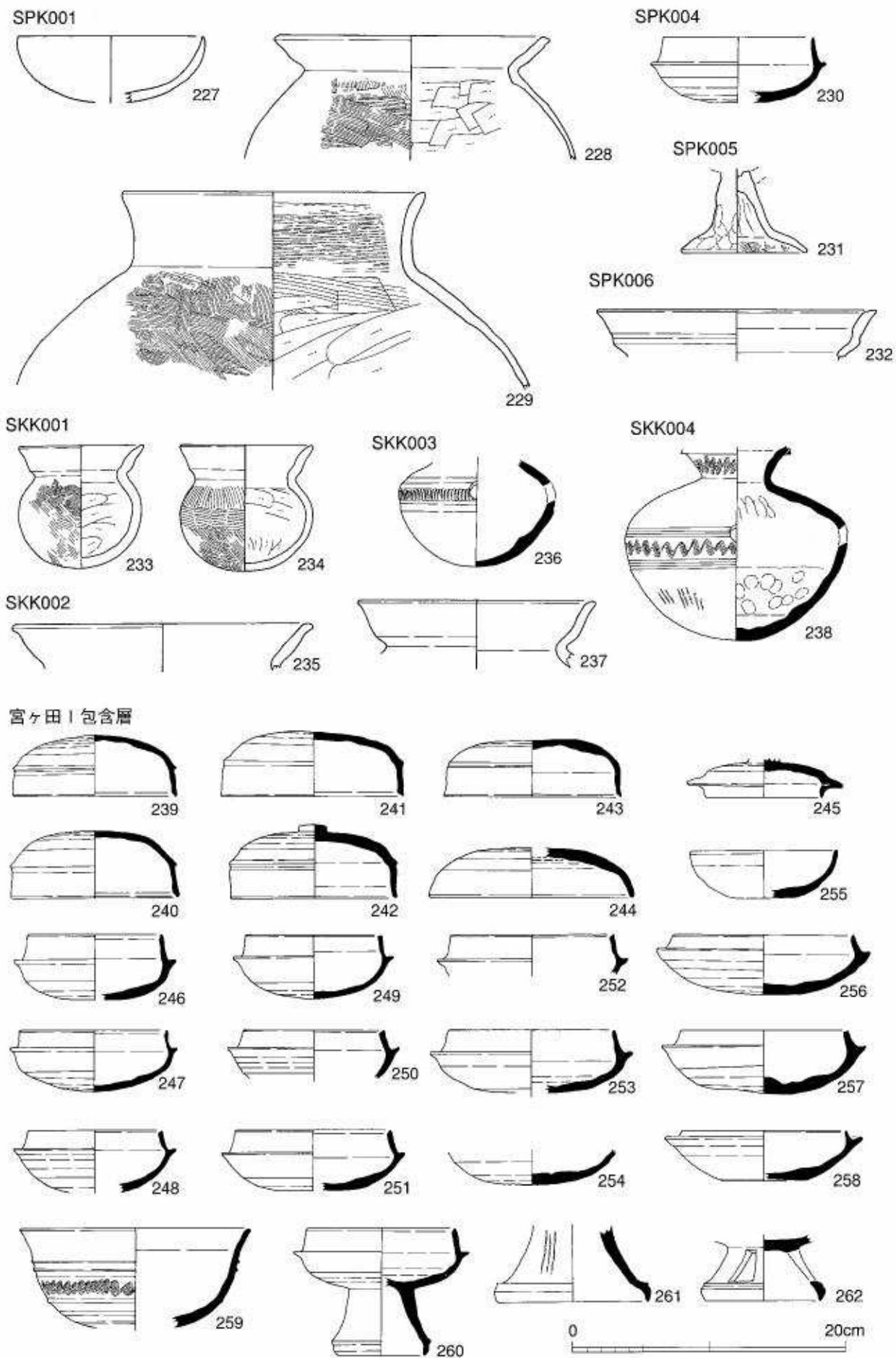
20cm

図版86 古墳時代の土器(5) 宮ヶ田I地区

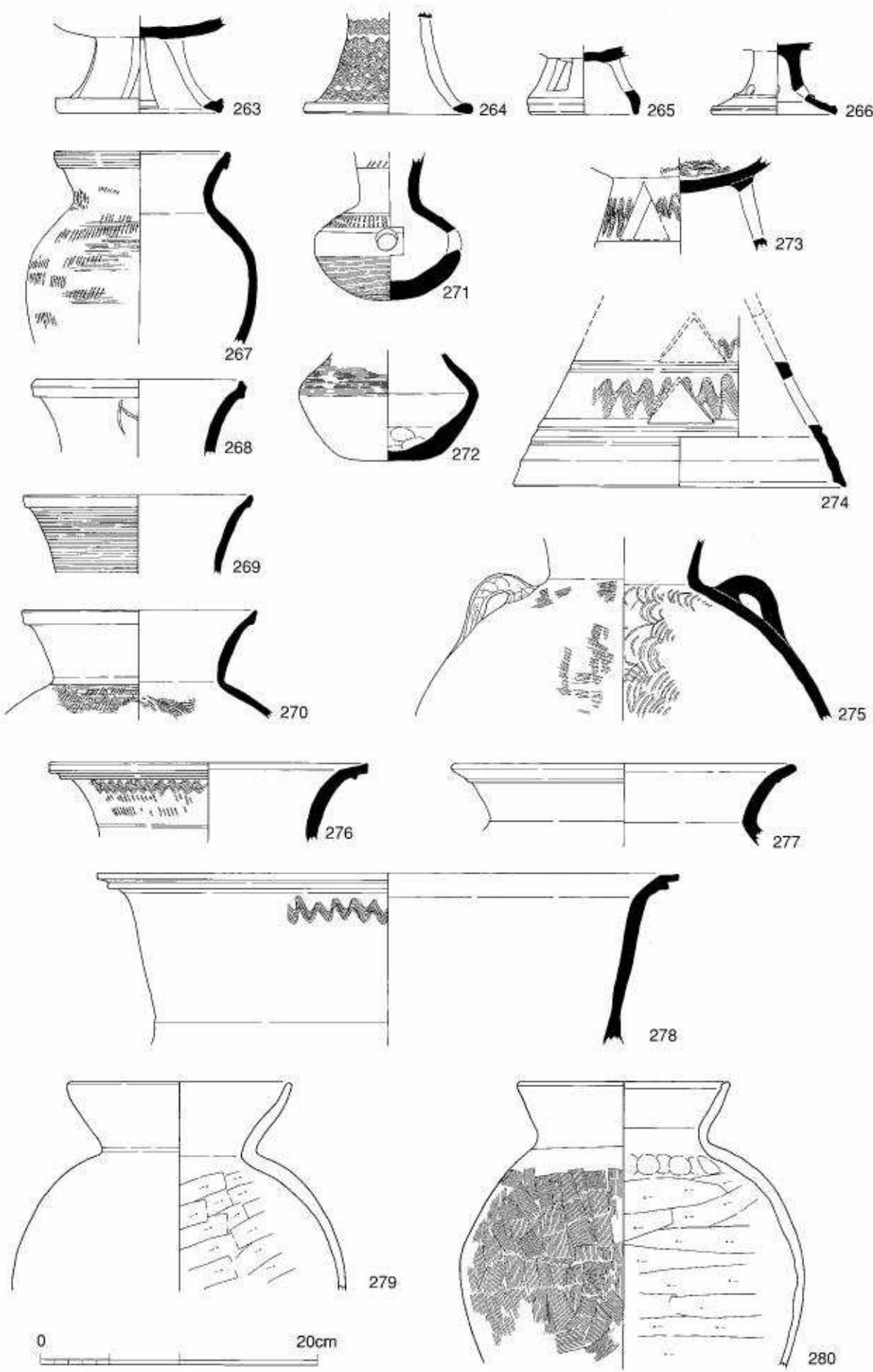


0 20cm

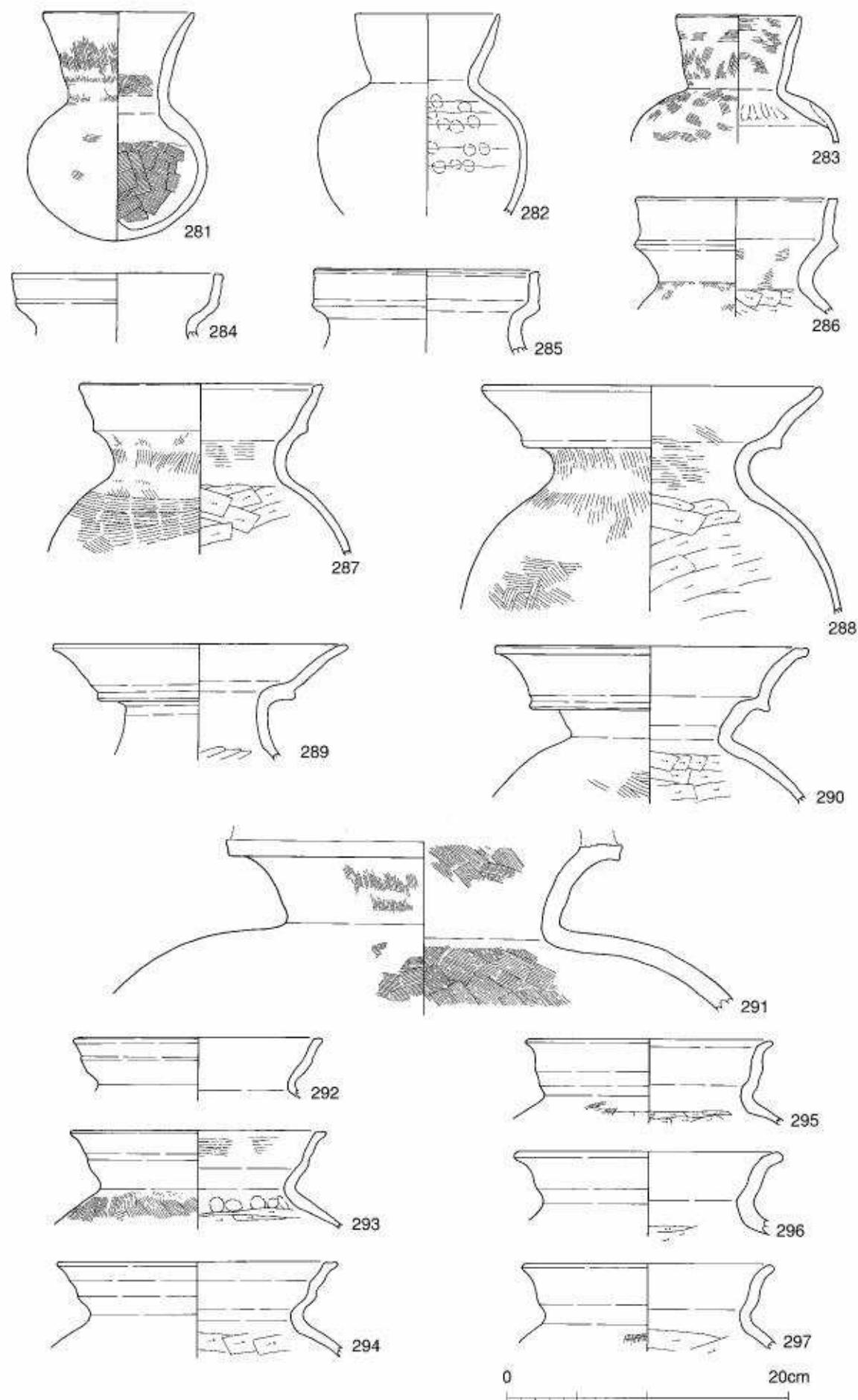
図版87 古墳時代の土器(6) 宮ヶ田Ⅰ地区



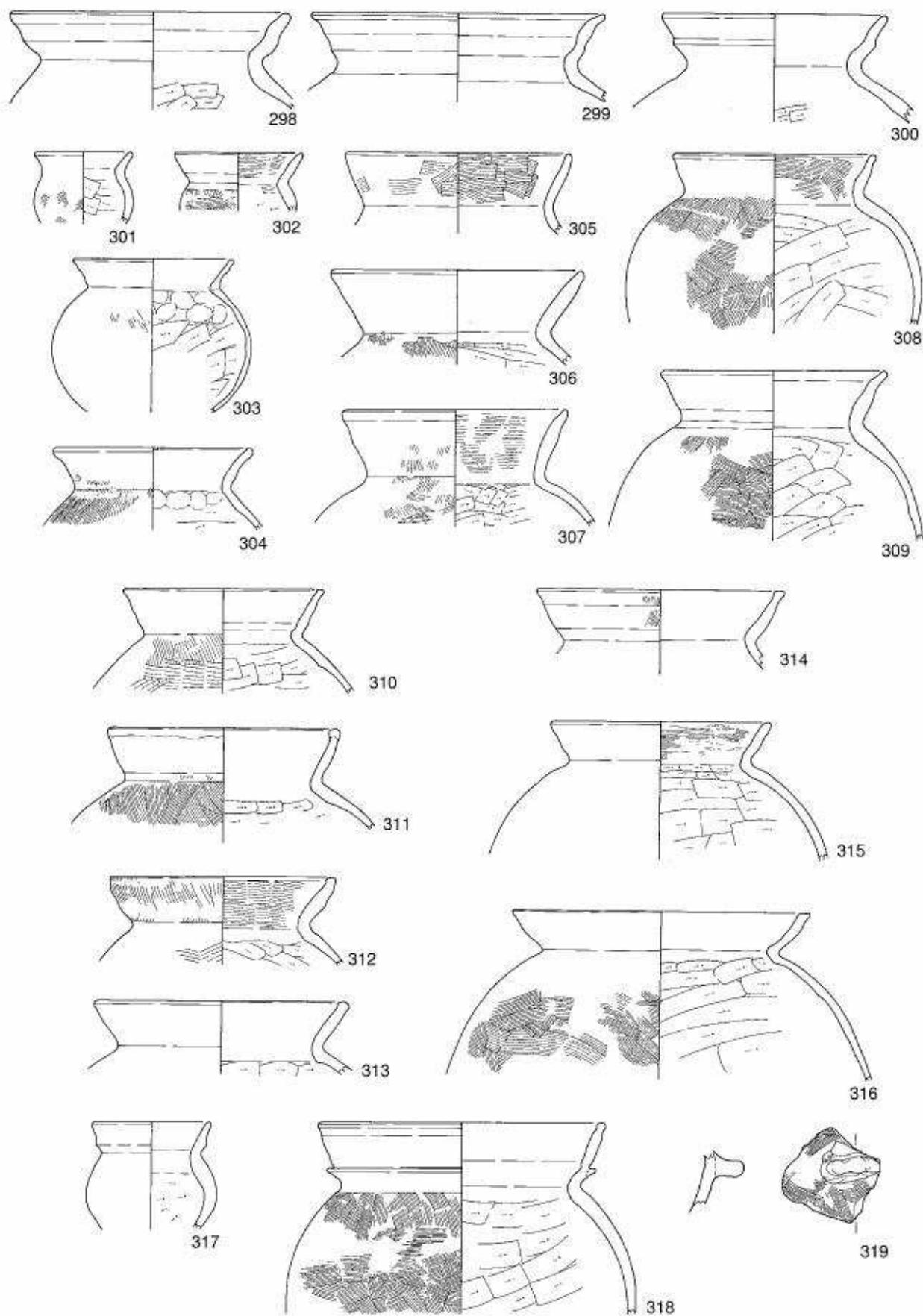
図版88 古墳時代の土器(7) 宮ヶ田I地区



図版89 古墳時代の土器(8) 宮ヶ田I地区

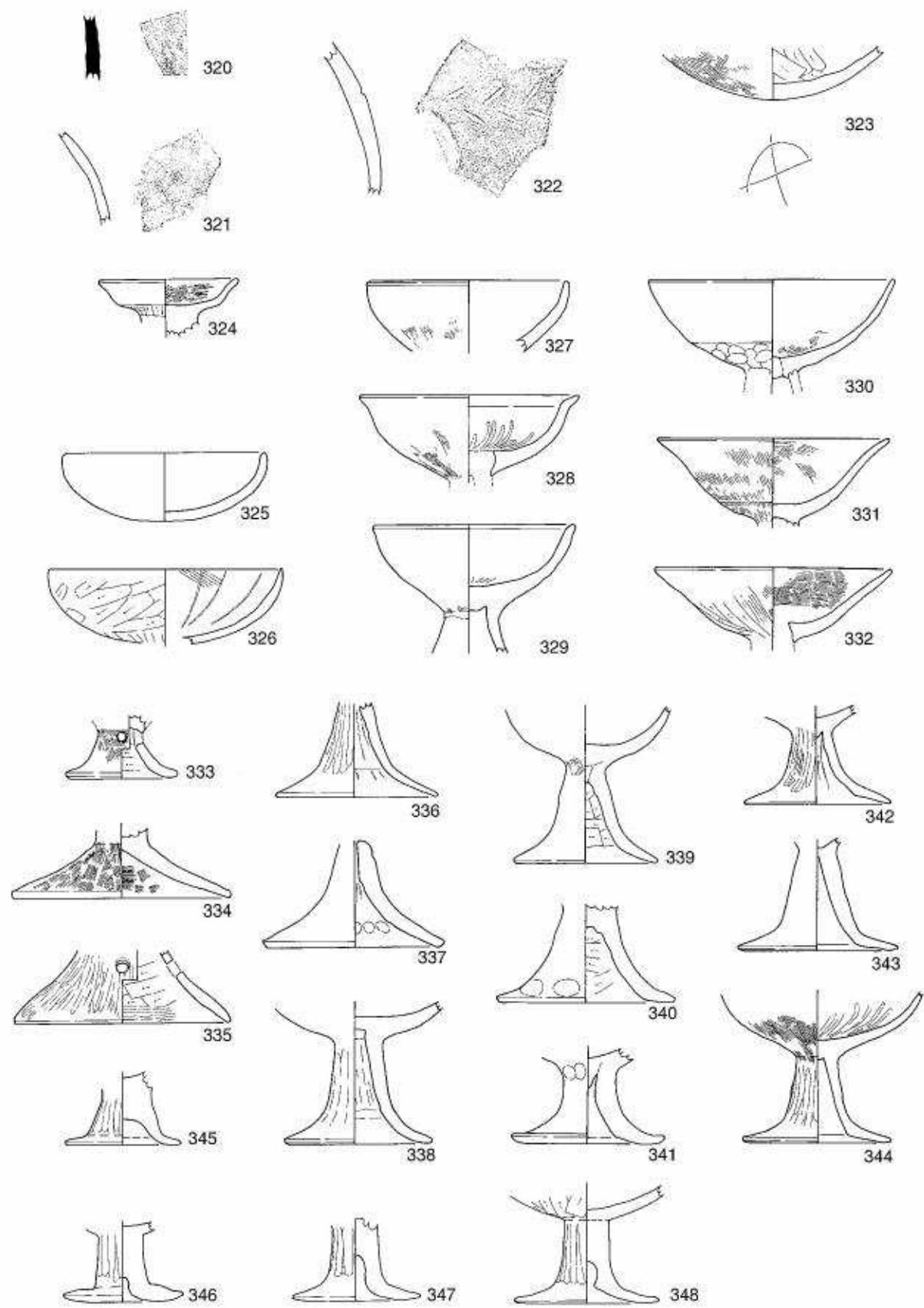


図版90 古墳時代の土器(9) 宮ヶ田I地区



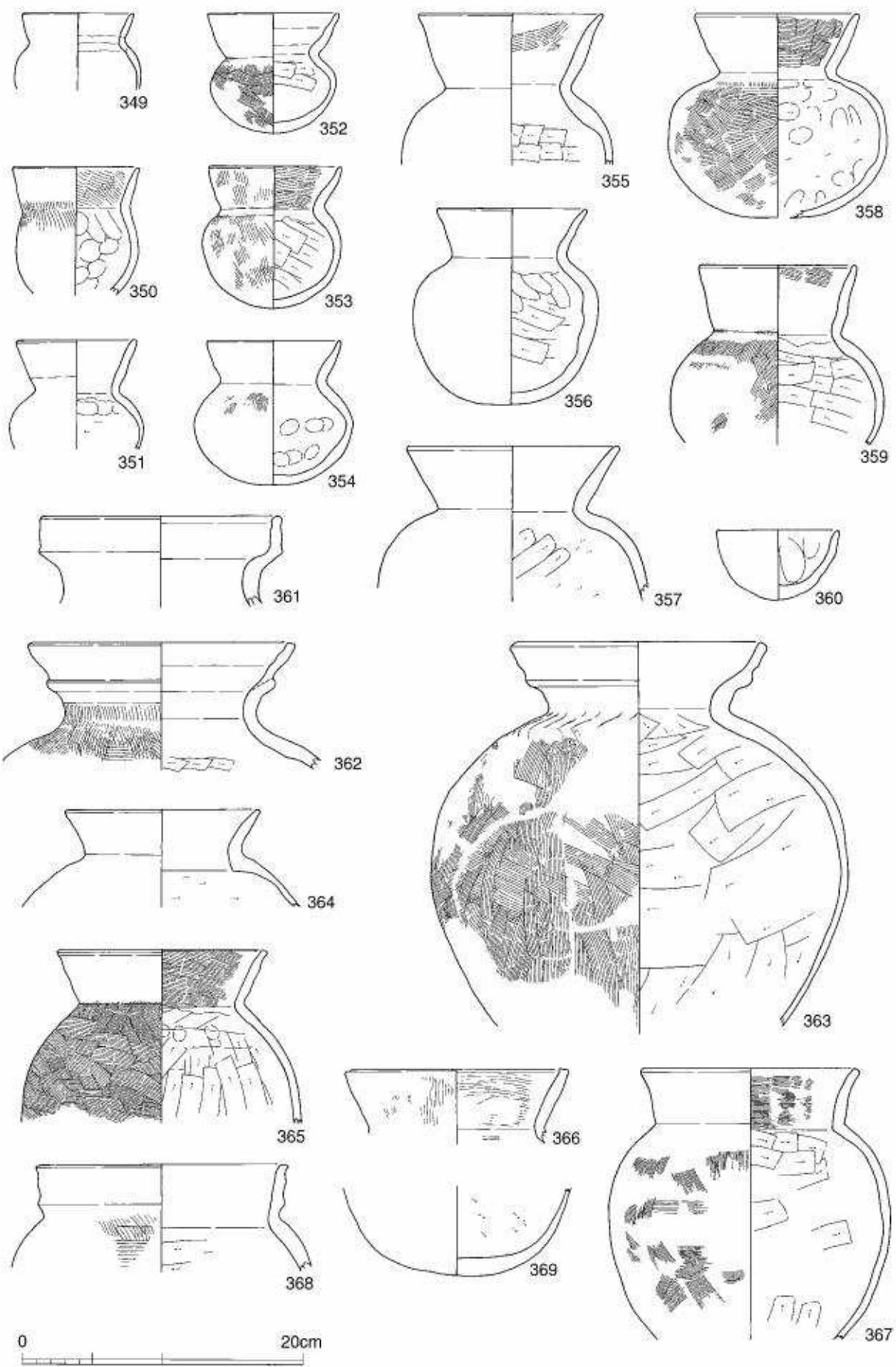
0 20cm

図版91 古墳時代の土器(10) 宮ヶ田Ⅰ地区

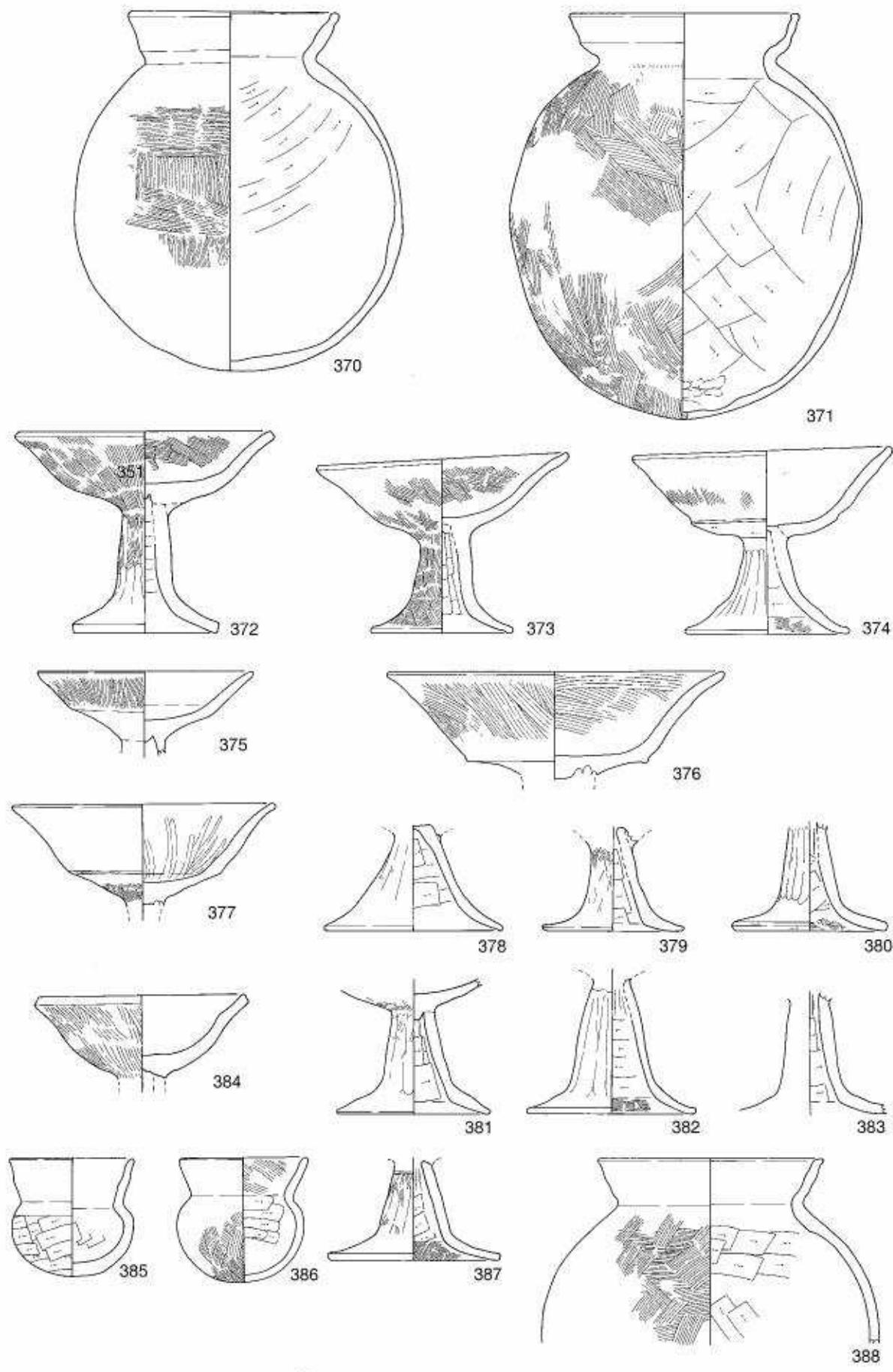


0 20cm

図版92 古墳時代の土器(11) 宮ヶ田II地区



図版93 古墳時代の土器(12) 宮ヶ田II地区

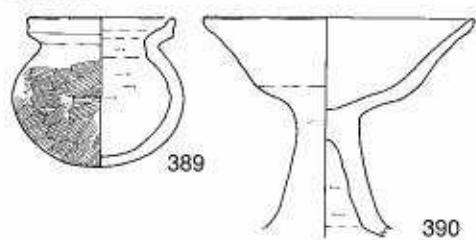


0

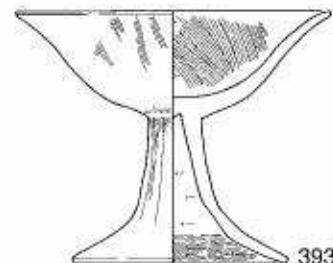
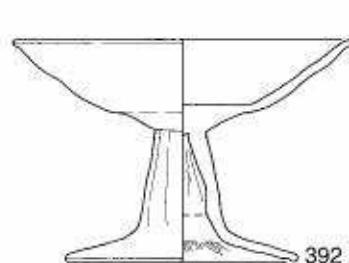
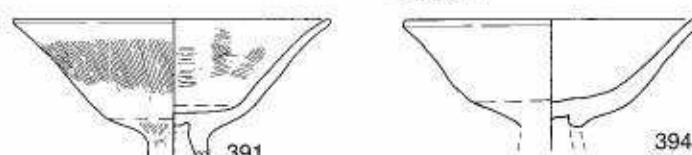
20cm

図版94 古墳時代の土器(13) 宮ヶ田II地区

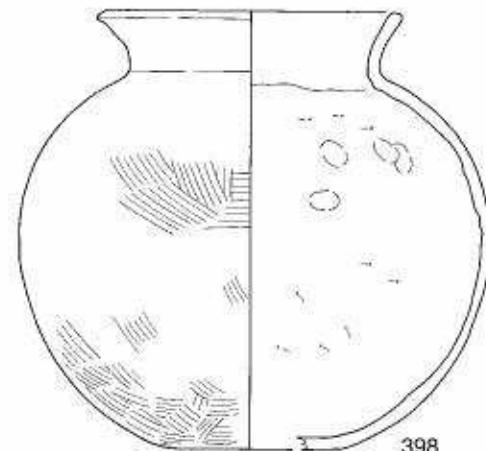
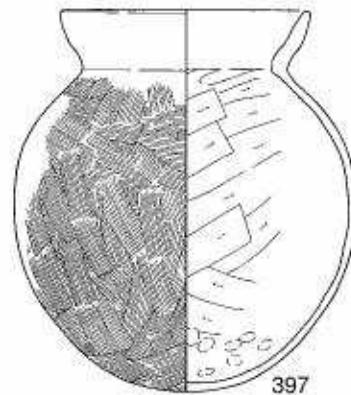
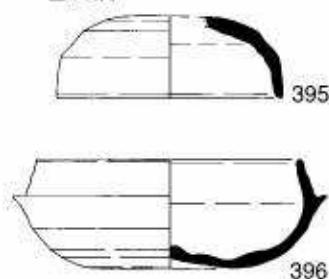
SKK010



SKK011



包含層

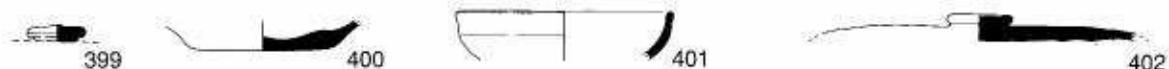


0

20cm

図版95 律令期の土器 桜地区・宮ヶ田Ⅰ地区・山内南地区

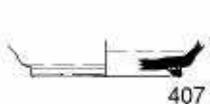
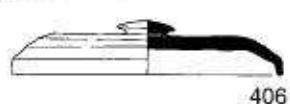
桜 SFR001



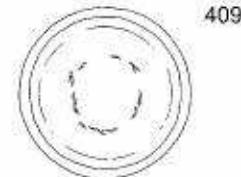
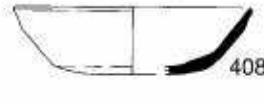
桜包含層



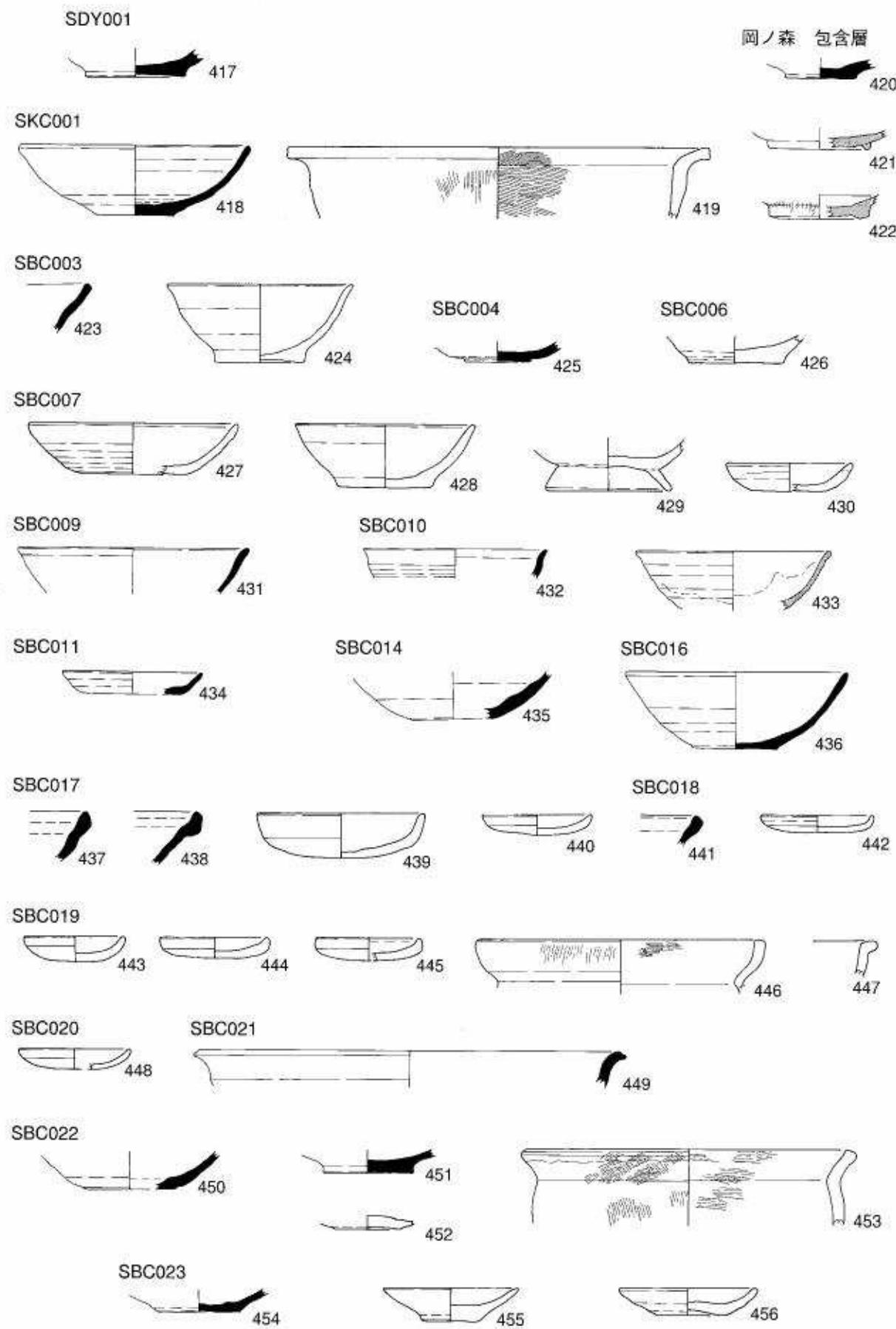
宮ヶ田Ⅰ SFR001



宮ヶ田Ⅰ 包含層

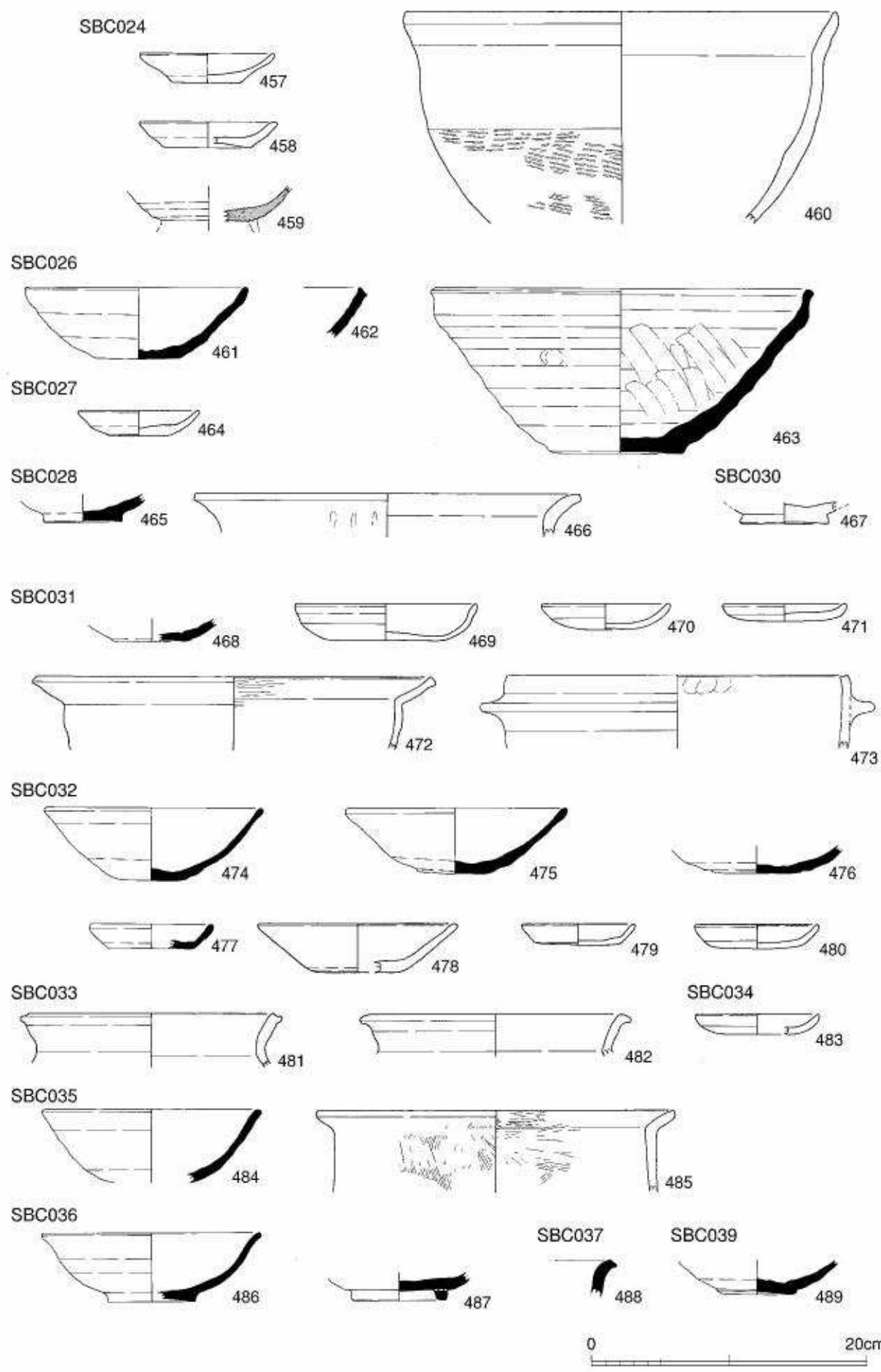


図版96 中世の土器(1) 伊豫田地区・岡ノ森地区・桜地区

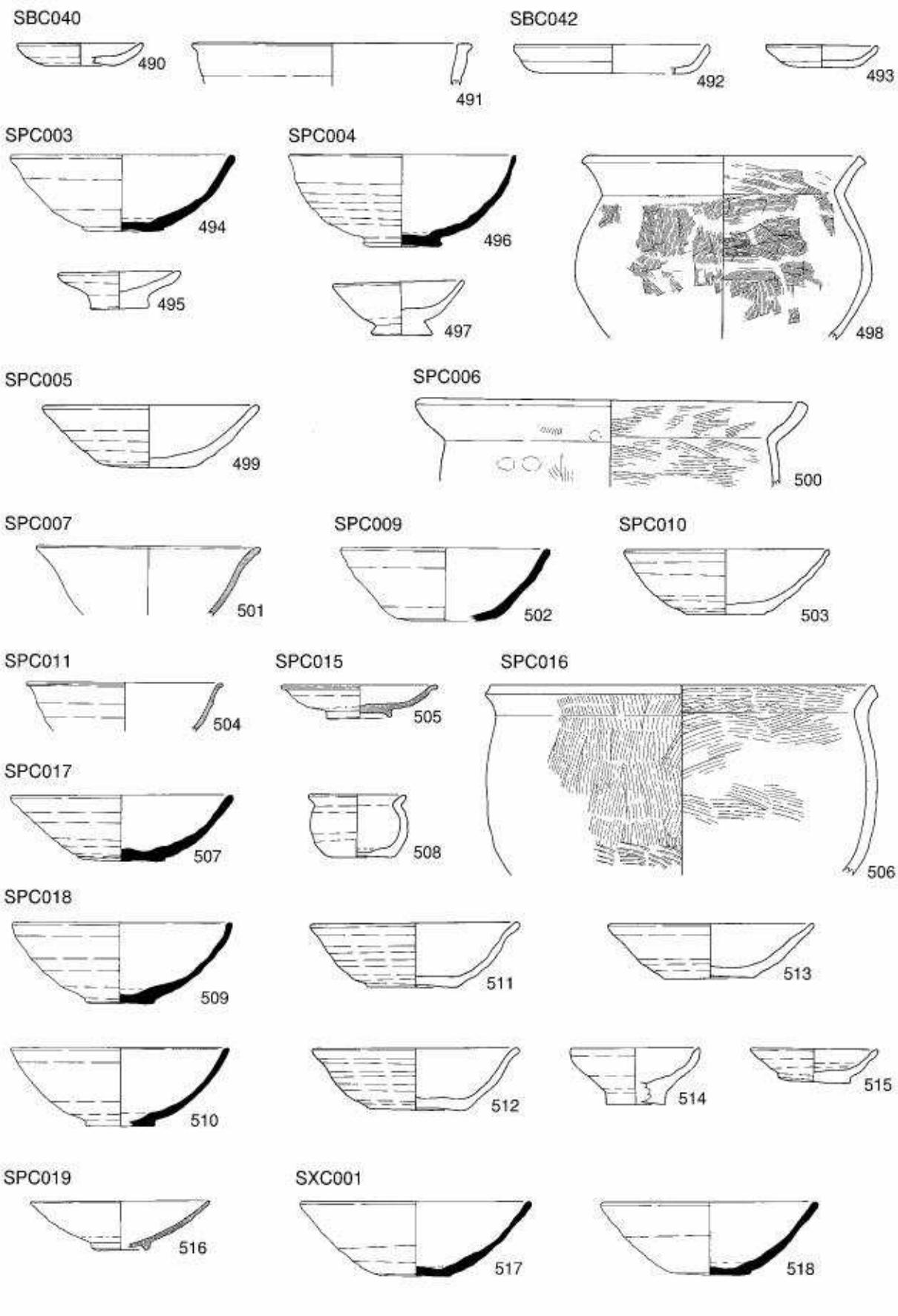


0 20cm

図版97 中世の土器(2) 桜地区

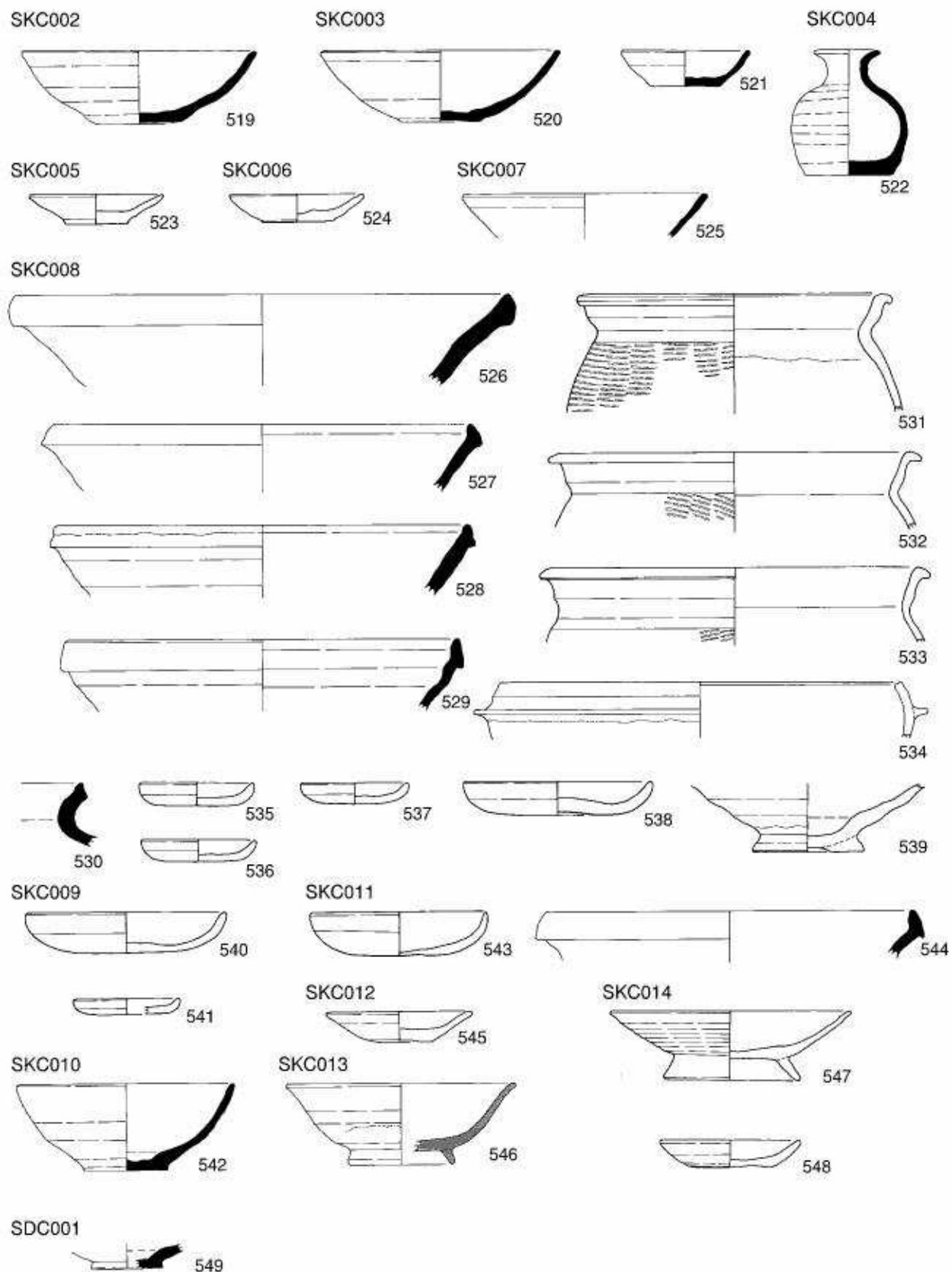


図版98 中世の土器(3) 桜地区



0 20cm

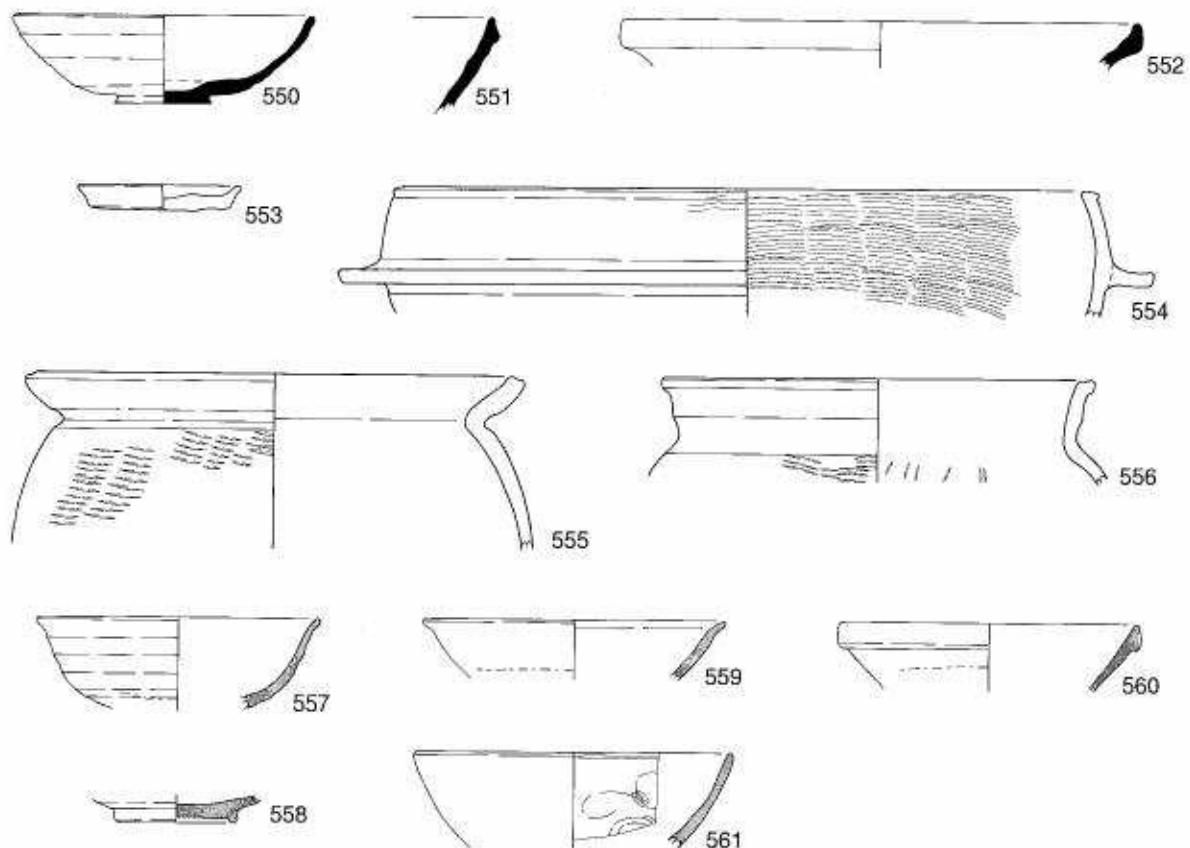
図版99 中世の土器(4) 桜地区



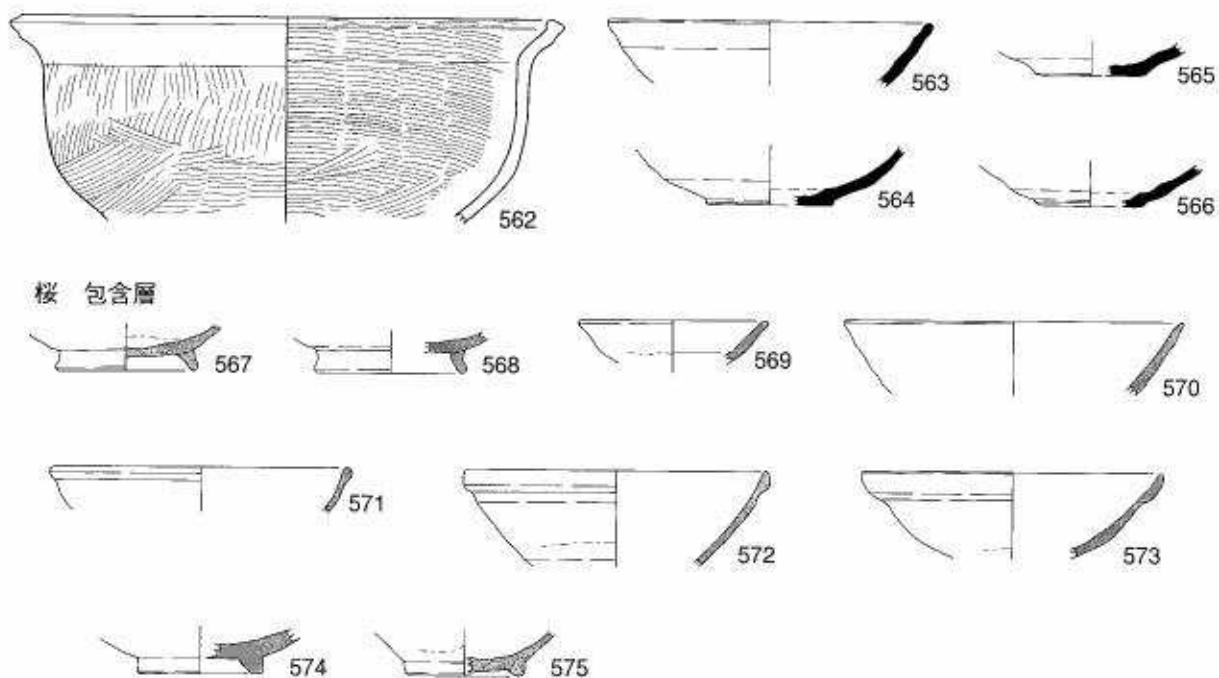
0 20cm

図版100 中世の土器(5) 桜地区・山内南地区

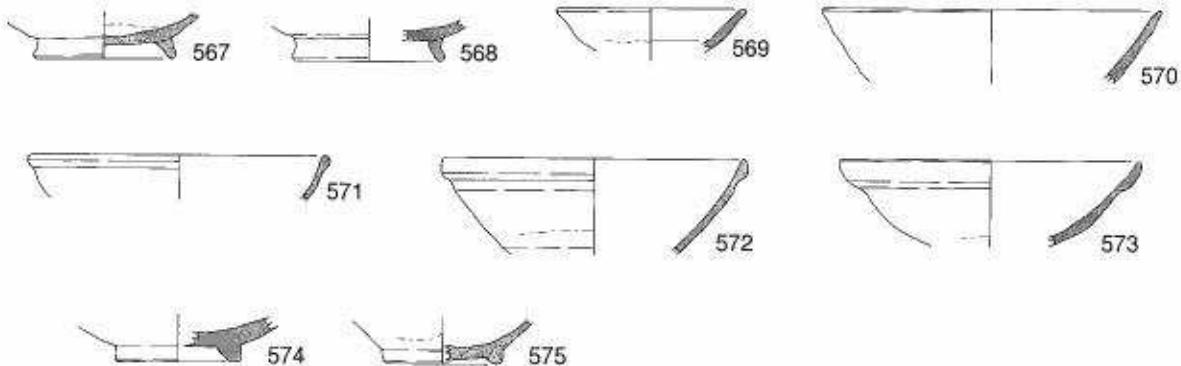
SRC001



SFR001



桜 包含層



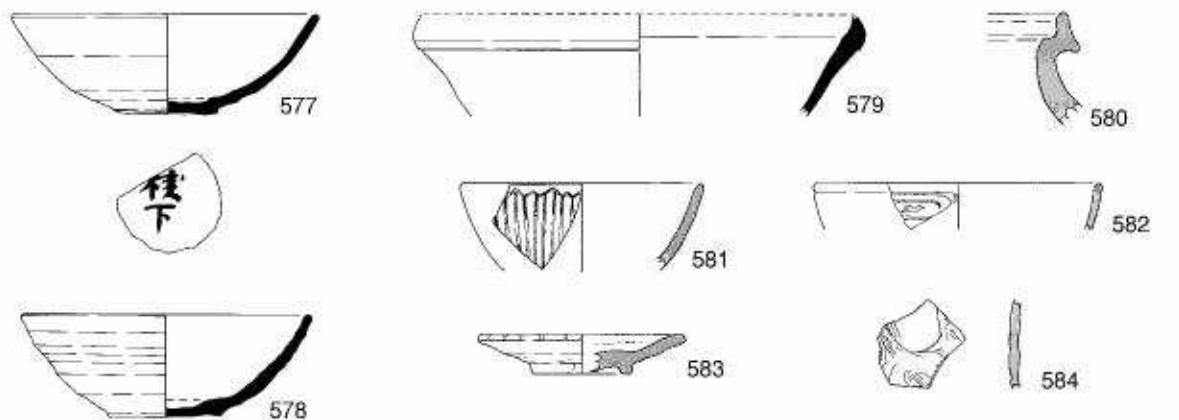
山内南 包含層



0 20cm

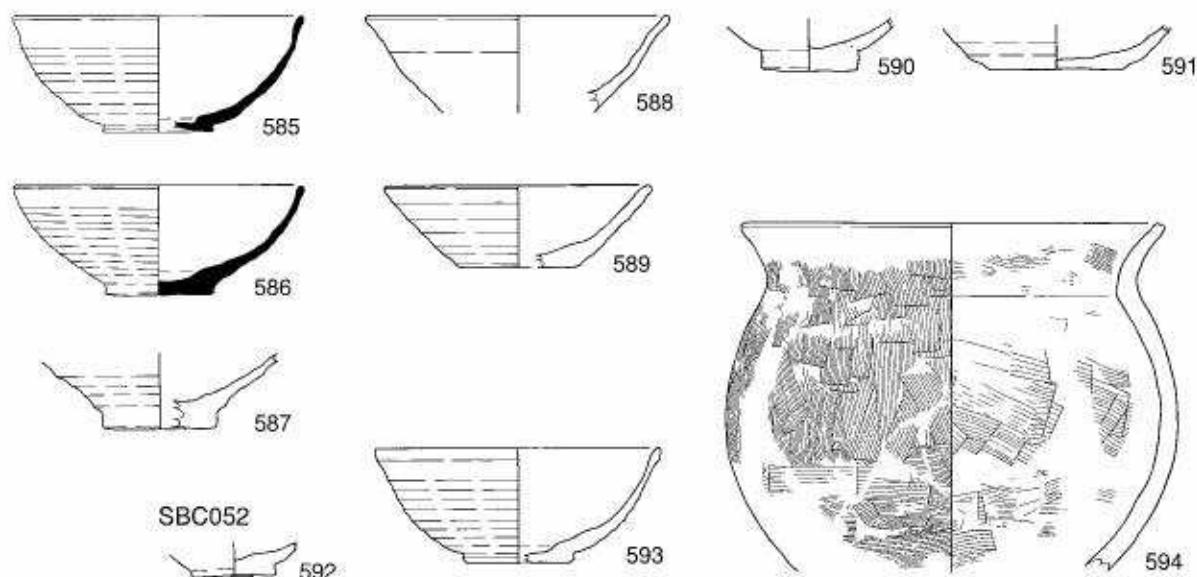
図版101 中世の土器(6) 宮ヶ田Ⅰ地区・宮ヶ田Ⅱ地区

宮ヶ田Ⅰ 包含層

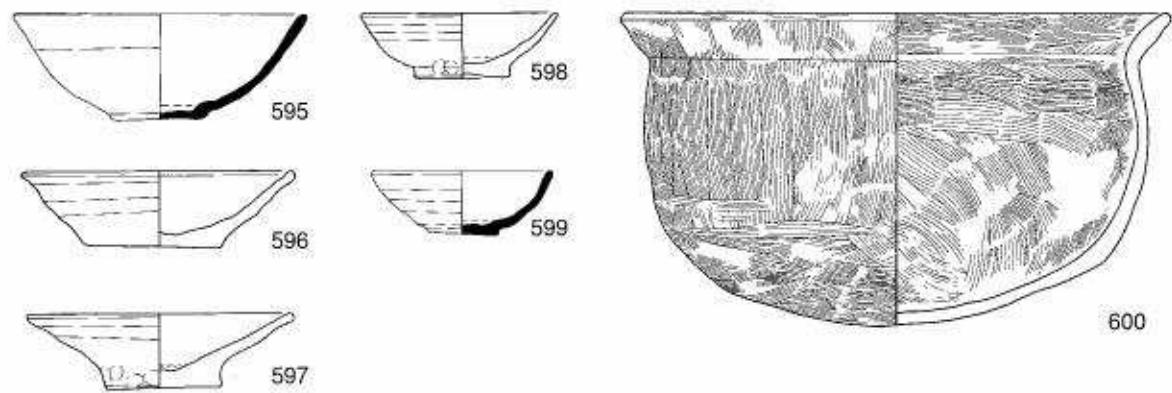


SBC048

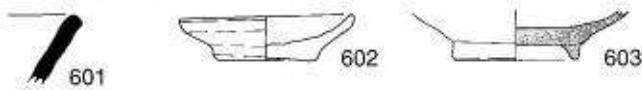
SBC051



SKC015

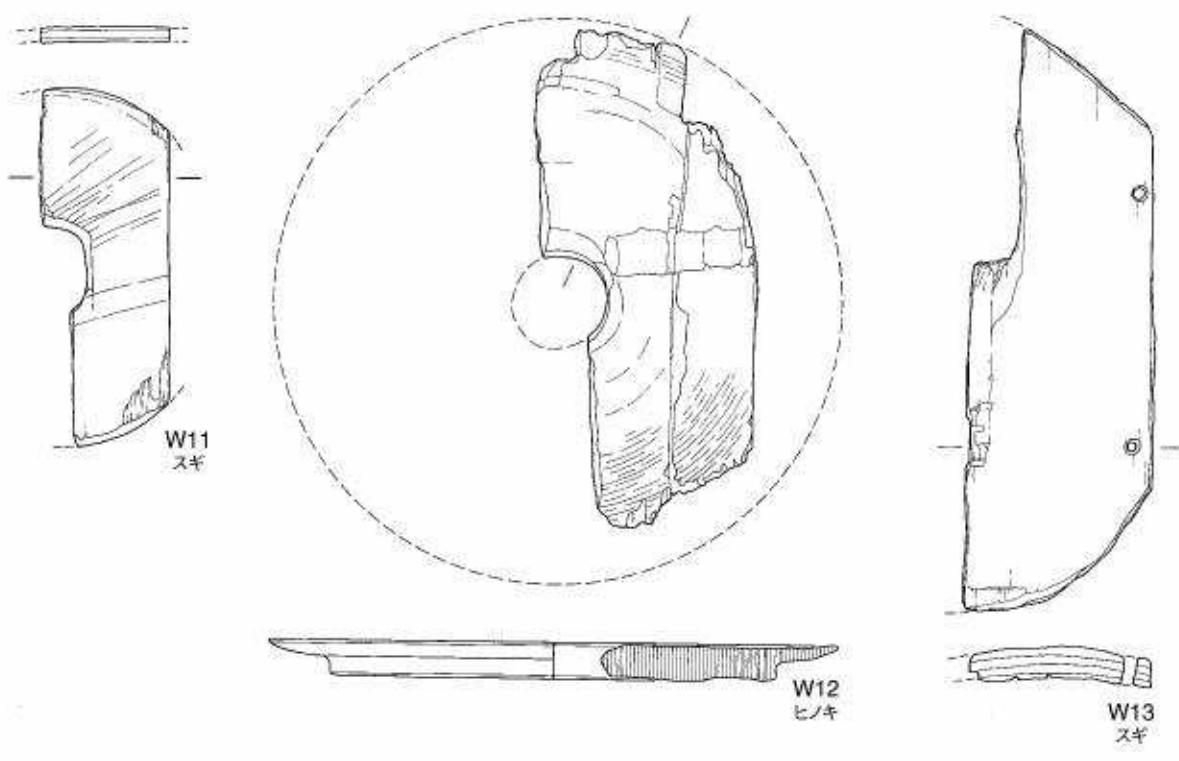
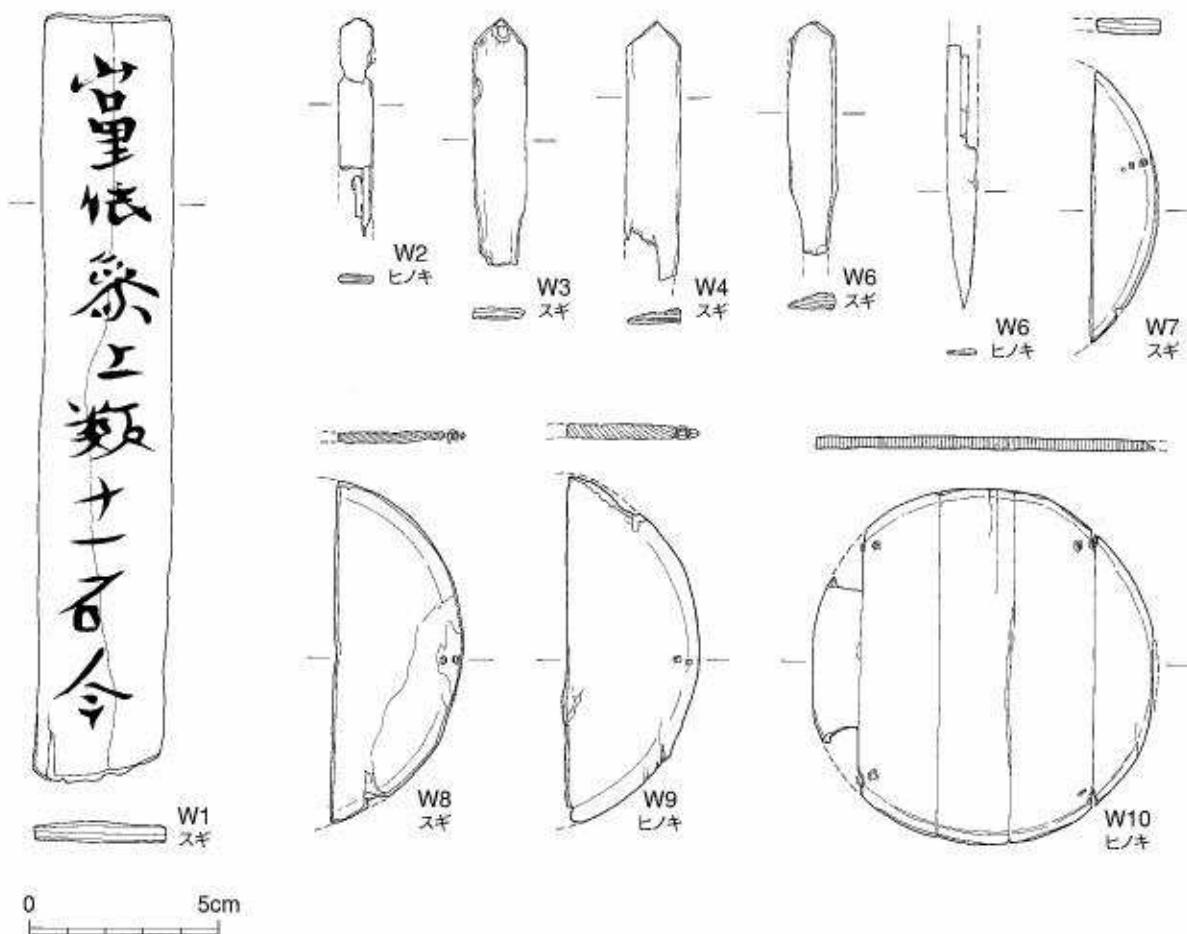


宮ヶ田Ⅱ 包含層



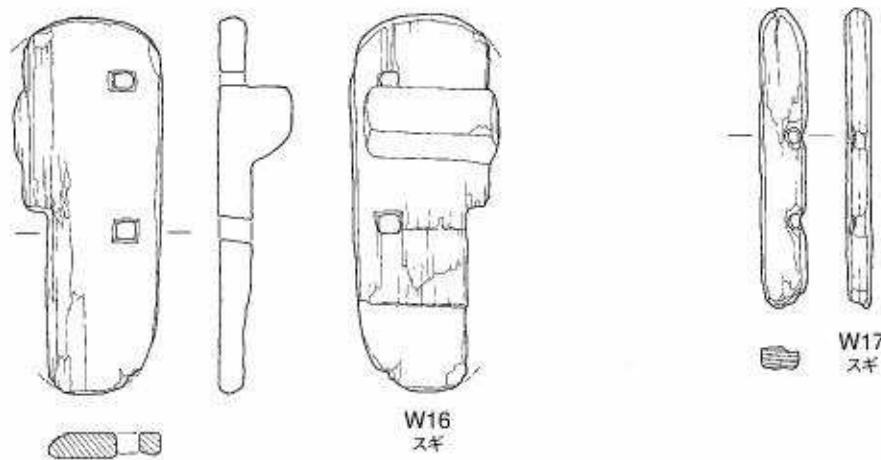
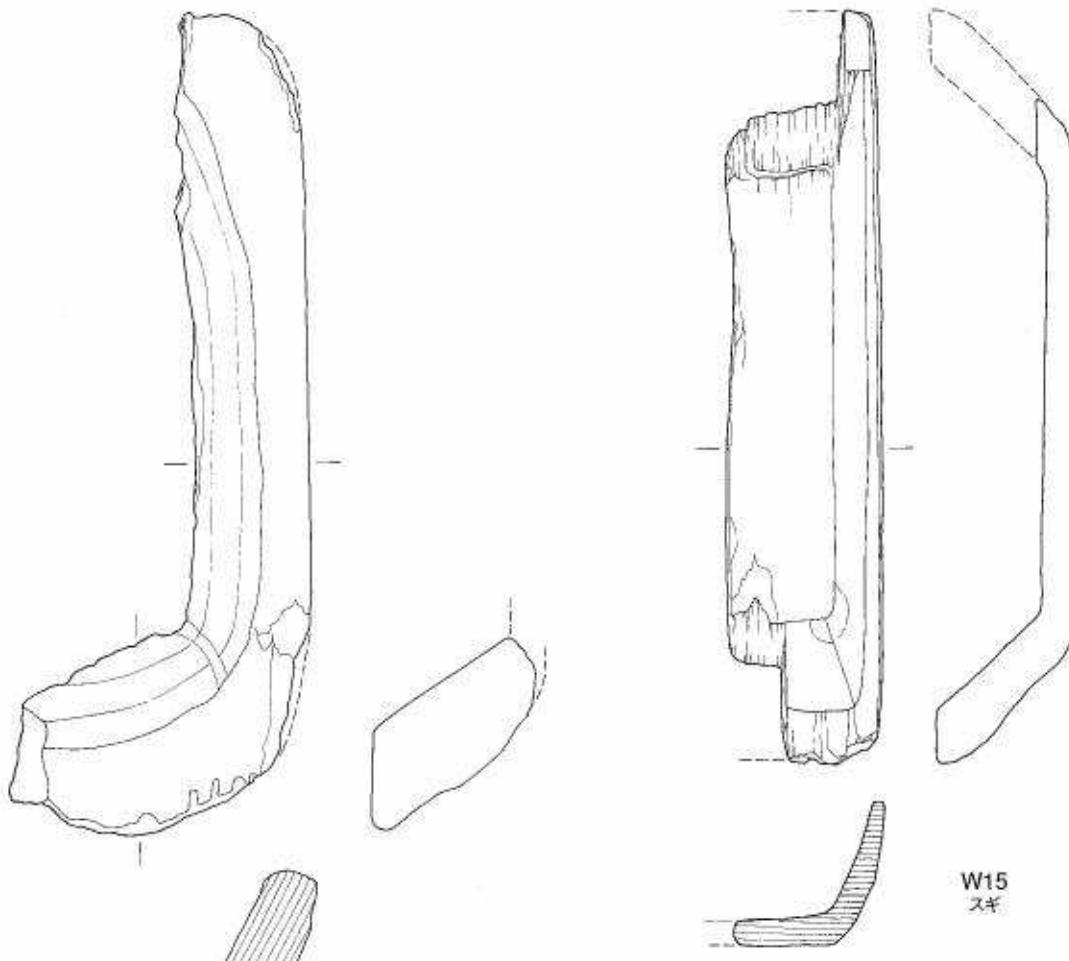
0 20cm

図版102 中世以前の木製品(1) 宮ヶ田Ⅰ地区



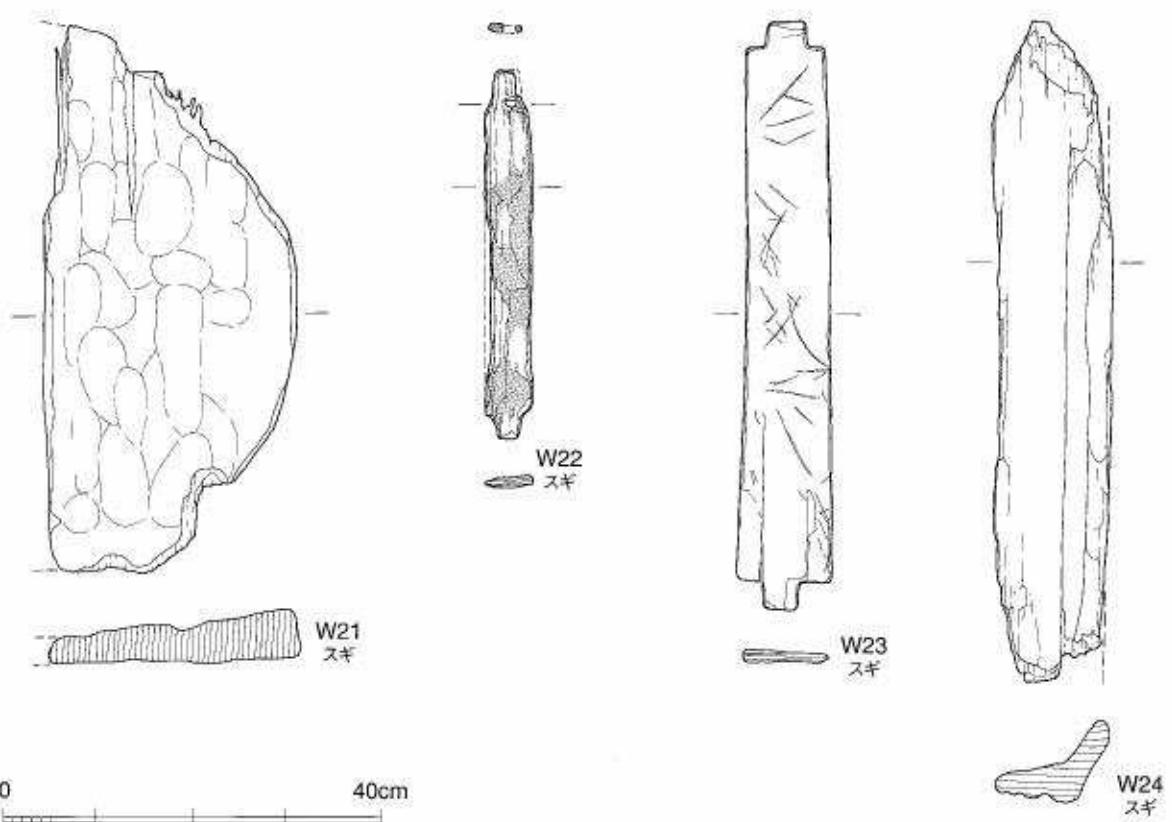
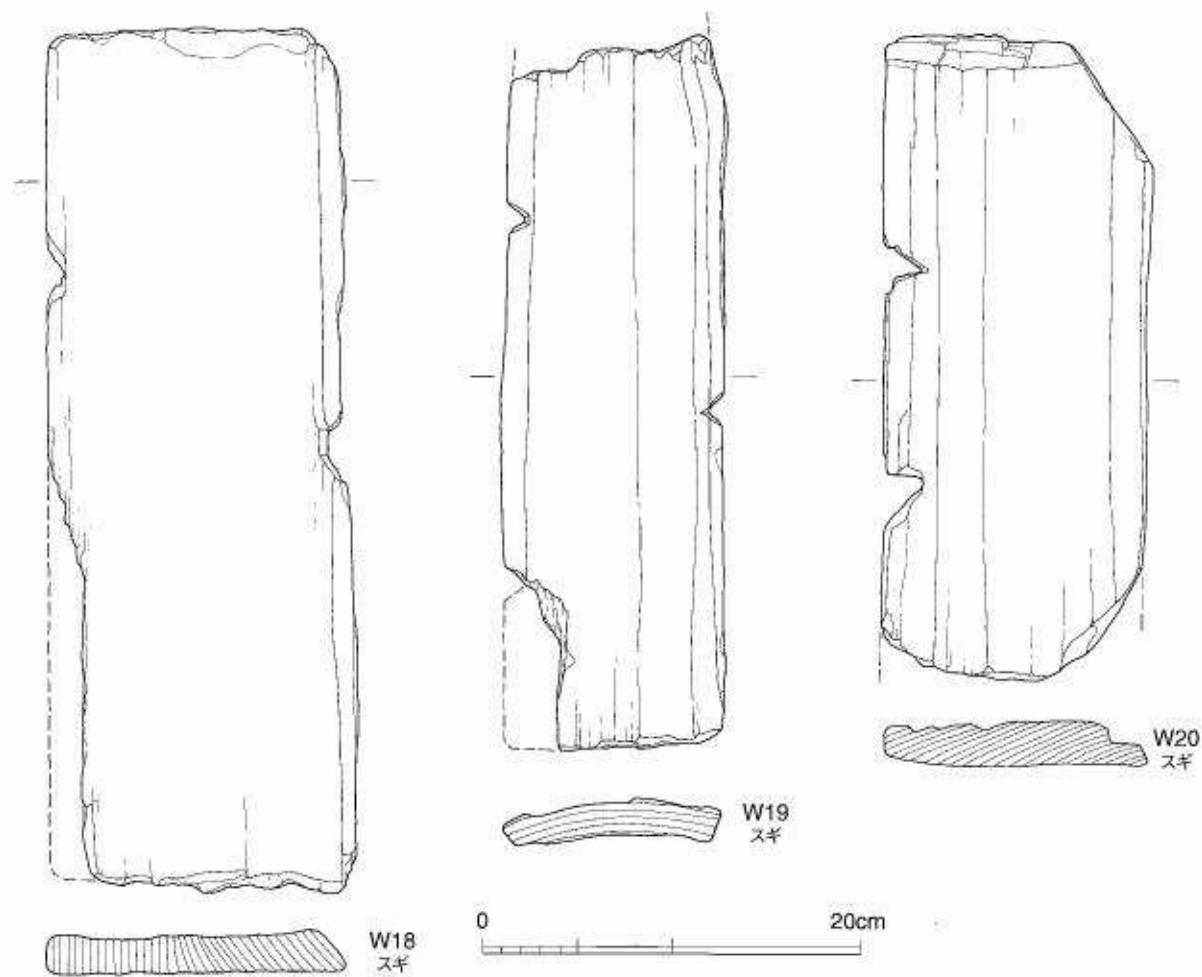
0 20cm

図版103 中世以前の木製品(2) 宮ヶ田I地区

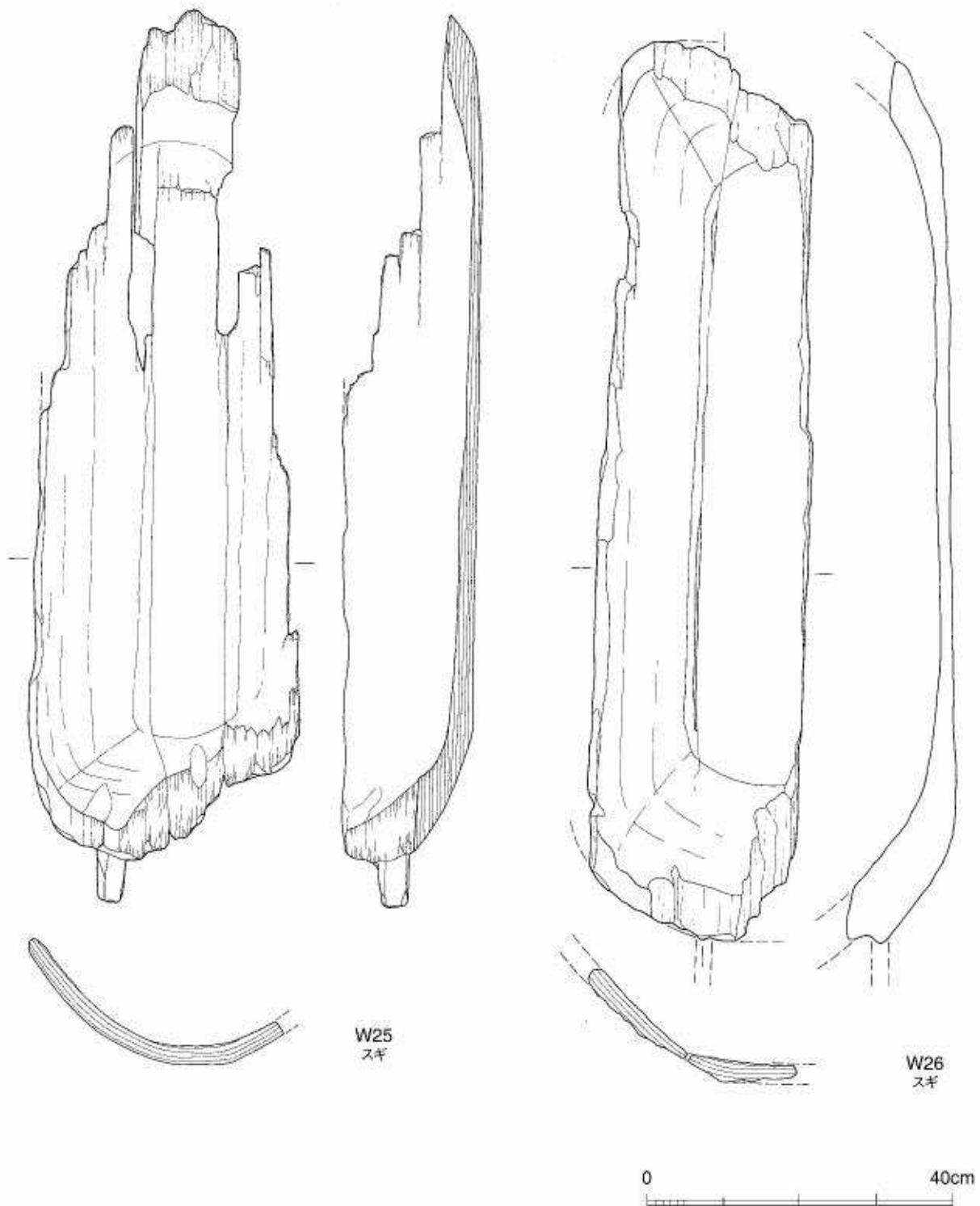


0 20cm

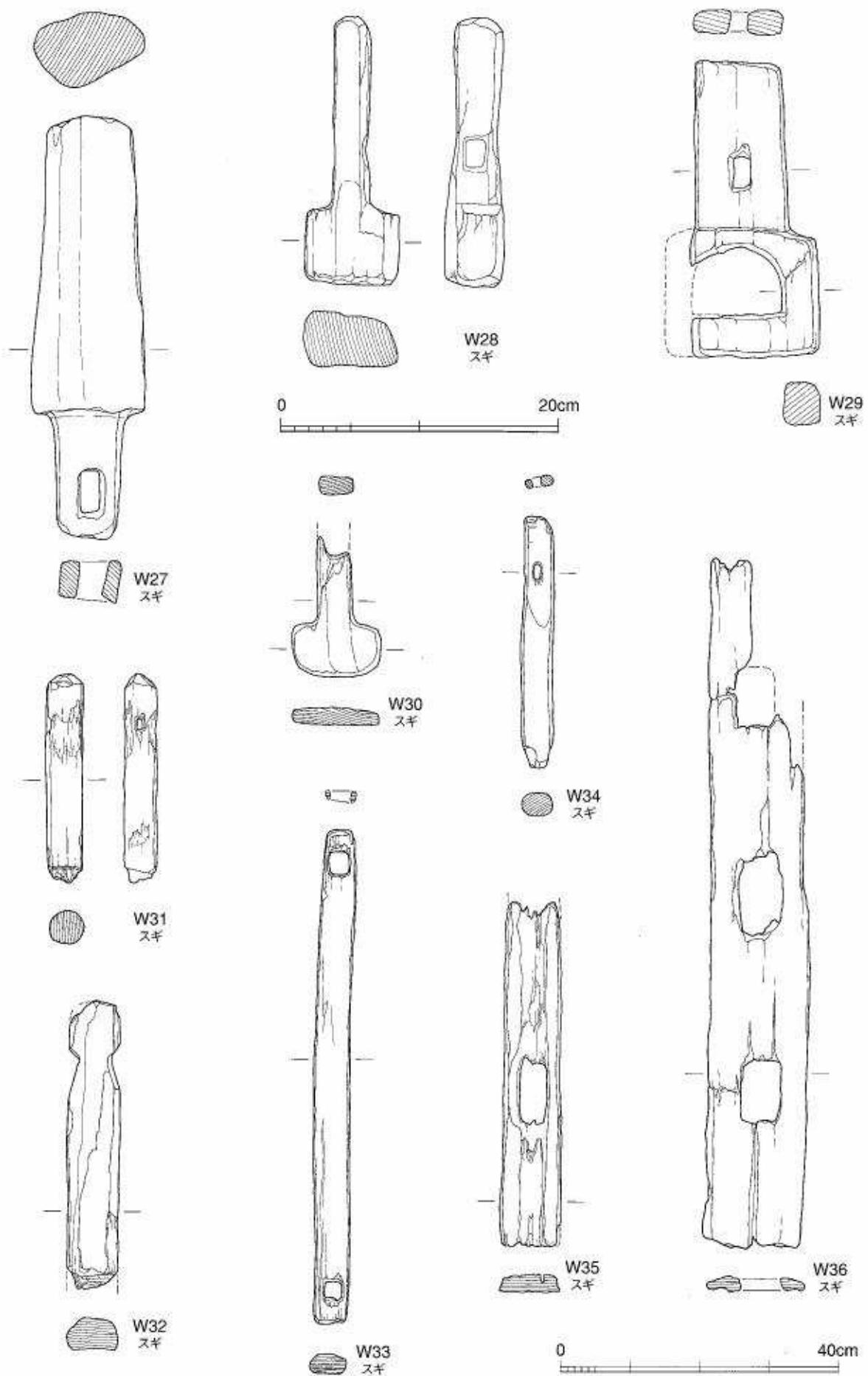
図版104 中世以前の木製品(3) 宮ヶ田I地区



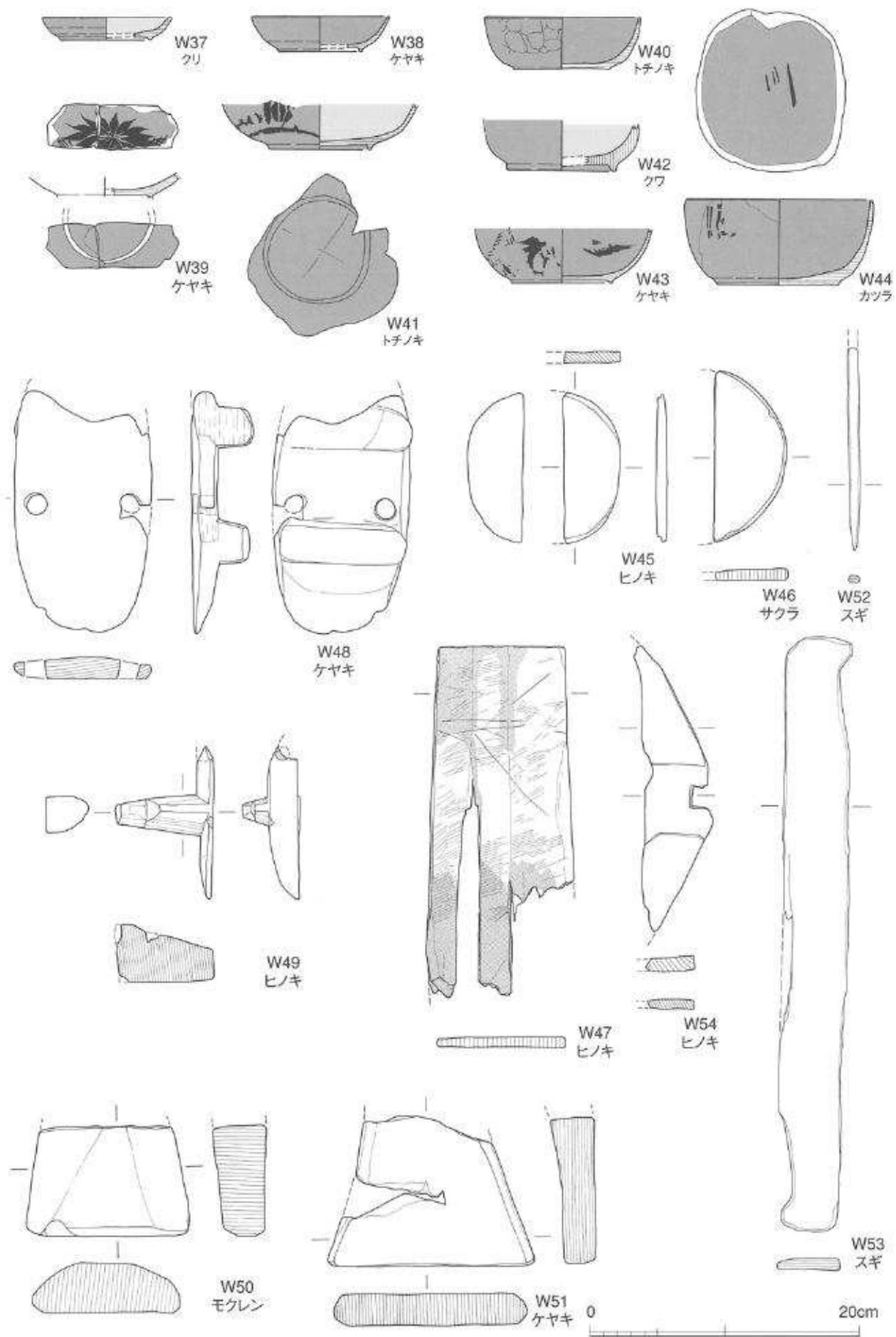
図版105 中世以前の木製品(4) 宮ヶ田I地区



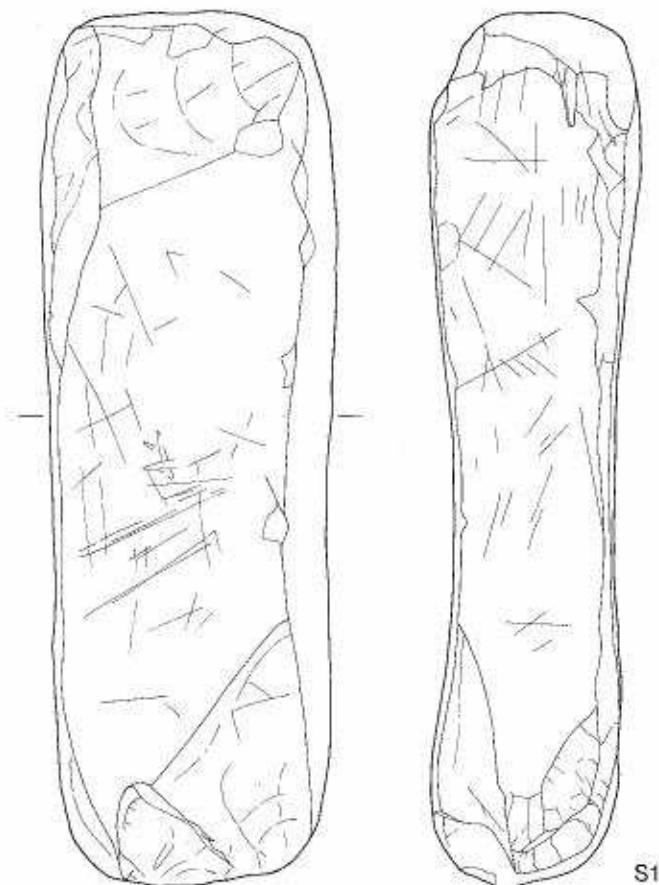
図版106 中世以前の木製品(5) 宮ヶ田I地区



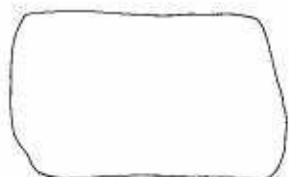
図版107 中世の木製品 岡ノ森地区・桜地区



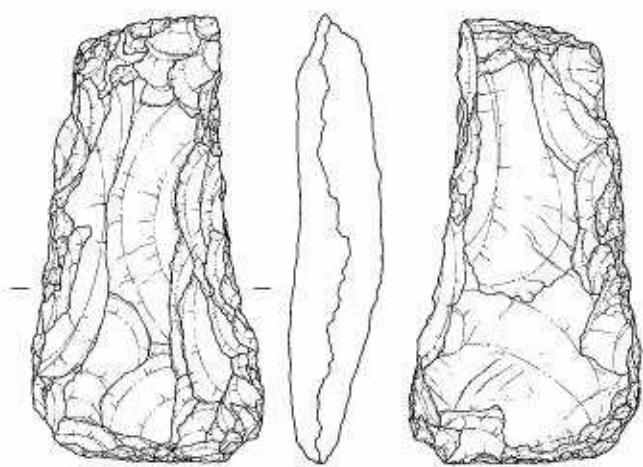
図版108 石製品(1) 確認調査



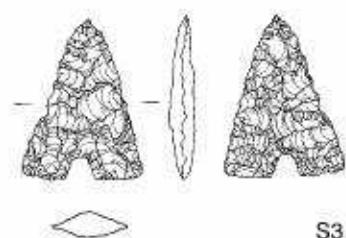
S1



0 10cm



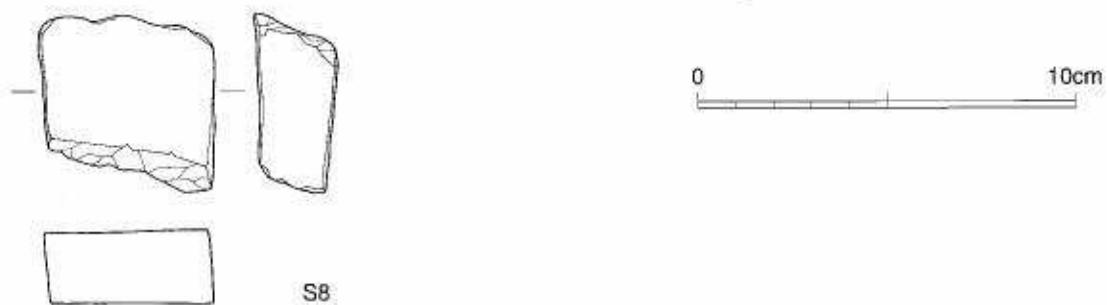
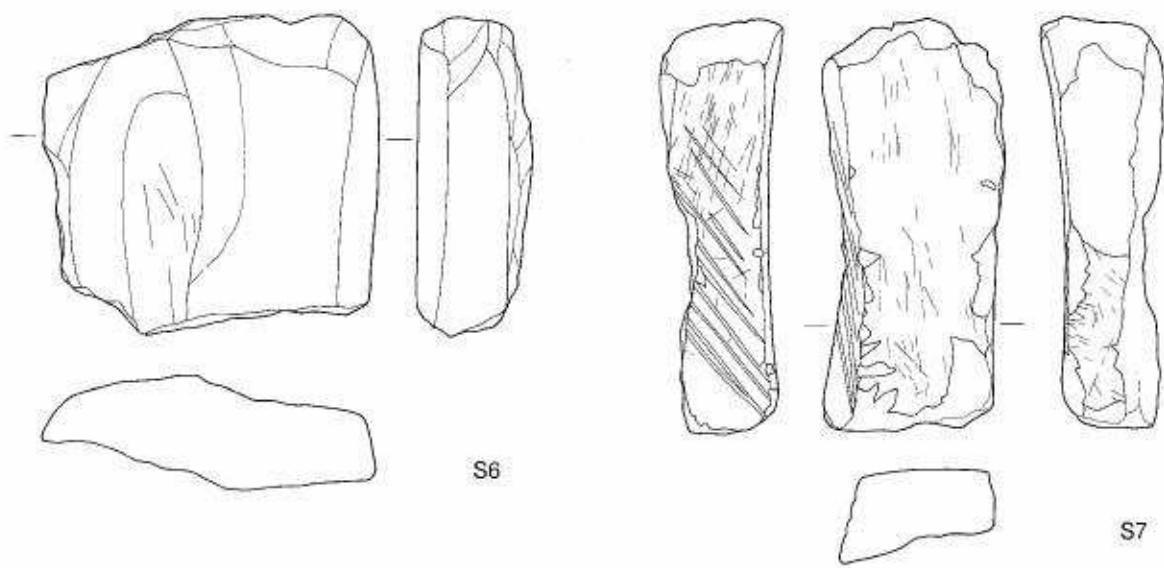
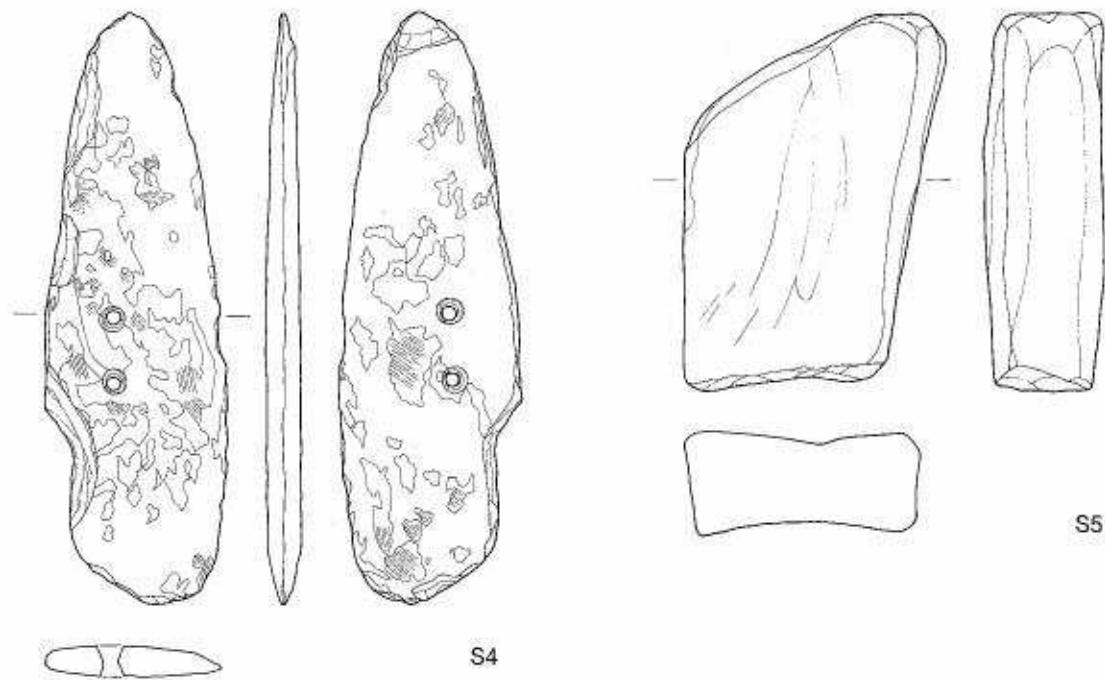
S2



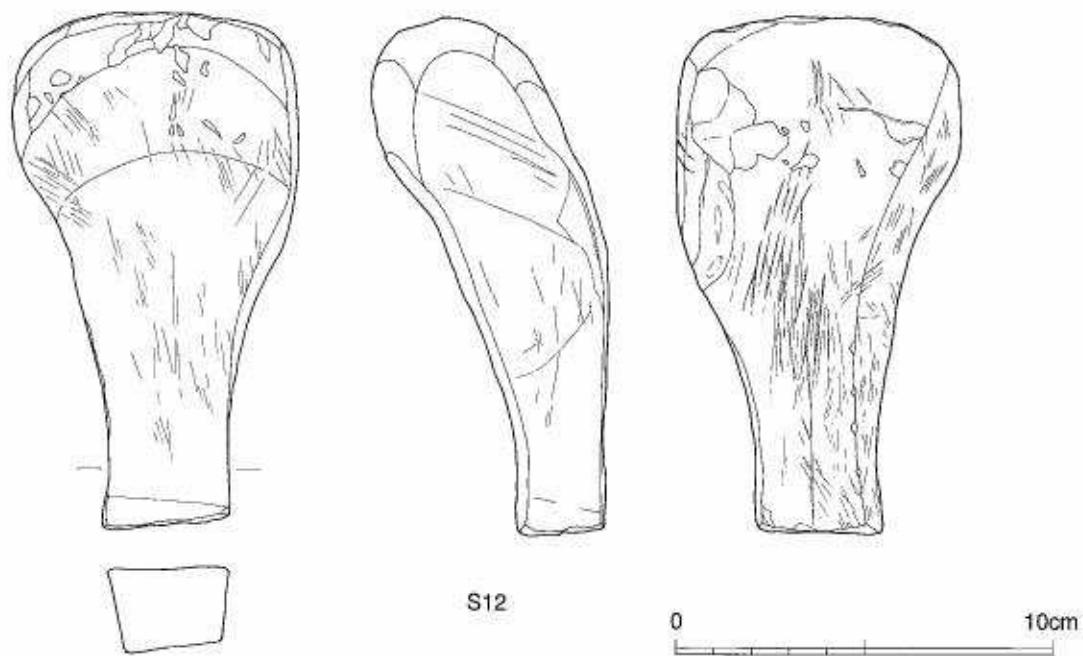
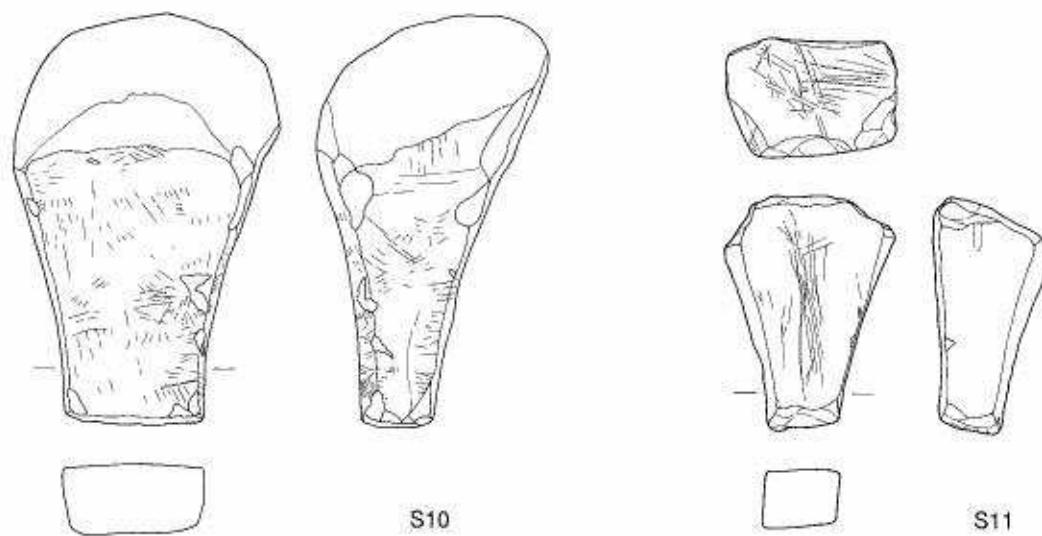
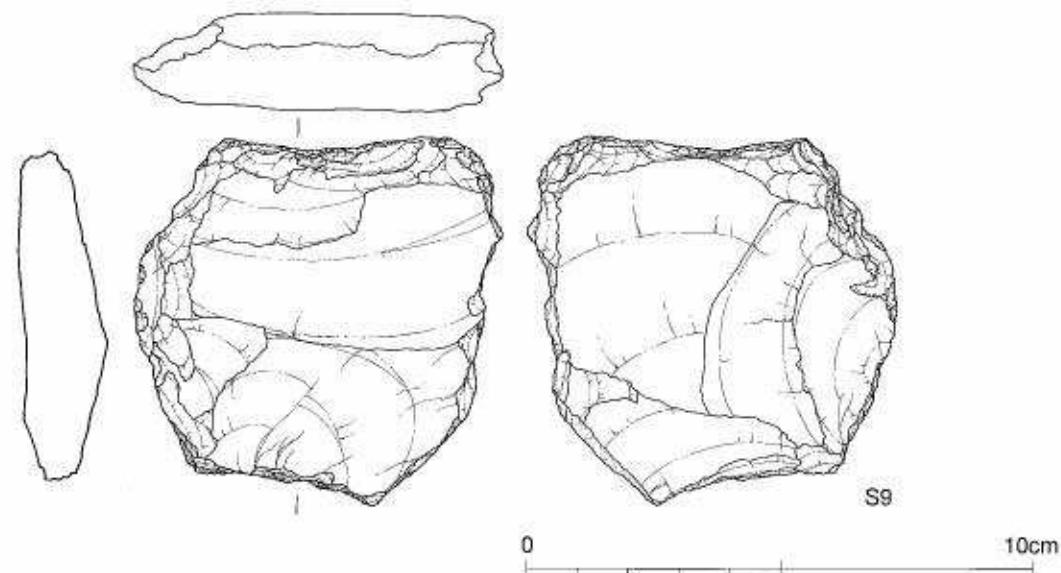
S3

0 10cm

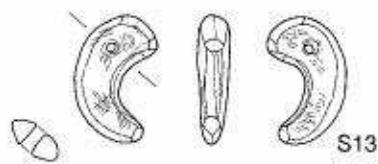
図版109 石製品(2) 伊豫田地区・桜地区



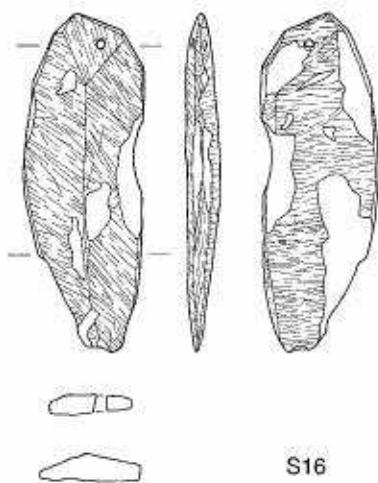
図版110 石製品(3) 宮ヶ田Ⅰ地区



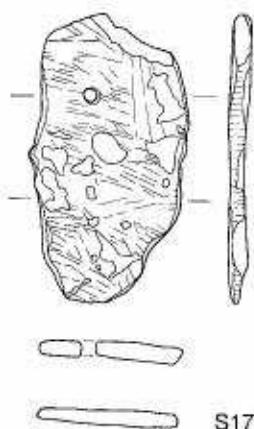
図版111 石製品(4) 宮ヶ田Ⅰ地区



—◎—
□ S14
◎ S15

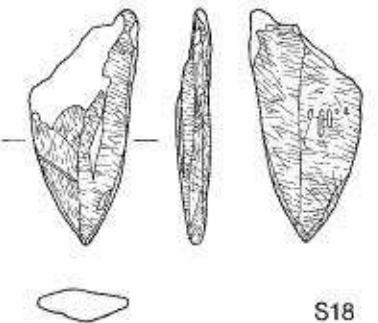


S16



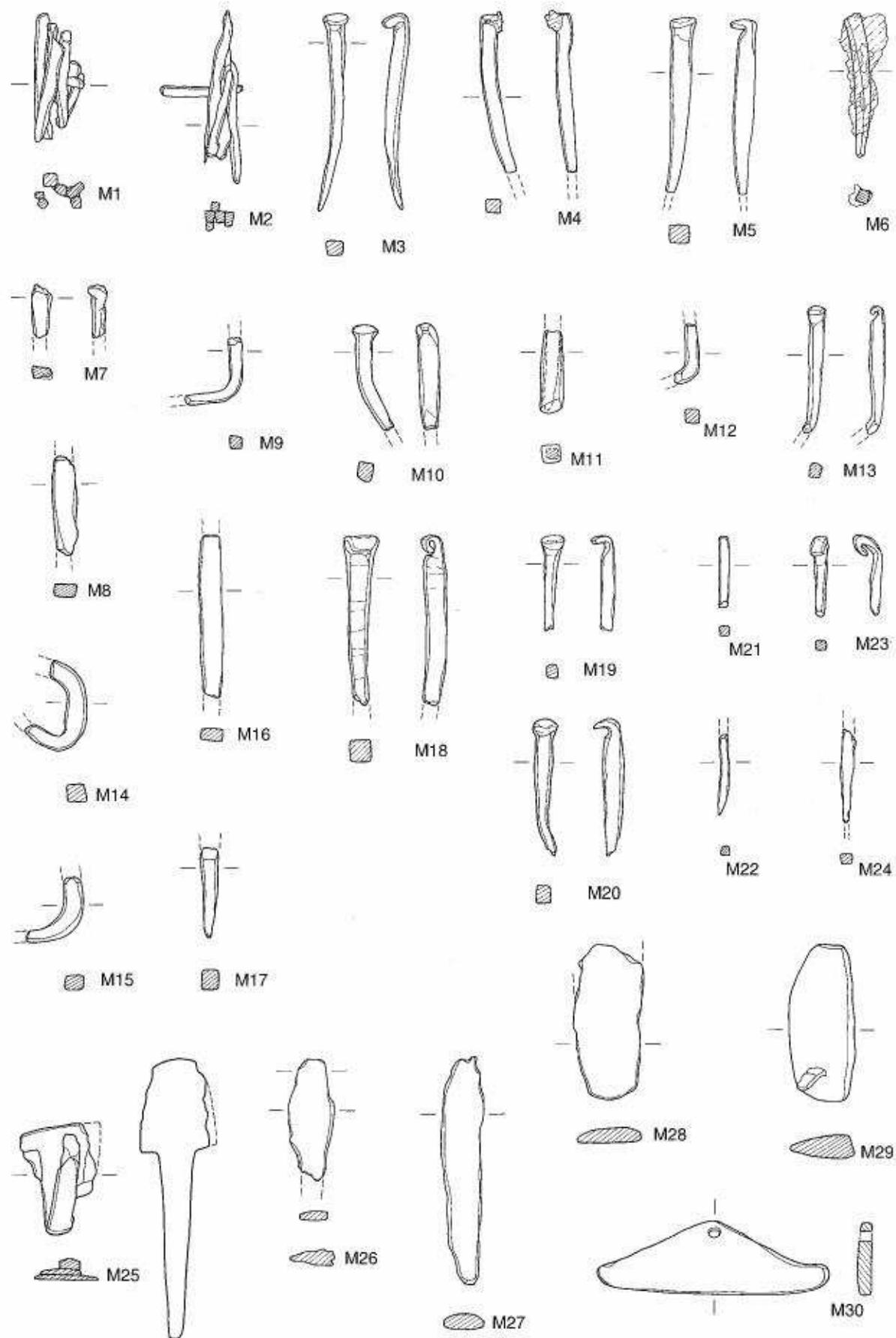
S17

0 10cm



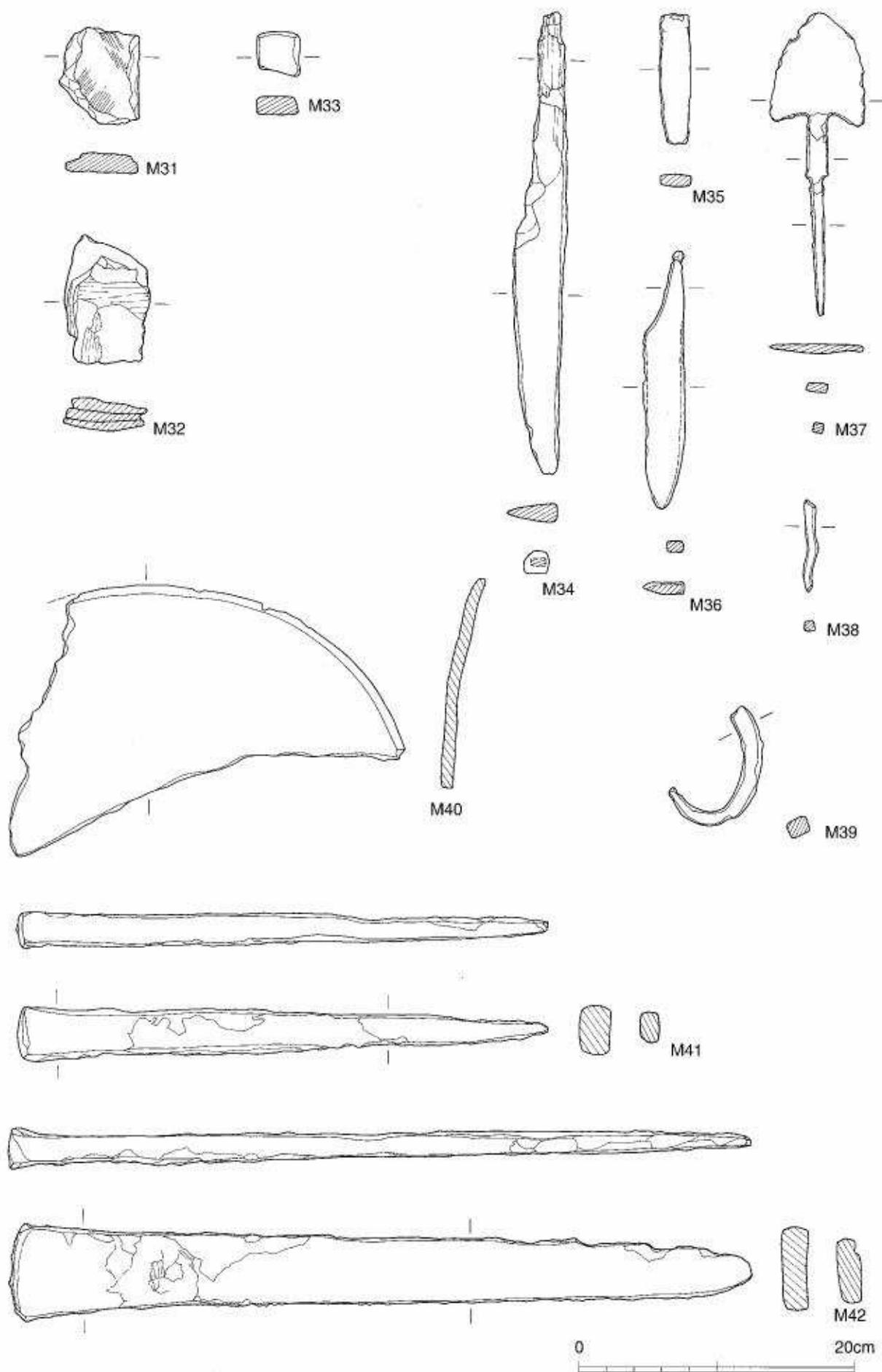
S18

図版112 金属製品(1) 桜地区・宮ヶ田Ⅰ地区・宮ヶ田Ⅱ地区・確認調査

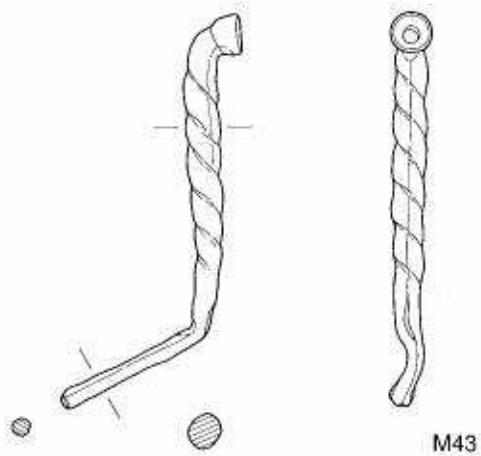


0 20cm

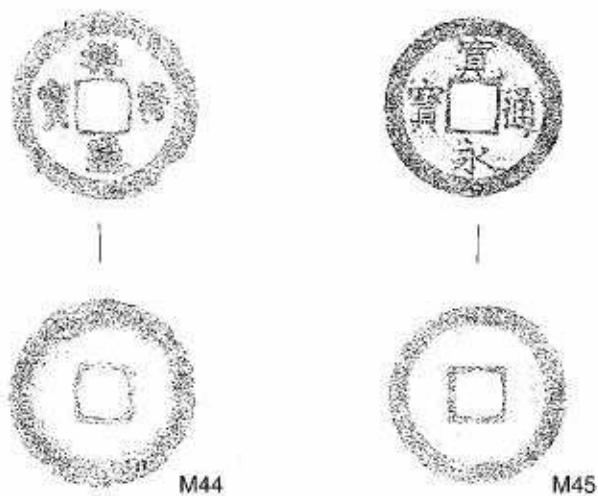
図版113 金属製品(2) 桜地区



図版114 金属製品(3) 宮ヶ田Ⅰ地区・宮ヶ田Ⅱ地区・山内南地区



0 5cm



0 5cm